PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL Ota, Nampo
797 Shokusanjin zenshu
.4
A1
1907
v.2

East Asia

蜀山人全集

卷二

PL
797
.4
A1
1907
V.2

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/shokusanjinzensh02tana

新百家說林

蜀山人全集 卷二

目次

春夏帖……一頁
かくれ里の記……一頁
四方のあか……四頁
四方の留粕……四八頁
杏園詩集……七八頁
蜀山文稿……一〇五頁
寐惚先生文集……一二一頁
賣飴土平傳……一三二頁

檀那山人藝舍集……一四〇頁
二大家風雅……一五〇頁
めでた百首夷歌……一五七頁
蜀山百首……一六六頁
狂歌百人一首……一七二頁
千とせの門……一八〇頁
巴人集……二〇六頁
巴人集拾遺……二六〇頁
千紅萬紫……二七七頁
萬紫千紅……二九七頁
蜀山集……三二〇頁
○
宛丘子傳……三二六頁

おてるの記……三三一頁
科場窓稿……三四六頁
寛政御用留……三六六頁
尺牘……三八三頁
甲驛新話……四八三頁
粹町甲閨……五〇〇頁
江戸花海老……五一三頁
通詩選笑知……五二一頁
李不盡通詩選……五四一頁
狂詩諺解……五五〇頁
道中粹語錄……五六三頁
和漢同詠道行……五七三頁
春笑一刻……五八三頁

鯛の味噌津……五九二頁
鶯笛……六〇二頁
阿姑麻傳……六一二頁

解題

春夏帖　寫本　一卷

青山堂主人の囑に應じて認めたる自筆の帖なり。

かくれ里の記　天保七年　一卷

柳橋より船にて北廓に遊びたる時の記を狂文もて綴りたるなり。

よものあか　文化五年　二卷

序跋贊賦其他の文章を輯錄せり。

四方の留粕　文政二年　二卷

よものあかの續篇として見るべし。

杏園詩集　文政二年　二卷

詩文集なり、後年蜀山人詩集として世に刊行せらる。

蜀山文稿　寫本　一卷

詩文集なり。

寐惚先生文集　明和四年　二卷

狂詩集なり。

賣飴土平傳　明和六年　一卷

飴賣土平が傳を記したるものにて、附錄として伊庭竹坡の阿仙阿藤優劣辨を添ふ。

檀那山人藝舍集　天明四年　一卷

狂詩集なり。

二大家風雅　寛政二年　一卷

銅脈先生と贈答の狂詩集なり。

めでた百首夷歌　天明三年　一卷

目出度きもの丶狂歌百首を輯む。

蜀山百首　文化十五年　一卷

春夏秋冬及び雜を別ちて自ら會心の作百首を輯む、此一帖は吾家狂歌の髓腦也其他一時漫興宜屬皮云々と自ら稱せり。

狂歌百人一首　天保十四年　一卷

小倉百人一首を摸したる狂歌集なり。

千とせの門　弘化四年　二卷

狂歌狂詩文章等を輯む。京都にて出版す。

巴人集　寫本　一卷

雜集なり、天明三年正月筆を起し日次を逐ふて其作品を記せるものにて、座右の作品日記なるべけれど、後年に至りては順序混雜せり、天明四年の自序あり。

巴人集拾遺　寫本　一卷
巴人集に漏れたる雜集なり。
千紅萬紫　文化十四年　一卷
雜集なり。
萬紫千紅　文化十五年　一卷
千紅萬紫の續篇なり。
蜀山集　寫本　一卷
雜集なり、文政六年の自序あり。
宛丘子傳　寫本　一卷
都下青山に住せる宛丘子の傳を五體の文章をもて記したるもの、天明十一年の奥書あり。
おしてるの記　寫本　一卷
大阪在勤中に於ける金銀の出納吏員の進退其他雜事を記せる諸扣帳なり。
科場窓稿　寫本　一卷
寛政六年聖堂學問所に於て試業を受けたる時の雜事を記す。
寛政御用留　寫本　一卷
寛政九年六月より十一月に至る公用の日記なり。

尺牘
第一　享和元年三月より同四月に至るの間大坂表より江戶へ送れる書簡なり。
第二　文化元年九月より同二年十一月に至るの間長崎より江戶へ送れる書簡なり。
第三　長崎より江戶へ送れる書簡にして年次不詳のものなり。
甲驛新話　安永四年　一卷
山手馬鹿人の名を以て著したる洒落本にして四谷の遊所を記す。
粹町甲閨　年次不明安永年間カ　一卷
同名を以て著したる洒落本にして同遊所を記す。
江戶花海老　天明二年　一卷
俳優市川海老藏の技藝を賞へ龍宮より賞美の狂歌を贈るの有樣を記す。
通詩選笑知　天明七年　一卷
狂詩に自ら註を施せるものにて洒落本の部に屬するものなり。
李不盡通詩選　天明四年　一卷
通詩選笑知に同じ。

狂詩諺解　天明七年　一卷
通詩選笑知に同じ。
道中粋語錄　年次不明寛政年間カ　一卷
一名を變通輕井茶話と云ふ信州輕井澤の旅舍賣女の有樣を記す。
和漢同詠道行　年次不明　一卷
洒落本にして後に魂膽心氣樓と改題して刊行す。
春笑一刻　安永七年　一卷
千金子の名を以て著したる咄本なり。
鯛の味噌津　安永八年　一卷
新場老次の名を以て著したる咄本にして自筆其儘を上木せり。
鶯笛　年代未詳　一卷
咄本なり自筆の儘を上木す。
阿姑麻傳　安永六年　一卷
白木屋お駒が事を記す。

解題　終

書き初

えりたおひらく二たび[illegible]

みのりのよくくにさかゆる大

つちみのりなき[illegible]きつげの[illegible]

くらし[illegible]のものおもふく[illegible]

ゆらみかくしめらす神

ありし二こら[illegible]の[illegible]

まらぬくし日[illegible]のかしの[illegible]

わらはゝてまつのみなもとの[illegible]
あ[illegible]ことにて[illegible]
わたくしの[illegible]
かくはかりて[illegible]
しつへ[illegible]
みなれのとり[illegible]
はかなく[illegible]
まさ[illegible]

酒にひたりつゝも遊び
酔ひては街に寝ぬべく一枝の梅を
言ふことも皆三千頭の言ふごとし
きみもくもしのびしとしのよ
やまひとしきずとして十四うまれ
つまりに三余をも経たるものなれ
諸子百家を学びし志し詩は
李杜の偶と並びて文は韓柳に並ぶ

さんさく網くぞくし衛士の
いとし隠岐よりも世俗の僧
なつかしと[illegible]いつ
白髪一手まかくのみおもほゆる
ある日何かしらくてつ僧
うつゝ侵す人のゆめゆめよろし
はるはるの底詩ををし大なる
まつくるとくし猫しく候

さほと上なるとくの御住
けふしもまたおはしまさぬ
かくいひてとくとくはまゐらせよ
といふよりなくよのはなさけの
ことしはうくいすのこゝろさしのまゝ
神よの御縁あらんことに
男しく
ふつきいつうまれきての

西をふてつくらくはるひ
うくにすとかれきれんまし

鳥はすくとすくにはるを
くやしら
借しのうほるこなかしに

春夏帖

春の巻

談川樓おとし咄會の序

はなしのよりて來る事久し、ちはやふる神代には、あるふみにいはく〳〵のむかしはなしあり、人の代となりてくさ〴〵の咄多かる中に、源氏の雨夜の品さため、二の町の文の色はなしも有馬頭か蒜くひの下界藏に落をとられ、羅生門の化物はなしに、金札をもつてかけ出せしは、はなしくはふの始なるべし。おうらうらのものかたりは、尺素往來にもみえて、桃太郎かむかしを思ひ、猿のいきゝもほしたるは、梵網經にもとつきて、龍宮世界のはなしかめなるべし、中比みやこに露の五郎兵衞ありて、清談の玉章をたれ、吾妻に鹿の武左衞門出て、卷筆の毛にもかきつくしかたし。安永の頃、木室卯雲の鹿子もち、小松百龜の聞上手など、古のまはれる油揚本、小本におとしはなしとなりしも、いつしか千とせの巣守りとなりて、つゐに還魂紙のすきかへしと、こゝに立川談州樓烏亭焉馬、桃栗三年柿八年の功をつみ、野見てうなごんすみかねの矩をこえず、いにし天明の比、芝居にあらぬ牛島のむさしや權三か座敷をかりて、寶合の席料のゝち又三百文、おとしはなしをはちめしよりこのかた、その流をくみ、その波をあぐる輩ちまたにみち、門をわかてり、これを中興の開山として、玉くしけふたつの國のはしのもと、藻にうつもれぬたま柏屋のたかとのに、とし〳〵の初筵をひらく、大江戶の四里四方、よも山のはなしつきせず、太平樂のひる日長々と、つとはざらめやま

春雨宴柳花苑狂歌幷序

柳花苑は躋壽館の南にあり、かの千草萬木をなめて、五味八珍をあぢはひ給ひし神の御德にあやかり、こゝに高とのゝ出居をまうけて、伊豆喜とよへる旗亭あり、春は青柳のかけ鯛に、なひくみとりのみたれさけをくみ、夏は嵇康か柳冷にかつをのさしみの庖丁をきたひ、秋は一葉のちりれんげにはつだけの薄くずをすくひ、冬籠の茶碗もりに鳥の子のナッナも、雪おれのなき枝をかさねてまとひするもの日々にたえず、まつ落付の吸物に赤みそをあけて、上方の白

をわらひ、すまし汁の鹽梅をちよつと一口すいせんしのり地になりてのみ過す、瓊筵をひらきて花にうかれ、羽觴を飛して月の夜も雨のふる日も一しほゆかしと、桃李園の序の聲色をつかひて、柳花苑の記とするもおかし、今日こゝにあつまりて、酒をのむものはたそ

　文蝶北馬の繪にたくみなる人
　　伊勢傳福甚の興にのる人
詩は五山役者は杜若と世にきこえたる
　　　するか町の名妓になんありける
春雨にぬるゝとかつはしりながら
　　おりたつ脛のしろきをそみる
雨ふれは柳のいとの長〳〵と
　　長さかもりもかつはうれしき
　　　　　蜀山人

○

倡門雛子挿松筠　猪干靚粧羊日新
雨個黄鸝纔學語　似迎楊柳折來人
あら玉のそら青みたるあけほのは
　つねきくとりも若水の音

○

生酔の禮者をみれは大道を
　よこ筋違に春は來にけり
梅發麹家室　柳李花屋軒

○

何處御年玉　新開扇子箱
下敷長尉斗　上數寶珠光
をれをみて又うたをよみちらすかな
　梅の思はん事もはつかし
古來云此梅　能似武夫姿
筑紫天神詠　奥州宗任詞
龍横葛飾武　牛向杉田遅
縁日運此處　藥師兩大師
　　　檀那山人

○

一めんの花は碁盤の上野山
　くろもん前にかゝるしら雲
風のいるすきまもみえぬ山さくら
　さくらか山か山かさくらか
梅如加賀紋　松似仙臺鎗

應是登城節　一晴天日出光
慈悲心も佛法僧も一聲の
　　ほうほけきやうにしくものぞなき
まないたのこくちにはれる青紙の
　　いろも若菜に及ものかは
元日草先發　一年謀不空
此花稱福壽　官祿在其中
子日する野邊に小松の大臣は
　　いまも賢者のためしにそひく
老たるも若きも心花なれや
　　ふるうめやしき新梅やしき
ところ〳〵ふし〳〵ありてなまよみの
　　甲州いとに似たる青柳
大唐空吉野　日本有花王
枝掛龍頭垂　春衣虎尾長
入相鐘未響　飛鳥酒無量
生醉顯山寺　隨風散四方
しら雲の上野の花をみてしより
　　けふもあすかに日くらしのさと
遠乘の馬二三疋すみた川
　　つかれたりとも花につなくな
いたつらにすくる月日もおもしろし
　　花みてばかりくらされぬ世は
舞ひばり籠のとり屋か手に落て
　　かふねもたたく上にそされし
さく花のかへる根付の琥珀にも
　　なりてこかけのちりをすはばや
山吹のはなかみふくろ紙入に
　　みのひとつたになきこそかなしき
山吹の口にしめしやもらんとて
　　おたましやくしも井出の玉川
かりかねの交代なれば燕も
　　野におり來てやきさらきの比
入大門口　栽櫻花若人
中町多茶屋　七軒七福神
　題鳥文齋七福翁看北里花圖
〇
春の夜のたゝ一時も千金の
　　月や小判のはしゐしてみん
手ならひの稽古に上るいなり山

いねのいの字や書はしむらん

可憐出替涙　　胡葱盛一把
冉冉奉公爲　　誰是長年者

たつた今もらふをはらひ扇箱
やるせなきこそ世の要なれ

のそかるゝ乞食の家も森田屋か
ほとこすものか梅の花笠

品川潮引洲崎岸　　日暮里通飛鳥山

わか戀は潮干にみえぬまたくらの
人こそしらねかわくまもなし

春雨に火の見のたいこ苔むして
人おとろかぬ御代そめてたき

折梅逢驛使

馬盥にいけたる花は道中の
はいま〳〵と追ひし一枝

文このむ木を右にしてやり梅を
ひたりにかさす御代そかしこき

同勢の桃も櫻もつゝくべし
一番やりの梅の魁

紙ひなの加田粟島のいにしへは
舟月もなく玉山もなし

むさしのゝ原舟月にすへらきの
みやことりかも玉山の雛

十雨五風春暮天　　詩佛
斑荊無處不開筵　　南畝
對花不領花須笑　　佛
一止干戈二百年　　畝

東山花下聯句

この上野榮耀はあらし雨大師
二日つゝけて花をみしかな

雨風の音なし川のひまにみよ
はなのさかりはけふあすか山

うれしさをつゝむにあまる袖か岡
花のさかりもそろふゆきたけ

來福寺花

春風のふくきたるべき寺そとは
かとの內なる花みてそしる

大井西光寺に醍醐櫻あり

牛町の酪は酥となり醍醐とも

なれるさくらをみるぞうれしき

抜松抜竹御門前　叩薺叩菜爼板邊
唐土鳥與日本鳥　東天未度素天天

きのふこそすてゝんてんとはやせしか
へん〳〵草となりにけるかな

三月盡

三月は無盡にしてもくれよかし
花にこゝろをたれもかけ金

里のあめ

くるわのさくらはやちりて、鶯のねもなんあけの、みそかにちかき春のあめ合柳のいとの引まゆを、ほんに思へはいたつらに、すくる月日の悪性は、けふもあすかに日くらしの、花みてくらすひとさかり。

○

本院のおとゝの氏の藤のはな
など菅原の廣前にさく

杜若むかしはいせの物かたり
いまはめてたくひらく三河記

十日つゝ春と夏とに咲わけし
花やとちらか色ふかみ草

藤、杜若、牡丹のみつは、春夏の堺目わかりかたけれは末にしるす

文化ときこゆるとしも十あまり三つかさなれる水無月のころ、青山堂のもとめによりて

蜀山人

春夏帖 春の巻終

春夏帖

夏の巻

初鰹の賛

わか朝にてはかつをとよび、もろこしにては松魚といふ、東醫寶鑑北狄西戎、四維八紘天地けん好かつれ〳〵草に、大根おろしのおろしかけ、先をからしにかゝれても、延喜式には供御となり、萬葉集には水の江の浦島か子か、かつをつり鯛つりかねて、七日はをろか七十五日も生のぶる、三千本のはつものを、たれか一本かはさらめやは

かまくらの海よりいてしはつかつを
みなむさしのゝはらにこそいれ

〇

初鰹銘

鯉風をふくみて魚木にのぼり、劔さやを出て見地をはしる、あがり兜の金箔は延喜式の儉約をつたへ、あさかの沼の花かつみは、中將殿のうたまくらにして、比はさつきの初幟、何のあやめもあさやかに、月ののぼりのごとく、日ののぼりの如く、終南山の進士のごとく、柏もちのはのしけきかことく、菖蒲かたなのはかけす崩れず、猶竿竹の直なる道をたてゝ、つけたる乳をはつかしむる事なかれ。

〇

初瓜頌

二月中旬の青籠は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと、和歌にもよめり、曲禮は六かい半にむき、兒手柏はふたえにつゝむ、かの青門の五色にまされるさかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子瓜は、四谷馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目に見えぬ鬼をしてやる、うまい哉甜瓜、其仁に玄かんや　　なかご

わらはへもくわまくわうりめつらしと
両手にもちてころひうつなり

〇

一聲時鳥卯時雨　　獨立釋尊花見堂

みほとけに産湯かけたかほとゝきす
天上天下たつた一聲

青葉こそ花にもまされ冬までは
ちるきつかひもなしと思へば

時しらぬ山とはいへとさくや姫
かのこまたらの褚は當を

松本錦升かほくに度〳〵の仁木古せのはつか
つをといふをみて

見るたびに仁木彈正はつかつを
いつも新せのこゝちこそすれ

かきものゝやまほとゝぎす催促の
八千八聲かけたかとなく

これみつがたちながらくふそばのいろ
はなはた黑し夕かほの花

夏晩卽事

風如半開扇　月似食懸餅
忽有一星出　羨看長者情

早乙女の脛のくろきに仙人も
通をうしなふ氣つかひはなし

もや〳〵と靑葉にくもる夏けしき
めくらがみてもほとゝぎす空

錦鯉含風魚上樹　鍾馗執劔鬼趨庭

つるき太刀さすかひなにはもろ〳〵の
惡魔をはらふ鍾馗大臣

ますらをのひく桑のゆみよもきの矢
あやめのかふとかさる六衞府

いつはりのなき世なりせは本なれの
西瓜の皮に穴はあけまし

聖堂のてつへんかけたほとゝきす
なく一聲をあれきけんとう

朝露をぶりこぼしつゝはらやたつ
佛のかほも三度なでしこ

たび人も笠ぬきてみよ花の名の
卯のとき雨にぬるゝ垣根を

けさみれはいつしかよへをひりをきて
いたくねくさき床夏の花

みつまたの四季庵にほとゝきすをきゝて

ほとゝきすなくやひとふたみつ又と
きくたびことにめつら四季庵

時は今苗代水の流行に
田も市松の小紋とぞなる

くれなゐのあつき日影に夏の野の
露わきかへるさゆりはの花

湯上りにみしをあやめの根さしにて

下女のさつきか文の取次

さみせんの駒かたさして二上りの
　舟は夕へにさん下りかも

五月雨の比四方赤良のとふらひ給ひし折から
朝ねしたりければ

梅旭女

とひ來ますよもはひるまもなき比の
　ねみたれ髪て筆をとりけり

返し

入梅に旭もいまたいつみやを
　あめふりはへてたつねこそすれ

二葉よりいく千代かけて神まつる
　卯月のけふにあふひ草かも

あんとうの朱をうはへるなまなれの
　西瓜にたれもはらをたちけり

砂村のゐにしの瓜となる子瓜
　ともにもらさぬ水くわしの中

質くらにかけし切赤の蟲ほしは
　なかれもあへぬ紅葉なりけり

さつきいつかの夜八百善のもとにて

弓はりの月もさしそふやほ善に
　いつかの酒をいつかくむへき

夏月

てる月を日かとそ思ふくれはとり
　あやしき牛のあへくはかりに

みしか夜にくらへて長きつるなれは
　ねふたさうなる晝顏の花

ゆふへみし川の花火にくらふれは
　さかり久しき庭の朝顏

流星の玉や／＼の聲はかり
　なと鍵屋とはいはぬ情なし

面白やうつかひよりも金つかひ
　この川波にはつと花火は

土用芝居土俵中　秀佳芝翫競雌雄
放駒毛似浪花葦　濡髪柳梳江戸風

いか賀やと人々思ひつく茶碗
　われるほといる人のやまと屋

浪花江にはなれし駒の戻駕籠
　いまそのりこむ堺てう吉

夜責蚤蚊晝糞蠅　更無夕立雨雲升

雅修湯殿居風呂　　無正法新熟且基

駒込富士

駒込にうる麥わらの蛇のみかは
　へびのしるへき纑縄手そ

傘鉾のおほはぬ町もなかりけり
　あつき日よしの神のみなり

おり／＼は時あかりして傘を
　たゝめは又もひらく五月雨

天王の夜みやのひかりやわらけく
　御紋の瓜もちりにましはる

玳瑁の櫛いなに鰹二三人
　ゆかたのまゝでいつも八重垣

天明の比お玉か池にてはしめて瀬川路考にあひて

露むすふお玉か池であふ人は
　外にたくひもなつ菊のはな

夏祓

心に[illegible]のことゝ丸かゐは
　[illegible]すとても神そきもいれ

水無月のつこもりはらへのかれんと

岩の輪のうちをぬけてくゝり／＼

清風自播頭上　　四直徐州霜葉花

中華とはいへとも花はなつのよの
　ひとよにかはるけし坊主かな

身はひとつ、思ひはふたつみつまたの、なかれによとむうたかたの、とけてむすんで、むすんでとけて、しめてぬるよのかりまくら、うは着をぬいて恋たしめの、あかつき比の雲の帯、なくや中洲のほとゝきす

これはにゐよし原のうかれめ、みつまたの江の中洲といふところに、かりにゐしときのはうたとなん。

春夏帖　夏の巻終

かくれ里の記

いづれの世いつれの所にかありけん、七の福神まし〳〵けり、中にも大黒屋ときこゑしは、八雲たつ出雲の國より、見勢を出して、からのやまとのものはさらなり、よろつ心のまゝに、たくはへたり、西宮の夷三郎とは、遊びかたきのやうにて、春の日のもとに、かへる事を忘れ、秋の月の前に、うかれありき玉へり、又福六ときこえし人の弟に、壽星といへる老人ありて、つねにひさごつふりをうちふりつゝ、このふたつの家に出入して、なれむつび玉ひしかばいづくの遊びにも、つきゑたかはざる事なく、これなん、世にいはゆる神といふことのもとなるべき、比は福徳三年春の比、やよひの空のうらゝかなるに、かけ鯛の絲による柳のはしのもと、鶴屋といへる舟やどりより、片葉のあしの舟よそひして、名におふかくれ里のほとりに、あそばんと出たちけり、あまさがるひなは、箱にはあらで、玉くしげふた國の名たゝるはしをも、あとにみなしつゝ、ゆく駒とめ橋の駒もとゝめず、みくら町のたちつゝきたる、大倉のよねはむ鼠のうはさは、黑米のさしあいあれば、水門のあたりの蜆の味、よろしなどいひまぎらはして、常山の蛇のかしらをうてば、尾はたるといひけん、松のすがたもおもしろく、岸のむかひに椎の木の、ひろごりたるは、たのむかげある松によれるなるべし、けふしも遊山ふねあまたある中に、うるまの琴かきさしつゝ、わざをきがこわねをまねぶものあり、壽星はうかれてたつ波の、こすや親方首尾の松シヒの木やしき聲が高塀、何がしのわざをきの聲をうつして、うたひ出たるに、人々どよみてわらふ、あはれ辨財天をも、ぐしたらましかば、よつの緒のしらべはうき世の人のみつをにも、たちまさりなんをといふ、ゆき〳〵てみうまやかしのわたりにいたる、こゝはわたし舟もて西よりひがしに、ひかしより西にと、ゆきかふ所なれば、人にしられんもつゝましとて、大黑は頭巾まぶかに、夷はゑぼし引入てゆくを、壽星はたゞうつぶけに顔かくし玉ふも、長枕の心地せられてをかし、いにしへ駒かけ堂ときこゑしは、今の駒形堂にして、鳥がなくあづまばし

とよへるは、大川橋をいふなるべし、花川戸のわたりにて、壽星

何所春霞起、花川戸半開、風梳助六柳、波洗意休若

とうちすし玉へり、惠比壽

釣上し赤めとゝもに酒くまん
　いはくす舟のあしたゝぬまで

大黒屋のぬしは小槌を腮にさゝへて、
　むらさきの頭巾もかすむ筑波かな、

此はちまきは、過し比ともいはまほし、ゆかり法師の布袋和向は、のびあからねば見えぬてふ、三圍の鳥居のかたはらなる、牛頭山のみ寺におはすれど、けふはついであしければ、たちもよらず、かの「まつち志づんて、木末のりこむ今戸はし」と、うたひし土手ぶしも、今戸の今みることゝ、さんやぼりのほりするものは、むかしも今もかはらざりけりな、ともに舟より下りて堤づたひにかちよりゆく、袖すり稲荷の袖ふかし手ふりに引かへて、今は枕橋もふたつならばず、孔雀長屋の名のみこと〴〵しう、見かへり柳のなみたてるに、二もと柳のむかしを志のび、人目つゝみもつきなんとす、こゝにきびしき掟の札たてり、境にいるには、禁をとふならひなれは、たちとゞまりてよみて見るに、くすしの外は馬車にのる事をゆるさず、又ものゝふの手にならすはこのたくいは、門の内にないれぞとかけるをみるにも、よくぞ鞍馬の多門殿をはいざなはざりしと、かたみに目くばせして笑ふ、大黒屋の相しれりけるやどりに入て、松ともさせてかなたこなた、かいまみつゝありく、こゝに櫻を植る事は、家々の鉢の木を門邊に出して、よな〳〵雨露をゆたかに、たもつといへる年の比より、市のつかさに聞えあげて、今はかくうつし植る事となんきこゑし、けによし野の山もうごきいでゝ、すまの若木の花のなみ、こゝもとにうちよするかとうたかはる、ゆきかふあそびとものさまをみるに、綾羅のたもとをひるがへし、錦繡のもすそを曳て、花か人かともたどらまほし、人々興じて見てのみや人にかたらんとて、とある高どのにのぼりてあそびをめす、盃あまたたびめぐり、壽星はあまりに醉しれて、かたへにありあふすものゝ帯を鉢卷して躍出玉ひしか、鼎かぶりの心地せられて、かの助六のゆかりの色には似もつかず、目もくれ竹の町の子、

ひとつはつゝみのほとりの亥の時ときくにも、かへるさのほども思はれて、ゆめばかりなる手枕に朧月夜の三の口、あかつきの雲とやなり、雨とやなり玉ひけん、よくも忘らずかし、千代に一たび、すみだ川のながれたえせず、つくば山のこのもかのもに、おひしげりゆくかくれ里の、鼠のはつかにもかゝるよしなしことを、そこはかとなくいひいつべき事かは、大あなむちのあなかしこと、筆をもとめなまし、

天明とあらたまりぬるはじめのとし彌生の比小車のうしこみの里に筆をとるものはたぞ

四方赤良

四方のあか

このふみや、四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず、もとより巴人亭の本店につみて、かつて呑口をだにひらかざりしを、をのれひそかにこれをうれへて、こたみ琉球のかゞみをひらき、樽底のおくをさがし、德利のかげたるをおぎなひ、四斗樽のもれたるをあつめて、志るしの杉のはん木にのほせぬ、もしさゝ酒の口功者あらば、きたりて名酒の味をなめよ、暖簾に志るき扇巴、これを居酒屋の門にかけて、一字の損益をまつといふ、

宿屋飯盛志るす

卷之上目錄

達磨贊
遊女贊
車どめ
雪見記
西行法師をとふらふことば
山手閑居記
遊女高尾朱椀記
土偶人畵贊
鰹魚贊
又
兒戯賦
庭湖石記
猫賦
童のために乳のなきをなげくことは
鼠をせむることば
なつくさ
橘庵記
鉤匙橋記
背面達磨贊
雪女贊
芭蕉庵桃青翁贊
から誓文
疊師善兵衛衣奉加募緣疏
月見說 付狂歌感狀
詩歌兄弟對面のつらね
大根太木十五番狂歌合判詞與書
肯柏贊
日くらしのにき
冬日道遙亭詠夷歌序
竹本政太夫碑
木兎引贊

卷之下目錄

向島賦 幷詩歌
早稻田太神宮法樂の文 幷歌
黑つくししばらくのつらね
桐つくしきり口上
をはぎの露 幷歌
百番月歌合序
春日詠寄七福神祝夷歌序
谷水音か新宅をことふくことは
鬼念佛畵贊
富士山繪贊
酒中花のちらし
月見のことは
おなじく誹諧文風俗文選の體にならふ
巴人亭記
里春柳五株
春色花鳥媒
春日鯱樓詠初芝居狂歌序
春日泉亭詠雜煮餅狂歌序
栗花集序
茶杓記
隣家におくれる詞
春日唐衣橘洲初會狂歌序
初雛賦

初幟銘
初瓜頌
初鮭傳
初霜解
臍穴寺禪師に贈る詞
吉田李園翁を祝することは
邊越方人をいためることは
百喜齋記
春夜伯樂宴集序

四方のあか　上

達摩賛

拈華微笑の床花は、正法眼藏の帶をとかせ、教外別傳の正傳節は、文字大夫が流をたてず、蘆の一葉の猪牙に乘て、九年面壁の居つゞけとは、汝が尻のくされ縁歟、金がふんだんだるまなる歟、から／＼喝、

九年酒のつまり肴の座禪豆

外に本來一物もなし

遊女賛

まことはうその皮、うそはまことのほね、まよへばうそもまことゝなり、さとればまこともうそとなる、うそとまこととの中の町、まよふもよし原、さとるもよし原

けいせいのまこともうそも有磯海の

濱の眞砂の客の數々

車とめ

たれこめて、小春の行衞も志らぬまに、まちし櫻の花をかざれる、御影講も程すぎぬらん、けふなん霜月ついたちとかや、雪は跡にふりぬ、軒のつらゝのつらみせとて、世にある人のうかれ出る日なめりと思ひおこして、やをら枕をもたげ、夜のものすべらし、西おもてのさうし、二三寸ばかりおしやりたれば、さなきだに、秋の野らと、あれにしまゝの、人めも草もかれはてたるに、ふりつもる木々の落葉は、夢にだも帚といへるものをみず、南天のみのふたふさみふさ、ひえとりのついはみあませるもおかし、あたりちかき家ゐの、むねのいたまのいたみて、ところ／＼綻やうのものうちきせたるに、晝げの煙たちのぼりて、さながら苫船のけしきをうつせるも興あり、なまなかさきのあるじの物すきしをける、ぬりだれめきたるものひとつもちて、去年なんすりくはへたる用心土の、無用心にひぢりこにすさこねあはせたる、栗栖野の柑子にもはぢぬべし、からもゝこそくしの家にもあなりときけば、これのみはかせめきたりなど、ほこらひみるに、長き繩を木末にかけて、かたへの杜にゆひつけたるは、あなあさまし、ふたつになれるわらはの、志とゞぬれたる露の志めしのかけところとは、すべて冬がれの庭の景色、志たたれ

桃のしたれんとするに、葉なければ木ぶりあしく、柊のつのめだちて、やがて節分の用にたゝんと、おこめきたるしにくし、牡丹の花は根にかへりしやう、春のまゝにてたよりもなく、まがきの菊もしぼみつきて、菊煙草のよきむしり比なり、松ふくり朝霜にちゝみあかり、竹藪夕風にはさけたり、三徑あれにつきたるなどかけるも、僮僕の類あれば、かゝる不掃除のきはにはあらじ、たかかみすてしはな紙の、くすゑ大ぬの子のゑもいはぬものまりをける、いとむさき中にも、梅ばかりは折をたかへず、枝ぶりしやんと、苔りゝしくくび出せる、けに一陽の動く所と、うちうめきつゝ猶も吟み出んとするに、窓につるせる手習の草子の、風にふらめき、のきばにかけしかけ竿の、ふとんのかもわるくさきまゝ、もとのごとくさうし引たて、つゐそれなりについふしぬ、

はやり風ひきこもりたる車とめ
　御用の外の人は通さず

雪見のことば

わすれては夢かとぞ思ふといひし、宮さまの御隠居所でもなく、さのゝわたりに駒とめし、半合羽の旅人にもあらず、またたちあがりて、梁王の園で、賦といふ所も氣づまり、さればとて、すのこのはしに、鉢の木のまた火も、あまりなるべし、鶴氅をきて立出んも、加賀簑のみえ坊にひとしと、鵞毛に似たるとんだ了簡より、ふるめかしいが王子猷が興に、十たんばかりのりかち、剡溪の船を膝栗毛にかへ、わらぢうつわら店の軒に、円と盥のけしきを見、むつの花の江戸川のはたを、ゑぬのことゝもにさまよひつゝ、お寺の茶の木にちよととまれとうち誦し、こりては思案にあたはざる、たはれ歌のつどひ所にまどゐしつゝ、風雅でもなく、しやれでもなく、詩とも歌とも連誹とも、ゑしれぬ事をかきちらして、二月の雪のふりそこなひを、大目に見てやる事とはなりぬ、

いさゝらはまろめし雪と身をなして
　うき世の中をころげありかん

西行法師をとふらふことば

あたら櫻のとがといひて、大木のはえぎはからをしげなく、きりたふしたる人はたぞ、清水ながるゝ道のべの、柳かげに小便したる人はたぞ、あるはしの

かねのねこはかはねど、江口の里のめしもりに心をとめ、あるは鴫たつ澤の鴫燒の三茄子より、一ふじの初夢にまさしくみへしすがたさへ、むかし今戸の夕煙、いづちの風にやなびきけん、ねがはくばこの狂言綺語、三文ばかりの布施ともならば、花のもとにて春死なれし、和尚の今日しやう月めい日、一へんの廻向をなさんといふ事しかり、

山手閑居記

わか菴は松原とをく海ちかくと詠けん、むさし野の廣小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振神田淺草のにぎやかならぬも、よしや足引の山の手になんすめりける、春は桃園の花に迷ふ外山の霞たゝぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の瀧の音たえす、秋は高田のかりかねに、民の貢の未進をあはれみ、冬は富士を根こきにして、わか鉢の木の雪となかむ、四季折々の美景をいはゝ、番町の道の一筋ならず、大木戸の駒のひきもきらざるべし、古寺の甍やぶれて、書無盡の講を催し、神の宮居も所せく、夜うかれめのふしとゝなれり、頭にをくしも屋敷もり、うきをみるめのうらかしやまで、たゞ何となくひなびたり、むべも富ける殿つくりに、みつばよつばのつるをもとめ、よきゝぬきたる身のほども、いざしら壁のいちくらをうらやむともからは、此地の住居はなりがたからん歟、さはいへ、ひとへに深き山にかくれん坊をし、とほき海に沖釣をせんとにはあらず、東にして東ならず、隱にして隱ならず、朝野の間にのがれんとならば、いつこか此やまの手にしかさらめやは、

窓のうちにふしのねなからなかむれは
たゝ山の手にとるとこそみれ

遊女高尾朱椀記

此器や、山谷わたりに名だゝる遊女、三浦屋のもと何かしとかや、最上氏に從良せし時、內の椀器をつくりて、したしきかぎりにわかちあたへしとなん、時うつり事さりて、原富の手香王子の家藏となり、美人の彫管にもかへざるべし、原富はむかし、あし引の山の手に、名たかき三絃の妙手なり、

今も世に名のみ高尾の紅葉はゝ
朱椀朱おしき昔なりけり

土偶人書賛

こゝろは巧書師のごとく、書は泥塑人のごとし、靜なる時は硯よりもかたく、動く時は筆よりもはやし、

あらかねの土人形のあねさまを
みていたつらにうごくゑごゝろ

鰹魚賛

吾朝にてはかつをとよび、もろこしにては松魚といふ、東醫寶鑑北狄西戎四維は荒天地けん好かつれつれ草に、大根おろしのおろしかけ、先をからしにかゝれても、延喜式には供御となり、萬葉集には水の江の浦島か子か、かつをつり鯛つりかねて、七日はをろか七十五日いきのふる、三千本のはつものを、たれか一本かはさらめや

かまくらの海より出しはつ鰹
みなむさし野のはらにこそいれ

又

人と名所はふるきをもとめ、肴と器物はあたらしきをもとむ、卯月ばかりの初かつを、皿にもりたるいきほひは、鯛もひらめも鱸も鯉も、首尾をおそれて鱗を正し、ひれふしてみへにけれ、むかし天文六年の夏、北條氏綱すなどりを小田原につらぬ、鰹おどつて船に入る、氏綱勝負にかつをと稱す、おなしき七月十五日、上杉朝定と戰て利あり、ゑかしよりこのかた、諸士戰場の門出に、專ら鰹を食ひしとなん、いま太平の御代にあひて、武をわすれざる左きゝども、庖丁のされ味をこゝろみ、からしのかけ引、大根おろし、さしみのさしもの箸とりて、酒のたゝかひ必かつうを、大に納屋の商人に利あり、兼好かきねてあぎとをたゝかば、われいけ擔桶を洗てまたん、

兒戲賦

ひとり邵堯夫か枕を高して、わらはべの戯をみれば、こよなう心なぐさむわざなれ、年たちかへるあしたの空、松たてわたす大路に、千年の緑を手にむしりて、ちりうせぬ葉をうちちらし、やゝ春ふかき垣ねのうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木、柿のきとよびもてゆくは、をのがふたばのをひさきもとたのもし、午まつりのつゞみは初かみなりに先だち、いかのぼりの絲遊はおとなも心ひかれたり、ほとゝぎすなくや五月のあやめうちは、幟の紋のあやめもわかず、行かふ空の天河、ほしの手向のたんざくには、

草紙にあらぬか硯をあらひ、荻の上葉の風よりも、とうごまの音のかすかに、博多こまの手にとりあへず、貝まはしのむちうつまなく、ふりつむ雪をまろばしては、けぬべき罪もむくひもなく、碎る氷の上をすべるも、世わたりのあやふきにはまさりなん、鬼ついぼにおひつめられて、ひとあしかきの間近きにとらまり、かくれん房はかねてより、ふし柴部屋のすみにかゞむ、草履かくしのはなをたつねて、たよりなきところにまよひ、手拭の目かくしは、しるべなき闇もあやなし、いさむ心のこまどりは、ことろ〳〵とわなゝき、つる〳〵といる名にめでゝ、籠目〳〵とうたふ、かたしだちして、ちんがうこといひ、たゝむきをかゝげて、てんぐるまとす、竹馬は車にひかれ、鮑の貝は片足にかゝる、雲井のかりを詠ては、鳫々みつ口とよび、水にすむ蛙をうづめて、おほばこ（芣苢）殿のみとふらひをいとなむ、しげき往來のちまたに立て、大道めぐりのめくるめくるもあやうく、ふもとのちりの掃溜にのぼりて、山のぬしはおれ一人とうちずしたるもおこかまし、西どつちに方の名をしり、履をけあげて陰晴をうらなふ、蝸牛の角あらそひも、稚き指きりにやはらぎ、むくろげのむくつけきあそびも、あな一のいちはやきかけごとにかはれば、孟母が三たび店をかへ、墨子が絲のくりごとも、お萬がべにの色々にそみ、べろ〳〵の紙のむき〳〵なるを、手習草紙大さらへにさらへて、鳥の跡の千二郎、ひさしくとゞめん事は、はまのきさごのつまはじきして、わらはれんもうしろめたけれど、ひい〳〵たもれ、ひとりこち〳〵ぬるわざになん、しかはあれどひちりこのあつもの、塵の飯のまゝごとも、韓非子が筆にのこり、ふれ〳〵小雪の唱歌も、鳥羽院のみことばに傳はれる事のなつかしければ、いでや富貴利達のまじはりにめがこうして、孩提嬰兒のしやうに入らんとこそ

庭湖石記

芥子の中に須彌をいるゝとは西域の虚談、大佛の鼻のあなへ傘さしてはいるとは南都の實説、大は小をかね、實は虚のごとし、こゝにつのくに豐島郡櫻井谷水原氏の庭中に一の奇石あり、そのくぼかなる所おのづから琵琶の湖に似たればとて、庭湖石と名つく、水を掬すれば杜甫が月を手にとり、口をそゝげば

孫楚が歯みがきに流をからず、此石もとは三草山の麓にありしを、民草のふかきめぐみの露の玉、まろばしあへぬ心をはこびて庭中の物とはなしぬ、これもまた石より重かるべし

　手水ばちひくや千ひきの石山に　むかへばこゝも琵琶の海づら

猫賦

雞のあしたをつかさどり、犬の夜を守る、なべてかうやふのなれやしなふべきそのたぐひ、あまたなる中に、鳥は心をなぐさめども、すり餌まきゑのわづらはしく、魚は樂を志るといへども、孑孑すくふにいとまなく、狆は干果子のあたえに乏しく、猿は虱とるてふわさのみ、ともにかへるに損ありて、益なきものなるべし、こゝに一の小畜あり、そのかふや飯をもてす、鮑貝一つ鰹ふし一連にて、一年の儲に事たりぬ、腮に逸物の毛をかくし、眼に六の時をきざむ、あら玉のとしのはじめは若水に手水つかひて、七くさ爪をとぎ侍るも、妻こふ比の心ばえにや、たま〳〵涅槃會にもれたるは、屈原が梅をわすれたる類にやとおぼつかなし、夏は牡丹のかげにねふりて、胡蝶の夢にたはふるゝも、つゐに垣ねにうづまれて、隣の藪の筍をやこやしぬらんとあはれなり、秋はまたゝびの葉にふれて、をのが轡を求め、冬來ればかまどに入て、灰毛の名にかふもおかし、こまとよび、からとなづけ、とらはまだらに、からすはくろし、志ろかねの貌は西行が手にふれ、首玉の綱は女三の宮にひかる、八蜡の祭にあつかりては、くしのなげきをのこし、五の徳をかぞへては、彬師がたはふれをつたふ、昔より國に盜あれば將をゑらびてうたしめ、家に鼠あればかれをやとひてとらしむ、大凡術をはしるもの、牆に穴ほるもの、けさう文ひきて名をたつるもの、菓くらひて人をかむもの、油なむるもの、器かぢるものも、かれを恐るゝ事はなはだしく、ひとたびきつとにらむときは、手足を措ところなし、かれがかたちの虎に似たるも、そのたけくいさめるによれるや、されど虎死して皮をとゞむれども、鬼のふどしにかくばかり、むつぢの皮は三線となりて、なれしむかしのひざまくら、思ひの色音にひかるゝも、またやさしきかたならずや、

　わらはのために乳のなきをなけくことは

むかし大江匡衡も、かゝゐうきめにあひしにや、ちもなくて、はかせのいゑのめのとせんとはとかいひて、千日一歩のちつけをやとひ給ひしとなん、むしろ嬌兒の乳をたつとも、郎が般勤をたゝじとは、古樂府にもみへたり、飯なくは蕎麥でもくはん、紙なくは手ばなもかまん、錢なくはつかはでもありなん、地頭にたとへしなく子をかゝへて、乳のなきこそかなしけれ

舌つゞみうつほどたんと出ずとも
ちゝとなりともちゝ出よかし

日をへてかた／＼の乳いでにけり

鼠をせむることば

偃鼠河にのめども腹にみつるに過す、汝なんぞわが肉池をのみほして、わが印石をして顔色なからしむるや、夜もあけばねこにはめなんか、日がくればおとしにかけんか、地獄おとしか極樂おとしか、罪の輕重をますおとしにはからば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と内縁あらば、大黒殿のおぼしめしもいかゞと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠筆の過料をとり、壁の穴々、けたのすみ／＼、のこらす追放するものなり、この趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠にいたるまで、よく／＼申きかすべきものなり、

むらさきの外ににくきはにくいれの
朱を奪へる鼠色かな

なつくさ

をのがさつきの雨のなごり、猶はれやらで、名たかき雪もけぬといふなる、日よしのまつりも近つきぬらし、あらかねの土の事用る比は、暑氣の見參とて世にかゝづらふなまわかうどなど、あはせがさねに麻ひきはり、屎子かたぎぬのかたも、雨つゝみにうちひしげて、はしりありきつゝ扇はちら／＼、聲つくろひしつき／＼しからぬ時候に、ごきぐゐんようなどゐみふくめたるなりの、すゝはいあいてにんしや、あなうの花のさきそめしより、さなきたに心のすね／＼しき、すねくさてふもの、夏草とゝもにたけりあひて、たちゐるべくもあらねば、おほやけわたくしの事も大ながしにながい、ひたごもりにこもりてのみ過い給、れいの筆まめの本性なれば、すいがへしのあさくさかみの鼠いろなるに、手習のやふに

て

此ごろは世をすねくさのうみはて丶

た丶音樂をねるばかりなり

ごくねちのさうやくにはあらで、あたまのさうやくをだにゑせねば、おとろのかみのおとろ〳〵しう、さながら大津繪の鬼かとあさましう、さかやきはたゞひゑまきのごと高うなりもてゆくに、烏賊のかうもてつくれる鶯もたてまほしう、そこらかいなでし爪の上の垢も、しるくきたなくもわるくさくも、あはれにもあつかましくも、虱まづ落ぬべし、前栽のていたらく、草木のた丶ずまひも、何がしのゑせずりやうの下やしきだつ心地して、たと〳〵しき木下やみに、やぶからしのいやみからみて、あるじのむせうもあらはる丶に、さゆりはのほこらかに、つぼみもたると、わすれ草の生いでたる、これもまた松ならねど、たねしあればとうちうめかる、軒ちかうなてんの花のさ丶やかに、かつちるも、くものゐにつ丶まれて露おもげなるあはれなり、たが家にしちはらふとてたきしめし、蒼朮のけふりのおもはぬかたになびきぬらん、ふせごにむせるしめしの、かのわるくさきにかよひぬるもむさし、うらちかく水くむうばのたけのかさ、あみだかぶりし、かめのこに手おけうちをき、車井の繩かいくり、となりのながしの窓見いれつ丶、あなまさなのていけや、あめのそこもやぬけつらめ、出いりにからきめするといへば、さなりいま〳〵しうしくゑてたいつかぬぞ、朝ごとのうれへなり、あすのみつけのみに何よけんなど、をのがじ丶うたへいふ、門守の小むすは、こなたのより四はかりもをよすげたるが、さみせのこと手まさぐりて、師にうけたる手なのこい給いそと、母のせいするにかしこまり、いときなる聲をからびたるいとにかきあはせつ丶、尾花といふもことはりやとほのめかしたる、よしやあしかりともみへず、桁はしるねずみのよねのひつかぶる心地ぞすめる、こなたのも聞とりわざに、こはづくりしてまねびいづるを、あながまと母のとゞむれば、みつになれるおとの、おなしごとう丶としかるもらうたし、あこはし丶まだせじ、こちへとひきよするに、いなといひてかけいでんとするを、からうじてひきとゞめつ、やをら手をやれば、例のもらしつ、やがてしめりたるもの

ぬきかへさせ、さきのふせごにうちきするにぞ、くさゝもうちそひ侍りて、はなもちもならぬものから

橘菴記

右近の橘か、江南の橘歟、そも／＼戰陣問答の、名にたち花の小島かさき歟、たぢま守がうゆる所歟、橘諸兄公のめでし所歟、そも／＼市村家橘が家の、日にたちはなの紋所歟、その狂言のたねとなる、工藤がいほりに木香あり、主人の菴に橘あり、奈良の帝の萬葉集には、實さへ花さへとほめことばをのこし、唐人の三體詩には、盧橘花開と寐言をいへり、陸績がはづし物、親孝行の部に入、司馬相如が筆てんごう、夏熟すとかきちらせり、むかしの人の袖の香は、さつきまつはなの先に匂ひ、一にたち花、二にしゝ牡丹とは、みつ子もよくうたふ、橘奴は赤坂奴にあらず、橘仙は下手碁にあらず、橘町におどり子あり、橘井に名醫あり、一日加古川行國といへる本草者來り聞ていはく、橘は密柑なり、盧橘ははなたちばななり、平地木は山たちばななり、同名異物いづれなりやと、主人もとより麻布に住すれば、きがしれぬとぞ答へける

右は麻布にすめる沽頂子のもとめによりてかけり

鉤匙橋記

鉤匙橋は長者が丸の流れにかゝる、そのみなもとや六孫王經基のおほきみ、東夷征伐のかへるさ、むさし野を過給ひ、歸雁のつらをみだるを見て、鴫々みつ口、跡なが先へいたら、かうがひとらしまとの給ひて、御はかせのかうがひをなげ給へば、化して一の橋となる、名づけて鉤匙橋といふと云々、猶たづぬべし、その所しれずとは、むかしより江戸の名所をほりかねの、いづれ作者のにげ水にや、むさし野の廣きことゞもを、草のはつかにつまんとならば、いかでかは、されば鹿子の所まだらに、砂子のよむにたらぬ、大方歌人の居ながらしらるゝ名所も、まづ此位なものなるべし、物かはり星うつりて、富士のけむだしも引窓をたて、飛鳥川の瀬ぶみもかはるものから、疳の藥をもとめずして、井手の蛙をかげぼしにし、大工童にあらずして、長柄のはしのこつばをさらふたぐひもまゝあたり、三股の流れ二ツまたとなり、藥研堀もうまるなりとき〻て、此橋のほと

りにすめる人のために、これか記つくりて、朽ぬはしらに題すといふ事しかり、

みなもとはかくぞと人につげのくし
鉤匙橋をさしてきゝなば

背面達摩賛

八萬四千のお敵に對して、おがみんすにへと、うしろむきしは、富の緒川の流れの身、ゑなてる屋の片岡歟、如何々々

雪女賛

雪の白きを白しとするは、脛の白きを白しとするが如き歟、脛の白きを白しとするは、肌の白きを点ろしとするが如き歟、雪は女の肌にして、女は雪の肌なり、怪きを見て怪まざれば、怪みおのづからきゆるとなん、

名にしおふ師走女の化粧より
空おそろしき雪のゑらばけ

芭蕉菴桃青翁賛

身は芭蕉葉のひろきに居て、風流のほつてきにたどり、心は風雲のおもひをたちて、花鳥の情にうかる、僧歟俗歟はた隱者歟、これこの一箇の誹諧師、

から誓文

四方赤良左に盃をあげ、右にてんぷらを杖つきて、以てさしまねいていはく、來れわが同盟の通人、汝の耳をかつほぢり、汝の舌をつん出し、つゝゑんでわが御託をきけ、いにしへ天地いまだわかれざる時、混沌としてふは〳〵のごとし、その清るは上りて諸白となり、濁るは下りて中汲となる、酒はこれきちがひ水と、天竺の古先生が一國な事いつてから、また百藥の長歟半歟と、きれかはつたる飛目あり、鄭聲は淫なりと、宇宙第一の文にかきなんしても、とかく浮世はつゝてん〳〵とは、由良殿の金言なり、凡わが同盟、どうまいつた孝弟の實事に、風流のやつしをこぢつけ、意氣でも慷慨でもなんでもかでも、よりどつて十九文、詩歌連誹のめりやすに、琴碁書畫のはやし方、拍子をそろへてうつてをけ、もしきんならば汝を用ひて褌とせん、もし醉ひつぶれば汝を用ひて袖の梅とせん、もし巨川をわたらば汝を用ひて猪牙舟とせん、今日の事四盃五盃ですまず、一盃々々また一盃、ねぢあひへしあひする事なかれ、疊にこぼす事なかれ、天水桶となす事なかれ、飲食する

事ながるゝがごとくにせよ、そら時宜をして悔る事なかれ、もし酒つきば銚子をかへてもつでのめ、もし肴あらば懐中箸を出してもつてゆけ、つゝしめや

この盟にあづかるもの十餘人、酒上熱寐をはじめとして、即坐に酒を下す事、瀧のごとし、時に安永三年甲午

疊師善兵衛衣の奉加帳募縁疏

それ大恩教主のおもてがへ、涅槃の床をふみ給へば、一疊二疊の長き手間、あつらへつべき人もなし、こゝに御存の善兵衛、いつまでか世をふる疊と、雨のびんごをそりこぼち、やらう疊のさまをかへ、墨の衣の奉加せんと、京間田舎間おしなべて、西は琉球高麗縁、南はきのむ土佐おもて、十方旦那にあふみ路や、われからさきのひとつかみ、報謝をまつの青疊、五分でもひかぬ五分縁に、さしつけがましき御願の、もつれぬ絲目針のめど、通れ／＼とおなかりなく、勧進帳で世をおくる、おくり狼衣の奉加、狸のきんたま八疊敷、南無あびら繧繝縁と敬白

報謝米の安く永きとし

御奉加帳にみな月の比

大根太木塵積樓記

世中の塵しつもりて山とならは、山ごもりせん塵のこの身も、とみせ先の柱におして、いつも月夜につき米の、飯田まちのほとりに、出格子の透間をうかゝひ、ひとり二階の物ほしに上りて、竿竹のよをのがれたるおのこあり、夫大隱は朝市にあり、小隱は露次にあり、四つ切の出入しげき夕べ、日なしかしのかしがましき日は、許由か耳を錢湯にあらひ、伯夷が蕨を八百屋にとり、松風のねを菓子屋にきく、妻木の道を眞木河岸にたづねて、人とをく水草きよき所よりは、中々不自由ならず、つねにほりどめのほりするものは、酒のさの字もさのみにて、もちの木坂に心ひかれ、眞名いたばしのはしくれよりは、かんなの文の中坂に眼をさらし、ふるかねのふるき昔をしたひ、ひめのりのひめ置し卷をひもとき、文車の文に車留なきをよろこび、ちり塚のちり、あくたすつべからざる世中の、ちりしつもりて山田屋とも、塵積樓ともいふへかりける、

月見の説

それ月は久かたの空にいまして、地をはふ裸蟲なとの分際にて、なれもてあそふへきものにしはあらねと、ことさへてから國には、月出て皎たりなと、、桑間濮上をそゝりしよりはじめて、漢魏六朝三唐にいたるまで、そのことば北斗をさゝへ、その影屋梁にみてり、また足引の大和うたには、ならのはの名におふ集より、世々の撰集にのするところ、月弓の引手あまたに、月の舟にもはしけがたし、されはいきとしいけるもの、君はさんやのみかつきさまより、十九たちまち廿日宵やみの夕にいたるまで、いづれか月をめてさりける、そも／＼此月いかなるものぞと、やれたる壁のすきまかぞへて、月の光に書をけみするに、その月中の混雜なる事、かぞふるにいとまあらず、まづ弓の師匠の何かしか女房は、老せぬ藥をぬすみてかけこみ、呉剛といへるむくつけ男は、まきわりをもちて桂の枝をこなし、うさきは米をつき、蟾蜍は油をしぼり、その名もつきの宮人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のおとりかあるのと、月のかつらの根もはもなく、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家のみせさきに、二合半輪の秋をめて、歌人はゐなからめい／＼に、てる月次の定會の夜食にこそはありつきけれ、また連誹となり、下つては百韻に、月いくつと安貴の烟草入の思ひをなし、月の定座は何句目なとゝ、役棧鋪同前にあけてをくこそあさましけれと、いかにはらふくるゝわさなればとて、三黄湯のたてくだしに、いふもまた埋屈くさし、これなん宋儒の袖頭巾、氣目はかゝり出して空をうかゞふに似たり、それ造物の大なるや、月よよしよゝしとむしやうにうれしがれば、月やは物を思はすると難題をいひかけ、花はさかりに月はくまなきをのみみるものかはと、榮耀にもちの皮をむけは、罪なくて配所の月をと得手勝手なる願をも、まぢり／＼ときいて御座るか、たゞしきかずに御座るやら、音もかもなき上天の事は、しらぬが佛も聖人も、もとは一つの裸蟲なり、われ造物者の無盡に入りて、大塊われにかしつけの目なしをかせしより、詩歌連誹の紙屑ひらひとなりて、籠の目にふれ耳にきく、雪月花の事にをきては、他人のやふにも思はれす、わけて秋のもなかには、桂男へ對してもひと趣向せねばならねど、も

とより五侠の門に入らざれば、すはまにたてる松かげより、雲井の月もなかめがたく、千金の儲にとぼしければ、船のうちなみの上に、うかれめの月見も約しがたし、いづれもともに猿猴が、水の月よとあきらめて、江戸の田舎のかたほとり、高田の馬場の松かけに、さらしなやおは捨山のそれならで、信濃屋なる茶やの門に、十五郎てふ名もゆかしく、三五夜中の團子田樂、ゑだ豆のまめ人らをかたらひ、芋の葉月の十三日より、十七日まで、いつも月夜に米のめしの大施餓鬼をなんはじめける、御信心の輩は、詩歌連誹の多少にかぎらず、即時一盃のさかてをついやして、永代不朽の盛名を、金看板にとゞめざらめや、

八月十三夜月をみ侍りて　朱樂菅江

染出來ぬこんやの月をなかむれば
　秋の最中もたしかあさつて

十四夜高田の茶屋にて　相場高保

月をめつる夜のつもりてや茶屋のかゝも
　つゐに高田のばゞとなるらん

十五夜月　春日部錦江

ぶんまはし秋の最中へうつ針の
　てりとほりたるまん丸な月

十六夜月　四方赤良

夕霧のまよひもいまだはれやらで
　出し藤屋のいざよひの月

十七夜月　出來秋萬作

おもしろや月の鏡を打ぬいて
　樽もたちまちあきの酒盛

高田五夜月といふことを　白鯉館卯雲

團子夜中新月の色五つざし
　すこしこげたはくもりなりけり

濱邊黒人

あかすみん秋の五夜にむさしのゝ
　名たかき月は空にすめ〳〵

病にふし侍りて高田の月のまとゐにもゆかざりければ　唐衣橘洲

酒ならぬ藥をのみてみる月は
　雲よりもうきの風の神かな

春日部左衛門尉へ遣す感狀

今度於高田市場、五夜之間乗月而逢筆戰候之刻、

即時飛二越出雲八重垣一、踏二破五言之長城一、得二李杜之體一、探二山柿之腸一、埋二酒池一燒二肉林一之條、前代未聞無二比類一者歟、自二古來一聞下以レ馬度レ原者上、未レ聞下以二膝栗毛一度上原、春日部之振舞希代之珍事也、因爲二恩賞一一期之間、詩歌作取宛行者也、者茶屋之拂方感狀合而如レ件、

安永八年八月十七日　　赤良在判

春日部左衞門尉との

詩歌兄弟對面のつらね　曾我十郎 百人一首　同 五郎 唐詩選

十郎「秋の田の、かりほのいほりに横木香、一家そろふてみなの川、五郎「主人相識らず、偶坐林泉のためになる、お客にはじめて哀江頭、十郎「めぐりあひて見しうどんげの、花の色はうつりにけりないたづらに、十八年の天津風、雪のかよひ路ふきや町、赤澤山のさかい町、五郎「しゐの木山月半輪の、秋の野すつたる一戎衣、風つようして角弓の、一のやぶしに獵馬より、射落されたる無念さを、十郎「物や思ふと人のとふ、人に心をおきの石の、人こそしらねかはく間は、なにはなる身をつくしても、五郎「あはん他席の他郷より、此場を去らぬ三下り半、憑て兩行なく涙、十郎「ひるはきえつゝよるはもえ、五郎「かうべをあげてかうべをたれ、十郎「むねにしげれる八重葎、五郎「冠をつきぬく三千丈、十郎「尉と姥とは高砂の、松もむかしの友千鳥、五郎「小苑鶯歌やみ〳〵と、長門朝暮にくるへる蝶、十郎「蝶よ花よと花さそふ、あらしの庭の雪ならで、むら〳〵はつとうちちらし、五郎「百萬一時につきやぶり、寶劍直せんべいを、ぱり〳〵とかむごとく、十郎「その本望をたつた川、五郎「心をきたふ鐵嶺頭と、「ほゝ　二人「うやまつてまうす

大根太木十五番狂歌合判詞奥書

そも〳〵和歌のうら店に借宅し、泉がつてまつなる身の分にて、批判を何と正札付の符帳をもわいためず、和歌三神をかけねなしの安賣して、十露盤の玉をみがける、句々も三五の十八と、おきまどはせる十五番の歌合に、ほつちりの判をくはふる事、さばへなすかみの町人の宿めきたれど、給金をつくば山のかげよりもしげく、宗旨はなには津のふりをしたふあまりに、神棚の夷歌をまくらことゝして、鼻歌はやりうたにもかへぬれば、これや三井がみせのかし傘

ならぬ、六百番千五百番の判取をまねびて、どぶいたのあつかましく、小便無用の辯をかいつけぬれば、露ぶつかけのもり侍るとも、御免素麺のながきあざけりをのこす事なかれ、やすらにながき、七のとし文月十あまり六日、

肖柏贊

人に三愛の癖あり、牛に雙角のあらそひなし、雲井の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はた袞のひも長し、後中書王に後ある事を志り、種玉菴に種をのこすときく、その源きよく、その流とをし、

日くらしのにき

女もすなる日記といふものを、野郎もしてみんと、梓弓やたての筆とうでゝ、花薄ほつきありきしのらまはりを、そこはかとなくかいつゝく、そのふところのかみなつき、空も小春の長閑なる日、友とする人みたりよたり、夜かあけたら詩つくらんと、からうたの礎てふふみふところにして、物見くるまの牛込をおし出す、わらたなの里すぎて、司天のうてなのもとをゆく、空にも酒星はあなるものをといへば、かたへの人地にも肴町ありといふ、こゝに日ごとに千句のことばをつどえて、それが判をなすものあり、そのきやうさくなるを、壁におしをけるをみれば、石でする物石菖蒲のふとんなどかけり、清少納言が笑本よむ心地す、（津久戸）つきど明神の宮を過て、ひや水ばんそにかゝる、夏ならば立よりてもくむべきを、この寒さには御免候へかし、江戸川をこえ、りうけうばしをわたり、すは町を北に泉松山にのぼり、牛天神のみまへにぬかつく、かたへに一つの石のほこらあり、苔むして戸ぼそなし、白駒かいふ、これ貧ぐうをまつる、よく人を禍福す、むかし小日向のほとりにすめる人、家の内の貧を逐ふとて、窮鬼のかたちをつくりて、此ところにまつれるなり、その神體は何ものかとりゆきて、ほこらばかりのこれるとぞ、やつかれ多年いのらずとても、此神の冥助を得る事、形の影に随ふがごとし、法樂に

澁團扇あふげばいよ〳〵高楊枝
　かみな月とも思はざりけり

千里亭白駒

澁團扇はねもおれねば柹頭巾

かぶりふるとも福やいのらん

千ひきの牛石のもとより、半天の鳶坂を下る、一むれの羅綺みちもさりあへず、曹司谷の影供にまうづるなるへし、そが中にいづれの深窓にやしなはれ給ふならん、年はあなにくの十八はかり、長袖の地をはらふは、いまた春ならざるにいづれの花ぞ、蟬鬢の日にすきとほるは、いまた盆ならざるにいづれの燈籠ぞ、何やらんめのわらはにさゝやきてうちゑめるなと、楚の國の色男が垣間見し、東隣の名代のむすめ、阿保親王のむすこかぶが、かり衣のすそを竹馬ぎれほど切てやられし、はらからすみも、中々もつて數の子ならず、たゞうらむらくは、口もとのやゝひろらかなるぞ、白きたまのすこしき瑕とやいはん、人々の心も空になりて、足はあとへ〳〵とひかれぬるもおかし、でづゐのうら（傳通院）門を左に、小石川のうま場にいたる坂あり、名はわすれたり、赤つちの上に靑き苔みち、ゑろき水のながるゝに、きばみ落たる木のはのちりゑきたる、なんでも五色にかはるよと、うちうめかる、午の貝ふく比、ひまゆく駒込をへて、やゝ日もたけ町をすぐ、こゝに似足がゆかりあるものあり、その門を過てその室にいり、てやはあるべき、ゑばしの間此かたりの酒家にて待給へといふ、その名をとへば石垣何某とかや、さためて名はかたく、人はやはらかならんかしなと、どよみつゝゆき〳〵て、荷付馬の追分にいたれば、年あき前のけいせいが窪に近し、酒はやしの杉たてる門に似足が來たるをまつ、沽酒市脯はくらはすとかいふなるを、ゐにごよみゐにごしらすなどかたみにわらふ、やつかれわりことりいてゝ、椎の葉にもるとひとりごちたるに、みなひとつゝとりてくひけり、これより道を北にとりて、せそゐまへ（[illegible]）とかいふ所をすぎ、枯たる木にも花さくてふ、大悲さにまうで侍りて立出れば、すぎやう者やの先たてるあり、あるまばらなる垣のやぶれより、白きかひなさしいでゝ布施するさま、近比石燕翁のゑかける百鬼夜行の圖に似たり、錦江おかしかりて

石燕にみせたらすぐにかきねから

手ばかり出して内にまちぶせ

まづ足もとのあかるきうち、さんさきをいそぐべしと行、みちの右に一の石碑あり、をうなゝおもて

とかや、享保十八年丑十月十七日としるせり、これはかたひの女の死したるをうづみて、七面にまつれるとぞ、玉造小町の文も思ひあはせられ侍り、此わたり野中の清水柏木の井なとありといへど、たけくまの松の木て、はなつつこくりし老父もみへねば、それと志るものなし、志れずは先の辻番にとはん歟、いぶせきやどにくれ竹のよをあみて、烟くさをたくはふる器をつくれるものあり、莊周がいへる緯蕭の人のたぐひにやとゆかし、そのむかひに種樹の家あり、千草萬木をうへて、郭橐駝が傳よむ心地す、古文眞寶のはなしに志ばらくむだも忉利天、鳶坂の鳶飛で、天にいたりし乙女の姿もわすれたり、猶も谷中をさしてゆく、笠森いなりの宮居をみれば、木立ものふり鳥居たてり、ふたつきのかはらけに、志ろき色とくろき色の團子をもりて、小女ゆきゝの人をみることに、米のかへ土のかへとよぶ、あか友何かし秋の頃より

醫者も手をとるやわれこの人にして
　かゝるへのこの病あること

と詠して枕にふしたれば、いでやこのみやしろに、いのらぬ事はあらかねの、土のだごさゝげつゝ、なもかさもりの神、あが友がきが持まへの、たいらけく藥代のやすらけくまもらしめ給へとまうしていでぬ、こゝは過し明和の比、おせんといへるいらつめの、茶をすゝめて人の心をうからかせし、ふるき跡なり、かつ志かのまゝの手古奈のたぐひにして、なら坂や兒手柏のふたおもて、ひともとの陰とたのみしが、とにもかくにもねぢ錠の、鍵屋の錠もぴんとおりて、またもふたゝびあひかぎなく、こしかけし床几の足さへ跡かたなく、兒手柏の根つこをも、いづこの里へほりうつしけん、とんだ茶がまが藥鑵とばけて、松風のみぞ音たかき、人間萬事早馬のごとし、かた〳〵油斷すべからず

笠森稲荷大明神　鍵屋阿仙稱美人
土器碎爲土團子　只今唯有煮花新

又　　面柑似足

笠守神祠日暮邊　醉中相伴例諸賢
殊令描者頻懷古　曾識高名有阿仙

日ぐらしの里にいれは、七面の社あり、衆僧どきやうの聲高し、養福寺といふ寺に、自墮落先生の墓あ

り、先生は江戸の人なり、五君に鞍がへして志を得ず、髪をからわに結ひ、歯をかねにて染め、佯狂して誹諧師となる、庵を無思菴といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊を確連坊と稱す、昔の反古二卷をあらはす、その中に歸去來の辭を評して、淵明元來金持なるべし、わづかのあれ地をもちて、口をきくこそにくけれと、一口にはり込しえれものなり、鐘樓によりて銘を探れば、鑄二華鯨一工といへる、鯨の字にヲの字のすて假名をえりつけたり、あまりにあさましく、此銘なからましかはと覺えて

すてかな歟またすて鐘かえらねとも
　　おもしろからぬをもしなりけり

妙隆寺の庭より修性院の山つゞきは、寶暦六のとし庭つくりのたくみ、岡扇計がつくる所にして、日暮しの宮といへる、小さき宮居の前に石ぶみたてり、富士筑波あひの木がらしひゝく庭、といへる句をきざむ、紅葉のにしき折えがほに、二月の花毛氈もこれには過しと覺ゆ、何かしの國のかみの、宿昔青雲のみこゝろざしにて、草創し給ふ、みてらはとりもなをさず青雲寺といふ、太田金吾の船繋松あり、桑田碧海手のうらをかへせるがごとし、石碑あり大ささぼていをはたちばかりかさねあげたらんがごとし、木挽町の何かしかたつる所にして、入江氏のふみをきざむ、千とせの松の前に木挽とは、ちとさしあひなれと、入江といへる名字こそ、むかしの面影に似かよひて、おもしろし、もとの道にかへりて、紙くふひつじのさがりに、本行精舍にいたる、とぼそをたゝいてあないすれば、上人よろこびむかへものして、廬山の禁もけふはかりはと、何くれともてなし給ふ、をの〳〵ふところにせし木のみなどさゝけつ、やゝありて東面の障子おしひらけば、物見塚山に、筑波山凹なり、田の面田の字のごとく、人家人の字をならべ、煙なゝめに霧横たはり、空あかるく地くろし、白日さとの名にしおひて、明月山からぬつと出、庭にかれたつ荻薄の根より、東のやり戸の板ひさしまて、三竿はかりさしのぼれば、人々こゝぞとかのいしすえに柱たてして、五七言の長城を、この城跡につくり出せしも、えげゝれはみなもらしつ、物見塚に筑波山人のかける碑文あり、錦江

物見塚むかしたつねてふみみれは

右と左につくは山人

ともなひし百順、筆とりて、ゑにうつせるも興あり、去年のけふなん、朱樂菅江中島平五郎をともなひて、このみてらにあそひ、十月の望一客と同しく、赤壁の月みる事を興せしが、一人は枕上にふし、一人は泉下に歸す、死生存亡は委細承知なれと、あまりに造化もとうよくなり、けさ菅江のもとより

見し月はそしてすゝめるやくもれるや

ひとりは死客ひとりは痔客

樂きはまりて哀きたれり、こうめいりては面白からす、またあふまではさらば〳〵と、いとまをまうして立出る、一寸先は闇の夜の、牛の角文字いろは茶屋、戀の手習見ならはんと、玉たれの外にたゝすめは、女三の宮のおんばともいふべきが、天のうすめのみことならで、胸乳あらはしてたてり、はだえは生漆のごとく、目はどんぐりを欺く、されともかくまゆずみのゑんなるは、一里塚のゑの木のかげより、三日月の影ほのかに見ゆるにたくへつべし、

立臼不及美人腰　簾外立如野等猫
却似證文一文字　數年眉黛爲謊描

わが輩のとゞまれるをみて、走り入て座す、みたりよたりとならびて、かけたるをおきなふなるへし、あなはしたなのうかれめや、わかきものてふずざやなき、何がし居士の三平二滿、あけばまた休ぬといへるも、かゝるきはにはあらざめりと、そこ〳〵に見過して、月夜がらすのふるすにかへりぬ、こゝに一日のうちのあらましをかいつけて、千里の外のにきにたぐふもおこがましけれど、家の戸庭を出ずして、おぬひの道行と名づけぬるわざをきを、よき方人として、日ぐらしのにきともいふべからん、とまれかくまれなげやりてん

冬日逍遙亭詠夷歌序

たはれ歌は人のわらひのたねをまきて、よろつの人の口まめとはなりけらし、あるはうき世をまゝのかはらけまち、くだけてもとのもくあみが落栗菴、あるは本町二丁目の、いと屋にあらぬはらからの、秋人がよききぬた菴など、月次の會たへすぞなんありける、こゝに京町何がし屋のあるし、此道をたしみて、名におふかぼちやのへたならぬ、言のはをのべ、梨壺の五町のうらなる逍遙亭の山里にして、と

もに心をやり水のめいぼくと、けふのまとゐのある
しまうけをなんなしけらし、われも硯のすみの江の
岸におふてふわすれ草の、ねぼけし夢のかよいぢも
わすれがたく、かしあみ笠に玄のぶ山、またことか
たの道もたどらまほしく、たゞ一はいの茶づけくふ
間に、はしがみのはしをけがしぬ、たとひ時うつり
客さり、むかひの挑灯ゆきかふとも、みせすかゞき
のいとたへす、繪半切の末ながう、くどうも〳〵此
會に、おいでなんしといふ事玄かり、天明ときこゆ
る二とせ霜月二十日あまり四日になん、

狂歌師の引つくろはぬ衣紋坂

うちつれてゆく晝中の町

竹本政大夫碑　　文起に代りて作れり

やつかれ二葉のむかしより、くれ竹の一ふしに心を
こめ、豐竹の生立は、筑前少椽に學ひ、そのゝち竹
本の風を玄たひて、政大夫の門に遊ひき、弟子襁線
の才乏しといへとも、針にたとへし師に玄たがひつ
ゝ、かの秦皇の松にゆるせし、位山にものぼるへく
なんなりにたるを、下里巴人のいやしき曲をもて、
殘盃冷炙のむしろの末に侍る事、ますらおの望む所
にあらずと、ひたすら先師のとゞめ給ひしかど、こ
のめる道のすてがたく、あなかちにもとめ侍れば、
そこは住吉の人なり、岸の姫まつ色かへぬ、名はな
には江の何とや呼んとの給ふ折から、錦大夫來あひ
侍りて、住こし住吉の住大夫こそ、つき〴〵しからめ
など、一言して定め給ひしもわすれがたく、ことし
文月先師政大夫十あまり七かへりの秋をむかへしか
ば、その流をくみ、その源をたづねて、大江戸にゐ
ほりの邊にこのみたりの筆の跡をうづめ、思ひを千
ひきのいしふみにのふる事とはなりぬ、そのことば
にいはく、

竹あり竹あり　　根を同して節を異にす
くれ竹の綠枝おれ　　紅葉の錦はらわたをたつ
千ひろの陰に曲をつたへ　　一字の恩に名を得たり
此いしふみを徴として　　仰けは高く鑽れはかたし

天明元年辛丑孟秋十日竹本文起建

木兎引賛

衆鳥來てこれをわらふ、其智には及べし、木兎ゐな
がらこれをひく、その愚には及べからず

小鳥ともわらはゞわらへ大かたの

うき世の事はきかぬみゝつく

よものあか上終

四方のあか 巻下

向島賦

花のお江戸のすみだ川、まつち山からむかふ島のけしきは、みめぐりのみめぐりありきても、洲崎のまさごのよみつくしがたし、春はやう〳〵土手の若草火縄とゝもにもえそめ、牛島のつのくむあし酒樽に錐もみし、軒端の篠波見せさきにさきかゝれば、池のかきつばた川骨の色をあらそふ、生酔の目に青葉して、山ほとゝぎすおちかへりなく比より、屋かた屋根ふね似たり猪牙もあひをつなぎ、あゆみをかく、秋は千葉の山の紅葉、はなの高雄の色をあらはし、ぶら挑灯のぶらつきしはては、燈籠にはかに心かはり、いつしか時雨に落葉きゝ、雪見酉の町のうき船に、巨燵の灰のかきたてゝいひつゞくれば、みな源氏の宇治十疊のかし座敷、いせ物がたりの乗合ぶねのはなしめきたり、日もくれぬはや船にのれとは、むかふへわたれといふ事歟、いさことゝはん、あそぶ氣はありやなしや、しゐのはならぬあしのはの、筏

にいり酒のあらひ鯉をもり、山椒の實は小粒でも、蒲焼のうなぎの長ざきにともなふ、吸物の赤味噌あかずして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の藥研でおろすかとうたがひ、太神樂の曲太鼓、日ごとに萬度もまはるべし、かくうかれたる世にしあれば、都鳥のはしとあしのあかきも、秋葉の猿の志りの樣に覺え、晋子が夕立の句も、稻荷の狂歌の額の事かと、をのか田へひく水草の、きよき所のとつ國より、北のくにとははひわたるほとちかきわたりの、四方のながめは名におふ葛西の太郎月より、いほざきの大黑屋、夕こえくれのせはしきまで、いづくはあれどむさし屋と、地口有武がもとむるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆志めすになん

狂歌如レ湧角田汀　短冊頻飛秋葉庭
向島風流從レ此始　武藏屋額權三亭

はや牛もをそ牛島もよどみなく
いけすの鯉にこがれよる船　腹から秋人

いつみてもけしきはたれかあか味噌の
鯉と戀とにさしむかふ島　酒上不埒

みめぐりへたえずに船のつき亭や
花のお江戸のまんむかふ島　地口有武

牛島の亭主のすきの赤味噌は
時をゑぼしの鯉の庖丁

加保茶元成春帖手鑑序

こゝに京町何がしやとうたひし、家の風もふるく、道理でかほちやの元成は、たはれ歌のせいひくからず、ほんに猿丸大夫格子、むかふの人丸赤人や、おや玉つしまのおいらんより、その名はいちばい高かりける、ことしも例のゑい心地、内所にこぞりあふみのや、かゞみの山の手かゞみに、歌の趣向をたてたれは、かねてぞみゆる人々の、名におふ狂歌の染模樣、かすみの衣すそ長く、千とせの春をかさねざらめや、天明四のとし初春、

早稻田太神宮法樂の文幷歌

これ天明三年癸卯のとし、卯月のけふにめぐりめぐれる小車の、牛込の里わさ田の面に行かふうゑ場の、

したついは根に宮はしらふとしきたて丶、高間か原にちぎ高しりて、大君の御代のまもりと仰たてまつれる、かけまくもかしこき太神の廣前に、おそれみおそれみもなくまうす、百たらぬ八乙女のみかぐらをまねび、久かたのあまの鈿女のわざをきをまじへ、歌かきにあともひたて、絲みちに絲かきあはせ、大つ丶みの大きやかに、小つ丶みのさ丶やかに、笛竹のよたれくり太鼓のはちあたりも、すみ酒のすみやかに、みそなへのみそなはし、みあかしの光をやわらげ、ちりからの塵をおなしうし、おたいらにやすらかにしろしめして、このひと村の民くさの、汗水のひた／＼とひたの水田のたなつもの、ゆたかにめぐみさいはい給へと、おそれみおそれみもなくまうす、

法樂躍長歌七首狂歌

法樂舞

やまと歌やはらぐ上を又ひとつ
けふやはらけて法樂の舞

名所

居ながらに歌人となれしちかつきや
さても名所はさま／＼の顔

娘道成寺

時しらぬ山といり來て京かのこ
娘の袖をかへすをそみる

柱立

宮はしらふとたちよれば此神は
そもばんじやうの君のはじまり

菊慈童

乙女子は夜はの嵐にくしけづり
あしたの雨にかみのす丶しめ

二人椀久

松山をこえたる波の玉くしけ
ふたりちぎりをかさね椀久

執着

春風をさらりと柳にやり水の
時しも今は牡丹さく庭

黑つくししばらくのつらね　濱邊黑人 祝髮賀筵

しばらく／＼、桐油ほくち南蠻鐵、四位黑袍天地玄黃の其中に、玄の又玄狂歌の門、入らざるもの丶あらさらんや、京橋中橋中黑の、黑いは北の水谷町、すみからすみゑの二番叟、色のくろい尉殿に、さあ

らばす〻玉たどんの粉、目黒の不動大黒天、九郎判官九郎介いなり、八瀬や小原の黒木うり、甲斐の黒こま八幡黒、黒鴨の供黒仕立、香に黒方楊枝に黒文字、にがいは家傳の黒丸子、あまいは名代の黒砂糖、黒米めしの三きね半、その神明のおはします、芝のはまべの狂歌の御奉行、黒人新翁、おなじみの黒髪山をそりこぼち、かしらもまろきかゝみ山、いさたちよりて黒主も、そこのけといふ歌仙の中へ、つん出た四方の赤つ下手は、人主が造化、請人が菅江、大屋がうら住、腹からが秋人、うしろだてにはつがもない、わけて此道すきやがし、黒極上の狂歌仲間、けふのまとゐの御祝義に、おらが連中花道の、つらねか一寸口眞似と、ホヽうやまつてまうす

桐つくしきり口上

そも〳〵桐座の濫觴は、千桐坂きり桐長桐、天の八重きりたちこめて、しばらく休の月切日切、天のいは戸のきり戸口、きり〻とひらく鼠木戸、神をいさめの切狂言、これわざをきのはじめとかや、きり〳〵屋根をふき屋町、きりかはつたる顔みせの、やぐらたいこのうちきりに、ちよきりちよとこれをながむれば、さてもみことな五七の桐、舞臺のきり破風きり日ゑん、切幕さつと花道の、春狂言には友切丸、夏は俄のひときり〳〵、きりの一葉の秋狂言、おつるこがねをちぎりにかけ、菊桐きくきりみきくきり、四季おり〳〵のかぎりなく、ひつきりもなき引船から、棧敷中の間きりおとし、留場しきり場火繩代、ねぎりこぎりはわり込の、人にもまるくこきりこは、ほうかぶりしてひざつきり、しりもちきりもち切そうめん、そばきり船きりらんきりいもきり、かやのたんきりまんぢうみかん、べんとうよしかにぎりめし、ありきりはこぶ吸物臺引、きりめたゞしき切ための、菜きり庖丁薙刀なり、雪踏にきりつけ桐の下駄、切みせそゝる四つぎりの、茶碗酒には靑つきり、ほていふりにはきりがれん、源氏にきりつぼ平家には、西八條のきりかぶろ、きりこは齋藤太郎左衞門、藤伊夕ぎり三かつ緣きり、序切二の切三の切、ひぎりとうぎり、靑ぎりきり島、わらひ道具はきりの箱、引きり枕うすのめきり、きり原のこまきりが谷、きりふりの瀧きりの海、きり山三兩かしこに五兩、きりかね曾我の切もぐさ、ねつきりはつきり病きり、

きりはたりてふきり〳〵す、夜きりをはらふ早天から、まづ今日はこれぎりまて、きりのふくろをもぬけた名題、桐のはにすむ鳳凰や、きりんも出べきみぎりとは、けふみつ指のきり口上、その口切の爐びらきに、氣もうききりの紙ふすま、きり〳〵〳〵、

右は天明四のとし甲辰、桐座はじめて葺屋町にて顔見せの狂言せし時、たはふれにかけるなり、世にまぎらはしき八の字つくしなど、名をかるといへども桐の下駄と燒味噌なり、

をはぎの露

それ七々の忌に三の物いみをくはへ、六の齋の中に十あまり三とせを弔ふ事は、いかるがの宮にかくれませしみこより起り、何かし禪師の京華集にも、預修十王經をひきてその事を述たれば、くだ〳〵しくいふに及ばず、こゝに子子孫彦なん、おやよりよくつかへまつりし君の、十三回の齋をとふらはんとて、をのがこのめることくさをもてするも、むらいになめげなるべけれど、まめにじちようなる心から、かくははかり出ぬるものならし、はたむべ〳〵しき和歌の題はおこがましと、ひたすらたはれたるかたによせて、計年思法事とかいへるを出して、思往事のひゞきをかりつ、これなんむかしの秀句めきて、今もわらはべのもてあそぶ、地口なりなどあざみいふ人もあるべけれど、きやうごんきごもさんぶちのゆかりなりと、頓作頓寫の琵琶をきゝて、靑きあせとりの袂をひたせし、むかしの人になすりの衣、をはぎのもちもいと露けくて、

十あまり三とせの秋の黑豆も
　ほとびにけりな法のこは飯　子子孫彦

つきぬ恩ながく法事のくるたびに
　かぞへてとはん百年忌まで　多田人成

あつさ弓はるかにかぞふ年の矢の
　十三ぞゝにあたる命日　紀定麿

めしをもりてたてにし年をかぞふれば
　十といひつゝみつはすぎはし

百番月歌合序

大かた月をめでしたはれ歌をみ侍りしに、三五夜中

の數取に、十五連城の玉をつらね、又はふたよのお月さまいくつ、十三かねのあかつきをおしむたぐひなれと、かく鳥の子を十つゝ十つかひしされ歌、ふたもゝちにあらゆる月をながめ盡し、兎の杵のさきもちびて、三十丈の連木をはむてふ杭州のふる事を思ひ、桂の枝も折つくしては、神田まつりのことはてゝ、宮居にかへる榊かとあやしむはかり、いち買のいちはやく、よつやのよついつゝとかぞへたるちりつもりて、あふげば高き山鳥の、尾張のみくにのすき人ら、もゝちの歌をよみたるに、良村安世ひとりして、もゝちの歌をよみあはせしは、かの良峰安世朝臣の水車より、よくまはりたる口車にこそ、よりてそのながえのはしに、いさゝか筆の軸をとり侍るのみ、

春日詠寄七福神祝夷歌序

孟子に三の樂をのべていはく、かぞいろともにいまし、おとゝゐることなきは、一の樂なり、仰てあめの道に、ふして人の道にはづることなきは、二の樂なり、天か下に秀しざえある人を敎へはぐゝむは、三のたのしみなり、まめ人にこの三の樂あり、南にむかふ位もなにゝかはせんとはむべなりけらし、わが家かぞいろ堂にいまし、おとゝゐ家をともにす、あめがしたに秀し才ある人、たがひに師友のまじらひをなす、たゞはづべきはぢをさらずして、あめに人にいひわけなきぞ、またはづべきのはなはだしきにあらずや、やつがれいはけたる比より文のそのにあそび、ことばの林にたちまじり、からうたのむしろに七あゆみの韻をふみ、敷島の道にむくさのひとつをわいため、身をたて道をおこなひ、名をこの世にきこえあげてんとねがひしも、陽春白雪の高きさらべはとなふるものすくなく、下里巴人の下がゝりは、いざなふもの多しとかいへることのはにたがはず、いつしかはかせだちたるまじらひをいでゝ、ひたすらたはれたるかたに身をはぶらかしぬ、いでやこの身はとまれかくまれ、かぞいろの年をさらでやはあるべきと思ひおこして、こたみたらちおなゝそぢのよはひをむかへ給ひぬれば、をとゝしたらちゝめのむそぢの賀にまじろなる大黒屋につどひしためしにならひ、ふたつのくにのはしのほとり、よろつ代のかめ屋のもとにけふのまとゐをなす事になりぬ、題もまめ〱しき和歌題は、はゞかりの關のはゞかりあれば、ことわ

ざにいふめる七の福ある神の御名によそへて、いはひうたをよましむ、そのことばにいはく、

寄大黒祝

わが家の大こく柱鼠壁
こつちもつけていはふ神棚

谷水音か新宅をことふくことは

谷水音くれ竹のよつやのさとにやどりをうつし、もろ人のたはれうたをもとむ、やつがれおほけなくもかんつよのことばにならひ、そのむろほぎをなしていはく、ついたつるいしずゑ、ついたつるはしらは、これつちぬしのみこゝろのひろきなり、とりたつるみそか〳〵は、これ家ぬしのみこゝろのまに〳〵なり、とりあぐるたるきは、これ大きなる繪筆なり、とりまける腰張は、これいろどれる繪具なり、とりしく疊は、これあるじのへりくだれるかたちなり、とりふくやねは、これあるじの思ひあかれる藝なり、四谷は竹町なり、くれ竹のよつやの里に、大三輪のながれをくめる繪師たち、花のお江戸に木の根草はもよく物いふたはれともたち、かくほぎをはりて、ひたのみにのみ、ただうたひにうたふ、そのはなうたのはしつかたに、いさゝかほうかぶりし侍るはや、

所から四谷丸太のとこばしら
かけし墨畫の竹町の宿

鬼念佛畵賛

かたつふりの角、おれては蠻觸のあらそひやみ、外面は夜叉のごとしといへども、内心菩薩の道にいれり、身を墨染の奉加帳、つくたひごとに興山の、かねの撞木はなまいだ〳〵

富士山繪賛

そも〳〵この山、孝靈のむかし生れ出しより、若白髮の雪つもり〳〵て、千とせの末はもかけず、くずれず、廿一代の千言万句も、赤人の田子の浦にうちけされ、五山の僧の抹香くさき詩も、丈山か白扇にあふきふせられぬ、されど泰山はちりひちをゆづらす、河海は化粧水をいとはず、ふじのしら雪朝日でとけてとうたへば、三國一のあまざけのかんばんにも、をしげなく書ちらすは、また勿體なき事ならすや、むかしより此山をめでし人いくばくぞや、在五はまだらに雪舟はしろし、その中にまつ黑々の墨衣、西行といへばふじを思ひ、ふじといへば西行と氣のつ

くは、此山此人古今一對なるべし、嗚呼さくや姫また出るとも、わが言をかへじかし、

生國駿河者　本國近江湖
三國一山外　出鄽出店無

うがゞへばふじほどくろきものはなし

酒中花のちらし

管もて天をたつた一日

桃李物いはず山吹口なし、その口なしの色々と、たくゝみ出たるひとつのもの、南の花にたはふれし、蝴蝶の翁がふみにみえし、芥の舟のそれならで、一たび盃の中にうかべば、花の唇はじめて動き、柳の眉たちまちにひらく、なべての世に行はるゝは、淺草のはつかに、やなぎやのいとすくなし、いま製する所は、よし野はつ瀬のたねをうつし、まきゑ沈金の盃をいとはず、つみてはひたし、のみては興す、もし酒中の趣をしるものあらば、いさゝか一枝の春をおくらんといふ事しかり、

月見のことば

ならひか岡の何がしも、よろづの事は月みるにこそとはいひしか、こよひぞ秋のもなかなれば、てる月次の會はさらなり、折にふれ時につけつゝ、をのがじゝ心をやれる中に、かのからうたは、もちにもちや、から人のいひふるしたる、清光にけをされたれば、かゞけてむかふひのもとの、平仄の影もたと〳〵しく、連歌は庭の面八句に、うき雲のさはり嫌おほく、誹諧はさびたる小刀に、澁柿の皮むかんもうるさし、和歌こそこのくにの風俗にして、いきとしいけるもの、いづれかこれをよまさるべかめれど、この比にいたりては、ざれたることば、あたなるすがたをのみもてあそべば、女郎花たはれたるふりをなん、花薄ほゝゑみあへりける、それこの月をみるにつけて、その品もまたさま〳〵なりや、先はき出しの高どの、はれやかにみす卷あげ、花氈のにしき所せうまきならべ、すはまにたてる絲花のかげに、みさかなは何などけいめいして、盃のそこしたみながら、何やらんめでくつがへり、どゝわらふなどをこそ、月見とはいはめ、酒の池にやぐゑんぼりをたゝへ、肉の林に橋まちを手おり、みすぢの絲のさほかいつかみて、なひきそみきたうべよなどざれたるもあり、五のちまたに千金をなげうち、三のふすまに二世をちぎり

舌つゝみうつたいこ、歌うたふをうなげいさつれてこそ、月は月なれと思ふ人あり、舟にさほさし野に草鞋はきて、うかれ出んと思ふも多からん、五條わたりの九尺たなに、軒もる影をながめ、いかきの閨子、ますのいもに、そのたのしみをあらためぬも有べし、けふなん何がしのもとに。としノヽ月のまとゐあれば、ゆふけのはしをきあへず、袴のこしさしあてんと思はず、外のかたを見やりたるに、雲は魚のいろこのごとく、月は兎の耳ながく、椽側のはしつかたにさしいりたる、わがやどながらなつかしきに、つもれば人のといひし、老のまさにいたりなんとするもしらず、露霜にそぼちありく、身のはかなさまで思ひつゞくるに、入相のかね時分づかひの人をうながし、雲井のかりも跡なが先へゆくなるべし、

をなじく誹諧文風俗文選の體にならふ

よろづの事は月みるにこそ、なぐさむわざなれとは、つれノヽ草の法師も申され、今宵ぞ秋の最中とは、和名抄の作者ものべられたれど、これみな歌よみ連歌師のぬめりにして、いつも紅葉のにしきはきれど、里いもの衣かつぐ風情をしらず、尾花の袖はふりきるとも、枝豆のゆでたてをいはず、わが誹諧の自在なるや、宗鑑は柄をさして團扇となし、祖翁は雲おりノヽ人をやすむるとはの給へり、さるは虚實の自由を得たらんに、尤比興の本意を正しにければ、こゝに我輩の閉口といふべく、はた後世の活法とすべし、世にぶ風雅の人ありて、宵から戸をさしこめて高鼾したらんも、又は夜の明るまで酒のみ物くひて、これを月見と心得たらんも、かの書物によみ入て、夕立に麥を流し、傾城に打込て、身代を棒にふりたるにひとしく、品こそかはれ、その罪はひとしかるべし、されやまことの月みる人ぞ、まことの月はみるべく、月みる人の多きにつけて、月みぬ人をかこつなるべし、

巴人亭記

かたつふりのつのをちゞめてはいり、蟹の甲ににせて穴をほるも、家といふものゝなくてかなはねばにやあらん、かりこものみだれしこもうちかぶり、露霜の宿なしとも身をはふらかしすてざらんかぎりは、膝をいるゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家

居なからんやと、あらたにひとつのやどりをしむ、もとより二間堂にいまし、妻子室にみてり、そのゑんがはのはしつかたに、ひとつの妻戸をびらきてゐれば、ひろさわづかに十疊ばかり、こゝに四方のまらうとを迎ふ、維摩が方丈の玄關にて、八万四千の獅子を舞はせし類なるべし、その北に三枚敷あり、東面に戸をあけて、ゑやらくさきつくえを出せり、螢こい／＼雪こん／＼の場所なるべし、すべて財乏しければ物すきなし、床なければ違棚もみえず、かけ物は壁にかけ、柳は隣からのぞく、譃栫はあるにまかせ、草はところまだらにぬかしむ、土藏の目の上の瘤となり、雪隱のはなのさきにわるくさきも、かの南のやのかき、東となりの下水をいとはざりし、司城子罕かむかしをしのび、望海の亭、見山のたかどの、きら／＼しききはにはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居をいとなみしたぐひに似たり、わか家にくるとしくる人、わか門に入としいる人、こゝにのみこゝにわらひ、こゝにうたひこゝにたのしむ、のむものは何ぞ四方のあからなり、うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり、もしそれ陽春の白雪糕も、また小兒のたはふれなり、いづれを高しとしいづれをかひくしとせん、

里の春柳の五もと

富本豊前大夫蔵日浄瑠理

楊柳橋邊の川やなぎ、みどりの釣の絲たれり、百花川上の浪の花、とわわたる船もたいらかに、安國なれや君か代は、千代にひとたびすみだ川、山屋の酒の諸白髮、わかやぐ尉とうばたまの、やみをあやなす首尾の松、今一ゑほとゆふゑほに、千里も一里こがれよる、大さんばしの春景色、まつちの山もわらふかと、うれしの森のむら烏、かはい／＼がにくいやら、にくい／＼がかはいやら、たつた今戸のうらおもて、口も八町土手つゞき、日本つゝみの辻うらや、うそとまことをはかりにかけて、どちらがおもい露銀は、みやこそだち蜘ゑやほんに、花のお江戸の惣花は、こがね花さく五もとの、柳のちまた花のさと、みちのく山も今こゝに、のりこむ駕籠のかよふ神、ゑりくめなはの松かざり、直なる竹のおいらんに、ゑんぞ禿が初草の、うらめづらしきはれ小袖、こぞのゑきせの衣くばり、跡着のにしきこきませて、出るい

ろはにほだわらや、だいてねまつの初買の、初會う
らじろやぶかうじ、かうじ〳〵て居つゞけの、れん
じの窓の北おもて、のこんの雪のふうじ文、文がや
りたやむろの梅、くひさき紙の未開紅、かしくのつぼ
み愛らしく、けふしといでゝ枝ぶりは、花のかのさ
まの〳〵手にわたせ、花のかのさまの〳〵、手にと
るからにゆら〳〵と、ゆらぐ、心の玉はゝき、ゑにしは
つきぬとみもとの、ながれの末も豐なる、天の八束
穗たなつもの、つみかさねたるみくらのまち、こゝぞお
つまの都鳥、むかしもかゝるにぎはひは、ありぞな
しやとかたりつぎ、いひつぎ棹のみつのいと、ねじ
めも長くまきおさむ、

春色花鳥媒　同

ならのはの、名におふ御代の撰集にも、相聞歌とは
色の道、藍より出て藍よりも、こきんに戀の部をた
て、、花と鳥との媒や、花のすがたはさま〳〵に、
心うきたつ春のいろ、鳥はもとよりいもとせの、ちゑ
ない神にちゑつけて、つかひはなれぬ二柱、はしら
暦のひめはじめ、口と口とのはかために、はたとはた
との腹赤の、奏のりぞめよしの、ゝり、氣にはいらへも

またの藏びらき、當年の惠方より御祝義まうしいれ
ますと、麻上下のみつ指も、いふにいはれぬ中指と、ゑ
つゐ樂子のくすり指、これこのゆびをこう折て、ゑ
つとゑめたるゑめ縄の、ゑめつゆるめつ、井筒の、
井筒にかけし屠蘇ふくろ、その小袋と小娘に、ほん
に油斷はならぬ坂や、この手がしはのふた茶碗、われ
てひやけてひやたけの、入間の里の里ちかき、たの
むのかりの玉章は、みよし野ならぬよし原や、色で
丸めてさござい の、くじもたふる、戀の山、富士は
おいらんつくばは新造、このちかのもは玉くしげ、
ふたりかぶろの門松の、ゑげきみかげの中の町、嘉
例の酒の二日醉、三日のけふも居つゞけの、風呂の
湯上り手ぬぐひの、絲ゆふなびくれんじ窓、水殿雲
廊別に春をおくふかき、本間ふたまのかざり夜具、
やぐら枕の床入も、おさまる時にあふみのや、かゞみ
の山をたてたれば、かねてぞみゆるかねつけ袖とめ、
とめてとまらぬ年の内に、引込かぶろいつしかに、
春の水上朧のつき出し、けに三千の粉黛も、この
廓にありそ海の、はまの眞砂はつくるとも、君か代
は〳〵、孔雀鳳凰おしきせの、天の羽衣いくかへり、

みほの松原氣ちうき島、あしたか山や巫山の雲、くもとなり雨となり、うるほふ民のまくらごと、いねの間もよろづよく、猶ゆたかなる年徳の、あきの富こそめでたけれ、

春日鮑樓詠初芝居狂歌序

大塊われにとふていはく、われ汝に形をかす事久し、目のみるべきあり、耳のきくべきあり、鼻のかくべきあり、手の舞足のふむべきあり、口はまた二役ありて、くふべくいふべし、耳目の欲にしたがひ、手足の勝手づくはしばらくをく、汝が口節あらずたゞ酒をたしむ、汝が口のりあらずたゞむだをはく、酒は量なくしてつねに亂醉に及び、むたは務を廢して自暴自棄にちかし、汝を天地のむだものといふ如何々々、四方山人さかづきをあげ青天を望ていはく、われ寧きん／＼として大通のごとくならんや、はた默々として野暮のごとくならんや、むしろ黑鴨をつれて五侯の門に入らんや、はた白眼にして世上の人を見下さんや、寧ふかき山に小路がくれをせんや、はた水草きよき所に岡釣をせんや、むしろ茶ににじり上らんや、はた香に鼻をひこつかせんや、むしろ碁將棊にひまをつぶさんや、はた十露盤を枕とせんや、むしろ絲竹を友とせんや、はた書畫を愛せんや、むしろ螢と雪とをあつめて、萬卷の書をよみ破らんや、はた詩と文とをつくりて、千秋の業にほこらんや、むしろ高間が原に神いぢりをし、拍手のおとをきこしめせと申さんや、はた鷲の山の佛くさく、經論に目をさらさんや、むしろ老莊の徒たらんや、はた醫卜の道にかくれんや、富貴天にあり、はしごのとゞく所にあらず、窮達命あり、耳たぶをさぐるのみ、大塊われをわらふ事なかれ、これも同じく役者にて、もろこしの康熙帝でたのみやす、そこらの仕出しはあめつちの大芝居の帳元さん、それ日月の鼠木戸、ひとよあくればにぎやかに、風雷のやぐら太鼓、はじめて聲を發せしより、百千鳥のとひよ／＼、梅と柳の引道具、はるのはじめの初芝居、その時を得たる哉／＼、いさ大入の盃をかたふけて、例のことばの花道につらね、造化のおおいき、給へ、大塊默していらへなし、人をしてその心をのべしむ、そのことばにいはく、

顏みせが周の春なら正月は

初芝居かの時をおこなへ

春日泉亭詠雑煮餅狂歌序

しのはずの池の氷、風やゝわたり、廣小路の鉢の梅、雪なをのこれる比、あつまのひえの山を、はつかばかりかさねてむゆかといへるむつきの末、あけら館のあるじの門にあそべる人ら、うしのつねにかきすさめる、の丶字なすまとゐせんとて、これかれけいめいす、ことしはひのえのわらは、竹むまにのれる年なめりと、人々つゝしみおそりしが、はたして春日野のとぶ火にはあらで、もるてふ水の手あやまちより、市人のかりずまゐも、野寺がいほの心地し侍りて、いまいくかありてざれことといひてんなど、いひしらふもほゐなし、さばれむさしのゝひろき殿つくり、みつはよつはのみどりにかへり、つくは山のしげきいとなみ、このもかのものかげたのもしく、日あらずしてもとのごとくならんと、ついとりたつるむろほぎに、いはふことばのいづみやてふたかどのをかり、野中の清水むすび置し、もとの心うしなはじと、入来る人々中々ところせうなん、そもそもとしのはじめのことぶきは、すでにまうしおさめつ、なをはたもれたるまらうとやあると、日をすぎはしのとりあへず、雑煮もちといふをもて題とす、もとよりもろ人の心を大根として、よろづのことばのなのはともなれゝば、里いもの中をもやはらげ、やきとうふのくしのたけき心をもなぐさめ、目にみへぬ鬼神に、青こぶとられんもはかるべからずと、匂ひすくなき花かつを、そのひとふしの連中の、むしろの末にもあみつらねてよ、

いもか子の髪の毛ほとな青昆布に
つなぐ禮者の大ざうにもち

栗花集序

年ごろ栗のもとにたすゝみて、落くりのみあつめきゝあつめたる、みゝづくのかたちをつかねたれば、そのまゝ栗花集と名づく、みる人さゝげの花のみじかきをみて、この花の長きをいとふ事なかれ、

茶杓記　石原氏に代りて作れり

いにし寛延己巳の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわかちて庭にうへ置しに、志賀のうら浪たちかへり、としどし春のながめたへせず、ことしいさゝかその下枝をきりて、茶杓となし、人のもとにおくるとて、

そのよし箱のふたにかきつく、猗一爐の清風をそへて、百花の餘香にあかんとなり、

隣家におくれることば

むかひ三間雨となりとは、ふるくよりいひならはせど、將棊のこまの銀將のごとく、うしろをおるすにしたるもおかし、小家がちなる夕がほの宿に、きた殿と聲をかけたる、もし日あたりのよき家ならば、きはめてうしろ隣にもやあらん、かならず隣ありとの給ひし孔子を、東家の久兵衞と覺しかたくなものはいざしらず、隣の鷄をかりにやりしは、微生高が一生の名おれにして、隣のちやぼをぬすむなとは、孟子のよき譬なり、またその孟子のおふくろは、隣ゑらみのむづかしやにて、たび／＼豆いりをくばり、子どもあそびの土なぶりに、石ころでかひ物しても、浮世小路の店をかへられ、まして寺町門前地をきらへば、淺草谷中の住居はなりがたからん、宋玉が東隣のあねさまへは、楚國一番のだてしやとしり、喜撰がわが庵は小野小町が隣にみゆ、美濃と近江のね物がたりは、木曾道中にかくれなく、隣の寶をかぞふるがごとしとは、童子敎にもしるせり、隣の糂粏はわが内の澤庵漬よりこのもしく、隣ならずの牡丹もちは、春慶ぬりの重箱におどろく、隣のばあさま茶をまいつたとは、どうまいつたこうまいつたの口拍子にして、何の意義なく、隣の疝氣を頭痛にやむは、僭上なる事ながら、いさかひ同士の軒ならびより、まだ深切なる方にやあらん、われらもとより猫の額ほどの地にすめば、馬の屁をかぐ長屋住居にもあらず、くらやみからひく牛ごみのほとり、東南にちまたあれば、この二方に隣なし、北には姉弟はた甥など家ゐしおれば、他人のはじめの隣ともいひがたし、たゞ西隣のあるじのみ、まことの隣といふべくして、したしき中の垣ねより、一もとの柳さし出たるは、彭澤か五もとにもまさりたるに、この比いとよりかくる春霜の、とけかゝりたるほころびくちいはんかたなし、ひと日隣のあるじ、木こりに命じて枝をすかさしむ、あるじのいふ、この木はわがくりやのかたにあれば、みはやすべきかたにあらず、たゞ隣をおもにつくるべしとて、はたそのもとに桃をうへしむ、木こりなぞといへば、たゞうへよ、花さきなん時、隣のすのこにゐりうたげて、酒くまゝしなどざ

れたるいと輿あり、とをき三千年はいさしらず、まづさしあたりて此はるのながめなり、網船に棹さゝずして桃源の洞にいり、夜船にのらずして伏見の里に旅ねすべく、物いはぬ桃もことゝひかはす風情ありて、ねふたき柳のよきはなしあいてをえたりといふべし、長嘯子がぬすみてうへしは、あくる日のわびこともむつかしく、杜子美が樹木の進物は、むしくひもまじりなん、われはたゞ夭々たるをまち、灼灼たるを愛す、蓁々たる葉を行水にむしり、蕡たるその實に長竿を出す、所存は青柳のいとかけて、毛桃の毛頭あらじといふ、

三年になるてふ桃を垣こしの
はなの先にもみるぞうれしき

春日唐衣橘洲初會狂歌序

けふなんくれ竹のよつやの里に、から衣きつゝなれにし友かきをつとへ、軒端の杉の丸太をしるしに、大三輪の酒たうべよなといひおこせ給ひしに、この比日でりうちつゞきて、すぐなる柳のいやな風にのみなびき、ものうきわらびのちりほこりたちまされば、水のとばしり池のいろくずにをよび、火あやうしの夜行わり竹のふしどにひゞきしを、このひと日ふた日春雨そほふりて、もろ人の心もやうやくおちゐ侍しかば、いさやされ歌の会にまかりて、むすべる口をひらきてんと思ひしに、よべよりわらはのねちの心地し侍りて、はだえもかのこまだらに、時しらぬ山をあげ侍りしは、世におこなはるゝもがさにてもやあらめと、ちかきわたりくすしのがりゆきてとひ侍りしに、とくきたりみて、さなりされどずんよるめり、なひやしそなどせいするに、日比は四方の人にまじはりて、こたび門をも過てしかど、かのなにがしがいひけん、その子のはゝもわれをまちてとかうやしないきこゆるものから、けふのまとゐにはづれぬる事の、よにどころなき思ひをいばへて、過し折からうけがひ物せしことばのせめを、ふたぐといふ事しかり、

初雛賦

門びらきの御祝儀すみ、眞綿のつむのもてあそびもの所せく、桃のやう／＼咲そむる比、このこゝにとつぐへぎ、ひいなあそびの調度もとめんと、十軒店の二階に雲の上の雲をつかみ、麹町の室咲につ

くり花の花をかざらんと、鶏合のあどりときをす丶むれば、潮干のひかぬて丶親の心こそおかしけれ、内裏雛の袖はかけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顔はたまごに目はなつけたらんがごとし。紙ひいなの雨ふりに腰はた丶ずと、てる〳〵法師のかたちにて事たりなんを、今は古今の雛の装束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの桃華蘂葉に、一條禪閤のお肝をつぶさせ、ふらそこの壺井も義知ぎもと爪をくはふべし、小人形の寸は箱のふたにあらはれ、男ともみへ女ともみはやすべきかたにはあらぬが、長たぶの首うちかたふけ、足のうらより竹釘をうちつけられたるもいた〳〵し、からくりこそ猶おかしけれ、綿やの窓に弓うつ音の心地し侍りて、唐子の雪をまろばし、亂局の獅子をまはすも、みなひとつひゞきなるよ、されどこれらはみな古代にして、石女のはり箱の上にはげたる蝶足の膳をすへられ、見たふしのふる 道具屋にみて つけの 日切をやなげくらん、近比はやしかたといへるものいできて、 きりかぶろのせんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つ丶み巨おほつ丶み、大こ地謠までひとつをかきては事たらぬ心地ぞする、はだか人形ははらかけに美をつくし、六尺の手まはりは鉢卷に氣をつけたり、まして調度はのり物外居のみにかぎらず、みづし黒棚は東山殿の床かざりをあざむき、簞笥長持は座敷持の二間かとうたがふ、一双の屛風は柳櫻をこきませ、式正の本膳にあさつき鱠はまぐりもおかし、毛氈玄き幕うち廻し、落雁の鯛彩折のはせ、草もちのひし、豆ゐりの霰、山川白酒は豊島屋矢野をかたふけ、饅頭干菓子は鈴木金澤をつくす、か丶れば紫清少が筆すさみはしらず、加田粟島の故實は猶さらうと〳〵しけれど、世におのこゞもちてのぼりいかめしげにたてならべても、柏もちちまきのかはをむくもうるさく、干鰒かさごの齒にはさまらんより、先何事もさし置てくひもの丶多きこそ、こよなうにぎはしき節句なれ、

樟腦の匂ひもまだき箱人の
　むすめのことしけふが初雛

初幟銘

鯉かせをふくみて、魚木にのぼり、劍さやを出て、鬼地をはしる、あがりかぶとの金箔は、延喜式の倹

約をつたへ、あさかの沼の花がつみは、中將殿の歌枕にして、比はさつきの初のぼり、紋のあやめもあざやかに、月ののぼりのごとく、日ののぼりのごとく、終南山の進士のごとく、柏もちのはのしげきがごとく、菖蒲刀のはかけずくずれず、猶竿竹の直なる道をたてゝ、つけたるちゝをはづかしむる事なかれといふ、

初瓜頌

二月中旬の青籠は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと和歌にもよめり、曲禮は六かは半にむき、兒手柏はふたえにつゝむ、かの青門の五色にまされる、さかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子瓜は、四谷の馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目にみへぬ鬼をえてやる、うまいかな甜瓜、其仁にしかんやなかご

わらはべもくはまくはうりめづらしと
雨手にもちてころびうつ也

初鮭傳

はらゝごのしやうじ年魚、その先東海の人なり、文治の比源廷尉きぐるみ王にしたがひ、奥州高館の亂を遁てゑみしに入る、よりて名を變じてさけといふ、いしかりの川邊にすみ、いちごといへる妻をめとりて子をうむ、名つけてはらゝ五郎といふ、源順が和名に、その子いちごに似たりといへるはこの故なり、年魚その顔の色きはめて赤し、人呼て赤光と異名す、性急にして、進む事ありて退く事なし、その年の秋にいたりて百千隊をなし、士卒をひきいていしかりの川にのぼる、一尺の劔をふるつて鎌倉を襲んとす、佐々木三郎盛綱討手にむかひ、そのはた頭堤割四郎なるものをうちとり、首を折敷にすゑ、小刀を相副へ幕府に獻ず、幕府御感のあまり御自筆を染られ、一首の歌を詠じ給ふ、時に建久元年十月十三日なり、事は東鑑にみえたり、年魚たゝかひ利あらずといへども、その太刀風にあたれるもの、三年のふる疵起りて、ことごとく死せしとかや、その時常陸下總の人、はじめて年魚が猶ある事をしり、はつざけはつざけともてはやせり、或はいはくひたち坊海鱒なりと、又貝原翁の說には、鮭にあらず、鱒なりなど異說まちまちなり、年魚時のいたらず、月の迫れるをしり、鹽引に引しりぞき、越後の國山川のしへにかくると

いふ、あるいはいはく長門なりと、
大酒公いはく、われかつて南嶺子にきけり、あるひと病中に河豚をくはんと欲して醫生にとふ、その書簡に河豚の正字をかきて鮭とす、醫生本草をしらずして、鮭の性はよろしきものなりといふ、病る人河豚を食て死すと、此說はなはだ非なり、河豚もと鮭にあらず、これなん莠の苗をみだる多田民が臆說なるべし

初霜解

初霜〳〵をきやすく、またとけやすし、柱あれともふとしからず、花あれどもしぼむにはやし、雨冠に相の字をかきしは、雨と雪との相のもの歟、もとの露末の雫の順にあたらば、さしづめしもの訓なるべし、それ青女いたりて時を感じ、君子ふみてなき人を思ふ、軒の妻さへしろ〳〵と、あらたに薄化粧したる橋の、ゆきけた所まだらにふたつみつよつ足跡の殘りたる、月おち烏なき、もみぢ橋の船のねざめ、しら菊の花の心あてちがひも、いつしか師走女の霜やけとなりて、つゐに手水鉢のかたき氷にもいたりなん、青柳の絲よりかくる春にもなれば、百たらぬ八十あまり八の夜のわかれをそなげくらん、星と霜とのうつりかはるは、たれもしりたる事なから、しらす明鏡のうち、かしらに霜のをきそむるこそ、ふたゝびとけしなきうらみなれ、

臍穴守禪師におくることは

もろこし青州に臍縣あり、わが近江には臍村あり、天竺にては黃金のはだえに、臍くり金をたむるとかや、そも〳〵四支九竅の必用を考え、この一物の不用をなげくゝ事は、自墮落先生の臍人の說、也有翁の臍の頌に事ふりにたれど、名におふ臍の穴守禪師、臍下に心を落つけて、口から出臍の文をこふ、よりてすぼしりの臍のなまくさきをいとはず、臍かはらけのさしも草、たゞたのまれし口ふさげに、いさゝか臍の垢をひねるにこそ、

ざれことにお臍の笑ふ聲きけば
　あななき笛の心地こそすれ

吉田李園翁を祝することは

おほよそ忠臣は、孝子の門にもとむとかいへれど、忠孝ふたつながらまたくする事かたしとなん、こゝろ見にみよ、たらちねの病をみるとて斷をたつれば、

君のとのゐに人だのみをし、遠き先觸の問屋場に、具足櫃のゑふをかゝやかせば、ちかき日の前のおふくろの佛間の氣をやすむる事なし、こゝに李園先生の父君、ものゝふのまねふべきわざをとりて、何がしの國の守につかへ給ひしが、遲々としてさるわけありて、そのゝちなくなり給ひしより、今の李園君にいたるまで、三十あまり八とせ、松柏のみさほを守り箕裘の業をつき、梓弓やなきのはを百歩の外にうがち、かつ色みするやり梅の一枝をかざしとして、つるきたちはき庭のけいこ場に、やつとう〳〵の家聲をおとさず、ことし天明六とせ、ふたゝひ錦をきさらきの比、もとのことくめしかへされ給ひしは、まことに忠をかね孝をそなへて、二なきものゝふの鑑なるへし、やつかれすてに先生をしり、また其子をしれり、其子よくその道をつたへて、かたはらされ歌をこのむ、よりていさゝか、たゝえごとをのべてその子にしめす、猶おやのおやのふみわけ給ひし道筋をたがへず、子の子の末をみちびける先達に、たち給へかしといふ事しかり、

たちかへり李の園の花みれは
　もゝの禄まで其中にあり

邊越方人をいたむることは

方人方人、むかしは日のもとのはしのほとりに、朝市の利をあらそひ、今はつき地のおきつきところに長夜の夢をむすぶ、その世にあるや親につかへ、妹をめぐみ、その藝にあそぶや、詩をならべざれ歌をたしむ、その志をたつるや、あき人のよきゝぬきん事をはだ、その家をおさむるや、小鮮をにるがごとし、われかつてみづからあやまてり、なれまのあたりいさめてかくさず、われかつて人にそしらる、なれあなどりをふせぎていれず、たとへばくしの子路を得て、さがこと耳に入らざるがごとし、今や時うつり事さりて、春もまた半を過ぬ、これに告んとすれば、其人花に先だちてちり、これにまみへんとすれは、其影鳥のかけるがごとし、いたれるかなしみは文なし、つかみしかなる筆をとめぬ、いにしへよりみな死あり、ひとり西の方人のみならんや、例の友とち例のされ歌、外には何も手向なし、みたまそれしる事あらば、こひねがはくはうけよといふ、天明七のとし二月廿六日

百喜齋記

すみた川を前に、まつち山をしりへに、かさゝきのわたせる橋にはあらぬ、今戸といへるはしのほとり、うれしの森のよろこびからす、もゝのよろこびを告る菴あり、かのあつまぶりにうたふめる、のびあがらねみえぬてふ、何かしの鳥居もみわたされ、高瀬の高きいかだの長き、舟やかたのちりを動せるは、みすぢの絲のゆりにして、ふするの牙のはやき小舟は、さんやわたりの里ちかきゆへなるべし、春は角くむ牛島のあしの若葉、波こゆる洲の上に、はしとあしの赤きとりのつゐ居たる、すたのつゝみの川ぞひ柳、やゝしけりゆく夏の日の長きなかめに、薫風微涼を生しては、玉樓金殿の高きをもうらやます、鷗の玉章堀にわたり、白髭秋葉の黄ばみ落て、冬がれの炭がまならぬ、瓦やの烟のかすかにたな引たるは、小野のけしきに思ひたぐへ、あづま橋の横おりふせるは、うちのわたりにも似かよひて、とりあつめたる所のさま、もゝの目をよろこばしめざる事なし、あるしは淺草の根ざし深くおさめし、よきあき人のみくらまちのほとりに生ひたち、みさふらひみかさにはあらぬ三の時の、よね給ふ事をつかさどれば、その身は市にありながら、おほやけの事にかゝづらひありくもいたつがはしと、ことし竹の子にゆづり松のはをかくまでも、浮世の外の路次口に茶事をのみたしみ、まらうとあればあるじまうけして、大空をおほふばかりの廣きふとね、大きなるふすまつくりてんといひし、むかしの人にもはぢざれば、あるじのひとりよろこぶのみならず、またもゝの人のよろこびならずや、

春夜伯樂宴集序

それてんちは萬物の宿屋なり、光陰はもゝとせの同行なり、しかうしてきちんは闇のことし、ねがへりをうつ事いくばくぞや、古人燭をとりてはたごにす、まことに故あり、いはんや一樽われにすゝむるに、瀧水をもつてし、大會われにかすに、筆硯を以てす、伯樂のむまぶねに遊びて、千里のこまごとをはく、今夜の秀逸はみな曉月房たり、われらが詠歌はひとり補陀洛にはづ、兼題いまだよめず、探題すでにいづ、樺燒をさいて花に座し、夕かしを呼て月にゑふ、もし狂歌のつ批判あらずんば何ぞ勝負をわかたん、

がひならずんば、ばちは角力の太鼓にあたらん、
春駒のいさむ心をたねとして
よろづの言のはく樂となる
宿屋飯盛
歌よみは下手こそよけれあめつちの
動きいだしてたまるものかは

よものあか下終

四方の留粕

序

此あかは吾酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸し酒ぞ、うまらにをせさゝさゝをせ〳〵と流行唄に浮れたりし、安永のむかし、はじめてこちけいの口をひらきて、狂や〳〵好むたはれ人にすゝめ、手酔あしゐひ醉くるはせ、一筋の路を志るべに踏せしより、千鳥あしの跡久しくとゞまり、今も昔に仁寶鳥の、かつしか早稲のうま口なる、うしの新醸もがなと、ふみのはやしの杉を志るしに、たづね來る人日々に絶す、げに戯もんざうは年月にさまかわりて、あらたなるをおかしと思ふ習ひなれば、何とかやの酒の十とせをへてそこねざるも、口なれたるはめづらしからず、然りとて酒つくる才なき人の、志ぼり出したるは、新しきも味ひなし、かくては何をちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき、瓶のつくるは罍の耻とか、いざたまへよきあか乞にと、書屋とゝもにうしのみもとに參りて、此殿の奥の酒屋のうはたまり。あはれ中爵をだにとこひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう醭くさきものながら、幸ひに接骨くすしの泥鏝にもかゝらず、漬物店の桶にも入らずて、爰に留粕のとまりて久しきが、さすがに人醉はすへき所なんある、かの劉伶が寢むしろに敷、億良の太夫の糟酒にあたゝめけんやうに、からの大和のねごといひ出すたねともなるべくは、その志るをすゝり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと投あたへ給へりしを、やがて寧樂の櫻木にゐらせて、糟塔のかけず崩れず、幾人々と南穪館のあるじとともに、醉くるはすもまづ粕の匂に醉るなるべし。

四方歌垣眞顏（印）

文政二年己卯正月吉日

目次

上

狂歌新玉集序
狂歌千里同風序
鶴樓狂歌會序
歳旦手鑑序
めでた百首夷歌序
太平樂卷物序
江戸花海老序
仙術影畫はりこの虎の卷序
飛花落葉序
現金論序
唐來參和戯作の序
金銀開運笑益內傳序
通言無茶摘序
和漢同詠衆序
續百鬼夜行序
百鬼夜狂集序
野夫鑑序
纖華集序
牛天神集會序
狂歌すまひ草序
職人部類序
江都二色序
送直頂旅行詞
幼戯の圖の序
鶉衣序
五葉松序
馬蘭亭舊友尺牘帖後序
筆はじめ
吉書初
鶯笛といふ笑話の序
山東京傳畫美人合序
八月十五夜簾中の月をめづる言葉
續阿多福面
狂歌の反古あつめたるものゝ跋

目次

下

春の遊びの記
狂歌堂に判者をゆづる言葉
二水樓の記
角田川に三船をうかぶる記
此君盃の記
談洲樓記
里の花燈籠の記
岡目八目 草雙紙の評判記也
狸の圖贊
猩々の贊
織物の贊
蛙の贊
七拳圖式
新酒頌
風流狂歌盃報條
土佐麁衣報條
壁書
三谷傳來吉原細見說
悼大飯食人祭文
ひとりごと
五十初度賀戯文

狂歌三體傳授跋
長櫃序
旅日記のはしがき
謎の言葉
鬼念佛賛
十三夜十三體
謠武藏野
開帳場緣起
錢湯張紙
御祭禮番附
請狀
中空祓
巴人集後序

四方の留粕上

狂歌新玉集序

久かたのあめ、輕口をひらき、あらかねのつち、をも口をむすびしよりこのかた、神代のむかし、あまのうすめのちぶさには、猿田彦もたなうらをうち、月のみくに、何がし尊者の花には、くどにも微笑をゆるし給へりき、されぱきりんに感せし翁も、時ありと笑ひ、胡蝶となりししれものも、笑を大方にとらん事をはづ、青樓の春の風に、ちゝのこがねの笑をかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友をしのぶなど、いづれかわらひのたねならざる、わきて新玉のとしたちかへるあしたには、山もゑめるがごとしとかや、花になく鳥追も、笑上戸の盃をあげ、ちまたにうたふ萬歳も、したつゞみをなんうちそへける、や丶春ふかくゑみをふくむにいたりては、柳はみどりのまゆをひらき、梅はしろきはもとをあらはす、はるの詠めのくさ〴〵の歌、ざれたることたはれたるふりをのみかいつらねたるしりに、ふるとしのくれのしまひのをかしき笑ひの中に、つるぎたちはかせもちをうしなへるがごとく、もの丶ふの道もかけこひにはたられし世のいとなみのたゞことまで、つゆしるしてひとまきとし、名づけて新玉狂歌集といふ、かくおとがひをときぬれば、飛鳥川のふちはせ丶らわらふとも、さゞれ石のいはほとなりて、こけたふる丶ほど、うま人のうまきわらひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬわれらまで、この時にうまれあへるをよろこび、弓は袋に笑ひ、書はひつにをさまれる代に、腹皷うち、のどけきあしたに御茶をわかして、わらはざらめや、たのしまざらめや、

狂歌千里同風序

改年の御慶千里同風、いづかたも同じ御事にいはゐおさむる中にも、たはれ歌の道なかに、さごされされとよびあつめたる飴寶引の、いと口きれぬざれことゞも、みな櫻飴の色をふくみ、こと〴〵く分銅の玉をみがく、智恵の袋のよねは八斗の才藏をあさむき、言葉の泉の盃は、百千の鳥追をまねふ、みやことなくひなとなく、たくみなるもつたなきも、手鞠の

歌の數あげてかぞへかたく、針うちの紙のあたへ、これがためにたふとし、木でもかねでも俗耳の耳かきにあたり、鼓と吹ものと詩腸のばら合によろし、これなむ長閑き御代をうたひものせる、擊壤の歌のはつねならんと、鶯笛のひとく〳〵、羽子のこのとをはたみそじあまり、若草のところまだらにかいつけぬれば、かへる雁の跡なが先なも侍らんかし、

龜樓狂歌會序

そもあめつちは、萬物の大芝居にして、光陰は百とせの居つゞけ客なり、はつ日の鼠木戸、留場のとめてとゞまらず、狂歌の大門口、會所の會たゆる事なし、けふなむ壺屋の淡雪きへ、袖の梅のかをふくみ春風のふく山三階のたかどのにみち、言葉の惣花內證のはり札にひらく、呑つゞみの大鼓について前へ〳〵とすゝみ、され歌の諸君このところへ出て遊ぶ御老人樣しづかに跡よりいたれば、御町中樣ますます御機嫌よく、武士も長道具をわすれ、醫者の外乘物をもちひず、張子のお馬お駕籠でこす、名におふかり橋三曲にまがる、すみだ川のむかふの人〳〵、龜やに入〳〵こんな〳〵うきゝのかめや、うどんげのたいめんは、今日が初日にして、むれつゝきのじの題詠は、年中月次の紋日、廿日頃よりみせをひくまで、入りくる〳〵大入の會、くどう〳〵も此會に、おや馬鹿らしうおさゞらめや。

歲旦年鑑序

たはれ歌は人の笑ふをのみたねとせしが、いつしかみのあるやうにそなれりける、こゝに京町かば茶の元成、ふかく此道をたしみて、すり鉢をかく鶯、なかしのしたの蛙まで、いづれかむだをいはざりける、さればゑんりよも內證の客、ゐろりの枝ずみ折〳〵にたえず、けふなむ智恵も淺草の、市にたつたるおすがたの、おかしきふりのすき人ら、まがきのもとの木あみを、室咲の梅の花棒として、手桶のたがのわれも〳〵と、おみきの口々よみ出せるさま、俳諧にあらず詩にあらず、唐土のとりと日本づゝみわたらぬ先の春がすみ、其たちうりのなかごもよく、とうなすのとをはたゝくそ、よそ〳〵しうかいつくることゝはなりぬ、

めでた百首夷歌序

抑めでたいと申は、天竺にてもはじまらず、大唐に

てもはじまらず、我日本の夷三郎、めでたいつりの絲より鯛、此めでたいを釣上しより、めでたい事のかゞみ鯛、末の代までも引出す、延喜の御代のひだひ箱も、ふたあけて見ぬ京物語、今や四つの海波靜にして、沖釣のめでたいかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり、されば弓は袋棚の上にすゝけ、お太刀はさやがたの小袖にまとはれ、よろひかぶとは笑道具となり、鐵砲は樂ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、もちはもちやに、たけき親分も太平樂をならべあやしの百性も萬歲をとなへて、誠にめでたう候ひけるとは、今この時をや申へき、かゝるめでたき御代なれば、かの唐土の何がしが、何でもかでもよし〳〵といひし跡をふむとはなくて、よるもひるもめでたい〳〵といふ事を口癖にして、めでた男と名たゝる人あり、われもまためでたい事をほり川の、流のまゝによみ出せし、めでた百首のたはれ歌を、めでた男にしめさんとて、覺へずひとり笑ふ門に、今福といふ書林の來りて、春待花の櫻鯛、あまだひのあまねくつたへ、たいいしのいはほともなるとほねの、なみ〳〵ならぬめでたい中のたいのあらを、三ツ道具のすきものとゝもにせんといふに、まづ手をうつておきつたひ、いく千代かけしかけだひの、尾めでたいとも見給へかし、

太平樂卷物序

天竺の婆羅門組は、偏袒右肩の片はだぬいで、せんだまどろぎや何んの事だと張込ば、もろこし燕趙ひかぬ氣の俠者は、ちんふりかくさく、ちんないらうしや、ぐわん〳〵でけつかれとほざく、わが日本は柔和理と、あなにへやのうま事から、二柱の親指が國々の小ゆびをうみ給ひしより、二千年來おみこしをすへた蒼生、唐天竺にけちりんほども、ひけをとらぬ太平樂、其太平の御代につれて、此頃はやる狂歌師の、とつと昔のお師匠さん、曉月房が酒百首に、辭てのち太刀ぬく人は酒の人、太平樂をまふかとぞ見るといふ句があるが、太刀をぬくだけまだ野夫だよ、拔べき處をぬかりんと、ぬかぬ太刀の高名は、虛はないてふ本所の親分、相生町のはへぬきの桃栗山人、太平樂の一卷に、ちよと兩國のはしづめまで、出てもらはふと岸懸られて、かた山の手も足もない、

よもやに懸る巻のはしに、是がじよさいの序の字でも、ないじやア〳〵〳〵ないか

江戸花海老序

めでた〳〵の若松さまよ、枝も榮へて葉もしげる、その千代の子の目出たき顔見世、名もあらためて海老藏とゝ尾ひれをふつてふりしきる、時雨のあめの晴間もまたで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋をとひはべりしに、あるじは盃とりあへず、折からのにひ酒みさかなに何よけんと、あつ蕎麥のあつきもてなしにて、天地一大戲場の外に、又四疊半日の閑を得たり、いでや贔負の腕をこく、吾黨の連中のはなしの種ともなれかしと、此たびおくれる狂歌うけとり、白筆をとつて梓(あづさ)にちりばめ、世に傳ふる事左の如し、

仙術影畫はりこの虎の巻序

抑仙術影人形は、人の目玉をくらま山、まつくらやみから牛若丸、鬼一法眼の弟子となり、ちよ〳〵らをもつて娘をあやなし、得給ふ所の虎の巻、新かげ流のかげ人形、一子相傳の祕書として、おそばさらずの影辨慶にさづく、其後辨慶衣川にて、立往生のかげ法師、水にうつれる姿をみて、なんだら法師の柿のたねと、とつかへこうと鳥がなく、あづまの方の去御屋敷にて、此書をもとめ得たり、夫影の數さま〳〵にして、かげまかげみせかげ芝居、かげはりかげぜんかげひなた、月影日影花のかげ、松かげ帆影柳かげ、山かげ木かげみかげ石、鳥かげとかげかげの病、歲旦帳に初日影、勘當帳はわかげの至り、おかげでぬけた伊勢參、七尺去て師匠のかげ、人ごといへばかげがさす、形にかげの廻燈籠、まはつて來たは〳〵、親もかげとき子もかげ季、かげ淸かげ政勘解由左衛門、湯かげん火かげん匕かげん、かげの奉公かげ這入、芝から神田のかげ祭、七ツのかげの將門が、鬼かげといふ名馬にうち乘、木の下影を宿として、物かげくまなくさがしても、こんなかげ畫が唐にもあろか、日本一のかげ勝團子、ひとつ御覺なされても、月待日待庚申待、御人影のすたらぬあそび、見るかげもないかげとは違ひ、ちつともおかげのない商賣と、思ひつくばの山うりが、煮げきかげ畫の長口上、おたち合の御方御用はござりませぬか、

右に顯すかげ人形は、ずつと口もとの處にして、初學

のいろはに本屋の望み、此外かげ角力の四十八手、相馬の將門七ヶ條の傳、日待の夜食の夕さりあるいて、どじよふみならふ鷺の足どり、今きりかけたは兄さんか、あぶ内々のお縫が秘說等は、予が家の奥秘なれば、猥に他見をゆるさず、御執心の御方は、來つて口傳を請給へ、處は鐵砲町の百丁目、あいた口から出格子にて、おや〳〵どう四郎が隣、とんだや萬八が筋向ふ、雪隱がくさい店ちんが高ひ、弟子入が五百疋、盆暮が千疋宛、暑寒はお心待しだひ、秘傳のゆるしは七兩貳分、壹分自慢の座敷藝、八人げいの目のあく法もあれ、八天狗の鼻をそぐとも、是が出來たらしてごろうじろ、打身くぢきかこて療治、けがの基と笑はゞ笑へ、飽までくらひ煖に着る、うへつ方の御目覺し、お子さま方のはらつこなし、これをするも猶己にまさらん、

飛花落葉序

春の朝、中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋の夕正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原のつゆをあはれむ、こゝにどこのか風來山人、一文紙鳶の絲きれしより、かきおかれたる狂言綺語、讃佛ならぬ六部集など、すでに書林の櫻木にゝほひて、茶屋にことはる紙花のごとし、たゞ相對の紙花は、風前の塵とひとしく、根なし草の根に歸らず、廊下座敷の箒にはかれて、終に砂利場のすきかへしとならむ事をかなしみて、千早振かみ屑を、くれ竹のよくひろひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは音にきく、耳搔寮の腰張の張交とはなしぬ。

現金論序

いにしへ穴の中にすまゐ、恙の用心計りして、酒薦一枚もたぬ世はいざしらず、其後吳服の二女、唐の請人人主にて、日本の飯につきしより以來、開帳で見た十二一重、雛さまの裝束はいともかしこく、麻上下の巍々たる、黑仕立のきん〳〵たる、衿裕の身柱もとから、裾はきの跟にいたるまで、其情をのべその穴をさがして、百馬があらはす一狐の腋、誠に千金かけ直なし、正札付といひつべし、嗚呼天人の羽衣も、青樓の跡着にしかず、吳綾蜀錦も三ヶの津の貨物にしかずと、むかしの人の麁綺羅を忍び、今の通の見え坊を歎じ、かけ硯の向ふから聊筆を染くの

み、

唐來參和戯作の序

夫支那の地まはりは、漢に遊女ありとうたひ、天竺の貝多羅は、街賣女色とかきのめす、わか日本のふたばしらは、床柱にもより給はず、蒼海原の青傘に蒴黄さなだの紐といて、出合のひとつ穴にえやと、天神七代御代參、地色ばかりをかせぎ給へは、人の代となりて、伊勢源氏の物語にも、ゆびきり髪切のまことなく、二條の后若紫も、おいらんの意氣地心もとなし、今や京の女郎に江戸のはりをもたせ、長崎の衣裝をきせて、大坂の揚屋で遊ぶ自由自在の樂を得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山に、むすび卯子の四角な文字を、唐來參話といへる中位なる色男、あらゆる贅にかきねの外、ぶらりとさがる瓢箪で、鯰をおさへた大あたりは、憺成ものから我等請人にたつものならし、

金銀開運箊篕內傳序

謹て管から天ぢよくを窺ふに、雲井の菊を天つ星とあやまち、老父の顏を梅星かとうたがふ、爪に出るを物着ほしとよび、軒端につるを甘星といふ、外踝星は內踝星にちかく、竿ほしは物干にかゝる、丹星は太々講中の爲に、抽揚星は遊女の迷惑星たり、津輕の分野に臘肭星、松坂こえてやつと星、是らは二十八宿の、問屋仲間にあらず、茶字の袴の星入の類なるべし、このころ星見世の書肆何某、箊篕內傳を携來て、頻に序がほしいといふ、是又金銀開運の種なるべしと、星をさすこと玄かり、

通言無茶揃序

武は戈を止るとは、蓋典舗の藏の內にして、花は三芳野人は武士とは、豈名妓の言の葉ならんや、されど長壽臺の安に居て、猪牙船の危を忘れざるも、太平の代の御子様かたに、昔のきつたりはつたりを見て、今の悠々寬々をしらしめんと、おもひつき地のそれならで、芝全交がきたへし名作、それから御覽なされよと、さしつけられてお小柄は、ありやなしやとしかいふ、

和漢同詠衆序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふときありき、この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐土にては漢通とも、梵字の阿字の夕がしを、蓼び

やしにし、文字の四角な玉子をも、ふは〳〵にしてのみかけければ、まして和國のいろはにほへと、ちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、道行和漢同詠集、からもやまとも色事の、中は丸山たゞ丸かれと、思ひそめたる筆すさみ、時代をおして考れば、凡十千萬八千年以前、わい〳〵天皇の御宇にあたれりとぞ、

續百鬼夜行序

子怪力亂神を語らずとはいふもの丶、口の下から木石の怪を夔魍魎、水の怪を龍、土の怪を墳羊とは、魯の季桓子の井戸の中から、羊を一疋堀出して、問たる時の御挨拶なり、されば中華の歷々たちの、書おける山海經を始として、搜神述靈の諸記錄とも、うそ八百の百物語、闇から出る牛に汗し、ヲヤ堂上の棟に充り、今此續編百鬼夜行も、石燕叟が繪そらごとを見て、摸捫窩の口あいたまかせに、ある事ないこと書あつめぬれば、もし箱根から先にすむ、石部金吉金かぶと、かぶりを掉って嘲るとも、たんない〳〵大事ない、ないものくはふの化物はなし、東坡が野人とはなせし如く、しばらく是を妄言せん、それ妄聽して可也、

百鬼夜狂集序

あやしきを見てあやしまざれば、左傳の化物ばなしもうそらしく、怪きを見て怪めは、六部の地獄の沙汰もまことならん、今の學者のおし事と、坊主のふしぎすきより、あやしきをあやしまず、かへりてあやしからざるをあやしむ、それ月日の眼風のいき、雲のびんづら雨のあし、海山かけてよく見れば、あめつちの間もまたひとつの化物やしきならずや、うば玉のやみの夜に、百のあやしき事をかたれば、かならず其しるしありといへるふることに本づきて、此頃たはれたるうたの友どち、鬼神をもとりひしぎつべき體に、くるへる水をうしろだてとし、富が岡のきた深川のひがし、青きともし火の油ぼりのほとり、鬼一口にわんぐらとかいへる何がしのみさうにして、物語を狂歌にかへ、其數百にみてり、もとより箱根よりこなたに野夫とばけ物なし、ないものはくひたく、こはい事はみたし、よりて奈良のさくら木にちりばめ、子どもだましのがごせにかませぬ、よむものこはきや、はたをかしきや、

野夫鑑序

穴の中に貉あり、これを得んと欲するにかたし、一人曰、貉は睡を好むものなり、試に枕一ッ酒一徳利生姜味噌一片、細引を付穴の中におろすべし、貉酒をのみとろ〳〵と、枕を引よせひとねいりする處を、かの細引にて縛る時は貉を得べしと、一人曰、これ甚迂遠し、井戸釣瓶を落せしごとく、細引に碇をつけ、穴の中をかきまはすべし、貉の目鼻か、體の中へ引かけぬ事あるまじ、とり逃しは仕方なしと、一人曰、所詮むじなは人を魅すけものなり、人間の智惠才覺にて、効を奏する事かたかるべし、其細引を綰にして、穴の口にて三味せんを引、つろな〳〵、貉をつろなとうかすときは、萬に一ッもまぐれあたり、貉を得まじきものにあらずと、按ずるに腹の中の病は、穴の中の貉にあらずや、はじめの一人後世家也、其次の羅漢は古方家なり、跡の〳〵のせんじやう、常のごとく匕加減、古方ともなく後世でもなく、せう事なしの山師の玄關、見ん脉ぴん〳〵たる時は、胸だく〳〵たる幇頭坊主のはやり醫者なり、駿河の國の富士の人あな、穴のむじなの野夫鑑、化生のものか魔生のものか、いざ立よりて御覽候へ、

纖華集序

玉くしげふたよの月は、中御門右府の保延元年の記に見へ、寬平法皇の明月無双のみことのりより起れり、菅家の十三夜の詩は、三五十八の桁違ひ、十五夜の字のあやまりにして、兼好が婁宿の説は、八月九月の間の宿、さらに本宿と定め難し、十三夜の影古に勝れりとは、法性寺關白のからうた、あけらけき御代の昔の影よりやとは、草庵集の和歌、十三夜の月花やかにと、源氏の巻に出たるは、あながちこよひの事にはあらず、たとへば五雜俎に田家のことわさをのせて、九月十三晴といふがごとし、此頃横川禪師の京華集を見れば、津の國住吉の社、此夕べ月なければ、巫祝の夜をつかさどるもの、かならず左遷せらるゝ事ありとて、齋戒沐浴する事つねに百倍すとなむ、その京華集で思出せり、九月十三夜を纖華會と名つくる事、建久二年に顯せし、眞俗交談記といへるふみに見へ侍り、きぬかつぐいもの土くれをうち、枝豆のさやけき後の月をめづるざれうたをあつめて、しきりに序をかけといふ、纖華會の名のおもし

ろければ、繼華集ともよぶべしといふ、

牛天神集會序

あら玉のやうなる日の若みこのあれませる、むつきのはじめこそ、竹に雀の百になるまで、いそぢの翁こおどりするときなれ、思へばむかし月代の容靑みたる頃は、つねきく鷄もわかわかと、二日三日のきそはじめ、抱てねのびの一丁の蠟燭、沅湘日夜東に流れて、はやくたちまちにけふなんなくて七種の、日本のとりと唐土のとりの、わたらぬ先の聲きけば、生れぬ先の心地して、みな大人の人の日なれば、かの物の部の翁のいへる、牛天神は大人なるべし、

狂歌すまひ草序

そもすまひてふことのおこりは、たはれ歌したりぶりにもれにたる、野見のすくね當麻のくゑはやにはじまり、また野かはづのなき聲よりぞ、太鼓に雨のふることゝはなりぬ、また歌合のはじまりは、亭子とやらの御亭さんにおこりハついでつゝてん天德のころ、判の詞をしるせしより、三葉よつはに富札の、六百番千五百番の出ばんずけとはなれりける、こゝにいにしへの事をも、今のことをもよみあらし、ちさとの馬もわいためつべき、名におふ市のいち人ら、おのれがえてに最手をあげ、初會のお客をうら手とし、はれとなく雨となく、小とりつかひの鳥の子の、十日のむしろをはり、四方のしるしのみつ巴、あふぎもてうちわにかへしむ、もとより西も東もしらねど、右から左いなみがたく、つたなき心の內取に、出來合の判をくはへぬ、左右のかたやの人々ら、すまひとろならくはと雄たけび、まぐれあたりの點にあへよといふ、

職人部類序

そのはじめや、觴を浮べる江の流に筆をそゝぎ、百の工のわざをうつして、梓弓つくれるものゝ子の、箕をつくるためにそなへしも、かたくなゝる丙丁童子のために奪はれ心のたくみの老壽師も今は其國の底なき人の數にさへ入ぬるを、玉くしげふたゝびうつはものをとくして、花咲春の櫻木にちりばむる事とはなりぬ、よりてそのことわりを冠師にかうぶらしめて、硯の海に棹さし侍るも、かのたくみのはじめ終りをしるし侍るものならし、

江都二色序

わちはべの玩び物を畫で老菜子と記せし圖あり、北尾氏の筆に寫し、弄籟子の狂歌を添て、一ッの草紙とはなりぬ、繪はとゝの目を悦しめ、歌はあわゝの笑ひを催す、てうち〳〵の拍子よき、はなしの鹽のゑほの目に、かゐぐり出し絲口の、いと面白き筆を見て、硯の海の鱗形が、よき繪ざうしの種なりと、思ふ心の花にかけて、兒櫻木にゑる物ならし、明和十年睦月のころ、四方のあか人、飲懸山の麓に記、

送眞顔旅行詞

むかし丁寛とかやいへるもの、田何に従ふて易をうく、其東にかへるにのぞみて、易すでに東すと田何はいへり、今狂歌堂のあるじ鹿津部眞顔、たはれたる業すでになりて、四方の春秋に遊んとす、これなむ狂歌東西南北すともいふべし、

幼戯の圖の序

おほぢうばの物がたりは、虎關禪師の異制庭訓にゑるし、ねずみのよめいり猿のむことりとは、羅山文集のことばにも見えたるをや、かのみちとせになるてふ花の、名のみこと〴〵しういひけたれたる何がし太郎が物がたりは、うなひ子あげまきのかしらさしつどへて、かたりつぎいひつぎつゝ、めに見ぬをにのすめる國の、たからもとぬしことくさは、ゑらきの國の旁色とかやが、こがねのつちのふることも、うち出つべし、なべてかうやうのはかなきことわざも、今様はむけにいやしくのみなりもてゆけば、うつしゑにものして、ゑろきをのちのいましめともなせりけんぞ、いとかしこき、

鶉衣序

いにしへ安永のはじめ、すみだ川のほとり長樂精舍に遊びて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、あまりに面白ければ寫しかへりはべりき、夫より山鳥の尾張の國の人にあふごとに、此事うち出てとひはべりければ、金森桂五うさぎの裘(がにごろも)にはあらぬ、鶉衣といへるもの二まきをもてきて見せ給へり、翁なくなりぬときゝて、なを馬相如が書殘せるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸天野布川に託して、其門人紀六林の寫しおける全本を送れり、卷返し見はべるに、からにしきたゞまくをしく、頓に梓のたくみに命して是を世上にはれぎぬとす、翁の文におけるや、錦をきてうはおそひし、けたなる袖をまどかに

なして、よく人の心を寫し、よく方の外に遊べり、鶉衣の百むすびとは、みづからいへることのはにして、くつねのかはのちゃのこがねにあたらさらめや、右のたもとのみじかき筆はなへたるもはづかしけれと、たゞにやはと、けにもはなにもかいつけ侍りぬ、

五葉松序

二葉の松の色ようて、三つ葉四つ葉の殿作り、さかゆく里にひとしほの、色そふ君の名寄の株、けふゆづり葉を口にふくみ、五葉の松と題せしは、松にからまる蔦屋の板是は正直正銘の、相違あらざる自筆の文、返す〳〵も十かへりの、花のお江戸の大都會江口神崎はことふりたり、嶋原新町はいざしらず、千代萬世もよし原細見、これより毎月あら玉の、としのはじめのときはの松、つきせぬ下葉をちよつとかく、

馬蘭亭舊友尺牘帖後序

王羲之が十七日の手紙は、唐づくへの上にあげられ、光源氏の二の町の文は、雨もりの腰張にすゝけたり、かの顏氏が家にをしへけむ、尺牘書疏は千里の面目にて、雲州消息二月庭訓も、もとは錦帶のくじら帶、これも去年の品川の噂、五十の翁のくり言なるべし、そのくり言はやめにして、夕霧がふじの山を張ぬきたらん文の數はいざしらず、りしではかどらぬ、かほよ御前の用事にはあらぬ、近比世に名たゝる狂士醉客の書簡を、一駄ほど馬蘭亭のあるじのあつめ置しを、馬の屁の後序ともなれかしとて、もえ杭に火のつきやすく、古川に水たえず、筆をとれば物かゝれ、盃をとればいつでもかくのごとし、

筆はじめ

春は曙やう〳〵懸取を戻してより、雜煮の餅も咽につまらず、祝ひ銀燭と詩に作れば子細らしけれど、古行燈のしの田づまとも化さうなるを、はしごの下にかたよせ、やぶれ障子はれ〳〵と掃出すべきを、元日なれば箒もとらず、陳子昂が福如東海とかきし掛物、目ざしのむきみ馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の付床にさらりとかけ、伊豫簾は却て卷あげたる庭のけしき、そゞろごとの浮み出るを、試筆とかいひてしたりかほに書つけたるも、大つごもりのくるしさを忘るゝに似て、巨燵辨慶とや笑はれなんとをかし、されば淸女がすさみ

も狹衣の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつもうれしき正月心に、願はくは二十年あとへ、蓑江りのごとすべりかへれと、我のみおもふかも、

吉書初

大つごもりの裝束榎に狐火を見むといひ、洲崎の日の出を七つ起して見むといひ、二日は茶屋にゐの日の約束皆あらましごとにて、年禮の膝くり毛に鞭うち、日傭のかみの諸太夫を召つれて、玄關の式臺のあがりおりに、二三日の光陰を費しぬ、もういくつねて正月とおもひしをさな心には、よほど面白き物なりしが、鬼打豆も片手にあまり、松の下もあまたゝび潛りては、鏡餠に歯を立がたく、金平牛房は見たばかりなり、まだしも酒と肴に憎まれず、一盃の醉心地に命をのべ、一椀の吸物に舌をうては、二丁皷の音をおもひて、三線枕のむかしを忍ふ、やみなん〳〵、我年十に餘りぬる比は、三史五經をたてぬきにし、諸子百家をやさがしゝて、詩は李杜の腸をさぐり、文は韓柳が髓を得んとおもひしも、いつしか白髮三千丈、かくのごとくの親父となりぬ、狂歌ばかりいひたての一藝にして、王侯大人の懸物をよごし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童はも扇を出し、猫ひく藝者も裏皮をねがふ、わざをき人の羽織に染め、うかれめのはれぎぬにもそこはかとなくかいやりすてぬれば、吉書はじめともいふなるべし、

鶯笛といふ笑話の序

春の山の端のわらひ初て、雪間の氷うちとけたるに、梅が香いきを吐かくれば、柳の絲もはらすぢをよる、笑ふ門には福壽草、三つ葉四つ葉とさき草の、はなしの種を蒔初て、花さく春を待ものならし、

山東京傳畵美人合序

花の色をうつせるものは、その匂ひを繪かく事あたはず、月の素を後にするものは、その明らかなる影を得る事難しとは、からさへづりの言にして、鳥が啼あづま錦繪は、柳さくらをこきませて、都の春の玩び物とし、千枝つねのりもおよびなき、時勢の粧ひを盡せり、わけて姿もよし原や、二のまちならぬいつゝの町に、名たゝる君のかたちをうつし、それがをの〳〵みづからの、水莖をさへそへたれば、物いふ花の匂ひをふくみ、晦日の月のあきらかなるがごとく、見るに目もあや心もときめき、魂は四ッ

手鶯籠とゝもに飛こゝちし、身は三ッ蒲團の上にあるかと疑ふ、かくうつくしき寫し繪には、僧正遍昭もいたづらにこゝろをうごかし、吉田の兼好もつれ〲をなぐさめざらめや、因て此はしつ方に其ことわりを書つけよと、五葉の松の蔭たのむ、蔦の唐丸がもとむるに、いなふねのいなまむもをこがましければ、猪牙舟のちよつきりちよつとつくり出て、立ならひたる中の町、櫻の花のかたはらに、深山木とち〲、ずつとみやまの山の手から、こは〲筆をふるふにこそ、

天明四ッのとし辰の初春

八月十五夜蘆中の月をめづる言葉

蘆中の人々とよばれは、向ふの人々のそれにはあらで、呉の東門に目樂の看板かけし、さる人のことになん、潯陽の江の邊には蘆の葉の笛をふき、難波の賤のひとふしには、あし苅の名を傳ふ、蘆のかりねのひとよゆゑとは、百人一首の耳近く、あしの花ちる遠干潟とは、老葉集でちと耳遠し、抑天地ひらけしより蘆がひの如くなる、豐あし原の中津國に、名たゝる蘆づゝの親類より、したしき友どち、今日の天氣のうらやみ、蘆屋の道滿大うち鑑、大うちよりて月をかんがみ、あし屋の里に蘆火たく、蘆の丸屋の原庭い、蘆のうちに圓居しつゝ、蘆葉の達摩の禪にもあらず、あし屋かまの茶人でもなく、蘆火淺水の舟さす漁父とはたしか見しり越、あし下にかける大和詞に、蘆荻の花の杜律をかじりて、蘆花の雪をほしいまゝにする、米顚か草書になくり、紫塵のわかき手を握る色氣はなけれど、碧玉の寒さ、蘆錐の嚢のもぬけの才子、蘆水がかきし兩岸一覽、月の最中の中の郷に、あし分舟をさしいれて、蘆毛の駒のあしなみに、てる月なみをかぞへこむ、片葉のあしの片手わざに、此頃世上にもてはやす、五箇の冊子の一箇の奇會、畢竟一部の西園雅集の、あすは東渡の分解をきけ、

讀阿多福面

夫美人は天上より落、牡丹もちは棚から落つ、さればさかさにつるす硝子の危からんよりは、立臼にまく蔦の全からんにはしかし、此おたふくの面もかぶらず、罷出たる敎訓本、ことばのはなは卑しといへども、燈籠鬢の透間かぞへて、二枚櫛の齒にきぬ着せ、

ず、羽子板の殿さまかみさま、駒下駄の娘子達、お意見をたゝの上にさすかんざしの耳掻より、耳つとう世の諷諫ともなれかしと、今大通の通の中へ、この一通を書のこせしは誰ぞや、破鍋にとぢ蓋すこに、[illegible]腹得心が腹ふくるゝわざなればなるべし、

狂歌の反古あつめたるものゝ跋

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは、その花も根にかへり、月も山にかたぶきぬ、今この一巻を見れば、げに花ならば花筏、月ならば影法師

よものとめかす上終

よものとめかす下

春の遊びの記

論語しらずの言葉にも、繪の事は素きを後にす、曰お禮はのちの事かと、上下はかまかち栗も、歳神の棚へあげて、白衣の二人御見舞申す、頃は安永八ッの年、むつきはじめのよかの日、御代はめでたの若みやのほとり、萬づよしだの何がしにて、寫繪の書ぞめあり、御座敷の上客は墨繪の雲のごとく、御勝手の膳部は彩色の繪具皿に似たり、みなひとはけの霞をくみ、硯蓋に焼筆をたつ、隣松が畫がける松魚は、左慈が鱸よりあたらしく、蟷車が役者の似づらには、壺屋が壺も底ぬけなるべし、蘭雨のおとり持、御舎弟のおとり込み、銚子のかはりははかまをぬぐにいとまなく、盃のまはりは錢ごまもはだしなるべし、上戸は酒をのみ、中戸は飯をくふ、下戸は肴をあらしふく、三寶山の紅葉の色にけおされてや、小松はみどりの龜の尾を、泥中にひきしりぞき、雁奴も同じひとつらの、こしぢのかたへや歸りけん、跡にの

こゝしかの三人、橘の小島を先として、朱樂菅江くわん〳〵と長居すれば、四方のあからめもなく、歸る方角をうしなひて、東方の明るもしらず、やゝありて銀燭天井にかゞやき、花氈地上にみち、棧敷の障子に穴ぼち〳〵とあき、樂屋の咳ばらひゑへんゑへんと高く、三弦長うたはやしかたなどいへるもの、列を正して居流れたり、先一番に釵烏帽子とかやいふめるうたにあはせて、あたりも照葉のきかづきを、ひとさし舞しなりふりに、おもふ心のあればこそ、跡の〳〵の名にしおふ、いざこざなしに都鳥の一曲、業平も氣はありやなしや、次に吉原すゞめの、品よくとまりし竹の葉の、みたれし髪もいはけなき、乙女の姿やゝしばし、感ずるも猶あまつ風、雲のかよひ路吹とぢし、樂屋の唐紙さとあきて、二八ばかりのたをやめ、燈籠鬢の透額、烏帽子水干きの國の、道成寺へとまひ出たるにぞ、作りしつみもきえ〳〵として、君が名字のよだれをながし、名さへおみきの酔心地、思へば〳〵この子の金箱を引かついでもうせまほし、今迄あるじの繪にかける女を見てさへ、いたつらに心を動かせしに、これや誠にせうのものをせうで見たりし諸見物、僧正遍照から五節句をとり、祇王祇女の眞中へ、佛の來迎し給ふがごとし、長うたいと竹つゞみやうのもの、みな世中のえらみを盡したれば、梁の塵もちり、空行雲も闇雲となり、ひたのみにのみ、たゞくひにくひ、無遠慮に腹打たゝき、方外に口うちたゝく、門松の葉のちりうせず、わかざりのわらながき夜の、とをのねふりのさめやらで、千秋樂をやうたひけん、萬歳樂をやかなでけん、一向酔てしらずかし

右は壽人東牛齋蘭香書の書初の夜の事になん

狂歌堂に判者をゆづること葉

いにしへもかくやたはれけん、今もかくこそたはれけれ、抑久方のあまの岩戸のわざをぎに、おとがひのかきがねをはづさしめ、あらかねのつちの形をあきつのとなめとみたてまし〳〵き御利口こそ、神も人もたはれたることのもとなりけれ、かゝれば代々の物がたりにも、いせの飯匙つくも髪、源氏のひかくひすゑつむ、狭衣大將のいたち笛ふきさるかなづなどこちけいのをとりなれや、さるを歌によみ出る事は、ならの葉の名におふ集には大寺の餓鬼のしり

へにぬかづき、夏やせによきむなぎとりめせなどのたぐひあまたなるべし、古今集えらばれし時にぞ、誹諧歌の一體をたて給ひき、これなん狂歌のはじめともいふべし。是よりのち代〳〵の撰、家〳〵の集にのする處、あげてかぞへがたし。まことや水無瀬の離宮にして、有心無心のふたつのすがたをわかちたまひしぞ、栗のもとのめいぼくなるべき、あるは百酒の味をなめしさるものゝ子には、定家卿の力のほどを見せたまひ、あるは三井のふかきをくめる、雄長老の百詠には、也足軒の判のことばをそへ給ひき、其外長頭丸を頭として、鄙山の百歌合をむすべる八百首の歌、入安が大阪の雲井はるかに、未得が吾吟の山田歌にも、其世のふりは思ひやらるゝよ、かの半井氏の子などはかれをさへやく〳〵、かけまくもかしこき何某の院の第八の宮ときこへしは、あやしくたはれたるかたに御心をよせ給ふとぞ、此時にあたりて難波の行風といへるもの、古今後撰のふたつの集をえらびて、かの宮にさゝげしかば、院の御所にめでさせ給ひて、始て夷曲とも、夷歌ともよぶべしといへる、みことのりをさへ下し給ふぞかたじけなき、

しかるに新撰狂歌集には、落書をかぎまじへ、銀葉夷歌の頃よりぞ、こがねのひじきもうつろひにたるに、言因とかやいひしれもの、いかなるゆえんの侍しや、雲の上まですみのぼる、煙の名をたてしより、其流をくみ、そのひちりこをあくるともがら、京わらんべの興歌などいへる、あられもなき名をつくりて、はて〳〵は何の玉とかいへる光なきことの葉もいできにけり、鳥がなくあづまふりは、わづかにはたとせばかりこのかた、我輩よりもてはやして、其名きこゆる人〳〵、のべの紙の風に吹ちり、林の杉の葉門々をたてたれど、四方の巴の扇の紋、赤とのみおもひて、其味しらぬなるべし、爰に鹿津部眞顔ふかくすきやの河岸にありて、西河の思ひ淺からず、すでに狂歌の堂にのぼれり、其室にいらんの志、いたく切なるにめでゝ、玉篋はこ傳授めくもをこがましけれど、鳥の跡久しきものながら、馮婦が手うちけむとらのとしのはじめ、河原崎の翁わたしとゝもに、三體の傳こと〴〵く傳へぬ、われすでに此道をすてゝ、陸羽が毀茶論の思ひをなせれば、さいつ頃何がしのもとめによりて、おしては人におくりぬ、

なを吾家のふるきかもとに、ひめ置し文つくへひとあしにそへて、此一卷を與ふ、今より四方の道しるべをとはゞ、南をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なるべし、

欲問狂歌堂　先開枝折戸
寄語諸連中　勿迷四方路

二水樓記

東岸西岸の柵橋は、淺草のわづかに見わたされ、南枝北枝の鍵梅は、南國のはしの上にたへず、駒とめ橋の駒に鞍おけといふ山里の使來りて、藤代町の藤の紋に、あるじの家の名もしるし、春はやう／＼霞わたれる川面より、夏の凉はをほよそわが國六十よくにが中に、いづくはあれど兩國にしくはあらじ、よし野高尾の舟屋形、玉屋鍵屋が花火船、秋の月冬の雪、この二水のほとりに盡たれば、二水樓ともよぶなるべし、

角田川に三船をうかぶる記

遠くいにしへをあふぎ、近く今を思ふに、山城の國大井川の水上にさかのぼれば、詩歌管弦の三ッの舟をうかべ、言さへぐから國米内史のこのみにしたがひては、ふみとうつし書のふたよみあしの葉をたゞよはす、あるは敷島の道にたどりて、からうたの林にたちまじわらざりしをくゐ、あるは蘭亭のいしぶみをうばひて、うたかたの水にきえなむ事を思ふなど、すびの松の葉末の人は、しひの木のしひてもとめず、あまさかる火なは箱を枕として、ふすゐの船の夢にだもしらざりけりな、爰に鳥がなくあづまぶり、家々にとなへをそのたはれを道々にすきてより、いにしへ今のことくさを、行かふ蟻の穴ぐりもとめて朝けのはしのあげをろしにも、こはめづらかなりかはあたらしなど、ゑみ栗のてゝうちならし、うち柿のじゆくしくさく、はては盃のそこともわかぬどち、から錦たちきられぬことをなんなせりける、ことし水無月のあつさをさけんと、かの中川の方違も、しうとのものゝゆかりあればにや、蔦のから丸がそゝのかしきこゆるに、あし引の山の手都合よく、まくらふまちの口々にいひのゝしり、すきやのすきにすきたるたはれうたびと、むさしの國としもふさの國の中川に、みつの舟やかたをうかべ、歌は心なきをすがたに、詩はくるへるをむねとし侍りき、絲竹こ

そ猶とよはらの流につきて、さだすぎたるかぎりをつくすべきを、もろこし何がしの國のかみすら、いにしへの樂をきゝてねぶり給ひしとなんきけば、かぐらのもとすゑたしかならんは、五節の舞姫の花やかなるにしかず、名管秘曲の手をつくさんは、三筋の絲の心ゆくにしかじと思ひおきて侍りて、柳橋のまゆにこもれる親のかふ子のよきをえらみ、やぐゑん堀のほりするものに、大みきのさゝとらせつゝ、詩をもて歌にあはせ、歌をもて詩につがひ、かてるはほこらかにはなをこめき、まくるはばちの盃をうく、其爭はまめびとのすさみにして、其遊びはいにしへのたはれなり、たとひ山水のきよき音のみめでし梁の太子の嘲ありとも、ひがし山に白拍子めしたる、高潔翁のうなつくところならし、しかりやあらずや

右方人　各賦狂歌

眞顏
金埒
光
裏住
米人
高彥
森角
唐丸

左方人　各賦狂詩

飯盛
定丸
秋人
古人有正
三和
唯取
躬鹿
酒船

講師　紀定丸
讀師　鹿津部眞顏
判者　四方赤良

此君盃の記

道中双六のふり出しなる、橋の邊にすめる月知とかやいへる人、四方赤良が書おける、七賢圖式を見て、ひとつの盃をおくれり、盃中に竹をゑがく、よりて名づけて此君といふ、それ盃はさま〲ありて、羽觴玉爵あふむ盃きんくしなど、見ぬもろこしの京物語にて、其かたちをだにわいだめす、我日のもとのいにしへは、汙尊杯飲の風すなほにして、かはらけのみもちひたり、されば三つ組のみつ指にて、左樣しかればの挨拶も、候べく候のべく盃となり、引に引かれぬ引盃は、さいつおさへつあいの手もとに入りくる〱大盃、百樂のてうどうけて、椰子の

毒けしをたのみ、しつぽく臺の一つの隅をあげて、こつぷを三つのすみにめぐらす、何某門院の黑木の詠は、大原盃の製をのこし、難波江のうかむ瀨も、淺草川の淵と變ず、たとひ時酒うつりうまごとさり、たのしみかなしみゆきかふとも、天さへ醉へるはなの朝、あたまもふらつく月の夕、雨のふる日も雪の夜も、日々醉て泥のごとく、一年三百六十日、一日も此君なかるべけんや、

此君はいづくよりぞととふたれば
わらつてこたへず心かんなべ

君ならでたれかはくれんくれ竹の
色をも香をもさか月そしる

淡洲樓記

竪川の流れ市川に通じ、聲と響の相生のまちに、淡洲樓といへる高どのあり、一たび此樓上によれば、三階のたかきに登りて、登ればくだる稻荷町の情をしり、大日本の東側より、天地の大芝居を見るがごとし、嗚呼此樓の高き事、あるじが自慢の鼻柱、はなの高ひはたらちねの、讓ものせし飛彈たくみ、うつすみかねの筆とりて、帆柱たてる橋柱に題せし。夫は司馬氏これは馬馬子、あはせて兩面年代記のむかしより、棊太平記の宮城野を、しのぶにあまる語路の露、萩に薄に玉菊が、狂歌燈籠數度の月、いま酒力さめ茶番獄で、たゞ牛島の牛のよだれ、ながきはなしのたねのみぞ、洲崎にたてる松のはのちりうせず、はゝ事は長鯨のしほをふくがごとし、談天の衍、雕龍の爽、こしきのあぶらしぼれどもつきず、大鋸屑の粉ゆはゞゆはれん、たとひ蘇秦張儀がさかやきをそり、富樓那子貢が皮羽織きて、夫子を以て鐵棒とすとも、主人のしたを卷ものゝ、太平樂に及ぶべからず、かの晉人の淸談などは、錢ごまのはだしなるべし、嗚呼つがもない、

里の花燈籠の記

九の枝をつらね、よろづのともし火をかゝげしは、みぬもろこしか西域か、日本堤の一のかはり、三河屋が燈籠見んと、きつゝなれにし北の里、はる〱きぬる旅ならで、うかれ女の道中姿、たちならびたる家々の、ともし火の花のかたはらに、みやま木ならぬ山人の、ひなふりをかいつけてよと、二日醉のさけの上、ふらちの大人がふら〱と、たしかもとめしやく

そくは、ぼん〳〵盆のけふあすと、うちは太鼓のうちすてがたく、釣燈籠の手柄のあと、高燈籠の松のやかた、山の手の舞どう籠、名に高彦の揚燈籠はいふもさらなり、八百八ちまたのはじめにおす手くるまの本川町、おほんたからのやどりとる、かり草の馬はむ町、馬にくらをく〻らやみの、はぢかはしきことのはを、四方のあかるみにになひ出ることゝはなりぬ、もとよりすきやとうろのすきめなき、きりこのあみの目にふれなんは、はづかしのもりならぬ、水ぶつかけのつるべてふ、名に大門のそばきりそうめん、御免候へたわい〳〵とかいふ、

岡目八目　草双紙の評判記也

右に見えたる位附、大極上や黒吉より、上々等にいたるまで、かならずあてにし給ふべからず、御句到來次第不同、にくい〳〵はかあいの裏、善悪不二の片手打、拍子を揃へて打ておけ、えやんとか小褄をとらの春、正月二日の初夢見て、とんち早咲早梅の、うみ出したる趣向なれば、三千世界を尋ても、こんな作がと人さんが、笑はんすのも大事ないが、そりやこそ鳴いたは透頂香(とうちんかう)、波銭一本うて八百本、向に通ふるは清十郎じやないか、笠がよう似た花菖蒲、いづれあやめとひき〳〵を、頭にいたゞくつうるの羽重、千秋の雲晴やらぬ、朧夜のつれ〳〵なるまゝに、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つか短かなる筆と墨、つかひ果して一部の書と、ならの旅籠や三輪の茶や、合の宿に二臍村の、おかげ一腰が拔參り、嶋さん紺さん中乘山人、おつゞら馬の後に記すと、敬てござへすヨヤヨゥ、

狸の圖賛

一荷の土船のあやうきに乘らんよりは、八疊の金玉の安きに座せんには如かじ、狼のその如たくひをふんで、其尾につまつかんよりは、己が臍に茶をわかして、文福の毛をはやさむには如かじ、

壽の長地にうつや腹つゝみ
たん〳〵狸ちゝ千歳經ん

猩々賛

あしの葉をふき竹の葉をくむあしの、よもつきじ竹のよもつきじ。

織物の賛

相生町の松にはあらで、竹屋町のきれを織出して、

柳櫻の錦にかへ、書畫の床の詠めとなさんと、思ひ月夜の烏亭のあるじ、焉馬のあやまりさらになし、竹屋町〳〵、此君なくはあるべからず、

蛙の賛

花になくうぐひすにともなひては、催馬樂のちからなくして、あめつちをも動すべく、月のかつらもをりをえては、不死の藥をまとかにして、おのがよはひも久かたなるべし、むしろ香山の石となるとも、ゆめ〳〵鄭門の蛇にならふことなかれ

七拳圖式

唐山にては酒令といひ、吾朝にては拳酒といふ、天竺にては酒のむもの、五百生が間手のなきものに生れしゆゑ、此拳の沙汰を聞及ばず、抑此七拳は、もろこし晉七賢の直傳にして、竹の林のふしはかせ、聊相違なきもの也、今幸に一卷を得たり、つら〳〵閱して其傳の絕なんことを、伊丹諸白、鴻のいけどりの圖式をあらはして、四方のあからさまに弘むといふ、夫賢は拳なり、十目のちらつく所、十手の指さす所、それ拳なる哉、富は酒屋を潤し、德利は身を潤す、心廣く體よろ〳〵と、足もとのさだまらぬこそ、上戸はよけれ、

新酒頌

酒々儀狄つくり大禹なむ、ふるきはあたらしきにしかず、おもきはかろきにしかず、かろくすめるものは、暫時のあたまにのぼり、重くにごれるものは、二日醉の枕となる、たちまち醉ひたちまちさむ、日々に新にして、又日々にあらたなり、

風流狂歌盃報條

そも盃の濫觴は、ちよくらちよとこれをかう持て、三日月なんどの形を表し、左のさくは天の道、そこをしたむは地のきよめ、天地のあいは手本となる、人と生れて酒のまぬは、玉の巵かつちりのごとし、見ぬもろこしには金屈巵、わが日のもとには内ぐもり、其土器のすなはなる、ためしを今に引盃、また三組の三指より、候べく候のべく盃、小原たつも、とらまへて、酒のませんとの一興には、狂歌をよもに過さるべしと、例の赤良の筆をかり、すゝむる酒の德孤ならす、かならず隣の松蔭も、今一しほの色をそふ、枝も榮て葉もしける、千代のこの〳〵盃が、まはつて來たは〳〵、まはらぬところは御目長に、

御覽の通り狂歌盃、よいもわるいも御手にとつて、たゞよい〳〵と御評判奉希候以上、

土佐の麻衣報條

神樂催馬樂今樣のむかしはいさしらず、近頃世にもてはやせる淨瑠璃となんいへるものは、琵琶法師の平家にならひ、六十帖の事をつらね、源氏とよべるとなむ、このふたつはうたひものゝちゝはゝとして、此道の難波津淺香山ともいふべし、しかるに源氏十二段といへる物語に、淨瑠璃御前の事をのべしよりこのかた、源氏をあらためて淨るりとよべるとぞ、むさしのゝひろきおほんめぐみしげく、角田川の水ひとたびすみしより、太平の代をうたひ物せし、江戸節の元祖を筑後といふ、其子虎之助受領して土佐少椽橘正勝といふ、これよりこの流れ千すぢにわかれ、眠江の底なきがごとし、今其源にさかのぼれる内匠はしらふかく此道にふけりて、受つぎし家の風をあまねく世にも吹つたえんと、ふたつの國の橋のほとり、萬代の龜屋てふ高どのに、波のあやつりをりからの興をそへ、柳の絲道長き日のなぐさめとなさんとす、かゝれば花の江戸に有としある人、八百八ちまたにすむとしすむ人、あづまにしきのゑいとう〳〵、朝はとうからつどはさらめや、

壁書

屁をひらば屁をすぼめよ、毒をくふとも皿をねぶることなかれ、一寸先をやみと思はゞ、天道人をころすべし、

三谷傳來 吉原細見說

此里こゝにうつりてより以來、延寶に吉原戀の道草ありて、淺草橋より大門口迄、輕尻駄ちんのあたへをゑるせり、三人づれにて馬一疋は、麗埘記のりかへなど、土手ぶしにうたひしもおかし、元祿の吉原草摺引、寶永の吉原大黑舞、享保のはじめの丸鑑、これらは其名をしるすのみにあらず、其姿心ばへまであからさまに品定して、今みるがごとし、源氏の雨夜の物語、曉傘をかはせたる頃なるべし、其外にも雨巴屁吉は大人先生の筆をふるひ、洞房語園は庄司の家になれり、抑吉原細見は、はじめ横本黃表紙なりしが、享保のなかばより唐紙表紙となり、明和の頃よりぞ今のすがたの小冊とはなれりける、新命婦は月々にあらたに、大正は春秋にあらたむ、はた

細見と名づくること、大行は細謹をかへりみるか、酔て茱萸(しゆゆ)をとつて仔細に看ると、唐土人の菊の節句に、臺の物の水菓子をみて、つくれる詩にもとづけるや、細身の御太刀の武左にもあらず、いなさ細江の旅人客にもあらず、楚王のこのめるおいらんのほつそりすはりの柳腰、みかへり柳の惣堀に、細谷川の流れの身、三千の粉黛(ふんたい)五町の一廓、醫師の外には乗物をゆるさぬ秘傳の御高札、御覽の通油町、五十間からはえぬきの、大木のかげに立よりて、からまる蔦屋重三郎、田市にあらぬ耕書堂、一子相傳秘中の秘說、とつくと細見あられませふ、（ヱヘン／＼と目かれをはづし小湯をのむ茶わんに黒ぬりのふたあり。）

悼大飯食人祭文

水すまば先亦ゑひをあらふべし、にごらば蛸の足をあらはんとよみて、浮世を茶漬一ぱいとも思はざりし大飯食人、かりそめの病にふし侍しが、つひにきたのまくらめしとなり侍しときゝて、例のたはれたる友どちみそひともしの精進ものに、其人のとしの數も三十五歳のかげ膳をすゑぬ、みたまそれしる事あらば、こひねがはくはうけよといふ、

ひとりこと

すさのをのみことの月代そり、衣通姫が草羽織きて、あまのうきはしのはしづめに出、天の八衢につくほふとも、花のお江戸の戯れ歌、よみ出んことはかたかるべし、今の世におほかる大人／＼／＼／＼／＼／＼等は、神も御存じなき事なるべし。

五十初度賀戲文

東方朔は四十歳、三浦大助七十九、浦嶋太郎が七世の孫は、思ひもよらぬ厄介を引請たれば、他人にかゝるも同前にて、あまりめでたき事にはあらじ、武内の宿禰の厄拂にもれたるは、同名の說あれば、親も嘉兵衛子も嘉兵衛かもしらず、鶴と龜より長生なれば、鳥によする祝といへる御題もなし、私當年五十になり候、御馴染の御方詩歌連俳狂詩狂歌とも皆御斷也、名代に愚詠一首、

竹の葉の肴に松のはしたてむ
鶴の吸もの龜のなべ燒

狂歌三體傳授跋

夫狂歌には師もなく傳もなく、流義もなくへちまもなし、瓢簞から駒がいさめば、花かつみを菖蒲にか

へ、吸ものゝもみぢかざして、しはすの闇の鐵砲汁、戀の煮こゞり雜物のしち草にいたるまで、いづれか人のことの葉ならざる、されどきのふけふのいままいりなど、たはれたる名のみをひねくり、すりものゝぼかしの青くさき分際にては、此趣をしることかたかるべし、もし狂歌をよまんとならば、三史五經をさいのめにきり、源氏萬葉いせすり鉢、世々の撰集の間引菜、ざく／＼汁のしる人ぞしる、狂歌堂の主人眞顔にとふべし、其趣をしるにいたらば、曉月房雄長老貞徳未得の迹をふまず、古今後撰夷曲の風をわすれて、はじめてともに狂歌をいふべきのみ、いたづらに月をさす指をもて、ゑにかける女の屁をつむことなかれ、これを萬載不易の體といふべきかも

長櫃序

萩を姓とし藤を名とし給へる人、たはれたる名を紫のゆか理とよふ、とし頃赤良が筆の跡をもとめて、一巻となし給ひぬれば、やがて長櫃とは名つけはへりぬ、ゆめ／＼人にみやきのゝ、露はかりもゝらし給ひそといふ、

旅日記のはしかき

それあめつちは萬物の問屋場にして、光陰は百はたごの旅人なりとは、沈香亭にもてあつかひし、生酔の名言なるべし、いづれ旅ほどおもしろき物はなし、朝の雲助長櫃の長／＼と、姫路をとりやるとうたひつれ、夕邊の月ひたひ鏡臺にかたぬき向ひて、晩におじやれの約をなす、本ッ宿よりもあひの宿にぎやかに、名所よりは名もなき所に山のたゝずまひ、水の流れと人の行衛のはてしなき、松原つかみじかなる棒はなに筆をとる、

謎の言葉

謎のよりて來る事久し、左傳に山鞠窮の庾詞あり、後漢の世に黄絹とかけて絶とゝく、其こゝろは色絲なり、幼婦とかけて妙とゝく、そのこゝろは少女也、なとは此頃の謎に似かよひたり、其外瑯琊代醉編、または寄園寄所寄の類に見えし商謎の數々、猜燈のはんじ物等かぞふるに暇あらず、我日の本には小野の篁の無悪善をさがなくばよからんとよみ、子子の子の／＼子子の類、枕草紙のなぞ／＼、小野宮右衛門督家五番三番の何曾歌合、つれ／＼草の馬のきつりやう、後奈良院の御撰の何曾など多かる中に、慶長の

比洛陽に宗鐵居士といふものあり、謎百句をつくりて酸物圖といひしは、羅山先生十八歳のときつくり給ひし謎辯の序に見えたり、そのゝちいつの頃にやありけん、なぞ／＼なあに菜切庖丁長刀、納戸のかきがねはつすが大事といひし、むかしのふりをつたへて、寶永の御所謎の本、明和の讀うり謎かけふしなど、老の耳にものこれるを、ことし淺草寺大悲さのかたはら、正月屋の市にさきだちて、人あまたつどへるを、何ぞとゝへば、みちのくに二本松より來れる、都春雪といへる盲人の、謎をとく事とくはんの十念の口よりも大に都下に流行して、辻々に謎の番付をひさき、家々に謎の警句をつたふ、まことに謎の世界といふべし、

鬼念佛讃

蝸牛の角をれては、蠻觸のあらそひやみ、外面夜叉の如しといへども、内心菩薩の道にいれり、身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、鐘の撞木はなまいだ／＼、

南無阿みたぶつと悟りし發心に
鬼も早速滅無量罪

十三夜十三體醉月樓會今圖三體

詩

嶋臺野菊尾花前、　即席詩歌雜ニ俳連ニ
團子夜中新月後、　十三里海鎌倉先、

歌

十五夜につゞく山流の琴の曲
雲井もすめる長月の影

連歌

置露やしろきを後の月の影

俳

貰のこる薄に早しのちの月

謠武藏野

草より出て草に入る／＼月の行衞を尋む、是は北國がたより出たる僧にて候、我しばらく正燈寺にこもりて、紅葉の落葉を觀じ候へしが、いまだ武藏野の月を見ず候程に、此度思ひ立素見ばやと存候、またよきついでなれば、道行あやめさく馬ぐその中を立出て／＼、驛路の鈴の追分の、宿につき毛や黒駒の、甲斐あるけふの門出を、いのる熊野の十二所の、名に高井戸の

草深く、はやむさし野に着にけり〳〵、

開帳場縁起

是にかけ奉るは、忝も菅丞相、つくし安樂寺にて御詠歌に、宵の間や都の空に照もせて心つくしの有明の月と詠せられし、この靈驗あらたなる、一拳勝負一口三なの尊像、唐高麗には御座りませぬ、たつた日本に一體の月見でござる、近うよつて拜あられませう、雲切よけの守はこれより出ます、盃は左りへ〳〵と廻らつしやい、

錢湯張札

一暮六ツ時より相始明六ツ時迄月見仕候大風大雨之節は相休申候

一足留の御方貳度の月見御無用

一ゑつひせん惣て惡敷病ひの御方樣岡場所の月御仕舞可被成候

鼻へかゝり候小唄淨瑠璃御免可被下候

一薄三文

一子芋衆十六文

一枝豆付八文

一毎月晦日は闇と御心得可被下候以上

月　日　　醉仲間月行事

御祭禮番附

壹番　勘當町　内は野となれむさしのゝだし新造の付祭りよし原雀の惣仕廻たいこ末社あまたもの前てこずり大勢

貳番　いき間町　からまんの鳥度通やたい大通人來朝の體黒仕立の對の小袖見え坊あまた

參番　川井新五左町　かつほふしのだし淺黄らついの小袖すけん大勢

請狀

差上申御請狀之事

一此照平と申桂男さやかなる影に付我等御請に罷立當丑の八月十五夜より同九月十三日迄御奉公に月出し申處實正也御給金は價千金に相定爲御取替摺物一枚被下置慥に請取申候事

一御家之御工夫月見の御趣向爲相背申間敷候若此月見に付外々より如何樣の半鐘打込候共我等罷出急度致八分可申候若又烏影客來仕候はゞ早速料理方え可被仰下候はゞ其節臺のもの成とも御給仕成共御望次第可仕候事

一御好物樣御はつこうのきりゑたん棹にてばてれん三味線にては無御座候銚子之儀代々上戸宗と而新川滿願寺旦那に紛無御座候爲其通帳取置申候後日

の月醉而如管

酒のかん田長のみ町すぶ六店

受人糟九郎印

天明元丑年九月十三日　人主　芋助印

野嶋地藏樣

御用人中樣

中臣祓

天窓乃上仁酒止利座須率頭茶屋船宿乃命於以天薄賀木乎燒鎌乃燒木杭仁火乃付安從事乃如久柳橋加貢猪牙船乃鐵砲玉仁帆乎掛太留如久四手駕乃八乃御耳乎振立天後乃月見乎仕舞給邊茶屋乃負債乎拂給邊止申須

十日目三日目晴給部陰利給奈

巴人集後序

巴人集は四方赤良が家集なり、按するに寶暦本繪草紙に云、鯛の味噌ずで四方のあかのみかけ山の寒がらす、いかんとんびとも　今の本に載る事なし、筑地善閣御説を以て、さまよがどうだと考るに、鯛は魚の名、進上目錄に云、鮮鯛一折と是也、みそずは舊說、みそうずといふは非也、みそずは味噌汲物の下略、四方は江都泉町の商家にして、酒醤をひさくもの、赤はあから也、また文選ござ花ござにいはく、宋玉が陽春白雪は和するものすくなく、下里巴人は和するもの多しといへることばあり、四方の家の紋、扇に三巴なり、かれこれ合せてかくは名付たるか、或は四方山のはなしにかけて四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいだく思いれなきにしもあらず、委しくは先の辻番にとふべし、

天明四のとし卯月十あまり八日

たれかしるす

杏園詩集

序

夫人生而形具矣形具而聲發矣因其聲而名之則有言矣因其言而名之則有文矣故文者言之精也而詩文又文之精者以其取聲韵合言之文而爲之也豈易也者乙丑初春始得先生之詩於譯者劉子見之未嘗不愛及是秋先生復將生平著述彙輯成稿郵筒遺示僕讀先生之詩愛其思致清遠則秋容素鶴廻翔欲下而輕雲籠月之漣娟也至其文彩縟麗如春花翹英蜀錦新濯其才氣俊逸如泰華秋隼之孤騫先生之詩可謂能盡其心焉豈彼粗疎不窒固滯不通有若秋螢夜燐可同日語哉誠東都之詩宗也蓋先生心倦乎應答身勞于將迎而抱廉退之節愼出處之誼方且謝春夢於繁華矢嘯歌於泉石縱情花月遣興琴樽殆將返其初服逃軒冕而卽韋布者乎故日與幽人逸士唱和於山巔水涯聊以自寫其樂天知命之素懷誠有得于古人之趣者僕愛先生之詩而略述其大概云耳時乙丑仲秋漫題于崎山萍寄樓葬花菴主張敬修

杏園詩集卷一

多西大田覃子習著

題壁（明和三年丙戌作時歳十八）

生長牛門十八秋。濁酒彈琴摑遊。人生上壽縱滿百。三萬六千日悠悠。功名富貴浮雲似。笑他文繡美犧牛。滿堂盡是同儕子。無酒須典我貂裘。蜀酒一杯琴一曲。一杯一曲忘我憂。時人若問行樂意。萬年江漢向東流。

望嶽

日出扶桑海氣重。青天白雪秀芙蓉。誰知五嶽三山外。別有東方不二峰。

雪中訪隱者不逢

東郭先生去不逢。山中唯有履行蹤。囘看欲記重來路。雪沒門前一古松。

病起

三伏炎蒸彼一時。高秋病起出茅茨。市中年少驚相問。閉戶先生何所之。

冬日飲田間

步屧村非遠。開樽地自偏。漁梁通亂水。樵徑入疎烟。臘盡三杯酒。封餘一頃田。但期多種秫。迎畢勵豐年。

戊子元日

北斗廻寅物。城邊轉色新。謳歌哉日午。雨澤息紅塵。未遂三冬業。徒逢弱冠春。牀頭樽酒有。隨意賞良辰。

春日與諸子集東江源文龍宅

知君草聖晉時傳。更見群賢會此筵。彩筆縱橫稱古絕。春風灑出墨池邊。

秋日耆山上人山房盆荷未開

愛此疎荷色。已含初發姿。漣漪盆水足。不必羨滄池。

賀龍門劉文翼先生五十壽

雪滿階庭玉樹林。青葱兼見歲寒心。社中遊好存兄弟。都下才名重古今。斜日題詩蘿館上。初筵醮酒篠池陰。謝家況復多群從。更勸飛觴宴樂深。（先生所居曰薜蘿館）

俠客

此處少年場。遊豪日作伍。欲酬睚眦讎。一劍猶懸柱。

古意

昨栽桃李樹。共約及花時。花落子還結。佳人無見期。

夏日寄耆山上人

青天落落雨三松。影入山窓積翠重。別有夏雲朝暮變。日裁佳句鬭奇峯。

漁樵

漁海樵山一放歌。長將丘壑對烟波。江流滾滾迎垂釣。谷響丁丁答伐柯。拾薬行隨榛路去。得魚時向酒家過。羨君各自安生計。世上機心不多。

贈江州野子賤

江州山水傍幽居。勝地風光自不虚。何暇登樓裁八詠。還應閉戸愛三餘。帳中日月銷書卷。湖上煙波足鯉魚。千里猶能通尺素。時時莫使好音疎。

九日同岡公修載酒過劉文翼先生會松崎觀海先生至得盤字

無恙陶家九日歡。更迎上客官情寬。風吹綠鬢敧烏帽。露冷黄花映玉盤。何處登高工作賦。一時携酒醉相看。東籬此會應難遇。遮莫林端月色寒。

早春哭劉文翼先生（明和八年辛卯正月四日下世）

人間一自失劉郎。流水桃花隔石梁。重到天台山下望。煙霞無路訪仙鄉。

七夕對雨

西風驅雨暑初收。一葉梧桐落素秋。人事蕭條佳節逝。園林颯沓早涼流。橋邊月暗迷烏鵲。河上雲飛隔女牛。今夕家家既乞巧。誰持針線倚高樓。

壬辰元日

鼓聲遙響鳳城邊。北斗闌干沒曉天。日上扶桑千丈外。鷄鳴高樹萬家前。珠袍錦帶趨華省。柏酒辛盤醉綺筵。朝野共逢春令至。謳歌擊壤樂堯年。

春日懷江東梅花得香字

江東一樹隔林塘。遙憶梅花動暗香。玉燭應須催淑氣。瑞姿猶自倚冰霜。坐疑疎影杯中落。還妬新粧夢裡長。解道兎園標物序。詩成誰不擬何郎。

江東賞梅

一枝春色媚晴沙。低發江東野水涯。風繞疎籬香黯澹。根含細石樹横斜。曲中瑤笛憐飄落。林下

清樽醉物華。素服淡粧何處女。欲乘明月問君家。

田家春望

一望東皋晩。烟斜積雨晴。行車何處過。應是勸春耕。

遊僊

神僊叢生若木端。紫烟滄海路漫漫。盤中沆瀣清堪歠。松下靈芝秀可餐。絳節歩虛朝帝闕。瓊簫傳響落仙壇。吾今更把浮丘袖。一擧飄然倚玉欄。

遊飛鳥山有感

春風曾記舊花源。鷄犬相迎處處村。路自巣鳧通北郭。山凌飛鳥望西原。羣芳氣暖開千樹。獨酌杯寒冷一樽。多少絃歌人已散。丁丁伐木送黄昏。

今歳壬辰二月十九日都下災

南都覽古

一分郷縣幾千秋。寧樂江山自古丘。春草空使麋鹿徑。烟花曾逼帝王州。金仙閣上開黄面。采女祠前冷曾流。勝地唯餘舊向侶。時探靈異此經過。

題柿本祠

千載遺編有國風。長將詞筆代天工。古祠秋色丹青落。猶自園林柿葉紅。

俠客行

京華遊俠日相邀。一飲歸來酒未消。纔向市中人自避。不知驄馬爲誰驕。

賦得雙玉贈關叔成季成

曾憶崑岡剖玉年。一雙寒色鬪嬋娟。青山尚抱陵陽璞。赤水還探罔象玄。響和清風金石外。光分明月乘車前。由來共見連城美。高價同應天下傳。

叔八居青山季八號赤水

楚宮詞

細腰輕著紫羅裙。粉黛如花映楚雲。縱說東隣桃李好。君王休信大夫文。

寄懷大久君節臥病

憶昨牛門幾結盟。比來何少一人名。呻吟久抱清羸疾。詩興偏憐太痩生。但道幽居耽藥餌。不妨高臥鎖柴荊。期君早晩牀頭起。佳句寧無示弟兄。

雨後壞口郊行同公修賦

散歩平田十畝間。愛看雲礎激潺湲。飛流忽散煙中樹。積翠全含雨後山。稚子時驅黄犢去。漁翁晩釣白魚還。與君聊爲耽幽興。自使人生若等

閣。

七夕同諸子登蓮華寺亭子得過字

高閣秋陰鎖薜蘿。同人令節此經過。風雲意借玄談盡。牛女光窺色相多。月照高松疑鶴影。鐘流下界雜笙歌。登臨一出諸天外。不羨僊槎通絳河。

寄山田君忠

長謝青雲宿昔情。抽簪散髮賦遺榮。才高臥終稱疾。身退千秋欲遂名。曾着書生縫掖服。兼彯劍客曼胡纓。更聞門下吹龍笛。自使雌雄匣裡鳴。

壬辰八月二日大風雨

萬竅令風風怒號。夜來風雨夢魂勞。城邊忽拔千章木。海上高飜八月濤。流決水田漂黍稷。徑荒牆壁捲蓬蒿。細推物理何曾定。心事唯須附濁醪。

永代橋爲風雨所壞歎

城東秋水大江涯。百丈青虹臥綠波。江水泱々流入海。南連二總北三叉。結構曾極公輸巧。落水橋勢影橫斜。風雨忽自東南起。壞屋飛沙千萬里。海上驚濤八月高。布帆出沒奔湍裡。一片危橋空際來。直觸長橋天柱摧。殘虹中斷岸空闊。行人欲渡且徘徊。莫愁暫時津梁絕。淸朝應有濟川才。

詠史

虎狼一失鹿。羣雄已力爭。戍卒何爲者。白挺提利兵。其志雖不遂。天地稱先鳴。項籍萬人敵。書劍學不成。一擧僇守通。三月火秦城。五月白日動。叱吒悲風生。若何蓋世氣。反背關中盟。若何拔山力。不守垓下營。大哉漢高德。赤幟樹風聲。手提三尺劍。幷吞諸侯兵。轉輸任蕭曹。籌策仗良平。起自一布衣。永爲天下貞。

淺草大悲閣

郭外紅塵一道通。大悲高閣聳天宮。六時香火交元氣。萬井煙花觀色空。結構曾聞由覇主。應身何事托漁翁。至今龍女晴江上。爭捧明珠現水中。

歎逝二首

可歎人間事。衷情日夜新。死生頻屈指。匍匐共傷神。縱作千金子。還非百歲身。功名兼富貴。總比北邙塵。

其二

逝矣東流水。悠悠不可留。生涯猶有待。身後亦

何求。文貴千秋思。杯忘一日憂。但令歡樂盡。遮莫託山丘。

田居

時雨灑公田。膏澤及我私。方茲春事起。丁壯把鉏犂。日出就南畝。日入歸茅茨。息我翳桑下。農談相與期。各勤耕稼事。無後租稅時。不飢能卒歲。何願有餘資。

悼女兒

抱寵朋珠掌上空。苦沾雙袖涙痕紅。西窓一夜多風雨。猶似呱呱泣帳中。

春日過耆山上人山房

雙樹春陰白日深。落花啼鳥引幽尋。窓前別有青山色。共指閑雲一片心。

三日尋公修莊

碧桃花發鳥相求。三日風光訪舊遊。觴詠欲開修禊飲。柴門近指玉川流。

暮春日暮里郊行過正覺寺

芳甸浮遊興。行行隔笑歌。入門幽徑引。滿地落花多。已歩荒墟去。還尋古寺過。爲憐塵外賞。重欲訪藤蘿。

池上早夏

滄池長夏冷。散歩愛清和。積雨收蒼樹。微風動綠荷。物閑魚自樂。芳歇鳥空過。憶昨生春草。萋萋早已多。

宮怨

玉階秋草鎖宮門。無復新粧侍至尊。却悔當年承寵日。等閑省過一時恩。

服仲英先生忌日集少林院賦得草露晚凄其

海上墳塋傍少林。空餘草色映青衿。誰知露氣凄涼夕。一束生芻萬古心。

其二

草色纔含白露光。九原何處不悽愴。偏添落日千行涙。結作空山六月霜。

夏日陪久世公過耆山師山房得五歌韵

青山一路入藤蘿。忽有元戎小隊過。坐脫折巾炎暑少。庭迴曲葢夏雲多。無邊暮色含蒼樹。不染禪心對綠荷。爲是謝公耽淨理。到來何用促鳴珂。

拜新月

美人拜新月。新月似蛾眉。新月長如此。蛾眉知

幾時。

癸巳八月二日　御舟大閲遊泅

傳聞漢武棱昆明。遊泳于今練步兵。彩鷁朝飛瀬海殿。錦帆秋下大江城。拍浮遙入長流去。齊泅（齊泅爲反从手貝之目與泅羅之泅不同）遥凌積水行。共浴恩波追隊伍。當場明列賜衣名。

讀觀海集贈觀海先生

何意文章奪化工。清高兼仰古人風。徽音自和龜山操。芝草曾攀角里公。萬頃波瀾廻筆底。千秋日月揭囊中。只今誰掣鯨魚者。一片扶桑碧海東。

送錦子保還二株松

落落雙松覆鎮城。流膏更入鼎中清。還鄉已遂懸弧志。鹥國猶存報主情。黑塚陰風迷鬼火。白河秋色斷人行。極天關塞如相憶。好託飛鴻一寄聲。

哭南條山人四首（山人名孟緯字仲裕川名氏房州人）

日月悠悠獨臥情。風塵咫尺負柴荊。徒思伏枕扶羸病。豈計殊途隔死生。萬里挽歌誰執紼。邙山涕淚轉霑纓。由來信士稱難得。深愧當時范巨卿。

其二

柘樹村西孤草亭。蕭蕭木葉下空庭。澀橋流水長如此。中野悲風不可聽。災厄難消重九日。月光偏犯少微星。明年縱遇登高會。忍把黃花醉玉餅。

其三

知君身世本相忘。濟勝看將遍四方。西海煙波通客跡。南山薜荔倚僧房。生前負笈輕千里。病裡傭書任數行。試賦大招招不得。孤魂安在白雲鄉。

其四

壯歲行藏思不群。長看高尚出塵氛。折腰難屈陶元亮。遊履將圖宗少文。情話偏遺親友愛。詩篇每恐世人聞。千秋房嶠鍾神秀。誰識南條倦隱君。

早朝口號

早朝車騎暫徘徊。共待平明玉漏催。坎坎鼓聲猶未盡。嚴城鐵鎖曙光開。

和答公修見寄

一時同調属青年。絕唱彌高白雪絃。下里數人憐我和。中原三舍避誰賢。花含彩筆詞場色。月照冰心酒肆前。夙昔牛門稱四友。看君詩卷寂先傳。

暮秋同遊金輪寺

金輪一轉烏山西。古寺寒陰鎖綠溪。皇子陂通秋水漲。梵王臺入法雲齊。郊天落木迷鴻影。野色過

レ橋送ニ馬歸一。憶昨春風雙樹下。探芳拾翠自成レ蹊。

歲暮獨酌

獨酌清樽一醉歌。玉山頹處正嵯峨。胸中磊塊應ニ須ク澆一。身後功名豈足レ多。日月能開ニ青眼一少。風塵轉逐ニ白駒一過。人生幸有ニ忘憂物一。遮莫年光送ニ逝波一。

甲午早春送大年禪師還峽中

峽間天險鎖ニ岩巒一。錫杖歸飛上ニ碧霄一。五歲一朝丹鳳闕。三車幾度白猿橋。春風別後花應レ發。關塞行邊雪未レ消。唯有ニ支公能愛レ駿。驛駒山色爲レ君驕。

早春觀海先生邸舍集得春字

此日高堂宴。銜レ杯眺ニ早春一。神門佳氣外。雉堞御溝濱。草與ニ玄經一長。花窺ニ絳帳一新。不レ須ニ南郡妓一。已醉ニ問奇人一。

獨酌

獨酌望ニ青天一。青天何所レ識。唯憐濁酒杯。不レ帶ニ浮雲色一。

題虎溪三笑圖

終年不レ出レ山。一日不レ知レ禁。借問遠公心。相忘爲ニレ誰甚。

過池上本門寺

長榮山色碧嵯峨。十里松杉帶ニ薜蘿一。日出ニ園林一馴鼠走。雲生ニ梁棟一老僧多。門前古磴穿ニ苔鮮一。池上幽香識ニ芰荷一。總爲ニ法華能可レ轉。迷心頓欲レ託ニ巖阿一。

秋夜唫

秋夜漫漫不レ可レ極。展轉牀頭復反側。木葉飛爲ニ風雨聲一。欹レ枕仰看ニ明月色一。悲莫レ悲ニ兮秋氣悲一。秋來秋去長如レ斯。襄王屈宋忽焉沒。短歌一曲激ニ楚辭一。

遊仙曲示山子訓

劉郎惠然攜ニ我手一。行行且酌紫霞酒。一醉飄飄何所レ之。天台山北洞門陲。洞門纔開大道通。屋舍儼然倚ニ簾櫳一。簾裡絃歌聲宛轉。陌頭銀燭影玲瓏。遙指瑤臺十二欄。玉簫吹落彩雲端。縹緲疑步ニ太虛上一。二女環珮鳴珊珊。相見如レ舊偏繾綣。笑言郎等來何晚。瓊觴持贈流霞漿。羊脯交[illegible]胡麻飯。帳外東西各有レ床。蹤履遲遲入ニ曲房一。羅幃自籠九微火。翠被徐薰百和香。雲行雨散情何歇。鐘鳴漏滴夜未レ央。罪根未レ滅對ニ別顏一。忽駕ニ長風一須臾還。古來流俗何所レ樂。悔失ニ仙骨一落ニ人間一。

贈淵上僧

一謝人間事。安居絶澗中。遣身甘寂寂。瞪影觀空空。後夜孤松月。清晨萬壑風。猶嫌逃迹淺。洗鉢入林叢。

東橋新成

飛虹欲飲大江流。結構新分古總州。元凱建橋通萬里。相如題柱幾千秋。彩雲斜落金龍影。白鳥空浮墨水洲。昔日扁舟爭渡處。憑欄却憶王孫遊。

西鄰加藤氏之子八歲爲詩攜謁蒼山上人同諸子賦

西鄰童子氣清高。八歲幽情入綵毫。未向龍門通請謁。還陪蓮社喜周遭。渥洼名種駒千里。丹穴將雛鳳一毛。支遁舊耽神駿愛。更令詞賦屬吾曹。

將進酒

君不見扶桑白日出海天。驚風倏忽沒虞淵。人生雖壽必有待。莫將大年笑小年。不知何物解紛紛。唯有清樽動微醺。樽中竹葉綠堪拾。何可一日無此君。爲君沽取十千酒。一飲應須傾數斗。已當玉杯入手來。胷中復有磊塊否。世人汲汲名利間。歡樂未極骨先朽。千金子萬戶侯。於我如蜉蝣。與君樂今夕。一醉陶然寫百憂。滿酌勸君君滿引。有酒如海肉如丘。

除夕同公修尋元石師水月菴分韵得天字

同游攜手去。散步野橋邊。日入西山氣。春回北斗天。寧知除夕興。偶訪六時禪。芴室新營後。柴門古寺前。赤城臨短壑。白馬激飛泉。鳥集孤村樹。人歸十畝田。果蔬甘草食。爐火冷茶烟。未定浮生計。空憐此地偏。談玄諧夙志。觀世感流年。水月能相照。重驚石上眠。

早春喜森周夫見訪得吹字

青山詞客訪茅茨。偶坐偏憐白日遲。風色纔從蘋末起。梅花還待笛中吹。高歌一曲誰能和。濁酒三盃醉莫辭。離索春來求友處。與君先已聽黃鸝。

暮春弔梅兒冢得肴韵

十里墨河橫北郭。千秋嬴博倚東郊。生前佩韘餘芳草。冢上垂楊拂露梢。一自歸鴻徒失侶。偏令乳燕獨辭巢。行人弔古三春暮。雨泣紛紛灑白茅。

春夜同公修山士訓邀熊阪子彥飲城東樂庵時子彥自東奥至

千里驊騮冀北來。周旋喜得龍媒。開筵四海迎

兄弟當戸星映酒盃。輿縱黃公壚上飲。歌憐白雪曲中才。城烏啼送春宵月。共樂新知醉未回。

春日同山君忠岡修闞叔成季成熊阪子彥山道甫陪観海先生宴山士訓得廬字

門下風流御李初。幽期卜得故人廬。中原強從詞社負郭閭閻簇客車。開宴新花迎几杖。當歌啼鳥近階除。由來斯道稱山斗。喜列群星聚太虛。

春夜同士訓道甫河惟寅野美卿宴蘇百順

主人千石酒。迎客醉春宵。賦就看華燭。更閑弄洞簫。黃鶯花外囀。彩鳳曲中調。已接初筵坐。從茲不待招。

送熊阪子彥還東奥二首

故園東望白河關。客裡行裝計日還。驛路朝過阿武水。錦衣春映信夫山。鴻書各地何能達。鵬翼垂天不可攀。知汝已酬千里志。羞同兒女動離顏。

其二

春風携手出江城。共送鄉關萬里行。都下煙花臨祖道。奥中形勝指歸程。秦碑半入苺苔沒。宛馬齊銜苜蓿鳴。更向香山歌古調。千秋不淺美人情。

梅雨新晴

梅天三日雨。一夕入新晴。莫使商羊舞。猶看蝃蝀生。殘雲凝積翠。落照引餘淸。罔兩隨孤影。徘徊觀物情。

夏日同山道甫登金龍山懷叔成士訓

金龍臺上夏雲多。結作奇峰落翠河。徑遶藤蘿千樹合。風吹蘆荻一帆過。已同臨海登山屐。更和滄浪鼓枻歌。醉裏賞心移白日。詩成誰不憶羊何。

夏日寄懷栗士弘

天邊玉水下溝渠。無復東流送鯉魚。春草臨岐芳句外。晴雲荷鍤麥秋餘。祇緣一日如三歲。轉似離群嘆索居。高尾山頭讀書處。時時來往故田廬。

七夕同井玄里闞叔成大久君節山道甫山士訓島子諒蘇百順野美卿河益之邊公僚栗士弘集元石師水月庵

白馬臺南十畝田。田間一路訪栖禪。與同晉代諸賢會。歌入豳風七月篇。天上銀河通瀑布。簷前祇樹散秋煙。虎溪今夕憐三笑。不羨星橋鵲影懸。

七夕同諸子集水月菴既夜月下郊行六首

佳節星河會。閑房水月心。爲耽塵外賞。自絕世

聞音 坐借同明照。杯憐許禁深。未知幽興極。攜手出禪林。

其二

盤水清流淺 椿山片月孤。石苔隨意步。野火入看無。橋斷臨青壁 人稀度白蕪 浮游皆率爾。不必哭窮途

其三

斷岸千尋水。奔流萬壑雷。玉龍行驟雨 白馬撼香臺。不得支機石 唯含濁酒杯。還疑尋碧漢 一犯斗牛廻。

其四

疏蘂從何歲 長堤猪水通。煙迷蒼鼠谷。松古馮夷宮。裛露侵衣冷。流螢向月空。何須搖羽扇 散步足涼風。

其五

山徑藏茅屋。依稀八九椽。荊榛堪代燭。土銼轉生煙。不辨青宵色。行吟素月天。欲酣壚上醉。自有阮家錢。

其六

松下班荊坐。風林破鏡飛。高田收素影。大壑隱

清暉銜帶之星去。偏尋[illegible]歸。明年逢七夕。此會復應稀。

中秋同井玄里大久君節由道甫山士訓蘇百順河益之邊公領粟士弘高田郊行至鼠山作十首

絲管紛紛萬戶聲。共迎良夜候陰晴。無人不道看明月。別有吾曹非世情。

其二

野外同人且自將。清風當飲勸飛觴。怪來片片浮雲散。恰似東林月出光。

其三

高田一路兩三家。斷續疎煙接水涯。忽見月光分兩岸。皎如風露灑蒹葭。

其四

鏡影橋邊鏡影懸。流光如水水娟娟。鯈魚應復窺吾輩。濠濮幽情此地偏。

其五

鼠山秋色見臨睎。十里荊榛踏作蹊。唯有空中孤月色。荒煙何處辨東西。

其六

憶昔山中獵騎移。翩翩白羽射熊羆。躊躇莫唱凌雲

賦。散步徒歌明月詩。

其七

風外松杉帶白雲。東山咫尺鬱難分。七盤行轉藤蘿月。佇立思君不見君。（泉山南有東山七曲）

其八

圯上青苔踏月行。長流一曲入看清。尋溪欲望犀淵色。遙隔幽篁聽水聲。

其九

棣棠村落隱清輝。今雨偏隨舊雨飛。欲向幽人廡下宿。不知何處借油衣。（高田ノ村因棣棠村ト相傳フ太田道灌公遇雨借蓑處）

其十

行雲引雨霽西郊。月氣新含滴露梢。三五清光携滿袖。好乘歸醉叩衡茅。

送栗士弘之駿陽八首

東海長亭數十程。軺車何日駿陽城。同行盡是青雲士。一曲誰聽白雪聲。

其二

重闕遙望白雲間。黛色逶迤不可攀。我寄文章還造化。勞君欲託玉函山。

其三

三島神山鎮鬱葱。祠壇映出彩雲中。到時如得長生藥。應笑秦皇使未通。

其四

騷人獨立田兒浦。軍監行吟清海關。猶有鈴聲過驛路。長看雪色表名山。

其五

長松落影氣蒼蒼。三穗原頭望夕陽。神女當年游此地。翩躚遺却素霓裳。

其六

能山宗祀肅微微。丹雘新添古殿扉。想見漢高三尺劍。于今草木有光輝。

其七

莫道前期更易逢。願乘飛夢一相從。應知我寄愁心處。皎皎天邊吐月峯。

其八

西望三峯落日斜。碧雲縹緲隔天涯。佳人別後能相憶。持贈芙蓉一朶花。

九日臥病

三秋日月遇重陽。萬里風霜臥一堂。抱疾空牀徒撫枕。登高何處不飛觴。天邊白雁啾啾下。地上

黃花細細香。覧レ物感レ時聊俯仰。百年心事正蒼茫。

桶季成將之西肥時余臥病闕面別情見乎辭三首

聞君萬里自レ玆辭。九月風霜滿二路岐一。伏枕難レ臨二離酒處一。行粧遙憶授レ衣時。阮家淸賞誰靑眼。馬氏才名最白眉。莫レ恨離筵違二面別一。心交十載獨相知。

其二

雄藩世子出二江城一。千騎東方借二寵榮一。京洛雲迎二飛蓋一起。浪華風送二挂帆一輕。詩篇已有二驚レ人句一。伎術新從二就國一行。到日阿蘇神嶽下。寧無三大藥得二長生一。

其三

誰道談天不レ可レ窮。九州遙在二一區中一。遠遊殆欲レ觀二寰外一。壯志何唯盡二日東一。鶉火列星連二紫海一。熊城白雉倚二蒼穹一。行人安穩帆無レ恙。吹送煙波萬里風。

秋夜病懷二首

九月寒衣擁二臥牀一。病來秋思轉凄涼。鴻聲斷續秋風裡。漸覺天邊夜有レ霜。

其二

通宵不レ寐淚闌干。無レ奈秋光病裡殘。多少昨遊行樂事。一時還作二目前看一。

觀彥嶺龍草廬咏牡丹餅詩步其韵

唐代繁華滿二帝城一。芳餐更借二一枝名一。紫霞蒸出團雲色。素月疑聞搗藥聲。康樂七言連二隽永一。何曾十字不二分明一。竹間水際時攜レ饌。豈讓秋風把二落英一。

哭觀海先生二首 安永四年乙未冬閏十一月二十三日下世

龜山秀色舊鍾レ神。昔自丹陽一俊人。少小才名稱二穎悟一。由來經術正紛綸。空餘淵客盤中淚。忽失侯門席上珍。慟哭應レ傾天下士。何唯吾輩苦沾レ巾。

其二

十載曾窺數仞牆。追隨門下未レ升レ堂。後生謬比通家愛。兩丈時陪二隱几傍一。一夕風飃颺二白日一。千秋奎璧失二精光一。只今已絕微言緒。徒抱二遺文一仰二彼蒼一。

杏園詩集卷一終

杏園詩集卷二

多西大田覃子耜著

戲詠福壽草

東風幾人碧窓紗。喜見正朝發異花。影似青葵傾日切。色疑黄蝶遠翻斜。幽奇爭賞移春檻。擔荷時過種樹家。縱有一枝稱富貴。芳名那得獨相誇。

遙和龍草廬吹火竹筒韵

美名曾擅會稽東。直節虛中截作筒。窮谷陰隨吹律暖。寒灰色變滿爐紅。漢宮熟食傳鑽燧。遶竹炊烟起釣篷。大塊非唯稱噫氣。更看人籟巧生風。

三日感懷

賞心易負時易失。桃李花飛將結實。暮春春服浴沂時。永和少長修禊日。我思古人悲昔遊。千載之下感如一。自慚奄奄地下人。見在偏同餘志匹。去秋伏枕度冬春。轉覺烟霞爲痼疾。美景良辰雨兼風。柴門一杜都不出。偶逢三日好風光。力疾寬園立夕陽。間關啼鳥背人語。流亂遊絲惹恨長。縱把羽觴臨曲水。愁來恐似九回腸。

川口曉發

如雲千騎出郊關。川口風煙驛路間。擧首東方猶未曉。天邊何處日光山。

雨後次巖月驛

郵亭花落子規啼。細雨如煙綠樹迷。殘堞不懸巖月影。溟濛夜色古城西。

栗橋渡題浮橋

刀禰橫流渺碧空。阪東形勝最稱雄。千尋鐵鎖連沙上。一道清塵起水中。要地曾看如帶色。造舟新作濟川功。共知雲從天行日。何處津梁不可通。

小山詞五首

小山何所有。歌舞滿娼家。不見叢生桂。唯栽解語花。

其二

朝辭東奧客。夕送下毛郎。借問二州路。別離誰短長。

其三

聞歡發小山。爲歡攜所有。莫將一椀茶。未及千鍾酒。

其四

東方千萬騎。來宿小山下。何用識使君。中有紫騮馬。

其五

朝看思川水。暮看思川水。儂思若川流。君思亦何似。

大駕次宇都宮

欲笑漢皇封泰岳。還輕鎌府獵芙蓉。江都大道通俟服。毛野名山謁祖宗。星動千門傳列炬。天連萬幕帶崇墉。今宵駐駕孤城下。羣從如雲馬似龍。

上日光山五首

斷岸架雙橋。深山通一路。欲探領下珠。恐遇驪龍寤。

其二

流分大谷川。雲抱高雄石。散步踏殘虹。天風吹絕壁。

其三

曲磴誰能步。垂蘿尙可捫。徘徊撫孤石。或恐動雲根。

其四

瞑宿二荒山。曲肱風雨裡。起看孤月光。明滅奔湍水。

其五

斜月隱山中。松杉風色冷。忽聞傳曙鐘。誰不發深省。

丙申四月恭觀　大駕登祀日光山

日光神嶽欝岧嶢。五彩卿雲映九霄。瀑水中分靑壁色。飛虹忽動赤欄橋。塵淸警蹕千官列。溪轉松杉一路遙。應有鳳凰來候駕。似聞仙樂奏簫韶。

其二

太祖威靈鎻寢陵。陽明門外望崚嶒。黃金榜映中天出。白玉階含宿霧凝。萬國盡歸三尺劍。四夷來貢九華燈。請看百世神如在。赫赫東方赤日升。

其三

晴雲捧日遠高居。縹緲群神降紫虛。淸廟絃歌陳俎豆。薰爐香氣襲簪裾。百年難遇升平節。太史應裁封禪書。不作周南留滯客。縱觀偏喜近階除。

晚下日光山

松檜含風積翠分。飂然曲徑下斜曛。歸來滿袖攜何物。鬒髮山頭片雲。

巽栗士弘

憶簡才情總角年。由來言笑轉相憐。已逢二家難一嗟二淪落一。更接二詞筵一說二自然一。屈レ指汝南論未レ定。爲レ郎地下賦空傳。千行涕淚如二流水一。好去殷勤到二九泉一。

同諸子集耆公山房得冷字

久在塵網中。心神不レ能レ靜。幸因レ紆二勝引一。重得レ遊二幽境一。點綴雨後雲。熹微客中景。餘清入二晴軒一。宿陰凝二翠嶺一。身忘二纓紱牽一。坐愛二繩牀冷一。吾師一揮麈。迷心頓可レ省。談論淵且玄。欲レ汲慙二短綆一。

詠松壽家君六十一初度（安永丙申九月三日）

長松殊二衆木一。偃蓋倚二高堂一。自在二風塵表一。安生二培塿傍一。雲霄何落落。楨幹且蒼蒼。宜レ避二千峰雨一。偏凌二九月霜一。根株多二節目一。礧砢後二彫傷一。身學二蟠龍勢一。心同二野鶴翔一。守レ門無レ變レ操。施レ厦厭レ爲レ梁。玉樹全爭レ色。芝蘭互讓レ芳。不レ孤因二庇蔭一。吹萬奏二笙簧一。豈但家庭美。兼開二翰墨場一。淸談堪レ作レ柄。並坐勸二飛觴一。更待流膏滴。看生二琥珀光一。

送野子賤還湖中

滄嶽高城滾海濤。蓴鱸一熟故鄉還。白雲立レ馬嶠函谷。明月窺レ人石鏡山。正始遺音寥落後。中原良會有無間。送レ君轉作二千秋思一。不三是尋常動二別顏一。

九月十日同公修叔成尋白貲墅（墅在二和泉國池谷村舊南郭先生所營也壁上有忍海上人畫猿鶴）

青山辭二負郭一。白貲訪二荒園一。帳裡聽二鳴鶴一。牀頭古二畫猿一。堦空苔自上。節去菊猶存。憶昔披二榛路一。追隨客滿レ門。

水仙花

忽怪凌レ波出。還看帶レ雪新。鵝黃兼二粉白一。髣髴洛川神。

墨河雪望

風雪霏霏灑二笠蓑一。獨乘二清興一且行歌。孤村暮色迷二牛渚一。一帶寒流辨二墨河一。水上白鷗驅自近。沙邊翠竹望愈多。不レ知何處尋二安道一。時有二輕舟鼓レ枻過一。

擬晴雪早朝

千門白雪欲レ晴時。落月流光照二羽旗一。積素曉開三殿色。凝花春動萬年枝。恍看二玉佩一連二珠履一。爭逐二鶯行一集二鳳池一。天子應レ裁二黃竹唱一。侍臣羞レ獻二郢中詞一。

送滕童子隨權僧正興公重遊高尾山分得庵韻（山在

八王寺

西鄰一童子。嬉戲厭鳩車。總角耽辭藻。清言發齒牙。詩書時已誦。聰慧日愈加。愛見青衿色。來窺絳帳紗。遊方聊負笈。省覲暫歸家。非擇三遷地。重攀百里遐。行裝裁彩服。飛錫伴袈裟。驅馬關外。褰裳玉水涯。七盤緣路轉。絕頂插天斜。雲鎖毉王院。風薰優鉢花。深林隨鹿豕。大澤臥龍蛇。突兀層巒秀。崔巍積翠遮。山空雨寶玉。瀑響彈琵琶。庭上馴棲鴿。窓前亂宿鴉。幽情放丘壑。逸興滿煙霞。佳句多神助。沈吟避世譁。偶陪彭澤酒。或侍虎溪茶。去國經氷雪。離群送歲華。寧將蹇劣退。莫以才豪誇。力作千秋業。揚名報阿爺。

戊戌新歲作

新正冠蓋自紛紛。公子王孫日作群。碧水氷消春澹蕩。丹樓霞起氣氤氳。開盤已頌椒花色。對酒還憐柏葉醺。三十無爲違夙志。羞將小伎讓相聞。

早春寄豆州淳上人

曾飛錫杖託深山。幾見年華往又還。雪滿士峰天突兀。春生君澤水潺湲。牀頭一卷經無恙。石上三衣坐自閑。身在樊籠猶未脫。何時躡屩試躋攀。

病中喜尾陽岡田挺之見訪

茅土宗藩擁海隅。天分參尾白雲殊。遙辭蓬島群仙侶。更訪牛門一病夫。幽獨客來堪倒屣。遠遊篇就報懸弧。亦知愛弟耽詩賦。二陸風流與不孤。（岡田示所著晞驥偶詠者及弟仲任蓬萊富士二賦）

三日臥病

憶得良辰樂事多。風流王謝近如何。煙霞不負蘭亭會。歲月空隨洛水波。氣暖桃花浮自醉。日斜羅綺踏青過。只今俯仰爲陳迹。伏枕三春一放歌。

送東圓上人之高野山

欲尋玄聖踏遺蹤。直指摩尼第一峰。南紀遙通千里路。上方長響六時鐘。談經後夜聽靈鳥。持呪空潭制毒龍。自是海公留卓錫。子今深洞有孤松。（性靈集有後夜聞佛法僧鳥詩）

贈岡田挺之

青春一抱疾。朱明猶未起。自使人事遠。若在空谷裡。門庭無跫音。散帙讀書史。以之當芻豢。悅心於至理。茂陰重成幄。清風灑隱几。流聆

嘉卉長。春戀同懷子。客自蓬萊來。颸颸枉玉趾
惠然顧我笑。賞心無窮已。傾蓋如舊識。古人言
乃爾。今日會一堂。他時阻千里。死生與契闊。永
矢彌終始。

山士訓紫藤

夏簟清風吹灑香。紫藤花發竹林傍。杯中不怪龍蛇
影。上有千尋老蔓長。

送岡田挺之還尾陽

良時傾蓋轉相憐。無奈今朝共黯然。懷袖空餘離別
淚。歸裝唯有遠遊篇。潮平月色生鳴海。暑退秋風
滿熱田。聞道蓬萊宮闕近。知君日夜接神仙。

七夕同山士訓山道甫野美卿諸子遊高田有感

梧桐一葉影纔飛。牛女二星期不違。天上年年良會
是。人間歲歲昔遊非。曾卜幽期在今夕。于今四
年命山屐。舊交零落似晨星。始信人生如過隙。路
入城西早稻田。高田直走下田邊。古松老杉森爲列。
下有茅茨八九椽。棣棠村冷多時雨。青蔚峯高落日
天。漸辨銀河流左界。忽看明月映前川。手把瓊
觴望素秋。枕簟無塵爽氣流。醉後揮毫詩興動。
臨風吟咏意悠悠。千石忘憂長白滿。一時乞巧又何

求。悲歡不定炎涼變。昨日華屋今日丘。君不見。雲
漢乘槎奉漢使。緱山駕鶴謝人事。唯餘天上謫
仙人。長得年年會此地。

公修宅觀老君像得風字

遺像誰陶鑄。乾坤橐籥中。人間唯柱史。李下一仙翁。
望氣情空切。猶龍嘆未窮。光塵如可仰。坐欲接
玄風。

少年行

碧蹄輕踏滿城花。意氣翩翩白鼻騧。囊裡千金何足
惜。揮鞭直入杜娘家。

齋中讀書

楊子守泊如。漆園遺吏務。或可嘲寂寞。庶以
消世慮。虛堂絕囂塵。閑居多暇豫。嚴霜凛滿地。
北風吹庭樹。感此歲時移。俯仰思今古。隱几
讀我書。濡翰且作賦。寥寥千載下。日暮相遇。
九原如可起。尚友將誰慕。

題蘇子瞻遊赤壁圖二首其一得人字

赤壁知何處。風烟畫裡新。舟疑浮一葉。天自絕纖
塵。作賦嗟陳迹。披圖憶古人。如聞洞簫響。明
月滿江濱。

其二得山字

當年蘇學士。一謫謝朝班。二客黃泥下。扁舟赤壁間。月明空木葉。霜落古江山。孤鶴隨毫末。飄飄不可攀。

叢抄與關叔成山士訓森周夫井伯秀子厚集苔山上人山房得一東韻

滔滔江漢流向東。悠悠日月去無窮。風塵爲吏驚歲晚。劇思晉代諸名公。東林結社十餘歲。歲歲賞遊幾回同。柴門朝叩靑山外。麈尾閑揮白社中。蓮漏頻移催短景。梅花欲笑待春風。臘酒三杯纔犯禁。醉顏已映夕陽紅。到來一絕風雲思。不管人間窮與通。此生苟悟無生理。將歸釋部談空空。

讃陽　崇德廟得支韻

先皇遺廟白峰陲。零落丹靑日月移。我馬曾生周甸服。牝雞空廢漢朝儀。自書玉字沈滄海。不見金輿反赤墀。流恨無窮千歲下。使人長誦鴟鴞詩。

鎌倉懷古得虞韻

源大將軍有新圖。英風忽掃虎狼都。八州形勝朝千里。三世豪華占一區。明月空低星井沒。白雲長傍鶴岡孤。當年第宅今安在。唯見春光滿綠蕪。

岐蘇懷古得二冬

旭日纔晴積霧重。將軍躍馬倚崇墉。當年叱咤千人廢。唯有悲風度亂峰。

七娘詞

城北佳人字七娘。房年幾日託僧房。幕中巢得紅襟燕。簾外窺看白面郎。艷質曾經迷下蔡。幽期一失憶西廂。如今火底蓮花在。縱死猶生並蒂長。

牡丹得眞韻

京洛豪華日夜新。遊蜂戯蝶趁佳人。詩篇謾擬謝康樂。濃艷爭稱楊太眞。宿露凝香籠錦幛。輕風拂檻隔紅塵。請看桃李成蹊後。一種名花別有春。

春日卽事

日暖春風度綠蕪。花間黃鳥隔林呼。相逢不嘆無知己。天下高陽是我徒。

霞關春望

城南大道接櫻田。花覆樓臺柳帶煙。白虎門臨滄海出。紫霞關並綵雲懸。原嘗意氣三千客。韋杜豪華尺五天。不見東都如此壯。寧知春色遍山川。

題李白看瀑圖

金粟如來出世間。偶看瀑布匡廬山。塵襟洗銀河水。髣髴青蓮醉後顏。

三叉口避暑

南國橋南炎暑少。三叉江上爽涼多。賢豪不但袁劉飲。歡樂兼看趙李過。

又

樓臺夾岸大江灣。三派清流避暑還。願得浮家兼泛宅。時時來往二州間。

夏日遊戸塚村題小芙蓉

九仞新成一簣功。芙蓉忽見秀晴空。偶凌絕頂攀高樹。滿袖攜歸六月風。

小芙蓉

不假天工妙。殘山富嶽開。坐看千仞勢。似起九層臺。洞口移巖石。林間剪草萊。還疑巨靈力。一夕劈崔嵬。

其二

突兀小芙蓉。蟠蹐出古松。功應盈一簣。山自象三峰。疊石層雲起。臨池積翠重。為耽塵外賞。聊欲進孤笻。

壽井玄里初度引

曾聞城北紫芝園。如雲茅子盡攀援。借問當時受業者。至今海內幾人存。唯有井春傳經術。猶自紛綸事討論。兼看好事通方伎。聲名往往來高軒。時探青囊授醫藥。或攤黃卷避塵喧。華甲今年六十九。爭稱上壽客滿門。賓客盡是名下士。吾儕敢得陳一言。幸遇高堂陪几杖。先進貳膳飽盤飧。別有上池水不盡。灑人銀椀與金樽。芝蘭玉樹看羅列。趨走庭前弟與昆。九如宛轉歌聲起。五色斑斕舞袖翻。南薰吹送南山頌。一時傳誦遍中原。

三派江觀煙火戲

三派江頭八月秋。樓臺如畫映清流。樓上燕歌催趙舞。橋邊桂棹駐蘭舟。就中豪華誰可比。東方使君居上頭。上頭高居臨江渚。彩棚半捲玉簾鉤。簾前更命煙火戲。斯須小舟盡蟻至。初疑霞彩水中飄。漸見天花空裡墜。積水茫茫宿海星。明珠滴滴蛟人淚。別有崑崙十二臺。九枝華燈次第開。慶雲五色呈祥瑞。爆竹一聲送怒雷。此時魚龍亦潛躍。此時明月且徘徊。幻似秦石驅海隅。影如六鷁過宋都。南鄰北里看來往。西舫東船共一呼。何但中人十家

產。一夕千金盡歡娛。五夜鷄鳴百戲罷。冠蓋縱橫散九衢。

十三夜月

莫道嫦娥寡。猶思織綺年。欲謀連夜醉。不待中秋天。秦鏡纔分面。齊章已作篇。銀箏十三柱。恰是好彈絃。

十四夜月

今宵比前夜。月色似還多。不羨西園讌。聊爲下里歌。漸看開桂樹。試欲酌金波。三五看相近。陰晴定若何。

十五夜月

萬戶乘明月。絃歌徹九霄。商樓情不淺。北海客相邀。自覺清虛近。寧知碧漢遙。此時無盡醉。何以報良宵。

十六夜月

如待佳人至。沈陰日暮雲。霏微星彩散。皎潔月華分。攀桂憂芳歇。開樽任酒醺。清輝猶未減。對影轉憐君。

十七夜月

三秋明月下。數得卜幽期。玉兎仍圓夜。蟾蜍欲缺時。浮雲有變態。冷露數淒其。但願携佳客。年年及此時。

暮過山寺

白日收餘照。幽溪鎖積陰。不聞孤磬響。寧入數峰深。無事僧歸院。爭棲鳥滿林。上頭何處遠。昏黑恐難尋。

余聞烏石山人之名久矣及見耆山師及河子昌竹岡子益熟山人之爲山人而想見其瀟灑拔俗之標矣今歲山人甫八十四方之士皆賀余亦因耆山師致一詩以代華封之祝且寓景慕之意云

烏石山人烏角巾。隱囊匡坐絕風塵。胸中磊落都無俗。筆底縱橫自有神。曳杖時看鳩嶺色。臨池日對鴨河濱。壽筵分得金莖露。洛下群公遍縉紳。

謝諸子賀生子

家園杯酒賞芳辰。忽見仙桃結實新。應是荊州豚犬種。謾稱天上石麒麟。

羅漢寺

崚嶒碧瓦出林叢。第五橋南一徑通。四八珍祥盈妙相。半千羅漢住虛空。曲廊宛轉行應遍。飛閣逶迤望未窮。更有大悲新示現。長懸慧日照江東。

時大悲閣新成

賀藤童子加冠

堂上淸歡對玉笥。看加冠服過庭趨。知君已試遊方志。莫作詩常小丈夫。

八島懷古得東的

一自[illegible]庭出紫宮。山東諸將氣何雄。風帆忽起孤松下。日角空稱八島中。傳國寶還秦地府。乘流舟失楚人弓。千秋陳迹今安在。唯有煙波滿碧空。

立春集賀熙先生勝賞樓

門外如雲簇客車。煙霞自入立春初。簾前勝賞分靑甸。樓上淸歡望紫虛。雪滿芙蓉翻一曲。冰消鶴雀進三魚。更逢蘋末東風起。藻思翩翩興有餘。

海門春望

靄中淑氣藹陽和。出海雲霞望更多。天霽曙光看浴景。時平風色不揚波。百川水逐流澌下。萬里帆凌宿霧過。唯有坐茅垂釣客。春來猶著舊漁簑。

壽者山上人七十

綠嶽曾推第一名。早辭官寺謝浮榮。回思自足三千坐。獨抱明珠十五城。欲向空門稱上壽。咲言人世本無生。春曹幸得忘年愛。長此靑山結社盟。

芙蓉館聞井金峨先生講詩

十年離索憶當時。儒雅名流復有誰。齊詩館中曾銜命。忘歸亭上數題詩。風移北海諸侯國。學起東方一世師。今日聞君論四始。非唯匡鼎解人頤。金峨曾講

東向熊陵子彥惠酒錢同圖公修關叔成山士調遊曹司谷宴向耕亭

昔揚雄嗜酒人載酒從遊[illegible]王之門不教作忘歸亭記

共弄春光步綠蕪。曹司幽谷擅壕隅。一雙北雁傳靑素。千里東風送酒須。嵇阮元非白眼侶。河山轉達貴公壚。美人爲是投金錯。我輩猶能對玉壺。

春日馬景德樓上送佐賀文學石仲車還肥前

高亭百尺瞰壕池。千里春光送客時。風雨幾年違舊識。鶯花滿地入新詩。前肥直接飛鸞島。西海遙攀若木枝。此會爲關離別意。停杯轉愛夕陽遲。

春日卽事

春眠漸覺又移牀。坐臥呼童進一觴。遲日閒花看自落。遊蜂戲蝶爲誰忙。

鈴木循人宅山茶

一樹山茶過酒淸。春光添得寶珠明。醉來同臥閑

庭上。落レ地殘花聽有レ聲。

東叡山看花

帝子名園講二龍靈一。天台勝地鎭二巖扃一。新花掩映瑠璃殿。曲徑盤回白玉屏。澆レ黛蛾眉連二步障一。銜レ泥燕語涉二翻經一。東風一起飛如レ雪。吹向二滄池一灑二晩汀一。

初夏遊日暮里

雨歇郊園外。新晴長二薜蘿一。山光收二彩翠一。風色屬二清和一。野寺尋レ幽入。村園探レ勝過。何須愁二日暮一。醉臥綠陰多。

其二

丘墟多二古意一。薄暮進二孤筇一。謡道二河島一。猶餘百尺松。桑田看二海變一。石逕被二苔封一。欲レ識二千秋事一。班荊問二老農一。

雷雨

突兀雲峰白日奇。陰森雨足暴風吹。一聲忽送驚雷響。正是前山欲レ破時。

五日同伴忠順從鷗翁集木子莊巢松館得庚韵

五日園林夏木清。最看涼氣滿二松棚一。蓋如二巢鶴簷前舞一。鱗似二盤龍鏡裡明一。華露時侵二蒲酒一落。薰風自入二葛衣一輕。牀頭更有二長瓢在一。繫得留連醉後情。

晏起

窓外日三竿。晏眠猶未レ起。寄レ言當路人。吾懶眞如レ此。

須磨懷古

勝迹遙臨二赤石一開。晴沙漠漠望悠哉。黄門遠謫三年涙。彤管幽情萬古才。雨過長松風色老。天高絶壁鳥聲哀。不レ堪三江上聞二吹笛一。月下蕭條送二落梅一。

送間叔成遊熱海

傳聞靈液有二仙蹤一。豆海湘山瑞氣重。地勢斜通二兩谷險一。泉源直指二日金峰一。登レ樓一碧堪レ窮レ目。染レ翰層雲欲レ盪レ胸。幽賞更既二玄對趣一。浴來何但洗二塵容一。

一碧樓名

苦熱

一堂難レ避レ暑。三伏氣交蒸。驟雨何時注。奇峰幾日崩。吳牛應レ喘レ月。魏井未レ分レ氷。徒待二涼風至一。窓前且曲レ肱。

初冬同山士訓川伯温熊仲弼郊行八首

偶伴二兩三人一。聊移二六七步一。餘霞散二赤城一。陰映丹楓樹。

其二

歩入二龍興寺一。慈雲帶二夕陽一。茅茨如レ許結。芟レ草倚二林篁一。（慈雲山名）

其三

晩出二蘘荷谷一。人煙冷二野堺一。前郁酒旗色。先入二眼中一青。

其四

龍劍精無レ恙。氷川水自寒。千秋思二帝子一。遺廟出二林端一。

其五

巣鴨村中樹。鳴鷄谷裡聲。疎籬見二煙火一。薄暮叩二柴荊一。

其六

郁落分二門巷一。園丁種二菊花一。花開千萬種。爛熳壓二陶家一。

其七

日落園林下。煙迷澗水濱。杖錢行買レ醉。不レ負二小陽春一。

其八

油衣何處借。風雨暗二千郁一。始覺幽栖客。終年不レ出門。

冬日同松子長六如上人及東叡諸尊者遊東漸院後山

東山古院絕二塵氛一。路轉閑園木葉分。霜露已荒三徑菊。煙霞忽散二陵雲一。池邊滿酌移レ床坐。巖下清談隔レ竹聞。一醉相忘賓主態。徘徊不レ覺二夕陽曛一。

水僊花

瑞雪晴來月色斜。玉人將レ采水仙花。窓前未レ見寒梅發。一種清標透二碧紗一。

猿江曉望

兩國橋東一水通。千家曙色望無レ窮。雲間落月低二西嶺一。岸上寒林起二北風一。霜滿二猿江一人跡絕。郁連二龜戶一野煙空。更看五百阿羅漢。遺像儼然古寺中。

春日同岡田忠卿伴忠順石井子彭赤松大經磯田仲馨集服有父信古堂

芳洲何處訪二君家一。滄海晴光射二白沙一。席上談如二鋸木屑一。窓前春對二玉蘭花一。雨過苔蘚沾二三徑一。日永牙籤滿二五車一。城北城南非レ不レ遠。坐忘二歸路一到二昏鴉一。（所居地名鋸匠街）

賦得花柳一園春壽奥田蘭汀翁八十

平安舊耆老。五瀨獨推レ君。養レ性看二花柳一。開レ園遊二

世氛紅倭絳帳亂。絲鉄金樽分。弟子皆稱壽。
春風酒半醺。

春日遊望汰閣

欲解劉伶五斗酲。江頭遙指旗亭。遲遲暖日含煙
白。楚楚新松映永青。鸚鵡杯中浮北海。大鵬天外
擊南溟。春風吹面晴光好。邀覓書生醉不醒。

贈歌妓阿仙

楊柳橋邊二水涯。如雲名妓妬蛾眉。爭傳一曲新歌
譜。誦得唐詩知是誰。

春日遊半渚

春草侵半渚。風光好繫船。三閭攀社樹。萬戶滿花
川。何用燃犀照。唯看膾鯉鮮。青旗何處有。取醉
且留連。

峽中懷古

忽聞垓下楚歌聲。天日悲風振樹鳴。蠻觸從來爭底
事。英雄割據果何情。一時空恃山河險。百世長添
日月明。嚴邑不封歸版籍。只今唯有中陽城。

幽居

一自杜柴門。風雨不復出。唯逃濁世名。敢比幽
人吉。晏眠猶未起。杲杲三竿日。花間時灌園。月
下或問昳。問我何所錫。皆閒心且適。蘭香徒自照。
蛾眉多見嫉。不如守其愚。養此樸散質。

晴景得色字

昨夜纔聞度雨過。今朝更見新晴色。花間黃鳥莫停
聲。如此風光不可得。

寄藤童子

清時無復覓遺賢。對策何須擧妙年。欲向空門
稱自是。頓令微笑坐青蓮。

題季成席上贈十一歲神童僧德龍（童越後州蒲原郡水原村無爲信寺僧）

童子遙辭北海隅。一朝聲價動東都。久無藝苑生
蘭蕙。豈計香風起苾芻。清賞當看嚴下電。新詩剖
得蚌中珠。人間未識金翅鳥。讀道龍駒且鳳雛。

十五夜宴醉月樓

欲傾天上絳河流。今夕重開醉月樓。欲笑齊歌三
婦艷。分光爭賞一輪秋。合樽促坐忘更漏。隨興遺
簪作酒籌。多少人間良宴會。無如是處美遨遊。

九月五日同伴忠順將過岡田忠卿賞茉莉花有事
不果聞一日至則花已謝矣因賦呈主人

茉莉纔開日。幽人折簡傳。佳期空自失。外物動相牽。
鬢駐殘雲色。花辭積雨前。暗風吹不盡。猶許嗅香

眼。（茉莉一名蠻華東喚名曰諸罕）

江城春望

春滿江城八百衢。豪華到處見雄都。氣晴餘雪含山色。日出殘霞散海隅。柳外塵埃誰並馬。花間粉黛共當壚。醉來寧作諸年少。不作乾坤一腐儒。

七月十二日有饋泥鰌魚者盡放諸溝聊作短述

平生我輩在樊籠。籠鳥池魚思不窮。晩向通溝放頳尾。悠然好去大江東。

癸卯十月八日下總州相馬農夫遇父仇于東都牛門市鬪而殪之詩以記之（農夫名富吉仇名甚内）

十七年前一失怙。竸馬天地泣諸孤。甘心若不殲讐敵。結髮何堪列丈夫。未紹夲來身伏[illegible]。寶刀揮處血模糊。北風吹雨牛門市。一日英聲振大都。

冬日登青松寺後山（寺稱萬年山山有千里亭遺跡）

曲磴攀幽峻。寒雲擁化城。亭窮千里目。松負萬年名。積水帆過影。空山葉落聲。滄洲石不遠。忘却吏人情。

哭河子昌先生

星岡夜色少徹幽。君去悲風動九秋。曾在市中甘隱趣。更臨池上接名流。右軍修禊誰當繼。道士籠鵞不可求。豈謂一朝如尸解。颼飀頓作采眞遊。（先生居幽坊坊一名星岡所居揭采眞字）

歲暮題酒家壁

富貴功名不可求。楚雲湘水望悠悠。今年三百六十日。半在胡姬一酒樓。

壽耆山上人八十

官寺元稱一字班。辭嫌榮利浩然還。三千社裡曾揮麈。四十年來獨閉關。嶠詩域應通赤阪。不騫詩欲壓青山。此筵何假當珍饌。笑汲清茶供破顏。

杏園詩集卷二終

杏園先生博聞強記海內具瞻不敢贅也其於詩早歲之嗜至老益篤是以冰甌雪椀之什積溢書廚今此所刻自明和丙戌迄天明初年僅々若干首皆少壯染指王李之日所作譬之一臠耳未足以厭飫也若夫八珍九鼎之豐三鬻七菹之美則當明嚼全集而知其味也

文政二年己卯獵月念四日

門人鈴木文謹識

杏園詩集跋

蓋聞神鷲野鶴翺翔爲淸迥之音山桂畹蘭鼓盪得馨香之氣依永和聲之律皆本性情幽人達士之章載分比興崇臺綺閣紫玉白紵之歌曲市橫塘小蘋瓊浦之唱益徵海外之才思洵推東國之風流大田南畝先生高才宏志逸思殊資摛文吐鳳麗管雕龍每搖筆似夙構偶出言而成文柏驂十四之吟早驚座客陸機二十之賦妙絕時人希逸之文江東固當獨步太白之句濟陽靡不流傳念夫卓犖之氣本似劉楨不羈之才原同阮籍然而淸泉白玉不矜雕琢華縣耳騏驥難受羈縻之制況乃耽情邱壑欲謝銀黃留意琴書寄懷風月簾床石几頻對月以微歌釣渚花林亦命儔而嘯侶昔者玉山主騷人之會監今前庾園建詞坛之旂鼓遂使山川潤色遐邇傾心猗歟東都貴有斯人茲夫桑柯墜葉苑穿靑女之容蒼卉含英已結玄仙之氣迺當東郊餞飲南浦送行越禽代馬暫爲萬里之遊跨羽乘軒少作三秋之別花晨月夕難追萍寄之蹤飲酒分題夢想杏園之勝因欽白雪庸修蒔菲之詞回首靑山聊誌別離之概云爾

乙丑仲秋月中浣日於長崎旅舍偶跋函山佚民鎭德

呈耆山上人

前日之會、誠不可忘、上人卜第之室、能容諸子、公脩叔成君節子諒、或馳才沈鬱、或覃思澹雅、或勃窣、或輕俊、亦各異其撰、君思雖初見、如舊相識、心雜若僕、未絕於蓮社、上人廣長舌、片言可以攝百萬之鋒、剖析玄理、間展戲謔、故能至使人々無不厭心、且自謂一坐玄度、舍我而誰也、及歸、僕曰、復舊蹟、則熟而可厭、不如乘月異道遊隱田、隱田之勝有可觀者、諸子從之、唯君節不顧而去、過原驛村、入酒家、主人頗醉、大可人意、相對嘲笑、雄飲大嚼、肉拔山、酒傾海、飄々乎有御風之意、有澗曰赤土、過橋則隱田、荒煙一帶、北風振槁、霜華滿天、寒月映水、水激巖石、月光注射、爲環爲玦、爲鉤爲珥、如珪判而璋合也、如碎金之錯鑠也、千狀萬態、不可縷形、田間一丘有熊野祠、履山蹊、披茅塞、飲石泉、蔭松柏、排閻宮之闥、叩玄牝之門、當是之時、三山之神未追飛柯低枝謝逋客耳、嘯歌笑敖、空谷和響、山下一夫手白挺來曰、何物狂夫昏夜闌入祠壇、子諒暗以杖頭餘錢、唯々而去、宛然乎謝康樂驚臨海郡、歸家就寢、耿々不寐、屋梁落月猶攀、上人提諸子嗟、出則折腰小兒、入則室人交讁、未嘗一日不爾々思前日一倜、狂奴酒態、豈敢儗之長者哉、上人固海鷗、諸子狎之故也、請恕、

呈大年禪師

今春尊者——朝東都也、主我吉見氏姊家、吉見氏與僕同居、旦暮相遇、親炙猊座、獻歲發春、尋常稱慶者屢至、應接不暇、僕雖疎懶、未能免俗、禮法中、無可與語者、當是時也、一談一笑、排遣俗塵、令我偸浮生半日閑者、尊者之賜也、別後辱翰貺、僕無一驛使嗣音、負荆負荆哉、不腆若業併鄙詩、謹呈左右、若托浮沈、詩表相思、歲暮寒甚、伏惟自愛、弟子大洞往否、煩侍者致意、寒族亡恙、勿以爲念、

賀瞽水母子遷勾當序

蓋國家瞽者之官、至檢校極矣、勾當次之、四分次之、餘爲庶、自檢校以至庶、苟籍瞽者、皆隸總

檢校、總檢校闕、擇檢校中最故者充之、有二等世祿、日南職事、總官屬陟群藝、參謀職事、不煩縣官、唯總官所令也、凡遣者必納貨總官以得所欲。總官分其貨於檢校以下各有差、藝有官而無職。或鍼醫、或道引、或操靡靡之樂、出入王侯、與俳優侏儒伍、或殖財利、藏於子錢家者、比比皆然、藝者水母子、武州兒玉人也、幼喪明。學俗樂不成。學鍼又不成。而皆非其好也。性好吾邦典故、沈潛國史、諷詠和歌、悱悱憤永、異乎藝者之撰、博聞強記、暗誦書萬卷、論辯如流、每負笈書、擿埴而行、使人讀之、側聽之、有疑不敢不質也、質之不得、很乎如無相也、退而有得、昭然如發矇也、至國家興衰之所繫與忠臣孝子之所履、便未嘗不泫然涙下也、其徒睇之、世人笑之、曰、國學非吾所業、曰、迂濶不近事情、水母子自奮不顧、終始與予學、其志彌固、學彌進、弟子彌衆、安永乙未春正月遷勾當、平生所遊諸貴、及弟子有力者所呴濡從與也、於是乎睇者緘口、笑者大慙、一如蘇季子佩六國印歸、昆弟妻嫂側目不敢視也、不亦榮乎、人皆賀之、吾貧無財、不能資子、又慚面國學、不能補子、姑序吾所聞以祝之曰、昔者丘明傳春秋、繼獲麟之絕筆、子夏序詩、開四始之業、此二子者喪明之人也、其所撰述、傳于天下、萬世受其賜、以彼觀我、國史猶春秋也、和歌猶詩也、彼何人也、我何人也、吾雖昧國學、幸有目知字、子負子書來、吾以吾字讀、日某在斯某在斯、而後子將有所擇焉、則有疑者矣、有很乎者矣、有昭然者矣、有泫然涙下者矣、子勉脩其學、不安小成、傳國史、序和歌、罔俾二子專美彼土、則不啻有餘師矣、謂之國華可也、昔夫睇者默、笑者慙、則鄉黨自好者之所榮、而僅足以驕其妻嫂而已、豈足榮子哉、余深知水母子志在此不在彼、姑從賀者之後而論及如此、雖曰無以與乎文章之觀、庶幾相師之道與、

送熊阪子彦序

東奧熊阪子彦少西歷遊三都、而不復知天下之大也、盡天下而唯知天下之大者、有觀海先生矣、恐先生之文章散逸、手書體別其什、還先生通藏副其家云、其信先生之篤、而所以有功先生者、不亦偉乎、以予觀於天下、自物子倡古文於

寶章之間、海内之士、聞風而興起者何限、其徒一開口、則猶左氏復起不易吾言矣、而司馬可運之掌上乎、顧其所著、亦唯僅僅數人可不恥其言矣、苟皆同之者、徒飾糠粃、以要一時之譽、至今世彼此竊剽、若蠶相食、容言溢紙不發一見、方諸國初、諸儒學雖不古、其博可以頤聞、文雖無法其事或足以徵、未知其孰優也、於是乎、吾誰適從、方今之世、濯於江漢、暴於秋陽、皜皜乎獨立一世者、其唯觀海先生乎、吾不阿所好也、在昔東奥僻在海隅、與毛人接壤、王化所不及、忽叛忽叛、臣魁一麾、曾從類起、故鎮非其人、亂兵不戢、升平百年、民忘干戈、而操鉛槧者闕有之、卽有豪傑如子彥者出、騁遊都、不屑一世之士、唯以觀海先生親受業於物子之門人、經術文章爲天下法、信之之篤、今先生之文章可以傳天下後世也、於是乎予益知先生之德足以服人、亦猶源鎮守之鎮奥也夫、今歳子彥候先生東都、予一見論天下文章、相得驩甚、及其歸也、不無一見、子彥之文見稱先生、吾儕不佞豈贊一辭、予唯述子彥有功先生、有功先生、則所以有功天下後世者、如此偉矣哉、

贈加藤童子序

塗堯塵飯、土城竹馬、童子之所嬉戲、而童子不以其嬉戲爲嬉戲也、讀書襁褓中、誦言如流、乃祖諄諄、教而不倦、其効乃備、乃祖逝矣、乃父命予教之、吾幸居東隣、雖好讀書、亦猶以爲賢乎嘉聞衙賈之事乎、塗堯塵飯、土城竹馬、童子旣不以爲嬉戲、則何在三遷而擇焉、今茲九歲、其學益進、才益奇、吾與其進、試令賦詩、援筆乃成、未始沈思、亦不欲速成、其非互鄕闕黨之比可知矣、雖然苗而秀者、蓋有之矣、秀而不實、不如荑稗、童子務時敏以來威儀、所謂立身行道以顯父母者、命童子其謹也、吾贈言童子、以爲乃父壽、壽乃父以追思乃祖、詩曰、貽厥孫謀、以燕翼子、乃祖有焉、童子姓加藤名昌藏

形氏躑躅園詩序

井浦氏兄弟三人、隷首夫長、伯仲同伍于卒閭、叔氏贅婿形氏、以叔受正葩之經、命我學棠棣之華、叔之爲人也、抱淳朴之質、從先進之野、雖質任、淡乎士林、未敢附權於世塵、兄弟翁矣、和樂湛焉、嘗曰、植樹、戶多躑躅、爰自青春以及朱明、斑斕五彩、茅

莧一色、其莖挺秀、如太乙之燃藜杖、其葉參差、如百草之待赭鞭、其上如赤帝與赤旗、其下如蘇韋之蹦注、近而見之、如丹甲、如朱羽、遠而望之、如二十三華轂轉朱輪而薰灼、如五十里步障、製美錦以爛熳、石榴羞奪其朱、桃李爲之閉口、蜀纈紅羅、亦自成蹊、雖然、江南之梅、何嘗范曄一枝、河陽之縣、唯稱潘岳百里、是以知花得人而益顯、人得花而流芳、因舉一鄉之美、以名叔氏之園、曰蠲園焉、於是擇四美卜一日、攜良蘭、遊芳園、截郫縣之竹筒、致左慈之行廚、羽觴隨眼波而流、花茵與酡顏同色、揮彩毫成章、煒兮彤管之將贈、持如章擊節、粲兮珊瑚之未碎、遂將五渡溪頭、唐詩奪張籍之句、常盤山上、和歌傳眞雅之艷、或芫蘭佩鱎鰈、固與狂簡於進取、或蒹葭倚玉樹、豈容勝負乎其間、聊裁緒言、以弁詩卷、茍采葑菲、無以下體、

遊井頭源記

余匏繫東都、日見宮闕之崔嵬、與街衢之方正、願一見山水之勝、不可得、而思其次者、則培塿可以當山、潢洳可以當水、故其在莽蒼、當三湌而足者、東窮鴻臺、眞間、西盡武野、玉河之美、而未嘗遊井頭源也、安永乙未之春、吾友彤生語余曰、多摩之郡、井水出焉、原泉混混、草木濯濯、子從我乎、吾將導焉、遂卜四月三日、從行者友人河惟寅、蘇百願、野美卿、朝步大窪、過彤生于百夫巷、其兒井氏從、彤生令奴齎酒脯、由柏樹村而達淀橋、水碓轟殷、響嘘合閒、酣一斗酒、併齎形家奴、數步曰中野、左層浮圖湧出林中、是中野長者之墟、有寺曰寶僊、中有亡友南條由人墓、徒吞聲宿草已、同游不盡山人亦爲之隕淚、左取提數百步、過十貫阪、漸近松樹村、或徑麥隴、或抱溪水、忽見一丘如覆手、臨田間蹊而上、上則由村四闢、綺雲無際、綠疇平楚、靠徵乎指掌間、北見樹抄露碧瓦、是爲妙法寺、班荊而坐、箕踞而望、饌所齎酒脯、醉飽果然、徐覗前路、計吏之驅御綠延樹間、若意氣揚揚、冀灼田舍者、吾嘆俗吏敗人意矣、待驅御不見、而後舉觴、數里至大宮祠、祀應神皇、下丈之松、夾道而立、大三圍四圍皆東北偃、問之主人、曰昔者源鎭守將伐東奧、謁祠禱祀、至誠所感、松皆望奧而偃、門前一松、名懸鞍松、是其繫馬處、其餘喬木不下

棟梁、東叡音營瑠璃殿、取村於此、豈其餘村乎、久之松杉如堵、人家閭里、曰松邑、邑有一大姓、是其園云、數里溪水劃野田之中、蜿蜒而下、是爲井頭之委左灌莽、右松林、乃行松林中、林中多薇蕨、且采且歌、介然山徑往茅塞、林盡得水濱、蘆荻茁焉、水衣被焉、岸有沈舟、豈積羽之爲哉、隔岸遙見蒼翠滴瀝中、若施一點朱者、左緣水濱、紆餘而進、回顧所歷、亦猶向所望、蓋溪水至是環爲池故然、有二洲、置天女祠、丹青剝落、向所謂若施朱者是耶、滄池瀁流、大旱不涸、井頭之源、自是出、蓋諸東方、長流如帶、都下十萬戶、獲仰下流而不渴焉、其利亦大矣、池多萍蓬、洲多柳樹、相傳欲廟者植樹木、遂爲鄧林、側有湧泉、是神祠汲以烹茗處、想當不減中泠水矣、諸子臨池、流觴甚樂、惟寅善畫、盤薄池上、規度其可圖者而去、歸到大宮、日已暮矣、途遠步艱、强勵不憊、就形生所識農家借燭、幸免顚躓、是日也密雲不雨、令我輩盡一日遊賞者、造化亦厚哉、大田子曰、東都草創之時、東南瀕海、廣斥而卑濕、民居難以井矣、朝廷深義於舊廟、命工鑿井頭、達于神田、鑿玉河達于四谷、鑿仙河達于叡麓、伏陰溝于二處、以通市井、今仙河之溝亡、唯存一水耳、諺云、不飮陰溝水、不稱都人士、民至于今受其賜、日用不知其源、民之愚末、寧獨一井頭哉、而今而後吾知窮河源也、夫井頭蓋言井水之首也、猶汾陰有瀵魁也、惟寅圖之、諸子詩之、而吾爲之記、

送山岡明阿序

今之學者詳于彼、略于此、取斷野乘、不按正史、豈嘗不按正史哉、自來嘗睹正史者有之、故方其叙國事、不免目睫之譏矣、其意謂彼夏也、我夷也、中國之事可學矣、我方之事何足觀也、不知先王禮樂刑政炳焉可觀、百世之下、猶存告朔之餼羊矣、今之稱和學者流者、詳于國字、略于文字、拘泥和讀、不知大義、故方其援彼方之事、不免顚躓之譏矣、其意謂、是異方之事、何與我方之事殊、不知先王因唐禮典、損益以作王法矣、甚之至曰道不同、而不相容、要之五十步百步之間耳、山岡君創、其若時、卓爾異乎二者之撰、洞觀古今、沈潛國事、上自國史律令萬葉聱牙諸語麗華二十一代國風之變、下逮稗官小説諸子百家、靡不博覽該通、

也、至勞援彼方之事、未嘗失撿也、優而學之、時然後出、默而識之、時然後言、人莫窺測其淵奧云、然其資稟磊落、豪邁自快、不欲抗顏爲一閭里師、與彼和學者流索作貴人態、喋喋自喜者、何啻天淵、今年西遊京師、夫京師王者所居、縉紳所在、禮樂可觀、文庫可徵、水土可樂、山川可賦、凡以我方之文、紀行者多、唯紀土州一記、抓行海內、其餘寥々乎無聞焉、君一載筆于此、則出源入委、提綱挈領、亦所謂登高麗華者縱橫筆端、若使人疑其從神化來、則君之塵垢粃糠、固將陶鑄紀氏矣、君其有意哉、引領待之、

與栗士弘

方足下之駿陽也、僕患疥癬、不復陪一巵酒於祖道、以爲恨、爾來伏枕、且百日、閉戶蕭然、一切謝客、時來剝啄者、僅公脩叔成若一二騎士輩耳、之數子者每相逢、未嘗不曰栗生亡恙、嗤嗤士弘近狀何如、別後不見足下詩、芙蓉三峯鍾造化之神秀、久矣、發之歌詠、多多益奇、託西風便寄峯頭一片雪來、試屬數子而和之、恐必有難和者矣、僕病間得詩若文數十篇、聊賴呻吟陶寫、亦覺怏怏無欣樂趣、每念中秋高田之遊、恍如夢寐、噫、鼠山明月可復見乎、猶記歸路值雨、與諸子過吉順庵、而燎衣、時雲行雨晴、風露成、舊月將欲滴、顧予醉臥、則鷄既鳴矣、起視東方明、明星爛矣、悲然携足下手、踏落月同歸、相顧而言、此遊難常、今而念之、咫尺河山、士弘士弘、一念至此否、一絕寄憶、餘不多具、

與由士訓

吾去、書能窮人、不使時不及古人、而窮適之、嘗索古文之緒業、家多藏書、俸錢蓋已爲子錢家之有也久矣、今歲室人交病、予亦伏枕、百事廢謝、甕冢屢空、足下患之與道甫謀、並同好及諸弟子賁見遺、通財之道、義之與比、敢不受乎、噫丈夫窮矣、非吾黨之昫濡、孰一起涸鱗於轍中也、因憶士居則曰知己知己、且有緩急、則視如路人、不啻如路人、又從而爲之辭、以間執他人之言者、聞吾黨之風也、寧無赧顏而汗背也耶、所謂交人無行者、於吾黨一洒之、敢謝諸足下及道甫、幸轉致同好及諸弟子、

書鼠贊

相女有體、豈無禮容、循牆而走、就謂不恭、

與山士訓

昨會河谷之、聞今日□□之□、道由自順谷之□、遊高、日之東山、以采松栽、是月也以、予曰、天子賜菜蕈於宮中、士女采松栽乎野外、是皇朝故事也、甚矣二三子之好古也、雖則告朔之餼羊哉、亦可以觀先王之遺風矣、去年之遊、僕有故而不與焉、今年之遊、亦有脚疾而不與焉、未知明年何如耳、嗚呼東山不負吾、吾負東山久矣、仰屋大息、呻吟不已、聊得五絕句、各寓所思、瓊琚之報、僕不必望、若足下之文、道由之和歌、自順之詩、谷之之書、之與之徘徊、各所長也、以其所長、報其所贈則幸甚、

與樋季成

大成來示季成客中詩、讀之如阿蘇之嶽聳律而吐煙、筑后之海、□□□而陸火然也、辭文並拔、與山水鬪奇、壯哉此遊也、就謂官爲俗物乎、於季成與改是勉旃、季成之道達、其在此遊乎、曹自去歲季秋來、狩蓮爲痾、蓬不櫛垢不顧、窮寒無爲、對客若忘、當食失匕箸、日復一日、日爲改歲、毎過良辰美景、撫枕欠伸、搔首踟蹰、坐臥不過一室、行止不過數步、實如籠鳥之鍛翮、池魚之失波也、猶且仰人飲啄□□、雖有山藪、不能奮飛、雖有江湖、不能游泳、欲假羽毛而決起、掉鰭尾而圉洋、豈可得乎、加之天不慭遺一老、觀海先生、以季冬逝、山頹梁崩、吾誰適從、曹沈痾之餘、遭此大喪、廢頓數日、甚矣、曹之窮也、季成亦嘗業容接、可不一慟哉、昔人窮而著書、如失明之史、腐刑之令、文園移疾、玄亭閉關、誰昔然矣、曹雖不敏、私竊留意於此、然才盡思窮、不能結撰、屬稿未脱、亦復遺棄、遂欲燒筆硯、則亦不忍失其爲故也、既乏才思、又喪良師、雖成一章、不知所以裁之、固不免貽非笑、惡在其爲千秋之業也、恭聞侯起泮宮於邦内、黄金白璧、矜式群賢、維日不足、以季成之才、文之以禮樂、游焉息焉乎其間、則季成道達之秋也、勉崇明德、以達其道、窮達有命、不可徼幸一人之有技、若己有之、季成之達、則吾黨之達也、曹雖窮乎、亦何恨焉、託東流、致書問病夫、不悉、

水月菴記

元在師胸介不竊、不苟容俗人、又不能爲叢林之徒、一衣一鉢、固無住著、嘗師西京俊鳳上人、口學凤

成傍好、爲詩、與予交、出東都牛門可一里、赤城之陰、白馬之陽、田間有寺曰宗傳、入門而右、有菴曰水月、置觀音大士像、師請而居焉、其居也前水田後丘壑、循除植援、水鏘鏘鳴、餘波溢乎畎澮、爲千頃田、田田如碁局、臺笠如子、或耦或耰、或饁或讓畔、或把耒耜、或挾槍刈耨鎛、春耕秋收、可坐而閲焉、山林四却、人家點綴其間、鬱乎翠者爲陰涼山、嶷然嶠者爲赤城、黄雲凝、白日隱、積陰散、朗月出。望皎然、千里改觀。玉田新裂、金波可掬。水得月以清、月得水以淨、觀彼清淨、以名此菴、良有以也。嗚呼竊方袍濫圓頂、入則飽煖逸居、出則驕御辟人、意氣揚揚、奔走於公卿之門。不則殖貨財而鬧米鹽者、滔滔皆是也、而信奉之者、滔々又是也、則非師不容俗、俗不容師必矣、師命予作記、予曰、師也東西南北之人也、一衣一鉢、固無住著、則不可以久匏繫乎此也、他日聞曉猿夜鶴者、將有感於此記、

報日淳上人

雁塔之雁、繫尺素來、因審尊履益佳、聊慰渴想、大慈所及、至情溢紙、玉澤神符、　固子海苔敬領、并謝帖之門戸、以辟百鬼、湘之綺盃以供二親、感戴可知、謹呈福壽草圖并詩、不顧蕪陋、唯祈上人多福多壽、敢望拈華微笑哉、不佞筆硯依舊、勿勞慈念、

箸銘

借而箸乎、寔而失乎、抑食粟而已乎、賢愚箸帷一、

爲元石師題絶巖下摘石耳圖

若巖于垣、維石生耳、緇衲下壁、采以饋齒、

題伐木圖

緣木伐木、不謹惟危、人莫顚於高、而顚於卑、

送元石師序

元石師濃北人也、夙游學京師、師事祥光鳳公、明和己丑之歲、來于東都、居八年而將還京師焉、謁余一言、余曰、先王之道則嘗聞之矣、釋氏之道未之學也、姑以吾所傍觀者言之、夫釋氏之道行于天下、未有盛於此時者也、民之尊信之、未有甚於此時者也、其徒之於天下也、占福地焉、居大刹焉、育弟子焉、膜拜以爲禮、鐘梵以爲樂、芬陀以爲教、凡一講法、聽者如堵牆焉、比諸閭巷

儒生、居環堵之室、伸其佔畢、仰口於弟子、束修者不可同日而語也、氓之蚩蚩、唯佛是趨、其民信而後可以施教矣、未信則不可以施教也、未信而教、如逆風而呼之、信而後教、如聚沙而雨之、吾聞釋氏之道雖多矣、片言以蔽之、曰諸惡莫作衆善奉行、苟能充之、是乃仁術也、今之釋氏之達者、少留意於此、循循然善誘人曰、去汝諸惡、而行汝衆善、則民之從之、如湯之灌雪焉、不是獨善其身也、兼善天下矣、如不然而窮居山林、清靜無爲、獨善其身、不亦善乎、師請擇於斯二者、吾觀今之講法者、大抵馳無用之辯、以作募緣之資、野史以緣飾之、戲謔以厭心之、其窮不類俳倡者幾希、嘗聞底公耆德積學名于一時、師歸而學焉、親而炙焉、則其道之成有日矣、乃安窮與達、而勿做類俳倡者、則善矣、余所言于師者是已、師其擇之、

與河益之

間者、道甫來致足下所描高田十二勝、焚香展玩、取次流觀、一丘一壑、雲蒸霞蔚、病夫霍然不知身在室中、恍如探神穴、歩高田、逍遙於猪水之濱、浪華乎鼠山之野、昔日所遊履、一一舉以爲臥遊具者、敢不拜足下之賜乎、業已分命諸子而詩之、唯恐狂簡之章、不敵盤礴之妙也、吾家無長物、舊有扁題玉清二字、不知何人所書、字微畢猪亦異乎近世奴書輩、輕俗可厭之比、足下嘗自號桂園、桂月樹也、玉清天也、宜相比近敢助清燕之賞、豈報前日之賜云乎哉、

答龍草廬

覃幼聞西京有草廬龍君、而未相識也、客歳有人、傳足下詠物一篇、擊節之餘、學歩高韻、亦邯鄲匍匐耳、因大藩野子賤、得觀往作數篇、及所著一詮、尋惠華牘、言及一詮、覃黄吻年少、何能贊一辭哉、然特辱高誼、猥承千里面目、敢拒雅志而默默耶、大抵豪傑一起、天下慕其風、國初北肉羅山諸公起、天下皆言性理、近世伊物二君子起、天下皆稱復古、夫苟駁前師(駁前師見孔子家語序)以成一家說者、必不得不不好辯也、好辯者其末必不能無弊也、簡髮數米、愈精愈失、概而論之、則寸木岑樓之說、堅白無用之辯而已、足下豈好辯哉、必有不得已者矣、唯恐世未詳其意、而概以爲寸岑堅白之比矣、覃亦卒業一過、未詳至意所在焉、略陳固陋以答

高誼一間者、有二從駕日光山之役一、稽報已久、幸勿レ罪焉、不悉、

答二日淳師一

遠惠二芳訊一、沛如二一雨一、乃知慈雲所レ覆、無レ所レ不レ至也、貶二損道德一、賞譽過當、稱二引古昔一、比義甚高、讀未二數行一、使二人汗一レ背、聞有二貴恙既差一、伏惟攝養、所レ示二一詩、留二珍篋笥一、麥䴵敬領、幷謝二至意一、將レ重二修道場一、使三僕題二掛聯一、敢不二唯命是聽一、淳當三其草以呈二左右一、唯恐畵墁之質、不レ免二代匠之譏一也、書中及下大駕登二日光山一事上、實國家盛事也、僕自二去秋一來、患二疥癬一、遂爲二脚疾一、閉レ戶數月、至二首夏一而愈、愈而數日從二駕野州一、跋二涉數百里一、途路亡レ恙、賴二天之靈一、得レ縱二觀山嶽之秀、宗廟之美一焉、竣レ役而歸、則父母倚レ閭、室家相慶、樂レ飲浮レ杯、謳二歌太平一、不二亦吾生大幸一乎、上人慈愛、勿レ勞二過念一、有レ詩別具、人歸甚遽、不二復一一一、

在中將東遊圖贊

洵美中將、出レ自二平臯一、閑麗其貌、金玉其章、駕言出レ都、薄遊二東方一、攬レ轡仰止、富嶽之陽。維嶽斑々、盛夏猶雪、永言千載、干雲有レ光、

與二野子賤一

天之於二斯文一何如哉、有レ時乎興、有レ時乎衰、其果有レ意邪、將無レ意邪、在昔皇朝一、葦杭二于唐一、皇華之穠、摛藻揆二天庭一、中葉干戈相尋、斯文幾二乎熄一矣、及二國家勃興時一、則有レ若二藤斂夫、林道春一、有レ若二山闇齋、熊伯繼一、元寶之際、於レ斯爲レ盛、有レ若二伊源佐一、龍二躍於洛涘一、有レ若二物茂卿一、虎二嘯乎江左一、有レ若二源君美一、感二會風雲一、大化滂流、斯文復興、升二其堂一入二其室一者、人立二門戶一、家極二淵源一、而及二其門一者、風流雲散、天遺二一觀海子一、而使レ與二刑於斯文一、吾雖二不敏一、苟志二于學一、竊枠以爲レ得二名師一矣、不レ日而道成、成則千秋之業如二俯拾一耳、觀海一朝易レ簀、天下不三憖遺二一老一、其果有レ意邪、將無レ意邪、餘子碌々、噫吾就適從、方二今之時一、可三與共論二斯文一者、唯淡海有二足下一耳、吾雖二不敏一、不レ欲下與二一時碌々者一爭中長尺寸上也、願足下不レ遐二棄我一、而討論潤色、使二我無レ慙二於千秋一、則幸甚、書不レ盡レ言、伏希照察、

答二平昭德一

舊盟不レ尋、邈如二河山一、忽獲二手敎一、悲喜交集、僕與二足下一未四始有三一言逆二於心一、又聞二流言一而不レ信、然且契濶數年、離群索居、莫逆之心、肝膽楚越、結交之誼、

不レ絶如レ綫者、何也、僕始遊二於賀邸之社一、稠廣中唯知レ有二足下一矣、時足下歲十四、僕長二足下一二歲、青衿往來、殆無二虛日一、尋得二閭閭輩一、號二牛門四友一、日以レ文會、麗澤講習、倦則杯酒相歡、劇談終レ晷、亡レ幾足下出仕、僕亦多事、或往而不レ來、或來而不レ往、日濶焉離索、如レ此罪在レ僕乎、將在二足下一乎、抑不レ知二其何謂一也、今書來言二僕學業大進一者、過賞殊甚、徒增二愧赧一、僕進不レ能三取レ榮明レ時、以顯二父母一、退不レ能下樂二道陋巷一、以待中天命上、疎放之性、淪爲二酒人一、遊戲之文、大類二俳倡一、苟安自棄、不レ知二其非一也、若二足下一則不レ然、日就月將、其業倍二於前日一、觀二所レ示數詩一可レ知矣、舉以示二二三兄弟一、則亦莫レ不二響應以爲一金石聲一、此書也僕當レ先、而足下先焉、書云、人惟求レ舊、足下之謂也、有レ是哉、足下之戀二々於故舊一、於二我心一有二戚々焉一、罪果在レ僕、而不レ在二足下一也、自今以往、復尋二舊盟一、則二三兄弟、亦虛レ左以俟、徒曰レ故者、勿レ失二其爲レ故而已乎、非二僕所一レ望也、若夫濶二焉離索之罪一、則僕與二足下一共問二諸水濱一、

復二日淳師一

神符貼レ壁、若菜充レ膳、敢不レ拜レ賜、捧二讀惠書一、如レ灌二醍醐一、上人法臘既積、道德益進、不二啻吾儕私竊抃躍一、不二亦叢林大休徵一乎、扛乘二博愛一、下存二老親一、即西嚮瞑拜、以報二盛意一、客歲所レ約柱聯、久負二諸責一、謹此錄上、不レ知中二上人意一否、可則取レ之、不可則舍レ之、更思二改作一、固所レ不レ辭、稗史二本、聊供二一笑一、幸以消二待者欠伸一耳、聯語云、金輪一轉蓮峰下、玉澤長流豆海中、

復二岡公修一

見レ還二高雄鐘銘墨本一、足下好レ古之甚、賞鑒備至、猶二蒲牢之音一破二其闇一也、昔人嘗以二橘序菅銘藤書一爲二三絕一、足下一書、頓爲二四絕一矣、

又

日者、託二僕陸歸一、還二所レ借書一、且致二一鴨一、則見レ謝以二手書一、平原督郵一得下與二足下一驩上、不二亦幸一乎、足下訪レ僕者二、僕訪二足下一者一、而皆不レ遇、可レ不二悵然一哉、時屬二孟夏一、草木扶疎、偶觀下淵明讀二山海經一詩上、至下窮巷隔二深轍一、頗回中故人車上、憶二足下一甚、故爲二足下一誦レ之、

送二藤好本藏一序

覃嘗與二山田君忠一、同學二於觀海先生一、退而言二君忠一曰、斯文於二本邦一、寶享爲レ盛、及下仁齋興二於西京一、徂徠

起於東都、而學稱復古矣、自二子沒、五十年于此矣、斯文將喪、而未有興起者也、夫伊尹發於農夫、傳說發於胥靡、太公發於漁父、其未得志也、或耕有莘、或築傅巖、或釣渭濱、若將以終身於耕築釣焉、其得志也、或佐湯伐夏、或啓沃高宗、或爲文武師、一隱一見、無人而不自得焉、自非下學而上達、以成道德者、惡能如是耶、隱則獨善其身、見則治天下國家、古之學爲然、隱見有時、學而以待矣、學無古今、惟在其人而已、今之所謂學者、非吾所謂學也、即其學則僅攻章句、略綴文辭、察其志則道德仁義舍而無論、是何異乎、食於一材一藝者、其志將以求重糈也哉、君忠曰是也、初君忠在西京也、與藤君友善、義如兄弟、藤君事宇和侯、宇和屬南豫、南豫去東都二千有餘里、君忠敬君、嗣音不絕、實三十年一日也、會藤君來役東都、始見君於君忠所、安永丁酉夏四月、將歸南豫、請言於予、予嘗讀其與君忠書、而察其學與志矣、藤君蘭嵎之門人也、蘭嵎仁齋之子也、去名師未遠、極知藤君之學、非今之所謂學也、孔子不云乎、晏平仲善與人交、久而敬之、藤君有焉、君忠於尊父行也、藤君君忠所敬也、豈可不敬乎、遂誦其吾所與君忠言者、以爲贈

書箸笛

不恥惡食、不羨和羹、咬得菜根、百事可成、

復日淳上人

五月從惠光寺、得尊札及嘉貺、世故紛紜、緩報至今、擢髮未足謝也、聞爾時病瘍、不能把筆、想當旣愈、痛定思痛、勉旃攝養、時方季秋、霜露冷、木葉下、不知山中白雲、頗堪尊者高臥否、不堪遙懷耳、賤族無恙、因僕致意、

復岡田仁卿

捧讀惠書、大慰契濶、伏惟老兄益佳、稱氏以本月八日來見、且致老兄意、不佞襪線之才、豈敢抗顏爲師哉、亦唯教學相長、則吾所願也、老兄若見稱氏、善爲我謝、

與日智師

不度虎溪者六七年、會與二客遊戲東山、遂訪上人于本行精舍、里名日暮、眞日暮而至、至則上人許遮戒、勸以般若之湯、供以醍醐之味、磊塊一澆、蓄念氷消、劇談間作、逸興、欲飛開軒、則一輪寒月出

自東方、漢々水田、與天無際、戸田之河、筑波之峯、宛乎在几案間、既醉而歸、月光滿地、人影可監、離立往參、歌呼相應、將過蓮池之坡、予顧謂二客曰、是夜也十月之望也、此非蘇公遊赤壁之時乎、月白風淸、二客亦在、唯憾上人比佛印有餘、我擬東坡不足耳、去者安在、來者爲誰、今日之樂正在我輩乎、二客唯々、得詩一首、併附一笑、

題下妻大夫壽詞卷首

下妻大夫高階君、七十初度、已論國中士大夫、與四方諸君子、博徵詩詞、集爲一卷、其爲體也、有唐詩、有和歌、下至若所謂連歌俳諧者、附載不遺、纍々乎如貫珠矣、吾聞大夫歷事三世、如一、苟不賢而能之乎、他日太史氏采國風、而及觀此集、則知下妻有賢大夫也已、

靑木翁瘞牙冢銘幷序

上毛靑木翁、久客東都、既老、自收脫牙齒歸、瘞于鄕、噫男兒有生不得志、頭白齒落者、而觀此碑、何啻齦首一墮淚哉、翁名安都、字鄰卿、銘曰、脣未乾、齒先寒、

復山田君忠

足下病齒、僕病瘍、敢不同病相憐哉、毫殘之惠、大勝饑飯、敬此中謝、

遊高田檄

昔日之高岸者、爲今日之深谷矣、今日之深谷者、無乃他日不爲丘陵乎、岸谷丘陵猶然、況於人乎、乍聚而散、乍存而亡、倏忽隨化、哀樂推移、欲開口而笑、其可得乎、頃期七夕、于今三年、其地依然、其人僅存、歷西郊之金埒、眺左界之銀河、烏鵲成橋、牛女命駕、班荊乎棣棠之里、謀野於早稻之田、若夫寫情者詩、寫景者畫、解憂者酒、此三者不可闕也、飛檄同志、更主齋盟、來者猶可追、時哉不可失、安永丁酉秋七月七日、右告閭公嘗關及成山士訓山道南河畜之遷公僚

送廣瀨子序

夫懸桑弧蓬矢者、爲有事于天地四方也、遊通邑大都者、爲廣其瞻視、報其壯志也、人々孰不欲遊四方哉、然而遊覽既周、壯志既報、則雖信美、固非吾土、人人又孰不欲歸桑梓哉、廣瀨子豈曰柞人也、遊東都依稻公、吾因公事一見廣瀨子、今歲將歸鄕、嗣其宗族、且壽令姊、使人乞一言、予曰天下孰不欲爲廣瀨氏哉、豈去東都于有

餘里、四方之志遂矣、衣錦之期至矣、子之歸也、宗族迎之、鄕黨敬之、祭其祖先、侍其令姉、樂飮浮杯、萬壽無疆、是皆人之所欲也、吾非公事未嘗見子也、未交一臂、而接殷勤之歡也、不知何以中子意否、故道吾人所欲者、以贈行且代壽詞、庶乎足以見吾志矣、

書田季婉集後

多田氏名順字季婉、嫁佐野源内者、生一子、名成之、字子信、源内仕于越後黑川侯柳澤氏爲世子傅、多田氏自幼讀書、善詩及和歌、及長通諸子百家、好讀通鑑源語、出入侯第、敎女公子者數歲、安永丙申之秋、罹病卒、成之從吾友井伯秀遊、故得此集於伯秀所、余擊節而嘆曰、昔皇朝之盛、僅有智子一律、照映千古、其餘女流若淸紫者、口多微辭、徒步趨國風、而未陶鑄唐詩、及東都起、桃仙中山二稿行于世、今閱此集、可爲之執箕箒矣、嗚呼、上下千歲、有一婦人形管有煒、閨閤生色、才難不其然乎、安永戊戌仲夏

答日淳師

上春有脚疾、至夏漸起、不佞數病脚、嘆人而不如

表耳、忽接手教、伏審安居、欣慰不已、麥麫之惠、藥草之賜、可以嘗法味也、可以起沈痾也、敢不拜謝、時下黴雨、爲道自愛、

安子潤經筒銘

白玉在匱、黃金在籯、雖有金玉、不如一經、維是經筒、有書且盈、何以比之、南面百城、

復伴忠順

疇昔之憾、寶如盛諭、首編未絕、苦渴無日、由々然於囂塵中、强作柳下惠懿耳、閱損夬一卦、講習既畢、後期在九月朔日、謹奉命焉、今朝授童子讀、伊吾滿室、不能即報者爲是也、不一、

下總州醫王寺鐘銘幷序

雨寶山東光院醫王寺者、在下總州葛飾郡小金之原刀禰之濱、寺安藥師佛、遂以名焉、安永七年冬十月、邑人戮力合資、新鑄洪鐘、以充法器、邑大姓平樂氏、致書東都牛門、命太田覃銘、蓋檀越之功、莫大於喜捨、法器之用、莫先於犍椎、邑人於此擧也、可謂醫王忠臣已、乃爲銘曰、

總之下州、地曰勝鹿、寺曰醫王、爰造華鐘、音徹瑠璃、響應東方、山則雨寶、辟彼豐山、聲從飛霜、衆心

起信、大器所利傳之無彊、

畫鶴賛

皒々皓翅、楚々立裳、延頸鼓翼、羅列成行、一飲清流、不羨稻粱、與其乘軒、寧冲天翔、

移柳記

南畝子種一柳樹數年、春色夏陰、秋風冬雪、未嘗一日無此君也、有松齋者、豪爽不羈、新營一室、且脩園庭、謂南畝子曰、子贈我以一柳乎、南畝子曰諾、乃使庸夫數人舁致松齋門、其樹大七圍八圍、不可自戶、卽破藩籬而納焉、南畝子作歌曰、

自移楊柳六七年、枝葉雙雙大可憐、陶家五株亦不羨、金城十圍還復然、飃揚落絮白於雪、流亂輕絲翠似煙、松齋主人何豪爽、氣干青雲將直上、草屋新營八九間、願乞此樹供幽賞、不惜爲君長轉移、長歌一曲結一枝、風前風色從玆去、夢裏生肘未可知、依依能攀主人圃、主人幽賞無盡時、

松齋大喜、明日詰朝有叩南畝子門者曰、何自、曰自松齋云、吾有旨酒、惠然肯來、南畝子曰諾、盥漱詣焉、自柴門入、時天寒繁霜滿地、落葉簌々、主人紅巾皮裘、倚爐而坐、延南畝子升堂、堂宇開曠、寂無所有、唯庭上有一柳耳、主人曰、吾性愛柳而未得也、昨所轉移、始適我願、顧帳中曰、當歌、俄而歌聲起帳中、合奏三絃、其聲錯雜如急雨、歌曰、

柳兮柳兮可憐枝、依依莫厭狂風吹、

歌畢異香自內出、有名妓數十輩、首簪揚櫛、衣繡楊柳、以美酒嘉肴、次第而至、主人取酒置南畝子前曰、願賦一詩、乃使童子捧硯、美人呵筆、南畝子筆不停綴、賦一詩曰、

滿庭霜雪映如花、內集團欒似謝家、千丈疎松交古柏、數椽飛閣弄朝霞、豪華自碎珊瑚樹、妙妓齊歌絳帳紗、更有山公池上趣、醉歸何笑接離斜、

松齋擊節嘆曰、天下奇才也、咄々曹子建、禰正平、當爲子閣筆、獻酬交錯、杯盤狼藉、謔浪笑敖、罄歡而罷、時人相傳、以爲談柄、

紀三兒命名事

安永八年己亥春三月十九日、東都小石川諏方街仕立屋宇兵衛（稱大坂屋）妻、一產三男子、時妻年二十八、先有二子云、清水少傳本目某、（少傳此謂用人、稱權右衛門）名三子、曰市五郎、曰松二郎、曰梅三郎、以先生者爲叔、次生爲

レ仲、後生爲レ伯云、

紀二馬墮レ井事一

有下牽二馬蹊賀郞之墟一者上、地陷馬墮、驚視レ之則有井也、蓋數十年前所レ堙、蓋以レ板、盛以レ土者、朽敗以致レ是云、安永五年丙申十二月三日

紀二吉田氏事一

安永五年十一月二十七日、上獵二千壽之野一、步兵警二衞獵場一、島根村有二醫吉田養軒者一謁レ予曰、享保中德廟獵二此地一也、憩二息吾廬一、以二六諭衍義一本、白金十塊一賜二吾父一、今爲二家珍一、

蜀山文稿　終

寢惚先生初稿序

味噌之味噌臭非上味噌也。學者之學者臭非眞學者也。方今學者、移居於品川、思濱漢土之裏店、放驢于目黑、稿入唐人之人別、所謂畠水練燵兵法、議論雖與鼻高、不能鈎口于天井、論語四千世說六百、以比切店蹴轉、名之曰放屁儒。孔門徒營、寔見宗廟之美、其也御單笥町矣。友人寢惚子請余序其初稿。余讀之詩或文若干首、徑沿秦漢之派、直至開天之域。辭藻妙絶外則無之哉。先生雖則寢惚、探膌能知世上之穴、與彼學者之學者臭者相去也遠矣。嗚呼寢惚子乎。始可與言戯家已矣。語曰、馬鹿不孤必有隣。目之所寄睛之寄。余有感于玆。序以傳同好之戯家。如此爲野夫末如之何也已矣。

明和丁亥秋九月　風來山人題紙鳶堂

寢惚初稿序

毛唐陳奮翰善脩切穢古文辭、門人安本丹以寢惚先生初稿者、徵序余。焉曰、吾寢惚先生於詩也、嘗有蘆言八百首、或爲祝融氏奪之、又爲大地震震頽之、其存十一於千三者、亦以可觀焉。詩則陽春白雪、開天嘉隆、一枚看板、文則左氏司馬子長、先秦西漢跣而逃矣。不折者櫻木、不味者目玉、何不以黃色表之以白絲綠之哉。況先生年若、即二稿三稿數頭出矣、豈不大極愉快乎。余掉頭曰、舊矣、舊矣。吁表面一通也、至其內々則抑亦名與物之相談也。名曰名聞、物指錢金、恭惟吾東方朔八千歳、三浦大助百有餘年、悠々寛々文運大闢、猫子云杓子云詩文章、貴賤上下押並、而無誇解、讀無點、當斯之時、嵩山房不許翻刻、唐本仕立、千里必究、速授剞劂、沾之哉沾之哉、千秋之業大叶、豈不唐人・大寐

言乎、先生殆寐惚乎、抑亦臍也自臍二寸下而始可與言穴已矣、後之毛唐人、此集以盡寐言、而寐言盡于此

明和丁亥秋八月

濟南郭　木子服撰

烏山　石黃澤書

奥北海天民著

變寓不測之神化、屬自然之理、托物以彰其體、隨事以見其用、如彼腐艸田鼠之化、吾特依月令所記以明其候而已、奚知其必然否、其最著明者獨於煙管見之於乎煙管也、汝本是人間之玩器、其勞特多、日夜不離手裏、焦頭於火中委尾於人口、動臨唾壺中、傷腐金石、偶値賓客上堂之時、爲僮僕所磨礪、則顔色雖更新、羸瘦日益甚、悲哉、至于呼吸斷絕、纂續不救、刎頭而謝功則化爲異物、受業白水眞人之門、然俗猶呼汝爲病目錢、以其不能獨行、弃汝不顧焉、遂隱蘆埃之間、雖然方眞人將擧百之衆、若缺其一則百方無應之者、當此時起充其數、則九十九孔方、不能拒汝醜惡、一擧以爲天下之通寶、吾於是乎知汝德之大也、無一錢用而有百錢功、昔人嘗著錢神論、以表彼眞人之德、今吾又表汝之功德、以終其言、諺云禍物三年亦有可用者焉、其斯之謂與、遂作贊曰、百戰百勝一將才、百文百數一錢財、言未已、皆錢現其神罵曰嗚呼乃北海之野人徒好末學性理不能知天地之大道、夫變化之無窮、造物者僉然矣、吾眞銅亦自終其役而已、豈倖人間利害而索贊錢名(贋者不直也)爲乎、唯願成大佛、嗚呼乃言過矣嗚呼乃言過矣

寐惚先生文集初編卷之一

毛唐　陳奮翰子角　著
阿房　安本丹親玉　輯
蒙麓　滕偏木安傑　校

詩

風雅體

花縁二章章四句

花之縁矣、于神于媒、拜之頼之、一夜寧來、
花之涙矣、于筆于墨、愛之憐之、一齋不睦、

五言古

遊洲崎観新鹽濱

名應大門屋、乃在新鹽濱、安房與上總、數數沖漕輪、詠此鹽汲多、知彼賤女身、鹽衣裳小裙、心不乾思頻、誰知世渡業、長與燒鹽辛、

七言古

太平樂

太平樂兮犬之窮、天下太平國平中、殿様御馬槍持屁、四海波靜時津風、親分子分柔和理、一杯強飲顔眞紅、其親父應立腹、家職邪魔誰亦同、君不見人間萬事晦日暗、唯有太平樂未終、

貧鈍行

爲貧爲鈍奈世何、食也不食吾口過、君不聞地獄沙汰金次第、于排迴付貧乏多、

明神紙馬観熊谷招敦盛圖引

憐哉敦盛者、回顧看衆顔、流石熊谷非石木、擧扇遙招御出間、無官太夫還馬處、義經辨慶後之山、自後之山聲見懸、御首打落谷邊、二十餘年榮華夢、無跡覺爲一片煙、請看驕不家不久、紙馬春懸御寶前、

元日篇

君不見元日御江戸、大名小路御門前、春風吹送桑袍袖、若水汲入雜煎膳、早稲貢聲春向交、萬歳樂歌招童兒、早來四遣餡寶引、物申年始御祝儀、祝儀嘉例家家事、目出度兮此時、一時榮花夢之裏、先生寐惚欲何之、上下皺果大小賤、憶出算用昨夜悲、昨夜算用雖不立、武士不食高楊枝、今朝屠蘇露未乾、浮出門前松竹傍、共謂御慶御愛度、共舉御杯御春長、雙六新板年年改、寶引勝負夜夜深、夜夜年

年過松下、白髮頭而無錢金、今日爲姑昨日婦、憶
昔一休御用心、

五言律

詠金

莫道目腐金、金生木末寺、山吹不改色、文字至
于今、縱欲口先借、其如首丈沈、還思百萬兩、夷
講付虛深、

詠錢

遠從寛永年、通寶世間旋、鳥目多新鑄、雁頭雜
古錢、一文花子擲、兩替相場傳、別有時風鬼、能
令初尾先、

七言律

擬異人侍閻魔大王宴應制

何減黃金極樂光、還看地獄更繁昌、三途浪靜渡河
日、六道衢平送路方、鏡照生惡重罪、鐘從諸
行響無常、微臣況過開釜蓋、身體懸衡奉大
王、

江戸見物

江戸膝元異在鄉、大名小路下町方、二王門共中堂
峻、兩國橋踰御馬長、吳服現金正札附、小便無用
板屏傍、吉原常與品川賑、僕是往言三戲場、

送下官唐人還朝鮮

家吼雞鳴門跡邊、今朝喰散赴科川、氈紅棧敷花三
月、色黑往來路二年、皆道唐人好青物、誰知惡筆不
成錢、當由被美還迷惑、少計餞雜御目懸、

五言絕句

過夜鷹小屋

夜鷹好小用、此間彼處隅、妻如怪異鳥、君似碟
場鳥、

江戸四季遊四首

上野傘飛鳥、花開日暮里、三絃茶辨當、多有幕之
裏、

右春

川長兩國橋、花火燃前後、歌舞屋形舟、皆翻妓子
袖、

右夏

七月乍涼出、揚舟主子通、燈籠多見物、盡入大
門中、

右秋

忽聞顏見世、番付賣人聲、正是芝居好、應使夜霧、

行、

右冬

七言絶句

觀二大名行列一

車上屋根馬引レ溝、路行人爲二排傍一留、先供通過
鎗持出、奴穴高二於檀那頭一、

寄二願人坊一

一染二年間一作二願人一、今朝判物取レ錢頻、町中婦様如
相間、道樂如來是後身、

詠二東錦繪一

忽自二吾妻錦繪一移、一枚紅摺不レ沽時、鳥居何敢勝二
春信一、男女寫成當世姿、

詠二衣裳繪一

摸樣雛方當世裝、板元住在二堺町傍一、細工仕上流流
事、應レ著二人形傀儡坊一、

詠二鞘繪一

二人頭似二鉢匏瓜一、背曲二未申一著物斜、笑此一枚京
土產、皆皆映レ鞘更相誇、

讀二繪草紙一二首

惡人太印太之根、石漆毎爲二跡式論一、不二是羅燒甘
藷事一、由吹色可レ証二中元一、
見初青殿忍二姫家一、礫打忠臣働二命涯一、鯛味噌津四方
酒、一杯呑掛由來鴉、

寄二古文辭一

豪飲無レ當元氣多、陽春白雪雜二長歌一、滄溟尺牘七才
子、文集初編奈レ少何、

寄二性理學一

看若這箇板天神、子曰堅成儒學身、論語不レ知論語
讀、野郎頭欲レ作二唐人一、

寄二古方家一

醫案減多欲寫頻、匕加減見二藥箱新一、莫レ言仲景
孫思邈、飛以二古方一劑二殺人一、

寄二萬葉一

和學先生萬葉辭、一爲二弟子一命二新奇一、歌人莫レ道知二
名所一、鍛冶屋居炊レ飯時、

毛唐　陳奮翰子角　著
阿房　安本丹親玉　輯
蒙麓　滕偏木安傑　校

文

序

鬼子柄序

曰若稽昔昔、曰老父老婆、山於芟川於濯、至古貍發團粉噉、老婆則有貍與兎事、事詳赤本、可以微焉、貍兮貍兮、何以腹鼓、其爲責兎乎、兎兮兎兮何見而翔、其爲走波蕩上舟乎、若夫老父於山老婆於川、昔人之御存也、予供衆三子魂迄百、一旦墮落于惡、則雖天上子善、譬諸覆油一升、而次郎殿犬與太郎殿犬皆舐而仕舞也、貍至燒背鑽燧山、覆舟泥之海、雖欲不餐粉團不嚙老婆、其可得乎、故欲一期榮、則善乎善者也、序授之乳母、

送桃太郎序

桃太郎將征鬼島取寶也、猿狗雉從焉、余代其父母贈言曰、汝父汝母、一自爲茶飲友達、父芟山母濯川、時有自川上桃之流來也、母取而食以其半分付指于父、偶憶出少時吸付煙草、而震震然若有感、乃懷乃身生汝於山之下川之上、汝生未取揚飛翔有力、一如金平出生時也、今歲有鬼島之行、雖曰愛子爲旅乎、而靡日不案也、夫鬼島踰此山、虛言八百里、若其兵糧、則有日本一之黍團子、豈啻甘諸鑼燒也、汝以其一與之猿狗雉、大加勢所謂金棒於鬼也、吾聞鬼島有打出小槌及延命囊、汝合力於猿狗雉、曝鬼首於西海、則鬼外福內可長鼻下而待也、行矣桃太郎勉旃、猿狗雉桃太郎欠伸、乃起曰諾遂行、

無盡會稿序

有花有實造物者之無盡藏而多金多錢、賴母

子之初會日也故借茶屋、則引一文日之茶代、嫌遲參則除八時過之座圖、親元不潰無盡將滿廻圖座敷、餘物有福張欲心中咒符不効、若夫至洒終購取、人寄圖開、或疑第邪拾邪、又問偶乎奇乎、曰、安開之大聲可爲摩枯無盡師無盡場之小言似諷下手義太夫當者進否者退寺有取退社有富突、雖物名因其處至欲氣無微塵、一間耳本圖否而欲心盛先鋒盡而咒符起或懷持佛之飯粒、又握鰯頭之信心、牛口不當聾程不聽然當圖雖有跡懸之苦勞讓人亦有禮金之取德云、

記

貧貧堂記

此堂無北若牛既然中有千里一走之名馬、故以貧貧堂名焉、不負糞取之桶不乘伯樂之袴、畏明神之神馬、笑殿樣之御馬、堂名貧貧何有常州之盜馬、虜身自樂樂忘抉江戸之生馬眼、夫駒勇則花散福來則人死遺豆打太鼓渡河爭先陣不如止千里之足何用借一鞍之胴雖然龍馬角成而名、春駒夢見而善爲土百姓、則拾馬矢爲新吾左則嘶馬屁騎尻馬、芋劚坊主辨慶也、借馬智勘略奉行管仲也此堂亭主何處駿骨飲馬乎。食酒乎抑馬頭觀音之出現與將馬糞先生之弟子與是爲記、

傳

寐惚先生傳

先生毛唐人也、其先邯鄲盧生忘想爲王、苗裔而爲毛唐人實正也、故號寐惚、昔昔玄宗皇帝拔現楊貴妃而天下爲筋夢中矣、歎曰爲夢爲夢於是乘白河夜舟而反側此野馬臺也、爾來看京夢大阪夢久矣、至先生始居眠花之御江戸、先生母夢忘想乃有身、先生朝寐房而宵迷也未嘗有臥於子起於寅焉當其寐惚則善唐人之寐言殊愛莊子夢爲蝶蝶而止于松葉、且

欲食大飯而臥爲牛也若夫一富士二鷹三茄子、皆人所以藉寶船看初夢也、然先生不欲夢之先生之夢也、唯忘想與二重夢耳、

賛曰寐不待果報寐則食梁飯食而糞寐而與唐人寐言陳奮翰翰先生寐惚乎夢乎現乎幻乎、

銘

壺皿銘

壺皿維覆其筒未潰、偶邪奇邪決勝負者、采邪、

無間鐘銘

無間之鐘撞而不休、此三兩彼五兩應百兩之求、地獄釜猶可發也、借金淵不可浮也、

賛

一枚繪瀬川菊之丞賛

曰是男、其名與彼物、曰是女、其顏與形貌、紋結綿、戴紫帽子、爲男爲女者誰、瀬川菊字路考

帽之字下手之字當削

論

水懸論

天道不殺人、有懷手而食者、不是錢持金持而眞似則爲疝氣持必矣、譬諸似鵜鳥、其餘雖果報寐持三年守星乎柚葉之落而煎豆之花也然則一生何爲食住曰士曰農曰工曰商舍此四者或爲永永浪人又爲不持器乞食別有以一藝食者僧神道者姑舍不爲儒者爲醫者不爲手習師匠爲繪師不爲詩人爲歌讀立花連誹鞠楊弓三線茶湯之消閑、劔術柔術弓馬軍學之張武齊是口過而鼻下建立也、相互張氣以爲職敵則猶糞人之味噌而味噌吾之糞也糞味噌一而始知吾糞之臭已雖然儒之敵僧游藝之笑武藝猶可也今則儒而惡儒僧而惡僧以游藝惡游藝以武藝惡武藝何其流流之分而爲一大同士軍也、僧有念佛法華、神有唯兩部、儒有朱子徂徠、醫有道三張仲景、手習有長雄唐樣、繪有和繪唐畫、詩有唐明宋元、歌有近體萬葉、立花連誹劔術柔術以下雖有諸

流未遑論之、神佛於唯一兩部念佛法華不復論之、畏其罪之當而吾口之曲也、夫儒之爲朱子學者、面如師、嚙火鉢、體如金甲縛以三綱五常之繩、背以格物致知之糟、與予之許則便結糞而爲生聖人也、爲徂徠派者、譬如金魚體如棒鱈以陽春白雪爲鼻歌、以酒樽妓女雜會讀、呼足下答不佞、其果欲出文集而比肩享保先生之列也、其外伊藤王陽明今不行、則不論醫之爲道三者、以文盲擬功者、何云角云衆方規矩其驗之見如減薄紙、爲張仲景者自稱古方家、傷寒論千金方其嵩之急如一谷倒下、手習之爲長雄、甚於大橋、抑尊圓御家之糟食而須藤寺澤之陪臣也、爲唐樣者、以不讀爲貴、廣澤烏石之實孫而義之微明之蚯蚓也、唐詩選外不能書之、繪之爲和繪止於某信筆、爲唐畫止於何山人寫意、詩爲唐明徂徠派之仕出而爲宋元、朱子學之語錄也、歌之爲近體如誹諧、然爲萬葉近於沈紛閑、名如鎌太理猿田彥、而一風流者也、其餘游藝武藝未遑論之、故日相互張氣以爲職敵、則猶糞人之味噌而味噌吾之糞也、糞有瀉糞結糞、味噌有白味噌赤味噌脐是糞與味噌而種類之分也、糞味噌一而始知吾糞之臭已、是之曰水懸論

書牘

與長松絕交書

營塗工殿前有裏壁未返土、余引其於手習傍輩登此上以爲山主余一人、汝迺麴屋糞子來而銜惡態也、余復喧嘩、卽告之師匠樣而上汝几之上也、汝猶徒未已、每見余握合如汝藥師嫌物也、而今而後雖有鬼戲草履隱隱房之諸會乎、余固不人從矣、況手習傍輩皆余從、則汝爲女中豆煎可也、當其時喧嘩負女所謂七陰囊乎、斷親絕交不敢指切以上長松足下金太

郎白

寐惚先生文集卷之二終

跋

武士爲浪人身手被編笠路頭立其謠小謠亦復爾々獨奈近來文集初篇率屬浪人不知何物乞兒拵食吳器飯取籠勝負殆不可辨矣今覽此集錢取幾盡頓復常談三文宛然在人面桶豈不餘計乎非人曾謂不吳者錢想當百文錢爲一錢道

物茂らい題

賣飴土平傳

序

古歌云。朝寢漢兮。早寢且晝寢兮。時與臨睡兮。我友有陳子者。一年三百六十日。三百五十九日寢。一日不寢。其面有惚焉。人因號寢惚子。其囈語成篇。既行于世。嘗夢化鵝毛。而飛欲徘徊于漢土。至紬羅洋。爲大風所漂。空歸日本。爾後自號紬羅山人。蓋有牙者無角。有才者無錢。軍者餒。儒者寒。敎化子報謝米。大星之金言也。一夕熟寢。囈語與鼾聲更奏。徐聽之。乃土平與阿仙事也。勃然與自歎曰。嗚呼世惟重食與色而不知有重於食與色者矣。於是作之傳。以玩世。屬余爲之序。

明和己丑夏四月

風來山人題紙鳶堂

題賣飴土平傳首

南京木綿十三端。南蠻木綿三端半。裁爲華人裝。賣飴於市中者誰也。三官飴姑舍。瓜換子後。有若土平。笠森阿仙稱絕世佳人。傳誦並行于江都中矣。余既見土平。又見阿仙。信名不虛立。錯雜爲之傳。亦是贅言膏肓、弄翰痼疾爾

明和己丑之春

紬羅山人書

乘桴 浮子 紬羅洋

賣飴土平傳

土平奥州人也、頭戴帽口唱歌賣飴東都市中、比外套疑鬼之犢鼻、紅綃紗益似祭之警固、紋畫鬼首枸骨、衣書土平土平、偶有買飴者、則新歌一曲節以土平土平、故其爲土平最著、雖五尺童子莫不口其歌也、東面而賣西街怨、南面而賣北巷怨、曰奚爲後我、一年三百六十日、日日過八百八坊、五歩一樓市脯湛酒樽之池、十歩一店、餅糕積甑桶之山、天樂遠聽格子歌三絃也、雷霆乍驚道傍大八車、銀杏本田髻卷外套比肩、金縷路考帶共長袖搖臂、木理染如春水流、青紙蓋寫夏木立、蹴颸紅裏未秋何楓、下襲白衣、不冬何雪、高祖巾掩鼻而過、與作巾鉤髻以行、卷小菊懸階梯、提煙袋燿銀裝、一枚畫廢而東錦畫與、目利安行而義大夫微、妓伴樂師趣筵席、俠謳太平入酒家、

挿花古流分會日之符、投壺家法擬楊弓之矢、飛閭團景勝呼名代、早染草招牌稱本家本家、當四錢手巾古子奴僕之腰、萬歳謳歌落於俚歌之下、書家學長雄流、詩人諳唐詩選、萬葉家詞人、古方家療治、或分本草種類或礙尋常眼鼻所以番南瓜爲陰瓜、所以馬矢爲淡黑色、和尚嫖遊之時宜以暗夜、子曰儒學之身、易迷色道、堺坊雜劇靡時不行、吉原經營不日成之、飲兮歌兮、直往徑歸、墨水之流酌而不竭、飛鳥之花眺而不斷、千秋樂則撫民、萬歳樂則延命、時之賀也、猶新松枝榮而葉繁也、土平既賦二詩其一曰

五日雨降十日風、悠悠緩緩樂何窮、若非松竹
蓬萊上、定是瑠璃世界中、

其二曰

鬼首之章猛虎裘、途途高唱奧州謳、寄言巷
內兒童子、飴自土平是一流、

時既暮春日長風暖、偶過日暮里遥望笠森華表奪夕陽之朱、閭塒後米粉之素、春風吹衣花落薄暮鐘、謳詞無人聲斷賽錢絶俄而一朶紫雲下、見美人天上落座茶店中、年可十六七妓如綉絲顏如瓜瓞翠黛朱唇、長褊低展、雅素之色嫌汚脂粉、羞目之艶流眄往來、將去難去、閑供托子之茶、欲解不解、寛結博多之帶、腰之細也壓楚王宮樣、衣之著也疑小町立姿、十目所視十手所指、一顧駐人足、再顧閃人腰、望之儼然、如倒懸餠子、寶神仙中人也、漸開則吟四詩、

其一曰

攜來提合描金光、盡道看花日暮鄉、是處人間天
上界、五衰三熱總相忘、

其二曰

髯毵色映漆樽披、三線音高調子遲、已識谷陰
投土器、復看隧道作茅茨、

其三曰

日永忘レ歸日暮鄕、遊山盡レ醉假山傍、鎺鉦大輪誰家女、裩袴褰裳何處郎、

其四曰

獨對二茶爐一思不レ禁、無レ端搔レ首采二銀簪一、往來若要二踞牀息一、須レ倚二笠森一樹陰一、

土平聞終三嘆曰、親無乎美人笑曰、子非二瀕海令君一乎、色黑如下爲二潮風一所上レ吹也、何故到レ此、土平曰、人而不レ戀レ君者、貓乎鼠乎將蒼稻魂乎、即歌二土平曲一一闋一〇

說二得土平一難道生レ嗔、土平少時好色的人、

古云一樹之陰一河之流、皆是他生之緣也、願聞二芳名一永以爲レ好、美人曰妾笠森神女也、名阿仙、朝煎二和茶一暮團二米粉一、朝々暮々鎰屋之下、久留二此土一以交二人間一、故名雖レ逸二于列仙傳一、像不レ朽二於東錦畵春信之筆一、俚歌之曲、傳誦莫レ隱二于四方一、苟有レ目有レ口者莫レ不レ曰二阿仙阿仙一也、君則何如人、土平曰言則愚乎、吾先奥州仙臺人也、嘗有二大橋經營一時、捕レ鼠一箇剃頂梳髮、令二之賣一糯糍、豈謂、隣家之貓幷レ盆食レ之、於レ是自誓曰、不レ令三再賣二糯糍一矣、今也爲二華人裝一賣二飴東都市一、開口一歌、嬰兒立舞、莫レ不レ曰二土平土平一也、昔在二仙臺一爲二仙人一、今在二東都一爲二賣飴人一、則一代名則末代、君以二團團一我以二飴兒一、傳誦並行、不二亦奇一乎、請君賦二團團一、我賦レ飴、阿仙曰唯唯。

團團賦　　笠森阿仙

團團維幾、其數斯五、貫以二竹串之青一、圓以二米粉之素一、或味噌又醬油、伴二田樂之豆腐一、春稱二自花團團一、秋並二賞月魁芋一、菖蒲草團團添二夏景一、雪花菜團團有二冬趣一、若夫釋敎有二彼岸團團之名一、神祇稱二祭竈團團之數一、吾家團團婉孌之媒、送二靈團團無常之具一、景勝子之過二大道一兮、飛二團團之杵勤二農業一、桃大郞之征二鬼島一兮、日本一之桼燿二威武一、赤團團名矣、千團團穿レ縷、名物十團團

見于道中雙陸、圓團五引串殘、詳乎塵劫記語、夫笠森之陰稻荷之宇、賽願用米粉、香願供泥塑、泥塑赭而不白、米粉精而不粗、茶店休息日暮歸路、于茶于圓團、莫不戸賣人沽也。

飴賦

奥州土平

惟飴之性、克柔克剛、柔不粘齒、剛爲調臈、或裹箬子之皮、又容半紙之囊、稻荷前之地黄煎、川口屋之三官糖、寶引早來子、煙管互換郎、得蹼頭飴之位、以貴添糖鴛鴦之翼而翔、嗚呼糖坊之多、飴兒之昌、由水飴之就下、似綫飴之盆莚、于祠地內、于開帳場、涼傘斯開、店舖斯張、呼土産須買、言作糖之良、故盡美則曰太白練、語大則稱三間梁、夫土平之飴、華人之裝、隨傳誦以長賣、卸雨荷而浩倡、江都中之兒童、莫不買我飴而甞也

各誇其技、遂去不復與言

此稾也予十三年前所書也、傍附朱墨者風來山人所删定也、嗚呼土平飴棒已爲天平棒反上、阿仙茶釜飛化藥鑵而去、予嘗賦元日篇云、今日爲姑昨日婦、憶昔、休御用心、不其然乎、

天明改元年辛丑十月朔　陳奮翰題

附錄

阿山阿藤優劣辨 並序

予作土平阿仙傳將止贅言也、有客自淺草來、曰盍言銀杏阿藤、容貌傳誦何必出阿仙之下哉、予委細不管作優劣辨、以應焉其辭曰

銀杏稻荷問於笠森稻荷曰、盍聞君地有阿仙者、孰與吾家阿藤、笠森神曰、謚家之女阿仙、其字天生麗質地物上品、不琢而潔、不容而美、不戴釵梳之長、不假脂粉之粧、可謂眞物示眞矣、於是江都八百八坊芝至神田、歌佳人佳人稱阿仙阿仙、衆人流津液、隨牛至善光寺、莵子長鼻毛、大象能見繫著、增一椀一錢之價、腐九年面壁之臀、買饈不問其價、食茶不知其味、茫然而張望如阿仙之顏有神會也、加之門前成市、細路塞場雜沓蹂躪先者相代乎前、比舍圓闠

化爲餅、不言桃李自成蹊、亡論錦畫俚歌雙陸稗史、肥大阿仙假名代、飯田開帳作木偶、皆是非慕阿仙乎、未聞慕阿藤也、銀杏神蝂然而哈曰、汝長於谷中僻處、雖分閫埴薯蕷田樂之味哉、不知吾淺草之大也、夫楊枝舗在觀音堂後銀杏樹下、小舗連軒楊枝滿棚、鳩飛啄豆魚躍池源水陀螺小六氣球遊山、覽物貴賤上下、刀削擊攘臂摩、連袖成幕、投錢成雨、酩酊酩酊如比櫛齒然、勾引衆人照比隣者阿藤也、避人目袖巾、人心今爲眞愛本柳屋之名、憶孰菖蒲之歌、芒吐花錐脫囊鷹羽之章書壁、銀杏之葉布庭、二十尚不足、二八頗有餘、綏鬟如假髻、傳粉如人勝、象牙爲梳、白銀爲簪、眉黛淡掃口朱未乾、腰支束楊枝之細、衣裳惹文蛤之香、雛劇寫趣、錦畫傳世、春信幾投筆、文調難背面、童謠所謂如玉遮子者其此之謂邪、若阿仙則未也、二神答問移晷不止王子稻荷聞其由颯開佛帳

曰、止止關八州之總司正一位之甲第王子稻荷大明神一番貴而論之、夫容貌之美傳誦之論、人心如面、鹿馬烏鷺、剃刀爲鈍、硏槌爲利、猶新五左諸國風、放屁儒齋唐山也、且夫天地之間物不孤立、男女貴賤神儒佛老、予花子楓子餅于酒、不偏不倚、老父孫之中庸而擧一廢百倖當君之失計也、柔克制剛、損而見益、好名多餝、好利多怨、慳人雖似乞丐魂、窮鬼亦宿正直首、饕客則當世之伶俐、質素則痴呆之隱名、上而高慢者爲自負、下而輕薄者爲優子、生其中間者爲兩可飮而典衣者爲遊棍、遊而擲金者爲嫖客、陷其一穴者爲花子、千變萬化臨機應變、道大橫裂人誰適從、崗山房梓之黃表、多於丈阿戲作之稗史、小田原議之見識、滅於銀杏和尙之街談、尺有所短、寸有所長、弘法說字、愚者一得、何必以飯盞爲規短哉、聖人之道一龍一蛇隨時之宜、其道不同、不因不得不相爲謀、

豈啻笠森與銀杏哉、雖然淺草則繁華之地、南通藏前北接吉原楊枝舖之美誰昔然矣、笠森則異於是上野之後、谷中之隅、日暮雖贍唯春夏之交耳、然傳誦走千里、容貌名一時、吾雖非阿好、容貌傳誦皆可進一等矣、且先輩也、美也、雄也、阿藤爲雌可知已、是優劣之辨也、言終神則去、二神唯而退、

優劣辨終

讀土平阿仙傳戲作歌贈紬羅山人

君不見賣飴土平唱歌來。閭閻街衢總徘徊。又不見阿仙阿藤鬪繁華。一賣圓團一挑牙。或指笠森寺鎰氏。或分淺草攀柳家。雅素白於圓團粉。憐君手汲大和茶。腰支細於剝牙枝。憐君顏映酒中花。傳誦傳誦此一時。借問此傳作者誰。紬羅山人字破學。學文東閣日何之。春去夏來錢未盡。花飛蝶驚人不知。朝遊飛鳥暮日暮。上野之山淺草逵。看盡遊山覽物場。歸來開口如豆藏。古今筆力拔山手。新刻招牌揭下坊。辨舌如瀑且如電。文章非和又非唐。同氣相求讀之坐。飄飄疑泛紬羅洋。

友人　陸道人題

此本文三十六年已前予所書也、阿仙阿藤辨者伊庭竹坡所書也、今將之崎陽見之品川三間樓中、不亦奇乎、

文化紀元甲子孟秋廿五日

南畝書

賣飴土平傳終

檀那山人藝舍集

序

此書余三十餘歳時所作狂詩也、池端迂平集而刻之、以爲一冊。請余題其書。因題此名自號新寧武子。蓋其迂則不可及之意也。迂平之迂、入六道之捷徑而不返、未知其板散落誰手也、星運循環無物不還。今茲星運堂主人揚一本來、使予補磨滅。書中姓字、半爲鬼錄。桑田碧海流行亦後矣。鳴呼。昔之藝舍爲今之老婆。山人山人。飮酒之舌猶存乎否。因題一絶。

三十餘年不忍池、迂平筆跡刻狂詩、卽今物換星將運。花屋久傳櫻樹枝。

乙亥春日　蜀山人

藝舍集序

是歳三月之望、歩自梅若、將過于向島。酒客從予至權三之亭。春風徐來、桃李盡開。櫻草在地、仰見朧月。躓而轉地、問如藥研、堀而得三味線箱。開而見之、有薄物書。其書竹簡非文字方之文字也。富本乎、常盤津乎、將園八乎。抑鶴賀新寧武士乎。攜而登舟。偶有孤鶴、横江南來、翅如錄杳。戛然長鳴、掠予猪牙而北也。須臾客睡、予亦被蒲團。夢一藝者、振袖翩躚、過首尾松之下、揖予而言曰、向島之遊樂乎。問其名、笑而不答。嗚呼噫嘻、我知之矣。疇昔日待之夜、檀那樣方藝者衆多之中、此樣者非予也耶。者顧而笑。予亦驚悟寤惚覗之、不見其處。

天明四甲辰春三月

四方山人

檀那山人藝舍集卷之一

毛唐新齋武子著　門人　吳發刪輯
　　　　　　　　　　　李知信校

五言律

梅

古來云此枝。能似武夫姿。筑紫天神詠。奥州宗任詞。龍横葛飾臥。牛向杉田涎。緣日運何處。藥師兩大師。

櫻

大唐空吉野。日本有花王。枝掛龍頭重。春牽虎尾長。入相鐘未響。飛鳥酒無量。生醉謠山寺。隨風散四方。

松

名高大夫位。花發十廻春。宜避卯時雨。更思子日辰。泥坊眼物見。鹽汲愛礎馴。自有常盤色。門前歲一新。

品川潮干

元船何處遠。此日近如汀。平地千口底。高繩十八町。濶干牡蠣白。梳亂海苔青。向晚還新宿。遙看九曜星。

七言律

干菓子

仙家菓子一壺春。漸入口中佳境新。氷似砂糖將解處。月如饅首欲朧辰。漸看薄雪含霜柱。更愛梅花發小輪。落雁歸飛泉水綠。松風吹寄滿洲濱。

過葛西太郎

鳥居半出大川端。遙指園稻荷壇。盧葦刈來盛洗鯉。蒲燒食盡割長鰻。葛西號掛太郎鼻。晋子句藏百姓肝。向晚船頭呼不起。屋根舟内只聞鼾。

深川詞

土橋櫓下仲町通。大鳥居高永代東。俠客浴衣親和染。女房櫛卷本多風。豫知一日山開處。正是一軒金落中。三十三間堂未建。儼然弓矢八幡宮。

送富本齋宮太陪豐前太夫之肥前

肥前舊是操人形。何事齋宮向此亭。日日彈連三味線。時時來往二丁町。大夫床脇見臺黑。贔屓連中引幕青。豐竹變爲豐後地。知君高慢不堪聽。

讀演史昔八丈

衣裳八丈緋爲襦。白木屋娘字阿駒。見物股間立材木。座元勝閧響茶壺。片言聞得才三樣。一曲旨哉宜太夫。不是作頭首筋下。何人五體不相濡。

西行忌

二月正當二月天。西行忌日此開筵。鎌倉贈棒白銀露。富士詠餘陶物煙。夕暮秋寒看鷸立。往生春至對花眠。唯留風呂鋪兼笠。尊像儼然數百年。

和愛宕山人韻　席上　築地

櫻川流水不知源。愛宕山人杉木根。高慢天狗應汝輩。虛言築地愧吾論。老莊閉口將歸服。李杜潰肝已出奔。向晚遙看海邊島。布帆自似越中褌。

神田祭禮見美人

齒白脣紅銀出香。金屛映出棧敷傍。毛留帶結細腰麗。八丈名隨振袖長。燈籠鬢斜蟬重羽。牡丹簪動蝶將狂。誰家姉妹尤羨。可羨本町絲屋娘。

麴町樂湯觀山王祭禮

六月炎天日轉長。隔年祭禮奉山王。麴町井戶酒如湧。升屋店先人可量。萬度親分何處俠。三絃引手數多娘。君家今夕御馳走。自似悠悠人樂湯。

神田祭禮彩棚卽事

憶得桂川於半風。當年長右已爲空。緋楊振袖鶸茶絲。下著衣紋鹿子紅。五尺解來身體裏。細腰割籠棧敷中。蘭花又發裾模樣。應與山蜂吸露同。

郭中冬至

連子窓梅北面鄉。當筵忽發紙花香。日輕太鼓三拳勝。尻重於針一線長。昨夜雨沽天水桶。大門朝聚願人房。郭中居續逢冬至。暖氣氤氳似入湯。

記辛丑顏見世

花顏見世四天王。宿直着綿路考娘。秀鶴三升丘讓坐。青治萬菊共凝粧。中村里近門之助。尾上松高宗十郎。乙女姿隨晚風去。坂東一藝滿金箱。

右中村座

早飛芳野吹廻春。二蓋笠蓑何處民。獨古遙鳴谷十町。中車引出坂三津。山科無恙四郎拾。尾上兼看一兩人。木挽市紅初日曉。夜嵐聲入此松新。

右森田座

送風神

引道此風號谷風。鬪鬪痰咳響西東。惡寒發熱人無色。煎樣如常藪有功。一片生姜和酒飲。半丁豆腐入湯吞。送君四里四方外。千壽品川間屋中。

五言絶句

自讚

能書不擇筆。日日戲言出。若使藝扶身。天晴男一匹。

壽題

何處御年玉。新開扇子箱。下敷長煖斗。上放寶珠光。

三月五日見春公入有感

可憐出替涙。小慾留一把。冉冉春公間。誰是重年者。

梅松日出圖

梅如加賀紋。松似仙臺鎗。應是登城節。晴天日出光。

中芝居詠暮幕畫竹虎是所贈竹本住太夫也

虎栖千里藪。人慕石町君。般勤竹林幕。更得幾回開。

春日宴品川樋口氏

已見桑名蛤。又嘗寧樂魴。品川春日興。總與道中長。

訪醫者不遇

竈下問僮僕。旦那盛藥去。但在此藩中。門多不知處。

賀東作人道

白髮三千丈。竊桃如此老。不知明鏡裏。何處大入道。

阿德背面寬鏡圖賛

黑髮三千丈。如絲長且繁。不知明鏡裏。何處釣河豚。

夏晩卽事

風如半開扇。月似食懸餅。忽有星出。美看長者情。

病積

朝鮮弘慶子。積也痞奇哉。欲賴唐傘陰。門前不久來。

寒山賛

大寒分小寒。小僧出山否。欲啼却克哈。恐是寒山子。

題柳下蝙蝠圖

欲涼無烏鳥。蝙蝠滅多飛。應取山椒食。柳陰清水微。

顏見世

積物積如山。挑灯挑至曉。矢倉太鼓聲。金落知多少。

檀那山人藝舍集卷之二

毛頭新寧武士著　門人　吳發明輯
李知嚴校

七言絕句

叡麓八景

鶴吉晴嵐

山下行人北又南。暫看鶴吉興將酣。豆兼徳利一錢如雨。颯颯散爲比叡嵐。

茶舖夕照

留客茶釜甍自長。盃汲出煮花香。夕陽斜下葦簾外。遍照近邊名代娘。

土弓落雁

衣掛袈裟何處坊。殺娘先入土弓場。羽飛矢落七間半。自似雁金不亂行。

機關歸帆

機關一覗直三錢。萬里紅毛在目前。相見先方不知代。漫漫海上掛帆船。

蹴轉秋月

秋風吹送淫哇歌。階子攀升蹴轉橋。名月千金人二百。暫時一刻惜今宵。

佛店晚鐘

煮肴賣切札空明。客去二階手不鳴。忽有晚鐘聞佛店。誰家親父看經聲。

餅屋暮雪

下戶建倉白壁屏。比肩酒屋夕陽輝。寒餅引切一文取。如雪總隨新粉飛。

溝店夜雨

泥水推流溝店隈。夜中風雨路難開。懸聲忽舁肩輿去。兩掛獨沾蕎麥來。

七月二十六夜過小松軒遇雨

飯田町上小松軒。新話枝榮葉亦繁。風雨闇雲廿六夜。不知何處拜三尊。

題鯨吹潮圖

背若小山髭若林。獵師目鯢立相尋。今朝見屆吹潮處。七里繁昌第一森。

乞食橋有遺書

乞兒橋上一通文。拾得挑灯名自分。不是仲間還舊路。恐令返事若探雲。

初冬過書肆富田屋

富田潤屋德持身。鄽廣體胖養老親。櫻木更令小

春色年年新板自兹新。

題三優人圖

團十傳九七三郎。少長爭知老戲場。舞鶴西飛不復返。才牛曳尾向何鄉。

題大津畫三絃彈女圖

又平筆法至今嚴。浮世風流目不凡。髣髴相山三味線。若非於玉必於杉。

題三輪花信齋狐鬘美人圖

風吹葛葉信田邊。尾曳金毛玉藻前。狐狸穴中應計日。人間世上莫經年。

送竹本住太夫還浪華

幼少時祈住吉松。壯年名響石町鐘。今宵忽作三重別。調子從玆不易逢。

詠松

颯颯高砂住吉風。悠悠谿曲阿蘇宮。千年不改常盤色。若葉依然十八公。

中山君令郎出扇請狂詩云稚子所解語爲詩余走筆詠源攝州近臣以與焉

金時末竹渡邊綱。碓井定光事賴光。更有保昌獨武者。一人不讓四天王。

題阿福女圖

美女不如醜女情。莫嫌一滿與三平。阿龜阿德阿多福。盡是息災延命名。

題節季候圖

每年每歲日邪蹉。飛來飛去八百町。節季紛紛師走日。誰家丁稚最先聽。

題鎗持食夜鷹蕎麥圖

十字街頭十字鎗。斜棠手拭立彷徨。北風不滅行燈火。吹送夜鷹蕎麥香。

題畫栗

盤中此栗種何邊。桃栗三年柿八年。如是丹波爺打栗。曾參亦復返車旋。

小野氏宅觀戲場番付山田氏春日部在座

山田生醉似由良。春日部情類寺岡。忽見門前番附賣。假名手本忠臣藏。

題自畫

渡邊源五有功名。片腕誰憑茨木情。鬼目亦應令淚雨。羅城門外黑雲生。

右茨木童子失腕涕泣圖

一曲三絃大薩摩。二人勇力孰尤多。汝曾我五郎時致。

吾是小林朝比那。

右草摺引

僧敲月下東門邊。親父橋東多少年。二座芝居崩欲散。挑灯紋所照簾前。

右芳町少年

背面美人賛

東岸柳腰西岸色。南枝玉貌北枝春。美人外面何菩薩。尻食觀音是化身。

題文武火茶釜圖

文福元來文武火。謊言文福化茶釜。請看口爐開會。自有陰囊八疊鋪。

題當松朱買臣畫

鉈子一丁一把薪。傍開一卷更無人。知君能覆盆中水。墨畫畫成朱買臣。

上總念佛圖

上總還傳下國名。木綿無丈客無情。但因佛法東漸驗。男女能爲六字聲。

鹿嶋禰宜圖

常州鹿島大明神。神託正因事觸新。躍罷賽錢皆自取。撥當太鼓不當人。

傀儡師圖

西宮名代傀儡師。一曲機關騙小兒。廻向院前愼莫過。大人亦被山猫欺。

題柏筵外郎賣圖

天下市川海老藏。三升紋所耀衣裳。至今辯舌如流水。學得外郎透頂香。

題路考錦考髮梳圖

瀬川白菊疑波寄。松本紅顏似錦茵。胸霧口梳移柳髮。恨消淚洗鏡臺塵。

題盲人圖

投頭巾與袴腰斜。曳杖行行不食蛇。借問盲人何處去。物前遙指借錢家。

大黒賛

甲子春祈大黒天。家家以槌掃庭前。主人莫謾沽神酒。延命囊中自有錢。

友人福引得松茸枕畫

松茸元生稲荷山。化爲大物託人間。縱令淸少納言在。不許一番逢坂關。

蛭子賛

聞道西宮蛭子神。掛鯛釣得大江濱。濱燒不及潮煎

味吸物鹽梅打舌新。

瀬川仇浪得戲字

桂川瀬川松本翠。島樣紺樣中乘戲。共稱路考大明神。
自大神宮多最員。

達摩彈琵琶贊

座禪觀法九年間。一面琵琶向壁閑。是此蟬丸逢坂外。
往來別有無門關。

笠森懷古

笠森稻荷大明神。茶屋阿仙稱美人。土器碎爲土團子。
只今惟有煮花新。

第六天祭禮

聞道當年第六天。神輿練物度藏前。豈思富札出番付。
今日翻爲御祭傳。

暑中作

夜責蚤蚊晝糞蠅。更無夕立雨雲升。還疑風呂尤深
處。無正添薪燒且蒸。

暮秋

八百雁飛末作竿。三文漬菜入籠寒。獨敲車骨風
鈴下。秋葉紅於痔穴端。

題陶淵明圖

菊壽淵明御息災。田園曳杖幾回廻。古文直寶傾頭
見。歸去來辭最出來。

夏菊得支韻

芳澤清流岩井涯。菖蒲杜若共羞姿。誰知五月下旬比。
已有瀨川白菊枝。

觀花火得先韻

趙氏連城玉屋船。出來花火滿前川。只今惟在中洲
上。曾照納涼兩國邊。

市川三升助六

眞成揚卷爲君勞。親玉藝評助六高。二百蒸籠櫓廿五。
割鷄何用新場刀。

壬寅中村座秋狂言

高雄紅葉美人顏。伊達風流不破關。別有三升三本傘。
札錢如雨入如山。

土山氏曲水同管江賦

上巳風流御祝儀。土山池上共題詩。二人姿似紙雛
貌。疑到加田粟島涯。

食厨喰日

三月四日望汰臺。少年多興迎客盃。人情共願醉中
句。乞何卒自午時來。

至升亭

四日遠方求赤良今春三度會高堂獨憐京國人難義。不似鴻池水量長

祝阿彌擬唐詩選七絕第一章見贈予擬第二章以代和韻

戯場四時歌

儀式三番已渡翁。狂言作者各爭工。年年歳歳爲曾我歳歳年年役不同。

右春

時今五月下旬過。十八年來風雨多。貧乏不知曾我祭。俄爲分限意如何。

右夏

信田葛葉別兒還。又見稻妻不破關。柱木秋高三本傘。天邊何處狂言山。

右秋

一陽來復座元春。顏見連中打手頻。裝束如花顏見世。誰憐跡足馬蹄塵。

右冬

送鈴木生之三河

三河杜若八橋端。五月旅衣肌不寒。若入村中逢萬歳憑君傳語御平安。

送三井子還京

三井三郎出府間。今年今月向京還。駿河町内回頭望。雪少軒端富士山。

又

君家人馬平安城。東海道中無恙行。我贈狂詩正札附。何論上總木綿情。

冬日同萬年君文竿子祝阿彌宴于赤坂一閣

河東

河東曲合絃歌文句文竿感祝阿。賓主禮儀三百坂。萬年歡樂此中多。

題面箱持圖

雪薺紋所面箱持。一松間進步遲。日出舞臺天氣好。式三番叟欲催時。

題市川升扇壽

福壽草開周代春。三升若水一陽新。名高自慢鼻江戸。天地乾坤有此人。

送渭滄浪入京

渭滄浪客向京都。通者青青月代殊。勸君能盡一杯贅。西出箱根多野夫。

二月十五日宴于品川三間屋

二月涅槃大佛前。二間茶屋品川邊。安房上總看相近。吹送春風帆掛船。

玉川呼井戸　四谷六詠之一

呼來井戸玉川流。普請年年不暫休。水道根元從此始。分沽八百八町嘸。

大晦日簡友人

證文書盡借金多。懷手無由作鼻歌。今日正當大晦日。君家仕舞近如何。

檀那山人藝舍集大尾

藝舍集跋

檀那山人著藝舍集。而傳于山下女大夫矣、女大夫歌而過書肆前。曰狂兮狂兮何德之潤、而廢者不可求。行者猶可賣而、讀而讀而今之從。通者妙而、書肆見而作矢早急彫之、夫世上通人勿論事、木野交薄鈍若情無手無叢雖。曰有鳥之不鳴日就不見此集哉、予時天明四年玉王正月突此集端之步

七八山隱士

王笑之

二大家風雅

先生樣方倍々御機嫌能恐悦之至奉拜賀候焉愈以御風流之御事奉察何卒珍敷詩文集備電覧度種種相働今度銅脈先生寐惚先生兩親王贈答之詩篇所所方方捜索集之致小冊名號二大家風雅候、然處丁數薄少仍之乞求江戸諸先生之御作幷銅脈先生御近作附録之仕候誠以當時東西大關古今華角力雖番數不多先不取敢奉入賢覧候恐惶謹言

寛政庚戌秋八月

平安　松梅亭主人識

序

難波蘆伊勢濱荻。京師粋江戸大通。雖據地而異名本是一物耳。寐惚銅脈。雖其名異亦是同穴之狐。彼爲高入道一切之。此爲小娘子當之。奇正變化。殆難計矣。予雖未越鳥居而同穴之好。蓄化之度酌一獻而書之。

江都　門屋酒船撰

二大家風雅

西　銅脈先生
東　寐惚先生　著

遙寄寐惚先生　銅脈先生

客莫如坊主佛無貴随求茶屋悉受悪借錢積如
丘道樂異見重覆相談催直行其夜短朝徹過未回近
日被追出忽向關東之戲氣盡又盡偶有寐惚知

和答銅脈先生見寄　寐惚先生

狂詩無和者年來且相求門番留老子坭坊叱孔丘
從知四角字貧乏轉相催文盲多大才腹筋日九回偶
讀太平樂御作又有之始識我姓名君能御存知

寄銅脈先生

銅脈先生自流滅方海上欲浮舟唐巴詩映勢多水遺
響人偸物澤樓聖護院邊君已聖牛籠門前我如牛更吟
小本太平樂婢女行篇鬼濕眸

酬寐惚殿見寄　銅脈先生

皮厚年年馬鹿濃酒醒夜憶關東應生祠古祇園外物
澤樓高江戸中習井風寒大名走下町米貴小心窮地震洪
水君無恙御作數篇幸便通

寄銅脈先生　寐惚先生

菊桐秋盡素塞貧花發南鐐八片春佐渡金山何處在後藤
光次熟家視波錢九十川難越催實文時來臻近日囊
中無小遣頻思銅脈眞人

答寐惚先生見寄　用韻　銅脈先生

東笑先生亦病貧治貧樂不見回春久悲銅脈難通
用何故金箱能得親誠恐謹言合力頼賞正明白案文臻
酒家近附都相倒乘醉聊交世上人

贈看花書生

時花雅人共行讀懷中書無幕草爲寧有鐺石作
如水交三升酒蠅集片身魚陳舊詩成後一盃食又噓

歩銅脈君東山韻　寐惚先生

東山花見興委細見尊書傾酒一盃可溥茶足如交

情厚自妓詩賦新於魚何日離江戸上京丘說嘘

贈花書生詩寐惚和韻因復用其韻寄寐惚

銅脈先生

兵交無類世大異古人書附合狗兼去蕩遊馬與如
耳聞山杜宇口食初勝魚江戸風流地猶傳八百嘘

贈平安狂題分銅脈先生

問屋酒船

道中雙六上京邊簺日翩翩美景連山近鼻先青侍過水
清顏色白人鮮公家寶荒神口猛者群大佛前難
聽國聲尋宿屋思應不識旅籠錢

冬夜青龍亭初謁問屋酒船坐上見寄詩郎用其韻和答

銅脈先生

初得拜顏梶井邊學杯坊主坐中連庭湛池水遙東
北肴似人參疑朝鮮酒冷長談火鉢下僕眠勝手茶
釜前夜深門外賣蕎麥欲買囊中無一錢

奉呈太平館主人

腹唐秋人

未得尊顏脈主人狂名大響四方頻酒船今度爲

橋掛百里狀通如御隣

答腹唐秋人用韻

銅脈先生

山川萬里向之人立出頁鍮呼主頻主亦已來不岩
本通神數寄宛如隣

初以書狀謁銅脈先生爲目見奉隅田八首詩

擬南郭樣墨水詞八首

腹唐秋人

楊柳橋邊柳葉飛爲猪牙船頭任腕押小菊一枚花

右楊柳橋

西岸武陵巷總州江戸裡文乘合舟掠見樓船妓

右御厩渡

花川開繡戸岸上積材薪舉首蒲團裏已過會處濱

右花川戸

歡喜龍山廟下觀織殿亭花雖賣酒割水暫時醒

右金龍山

大堤春水滿作道夜無愁相送堀船宿挑燈引客幽

右日本堤

阿兒何處去命日彌生望荷筐古風女今時無物狂
右梅兒家
停棹春遊子大郎禪寺前木魚朝晩事和尚羨三絃
右牛頭山
此處王孫遊女郎來北州業平今不見只有色男流
右在五祠
奉復大酒德望太平館主人銅脈先生素足下
寐惚先生
暮春十日書卯月五日届黍細拜見處益々御風流此方
無別條馬鹿日相求八百八町會四里四方遊朝寢環
町暮夕上吉原樓恨不得先生無禮作講頭傳
言宜傳達秋人與酒舟
奉寄業寂僧都
聞君曾住北山傍業寂僧都名不忘豪氣全凌花和尚滑
稽何讓武藏坊法中衆議否應滑醉後拳指亦柔聞道
上京將近近容尋淺草折垂楊
業寂僧都見誘看花東山醉而不能歸一睡
至曉僧都有詩次韻
銅脈先生
春日偶被誘狗賓醉花忽作夢中人却疑身是遊

鞍馬目覺龍歸家內嗔
答寐惚先生見寄二首
失寄來本韻
食下徘徊幾沒川御先眞暗向何邊夢中逢爾又思
飮巾着落來無一錢
又
八月衣裳流若川肌寒容質家邊對人只說貧士恒猶
有腰間沽酒錢
奉贈銅脈先生
不圖山人
脈也酒無欺猩猩赤脚踏石樽地藏笑對偖閻魔閙
醉去回私窩携來稱素娘君家山鬱鬼聞此若雷荒
箱根山作
問屋酒船
箱根八里馬越遙雲助似帶繞山腰白樂天晴有私
雨青漆合羽巖肩驟
七夕作
有天比翼鵲橋懸有地竹枝短冊連織女遺機腰動
切牽牛鳴鼻當流涎
題製豆腐圖應黎祁先生需
銅脈先生

煮豆燒伽羅下駄今尚香其味淡如水宜充君子
鐺

贈錢屋惣四郎

太平館裏太平盡錢屋親珠錢奈何板屋勘平本無板世
間名目皆噓河

贈歌者阿富乞予詩

傳語頻交油吾詩所望預紺談紙屑買莫作薩摩黄

遊圓山二首

酒肉雜音樂興酣夜識還初知生作佛安養卽玆山

其二

坐酣客不譟歌靜節愈濃醉枕仲居膝時聞御忌鐘

茶亭退屈得刻字

酒盡坐中丹波色客非素人黑如墨炭流釜靜茶將
終服國分極上刻

題圓山佐阿彌卅坐敷

連山波濤裏坐敷自如舟只是船頭彩纜棹漕歌流

呈銅脈先生　馴角散人

實者非銅脈百文重寶連多才擢大佛阿足笑飛仙
氣堅囊中鐵名巡方外圓美君通用遠人嫌仙臺錢

吉原冬至　寐惚先生

連子窓梅北面鄉當筵忽發帶花香口輕太鼓二夲勝尻
重於針一線長昨夜雨天沾水補大門朝亂願人房郭中居
續逢冬至暖氣氤氳似入湯

詠鰹魚鱠

四日市邊船集汀聲初物最先聽鎌倉夜送三千本江
戸朝傳八百町骨人看鍋中落赤帶殘俎板大根青
何須直段論高下笑食差身對白丁

自讃

能書不擇筆日日屁言出若使蕪扶身大晴男一匹

節分　銅脈先生

擲豆追出鬼心靜取年怡江豚號入內此魚何祝
儀

題鬼化娉偸翫圖

鬼神何横道盜腕雲中沒回頭如郭公只見有明月

美人梳髮

三本臙長首筋毛十分漆人勝由高燈籠已古佳兒鬢鼈甲
耳搔耳不搔

白藏主圖　四言

有狐綏綏在彼淇隈未見獵師喜聲嗿嗿

竹雀圖　六言

更笑痩藪還雅何處雀來啁啁百歳未嘗忘踊躁不爲
品能留

答問屋酒船　失寄來本韻

相見銀煙管大通不辱京欲加吸口太思案雁頸傾

牛圖

引出暗狩峠濛濛夜雨行此牛被賴贊思案與涎長

猿畫

昔在人間時住長家裏今回四國歸甚赤面之
至

題壽老人騎鹿圖

星隕能作石又爲如是者福祿欲傲人時時鹿爲
馬

鵰畫

明朝天氣好今夜擦糊長身貧畫不出何人名福郎

群僧行乞圖

鶴翼又魚鱗噸噸顏若怒群行一陣雲散作宮川雨

詠梅

上東門院樹半解動春風香溢[illegible]箱外花開坪皿中梶原

插箙戰安倍詠歌工含吐天拜嶺忽然雷轟空

十夜寄閑々房

一茶茶飯夜食清集錢配袋欲心明貴來念佛稍將畢
時聽願人宿毒聲

枕

急時灰吹三線筥雲雨巫山夢亦寒曲肘枕之吾不識
此詩趣向摧邯鄲

茶

一服薄茶夜咄時共銜惡態譏人奇炭流煮止竹繁暗
月照鉢前客去遲

訪隱者不遇

尋來多留守居續何邊遊小便替物茶爲有隣人偸

贈替宿人

此仁曾住下宮川替宿元因難濫多至極粗成横道者
家賃不拂燒根馱

奉寄極樂主人

先生本凡夫皆言一向粹遍濟度衆生不搆人稱時

訪友人山居

山中少食物閑居不善多穿林捕宿鳥臨水掠魚
鰕

孝行糖

不須問正體只喜孝行名形似孟宗殿香齊丁子

香

三福神

嘉辰令月夜相逢三福神共振文殊智只擬溜金銀

桶取

汲水此溪女擔傘何郡人相逢頻欲吊揉氣壬生春

福神

早起事仁義女夫莫喧嘩八來俺盛酒自應傲榮華

二大家風雅終

めでた百首夷歌序

そも〳〵このめでたいと申は、天竺にてもはじまらず、大唐にてもはじまらず、わが日の本の夷三郎、めでたいつりの絲より鯛このめでたいをつり上しより、めでたい事のかゞみ鯛、末の代までも引出す延喜の御代のひたい箱も、ふたあけて見ぬ京ものがたり、今や四つの海波しづかにして、沖釣のめたいかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり、されば弓は袋棚の上にすゝけ、お太刀はさやがたの小袖にまとはれ、まろひかぶとは笑道具となり、鐵砲は樂ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、もちはもち屋に、たけき親分も大小樂をならべ、あやしの百姓萬歳樂をとなへて、まことにめでたう候ひけるとは、今この時をや申べき、かゝるめでたき御代なれば、かのもろこしの何がしが、何でもよし〳〵といひし道をふむとはなくて、よるもひるもめでたい〳〵といふ事をくちくせにして、めでた男と名たゝる人あり、われも又めでたい事をはり川ゝ流のまゝによみ出せし、めでた百首のたはれ歌をめでた男にしめさんとて、覺えずひとり笑ふ門に今幅といふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまだいのあまねくつたへたい、いしのいはほともなるとぼねのなみなみならぬめてたい中の、たいのあらを三つ道具のすきものとともにせんといふに、まづ手をうつておきつたい、いく千代かけしかけだいの尾、めでたいとも見玉へかし

天明三のとし三ッ朝うらゝかなる四方赤良書

立春

改年の御慶めでたく天の戸を
明ましてよい春は來にけり

子日

門松に子日の小松この比は
引つゝいてのおめでたい事

霞

めでたき日霞の衣たちそめん
暦の下段山の中段

鶯

うぐひすのはつねのけふの小謡は
ひとく／＼にめでたかりけり

若菜

七種の若菜にめでた／＼やと
手をうちつれてつめをこそとれ

梅

飛梅のとんだめでたい事つくし
こちかぜ富貴自在天神

殘雪

豐年のみつき物にておめでたき
この獻上の殘雪をみよ

柳

ゑばしとてたちとまるまにめでたいを
つり出したるいと柳かな

早蕨

早蕨のにぎりこぶしもあてられず
めでたく笑ふ山のかほには

櫻

花をめでしことばもよゝの櫻木に
いのちながきぞめでたかりける

藤花

萬代の池の龜の尾めでたけれ
長／＼しくもさがる藤波

杜若

かきつばたむかしはいせの物語
今はめでたくひらく三河記

歸雁

幸若のお禮めでたくゑまひつゝ
ともにこしぢへかへる雁金

喚子鳥

三鳥の傳授のすみし目出たさは
おほつかなくもなきよぶこ鳥

春駒

あら玉の春のはじめの春駒は
ゆめに見てさへめてたかりけり

春雨

春雨に火の見のたいこ苔むして
人おとろかぬ御代ぞめでたき

苗代

なはしろのたねは一粒萬倍と
めてたくさんになりはひの道

菫

いつまてもめてたき御代にすみれ草
色よき花の江戸の紫

欵冬

山吹のはなかみ袋ぬしやたれ
ひらふこかねの數のめてたさ

三月盡

荒神の松にめでたき花の香を
わけておかまもけふ拂ふなり

更衣

けふは又めてたしなみの衣かへ
あれのこれのとゑり祝ひせん

卯花

時ならぬ雪をめでたき折ふしに
何かはことをかきの卯の花

葵

いたゝいてかたにかけたるお小袖も
めでたき時に葵から草

郭公

ほとゝきすまちまふけたるみぎりより
ひだりの耳できくぞめでたき

菖蒲

目出たさはかぎりもながき町つゞき
ふく／＼しくもふくあやめ草

五月雨

五月雨のふる屋の軒のやね板も
あつきめぐみにもれぬめでたさ

早苗

早苗よりひいてゝみのるいきほひは

千町萬町やめで田植歌

螢

ほたる火ち片もふくろにおさまりて
　文をみきりの御代そめてたき

橘

たち花はみさへ花さへめでたさは
　やはりむかしのときは木のまゝ

照射

鹿をおひともしからざる世わたりに
　山をみすともめでたかりうど

蚊遣火

にきはへる民のかまどの蚊やり火は
　めでたき事のためしかやの木

氷室

水無月のひむろに金をたくはへて
　へらずきえずにつかふ日出たさ

蓮

はちす葉はどふやらほとけくさけれど
　花の君子ときけはめでたき

泉

金銀はいづみのごとくわき出て
　めでたく人にくれてやり水

荒和祓

つみとがもあらにこはらへにこ〳〵と
　わらひきよむるけふのめでたさ

蘭

草からぞ東の門のおそしきは
　花をめでたいことのなる蘭

雁

かうがひをとりて雁々みつ口の
　跡のが先へすゝむめでたさ

苅萱

千日にかるともつきぬかるかやは
　めでたかるかやめでたかるかや

鹿

神の威をひけらかすがのめでたさは
　おしかのつのゝつかまへてなし

薄

花すゝきほゝゑみたてる秋の野に
　めでたい事をまねくとぞみる

女郎花

をみなへし馬から落た僧正に
　おけがのないぞめでたかりける

立秋

黄金の桐の一葉もおめてたく
　つもれば千々の秋やたつらん

霧

市をなす門のとびらを朝もよひ
　きり〳〵〳〵と明るめてたさ

萩

長ひつにいれてめてたく御歸宅の
　このおみやげをみやきの丶萩

荻

秋風のふき來るこそめでたけれ
　荻のうは葉の數もいく千代

七夕

おたなばためでたなばたといはふらん
　あまのかはらぬお出合の空

駒迎

勘定もあふ坂山にうり主の
　めてたく金をもち月の駒

露

草の上に思ひもよらぬめてたさは
　めくみの露のこほれ幸

月

かくばかりめでたく見ゆる世の中を
　うらやましくやのぞく月影

槿

よはにいね朝起しつ丶朝がほの
　花を見るこそめでたかりけれ

紅葉

林間にもみぢの錦おり敷て
　めてたく酒をあたゝむるかな

擣衣

遠國のたよりもゆかしさよ砧
　めてたくかへる衣うつなり

蟲

身上もめてたき家の壁の中に
　財布をつゞりさせとなく蟲

九月盡

けふまでにわれあきはてし貧乏の
　神なし月を待ぞめでたき

菊

むかしから花にめでたい人の名は
　これ御そくさいゑんめいときく

初冬

ひんぼうの神無月こそめでたけれ
　あらし木からしふく〳〵として

雪

目出たさの源左衛門はうづもれす
　いでその時の鉢の木の雪

霜

顔見世のゑら〳〵あけぞめでたけれ
　かしらに霜の翁わたして

時雨

世の中はゑぐれのやどり宗祇でも
　めでたい事のふり來れかし

埋火

うつみ火の灰の中からかきおこし
　うせたる物の出るぞめでたき

神樂

神樂笛ひうやらやんらめでたいこ
　うつやてんゑやう大神の前

鷹狩

わけてけふめでたかり場のお物數
　ありとや祝ふやかた尾の鷹

霰

冬ごもりめでたく無事にまめいりを
　いれとや數のあられふるらし

網代

門出はみなひをゑらみおめでたく
　駕籠のあじろにかゝりぬる哉

千鳥

鹽の山ひかぬもめでたさよ千鳥
　いつもさし出のいそ〳〵として

水鳥

水鳥のおしあはせよく鴛鴦の
　衾をかはすにはのめでたさ

寒蘆

つの國のなにはの春のちかよれば

あしのかれはもやかてめでたき

氷

足もとのあきらけき世のめでたさは
うすき氷をふまぬ世渡り

除夜

大歳やことしはわけて去年よりも
めでたき年の暮のおしまい

炭竈

くもりなき世にすみかまの夕烟
めでたくのほる位山ひと

旅戀

世はなさけ旅は道づれ出女も
おじやれといへば來るぞめでたき

遇不逢戀

あふてまたあはさる物のめでたきは
女郎のはだと道の辻風

初戀

鶺鴒の鳥のめてたき目つかひに
尾を見つけたる色の道哉

忍戀

しのびてもきゝつけられんつゝみおく
めでたき物の袖にあまらば

後朝戀

うかれめの宵の口舌もあけがたに
中なほりしてかへるめでたさ

恨

ゆく末をめてたく契る心より
かはひ／＼のうらみもぞする

曉

よきことを思ひ出せばあかつきに
ねられぬ老もめてたかりけり

片思

相ほれはかへりてあきのかた思ひ
みむまのあひそめてたかりける

不遇戀

あふことを命つなにてなからへは
うけひかぬこそめてたかりけれ

苔

公事訴證たへたる御代のめてたさや
しらすの石の苔のむすまで

初逢戀
ひろからずまたせごからず香箱の
　ふたりしつくりあふそめでたき

竹
竹の子のまた竹の子の竹の子の
　子の子の末もしけるめでたき

松
ちとせふるまつはめでたくいつとても
　十八公のわかさかりかな

思
忍ふれと色にいづるを見のがして
　物や思ふとゝはぬめでたさ

山
山の名のふじにめでたくつきあてゝ
　三國一の富をこそとれ

鶴
千年のつるの玉子をときはなる
　松の十かへりかへすめでたさ

河
千年にたつた一度の黄河より
　めでたくふだんすみ田川哉

橋
すご六のさいの目出たきふり出しの
　やらは一本にほんばしかな

野
名にしおふおひざもとゆへむさしのゝ
　草はみながらめでたしとみん

海路
桑名から七里のわたしつゝがなく
　宮へつき〳〵祝ふめでたさ

關
あいた口とさゝぬ御代のめでたさを
　おほめ申もはゞかりの關

旅
先ぶれのいたらぬさとはなかりけり
　めでたき御代の問屋宿次

別
あふものはわかるゝものときく時は
　わかるゝものはあふぞめでたさ

山家

商山のよぼくれおやぢよろ〳〵と
道ある御代に出るめでたさ

田家

百姓の家の寶にすきと鎌
くはめでたいの三つ道具かも

懷舊

老らくのめでたき今にくらぶれは
むかしは物のたらぬがちなり

無常

世の中の諸行無常をやめにして
是生滅法界のめでたさ

述懷

いかにせん心のこまのすゝみつゝ
めでたい事におはれぬる身を

夢

あはめしを喰てはこしておめてたく
榮花の夢をみる五百年

祝

おめでたく又おめでたくおめでたく
かへす〳〵もめでたかりけり

めでた百首夷歌終

蜀山百首

春二十首

あら玉のとしのはじめの福壽草
　祿といふ字はその中にあり

生酔の禮者をみれば大道を
　よこすぢかひにはるは來にけり

みわたせば大橋かすむ間部河岸
　松たつふねや水のおも梶

春がすみたちくたびれてむさし野の
　はら一ぱいにのばす日のあし

慈悲心も佛法僧も一聲の
　ほうほけきやうにしくものぞなき

子の日する野邊に小まつの大臣は
　いまも賢者のためしにぞひく

まな板のこぐちにはれる青紙の
　いろも若菜におよぶものかは

おれをみてまたうたをよみちらすかと
　梅のおもはんこともはづかし

ふみこのむ木を右にしてやり梅を
　ひだりにかざす御代ぞかしこき

一刻を千金づゝにしめあげて
　六萬兩のはるのあけぼの

すみだ川のちのあしたも細見の
　山がたなりに歸るかりがね

何なりとこのめはるさめふり袖の
　新造まじりゐつゞけの客

青柳はめはな眉髪こうもありて
　前のなきこそうらみなりけれ

ところ〲ふし〲ありてなまよみの
　甲州いとに似たる青柳

一めんの花は碁盤の上野山
　黒門前にかゝるしら雲

風のいるすきまもみえぬ山ざくら
　櫻が山かやまがさくらか

さかづきもさすが女の節供とて
　もゝのあたりに手まづ遮る

山吹の口なしめしやもらんとて
　おたま杓子も井出の玉川

杜若むかしはいせの物がたり
　いまはめでたくひらく三河記
上からも下からもまた花とはな
　あはせかゞみが池のふちなみ

夏十五首

春なつのちかしき中は猶さらに
　かきをせよとやさける卯花
この神のわけいかづちぞありがたき
　あふいでも猶あふいでも猶
ほとゝぎす鳴つる跡にあきれたる
　後徳大寺の有明の顔
いかほどにこらへてみても郭公
　なかねばならぬむら雨の空
鎌倉の海よりいでしはつ鰹
　みなむさしのゝはらにこそいれ
早乙女の脛のくろきに仙人も
　通をうしなふ氣づかひはなき
のぼり竹すぐなるよとは上下の
　麻の中なる蓬にぞしる
さみだれにいたゞく空の底ぬけて
　水たまらねば屋根ももる殿
人なみに戀の螢はあつめても
　きりからもゆる火をいかにせん
惟光がたちながらくふ蕎麥のいろ
　いよ／＼くろし夕顔の花
撫子の后のお名にさしありて
　まはしにとれる床夏のはな
いつはりのなきよなりせば本なれの
　西瓜の皮に穴はあけまじ
質藏にかけし地赤の蟲ぼしは
　ながれもあへぬ紅葉なりけり
去年から氣を張りつめし氷室守
　こよひや心とけ／＼とねん
こゝろだにちのわのごとくまろからば
　くゞらずとても神や守らん

秋二十首

風鈴のりんとひゞきし秋かせは
　荻の上はの一文の錢
天の川ながれわたりのもろかせぎ
　牛をひこぼしはたをおり姫

白川のお關所ならばなが横の
　なかあらためてみやぎのゝ萩

女郎花口もさがのにたつた今
　僧正さんが落なさんした

花すゝきほうき千里のむさし野は
　まねかずとてもたみのとゞまる

大空にかり〳〵〳〵の聲するは
　たが書だしやかけてきぬらん

秋はてばやがてもみぢの吸物と
　なるともしかとしらで鳴らん

しらずこゝろたれをかうらむ朝顔は
　たゞるりこんのうるほへる露

かくばかりめでたくみゆる世の中を
　うらやましくやのぞく月影

分厘の雲さへはれてそろばんの
　たまの三五の十五夜の月

清書もあがる二度目のつきかげは
　また一段と見事なりけり

大菊をめづる狂歌ははな紙の
　こぎくを折てかくもはづかし

七百の慈童もありときくの花
　高野六十那智は物かは

龍田山こぞの枝折は林間に
　酒あたゝめてしれぬもみぢば

おはしたのたつたがしりをもみぢばの
　うすくこく屁にさらす赤はぢ

秋のたのかりほの庵の歌がるた
　手もとにありてしれぬ茸狩

歸んなんいざとて入し里の名は
　たゞ落栗の音にのみきく

子をおもふ朝三暮四の猿の尻
　眞赤にひとつのこす枝柿

ひとつとりふたつとりてはやいてくふ
　鶉なくなる深草のさと

もみぢちる萩や薄の本舞臺
　まづ今日はこれぎりの秋

冬十五首

神々の留守をあづかる月なれは
　馬鹿正直に時雨ふるなり

掃除せぬ門の落葉をふみわけて

こそ〳〵と誰かとはまし
世の中はわれより先に用のある
人のあしあと橋の上の霜
袖の上に霜か雪かとうちはらふ
あとよりしろき冬のよの月
雪ふれば巨燵やぐらにたてこもり
うつていづべきいきほひはなし
一むれの奥女中かとみるまでに
木ごとに花のわた帽子雪
駒とめて袖うちはらふ世話もなし
坊主合羽の雪の夕暮
よし人は犬といふともふる雪に
わがあとつけていでんとぞおもふ
空と海ひつたりつきの中川の
はら〳〵松にたつ千鳥かな
さん水にひよみの酉の市ながら
いもほり僧都なきにしもあらず
わけてけふめでたかり場の物數も
ありとやいはふ屋形尾の鷹
しろかねの臺にこがねの盞の
花はいはずと人やすゐせん
淺草のうら白根松やぶ柑子
だい〳〵ところ本たはら町
今さらに何かをしまん神武より
二千年來くれてゆく年
年波の今やこえんと門〳〵に
たてし師走の末の松山

戀十首

千早振神も御ぞんじない道を
いつのまにかはよく敎へ鳥
疊ざんおきてまつばのかんざしは
あふみおもてのうらかたぞうき
たゝみこむ胸のおもひをいひかねて
ひねりしちりや山となるらん
おさらばとそむけし顔をむき玉子
きぬ〳〵絲のきるにきられず
あなうなぎいづくの山のいもとせを
さかれてのちにみをこがすとは
をやまんとすれども雨のあししげく
又もふみこむこひのぬかるみ

うづみ火のしたにさはらでやはらかに
　いひよらん言の葉烟草もがな

灰吹の青かりしよりみそめこし
　心のたけもうちはたかばや

あはまくは瓜のはたけにねもしなん
　とりつる履のうき名たつとも

世の中にたえて女のなかりせば
　をとこのこゝろのどけからまし

雑二十首

富士のねの表はするがうらは甲斐
　前は北面のちは西行

すみだ川今は吾妻のみやこ鳥
　業平などは在五中將

てる月のかゞみをぬいて樽まくら
　雪もこん〳〵花もさけ〳〵

全盛の君あればこそこのさとは
　花もよし原月も吉原

千早振神代のむかし面白い
　事をはじめしわざをぎの道

日の鼠月のうさぎのかはごろも
　きて帰るべき山ざともがな

世をすてゝ山に入るとも味噌醬油
　さけの通ひぢなくてかなはじ

あいた口戸ざゝぬみよのめでたさを
　おほめ申すもはばかりの關

文月のふみもや通ふ神無月
　うらをかへしてあそぶ赤壁

すみよしの新田ふえてとしぐ〳〵に
　あとしさりする岸の姫松

雀どのおやどはどこかしらねども
　ちよつちよとござれさゝの相手に

あぶかしい一葉にのれる蜘蛛をみて
　舟をつくりし無分別もの

いたづらにすぐる月日もおもしろし
　花みてばかりくらされぬ世は

ねてまてどくらせどさらに何事も
　なきこそ人の果報なりけれ

世の中はさてもせはしき酒のかん
　ちろりのはかまきたりぬいだり

よの中はいつも月夜に米のめし

さてまた申しかねのほしさよ

念佛を申すこゝろのやさしさは
鬼も十八だんりんの僧

鶴九百九十九ねんめ龜九千
九百九十九あゝ術齒會

千年のつるの玉子をときはなる
まつの十かへりかへすめでたさ

萬年とかぎれるかめも尾のながき
友にひかれて億兆やへん

此一帖吾家狂歌髓腦也其他一時漫興宜屬皮毛云々

文化戊寅孟春　蜀山人

此木限千部
一字以爲證

足一

蜀山百首終

狂歌百人一首

天智天皇
秋の田のかりほの庵の歌がるた
とりそこなつて雪はふりつゝ

持統天皇
いかほどの洗濯なればかく山で
衣ほすてふ持統天皇

柿本人丸
あし引の山鳥のおのしだりがほ
人丸ばかり歌がみでなし

山邊赤人
白妙のふじの御詠で赤ひとの
鼻の高ねに雪はふりつゝ

猿丸太夫
なく鹿の聲聞たびに涙ぐみ
猿丸大夫いかい愁たん

中納言家持
其まゝにをくしもの句をかり橋の
白きをみれば夜ぞ更にける

安部仲麿
仲麿はいかいはぶしの達者もの
三笠の山にいでし月かも

喜撰法師
わが菴は都の辰巳午ひつじ
申酉戌亥子丑寅う治

小野小町
衣通の歌の流義におのづから
うつりにけりな女どしゆへ

蟬丸
四の緒のことをばいはすせみ丸の
お歌の中にことの字四ところ

參議篁
こゝまでは漕出けれどことつてを
一寸たのみたい海士の釣舟

僧正遍昭
吹とぢよ乙女のすがたしばしとは
まだみれんなるむねさだのぬし

陽成院

みなの川みなうそばかりいふ中に
　戀ぞ積りて淵はげうさん

河原左大臣
陸奥のしのぶもぢ／＼わがことを
　我ならなくになどゝまぎらす

光孝天皇
光孝と何かいふらん君がため
　若菜を摘は忠義天皇

中納言行平
行平は狐のまねをしられけり
　松としきけば今歸りこん

在原業平朝臣
千早振神代も聞ぬ御趣向を
　よくよみえたり在五中將

藤原敏行朝臣
とし行といふはもつとも住の江の
　岸による波顔による波

伊勢
なにはがたみじかき蘆を伊せならば
　たゞ濱荻とよみそうなもの

元良親王
わびぬれば鯉のかはりによき鮒の
　みをつくりてものまんとぞ思ふ

素性法師
いまこんといひしばかりに出でこぬは
　素性法師の弟子か師匠か

文屋康秀
喰からにあせのお袖のしほるれば
　むべ豆粥をあつしといふらん

大江千里
月みれば千々に芋こそ喰たけれ
　わが身ひとりのすきにはあらねど

菅家
このたびはぬさも取敢す手向山
　まだ其上にさい錢もなし

三條右大臣
三條の右大臣なら前にいる
　河原の左大臣はなじみか

貞信公
小倉山みねのもみぢば心あらば

貞信公に御返歌をせん

中納言兼輔

泉河いづみきとてかかね輔が
となりの娘戀しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける
矢張市中がにぎやかでよい

凡河内躬恒

こゝろあてに吸ばや吸ん初しもの
昆布まどはせる鹽たしの汁

壬生忠岑

在明のつれなくみゑしわかれより
曉ばかりおこるしやく哉

坂上是則

是則がまだめのさめぬ朝ぼけに
在明の月とみたるしら雪

春道列樹

質藏にかけし赤地のむしぼしは
ながれもあへぬ紅葉なりけり

紀友則

久かたの光りのどけき春の日に
紀の友則がひるね一時

藤原興風

誰をかも仲人にして高砂の
尉と姥とのなかよかるらん

紀貫之

人はいざこともしらず貫之が
つら／＼とよみし故郷は

清原深養父

夏のよはまだ宵ながらよくねれば
げに鱶やぶと名をやいふらん

文屋朝康

かぜのふく秋のゝのみか瀧つぼも
つらぬきとめぬ玉ぞちりける

右近

わすらるゝ身をば思はず誓ひてし
人のいのちのせはばかりする

參議等

徳利はよこにこけしに豆腐汁
あまりてなどかさけのこひしき

平兼盛
とゞむれどよそに出にけりこむすこは
うちにいるかと人の問ふまで
壬生忠見
めせといふわか菜の聲は立にけり
人忘れずして春になりしか
清原元輔
清はらの元輔といふ御名にて
お歌は末の松山といふ
中納言敦忠
又しても忘ゞとばゞとのくりことに
むかしは物をおもはざりけり
中納言朝忠
すく人の絶てしなくば眞桑瓜
皮をもみをもかぶらざらまし
謙徳公
初がつほくふべき客は不參にて
みのいたづらになりぬべき哉
曾禰好忠
由良のとを渡る舟人菓子をたべ

お茶のかはりに鹽水をのむ
惠慶法師
八重むぐら茂れる宿のさびしさに
惠慶法師のあくび百ぺむ
源重之
花みんともちしさゝへをぶちおとし
くだけてものをおもふころ哉
大中臣能宣朝臣
御かき守衞士のこく屁によし宣が
鼻かゝへつゝものをこそ思へ
藤原義孝
めいていにすゝるこのわた味よくて
ながくもかなとをもひけるかな
藤原實方
かくとだにえやはいぶきのさしも草
なくば灸治はほくちなるらん
藤原道信
明ぬればくるゝものとは御存の
道信どのも朝ね四ッ時
右大將道綱朝臣

醉つぶれひとりぬるよのあくるまは
　ばかに久しきものとかはしる

儀同三司母

よみ歌のうへならばこそいふだあろ
　けふを限りの命なれとは

大納言公任

瀧の音は絕て久しくなりぬると
　いふはいかなるかんばつのとし

和泉式部

あらざらん未來のためのくりことに
　今一たびの逢こともがな

紫式部

名ばかりは五十四帖にあらはせる
　雲がくれにし夜はの月かな

大貳三位

有あひのたなのさゝをば呑ときは
　ゆでさや豆をさかなとそする

赤染衛門

赤染がいねふりをしておつむりも
　かたぶくまでの月をみし哉

小式部內侍

大江山いく野のみちのとをければ
　酒呑童子のいびき聞えず

伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重櫻
　さくら〳〵とうたはれにけり

清少納言

夜をこめて鳥のまねしてまづよしに
　せい少納言よく志つてゐる

左京大夫道雅

今はたゞ思ひ絕なんとばかりを
　人傳ならでどをぞいひたい

權中納言定賴

朝ぼらけう治の川邊に定よりが
　めをこすりつゝせゝのあじろ木

相模

うらみ侘ほさぬ袖だにあるものを
　此四五日は雨の日ぐらし

前大僧正行尊

眼と口と耳と眉毛のなかりせば

はなより外にしる人もなし

周防内侍

春のよの夢ばかりなるうたゝ寝に
ねちがひしたるくびぞいたけれ

三條院

友もなく酒をもなしにながめなば
いやになるべき夜はの月かな

能因法師

あらし吹く三室の山の紅葉ばゝ
たつた今のまにちりうせにけり

良暹法師

さびしさに宿を立出でながめたり
煙草呑たり茶をせんじたり

大納言經信

夕されば門田のいなば音づれて
權兵衞内なら一合やらうか

祐子内親王家紀伊

赤飯をいざやくばらん鳥のふん
かなしや袖のゆれもこそすれ

前中納言匡房

高砂の尾上のさくら咲にけり
こゝからなりとみつゝのまばや

源俊頼朝臣

とし頼はきむきも強し山おろし
はげしかれとはいのらぬものを

藤原基經

ふるがけをとりしばかりをいのちにて
あはれことしのあきなひもなし

法性寺入道前關白太政大臣

法性寺入道さきの關白を
半分ほどでおきつしら波

崇德院

焼つぎにやらばよしやこの德利
われても末にあわんとぞ思ふ

源兼昌

淡路島かよふ千鳥のなく聲に
又ね酒のむすまの關もり

左京大夫顯輔

顯輔がうつゝぬかして雲まより
もれいづる月の影に仰むく

待賢門院堀川
二宵にすはんと思ふ地玉子の
　みだれてけさはものをこそおもへ

後徳大寺左大臣
郭公なきつるかたにあきれたる
　後徳大寺が有明いかは

道因法師
おもひ侘さても命はあるものを
　うきに絶ぬはなんだべらぼう

皇太后宮大夫俊成
鞠の皮筆毛の用にとりつくし
　山の奥にも鹿ぞなくなる

藤原清輔
あともどりする世の中もあれかしな
　うしとみしよぞ今はこひしき

俊恵法師
夜もすがら物思ふ頃は明やらで
　あらふものなる世界くらやみ

西行法師
何ゆへか西行ほどの強勇が
　月の影にてしほ〳〵となく

寂蓮法師
むらさめの道のわるさの下駄のはに
　はら立のぼる秋の夕ぐれ

皇嘉門院別當
なには江の蘆のかりねの一夜たび
　皇嘉門院別當御持參

式子内親王
玉の緒よ絶なば絶ねなどゝいひ
　今といつたら先おことはり

殷富門院大輔
あと先の紀伊も讃岐も袖ぬれて
　殷富門院矢張同斷

後京極攝政前太政大臣
甚なくやしも夜のさむしろに
　後京極どのねたり起たり

二條院讃岐
わか袖は鹽みづふきしおきの石の
　人こそしらねかはくまもなし

鎌倉右大臣

波がせの常にかはれば消こぐ
あまの小舟の船人かなしも

参議雅經

衣うつ音にびつくりめをさまし
ところで一首つゞる雅經

前大僧正慈圓

この廣い浮世の民におほふとは
いかい大きな墨染の袖

入道前太政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならで
降行ものは牛の金玉

權中納言定家

定家どのさてもき長くこぬ人と
ゑりてまつほの浦の夕ぐれ

正三位家隆

風そよくならの小川のゆふぐれに
薄着をゑたる家隆くッしやみ

後鳥羽院

後鳥羽どのことばつゞきのをもしろく
世を思ふゆへにものをもふみは

順德院

百色の御歌のとんとおしまいに
もゝしきやとは妙に出あつた

狂歌百人一首終

千とせの門　乾

やまと歌は人のこゝろを種ふくべ狂歌もひやうしの瓢たんからこゝろの駒をかけいだしみるものきくもの何もかも三十一字に乗まはしかく面白きひと巻はかの蜀山が作とかや腸もなく筆さきにてもとより序ることばなく唯巻頭の歌により千とせの門と名つくるいみ

丙午の仲冬

なには
あし間蟹彦
しるす

歳旦

呉竹のよの人なみに松たてゝ
やぶれ障子をはるはきにけり

壬申試筆

又ことし扇なん千何百ぽん
かきちらすべき口びらきぞも

寒山拾得

かの山が拾得きたる繪すがたは
醫者にもあらず茶坊主でなし

題しらず

世の中はなにかつねなるあすかやま
きのふの花はけふさくらん坊

或人天狗のはな高きにうたよめといふに

小天狗の鼻高かれと朝夕に
僧正坊やつまみあぐらん

安部仲丸

仲麿はいかいはぶしのたつしやもの
みかさの山に出し月かも

鍬のかたへに櫻草の畵

いにしへのならのみやこのさくら草

けふ〱はの花に匂ひぬるかな

郭公

朝めしの山ほとゝぎす山もりに
　ほし大根汁かけたかとなく

庭のさくら盛なるに

我宿の花さくら戸を押開て
　よし野初瀬も軒はにそみる

あみ笠きたる男を奴のともして里通ひとみゆ
るうへに時鳥なく

八助をつれてふしみの里がよひ
　うきとしりてやなくほとゝきす

いにしへのさんやがよひのあみ笠の
　てつぺんかけて鳴ほとゝぎす

玄宗教楊貴妃笛圖

玄宗皇帝尊毛長。楊貴妃顏似海棠。且欲丁寧教横笛。
陣中太鼓響漁陽。

浪花の人によみてつかはしける

おもひいづる鱧の骨きりすり流し
　吹田のくわゐ天王寺かぶら

旅

なへてしるくるしきものと旅衣
　木曽道中の軒の玉みそ

破れたる壁に蜘の巣のかゝりたる畫に

わかせ子がよしやくるとも此宿は
　何もくはさぬ蛛のふるまひ

神雲翁に久しく音信もえせて申つかはしける

一寸のひまなき用にさしつまり
　つゐ五分さたと成にける哉

かへし

この方も一寸のひまなきゆへに
　つまる所は無沙汰五分〱

三幅の畫

男狐に女狐まじり拳酒も
　極る時はかんきくの園

名主中

名主組頭年寄衆。門前高札守如敎。常々無度能申附。
在在何人放鐵炮

鐵炮右

鐵炮の玉の盃そこぬけに
　うつや一けん二けん三けん

雛子さくらの畫

きゝすなくけん〱〱をけんとして
　さくら色なる色にかへばや

月のもとにて蜆子和尚はまぐりとるかたかきたるに

蜆子かとおもひの外のはまぐりは
　げにぐりはまなおもひ月影

牛込のはしうちなかれおつる瀧のもとに舟さしよせて

立よりて許由か耳を洗ひなん
　巣父のひける牛込のたき

春日野といふうかれ女によみておくる

春日野の色むらさきのうちかけに
　お客のよだれかきりしられず

奴雷におそれて挾箱のふたとみにて耳をふさぐかた

奴らもふたつの耳をはさみ箱
　もつ下の外につよきなる神

鯉の畫に

龍門の上下きたる出世鯉

あられ小紋が瀧のしら玉

太々神樂の獅子を見て

錢相場やすきも惡事災難は
　十二文にてはらふ獅子舞

八朔二百十日ともに何事なしといふことを讀ひて歌よめと人のいひければ

八朔も二百十日もおだやかに
　いはふ百性なげくものゝふ

年内追儺

歯がないとことはりいへよ一とつかみ
　鬼打まめをくれて行年

豐島屋十左衛門扇橋の別莊の碑に

山里は水をかなめの扇橋
　すゑ廣がりの海にこそいれ

或人箙といへるうかれ女のもとに通ふと聞てよめる

ゑびらにはあらぬゑびやの梅折て
　盆と暮とに二度のかけ取

難波初午

妻と子の手だけのにぎり携て

初午酒をひとつすぎやま

初午

手ならひの稽古やあがるいなり山
いろはの字やかきはじむらん

河東節松のうちをきゝて

あら玉のそら青みたる明爪は
つねきく鳥も若水の音

大原女梅をきりて牛角にかけし書に

大原女の心も春や黒ぼたん
くろきに白き梅の一と枝

梅と酒とを好む人の酒壺に歌かきつけんことをこふに

難波津にさくやこの花寒つくら
いまを春べとにほふひさ壺

吉野山桜木の枝折にかきつけゝる

もろこしのよしのゝ花もまんぐわんの
文の枝折や一目千本

飛鳥山花見の書に

山簡飛鳥入。心逐落花狂。不覺青春暮。何知白日長。
花ぞのの袖をつらねて飛鳥の
あすかの山のさくらかざしつ

よし原の花

よし原の夜店を春の夕暮に
入相の鐘に花やさくらん

歸雁

あき冬をこしぢの歸雁とびたてば
またんだをふむ石舘ぞうき

吉野の花の繪に

むかしたれかゝる狂歌の種蒔て
よし野の花もちゝになしけん

隅田川の花を見て

遠乘の馬二三疋すみ田川
つかれたりとも花につなぐな

卯月三日日本橋柳安より松魚を贈りければ

山の手をさして一本はつ鰹
にほんのはしもとりあへずくふ

小倉氏の別莊にあぢさゐあり井上氏の子のうつし繪に

ひとつふたつみつやよひらの露なしに
のみほす酒のあぢさゐの花

夏菊
時しらぬふじの花とてむらさきの
　かのこまだらにさける夏菊
白きつゝじ
花の名も所によりていはつゝじ
　なにはの平戸江戸の琉球
曾孫のはつ幟を祝して
白髪昆布三千丈のあやめ草
　引くらぶれはかくのごとくに
五月十一日秋の屋翁大屋裏住身まかりしと聞
て
長櫃とおもひしものを重箱の
　お萩となりぬ秋もこぬまに
卯月十四日曉ほとゝぎすを聞て
まてしばし蛙もだまれうぐひすの
　巣をかる時の鳥の一聲
夕顔棚の下すゞみの畫に
萬葉のうちにもみえす夫木にも
　ゆふがほだなの下すゞみ歌
花火
流星の玉や〳〵の聲ばかり
　など鎰屋とはいはぬ情なし
朝顔
早起の稗ともなれば朝顔の
　花見るばかりめで度はなし
七夕
天の川蓮華ごしのなき世とて
　もみぢのはしやかささぎの橋
七夕七首（校訂者曰、此歌及びはし書ともに千紫萬紅にあれば此處に省く）
長崎丸山町遊女千世菊が菊の畫に
袖よりもすねふりてみん千世菊が
　籬がもとの露のまるやま
西向寺の隱居に菊を見侍りて
この花をひがし籬に植たるは
　にしに向へる寺の隱居か
淺草の奥山に菊をうへしと聞て
奥山に植たる菊をもん番の
　風の神どのふきな倒しそ
六歌仙贊
文屋康秀

康秀のむかし御存じあらし吹
　むべ山ばかりとるかるたうた

僧正遍照
僧正も乙女のすがたゑばしとは
　まだみれんなるむね貞の主

喜撰法師
わか庵は人も出入ず僧綱の
　ゑり立衣御きんあれかし

小野小町
やまと歌衣通姫の流義にて
　つよからぬこそ女づよけれ

在原業平
在原の業平といふいろおとこ
　九十九髪をもやらずのがさず

大伴黒主
立よりてみんもうぬほれがゞみ山
　髪むしやくしやと色の黒主

山水の畵に堂あり虹あり
この堂は觀音堂か夕立の
　晴わたりにじ無盡意菩薩

海邊月
いかなればくらげといへるもじなれど
　あかるくみゆる海の月かげ

ひとりさす大盃の海づらに
　さゝげいでたる松の島臺

布袋和尚の牛にのりて唐子の引てゆく畵に
唐子ども引だす牛の角もじは
　いろはにほてい和尚なるかな

猴の素麺をくふ繪
あし引の山ざるの手の左右
　なが〱しくもすゝるそうめん

紅葉のもとに女二人立り一人はわかく一人は
としたけてみえければ
むらもみぢならびてふたり立田姫
　うすきは妹こきはあねさん

末廣がりといふ狂言のかたをかきたる畵に
から傘も扇もともに末廣の
　名にやめで度かい太郎冠者

萬歳才藏の背に紙鳶おちかゝりたる繪に
鳶飛て天から落しいかのぼり

いかゞはせんと萬歳のかほ

南極壽星圖

寶舟いざよいかぜのふくろく壽
あたまのゑ下に帆をあげてみん

竹

信濃には竹なしときく王子歟
一日も居ることはあたはし

花

春の夜のたゞ一時に千金も
かへまじものを花が三文

松の鶴のすごもりの繪に

尺八の竹にはあらで千丈の
まつに宿れる鶴のすごもり

あしまに翡翠

され歌の口ばしなれば難波江の
よしやあしともまゝのかはせみ

河東節禿萬歳をば聞て

にぎやかなつむりの禿萬歳は
今をさかりの花の江戸節

盆石に品川の景うつせしを見て

盆石の景色は芝の濱[illegible]
[illegible]車を[illegible]いり海

白川城主三夕の壽に

羅漢領主[illegible]ことはおはやしか
百性山のあきのゆふぐれ

藤澤の西行堂にゐる鴫の
かんきんにたつ秋の夕暮

此頃はうらの苫屋も不猟にて
なにもかもなき秋の夕暮

かん／＼おどり

かん／＼のおどりの志るしあらはれて
さみだれもなく夕立もなし

かん／＼の袖のみなとのさはぎ歌
もろこし船の舟だまゝつり

神田祭

らふそくの油町からこはめしの
鹽町かけておそとひまつり

拍子木の音なかりせばたをやめの
いつまで踊るうすものゝ袖

十二月の景物に女の風俗を畫かきたるに

正月　羽子板に娘
ねがはくは手がひの伸となりてみむ
　やおらよひこや千代のもとの子
二月　摘草に聞者
籠の鳥かこはれものゝつみくさは
　いつか廣野にすみれたんほゝ
三月　汐干の濱女
妻とれる汐干にみえぬ貝と貝
　あはせてうつせ濱のせゝなぎ
四月　黒木うりの女房
一こゑを人に忍ふのこゑぎうり
　やせや小原の山ほとゝぎす
五月　菖蒲湯娘
湯上りにこしをあやめのねざしにて
　下女のたつきが文のとりやり
六月　三味線藝者
三味せんの駒がたさして二上りの
　舟は夕にさんさがりかも
七月　七夕官女
黒かみもいつか素麵としどしに
　七夕のうたよむとせしこゑに
八月　白無垢傾城
北國のゑるしの雪の白無垢は
　たれをたのみのけふのやくそく
九月　生花後家
この花の後には生るかひなしと
　きけるか髪をきりかふろ菊
十月　夷講の下女
神代より赤女といへる魚の名に
　わかゑびすとてこしをぬかしつ
十一月　酉の市屋敷者
御やしきの外面如菩薩內心は
　よくの熊手のかぎとりの市
十二月　市歸り女房
淺草の市に女のたつ事は
　三十年の前ていはなし
二蝶のむすめおらいが肩に都鳥の畫あり
みやこどりいざ事とはん我おもふ
　人にふじはおるかおらぬか
狆に菓子をあづけたるかたかきて

加茂川の水双六の甕よりも
　　ちんが心にまかせざる菓子

牡丹

咲しようつら〳〵と酒のみて
　　花のもとにて廿日酔けり

ある人炭俵の中より出し茶碗を炭俵と名づく
茶碗は唐津なり

もろこしのけもの丶炭の俵より
　　いでし茶碗は唐つなるらん

北里に菊をうへしとき丶て
菊は花の隠逸なりと唐人の
　　いひしはたはけみよ仲の町

十三夜雨降りければ
十三夜雨はふりきぬさと芋の
　　きぬかつぎてそふすべかりける

九月二十九日鮟鱇汁をくふ
この冬も御鮟鱇とは秋ながら
　　暖もの椀のふたとりてしる

越後獅子
謙信もいくさが下手であるならば
　　先鏡とぎさて越後獅子

六十四になりければ
わがとしも六十四文ねがならて
　　うれのこりたる河岸の門松

宝船
ながきよのとをのねふりのめざましく
　　数のたからをつみていり船

寄冬瓜恋
百一つあふよみ花にはふ蔓の
　　ながく〳〵しよをひとりかも瓜

絲瓜述懐
世の中はなにかへちまのかはぶくろ
　　ぬぼりとられし帯月の水

逢恋
三つ蒲団よつ手にかゞむみだれ髪
　　こ丶ろに手ありゑりに足あり

寄刀恋
逢事はかたひねりなるつかのまも
　　こ丶ろぼそ身におもひきられず

傾城の繪に

千金の春のくるはの全盛も
一兩二分はたゞふたりなり

箸紙に題す

米のめし菩薩とおなじ一體の
はしがみといふかみは此神

舟辨慶

辨慶がいか栗あたまともゝりが
烏帽子に勝てあとはしら波

夢羅久がもとにて歯の落けるに

おしむらくむらくが宿で落る歯は
落しばなしといふべかりける

盃托銘

盃をむかふの客へさしすせそ
いかなうれいもわすらりるれろ

堀の内の妙法寺にて

參詣のあゆみはとしやおそしさま
かしらを土に堀のうちかな

仁正寺侯の山莊なる東山樓にて

はかせめし仁者は正にあふみのや
水のかゝみの山をたのしむ

此頃わか名をなのり市中にて酒のむおのこありときゝて

皆人のよもやにかゝるむらさきの
赤良ぞうばふことのおかしさ

此方ぜら賣・切出し不申候

題古一枚摺

此廓大門有上開。奥村筆力鳥居才。風流紅彩色姿繪に
五町遊君各一枚。

山城の名所のうたこひける人によみて遣し侍る

山城のこはたの里の馬かしは
君をおもはぬ人の得意場

天王燈籠の繪に櫛もて永代橋としたいまいのかうがいを筏とし毛筋とふしをもて帆柱としたるに

橋の名の永たいまいのさし櫛に
毛すじ通して立る帆柱

おなじく毛抜をもて時鳥を作り小き鏡を月となし下に鰹の舟あるところ

初がつほひたす新場の水かゞみ

毛ぬきあはせになくほとゝぎす

七面に赤井得水のかける額あり社の前に筆さくら二本あり

七面の書たる額のふでざくら
花の赤井のひもをとく水

二月十八日より十九日の朝までに鎌倉町なる豊島屋が店にて白酒千四百樽うりしと聞て申遣しける

山河の酒のかけたる棚は
みちもさりあへぬ豊島屋の門

樽とくり鎌倉町をいくかへり
かはんとしまやうらんとしまや

おなじ日淨行堂にて探幽の畫るといへる涅槃像を見る

世の中のはかなき事を知らせんと
釋迦もころりとよこにこねはん

上野の花みんと行道にかねを聞て

九ツは遲し八ツにはまだはやし
雲の上野の花をもるかね

柳に馬のかた書たるに

青柳にあれたる駒はつなぐとも
さいたさくらの陰は御無用

音羽町玉水庵に養老の瀧の白玉扇をひらきて

玉たれの小がめの酒を汲みれば
天か下なる養老の瀧

小金井の花見んとおもひしに道遠ければ思ひとゞまりて行ず

花よりも先駕ちんぞおしまるゝ
わづか一歩の小金井のみず

隅田川に花を見て

隅田川つゝみの櫻咲く頃は
花のしら波よせぬ日ぞなき

駒込の富士

駒込に賣る麥わらの蛇の道は
へびのしるべき鱠繩手を

木賊刈の畫に

老のみはかれ木のごとく成にけり
木賊をかりて何をみがゝん

鯛文字によみて遣す

萬代も絶せぬみつの緒を引は

これ蓬莱の亀といふ文字

神崎山の麓に音羽團瀧あり玉簾と名づく

深山より落くる瀧の玉すだれ
かゝけてやみん水無月の雪

鷹の畫に

あら玉のとしのはじめの初聲は
はる駒よりもましらふの鷹

上野花

此春は八重に一重をこきませて
いやが上野の花ざかりかな

元日狂歌堂にて加茂の葵盃を會津にぬりたる
折敷に鶴の吸物を出しければ

二葉より千とせの春にあふひ盃
加茂にもまさる鶴の吸物

淺草庵にて諸人梅のされうたよむとて

風の神こゝらをむけば淺草の
庵にちかき梅にほふ小屋

子日雜子谷詣でける歸るさに水道町のほとり
なる松がね茶漬といふをたふべて

子の日して引へきものもあらされば
松がね茶漬よてたふべん

彼岸の入の日八百善のもとにて

庖丁も八百善根やつくすらん
さんやのほりのかのきしに入

兼好法師燈のもとに文よむ畫に

よもすがら見ぬ世の人をともし火に
命松丸よ茶をひとつくれ

小野の瀧の繪に

此里にかすかにひゞく小野の瀧
木曾の伐木丁々として

日の出に稲の畫

日のいづるもとつ國とは円ときね
つくともきつし稲の八束穂

うしろむきの大黒を畫きて

世の中にうしろを見せて我宿に
むかひて笑める大黒の顔

夷の畫に

釣上し赤女を横に抱しめて
いつもこゝろの若夷かな

庚申

みずきかずいはざる三つを守りなば
　三戸の神も感應の編

香とりや又七四十二のやくに

四十二のやくもいつしかこゆるぎの
　いそ〳〵としてむかふいもとせ

これよりは又七じうも八十も
　九十も百もいはふかとりや

黒き鷺に蘆ある繪に

白鷺のくろきもあればなには江の
　よしとあしとのあらそひもなし

二幅對の書に

鹽がまに櫻の花左

すまのうらや若木の櫻にほんまで
　つゐに行平中納言どの

笘屋にもみぢあり右

なかりけりとはいふもの丶あるもよし
　浦の笘屋にもみぢ四五本

十五夜月

おと丶しはおしよく去年は近星や
　こよひ無底の月をこそみれ

山屋の豆腐をくふ

燈籠やにわか見に行あし引の
　山屋の豆腐くふばかりなり

いづみや與四郎難波にかへる餞別

難波江のあしたはよしやよしさんの
　こゑのみ耳にのこる松風

甲子

甲子にうち出の小槌うち出て
　數のたからをまく〳〵きやこの神

舟はし

駒とめて水かふことは先よしに
　せいのことばの雪の夕暮

寄火入戀

消るまでおもひ入ても逢事は
　なをかた炭のいけるかひなし

なが月朔日より始しとて森田屋のもとより新豆腐を贈りけるに

進物の御禮申すも山々や
　まことにこれはあたらしん豆

寄樂庵祝

ゑつほくの四すみも腹に治りて
　　御代は太平樂庵の客

歳暮

借錢をもちにつきたる年の暮
　　にはにこねとり門にかけとり
行としをゑめゆふうちにくる春を
　　まつや／＼の聲ぞきこゆる

高砂の繪に

たれをかも仲人にせん高砂の
　　松もむかしの茶のみともだち

千とせの門　坤

朝がほ

豆腐うる聲なかりせば朝かほの
　　花のさかりは白川夜船

はじめて茶屋四郎二郎にあひて

これは又よい折鷹や茶屋うしの
　　御目にかゝるは初むかしかな

七賢人の畫に

竹林にやぶ蚊の多き所とも
　　しらでうか／＼遊ぶ生酔

お多福うしろむきに鏡に向ふ繪に

尻くらひ觀音に又おたふくの
　　辨才天をあはせかゞみか

三月三日は我生れし日なり朝とく湯あみして

六十八とせむかしの桃の節句には
　　産湯かゝりしはだか人形

猿猴盃をとる繪に

曲水のゑんこうが手をのばしても

とることかたきさかつきの影

長春花に四十からの壽に
初花の四十からして長春の
花の盛りをみるやいく春

丸屋より藤花をおこせしに
龜井戸の藤とおもへばふしながら
みをそりはしになしてこそみれ

墨田川半右衛門か宿にて
江戸よりの船路は一里半右衛門
世をのがれたるかたすみ田川

十五夜姫路太守の高殿にて
中秋の月毛のこまの名にしおはゞ
この大下馬の前にとゝまれ

七夕
詩も歌もどこへか筆ははしり井の
冷素麵をすゝるたなばた

天にあらば比翼の鳥もち地にあらは連理の枝
豆七月七日長生殿夜半無人私語時シイ聲か高
イ卯月のはじめ郭公を聞
鎌倉の海のはつねもきかなくて
山ほとゝぎす谷にとび魚

おなじ頃鰹すくなければ
かしましい八千八聲聞ずとも
三千本のたつた一本

かけ取をみて
かけとりのわたらぬ金にむく目玉
玄ろきをみれば世ぞふけいきな

花
咲花のかくる根付の琥珀にも
なりてこかけの塵をすはゞや
さく花とわかおもほへし犬櫻
遠山鳥の尾をふりてみん

寄煙草戀
埋火のしたにさわらで和らかに
いひよらんことの葉煙草もかな

寄灰吹戀
灰吹の靑かりしより見初たる
こゝろのたけをうちはたゝかや

鬼念佛
念佛を申す心のやしさは

鬼も十八檀林の僧
積病をうれへて
おもひきやわるゝやくせんのゑやくならで
わき證文にこわるべしとは
頼朝ふし木かくれの譜に
七人の中にひとつの大あたま
ふし木のうちにかくしかねつゝ
狂歌堂の庭に秋草うへしをみて
ことの葉の六草の庵は秋草の
一ッ二ッはたらひてもよし
葡萄
紫の、もとならぬゑひかづら
つらぬきとめし玉かとそみる
隣松のかける鰹に卯花
おもしろや雪を隣の松の魚
大根おろしにあらぬ卯の花
夏月
冬さむく春は朧に秋そうき
めで度ものは夏のよの月
送四方歌垣眞顏西遊

乾坤無レ處不レ狂歌。南北東西山又河、投尻長過天滿
祭。燈籠恐クハ及ニ吉原ニ。
神路山きびの中山ひゑのやま
のちせの山をとはん四方山
口にひく津々うら／＼の果までも旅衣ひつぱりだこ
にあひぬともつましきやとのいちなわすれそ
休息六歌仙
文屋康秀ゆかたきて薄かいたる扇をつかひ
てむねにかせいるゝかたかいたる
ふくからに秋のくさきの湯かたびら
むべ團扇をやつかふなるらん
僧正遍照ふらすこの口より酒のむ
女郎花口もさが野にたつた今
僧正さんがおちなさんした
小町紅をつける
花の色もうつらふ小野の小町紅に
わが身ひとつの口につけばや
在原業平うつの山の十團子をくふ
とんとうまいかしらをうつの山邊にも
夢にもくはぬ十團子なり

喜撰法師茶を立る

千ぶくの茶の湯とちがひわが手前
　たつた一度と人はいふなり

大伴黒主鏡をもちて毛ぬきに鼻毛をぬく

かゞみ山いざ手にもちてみてぬかん
　鼻毛のながくのびやしぬると

扇の畫賛

伯夷

わらびはかりくふとはいかい不自由な
　焼豆腐でも周のまめかは

長瓠の銘

瓠與夕顔五條ノ露　蕉翁ノ朝飯四山ノ煙

九月盡の日植木屋の荷を見て

菊もみぢ我しりかほに植木屋が
　秋を一荷にになひ行らん

垣根に白き藤の花咲けり

いつことも白波かゝる藤の花
　ながむる末の松やこえけん

醫學道志るべの序

周禮に醫師は上士二人中士二人疾醫食醫も二人づゝなりそれさへ一人は養生よければ療養におよはず賤きものは風寒暑濕に疾あるゆへにこの沒てといへりわかひのもとの古の典樂寮にも十人はかりには過たるべし今時は横町の新道にも出格子もたぬ庸醫なく宿札かけぬ竹齋なしされば酒屋は伊丹三白と號し餅屋は今坂上庵と改め大工は建前棟梁と名のり八百屋は椎茸千瓢と稱して猫も杓子も藪の仲間にいらぬものなしこれかつてやまひありある人醫藥をすゝむこたふるに一いんの詩をもつてす吾奉ニ先人體一直通生死路一草根與ニ東皮一子使ニ庸醫ニ誤一たゞしかくいへばとて明日にも疾病ならば家内のおもはく親戚の外聞に人參ものまねばならず熊膽もなやふらずばなるまじけれどもとより死生にかゝはらぬ事なればこれも又世わたりのひとつなるべし此書の序をこふものあるによりてうらずかはずの一ことを題して白紙の數をよごす事しかり

釋迦莊子紫式のかたかける畫に

釋尊の方便莊子が寓言紫式部か作りごとの物がたりみなまことから出たうそにして人を導くがためなるべしたとへば歌をうたひて飴をうりこ

まをまはして齒磨をひさくが如し
雪の山いでし佛やいかゞ見ん
　みむなみの花湖のつき

山王祭に舟屋臺あり鐵砲洲より出しといふ
船頭が多くて舟は山王の
　山にものぼるけふの祭禮

起あがり小法師の畵に
ひいふうみよついつゝむつなゝころび
　八おきあがりて九年面壁

天王祭
天王の夜宮の光やはしげて
　御紋の瓜も塵にまじはる

かいこ巻に酒のみて
山まゆの絲引き出すかいこあん
　ゑひての夢は蝶とこそなれ

北馬の外一人とともに巴屋の酒樓にて酒のみけるに一人は下戸なりければ
三ッ巴一とつ巴はき下戸にて
　ふたつ巴はゆら〳〵の助

ことし年始の禮に來れる門々に返禮せざる申譯とて
降雪も二三べん又三四へん
　ごへん禮にはこまる正月

去年よりあまたゝび雪降りて若菜の價へ一把七十二文にかふるもめつらしくて
三文の若菜も雪の高ねにて
　七十二文棒にふりつゝ

ことしは若菜を芹にかふるもの多し
春日野の若菜も雪に埋もれて
　おもはぬきしの根芹をそ摘

正月二日の夜雪降りければ
初夢に一ふじの雪ふりいでて
　茄子も白なす鷹もましらふ

上野の花を見て
鳥がなく東のひゑの山櫻
　さくやゆたかににほふ春の日

五月の頃鹽引の鮭多くみえければ
流行にをくれたるみは此頃の
　鮭にまじる鹽引のさけ

五月望の日に名木澤何がしの君の山莊にて

夏草の下行水とおもひしを
　なきさは玉のいさごをぞしく
五月二十八日川開には例のこと〻て船出すべ
きを腹病にて
下り舟くそ丸ゆへに例年の
　川開をもよそにこそみれ
隅田川寺島村の名主和祠の茶室に一閑窓あり
竹のたがもて作りたれば
吳竹のたが名の主かすみた川
　一ゑんそうはみえぬ隱家
ある人母の手織の羽織の裏に歌をこふ
たらちねの手織の羽織常にきて
　綿よりあつき惠みをぞ思ふ
暑き日兩國のはしに鎗のかけ絕ければ
兩國の橋に一すじ絕たるは
　やりはなしなる世にこそ有けれ
松魚
三兩のはつがつほにもあふことは
　かたみに二百四十八文
佐々木氏より牡丹の花をきりて送られけるに
八十あまり八夜彌生の廿日草
　いつかも早くいつか咲にき
雲峰がかける雲に時鳥の繪
ほと〻ぎすなくてふ夏の雲の峰
　たてたる筆のひとはしりがき
升見翁を下谷にとひて
狂歌をば天井までもひゞかせて
　下谷にすめる翁とはゞや
三線をかりて
三味せんのどうもいはれぬ御無心に
　いとやす〳〵とかすたがやさん
千駄が谷八幡宮の門前にて道行人の子をうめ
ると聞て
弓八幡宮井のわきで三番叟
　よろこびあれやよろこびあれや
日本橋月
二千里のうみ山かけて行月も
　出たつあしの日本橋より
九月十三夜蔦屋重三かもとにて月を見る
市中のけしきも蔦屋重三夜

あすのまつりをまつの月影

鳥越明神
六十あまり七曲をは行過て
又としひとつとり越の神

焉馬翁八十のとしのはなし初の會に子日とい
へる題にて
八十の春の子日の小まつはら
十八公とわかかへれかし

新樂氏母君八十の賀に津の國三田に陶すとい
ふ富士の形にしたる小皿十枚おくるとて
はたち山よつかさねたる八十より
十つゝ十もさらにかさねん

如意寶珠
ものごとに意のごとくかなへるを
さして寶珠の玉とこそいへ

扇に書たる詩の二句あり今日のことに似たる
もおかしくて
入洞題松遍
天台の霞の洞にいりぬれは
からうたかゝん松はらの松

看花還石眠
寢心のよろしき所ゑらひつゝ
いしの上にも三春の花

伊勢人七十の賀の歌こひければおもふまゝの
ことをしるしやるとて
七十は古來稀とは伊勢人の
ひがことならぬ千代の壽

淺草廣小路巴屋の額に三番叟の面ありけれは
お客のゑきりになるは瀧の水

猫といへる火桶いだきはべりて
たえずとふたら酒の巴や
この猫はしろきかねにはあらかねの
土一升の江戸いまどやき

女鏡を見る畫に題す
世の中に楊貴妃小町司なと
ありともゑらぬうぬぼれ鏡

溜池月
山里の猿と成てもとらまほし
數々黄金溜池のつき

みどり町瀧口氏のもとにて

庭の面に拡げれる木々の緑町
　ふりそふ雨の音はたき口
　鬼念佛讃
さとれば九品のうてなまよへば二本の角念珠となり
てくだくるとも鬼瓦となりて全き事なかれ
　芋の葉かける桔梗の繪に
秋近う花咲きそむる戀風に
　かぶりをふれるいもはあらじな
十五日豐島屋長兵衛がもとにて雨降り出ける
によめる
降りかゝり雨と風とのふくきたる
　ちき長兵衛のやとぞめでたき
ことし紅毛の國より來れる駱駝をひきて長崎
に來れるかたをばうつして狂歌のすり物とな
せるよし五楊舍の福富かもとよりいひおこし
ければ
老ては狂歌もよまぬが駱駝
　とかきつかはしけるもおかし
立春
　小川町を錦のきれといふ

柳原櫻の馬場をこきませて
　春の錦のきれや立らん
赤坂塚口氏といへる酒家の半切桶を去年十二
月朔日に失ひしかことし正月六日門前にした
ゝかなる音してありければいでゝ見るにかの
桶なりけれこれに神符とかきつけあり鞍馬山
の大餠舂にて淸淨の盤をもとめてかりしなり
しが今かへすなりこれより家内繁昌すべしむね
ありて鞍馬山狐身とかきしものありその歌よ
みてよと塚口氏のこふにまかせて
くらま山僧正坊の餠つきの
　御用に立し半切の桶
その桶に雪のつきたるも不思議にて都下は翌
六日雪の降りしなり
くらま山大もちつきの御用にも
　立臼ならぬ半切の桶
とよみ直したりし
　夢想のうた
屠蘇の酒曲水花の月見菊
　年わすれまで呑つゞけばや

閏陸月なぬかの日始て後園をうかゞうに一本
梅さけり

埋火のあたりを出てうかゞへは
　いつしか梅の花さきにけり

十二月畫賛

正月　若水
湯の盤の銘にくめる若水は
　まことに日々にあら玉の春

二月　燕
かりがねの交代なればつばくらも
　野羽織きてやきさらぎの春

三月　鷄合
もゝ敷のもゝの節句にには鳥の
　二羽あはせてや三そなはすらん

五月　菖蒲
長命のいとゝしきけば藥玉の
　あやめの酒の百藥の長

七月　二星に月
天河のふたつのほしの仲人は
　よひのものとや月のいるらん

八月　稲穂に雀
むら〳〵と雀のさかすたなへもの
　落穂ひろふそあまの八束穂

九月　菊に琴と酒壺
淵明かつくらに菊に絲のなき
　ことたるものは一盃の酒

百合
くれなゐのあつき日影に夏の野の
　露わきかへるさゆりはの花

寄武具戀
薙刀にあひしらはれし我なれは
　あふことも又なきり庖丁

或かたより香のものたゝきといふものをたま
はりければ
香のものたゝきいたゞき御禮を
　申上べきことの葉もなし

紅葉に鹿の畫に
秋はてし後はもみぢの吸ものと
　なるとも志かと志らで鳴らん

うば玉といふ菓子をしらぬ人にあさみて

うば玉か何ぞと人のとひし時
　求肥といひて胡麻かさん物を
遠州濱松ひろひよでせまひそこでもつて東が
二丁たらぬといふうたうたふをきゝて
さみせんの絲にひかるゝ盃の
　そこでもつてや長くなるらん

武藏野

花ずゝきほうき千里の武藏野は
　まねがずとても民のとゞまる
みちのくの風俗をかきたる卷物に
みちのくの十符のすがこも一卷に
　かきつくしたる壺のいし文

福壽草賛

花ハ生ニ福海ノ波ニ根ハ固ニ壽山石ニ
元日の草とくきけば春風の
　福と壽命の花をこそもて
桔梗女郎花の繪に
陣中へ女はつれぬはづなるを
　桔梗がはらにたつ女郎花
花表にたんぽゝの畵に

初午のとりゐと思ふつぼすみれ
　きねがつゞみのたんぽゝの花
辨慶が鐘をかつぐ大津畵に
ゑい山のゑい〳〵〳〵と辨慶が
　力いほどを三井寺の鐘
松かげに立るまな鶴の畵に
高砂の松のうたひの一ふしに
　さす胡麻鹽のまなづるの宮
ひきがへる年始の禮に來たる繪に
とし〴〵に御慶めでたく候と
　かへるのつらへかくるわか水
何がしの宿に雪降りける日白き鳩の藏の内に
飛入しをいはひて
ふり來る三枝の禮かしら雪の
　御くらの内にはいる銀鳩
關根氏美濃尾張の川々の堤を修理すべき仰せ
事うけたまはれるに虎の繪にうたをこひけれ
ば
千里行千里かへれるいきほひは
　虎の尾張やみのゝ川々

おなしく毘沙門天を畫し扇に
來年は子のとしなれば牛とらの
　闇根もえもらせたらん天□□
ある高殿によへより酒のみてえもいはぬもの
つきちらして
老ぬれば又あたらしく二丁目に
　小間物店を出さんとぞ思ふ
文化乙亥のとし水無月十三日難波の蕪坊身まかりける時のうた
極樂の東門前にすみぬれば
　めをふさぐとも道はまよはじ　蕪坊
おもへば享和のはじめのとし難波にまかりし時折々なれむつびし事きのふの夢の心地して
われむかし轉法輪の車道
　たつねし事も西門中心
葺屋町高木屋にて
高きやにのほりて見れば吹屋町
　民のかまどのにぎやかなみせ
小西氏八十八の賀に
長生ときく仙人のこにしあれば
　八十八とせはいまだわらはべ
みやこの華山のゑがきし畫に
振袖のみやこの下ぶりわすられず
　なにはのあしの歸りみてしが
猿子をあはれむ
子をおもふさるの心は人間に
　三筋ばかりや毛のましぬらん
周信の畫に猩々雪を杯にうけもちたるかたかきたるに
醉ざめにいざ一さしとさかづきも
　雪をめぐらす猩々の舞
甲子の日に小槌を畫がきて
知仁勇みつのたからをときぐ\に
　うちでの小槌をこそわすれね
瓢たんからの駒出る繪に
瓢たんを出たる駒やかひつらむ
　齊の景公馬は千なり
尾關矢之助養子にゆきける祝に門松をかきて
松かざり一かとふへて破魔弓の

ねらひし的にあたる矢之助
白米去と改名しけれは
段々に祿もすゝみてとり上る
末はかりなき米の數々
ふくさにかきし竹の畫に
千代よろづいくよをかけて音づるゝ
風のふくさになびく呉竹

歳暮

雪降らす天氣もよくて火事もなし
ひまさへあらばよひとしのくれ
兩國橋のほとりにて此頃尾張の海にてとりし
といふしやち鯨といふ物みせたり
いさなとりいさやみんとて兩國の
はしによりつくわれ一のもり
彌生五日上野の花をみて
山櫻去年もけふは見にきつれ
又の彌生のいつか忘れん
白雲の上野の花はみよしのゝ
千もとのうちの一本ときく
南隣平賀氏の庭の櫻さかりなり
南殿の櫻の宴もかくやらん
みなみ隣の花おぼろ月
彌生十二日舟にて隅田川にまかりけるに花い
まださかず
隅田川さくらもまたきさかなくに
うきたる心花とこそみれ
春の日芝のほとりにて
春の日もやゝたけしばの濱づたひ
磯山さくらみつあかぬかも
濱庇山といへる茶屋にて
しばしとて休らふ芝の濱庇
ひさしくみれどあかぬ海つら
としの暮に
衣食住餅酒油炭たゝき
なに不足なきとしのくれかた
此歌よみし師走廿五日大久保といふ所にて宅
地をたまはりて住居を得たり折からもちゐね
る日にあたりしも衣食住もちとつゞけしさと
しにや
今さらに何かおしまん神武より

二千年來くれて行くとし

祝うた

帝たて草履へ灸をすゆるとし

千秋萬歳われはなが尻

福祿壽に鶴

福祿壽みつの重荷に鶴一羽

こづけをそへて一寸千年

千とせの門終

巴人集　【火用心】

巴人集は、四方赤良が家集なり、按するに、寶暦本繪草子に云、鯛の味噌ずて、四方の赤、のみかけ山の寒鴉と云々、今の本に無載、築地ノ禪閣ノ御説を以て、さまよがどうだと、考ふるに、鯛は魚ノ名、進上目録に云、鮮鯛一折と是なり、みそずは、舊説、みそうづといふは非なり、みそずは、味噌ずい物の下略、四方は江都泉町の商家の名にして、酒醤をひさく者、赤はあかゝらなり、又文選ごさ花薦に云、宋玉が陽春白雪、和するものすくなく、下里巴人は、和するもの多しといへることばあり、四方の家の紋、扇に三巴なり、彼是合せて、かくは名付たるか、或は四方山のはなしにかけて、四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいだく、おもいれなきにしもあらず、くはしくは、先の辻番にとふへし、

天明四のとし皐月十あまり八日

たれかしるす

巴人集

立春　天明三年卯正月

やまと歌から歌連歌俳諧の
　書初の筆を春やたつらん

郭中立春

大門もあけて霞の衣紋坂
　乗りこむ駕籠を春やたつらむ

年のはしめに

かゝる世にすめれはゑいをあらふなり
　御慶めてたうさゝらこの水

むつき七日五明樓に遊びて、人々歌よみけるに、八日は子の日なれはけふも止まり給へかしと、あるしのきこへけれはよめる、

きのふからよそに子の日のまつなれは
　けふはひと先うちへひかまし

五明樓のあるし、たはれうたの名をこひ侍りしかは、棟上高見と名つくるとて

家の風もとより夏をむね上の

たかみに見せやはるのひ扇

おなしく家童子を、赤しみの衣紋とよび侍りければ（家童子は棟上高見か妻なり）

たはれ歌よめとも〳〵あかしみの
衣紋をけふのきそはしめ哉

子日琴　正月十三日京はし會

このねの日いつれに心ひかれまし
松は十八琴は十三

子日する野へに琴つめなかりせは
姫松のねを何てほらまし

ことし中村座春狂言の名題を、江戸花三升曾我といふ、去年の冬江戸花海老といへるふみつくりける事を思ひ出て、花道のつらねかもとに申つかはしける、

小本から大名題をも江戸の花
みます曾我とははからざりしを

子子孫彦はなかみをみつにたちて、狂歌かくへき料紙とせしを、みよし野と名つけ侍るとて、

はなかみをたてるやいくつみよし野の
山の霞をはらふひとふて

小川町霞　已下二首子子孫彦會

水ぬるむ小川まち〳〵家々に
錦のきれの霞たつらむ

寄新宅祝（子子孫彦のもとにて、新宅を寄する祝といふことを）

かんな屑つきぬことはもあたらしく
たてし柱のかといろはつけ

軒鳶凧　已下二首京町加保茶元成會

春の日の長きえり尾に板そねの
瓦落してのきの鳶凧

寄手鞠祝

雨の手てつくともつきぬ数まりの
音はひいふうみよのめてたさ

中島氏うけにいりたる祝に

ことしより有卦に入江の中島や
汀（ミギハ）のいさこしける金性

初午のまへの日山手白人のもとに酒たうへて

あすよりもけふきさらきの御馳走は
はつむまい物宵にくへとや
白人

返し

初午のはねぬ趣向にお客より

亭主がさきへ醉まつり哉

はるのよ、五明樓棟上高見かもとにて、あけ屋のくらちか、蔦のから丸なと、物語し侍りしに、そはいてゝのち、おほろ豆腐をすゝめけれは、

御馳走の御そはにはらもはるの夜は

朧豆腐にゑくものそなき

返し　棟上高見

不馳走をそはから丸のとりなしに

おほろは春の夜のものとしれ

初午

いなり山けふの豆腐の紅葉ゝは

青かりしよりこのゑろもよし

蛙叩戸　牛天神下山道高彦會

春の夜の蛙合戰やふれてや

柴の戸たゝく水の落武者

なく聲はあまた戸口をたゝけとも

蛙のつらへ水をかけかね

屋鋪初午　子子孫彦會

このしろもつはめもこされいなり宮

けふ魚鳥はとめぬ門番

戀手習

ふたつもし牛の角文字そのつのに

似たるひとつのものそ戀しき

七福神角力

七ふくの神の角力の中入は

辨天ひとり垣のそきせん

京町大文字屋に、生立侍りしおさんといへるがきさらぎ初午より、まゆすみと名をあらためて、つきたしの君とめて侍りしかは、

青柳のそのまゆ墨にこもれるは

おほろげならぬ春のつき出し

竹藪梅　已下二首坂上竹藪會

くれ竹のふしきに花のさきかけは

藪の中にもかうのものなり

猫戀

猫の目の針ほとな事棒ほとに

いはれてはちをさらす眞書

川留退屈

大井川加茂川よりも川こしの
　　ちんか心にまかせさるあめ

　　春婚禮
仲人は宵の物とや花嫁の
　　影おほろなる月の丸綿

　　春出家
若草の又もえ出る煩惱に
　　はるさめやすき欒鑵道心

　　春牡丹餅
連歌師の夏季の事は棚へあけて
　　いつれに腹は春の牡丹餅

　　不逢悦戀
けいせいのむしんにむねの算用も
　　あはぬ夜半よりきれてうれしき

　　寄劒祝
君が代にこゑりのつまる事はあらし
　　うちおさめたる三尺の劒

大井のむさと、名を蛙とあらため給ひければ、
みな人のむさとのそきし大井こそ
　　ふかきかはつの歌ふくろなれ

大井蛙のもとより、こしのくに紙とうにとい
へるものを壺にいれておくられけるに、
たま物もありがたんさくゑきしまの
　　道しある世にすみ流しとて
あめつちのひとつの壺をあけみれは
　　けにも無中のうにのあちはひ

　　櫻狩
春の日もたか野の末や山の奥
　　花にほねおる犬さくらかり

　　田植
みちのくの十ふの菅笠七ふには
　　君が田植てみふつくりとり

　　刺鯖
借錢の山となりたる盃前の
　　内はのとさはさしてかまはし

　　夜寒
かりかねをつけたる蚊屋のつり手より
　　足ものはさぬ秋の夜寒さ

　　會式
家々にかさる小春のつくり花

としやおそしの御影講中

寄傘戀

からかさのゐにしはあれな年月を
ふるほねかひの手にわたるとも

寄柱祝　内匠はしら會

飛彈たくみたてし柱の數々は
よむともつきぬ三河萬歳

春日博奕

白魚のひとちよぼ一のあい手さへ
よるの物とてよきめうとなり

加保茶元成とおなしく西曲に遊びて

かりのよに又かりねするかしへ來て
里の中にも里を見るかな

酒もりのあひの山々もてなしは
お玉か池澤邊澤瀉のもとに酒たうへて
お杉お玉か池とこそ見れ

鄰松子の席書を見侍りて

毛氈の花の赤らをたへ過て
となりの松の前もはつかし

花　已下三首酒上不埒日暮里大會

ゐら雲と見る人丸て無理ならす
花はよしのゝ山のてつへん

乞食戀

乞食を三日してよりわすられぬ
姿は小屋に落ぬ君かな

寄生醉祝

生醉の行たふれても辻番の
よく世話をする御代そめてたき

日くらしの會の、あくる日、大屋のうら住、銀杏みつかと、坂月米人、紙屋丸彦なとゝ鹽干狩すとて

けふも又馬鹿をつくだの鹽干かり
きのふは山に日くらしの里

雁金をかへした跡も櫻かり
鹽干とまてにかりつくしたり

老木花　三月廿四日日白臺大會母六十賀兼題

松かけにならへる尉と姥さくら
ともに老木の花のさかもり

寄袋祝　同

言のはを乞食袋にとりあつめ

いはふ八千代の玉つはき山
題志らず
わか國の梅の花とはみつれとも
天神様にいかゝいふらむ
大久保百人町のつゝしを見侍りて
まつかいにたるまの樣ないはつゝじ
花はもへんとほつすなるべし
何多良方士のたつね來ませしかは
はる〳〵と何たら方士たつね來し
けふの志るしのかん酒もかな
かはらのやしきと名つけ侍る人のもとへ
高き名をやむね作りにあけ給へ
千代もかはらのおやしきのやね
紫色紙と名つけし人のもとへ
たはれ歌五十帖ほどかき給へ
むらさき色紙ひかり短冊
返し　　むらさきしきし
むらさきは江戸とよはれしうれしさも
志きしと名のる事のはつかし
馬喰町山城屋何かしをとひ侍りて
山城やこはたの里に馬喰町
きみを思へとおかち町より
奈萬須盛方におくる
たはれ歌ひとはたこやをあげぬるも
君か名ますやよそへもり方
宿屋めし盛におくる
めしもりのかた手に歌もなり平や
河内かよひの宿屋ならねと
大曾禮長良におくる
おほそれのなからの橋のつきしなき
狂歌をもつて申上候
藏内金益におくる
くらのうちのこかねさす〳〵花咲て
たはれことはのみいれさへよき
多旅人におくる
此宿にちゝんふい〳〵入來る
おほんたからのおほき旅人
路次口志萬里におくる
かな棒を宵からひくのやまと歌
志きしまりよき路次口の道

人眞似小眞似におくる
ひとまねのひともまねけととりわきて
　いさ立よらん君か小まねき
大原雜こ寢におくる
大原のざこねかよめる歌のとく
　男女の中は得手物
つふりの光におくる
夕顔のやと屋の軒におつふりの
　光源氏とあやまたれぬる
一ふしのちつえにおくる
一ふしにちよをこめたる竹の子の
　頃は玄ゆんかんお名は俊滿
小松軒か大草のかくれ家をとひて
山中にひきこもりたる小松やと
　思ひの外に大草の菴
萩原何かしをむらさきのゆかりといへる
むらさきのひともとならぬゆかりあり
　氏は萩原お名は藤十
觀流齋原富は、近代三絃に名たゝる人なり、
其子夏若子、たはれ歌の名をこひ侍りければ

布留絲道と名つけ侍るとて、
いく千代もふるの絲道跡たへぬ
　君かちすぢをたれかさみせん
鰹走地　已下二首山道高彥會
郭公てつへんかける聲よりも
　まつ地をはしるかつほあたらし
中洲郭公　みつまたの四季菴にて郭公をきゝて
ほとゝきすなくやひとふたみつ又と
　きくたひことにめつらしき菴
寄玉子釋敎
わしの山いてにし人は世の中を
　こと〳〵くわか玉子とや思ふ
小川若鮎
みなもとにみかきあけたる玉川の
　なかれの末もさひぬ若鮎
郭公喧
山の手の山郭公やみくもに
　なくやてつへんかしましきまて
船開郭公
海原にみゆるほとほとほとゝきす

てつへんかけてはしる追風

旅宿郭公　小傳馬町宿屋飯盛會

開帳の本尊かけたかほと丶きす
　淺草まくらむすぶね耳に

寄鰹祝

のしめ色きたる姿の初かつほ
　おのが卯月を正月にして

お玉か池澤邊澤瀉のもとにてはしめて瀨川路
考にあひて

露むすふお玉か池てあふ人は
　外にたくひもなつ菊の花

中根氏にて卯月の頃庭の木々にわたをかけて
雪のけしきにつくりいてけれは

時しらぬ雪の中根の御馳走を
　かのこまたらにおほへこそすれ

池のはた呑々菴に、むさし野といへる盃あり、
その大さ三升をいる丶とき丶て、

むさし野のひろくひろむる盃は
　くさよりいて丶くさんしやう入

陰陽師

陰陽師身の上しらて人の身を
　しるや八卦のおもてうらない

神主

いり鳥の鴨の宮居を守る人は
　禰宜かん主といふへかりける

貧者

よしさらはてんぢんぼうにかなはゞや
　一箪の食一瓢の飲

新川太神宮奉納の歌に

五十鈴川ふるきたつねて新川の
　河岸に酒くら宮にみかくら

雪嶺のしかける御禊に

たてならて横にさしたる田樂の
　みそきそくしのしるしなりけり

山手白人、あけらかん江、地口有武なと丶、
同しくすみ田川に、舟逍遥し侍りし時、おち
よおとせといへる、二人のしら拍子の、今樣
うたふをきくに、
「野邊の若草むすはんことを、いなか風とて花
染ちらし、梅のかほりのつんとして、姫御前

の身のつまからけ。ほんに氣まゝなうき世わ
たりはうれしからふじやないかいな」
といふをきゝてよめる、
此頃のいなか風とてもてはやす
　狂歌に心のへの若草
けふの身うれしからふじやないかいな
　隅田川原のうき世わたりは
玉つかむ、兩國はしにて、のちのたから合あ
りける時、蘆間の舟のさはる事ありて、柳橋
の柳になしかたく、そのむしろにもあづから
されば、心に思ひつゝけ侍りける
思ひきやたからの會に入なから
　日をむなしくて過すへしとは
味噌漉螢
よるひかる玉味噌こしを丸盆に
　ふせし螢はあたへなきかな
深川の遊女のゐに
深川のみしかき切そしられける
　こま下駄の音一二さんはし
東海寺萬輝和尚にはしめて謁しける時
東海を出し一つの月かけの
　末はよろつのひかりとやなる
卯月の末御殿山にて
白雲と見へしは先手ごてん山
　黒みがゝなる夏の葉さくら
天をまく地をむしろにもしきたへの
　枕の海はわか御殿山
鷹の柳にとまりゐて燕のにけゆくかたかきた
るに
つはくらのつはさもはやくにけゆきて
　柳はみとり鷹はとれない
鯉と鮎となかれにあそふ畫に
みなかみへ心うき／＼のほるらん
　龍門の鯉玉川の鮎
達摩傾城のすかたにて道中する所かきたる畫
に
玉章の文字にはかきもつくされす
　坐敷の教外床の別傳
寄三味線戀
色絲の根緒にむすふのかみこゝを

かけてもうきは何のばちかは

蟻通の噺に

みあかしのありとほしとは思ひきや
闇路をたとる馬のつらゆき

たがかけの噺に

手盥のそこはかとなくくれ竹の
たか身の上も同し世わたり

ゐのゑしのかたへにゑゝのこのうつくまり居るかたかきたるに

いもとわれふすゐの床の山ひとつ
ふたつにわつたうりばうが顔

ゑひす大黒萬歳の太夫と、才藏のまねひして、まふかたかきたるに、たゝえことをそへてよと、ある人のもとよりいひおこせしかは、

福神のとく若ゑひす大黒は
めて太夫との御そく才藏

六道辻梅　青山六道の辻といへる所にて梅のはなのさけるを見侍りて

六道の闇に迷はぬ梅の花
色をもみるめかをもかくはな

曾我祭雨　五月十二日孫彦會

曾我祭いりくる人も俄雨
なんた〳〵と聲のしきり場

茶屋逢戀　同

夕日かけさして人目にもるゝとも
よしやよしずの茶屋の色事

花道つらね、山科の親玉の、わざおきをなし侍るときゝて、申遣しける、

見物の心もゆらくゆらの介
初ねのけふのやくら太皷に

座かしらの文字もいろはのかな手本
忠臣藏にみつる金箱

そのゝちむまはむまちの友とちと芝居見にまかりて

五月雨のはれまにひとつ大星を
見つけてうれし雲の幕明

樓上臨三絃江　秋田太守三階の額

三階に三味線ほりを三下り
二上り見れとあきたらぬ景

鎌倉遠則のもとよりかつほをおくられけれは

鎌倉の海のかつほの遠のりを

四方山の手へおしおくり船
いつまでも猶いき／＼の松の魚
　われらが頬の落葉かくまで

船夕立　馬喰町ひしや會兼題
船の帆のはらめる風に夕立の
　雲のはやめやふり出しけん

早乙女戀　同
早乙女の笠の下紐とかすとも
　露はかりこそなひき玉苗

本町がしの錢湯にて、ゆあみ侍んと、衣をぬきて戸棚にいれんとするに、あまたの戸棚の番づけの、七にあたれるもいまはしければ、
せんとうの戸たなは外になつ衣
　七といふ字か氣にかゝる錠

中たんぼの茶屋にて、やすらひけるに、かたへに日出いなりの宮居も近く、早苗の眺望いふはかりなければ、扇にかきつけてつかはしける、
日の出より日の入谷まで早苗とる
　なかめは外になかたんぼ哉

かほ茶のもとなりのもとにて、紙屋丸彦がゑがける、辨慶のつふりを、半ばかりいたしたるかたちの、おかしけなるを見て、
七つにもたらぬ道具におつふりの
　はしべんけいのなりそおかしき

小川町住、澤邊帆足、ふしわらの中貫、酒呑親文なとゝ、墨田川に逍遥し侍りて、
酒をのみ肴をくへはすみ田川
　たとひ狂歌はありやなしやと

ゑいの木やしきと、首尾の松とを、船より眺め侍りて、
ゑいの木のゑいつけられし酒もりや
　不首尾の松のもとひなるらん

新造の猪牙船を見て
新造のあしかにあらてこく船の
　ふすゐの牙に似るはいかにそ

梅若寺にて
入梅の文字にたかはすけふは又
　むめ若寺にいるへかりける

船の中に武鑑をひらき見て居るを見て

船中に武鑑をひらく人は是
　何萬石やつみおへるらむ
老女懐舊　馬喰町會宴題
川水のなかれて年をふる婆々の
　むかしくのはなしせんたく
大道納凉　同
大道の風はすゝしくふけとさや
　夕けの神の辻うら屋より
傾城小言
けいせいの小言はかねて大ことの
　むしんのうらのおもてぶせなり
飯盛惜別
旅人の別にこりの思ひつめて
　涙の玉やにきりめし盛
中村重助表德を故一といふ、いまたいめせざるに、せうそこして、折もあらは相見ん事をねかふ事なと、いひおくれるに、そのゝちたつね侍りて、
けふお目にかゝるをまちの中村や
　借かこいちといふにまかせて

返し　中村故一
いちもつの鷹がござつた酒の佶
　四方のあからの門に入ふと
おもしろい事をはやらせ給ふかな
　われらも狂歌よもの門人
中村故一、狂名を歌舞伎たくみと、つけ侍りけれは、
作者とは見ゆるはかまのひだたくみ
　とりも直さす君がかぶきぞ
歌舞伎のたくみが庭に二もとの竹あり三木藏といへる俳優のおくれるなりときゝて
みちのくの松をはみきときゝしかと
　このたけくまは二木なりけり
五月の頃、梅旭女をとひ侍りしに、いきたなく朝寝したりとて、　梅旭女
とひきます四方はひるまもなき比の
　さみたれ髪て筆をとりけり
返し
入梅に旭もいまたいつみやを
　雨ふりはへてたつねこそすれ

さつきの末、堺町豊竹肥前掾座の、あやつり
みにまかりけるに、竹本春大夫一世一代の名
こりとてひらかな盛衰記、むけんのかねの段
を、かたるをきゝ侍りて、

聞ものもかねて小首をかたむけん
　一世一代氣をはる大夫

五月雨の頃檜皮釘武のもとにて

五月雨のひはたなれとも釘武の
　宿にしあれはもる殿もなし

天井のはれ間もまたすとひ來れは
　普請なかはとあいさつき雨

店者戀

店者の半切にかく千話文は
　伊勢や日向の物かたりかな

韃靼人のゑかきたる畫に

中華をといへとも花はなつの夜の
　一夜にかはる罌粟坊主哉

葛西太郎　角田川の邊、牛島といふ處に、中田屋といへる酒家あり、皆人これを葛西太郎とよふ、

ふたつ文字牛の御前のむかふ島
　太郎か鯉は池の中田屋

酒上不埒、地口有武なとゝ、むかふ島の酒家
むさしやのもとにて、さゝげをよめる、

初物をさゝげし膳のむかふ島
　是も十六むさし屋の見勢

寄眞桑瓜戀

あはまくは瓜のはたけにねもしなん
　とりつるくつのうき名たつとも

もとの木あみ、あけらかん江とともに、から
衣橘洲のもとにあそひて、

から衣きつゝなれにし此やどに
　はる〳〵過て夏のお出合

品川のむまやちに、天野屋といへる、あらた
なるたかとのゝ、たはれ歌よめと言葉のあや
まちのもとめければ、

高縄のよりくる客は品川の
　ひろい座敷もあまる天野や

西瓜立賣　六月十四日馬喰町會

あんとうのあけを奪へるなまなれい
　西瓜にたれも腹をたちうり

寄花火戀　同

闔の戸をあくる錀屋の玉〳〵や

しのひ來る夜を花火とぞ待つ

古着の出來よくのもとにて湯豆腐をたうへて

此禮を水にはなさし湯豆腐の

あつき馳走に酒も出來にし

寄馬神祇　[illegible]四谷別莊會

白あはを日にいはいかみかもや

下からかけてのりくらへむし

別莊納涼

時ならずふりいたしたる涼しさは

是水無月のしもやしき哉

寄煙管袋無常

はかなくもきせる袋の底ぬけて

雁首たまの緒はきれにけり

甲子の日、楊弓の續穴をゐたる人の、もとめに應じて、

そくけつは大穴むちの穴たうと

きのえ子の日にあたる楊弓

白拍子おちよが、求に應じて、扇の畫にたゝえことし侍りし中に、くゞつつかふものゝかたかきたるに、

人形をつかふおもてのしろ〳〵と

見やる黑このうちぞゆかしき

をなじ瓜を西瓜の畫に

沙村のしにしの瓜と鳴子瓜

ともにもらさぬ水くはしの中

三叉月

波の上の月の光をみつまたに

くだくる玉や千々の箱崎

園者戀

手をつめし石田かこひの身の上は

何としそうぎのばんに侍戀

向島

早うしもおそ牛島もよとみなく

いけすのこいにこかれよる船

歌人の居ながらよしの赤味噌の

鯉の名所は隅田川かな

松本幸四郎たはれうたの名をこひ侍りければ

高麗洒連人と名つけ侍るとて

しやれ人のしやれをきくから高麗や

又され歌のされを松本
瀬川菊之丞を、まかきのき瀬綿と名つくると
て、
ぬれ事の露のまかきのされことも
　きくてふ人や御ひいきせわた
中村仲藏をかき根のそと成と名つくるとて
され歌をかきねのそとも中仲に
　よしあしからぬ和歌のふりつけ
芳澤菖蒲をあやめの眞久良とよひ侍るとて
かきながす筆のあやめのまくらかみ
　ゆかしきこえによし澤の水
伊勢利といへる人を伊勢種成とよひて
是よりは難波のあしも濱荻も
　ともにいせりの歌のたねなり
取妨仲人戀
相性もよしのゝ川の水をさす
　いもせの山のなからとそうき
吉原の燈籠を見侍りて
玳瑁（ヘッコウ）の櫛のはをひく見物は
　燈籠鬢の中の町かな

例年のきかくはつさぬ燈籠に
　なき玉菊か名はかくれなし
みのわの里に朝かほの花を見て
たつた今わかれてきたの里ちかく
　目にちらつける朝かほの花
京町にて、にはかといへるたはふれに、わた
つみのむすめのかたちを、うつせしかは、
京町のにはかはなへて龍王と
　きゝしにまさる波のおと姫
赤つたやといへる茶屋に、よみてつかはしけ
る、
青すだれ赤つたかつらくる客は
　おりかさなれる錦とやみん
望月の夜の空さだめなければ
千金の名たかき月の雲間より
　せめて一二分もれ出よかし
その夜思ひの外にはれわたりければ
雨ふりて地もかたまるき影みれば
　空にも芋やほり出しの月
海原をいでし三五の月の影

あんしるよりもうむのやすさよ

寄小石川祝　赤松連初會八月二日

川の名の小石ひろふて土くれを
うちおさめたるわらんへの歌

豊岡の大守のみまへにて、河東によみておくれる歌、

かとうして又やはらかな一ふしに
三筋の絲をひく麹町

扇の畵に、狂歌かきて、河東におくれる中に、鶴の松のほとりにむれゐるかたかきたるに、

秋なから色もかえすみの松の内に
千とせをこむる鶴の一聲

同しく竹に雀

くみかはす銚子のさゝにからまりて
醉をすゝめの時を江戸節

をなしく富士の畵に

三味線のてうしも富士の高根にて
名におふむつの花の江戸節

寄寶戀

箱入の娘の年はいくつそと
となりのたからかそへてやみん

巣鴨菊

つほの内につくる巣鴨の菊見とて
むへ水鳥の酒をこそのめ

辻番菊

菊の酒のみてくるへる生醉を
かゝえてよりし辻番のはな

蚊屋別

かそふれはひとふたみつの秋ふけて
四六のかやも七のわかれ路

大曾禮長良、長月の比、鍋戸むらに山里もとめけれは、おの／＼下屋敷によする祝といふ事を、よみ侍りし時

よく咲やかゝえ屋しきときく月は
千代ませかきの花に縁あり

普栗釣方、歌相撲をくはたてしか、七會にみてし比、身まかりけれは、

歌すまふ夢のうちわをあくるまに
西のかたやへ入にける哉

そのおきつき所、さんやほり光岸寺ときけは、

蠟燭の名にたてるとの光岸寺
　なかれてはやき月と火の影
大飯食人か、「もりつけて五はいくらゐは物か
はの藏人とのもゆるし給はれ」と、よみけるを
み侍りて、
待宵の夜食に五はいくらんとは
　いか物くひの物かはとしる
　養子野遊
牛部やにひきこもりたるやしなひ子
　年も十六むさし野遊
　洲崎の望汰欄にて
望だらにならねはとても須磨の浦
　波こゝもとによるひるの客
　十三夜月
まん丸なもなかの秋にちとはかり
　細長月の影のさやけさ
酒をのみ肴あらしてのちの月
　みれはすなはち寛平法皇
　神田明神の宵祭に、飯田町河岸高積かもとに
酒のみけるに、あすのまらうとのまうけにと
て、強飯をふかさせけるに、まちかひて、ふ
た所よりふかしてもて來りけるときゝて、
蒸籠をかさね／＼のめてたさは
　いくらありてもあかの強飯
高積かもとに酔ふしけるに、朝とく榊のわた
り太鼓の音に驚きて、
昨晩のさかきけんにて榊葉の
　けさわたりしも何かしらゆふ
ことしは、よねのあたえたうとけれは、市人
もいとなみにくるしみて、例の神田の神事も
よろつ事、そぎてをこなひければ、いつもや
たい、萬度、はやし方なと引つゝきけるに、
たゝむさし野のだしはかりみへ侍りけれは、
むさし野の一本ゆへに明神の
　祭見なからあはれとそ見る
と心のうちに、思ひつゝけ侍りしか、又例の
江戸自慢を、
田樂のたしでも酒のかん田でも
　まけるな京の祇園豆腐に
いつも神輿は跡よりわたり給ふが、ことしは

だしの十番の次に、わたり給ひければ、

おみこしも十番切にわたるとは
　ふしの裾野かむさしのゝだし

旅籠町とかやの、花だしの車に牛をかけず、二人は前にあり、一人は尻りにありて車をおす、かたてに上なる太鼓をたゝき侍るもをかしくて、

花だしに本ちんとまりかはたご町
　同行三人押してくるま座

長月二十日、吉田蘭香のもとにて、はしめて市村家橘にあひて、

よい風か葺屋町から来る客は
　今宵の月をめで太夫元

けふなん、中興金枝半太夫か、三回の忌日なりとて、原夏若の三味線にて、家橘半太夫をかたりければ、

半太夫もとをわすれぬ一ふしも
　けふきく月のはつかにそしる

をなしむしろにて、誌仲千年〳〵の、一ふしをかたりける、年は八十あまり四つとかや、

めつらしい事にせんねん〳〵を
　さみせん年のためしにそひく

をなしく夏若と三味線にて、誌中の源平色揃蓮生道行の段をかたりけるに、とりあへす太夫元の舞出ければ、

蓮生の道ゆきかゝりとりあへす
　うたふもまふもつはものそろへ

返し　　市村家橘

はしめての連中様へ蓮生の
　道行かゝりさてもめいわく

長月二十五日あまりひとひ、市村家橘わがやとりをとひ来りて、たはれ歌の名をこひ侍りしかは、橘太夫元家と、名つけ侍るとて、

狂言も狂歌もをなしたはふれの
　名にたちはなの太夫元家

長月廿一日夜、豊岡太守のみまへにて、富本斎宮太夫か浄瑠璃をきゝ侍りて、

此とのはむへも富本浄るりの
　みつはよつはに番組をせり

三線味もよくなりひらのあい方は

いつきのみやときくそうれしき

梅川忠兵衞の一曲をきゝて
千金の富本流をきく月の
二十日あまりに四十雨かも

大草屋しきすりの、松見のもとにて、吉田蘭香、布留絲道、橋太夫元家など、酒のみけるに、あるしの庭ちかき一本の松の、大きなるを袖すりの松と、いへるよしをきゝて、かの太夫はいかいのほく「肌寒さ袖すり松にわすれけり」、といふをきゝて
橋のかほりをそへて袖すりの
松も太夫の昔わすれし

赤松連の狂士、ぞうしかやにて、狂歌合せし時、(是雑司谷會式花合のはじめ也)遙見千家花便入不論源氏與池坊、とかきて
なけ入の水際たつて見へたるは
花をいけすきむたをする墨

水茶屋落葉
田樂の豆腐の紅葉おちはして
水茶屋にする木からしの昔

寄風車戀
君かいきふきかけられて風車
めくるうき名のむき藁にたす

問屋場時雨
けふよりは先ふれふれよ時雨月
出雲の神のかんつとひ屋場

人丸赤人玉津島の御影を、今様の女風俗にゑかきて、本阿彌ないしやつかれにわかちて、たゝえことを乞者ありし中に人丸をよめる、
何やらん硯引よせかきのもとの
まうちきみなうたれもねたしな

玉たれのみすちのかりまかりしに、草いとたかうしけりければ、
八重葎茂けれる露の玉たれの
みすちの道をわけてこそとへ

霜月ついたち、芝居のかほみせの比、過し神無月廿八日のあした、火ことありて二丁町とも灰燼となりし事を思ひ出て、
やけ原の霜月とこそなりにけれ

面目灰にしふす顔見世

住吉松にそり橋の畵に

すみよしの松風なりのそり橋は
　むへもみとりの中に見へけり

波に燕の畵に

上段にかまへし太刀のつはくらは
　是波のひら行安そかし

夕顔の卷の畵に

夕顔のしろき扇をかいまみて
　そのつまいたうこかれこそすれ

しおんの畵に

床の間のしおんの花のかけものは
　七尺さいてなかめこそすれ

社頭初雪

しらゆふの縁にひかれてみやしろに
　雪の初穂のふるかとそみる

髪置祝

こととしよりつむりにけしを置そめて
　千代よろづ代の數とりにせん

巨燵見雪

ふみ込しこたつやくらも四足い
　兎と雪をなかめこそすれ

山道高彦のもとにて、うなゐ子の、髪置の祝しける夜、うたひめの富士太郎の曲をかたるをきゝて、

千代かけてひく三味線のいとさまは
　三國一のふし太郎なり

すまひ人山分秋津島にかちけれは

高ちほの山わけ出しいきほひに
　ふみかためらる秋津しまかな

花道いつらねか、木場のやとりをとひ侍りしに、ふたもとの松の門にたてるを見侍りて、

はる／＼とたつねて木場のかくれ家は
　杉にはあらて松たてる門

文字樓のうかれめ、たか袖むつきのきぬの模様何よけんといひけれは、萬歳のゑほしつゝみあふきに松葉ちらしたるかたよからんといひしに、はたしてその色目にさため侍りしときゝて、

たか袖をひくてあまたの染模様

このまん歳はとくわかなもの

山田景富君のもとにて

かきこしに向ふか岡のけしきをも
わか物かほとしのばすのいけ

風景に富は此屋をうるほして
池の心もひろくしのはす

冬の夜洲崎なる望汰欄（ほうたら）に月をなかめて

望汰欄になりて海へをなかむれは（かけさむし）
月も出たり宵の口しほ

武家歳暮

ものゝふも臆病風やたちぬらん
大つこもりのかけ鳥のこえ

長刀にあひしらへとも年のくれ
弓矢八まんひかぬかけとり

寄節季候祝　孫彦結會

おもしろくさつさとこせや言のはの
青山かさる年のせき候

隣餅搗

垣一重こし粉をつけてたまはるは
居なから自由自在もち哉

歳暮

つごもりに利あけもならすなかれゆく
年より質のおしく社あれ

煤掃ははや松の戸のあけたてに
はしら加減もとしのくれ椽

婆阿五十の賀に、寄酒祝といふ事を、

又もみん榮花のゆめの五十年
粟餅くはす酒をのみ〳〵

くるとしのはしめの、たはれうたあつめて、草紙となし侍らんとて、此道のすきやかしにて、狂歌師細見といへる、ふみつくりし事なと思ひ出侍りて、

歳旦の狂歌も一首二しゆましり
小みせをひらく巴扇や

蟲

秋の野の千くさはやんもしら露の
ふつて出たる鈴蟲の聲

淺草市

あさくさのいちはやくかふみやけ物
人にさつさとくれてゆく年

三十五になりける年のくれに
かそふれはもはや三十五斗米に
　腰をかゝめて（こゝめて）こす年のせき
師走十九日のあした、けしきはかり雪のふり
けれは、
今朝ほとのはんし物はとふる雪は
　ひるまもまたすとけにける哉
小松川のほとりに、おほやけにてみかりあり
し日、みかり場の事にかゝつらふ近藤何かし、
けふなん鶴の三つはかりも、みてにいるへき
いはひ歌つかふまつるへきよし、みかり場の
ほとりにて、せちにせめ給ひけれは、
春またてしめつる野邊の小松川
　三千年も手のうちにあり
あまりに名歌ゆへにやそのしるしさらになか
りき
大飯食人いもとより、その國のかみの名の給
ふ、下野の原さのゝ、いもからをおくられけ
れは、
しもつけのさのゝふなはしとりあへす
　このいもからにあふこそうれしき
雨中生酔
ふる雨の足もよろつく生酔は
　袖ひちりこの如くなるへし
天明四のとし甲辰としのはしめに
立歸るおさな心の春遊び
　年をは跡へとるかとそおもふ
吉原歳旦
千金の春のくるわの初買は
　五町まち／＼ひらく惣花
深川歳旦
春の夜の一刻價千金を
　けふつきそめし富か岡かな
初夢
まさに見し一富士二鷹三茄子
　夢ちかへして獏にくはすな
此歌、後のむつきついたちふつかの頃、市中を賣りありく、
寶船の繪にしるし置侍り、いとおかしかりき、
むつき三日、よし原中の町尾張やかもとに、
うかれめの年のはしめの禮とて、むれありく
を見侍りて、

かよひ來る客をたのみし水莖の
　跡着ぞ春の錦なりける

兩國橋霞

兩國のはしより長き春の日に
　鎗二三本たつ霞かな

若菜

下駄のはにたまらぬ雪をふみわけて
　籠の目をもる若菜つむらし

節分の夜、いつゝになれるわらはの、としはととへは、かた手出してほこりがなるを見侍りて、

わか年は兩手を三度また片手
　出しても指のひとつあまれり

赤坂霞

玄やちほこのたてるやいつこ赤坂の
　みつけの前に霞む青山

寄萬年樋祝

うこきなき萬年樋の岩間より
　ひくや千箱の玉川の水

社頭梅

鶯の笠なれはこそ神垣に
　翼なくして飛梅のはな

深川霞

年の矢ははやく三十三間の
　堂より先にたつ霞かな

閏月歳旦

ふたつなき物と思ひしあら玉の
　年を兩手にうるふ正月

正月に又こきかへすさんや舟
　堀まてあけの春の二はいめ

深川にて、たはれ歌の角力會ありしかへりに、もろ人やくら玄たといへる所のあそひめをよひて、酒のみけるに、

深川の歌のすまふの太鼓とて
　うちおさめたるやくら下哉

文字樓のうかれめはた卷か手本に

筆とりてかくすみ色やこきん集
　そのされこともちうたはた卷

十六さゝけとなすひはつたけかきたる扇に

年はまた十六さゝけおはくろを

つけなすこともけふか初たけ
男山のほとりにくりとかいへるあそひあれは
栗の字ににたるはかりそ女郎花
おれ落くりと人にかたるな
もくあみ初會の日、算木有政か扇に、あみひく所のかたかきたるに狂歌せよといへは、
これやこのあこきかうらては網をひく
すきやかしては木あみをひく
梅　同日兼題
鶯の笠にちりくる花雪吹
あみをかけたる梅か加賀みの
下手七種　おなしく
中々に上手の手からも水菜より
下手な口をもたゝく七くさ
閏正月八日坂本君にめされ侍りて
うれしさを袖やたもとにつゝむかな
おくみのしたにたてる身幅も
渡邊綱羅生門の畫に
金札をもたせぬ供も御主人の
つなにひかれてらしやうもん河岸

盃にいのしゝの肩を肴にせし畫に
うつしゑの筆もかるもの露なれや
のんてふすゐの床の盃
よしの屋といへる酒家にて、うなきの蒲燒をくふとて、
一二本さくやうなきの蒲櫻
花の匂ひもよしのやの奥
しろかねの臺にこかねの盞の
水仙に羽箒のゑに
酒はうれへをはらふ羽箒
布袋傘をさして行ゑに
風雨もけにふく神の仲間とて
大こく傘をさす布袋殿
奴鳥毛をもてるゑに
二合半ふちをとり毛の鎗よりも
ふり行ものは絲鬢の霜
いしやの跡より侍の行く繪に
さふらひのむかふ通るはいしやなれと
藥箱もたぬたいこもちかも
接穂梅

花さけはまたもなるみのそれならて
　いつくの梅をよひつきの濱

南枝にはそのこのかみの子をもつて
　めあはすへしとつくや此花

とのさまのお馬のはなの花かけに
　いきをつき穗の中り梅の枝

寄鶯戀

よい首尾を月日ほしとは思へとも
　明て出られぬ谷の戸障子

堀春月

春のよの朧月夜にきくものの
　蒲團きてつく堀の舟やと

土手摘草

大門の口も八丁女つれ
　手も八丁の土手のつみ草

春月

千金の名高き月をよくみれは
　一分ほとの朧まんちう

柏木村鎧明神にて　將門の鎧塚あり

君かそのまさかときにやきたりけん
　鎧の塚も春の草摺

御先祖も柏原とて柏木の
　村によろひのたてしみえしろ

寄鼠戀

そろはんのけたをはしれるうき名より
　鼠さんにもあまる思ひこそ

醫者大食

百草をなめしひきりの跡なれは
　いかものくひといふへかりける

大名戀

氏のなき玉のこしをは大名も
　からうしてこそ引いれにけれ

小松有春色

二葉より春のいろけの有かほに
　野邊の小まつのこましやくれたり

二月大雪

きさらきの時節はつれの大雪は
　みな人いかゝみるとこそいへ

雪の日によみ侍りける

雪ふれはさすかに友こそまたれける

つねはうるさき物と思へと
雪見にたちいつるとて
ふみこんてみれとも足のつめたきは
あつたら雪のとかにそありける
牛天神のみやゐの歌に、雪の中なる紅梅を見侍りて、
雪ふれは天神様の宮よりも
紅梅殿のいろも忍ならぬ
おなし玉かきのほとりに、はこたるゝ人を見侍りて、
天神もうしとはさそや思ふらん
枝をたれたる梅の下くそ
柳川といへるすまひ來りて、名をこひけるに、水戸の産ときけは、その國の名所を見て、いその濱と名つけ侍るとて、
潮風に浪の花ふる勝角力
いさむ心もいそ〳〵の濱
赤松連中狂歌會に、澤邊帆足呉竹ふしみ來りける折から、雪ふりけれは、
雪の日にほたるの來るもことはりや
さるおやしきの儒者もみゆれは
豐年初午　赤松連奉納
ともし火はみつ物なりのみつきにも
あまれる年の稲荷ふ神
九郎助稲荷奉納の繪馬におなし心を
豐年をうかのみたまの祭とて
田のくろ助もゆつる君か代
新川鹿島稲荷奉納歌
名にしおはゝ稲をになへる豆腐にも
かへてさゝけんかしまこんにやく
初午
神前にかけ奉るいなり町
狂歌もはつのむまの跡足
日影土龍、とし比有馬の太守にみ出入したき願ありけるにかはりて、
わか首をのへつちゝめつ有馬筆
そのお出入にならんとそ思ふ
やかてねかひかなへけり
雲樂齋いもうとのいたみに
いもうとをなくしたかへのつまならは

人のむすはん事もいとはし

おもさらなゑるしの石をみるにつけ
　力落しのお身そかなしき

天ほ川成、ゆめに女面大黒の像を見しとて、
そのすかたをうつせしに、
大黒も女かほにてましませは
　大穴むちそ思ひやらるゝ

きさらきの比中島氏の昇進を賀して
算盤の位ものほる御勘定
　ひらく二月の梅の木の玉

堺町茶屋いせや半助かもとにて
木あみ内子漢江橋洲白人やつかれかかたちを
ゑかきて六歌仙のすかたにせしを見侍りて惣
よい客の入來るふくの神風や
　いせやかみせはいつもはん昌

名代によめる
よも(四方)すからあみ(網)ひくちゑ(智惠)はからころも(唐衣)
　きつ(橘)かかん(漢)江の雪の白人

寄二軒茶屋祝　富本にてなり
二けん茶やみつはよつはにたてつゝく
　こゝの家名はむへも富本

初午
けふは又こんの大なし白張と
　はけて狐のめんもかふらす

酒落齋かかひの國にまかるときゝて
酒折のつゝらおりなる山道を
　ゆくや躑躅もひともしの頃

大屋裏住か、ふすまに、梅のかたかきたるを
見侍りて、
色も香も名にしおほ屋にさく梅の
　はなをみそかのやみはあやなし

天王寺蕪の繪に
天王寺かぶのほさちの手にもちし
　簫のふゑかとあやまたれぬる

一爐茶覺一生夢　下石　一盃酒忘千日憂
もゝとせも千よ萬よも酒にゑひ
　茶にうかされて過ん世中

述懷
世中は細工貧乏人たから
　たゝおのか身とうらめや〱

南枝の花のもとに、午祭の日のうらゝかなる
をよろこひ、東寺の門の前ににないし稲の、
豊ならん事を祈る、

神前ににないはゝ棒も折れぬへし
きさらきの梅出來秋の稲

雪見に出るとて

いさゝらはまろめし雪と身をなして
浮世の中をころけありかん

布袋と大黒たちならひて相撲とる繪に

大黒と布袋をかけし一ふくは
二ふく對ともいはまほしけれ

おとり布袋の畫に

みろく佛何かにはかじやくと
浮世の中におとり出たり

雨こひの歌やよまんとよもすから

蛙舟はたに居て雨をまつかたかきたるに
かはすの口をたゝく船はた

橘洲か「錦にも綾にもまさる堪忍の袋はみて
もみことなりけり」といへる歌をかきたる扇
のうらに、

時なるかなくと思へとも
こゝが思案のさんりやうの雌雄

別莊花

殿様のこすえの花の折々は
かさす頭の玄もやしき守

寄虎戀

つれなさよ風の便にいひよれと
はりこの虎のかふりのみして

庭藤

なかめすにかへるはうしの願から
藤のはなつら通す庭もせ

祈戀

かしは手のなるかならぬか一向に
口をむすふの神そつれなき

躑躅

神代にもみさるきかさるいはつゝじ
からくれなゐのくゝりさる哉

枇杷丸梅由兵衛の戯事せし頃、手拭に筆染た
まへける、

帳合の長吉殿をころすなよ

此手拭の梅のよし兵衛
白陰禪師の贊に、蓮の葉に蛙の畫たる歌を、
枇杷丸畫見せければ、
蓮のはに小便すればお舍利哉　支考
蓮のはの顏してゐたり芋の露　東作
月僊和尙都五山の僧を畫たる贊
むすこにはさそいやかられ給ふらん
ひとつ廬山の五色人たち
世の中をへりふみわたりへりふまつ
へりふみふます渡りくるしき
享和四年甲子の春　大小の歌
大の月春はあと先夏は末
秋は眞中冬はのこらす
雪のふりければ
よし八は戌といふともふる雪は
われ足跡をつけて出て見む
甲子の春興
三面の大こく天を三拜し
九めんの直る甲子の春
五月雨や日も竹橋のほくしらへ

今日もふる帳あすもふる帳
もとすみける家（牛込仲御徒町木戸ゝハ菅沼又太夫樣隣）をうりてのち
庭に植をきける松のきられけるときゝてよめる
うへをきし松はくたけてわつかなる
たからの斧となるそわびしき
中の町うしへる花のかたはらに
深山木なとは一本もなし
さつき四日馬蘭亭にて、名見崎子の深川の曲（白藤源太深川の幕新淨瑠理）をきゝて、
京の水しらけて米三男女藏へ
しかけ文庫の底の深川
うくひすの谷の戸ふかくさしこめて
ひとくといはゝなしとこたへん
ちる花の春の山路にたゝすみし
鹿や紅葉の下になくらむ
猿と狗子のかたかける扇に
心猿不可繫、狗子無佛性
村雨の空もはれゆく曉に
やまほとゝきすふりいてゝなく

春雨

春雨のほち／＼ふるきそのむかし

ゐつゝけしたる遊ひおもほゆ

夏瀧

雪中の竹の子よりも孝行の

とくはすゝしき養老の瀧

寄繪戀

繪にかける女子にこゝろ動きしと

いもかきゝなはさてや燒筆

文化紀元甲子とし甲子日に

大なむち神のあれにしむかしより

いくたびめぐり甲子の年

ひとつきの酒力さめ茶畑や三巫山の雨ふり風

間にもこのめる道のすてかたきそおかしきや

いまだ目に見ぬ世の本をかりて見む

腹のうちにはともし火の本

右は山春文主人の珍藏自畫讃

文かはるてふとしのはしめみな月一日

萬竿風竹戰西牕、　一道烟波捲曲江、

龍掛雷鳴驅雨至、　黑雲深處氣升降、

六月朔日雷雨

一聲雷槌破前山、　急雨傾盆電啓關、

獨立我樓涼入骨、　不知身是在塵寰、

六月朔日雷雨

坂東何かしとかやいへるわさをき人の、道成寺の曲に堪能なりとて、人皆見に行くと聞きて、

わさをきの道なり寺の鐘の聲

よそにもきかす三津といはまし

すゞしくもふりくる雨かことし生の

竹の葉末の露そこほるゝ

みし花の夢路にちるは山寺の

入相ならぬ曉のかね

瓊浦にゆくへき仰ことうけ給はりける

玉ひろふ浦としきけは太ら波の

かけてもふましき濱の眞砂地

逃名名益起、辭利利將多、自笑老樗散、無如名利何、

衆鳥來てこれを笑ふその智には及へく、木兎

己なこれをその愚には及へからす

小鳥ともわらはゞわらへ大かたの

うき世の事はきかぬみゝつく

福祿壽贊

天道無親、善人是貧、南極有壽、仁者得得、
むかし／＼おうちい山にうばは川
桃のながれてつきぬことの葉

樂都々一何樂、

海山のさはりもあらし父母の
みかけをうけて君につかへは

かりまくら

身はひとつ、思ひはふたつ、三つ又の、なかれによとむ、うたかたの、とけてむすんで、むすんでとけて、しめてぬる夜のかりまくら、合うは着をぬいて、またじめの、あかつき比の雲の帶、なゝやなかすゝ郭公、いさゝらばふすまもはるをまつの葉の
玉たれのうらに冬籠せん

氣違とよしいはゝいゝ生醉の
くたやまくらんしつの小手卷
くりかへし又くりかへし生醉の
くたやまくらんしつの小手卷

西行庵にかけし額に山吹をよめる

いふよりもいはぬ色にてとこやらに
實のあるよふな山吹の花

青山堂樓上額　左傳語

民生在勤勤則不匱　南畝書

青山堂　南畝題書

青山堂記

青山在綠水在とは、もろこし人のは歌にして、青山かさることの葉は、節季候のはぎことなり、こゝにはなたの帙の數々、青表紙の文のまき／＼、からのやまとのふみをひさきて、世わたる道の枝折とし、身は紅塵のうちにありて、心は青山の外にあそふ、山の手の老店なれは、青山堂とはよへるなるへし、

四歌仙の小便にたつ其迹は
奈二加古曾古曾小町業平

右六歌仙を一首よめる小町業平の聯

鍾馗贊

終南進士鍾馗圖、落第書生提瑾瑜、
若有人間虛耗事、昔年須爲自家驅、

文化紀元正陽三月

盃中語

樽酒を硯の海とたくはへて
　　筆の命毛なかくのまはや

老子賛

道德之妙妙不可言孰入其室衆妙之門

牡丹賛

錦帳深沈蔭玉欄、　何如水際竹笆看
滿園紅白三春富、　散盡千金到牡丹

二帳集序

此帳や、紀東か千帳と、予か判取帳を摸して、一帳となせり、もとより帳合の、いそかはしきいとまに、かきうつせしかは、誤もありなん、唯紀氏の帳と、予か帳か、帳兵衛〳〵か、二帳となるともいはまほし、

裂昔入歸鳥

ほとゝきす鳴つるかたにそへてやる
　　心いくたひ聲をきくらん

初午

野狐の尖り尾の玉にけをとされ
　　狸の金のちゝむ初午

ひんほう舟賛

短夜の宵のねむりのみなねむり
　　波のらず船の音のわるき哉

用あるともはやくおきる事なかれひまありとも出る事なかれ
　　重代氏人後不勝于院不工西待四方赤良

己れやれ富貴になさておくへきか
　　貧乏神の勅をそむかは

はま名のはしのあとをたつねて

いにしへの濱名のはしのあととへは
　　風ふきわたる松の一むら

蕨

早蕨のにぎりこぶしをふりあけて
　　山の横つら春風そ吹

花

一面の花は碁盤の上野山
　　黒門まへにかゝる尖ら雪

春雨　うひまなひ

はる雨に火の見の太鼓こけむして
　　人おとろかぬ御代のめてたき

秋

萩見んとむれつゝ來るに藍さひの
　かすりの衣着ぬ人そなき

蟲

秋の野の長さにはらのさひしさは
　たゝくう〳〵と蟲のねそする

時雨

世の中は時雨のやとり宗祇でも
　めでたい事のふり來れかし

後朝戀

おさらはといひしことはか耳のそこに
　のこりおほさよあかつきの空

初逢戀

煩悩の犬もありけん朧夜の
　ほう〳〵眉におふそうれしき

あふみのやかゝみの山を餅にねり神風やいせ
海老のこしからむまて門松のはのちりうせぬ
されことをのふるとて

海老の腰おらはや五斗の餅米も
　輪とりにたる人をかゝみに

さんりやうの玄ちの置主され歌の
　時かりなるかな時かりなるかな

祖翁巾序

おほちの頭巾孫のきて、親のくつはいたいけさと、うたいゝむかしのむかし〳〵、いちかきかへた去年の暦、ふるきをしのふ、よすかともなれかしと、沅湘日夜東に流れし反古とも、西川氏のとりあつめて、尤らしき一帖とす、またえきの絲くりかへしみれは、まきもくの、ひはらかくゆるはかりになむ、　乙卯夏日
　馬喰町旅宿

ゆめむすふ淺草枕柳こり
　花のお江戸に旅寐せし哉

時をしる雁や越路に歸るらん
　けさまて寒く雪はふれとも

住吉の茶屋にて

住吉のまつへきものをうら波の
　たちかへるこそ玄つこゝろなき

喜作かはなしきゝて

ぢいさまは山へ草かりばアさまは
　川へきさくのはなしせんたく

有花滿枝、有酒滿壺、花神如在、酒德不孤、

いさゝらはまろめし雪と身をなして
浮世の中をころけありかん

月

詩をつくり歌をよみしもむかしにて
いも計り喰秋の夜の月

龍隠松に題す

吹あけの風は文福茶釜より
けかはへ松の名こそ高けれ

飯田町の月

高もりにもりくるよねのいゝ田町
月も志ゝけをいとはさりけり

二日は茶屋にゐの日にて、うちす（ふカ）しなから、
例の素見し侍り、

おいらんに棹姫さんのおつせんす
おめてたうおす春は來にけり

猩々賛

あしのはをふき　竹のはをくむ
蘆のよつきし　たけのよもつきし

六歌仙賛

世盛如彼、才難如此、有婦人焉、五仙而已、

一、上下をきておこめきたるは、田舎聟入の如し、
一、炭取を持出るは、面箱持のことし、
一、爐をのそきて炭を擧るは、鍋のそきに似たり、
一、草履を持てにしり上るは、草稼の床入の如し、
一、中たちして待合に出るは、市介の腰懸にて内濟をはかる如し、
一、濃茶のかたまりは、芋蟲をふみつふしたる如し、

秀吉信長此道をたゝんて國を亡せり亡國の餘風なをいまさかんなり

右難波にて作

かきつめし、筆のみるめも、はつかしく、志はし志のへは、たえやらぬ、思ひみたれて、やるせなし、ゆかむ心と、するすみの、硯のうみの、はま千鳥、またかきなかす、川竹の、會ての河たけの、なかれには、かはる淵瀬の、なきことを、口にくとふも、ゆふたすき、かけてちかいし、通ふ神、せひに御けしを、むすぶ玉つさ、

紀つかぬ子へよみて贈る

是ほとに心をつかふ御亭主を

きのつかぬとはたか名付けん

吉田蘭江主人へおくる言葉

論語しらすの言葉にも繪の事は素きを後にすと曰お禮は後の事か上下はかまかちくりも歳神の棚へあけて白衣の三人御見舞申す頃は安永八つの年むつきはしめの四ッの日御代はめてたの若宮の本とり萬よし田の何かしにてうつし繪の書そめあり御屋敷の上容は墨繪の雲のごとく御勝手の膳部は彩色の繪具皿に似たりみなひとはけの霞をくみ硯蓋に燒筆をたつ隣松か畫かける松魚は左慈か鱸よりあたらしく蟠牛か役者の似つらには壺屋か壺も底ぬけなるへし蘭雨のおとり持御舍弟のおとり込銚子のかはりははかまをぬくにいとまなく盃のまはりは錢こまもはたしなるへし上戸は酒をのみ中戸は飯を喰ひ下戸は肴をあらしふく三寶の山の紅葉の色にけおされてや小松はみとりの龜の尾を泥中にひきしりそき雁奴もおなしひとつらのこしちのかたへや歸けん跡にのこりしかの三人橋の小島を先として朱樂菅江くわん／＼と長居すれは四方赤良あからめもなく歸る方角をうしなひて東方の明るもしらすやゝありて銀燭天井にかゝやき花氈地上にみち棧敷の障子に穴ほち／＼とあき樂屋の咳はらひゑへむ／＼と高く三絃長歌囃子かたなといへるもの列を正して居流れたり先一番に劔烏帽子とかやいふめる歌にあはせてあたりも照葉のさかつきにひとさし舞しなりふりにおもふこゝろのあれはこそ跡の／＼その歌は名にしおふいさこさなしに都鳥の一曲業平も氣はありやなしや次には吉原雀の品よくとまりし竹の葉のみたれし髮もいはけなき乙女の姿やゝしはし感するも猶あまつ風雲のかよひ路吹とちし樂屋の唐紙さとあきて二八はかりのたをやめ燈籠寺の秀し額烏帽子水干きの國の道歳（成カ）寺へとまひ出たるにそ作りし罪もきこ／＼として君か名字のよたれをなかし名さへおみきの醉心地思へは／＼この金箱を引かついてもうせまほし今まてあるしの繪にかける女をみてさへいたつらに心をうこかせしにこれや誠にせうのものをせうて見たりし諸見物僧正遍昭から五節句をとり祇王祇女の眞中へ佛の來迎し給ふかことし長歌いと竹つゝみやうのものみな世中のゑらみを盡したれは梁の塵もちり容行雲も闇雲となりひたのみにのみたゝくひ無遠慮に腹打たゝき方外

にロうちたゝく門松の葉の散うせすわかさりのわら
長き夜のとはのねふりのさめやらて千秋樂をやうた
ひけん萬歳樂をそかなてけん一向醉てゑらすかし

天あきらき四つのとし三月廿五日

深川八幡宮山ひらきに碑たてゝ

みちのくもわすゝる、春の山ひらき
　あそへや思ふつほの石文

素砲柿色映朝曦、　帽子紫霞引棹姫、
春夏秋冬四番續、　一番目暮欲明時、

吉原細見序

になよし原の里は、大江戸の北にあり、壱は五つに
わかれ、堤は八町にさつく、花は千本を根こきにし
て、中の町の鉢植とし、月は最中を煎餅にして、き
の字屋の松陰に見る、雪はもとより豐年の貢物より
居つゝけの、馴染の茶屋のおくり物、旨いかな〳〵、
京大坂も支那天竺も、みなぬか星のかすくらひ、こ
の北辰にむかはさらめや、

天あきらき七ッのとし丁未初春

一休和尚の畫かける烏扇のかたをうつして歌よ
めといひけれは

扇面になかぬ鳥の聲を見れは
　生れぬ前の大德寺なり

狂歌師細見跋

二葉の松の色よくて、三かい松は若菜集、その山か
たをかうへにめし、筆のあや入るたちいれに、萬載
集をあしたにはき、寶の昔に今名寄の數、葉ゆく狂
歌の名主にかそへ、五葉の松にこし付しは、蔦屋のあ
やまる蓍屋の想、是そ正直高名の、殘りあらさる自
慢のはな、花のお江戸の大先生、赤良菅江へ斷りな
く、木あみ橘州にいさゑらせす、ちとおしつよも、
よし原細見、此ふみ月にあら玉の、春のはしめの知
足摂、つくさぬ落葉をちよとかく、

寛政元年己酉春三月初八日　　不退位

悼東作翁、　東曲歌釋氏宗專信士

哭東寧山人俗名立松嘉樽東作

昔見西方云今歸長夜臺天無遺　老文自患多才笑
傲人間世歳寄有上若回思三千歳拾月數含盃

青葉集はし書

青山堂批把與、詩歌連誹青葉をあつめて一帖とし、
座右の玩ひものとせんと、さもこと〳〵しき赤表紙

に、こしの雪をもあさむくべき紙をかさねて、これがはし書せよといふ、この頃世中便利になりもてゆきて、三幅對の中尊の佛畫をぬき、手鑑のうちに明店多し、詩一首の横竪のもの、和歌懐紙短冊の臺表具、連誹の句々、書畫の數々、一々裱褙したらんには、蟲干もむつかしく、軸の落るに堪さるべし、故に此一帖を作りて、つゝれのにしき乞食仕立、七色茶漬の菜のことし、卓袱料理の臺のことく、箸のごとくに、筆とり給へといふ事しかなり

文かはるてふとしのはしめさつき十あまり九日遷喬樓の新居にしるす

新居古木倒崚嶒、　　　爛盡紅櫻至白藤、
黄鳥頻鳴幽澗竹、　　　誰携碁局就隣僧、

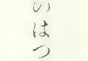
うくひす谷といふ處にやとりをもとめて
鶯の谷の戸ふかくさしこめて
ひとくといはゝなしとこたへん

棒歌撰三方をよめる
三ほうのすみきり角に八すみしる
君かよもぎの島をいたゝく

狂文棒歌撰懸合序

赤良 夫書圖の物を貌するや樂物既丹青より生し造化自然と筆端に上り今某人棒を圖して繪本とす、漢江つゝやゝそのかたちをかうかへ見るに首尾なくして能うごき筋肉なくして尤堅しされは貌ありといへとも眞を寫すことゑかも難し、赤いやゝ棒にもさまさまあり筋むねあるのは古牛蒡、漢目鼻を以て稱すべきは、赤おちよ坊、漢おかね坊、赤鬼にかねはうかなさいほう、漢首尾のあるのは、赤餘日坊、漢火防になるは三尺坊、赤通れといふは六尺棒、漢さけは棒にも手あり、赤うつ手といふはとちめんほう、漢鼓の音はたゝつほほう、赤切りかへ汁でむかへ酒四方赤良朱樂漢江つゐぞない二日醉中にゑかいふ

天明五巳のはつはる



才臧集序

かやふえうす才和歌なんどはとくわかに後萬載萬載集のふた歌をざれ歌のてゝの椀として手ならふ人の大ざらひに朝もよひきばちもてさらひまくさかるかますもてかきこみたる筆のまめいしに丁銀灰ふきふ

き出すべきこかねのことばはうま人のとのさまも御すきにて玉たれのおくさまも御すきなる世にしあれはみかまの前のやいつこまてみそひともしの數の子をくひはさみあやしのゑつか手すさにも手にをは漬の味になん心をきさみけるかくてぞ花をもきり月にうかれ雪をころはすこゝろことばさまノヽによみ出せる名歌がまいるはノヽ名歌にして春夏秋冬戀雜の期をわかてともかの才若ふくろの中にたつくりとよねのまじれるがことくこまやかについでをもわかたず天あけまして七のとし元日のあしたより狂歌の門かきりゝノヽきりゝてうとひとけたる卷を名つけてさいわかしふといふ風月の才はさらにもいはし味噌鹽のさえてまてもかしこき四方のまめびとをまちやらこにこちふく風たが門の大夫どのも萬さいらくをうたはさらめやも

としのはしめによめる

あら玉のとしのはしめに筆とりて
よろつの寶かきそあつむる

若菜

春日野の飛火のともり出てみよ
いゝいくかありてわゝわかなつまん

柳

抱ついてみれとたはいはなかりけり
庭のやなきのほそきこしもと

江春曙

あけほのは大江千里春のよの
おほろ月夜にゑくものそなき

春雨

春雨のほそきうみとにくらふれは
ふしたらけなる青柳の原

初花

立春より七十五日生のひて
また初物の花を見るかな

花發多風雨

世の中は痛氣に頭痛雨に風
花見の幕をはるそすくなき

欵冬

山吹のはなかみはかり金いれに
みのひとつだになきそかなしき

櫻草

みてのみや人にかたらん櫻草
　ねことにほりてわらつとにせん

ちれはこそとはいふらめゝちらぬ間こそ
　いととめてたき櫻さうなれ

牡丹

十日つゝ春と夏とに咲わけし
　花やとちゝの色ふかみ草

灌佛

みほとけに産湯かけたか郭公
　天上天下たつたひとこゑ

盆踊

子は忘らぬ親の心の染ゆかた
　盆前むねのおとる思ひを

吉原燈籠

神棚にあかしの上ミ燈籠の
　光源氏を待合の辻

かつしかのほとり萩寺にて

萩寺の萩の夕くれ來て見れは
　入江町のかねに露てちりける

月前枝豆

枝ふりも桂おとことまめ男
　いつれ風月の才はしけたり

はまへ黒人車井長綱高羽子おとりなどゝもなひて鼠山に茸狩にまかりしに雨にあひて

初たけのやふれかさをもとりあへす
　ふりくる雨にぬれねすみ山

時雨

木末まて坊主にせんと月代を
　ひともみもみて時雨ふるらし

炭竈

朝夕の烟はかくと角大の
　忘るしも忘るき熊野炭かま

旅宿

朝もよひきちんとまりの出立は
　心のこんのともし火もなし

天明よつのとし五月雨の頃市ヶ谷のまちのおき嶋田氏身まかりしときゝてよみつかはしける

この島田氏安永こゝのとし寶合となんいへるたはふれをなせしとき新上懸候とたはれ名をつき侍りき新撰狂歌集なとに見えたる昔はしらす今の狂名はその頃よりよひ侍し

嶋田ならせめて三日もとまれかし

涙の雨のふる大井川

寄富士山祝

春秋にとむさふらひの山なれは
いつもはたちの心地こそすれ

ある人八十八の賀に松によする祝といふこと
を

いつまても中からよみて若かへれ
八十八の首尾の松のは

末廣といへる能狂言を見侍りて

末廣の御代にあふきとからかさは
五風十雨の時をさゝうよ

忘戀

ねかはくは君が小指の輪となりて
朝な夕なに思ひ出させん

寄鷹逢戀

あいぬれは何か去らふのおもしろし
これやとつたかみたかなるらん

寄萬歳戀

かはるなよみろく十年たつのとし
墓碑のたてしはかひなりせは

龜

萬代の池の玉藻の蔭をも
汀の龜の甲にいたゝく

にゐよしはらの里丁字樓遊女唐琴とかやらか
かける松の爲に

からことの手にかきならす峰の松
いつれのをよりかよふ神風

去はすの末北風はけしき日、淺草でらのうしろなる、田のかたはらに、むしろきたるかたひのやめるとみへて、うゝとうめくに、あしとらせなどして、ふところにおさめし萬金丹といへる藥とりでゝあたふるとて、

北風はけふはなふきそうえ人の
むしもかふれりこもゝかふれり

すくふへき力なけれはいたつらに
萬金丹をくれてこそゆけ

橘大夫元家葺屋町の芝居やすみて堺町にてみつ人形のわさをさしける時申つかはしける天明五のとしきさらきの頃なりけり

大入をみつ人形やひな箱の

ふたゝびとなき一世一代

芝居のかほみせの日花道つらねに暮をおくり
ける人々とをなしくよみてつかはしける

花道のつらねによもの夷うた

東 夷 南 蠻 北 狄 西 戎

北里扇末廣か柱かくしに東方か金馬門にかく
れんよりは北方の大門口に入に亥かしと書て

くれ竹のよを大門にさけきけん
心やすくもおきふしみ町

小傾城

菅こもの三ふにはおきや七ふには
をのかねさうのわろき新造

深川なる土師掻安のもとにて百物語のたはふ
れをせんとて舟にのりて油堀といふ所にいる
とてそのわたりに椀くらといへる所もあれは

川舟もいりつく皿の油ほり
鬼ひとくちに椀藏のうた

文月いさよひ加倍仲塗のむこかねのもとにを
の〳〵前赤壁の賦のことはわかちてうたよみ
けるとき滄海一粟の心を

むさしのゝ尾花のなみのまん中に
をみなへしのみたつた一本

臍穴寺禪師によみてつかはしける

咄臍の穴もり禪師物とはん
そも三寸のしたは如何に

不飲酒戒

はらわたをくたす藥そせんしやふ
つねのことくの生姜酒ても

七福神

正直のかうへをあけてなかむれは
七福神のいますがことし

大屋裏住ちいさくひきゝ家に神棚のありける
にともすれは人のかしらうつに心つけんとこ
の歌をかきておし置ける

ちはやふる神のまします棚なれは
たゝ正直のかうへうつなよ(裏住)

をなし心を

土一升金ふき町のたなちんも
高まか原に神とゝまりまします

神田祭みんとてよへより飯田町隅田中汲かも

とにあそひて
千早振神田まつりの宵なれは
　みなよをふかす強飯田まち
老女の懐舊
川水のなかれて年をふる婆々の
　むかし／＼のはなしせんたく
西上人の人にはくすの松原といへる言のはの
こゝろをかへして
世の中の人には時のきやう歌師と
　よはるゝ名こそをかしかりけれ
天地人一番戯場の心をよめる
久かたのあめやおこしにあらかねの
　土間はひとつの大芝居かな
郭公
初更にほ二三更とゝ四更にき
　五更にすつとあくる東のゝめ
水無月いさよひの夜何かしのいらつめの京の
ねをきゝて
親のかふこのさみせんは水無月の
　けふよりひける網のめてたく

まつ宵に上戸の光みせつけん
　あすは下戸のよもち月の影
九月十五夜
空色をそめなをしたはこくもちの
　よはのはれきのたけも長月
甘露門の豫修報恩講に柿の實をおくるとて
うへ置し國の柿崎たてまつる
　みのりの道は未熟なれとも
筆耕戀
人のためあたえをとりて物かけと
　たゝやる文はかくにかゝれす
かつへたる君にあはねは腹の蟲
　たゝくら／＼となくはかりなり
川
川といふものなかりせは塵あくた
　うみにはいかてかはき出さまし
山家
世をすくう山にいる人山にても
　御料私領のうちははなれし
比翼塚にて

小紫ひともとゆへに武藏野の
　くさの原とふなみた菜露〱

述懐
沈香はたゝ一炷もかかすして
　うき世をへのみひるそわびしき
短冊の折々かけるたはれ歌
　ちらさてこゝにみねの松風

文殿のはしらたてし日虹のみえ侍りければ
わか家のいろはしら立ひさかたの
　空にもにしをたゝてこそみれ

曲馬祝
慶長の大坂下り大曲馬
　おさまる御代をとつとほめたり

江戸川螢
江戸川の紫鯉もなつの夜に
　すたく螢のあけは簇はし

ちのなきものゝめのとのあたへ十日にさため
けるはつきの頃
かそふれは十日一歩も四日へぬ
　あすは南鐐一片の月

　うまこのめのともとむるとて
親の親子の子のやみにまよふ哉
　ちのなきものゝちをもとむとて
十あまり七のとしの夏の日に
　かへせよしのゝ葛のうら風

五十になりけるとし
うちいてゝまたいくはるかこゆるきの
　いそちにかへる浪のはつ花

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはその花も根にかへり月も山にかたふきぬ今此一卷をみれはけに花ならば花莚月ならは影法師いつれの年にかありけん　四方山人書

すさのおのみことか月代そり衣通姫か革羽織きてあまのうき橋のはしつめにいく百の八幡につくはふとも花のお江戸のゑべすうたよみいてん事かたかるへし今の世にたかる大人〱〱〱〱らは神も御存のなき事なるへし
寛政己未のとし皐月
醒中書
むかしの印

若菜
野邊に出るものと云るのみいつまても
うろ／＼としの若菜をそつむ

氷室
みな月のついたちの朝獻上は
榮耀に氷もちの皮かも

薄
一もとの薄を秋はほにあけて
十分にいろむさしのゝうみ

蘭
ひとのよるこゝのにたてる藤はかま
これや十番仕立なるらむ

鹿
もみちふみわけて入にし足跡は
さる丸ならぬ奥山の鹿

雪
王子猷戴安道か門前て
時宜してかへる雪のあけほの

神樂
姉様への岩戸這入に親類の
惣より合てあかす夜神樂

初逢戀
初物は七十五日とはいへと
逢夜は云ぬる心地こそすれ

曉
悠々と朝ゐしたるはまた出ぬ
日篇に堯の池の心持

旅
椎の葉にもるてふ旅の朝もよひ
きせんも拂子夜半をこめ代

夢
ねるもゆめさむるも夢の世の中に
うなされぬこそとりゑなりけれ

祝
竹の葉のさかなに鶴のはしたてん
鶴の吸物龜のなへやき

あら玉のやうなる日のわかみこのあれませるむつきのはしめこそ竹に雀の百になるまていそちの翁も小躍りするわさなれ思へはむかし月代の空青みたる比は抱てねのひのへ丁のらふそく沅瀾日夜ひんかしに

なかれてはやくたちまちにけふなんなくて七種のにほんのとりと唐土のとりわたらぬ先の聲きけはうまれぬ先の心地してみな大人の人の目なれはかのものゝへの翁のいへる牛天神は大人なるべし

富本のひと本ゆへにむさし野の
花はのこらすみなさくら草

天神のその山道のたゝひこに
よもの赤牛ひかれこそ來る

王羲之か十七日の手紙は唐つくえの上にあけられ光源氏の二の町は雨もりの腰張にすゝけたりかの顏氏か家にをしえけん尺牘書跡は千里の面目にて雲州消息三月庭訓ももとは錦帶のくしら帶これも去年の品川の噂五十の翁のくり言なるべしそのくりことはやめにして夕霧かふしのやまを張ぬきたらん文の數はいさしらすひかしてはかとらぬかほよ御前の用事にはあらぬ近頃世に名たゝる狂士醉客の書簡を一駄ほと馬蘭亭のあるしのあつめ置しを馬の屁の後序ともなれかしとてもえ杭に火のつきやすく古川に水たゑす筆をとれは物かゝれ盃をとれはいつてもかくのことし

八朔

この頃ふりつゝきたる雨にこよひの空いかゝならんと思ひ給へらるゝによへよりおほやけの事さへしけくて朝とく出なんとするにれいのもとより消そこ給はれりこよひの月いかゝみるともいふべき心はへなり

なかめやるちさとの外もかくはかり
くまなき秋の夜の月（脱字）

濱のきさこ序

ありそ海の濱のまさこと志るして、よむともつきぬことの葉を、かきあつめたる例にならひし、はまのきさごは何だんべい、べい〳〵ことはのよこなまれる、ひなふりうたの一トふしを、いちきはめのいちはやく、よみいでつべきたなこゝろの中の玉なるべし、その手のうらのゆびのまたより、落栗の莟にひめおけるを、石なごのひとつかみされ歌の場に、はしきいたせるにそ

天明三のとし春の日

萬載狂歌集

とくわかに、まんざい志ふとは、きみちさかへて、

ます／＼ごきげんあいきやうありけるあら玉の、としとるはしめにふてとりて、りしやうくんがたまの何々を、かうへにのせ、あやんがたちをはくやのきしんがかたなのこしおれにいたるまて、ゆつりはをくちにあちはひ、五葉の松を手に、もちろんよろつのたからかに、世にきこえたるくさ／＼の、ことのはかきあつめすといふことなし、一本のはしらは一花ひらけ、二本のはしらは二月三月三本の柱はさんふくのなつ、四本のはしらは新秋の天、五本のはしらは梧桐のつゆ、六本のはしらはむつのはな、七本の柱はなこりをおしみ、八本のはしらはやま川をこえ、九本のはしらは九相をかなしみ、十本の柱は十かへりをいはひ、十一本十二本の柱は十一十二のふたつもし、うしのつのもしこすいもし、十三本十四本の柱は、十三なゝつなにことによらす、十四まち／＼とり／＼のうた、十五本の柱は三五の十八短歌の句々、旋頭おり句廻文の歌、十六本の柱はいさよふ心の月を觀し、十七本のはしらはたちまち神祇の歌となれり、あはせて七百あまりの歌十七の營柱かの三神のまもり神、ゐいやつとおつたてたれは雨かふれともかみくちす、風かふいてもふきちらす、日はてるともほしみせにいてず、むしはくふとも反古にならず、かく古つゝみうちおはりぬれは、これからそろ／＼まちやらこの、この／＼すゐにもよみつたへかたりつたへ、あそこゝからきゝてかまいるは、かいてかまいるは、まいるは／＼まいらざらめやもさくらあめあきらかなる寶引の、なはもひとふたみつのとし、はるのはしめのうらゝかなる、四方の赤良しるす

はるのはしめに

くれ竹の世の人なみに松たてゝ
　やふれ障子を春は來にけり

小むすめのはねつくを見て

はこの子のひとこにふたこ見わたせは
　よめ御にいつかならん娘子

吉原花

吉原の夜見世をはるの夕くれは
　入相の鐘に花やさくらん

惜花

咲花のかへる根付の琥珀にも

なりて木かけの塵をすははや

曲水宴

盃のうらむ趣向にまかせたる
狂歌は何の曲水もなし

雲雀

舞ひ雲雀籠の鳥屋か手に落て
かふ直も高くあかりこそすれ

放屁百首歌の中に款冬

七へ八へへをこき井手の山吹の
みのひとつたに出ぬそきよけれ

何かしの庭に花たちはなのさかりなるを見侍りしにもとは禁庭の右のつかさのたねなるよしをきゝて

百敷のみはしのもとのたち花を
やしきのうちにけふみつる哉

放屁百首歌の中に瞿麥

今朝みれはいつしかよへをひりおきて
いとゝねくさき床夏の花

同　蚊遣火

あつかやのかやりをふすへこく時は
ふゝとなくかのよりもつかれす

盂蘭盆

かけ乞のみるめかくはなうるさくて
人に忍ふのうら盆もかな

女郎花

をみなへし目もさかの野にたつた今
僧正さんか落なさんした

相撲

秋の野の錦のまはしすまひ草
所せきわき小むすびの露

蟲

秋の夜の長さにはらのさひしさは
たゝぐう／＼と蟲のねそする

十六夜月

夕霧のまよひもいまた晴やみて
いてし廓屋のいさよひの月

浦月

芝浦の漁人も網をうちわすれ
月にはいとふ鰯くも哉

月前風

醉さめの心もつきの榛さきに
　風のかけたるひとつ物かな

十三夜月

十三てはつかりはれし空われに
　月のさはりの雲もかゝらす

おなしくかの衣楯渕のもとにて謠曲二番を題にて月の歌よみける時田村を

あれをみよふしきやなくゐおほ空に
　ひとたびはなつ千々の月影

十三夜醉月樓にて二人の白拍子の三すちのいとひきけるをきゝてよめるそのふたりの名は千代やちとせとなんいひける

十日あまりみすぢの絲も長月の
　けふの月見は千代にやちとせ

歳暮

ねかはくはとふり下形をうちわすれ
　歸へかへらん年のお關所

刀鍛冶の歳をかたるをきゝてよみてつかはしける

のぼりては又きく事もかたな鍛冶
らい國としを待て久しき

卯月の頃へつゝ東作かたびたちける時梅櫻松のゑをおくるとて

最明寺ときならぬ雪の鉢の木を
　やせたるむまのはなむけとみよ

大根太木か周忌に寄柏餅懐舊といふことをひと／＼よみ侍りけるに

ひきうすのひとまはりにもなりにけり
　過しむかしのなつかしは餅

待戀

たゝみ算おきてまつ夜はいたつらに
　あふみ表のうらかたそうき

逢戀

煩惱の犬もあらけは朧夜の
　ほう／＼眉にあふそうれしき

別戀

おさらはといひしことはか耳のそこに
　のこりおほさよあかつきの空

不遇戀

まち針はたてなからこそくちにけれ

身せはの小袖まへあはしとや

ある人新吉原ゑひ屋の遊女ゑひらのもとにかよふときゝて

ゑひやなるゑひらの梅の枝おりて
盃と暮とに二度のかけとり

色男

女郎花なまめきたてる前よりも
うしろめたしや藤はかま腰

寄火入戀

きゆるまて思ひいれてもあふ事は
猶かた炭のいけるかひなし

肖柏老人の讃

一日に一巻つゝの古今集
花のもとにて傳授しやうはく

述懐

いたつらに過る月日もおもしろし
花見てばかりくらされぬ世は

ある人品川に遊びて痳症をうれへ候事ときゝて

行やうてとまるゑきろの鈴口の
ゑんにふれてやりんとなるらん

花道のつらねのもとにて神並周全といへるくすしにあひ侍りしか狂歌の名をこひ侍りけるに折ふし雨ふきりふりけるをみて風早のふり出しとやよふへきとあるしのたはふれければ

風早のふり出す雨のおやみなく
はやるは君か福の神並

足駄の商人

世わたりのやすきもよしや難波江の
あしたのひとはいゝるゝはかりは

農業の心をよめと人のいひければ

おとにきゝめにみいりよき出來秋は
たみもゆたかにいちかさかへた

むさしの國羅漢寺にあらたに右繞三匝の堂をたてゝ百の觀音さつたを安置せしかその堂ののほりはしさゝえにたれは人みな榮螺堂とよひ侍りしを

觀音に魚藍もあれはなまくさき
榮螺堂とはいいはしにた鍋

放屁百首の歌の中に

おろかなる人はぶつとも放屁とも
　しらではかなき世をやへひらん

三めくり稲荷社奉納に神祇

みめくりに早苗とりゐの乙女子が
　かさきそ夏のしるしなりける

むさしの國目黒大鳥明神にて

此神にぬさをも鳥の名にしおはゝ
　さそ大きなるかごありぬべし

夫德若五萬載稱君茂榮而在馬尉殿三番叟祝我等千秋將侍故鳴鼓之謠毎年之福大夫而振鈴之舞今月之御祈精也吾百年始探李少君之玉不可得古鐵店端三日無借之錢不可入貫白之紙屑籠隨拾隨滿神馬之藻鹽草以書以集昔忘串柿之木盡遊攄栗之下發日詠歌繁於五葉之松湧勝笑語甚於大福之茶益七百餘首爲卷十七爲類十二一曰春二曰夏三曰秋四曰冬五曰離別六曰羇旅七曰哀傷八曰賀九曰戀十曰雜十一曰釋教十二曰神祇假行已成卷數維新虎鬟蒲殿之雨不濕寸紙風吹勿吹之風不散一枝長不乘御原縫幸兔爲淺草紙隨武藏野之末寶通於四里四方因宣波由之御蔭滿于八百八町識日出度候萬載々々萬々載云爾時天明三年歳次癸卯

徳和歌後萬載集序

すはらやいたのみことをうけあひていかゐたはれ歌をゑらふことをとゝしのくれのせはしき頃よりはしめて夏の日のなかきことしにをはれりいはゆる古今後撰の曲の集のみにあらす堀川百首になすらへてよみつらねたるためしをかしといひ馬鹿といひその名おほくきこゆれとこの頃のやうにはやりて芸くひそうすともかうまこたはれたる名をつき侍ることはなほまれなり口あひのかしこきもしきかもりの席なとにのそみて地口ましりのかたことを御祝儀にのべたるなんひと通りはありけるをかるにわかきみもさかへてましんますまんさいゐふをゑらひしよりこのかたことせはかりの春秋四方の赤のみかけ山のむらからすあけら館まるのゝ字のことくまとゐあへり落栗の落こほれをひらひはなたちばなの香をかき出し侍りさ濱邊の宿市さうにきはひ都下の歌角力またさかりなりたゝ遠慮會釋のむかし人すくなく會ゐつかによりあひしをもかけをゐたふのみにあらすまた杓子定規のいま世のはやり人ぞやめきのゐまつのはをゐらしめむためことさらにかきちらすものならし赤

良さかつきの數つもりあしもとのよゝとよろけなゝくせのなくてやますふたゝひのゑらひをはしめて衣もの何をゝてかみをとひかみのくをうけて衣もをたつぬるやうになりてふつか醉のあとをひきすゞりぶたののこりをあらすへきはしのひま〳〵春つばき夏はゑのきに秋ひさき冬ひはうきにをなしき歌をはしめてはなむけたひたちくやみよろこひれんほれゝちの色いろあつめたやたふのこと〳〵氣のよい爺のかほをなてせつない時の神たゝきにいたるまて部をとりまきをたばねて森の木のはの數々に心のたけ帶はきあつむるよしみろく十年辰のとしきのふとたつたる春のはしめこれをひろむ名つけて德和歌後萬載集とやらかす事しかり

旅路卯花

たひ人も笠ぬきて見よ花の名の
卯のとき雨にぬるゝ垣根を

いかなりけるとしのくれにか

金はありかけもふらふて皆巨燧
ところ〳〵ねいりつかんとしの夜

雲樂齋いもうと身まかりけるときゝて

はかなしやあのよ十萬おくさゝに
ならんとてしもおこし入とは

放屁百首の中に

山里に衣りこみしつゝ入しより
うき世の事は屁とも思はす

何かしの大守下着にもろ人の狂歌をかゝしめて狂歌衣と名つけ給ひしにその衣のそひらに花信齋の畫して猿を書たるを見て

俳諧の猿の小簑もこの頃は
狂歌衣をほしけなりけり

雨のあした捨子を見侍りて

子をすつるやふしもわかぬくらき夜に
涙の雨やふのをつゝきけり

老子

桃栗は三年柿は八年の
中にすもゝは八千とせのはる

莊子

莊周も猫におはれてうなされん
胡蝶となりし春の日の夢

列子

追風にのりゆく時は道中の
　くものあしよりはやき駕舁

唐堯

おふたりの娘にひとり聟養子
　土階三尺こぬか三合

伯牙

鍾子期にわかれし時のおなくしは
　琴をかついゝで山や過けん

陶淵明

世のうきを柳にそらせてきかせかきの
　きくとひとしくかへんなんいさ

褒姒

おめかけのやかたゝ風をきる頃は
　船のほゝゑむ花火見物

楊貴妃

空たきの沈香亭の全盛も
　あはれ馬嵬か原のひとつ屁

赤壁

文月の文とやかよふ神無月
　うらをかへして遊ふ赤壁

函谷關

にはとりの宵鳥もほと過し頃
　棒ちぎりけんせきに關守

よし野の山の繪に

むかしたれかゝる狂歌のたねをまきて
　吉野の花もちりになしけん

阿那か師古わかすかたをゑかゝしめて歌を乞ければ

鏡にも見ゑりこしなるわかすがた
　お目にかゝるもひさしふりなり

達摩

庭前のかしはもちにやねもしなん
　蘆の一葉の舟の小蒲團

狂言鶯蛙集　故還馬鹿集一名

夫鳴花鶯笛發谷後之音棲水蛙囊人愚身之思茲自古金以至文金歲過盧言八百貫時餘小判六十目茶飯月飲狂歌日盛自貓撫聲之婆樣至杓子顏之飯焚者莫不叫啓目而詠夷曲者其交於人丸赤人之歌膝中不於出雲間雲之垣根外無喜無悲不遺不逃嗟乎盛哉抑狂歌之濫觴者起自水無瀨之御時且有心無心之體分柿本栗本之連自是

來其流非一浪華有貞柳木端江戸有未得卜養大底所詠膾炙人口又近有大根太木者狂歌骨髓之好也身在市中心慕雲上太木既沒狂歌益盛坐上滑稽欺西王母之息子株言下大笑失周褒姒之無人和一日狂士集朱樂館飲酒撰歌偶閲古今之一集更吟歌仙之六評馬場子有蛙鳴池端之什鹿都部傳鶯在水底之篇主人摘二子之姓字名曰古今馬鹿集或難之曰抑古今集者二十一代之開山和歌三神之鎮座僭踰之罪無所逃也於是主人酒力醒茶談欲改曰狂言鶯蛙集然則法々華經之聲洋々盈耳一寸二寸之足飂飂離水始于六人歌仙之題終于四季戀雜之歌勒爲廿卷以傳四方固賓引之繩不撰庶分銅之玉有光于時天明四年歳次甲辰極月幾望因丸乃字之假字綴眞名振之後序云爾

春たちける日よめる

元日の麻上下にふるのしめ
　さつと世間を春は來にけり

彼岸櫻

山寺の彼岸參にくる珠數は
　ゑたれし櫻の花の長房

彌生十八日西ヶ原といふところにてふかみ草のさかりなるを見侍りて

十分に花は咲けり三月の
　廿日草には二日たらねと

春の歌とて

酒のみつ花を詠めついたつらに
　すくる月日は一日もなし

船夕立

船の帆のはらめる風の夕立の
　雲のはやめやふり出しけん

三日月

網のめをもれ出る影はをのつから
　つりはりほとにみゆる三日月

品川月

すむ月の光はこゝの品川の
　臺にのほる大佛のまへ

寄羊戀

あかつきのかねにちぬれる誓詞さへ
　うしや羊にかへられし身は

はつきの二十日あまり四日普栗釣方か一周忌に

一めくりてめくりてみれと今は世に
　ふりちくふくりなきそかなしき

龜

よろつ代もくむ酒龜の尾をひかん
　醉ては泥のことくなるとも

寄玉子釋教

わしの山いてにし人は世の中を
　ことくく我玉子とや思ふ

九郎助稲荷奉納豊年初午

豊年をうかのみたまの祭とて
　田のくろ助もゆつる君か代

蓼太集序

和歌國詩也、變而爲連歌、爲俳諧歌、其猶詩變而爲騷賦、爲律絶乎、時有汙隆、辭有長短、俗有正變、節有緩急、體裁雖異其情一耳、東都蓼太以善俳諧歌聞于世、門生寓于崎陽、以蓼太所著一章示之清人程劍南、程賦一絶以寫其意、且手書以遺焉、時人艶稱之、丁酉季夏蓼太載酒顧余牛門、請序其集、余與之對酌頽然而醉、作而嘆曰、有是哉、昔者晁卿與唐人唱酬明人著日本風土記載和歌數篇、然則彼知我有詩有和歌矣、蓋未知有連歌也、而況俳諧歌乎、知有俳諧歌者乃自蓼太始、今觀此集、著作大富、重以示清人、則彼五言長城殆將失墨守矣、蓋我日出之邦升平百五十年煥乎文教洋溢海内、此事雖小可以觀餘波矣、彼以其詩、我以吾歌、各稱盛耳哉、是爲序。

安永丁酉六月南畝子序

題詩經標解首

有章句焉有訓詁焉諷詠涵濡以意逆志則惡用是喃々者爲哉亦唯彼此異音言語費解隔靴搔痒賢於袖手嚼飯與人亦以療飢況僻邑寒鄉獨學固陋欲問無師欲講無官是喃々者可以當鼎來矣不知解頤者能逆其志否聞宇翁歳過古稀著書不倦不亦健乎書賈樂地堂持刻本來請一言漫題而返之

享和改元春日　杏華園主人書

巴人集　終

巴人集拾遺

八十八の賀を年の數に合せて祝するとて

先八の字の貴ふとさは、先神國は八百萬神をはしめ、八百乙女八多の鏡と八劔も、皆神體となりにけり、釋曆の始は八將軍、扨佛法は八葉の蓮華を用ゆ、釋尊も八千度の往來に、八相成道し給ひて、八萬四千の法をとき、八千禍緊に入給ふ、宗門を八宗に開き、極樂世界は八功德、法華の數も八の卷、中の龍女も八歳なり、儒道は八條目八脩して庭に舞ふ、易の上には八卦を定め、八八六十四てわれは八世に傳へ、八にて拂ふか梅花の敎へ、詩は八句にて律となり、歌道は八雲八重垣より八代集を撰ふ、連歌の表も八句なり、音樂に八聲をわけ、笛は八ッ目の歌口あり、兜にはまた八ッ頭、青龍刀に張飛か蛇棒も丈八にて、八島は義經八艘飛、辨慶長刀合て八尺あり、弓の譽は爲朝にて名も八郎と申なり、馬に大坪八條あり、兵法つかひは八方に目を配るの敎あり、山は富士のいたゝきを八葉の峰といひ、海には八大龍王あり、島には八十島、川には八十瀬、雪は八景の一つなり、霜は八十八夜に別れ、雨は八專と降つゝき、塔は八坂の名も高く、橋は八橋聞ゆなり、黑木は八瀬に引續き、並ふ芝居は河岸八町、其船つきに八軒屋、伊勢に八十の末社あり、備ふる神酒も八分目、吉野へ行は山伏のときんのひだも八ッあり、金剛杖も八角にて、小夜の中山八から鉦、箱根八里は馬士の八藏か口すさみ、八棟造りは外郎廓、江戸は八百八町にて、土手八町の繁昌は大門口の女郎の歩行も八文字、品川には八ッ山あり、深川には八幡宮、女盛は二八にて鬼も十八たのみあり、さる女房か口八町に手八町、娘ひとりに婿八人、小僧は天狗か八人附、座頭の藝も八人藝、大根おろしは八人前、衣類は八丈八反かけ、竹は八月伐とかや、蜜柑も八代八屋柿にて、又諺に柿八年、魚に八ッ目の鱣あり、鳥に八聲を鳴といふ、八千八聲は時鳥、雁は八百噓八百、猫に八ッ乳か有といふ、めつた屋八に鳴神は、八八八と響くなり、

郭公

みな人の聽耳たてるかと〱を

ほと／＼ときすおとつれてたく
月夜の郭公
傾城は晗を月夜のほとゝきす
夕邊も啼て客をかけたか
等思兩人戀
片身つゝわけし思ひの中おちは
とれか鰹の骨つきもなし
蚊屋
世の中に置まじ物は蚊屋の質
外て利がくふ内で蚊が喰ふ
家運長久を壽ふきて
笹たて草履に炙はすゆるとも
千秋萬歳家は長しり
今日はしめて御屋敷へ召呼れ有難さの餘に
嬉しさは袖や袂につゝむかな
おくみの下にたてる身はゝは
七十の賀に七の福ある神の御名によそへて
我家の大黑柱ねつみ壁
こつちもつけて祝ふ神棚
四谷竹町の新宅を祝ふとて
ところから四谷丸太の床柱
懸し畢縮の竹町の宿
天明三ッのとし信濃なる淺間山燒し時
淺間さんなせそのやうにやけなんす
いわふ／＼かつもり／＼て
酒
酒のめはいつも慈童の心にて
七百歳も生れとぞおもふ
酒も父のまねは須磨の浦淋し
過くれはあかし聲は高砂
御多福の壽
いつ見ても鼻高からすにこ／＼と
美人にまさる御多福の顔
色と酒
世の中は色と酒とか敵なり
どふぞ敵にめぐりあいたい
德利の自畫讃に
酒無量ときこえし聖人は上戸歟酒は三十六失といひ
し佛は下戸なるべし
用ありともはやく起る事なかれひまありとも

みたりに動くことなかれ金は戀の山にすて玉
は酒の淵になくべし
おのれやれ富貴になさておくへきか
貧乏神のつけをそむかは
これは貧窮の神人にかゝりて告け給ふみことはなら
ひに御歌となん
寛政庚申の年竹橋の内府にありし書記を改む
べしとの命ありけるか五月のころ雨晴れさり
けるとき
五月雨の日も竹橋の反古しらべ
けふもふるちやうあすもふるちやう
曉の鐘
湯にもなる物とは聞けとほん惱の
よこれを洗ふあかつきのかね
風鈴
風鈴も風にまかする身なれとも
錢かなくてはならぬ世の中
煎餅
こんとんの形に似たる煎餅の
見はてぬ夢の寐覺にそ喰ふ

いかづち
此神は伊勢のつぼやの多葉粉入
ふるなかひかる強い神なり
雨乞小町
さりとてはまた斷も言ひ惡し
小野の小町の雨の御無心
疱瘡病めるを
ほうそうをかるくするかの請合は
三國一の山をあけたり
題不知
目に青葉耳に鐵砲ほとゝきす
松魚はいまだ山にのほらす
蘇鐵の畫の賛
大きなる蘇鐵じやさかい妙國寺
文珠四郎の多きかな賛
いさりの車に乘たるを童のひく畫賛に
小栗かと見れば照手の姫もなく
おとしもすこしふけし腰ぬけ
文化戊辰の六月雑劇の小肌小平次か百年忌な
りとて本所囘向院にて施餓鬼ありしに人々群

集しける時

押す人はひきもきらすのすしなれや
　けふの施餓鬼は小はた小平次

弗子自畫讃

逢佛殺佛逢祖殺祖逢弗子殺弗子逢蚊屋殺蚊屋過八箇
月始得解脫

　前大德利蜀山和尚

花屋六兵衞といへるもの丶六十一の賀に

百歳のうちを六十一ひけは
　三十九しやもの花屋六兵衞

題於多福畫

善女不如惡女情。無嫌自滿與三平。於龜於德於多福。
悉是福壽延命名。

三番叟

何事も三番叟こそ大事なれ
　大事をふめはよろこびありや

團扇

つかわれて骨は折れても腹立な
　うちわと聞は他人てはなし

達磨の贊

やよ達磨ちとこちらむけ世の中は
　月雪花と酒とさみせん

竹の子

竹の子のその物の子のもの丶子の
　にこ〳〵いまた茂るめてたき

堪忍

韓心にあらねととかく堪忍は
　さてこそ人のまたくらにあり

猿

木末から猿か三疋さんさかり
　其あいの手は手々と手と手と

鹿

秋の野の錦の床に二人寐て
　なにを不足に鹿の啼らん

一家和合

樂しみは春の櫻に秋の月
　夫婦中よふ三度喰ふめし

鶴の贊

千年も〳〵着てきれぬのは
　さて德用な鶴の羽衣

三叉江上人如鮓四季花中魚躍淵

みたりに動くことなかれ金は戀の山にすて玉は酒の淵になくべし
おのれやれ富貴になさておくへきか
　貧乏神のつけをそむかは
これは貧窮の神人にかゝりて告け給ふみことはならひに御歌となん
　寛政庚申の年竹橋の内府にありし書記を改むべしとの命ありけるか五月のころ雨晴れさりけるとき
五月雨の日も竹橋の反古しらべ
　けふもふるちやうあすもふるちやう
　　曉の鐘
湯にもなる物とは聞けとほん惱の
　よこれを洗ふあかつきのかね
　　風鈴
風鈴も風にまかする身なれとも
　錢かなくてはならぬ世の中
　　煎餅
こんとんの形に似たる煎餅の
　見はてぬ夢の寐覺にそ喰ふ

　　いかづち
此神は伊勢のつぼやの多葉粉入
　ふるなかひかる強い神なり
　　雨乞小町
さりとてはまた斷も言ひ惡し
　小野の小町の雨の御無心
　　疱瘡病めるを
ほうそうをかるくするかの請合は
　三國一の山をあけたり
　　題不知
目に靑葉耳に鐵砲ほとゝきす
　松魚はいまだ山にのほらす
　　蘇鐵の畵の賛
大きなる蘇鐵じやさかい妙國寺
　文珠四郎の多きかな龔
いさりの車に乘たるを童のひく畵賛に
小栗かと見れは照手の姫もなく
　おとしもすこしふけし腰ぬけ
　文化戊辰の六月雜劇の小肌小平次か百年忌なりとて本所回向院にて施餓鬼ありしに人々群

集しける時
押す人はひきもきらすのすしなれや
けふの施餓鬼は小はた小平次

弗子自壽讃
逢佛殺佛逢祖殺祖逢弗子殺弗子逢蚊屋殺蚊屋過八箇月始得解脱
前大德利蜀山和尚

花屋六兵衛といへるものゝ六十一の賀に
百歳のうちを六十一ひけは
三十九しやもの花屋六兵衛

題於多福畫
善女不如惡女情。無嫌自滿與三平。於龜於德於多福。悉是福壽延命名。

三番叟
何事も三番叟こそ大事なれ
大事をふめはよろこびありや

團扇
つかわれて骨は折れても腹立な
うちわと聞は他人てはなし

達磨の贊
やよ達磨ちとこちらむけ世の中は
月雪花と酒とさみせん

竹の子
竹の子のその物の子のものゝ子の
にこ〳〵いまた茂るめてたき

堪忍
韓心にあらねととかく堪忍は
さてこゝそ人のまたくらにあり

猿
木末から猿か三疋さんさかり
其あいの手は手々と手と手と

鹿
秋の野の錦の床に二人寐て
なにを不足に鹿の啼らん

一家和合
樂しみは春の櫻に秋の月
夫婦中よふ三度喰ふめし

鶴の贊
千年も〳〵着てきれぬのは
さて德用な鶴の羽衣

三叉江上人如鮓四季庵中魚躍淵

涼舟こゝをせんとゝ漕よせよ
あつさも中洲月の三また

日本橋月
二千里の海山かけてゆく月を
いてたる是の日本橋より

琴の音を聞て
行儀よくならふ琴柱の落雁に
かよふ下菓子の峰の松風

雀來りてこれを笑ふ其智には及ふへし木兎居
なから是をひく其愚にはおよふへからす
小鳥とも笑はゝわらへ大かたの
うき世のことは聞ぬみゝつく

車留
はやり風引こもりたる車留
御用の外の人は通さす

竹の子の畫に題して
竹の子のまた竹の子の竹の子の
子の子のすゑもさかへ久しき

天明五ツのとし水無月より嵯峨の釋迦本所回
向院にて開帳ありし比日數を經るといへとも
雨降さりけれは
都から三國一の客か來て
けふもふるまいあすもふるまい

龜萬年友
萬年とかきれる龜も尾の長き
ともにひかれて億兆やへん

人間萬事西行猫
此猫は何文目ほとあろうとは
かけてもいはぬ圓位上人

一とせ童謠にいひし事をよめるとて
朝夕にきつゝさせもせさせもせの
させもか露の命なるらん

初茸の畫賛に
秋の田の刈穗の菴のうたかるた
手もとにありて知れぬたけ狩

朝顔
夕べ見し川の花火にくらふれは
さかり久しき庭の朝顔

題不知
月影もこよひはすまのうら波に

かけてやしのふ夕顔の宿

堺町の雪

評判はよそからつもる雪操
あたりはつれの堺町かな

炭

曉の炭かき起す辻番の
じやうになるまて老にけるかな

歳暮

金銀のなくてつまらぬ年の暮
なんと將棊のあたまかく飛車

同しく

雪もなし又雨もなく火事もなし
錢さへあればよい年の暮

松飾の自畫讃に

雜煮屠蘇牛房數の子座禪豆
いつくもおなし春の御祝儀

癸酉の春歳旦

童子まみゆ門人まとふ老はれは
六十五歳ともにいひかたし

甲戌の春

大つこもりの裝束榎に狐火見んといひ、洲崎の朝日を七つ起して拜さんといひ、元日の翁わたし、二日は茶屋にゐの日の約束もありましことにて、年禮の膝栗毛にむちうち、日備のかみの諸太夫を召連て、大きな玄關の上り下りに、二日三日の光陰を費しぬ、もいくつねて正月とおもひし幼心には、よほとおもしろき物なりしか、今は節分の豆も片手に餘り、松の下も度々くゞりて、鏡餅には齒もたゝず、金平牛房は見たはかりなり、ましても酒と肴には惡まれす、一盃の酒に憂きをわすれ、一椀の吸物に吝をうつて、二挺鼓の音をおもひ、三絃枕の昔を忍ふ、やみなん／＼わか十にあまりぬ頃は、詩は李杜か腹をゑくり、文は韓柳か金玉をつかまんとせしも、郷里の小兒に腰骨折られ、世俗の塵埃に目口を塞きて、いつしか白髮三千丈、かくのごときの老父となりぬ、狂歌はかりはいひ立の一藝にして、王侯大人の掛物をよこし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童も扇を出し、猫引藝者もうら皮を願ふ、わさおき人の羽織に染られ、女のはれきぬにもそこはかとなく書散しぬ、これや吉書はしめともいふなるべし

詩は五山役者は杜若似和嘉の口
藝者は御勝料理八百善

○

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかと、ならひか岡のすねものはいへれと、花は立春より七十五日、月は三五夜中の新月、後の月もまためでたし、雪は豊年の貢物といへと、つめたくあとくさらかしもうるさしと、明阿頓佛は申されき、けにふるとこも若菜の價、百文にならぬほとこそ門田もる犬もよろこふへけれ、

庚午のとしきさらきの頃

猿の諺に

面白い事をも見ざる聞さるは
櫻を花といわさるの智恵

夜櫻

夜の櫻見て戻りしを女房に
いゝわけくさき袖のうつり香

花

春の夜のたゝ一時を千金に
かへましものを花か三文

子の日

子の日する野邊に小松のなかりせは
千代のためしに竹ても引へい

無題

みやこへはかすみにこめて小男鹿も
たゝすみぬへき春の山里

白山の梅を見て

去年ことし降つむ雪にあやかりて
あくまて花を見るよしもかな

題しれす

蠶着せ米をくはせて花までも
見よと造化のいかい御造作

大抵御覧序

東西〳〵是なるは當世花のお江戸の三景大抵御覧あられませう最初かき置ましたるは三橋亭と名に高き今をさかりの今戸のおり殿次なるは中洲の景色見せ物芝居あづま風呂すみ屋四季庵水茶屋のかけ行燈に火を點じますれば夜分のていとかはりまする次なるは高田水いなりに落髪をうづめてきづきたる三千丈の新富士てうと合て三箇の勝地相違あらざる白金の

實景首尾ようまいりますならば作者は喜悦の思ひをのべ本屋は多くの金をのべおばゝ氣をのべ腰をのべヨウイのばしてにならゑやんゑよと口三味線にのするはたそ
朱樂館公の御館にて味噌鹽の世話までやく四方赤良お釜の前にどつさりと序す

本町文醉序

江戸之大也四里四方市井之夥也八百八町其町之第一者名曰本町腹唐秋人居焉所謂以十升換金一升之地也唯秋人忘地代之高好夷曲之卑亦作狂詩以兼和漢掛硯在右帳面在左筆端縱横出入金銀何何連算盤珠字字括眞田紐自是吾門正札附可謂現金無懸直矣因名曰本町文醉古樂府不云乎本町二町絲屋娘姉二十一妹二十秋人之才之美兼和漢亦猶姉妹稱一對乎

天明乙巳秋七月

七拳式酒令

四方山人題 〔四方山人〕〔狂文本宗〕

第一 酒伴

第一に友をゑらぶべし、ゑらぶとはよきをこちへと手をとりてあしきをあつちへ八分するなるべし、もし下戸たりとも御酒好と稱する輩はこれをゆるす、もし上戸たりとも糟くらひの輩はこれを禁ず

第二 酒品

酒は伊丹池田角田川もよし四方のあかは勿論のみかけ山の爛ざまし火いり濁醪の類はいや

第三 酒肴

肴は箱を最上とす、雪中に孟宗竹のゑゆんかんもつとも佳とす、されとも不時にもとめがたし、やむことなくば竹輪を以て是に易ふ、其餘の料理は見合次第

第四 酒器

燗鍋は油つぎの形に類しさかづきは物いはすコツパたるべし、硯蓋はするが細工歟竹の模様

第五 酒筵

掛幅は七賢の圖歟竹の畵たるべし、筵は竹むしろを

本式とす、疊の上は略式なり、もと竹林にて興行すべき事なれども酔後に刎脚の患ありとてついに席上の遊びとはなれり

第六　好物

此段酒好と書ては香煎のごとし、故に變じて好物とす、是席上にありたきものをいふ、席上にありたき物

よくなる三絃　料紙硯

第七　禁物

これ席上にきらふものなり

謠　聲色　空斟酌　卑下味噌

年たけたる變童　兄さんのある歌妓

味噌鹽のはなし　唐本表紙の本

木枕　但手まくらは制外の事

此外見え坊、鹽商、俠、いざこざ、いやみからみなといふもの世上にあるよし此たとひはゆめ〳〵參會にのる事をゆるさず音曲は女は戲腔にかぎり男は河東もつとも少し

高笑（哂本）　彡甫先生著

序

彡甫先生纂ニ述當世新話一名曰ニ高笑一。廼命ニ序於余一。余辭曰。拜民素幣。許ニ襲說一之。先生曰。勿ニ馬鹿道一而不レ可因作ニ之序一曰。高者何。高聲也。笑者何。捧レ腹也。夫高聲而捧レ腹。則男子ニ熒難如也。婦人嘘-嘘如也。嫟-嫟嘘-嘘。天-地萬-物之情可レ見矣。今彡-甫先-生所レ著。足レ使ニ世之男女一嫟-嫟嘘-嘘。則名曰ニ高笑一者。不ニ亦大之蹴鞠一乎。書叙曰。萠-伯仲伯作ニ典寶一。雖ニ則素屁之韜一乎。仲印不レ删レ之。余之序ニ茲編一。蓋竊比ニ於彼親玉一者。焉乎爾。

崎鎭八絶

冬日崎陽巡視所監諸所聊爲短述

會館

崎陽府庫有餘財　鎖鑰緘封厲鎭臺
市舶賈人多去解　案頭長滿簿書堆

瀨崎倉

南北官倉ニ瀨崎　新陳共積海西涯
侏儒莫笑饑寸廟　蒼鼠應須感李斯

官船廠

西坂斜通沿海區　晩菘霜菊路崎嶇
此中長有官船廠　滄海飛雲列舳艫

新地庫

臨流四面水門開　賈客帆檣此地廻
起貨更逢清庫日　呉綾蜀錦滿船來

和蘭館

紅白旗飜百尺竿　崑崙奴僕役和蘭
鋪氈且勸茴香酒　歩屧閑過花欒欄

唐館

天后土神關帝祠　幾番香土養長崎
門聯扁額多相似　疑入蘇州桂海涯

包頭庫

料得銀姿有決明　不如東海海參名
打包入鮑魚肆　購價紛紛稱幾枰

藥園

三冬風日藥園荒　異草奇花未吐芳
唯見香櫞花眼樹　殷勤覆屋護繁霜

文化甲子仲冬

南畝覃

大火行叙

明和大火行者。大人米先生。即席慢戲之詩稿也。嘗聞明和壬辰年。東都有火焉。西北萬戸。纔存二三。厥燒亡如此者。所不多矣。實稀代天災也。時先生蟠年廿三。雖英名未顯。然奇才既萌于此。可謂滑稽之雄矣。讀者一開卷。則絶倒。大火行惣廿六篇。以狂言俗語賦之。始有壬辰仲春廿七日之句。而終至曰誠迷惑明和九年。街頭路徑之遠近。宮殿堂屋之燒亡。瞭然如見當時也。好事者。往々傳寫而弄翫。頃者隣人懷之來問其句讀。余一閲即嘆曰。去明和壬辰二十有七年于茲。此當時變異今猶存紙上。可弗懼耶。便改目。曰火用心抄大屋集。町内俠客。謹莫怠鐵棒可矣。

寛政戊午年穐漢月

番太樓主人

明和大火行

七言絶句

瀧水子撰

番太老人校

壬辰仲春廿七日西南風起埃覆天燃出目黒行人坂大日堂主一炬煙』○○○○○○○○○○○○白銀臺上成黒土赤羽橋邊見青草』『走入善福光明寺不殘煙上火燒頽曾見佛壇如極樂今知山中似阿鼻』一本松忽失綠色六本樹猶樹不知鳥居坂固現朱羅

飯倉町不食飯居虎門嘯兮風益強霞關聳兮煙彌疑鷹羽元來有燧名石瓷變而成燒瓷』一枚板扉一片灰三階高樓三月滿井伊御架留至賜井鍋嶋燒出不持鍋』櫻田火子多花散御厩烏有如鬆鬖文右此時不問馬弗知曾學論語耶』八代須河岸火滿林家在河上蹉蛇橋者引矣水者高慶似弄賴政謠歌』關西諸侯數十間家家傾頭逐祝融坂東權門十餘輩各各正襟守城中』諸侯權門盡回祿腰掛高樓化成容忽看蒼天明子晝數萬挑燈光朦朧』常盤橋成紅葉色龍口急無由降鬼飛鎌倉岸有程社新石大工白銀丁』神田今川辨慶橋鍜冶鍋町到昌平傳馬窂舍放罪人十間雛鄽損春情』十七屋藏稱金鐵三井棟上鳴世間妻戀湯嶋駿河臺上野下谷淺草邊』聖堂餘煙仰彌高仁王首骨鑽彌堅新助土藏爲樂燒酒好建家成香泉』藤堂泉不足消火佐竹扇有餘加風本願彌陀炎焰焰金龍觀音雨漉漉』田畝炎亂六鄉危山谷煙斜閙左集溜囚人吟如屈原廓妓女悲似王昭』老嫗周章落二階諸息勉強渡彈橋撿泉蘭若揔徹塵眞先神明眞黑燒箕輪男女着簑臥金杉隱居失金膠回首丸山一片火忽至本郷煙昇香』鷄聲窪邊宿烏驚駒込街道汗馬多加州邸殿飛瓦礫水府諸士擔干戈』根津崎右中村權現宮殿宇平窩蟠隨別院上野廟感應五重大塔婆』燒盡江北數十程於是南西火翩翩千住宿焚橋纔殘自茲東北草綿綿』昨夜南風今朝北吹返火烟轉入咽中市村同刻凶日江兩橋一眨婦小身張我幃幕張大名縣心板屏懸松板十枚六十目葭簀一枚八十泉見舞新菰回大車堀出古釘掉小船持通手桶入白粥擔行蒸袋韲黑錢』父子異途別左右兄弟尋蹤相後先孕婦腹裂倒足下嬰兒頭破死眼前』主人三日敢不食從僕三月奈得眠江戶中無安起居誠迷惑明和九年』

是狂詩稿本、今彼家無之、是故知之者亦罕也、寛政十年肇秋、予爲一友人授閱且戲爲其序而與之、頃撈破簏更繙閱雖每篇任口、而妙不可言、但於其序拙劣殆至於嘔吐將棄去、猶幸而以假號識之、見以人不知予所爲因暫留之、嗚乎歲月荏苒在瞬目中矣、明和壬辰予甫六歲、後歷二十七年爲是序、彼此才幹大有廷逕焉、書云克愈狂爲聖豈瀧水子狂聖者歟、蓋瀧水子者、四方山人別號也、又有南畝杏花園蜀山人數號、與予相識三十餘年如一日也、悵然而懷往時歲然悼故人、

此予之謂猶需在、所以卑予德也、乙酉春月之日

右明和火化行　幀借得友人馬琴子本寫

文政乙酉夏五月　文寶堂

狂詩集

西萬六千日

觀音四萬六千日。百年三萬六千過。莫レ言一萬日餘計。百度囘人日日多。

新六歌仙圖

二位黄門後京極。西行慈鎭俊成卿。新六歌仙歌六首。恨無小野小町名。

題滑川圖

鎌倉靑砥左。心共滑川淸。何事一文惜。長傳百損名。

半田稻荷

半田稻荷大明神。鎭座葛西金町濱。痲疹疱瘡共無恙。信心堅固息災身。

狙仙猿圖

人言狙似人。我言人似狙。朝三暮四飯。未敢戴其箸。

釣伯園戯寄西川元章

西南山郭綠陰齊。川上餘流入曲溪。元是文園三十歲。章章句句筆端題。

春日寄吟香樓主人

天下非番今日事。半陰天氣半晴新。瀧川先約如何否。爲問吟香樓上人。

東方朔浦島子三浦大助畫讚

桃保千年壽。龜遊萬代池。大助稱三浦。猶纔百六兒。

無題

再入天台見美人。美人來采變愈新。不同第二街中夜。猶似百川樓上春。

北里災火

北里煙風捲暮雲。三千羅綺亂紛紛。可憐一炬爲焦土。如讀阿房宮賦文。

植木生歸自二條在番戯贈（生號蘂峯）

田助已全快。朝顏且未開。忽有蘂峰至。猶疑嵐吉來。

狗子圖

吳下耳傳二千里文一。雪中尾似二巴一。致二更偸二不死長生藥一。欲下上二青天一吠中闇雲上。

和合神贊

和合生萬福。日進太平錢。十字傳神秘。長稱千萬年。

聞下中東以二七月八日一死上悼レ之

中村道外字東藏。歌右衛門門弟香。可惜行年纔四十。

盆前早早入西方。

萬歳

口喞交讓木。手持五葉松。靑陽新玉歳。萬歳鼓琴琴。

題唐鬱春畫

唐與紅毛寄合町。丸山遊女玉爲形。□□一萬三千里。

四百餘州振牖停。

寫山樓の祝に

鶴算期千壽。龜齡約萬秋。蓬瀛與方丈。併屬寫山樓。

谷穂猿の畫に

忽見立烏帽。正知谷穂猿。狂詩多不作。深耻能狂言。

諫鼓鷄圖

山王祭禮與神田。大傳馬町第一先。諫鼓昔深鷄欲度。

東天紅色映毛氈。

白藏主圖

千年白藏主。三衣靑道心。蘭菊與燒鼠。何方香氣深。

二丑園愚連堂作朝顔譜者出板

朝開三十六歌仙。帶露花顔滿出板。借問百番分左右。

何如二丑會愚連。御迎參候廿泉殿。盛久物于寢覺籠。

槿與舜榮皆一日。牽牛星契幾千年。

題市川三升扮達摩香爐

市川贔屓惜名殘。面壁九年尻不安。羅漢寺門撫髯坐。

香爐峰留襲衣看。木挽町名殘狂言にて三月より葺屋町へ歸ればなり

雲林庵見玉梅文鳳二女史玉梅善畫文鳳善詩及書　三月初吉

文鳳如月。玉梅似玉山。昨夜十軒店。見此二人顔。

八月十五夜釣伯園宴集

駿河臺對此山森。建部名臨河岸深。三國一山三五月。

南方景物二千金。

題市川三升暫圖

暫暫三升柿素袍。飄開切幕舞臺高。紛紛張子頸如雨。

一拔市川大太刀。

又

海老流風士世孫。浩然正氣塞乾坤。斯須忽見廻瀾勢。

一洗嶌廛活水源。

壽市川三紅

七回追福慰精魂。四季風流報文恩。自有他人能不及。

三紅大人市紅門。

得大雅堂書

魚麗三手一壽蔬。君子有レ酒旨且多。署二名三嶽一霞樵ノ

印。大雅堂奈無レ名何。日本橋南四日市。買得靑錢二

十波。請看世上文無(モンモウ)者。千人萬客日經過。

和櫟園見寄韻

誰道東方九千歲。竊桃三度世中遊。功名已共金錢擲。
日月徒隨質物流。桔梗御紋看瓦人。櫟園言葉學狂稠。
先生寢惚嚊臍久。未到毛唐四百州。

原詩

寄蜀山人寐惚子　櫟園狂生

先生趣似東方朔。玩世年來面白遊。一段機嫌酒䢟浴
百篇狂詠筆如流。近鄉在町鬪風起。遠國波濤結社稠。
打犬兒童知寐惚。名高六十有餘州。

花形文英由利子書畫會

花川戶巴屋。形是住駒形。文字傳流義。英華頭額銘
由來書畫盛。利德酒肴馨。子共能稽古。會筵初幼齡。

剃六六歌仙色紙以古役者繪代爲一帖因題

新明六六歌仙店。張此狂言役者圖。莫道狂言歌舞賤。
其猶萬葉古今歌。

江口遊女騎象畫

江口遊君尻白重。普賢大象鼻何長。文珠若衆是馴染。
不駐西行乞食坊。

謝和氣無平朝臣贈紅梅

一枝東北軒端梅。猿樂町邊贈我來。盆皿□山紅皿色。
新臨麴屋室中開。

玉梅女史宅喫阿滿麪味甚美云是麻布長坂名物

蕎麥三千丈。味因長坂長。不知麻布方。何處儉飩箱。

朝妻舟（以遊女三浦圖傍船形瓶有柳次無韻）

英飛蝶駭暫時間。仇矣仇波寄又還。手枕更無一挺鼓。
東山唯有三蒲團。

神田祭

神田祭禮列高名。江戶節聲富本聲。焉馬鯉藤與一九。
草堂敬義老先生。

題浪華南宮子衣

南宮適與米南宮。君日一家親麴中。南畝南□情不淺。
與天哲問菊慈童。

題桃太郎圖

老夫何事樵於山。浣而不答婆心閑。一桃流水杳然去。
別有鬼豈非人間。

菊慈童

慈童子欄干。菊座有餘香。年明遊酈縣。疑入底倉陽。

遊東山歸路即事

彼岸櫻開上野宮。年逢筆屋酒盃筒。籃輿四百五十字。

多少波錢振舞中。

大津畫高野大師

五十三亭馬。肥驅至大津。請看一阿字。長入畫中眞。

醉李白圖

沈香亭上召生醉。楊貴妃前失禮儀。一斗百篇常直段。安哉一合一篇詩。

仙人愛鹿圖

仙人何愛鹿。鹿肉暖防寒。未辨御靈美。應因木葉單。

楊貴妃圖

貴妃全盛牡丹開。花若容顏向鏡臺。四百餘州獻上物。長持幾掉荔支來。

六月四日卽事

天令我見五人男。向暑先凉昨夜嵐。雁金布袋雷安野。極印打收千兩函。

奴僕載挾箱懼雷圖挾箱有引兩紋

頭載挾箱身。懼雷何處僕。若非足利公。必是內田屋。

蛙圍棊圖

一寸二三寸。蛙飛靑柳枝。道風與馱六。應是打相棊。

戊寅十月聞都座變名

葺屋町中望天倉。承應元祿此相當。市村桐座遷都後。又見玉川彥十郎。

初鰹魚

東醫寶鑑說松魚。兼好法師稱毒魚。若狹小鯛體骨切。不知江戶初鰹魚。

詠藤花

紫式部源氏物語。白藤源太古風歌。龜井戶池佃島海。花開南北起藤波。

高橋鰻鱺

大和田遠深川深。鄽小高橋勝大金。春木何如鈴木又。森山不負富山心。

題畫

不持小槌柄。新放剃刀光。大黑與南極。還疑髮結床。

籠細工

聞道浪華籠細工。開場淺草本堂東。鳳凰孔雀麒麟出。牛馬山家猪鹿同。關羽周倉橫偃月。豐干猛虎嘯長風。直過矢大臣門去。不拜觀音多素通。

贈戲子三升

今歲中村與市村。狂言助六又菅原。祇園筒守多靈驗。唯賴成田不動尊。

彼岸櫻

東叡山中彼岸櫻。黑門開處白雲生。香煎一服松原上。
各出吸筒爲酒盛。

晝顔

朝顔夕顔外。不入歌人料。幸子晝寢顔。糞土墻邊咲。

大夫に辻君

北郭高雄楓。本座掃溜松。不論貴與賤。誰取實情濃。

松に鷺と烏

狂言一流鷺。儀式三番鴉。松是大夫殿。千秋悅不斜。

鍬に菊

淵明歸故鄉。土百姓田園。彭澤代官殿。把鍬掘菊根。

露の竹

葉葉如新濕。枝枝不動風。連歌露一字。恐在隱題中。

背面達摩

面壁九年母。眞言秘密柑。五時八敎外。自有別傳甘。

題畫

小倉山下古人心。一幅錦心楓樹林。應是隨園詩話意。
未來記與雨中吟。

角力團扇犢鼻褌圖

俣野河津後。谷風小野川。繍褌與團扇。十日待晴天。

鍾馗拔劍逐鬼圖

劍逐虎皮揮且耀。鬼巡畫障隱將逃。玄宗皇帝閨中夢。
始見終南進士豪。

貝細工

淺草今年貝細工。今年却勝去年籠。石舟井上與看造。
三子揚名山郭公。

三島畫

嵩之嵩雪一双玉。嵩谷更添七寶明。筆意愈高英弟子。
三嵩山自一之生。

傾城畫

聞說京町猫。昔通揚屋町。願爲狸寐入。居續野狐亭。

卽事

南宮平見浪花人。加茂季鷹京土神。兩國橋邊今日會。
神人和合喜同塵。

雨中菊

三徑令霜發。群芳帶露寒。南山下可見。獨向雨中看。

贈岩井久米三郎

岩井嫡流水。名稱久米三。四里四方內。西北遍東南。

贈梅幸

天竺唐兵衛。梅前菊後郎。入船江戸子。名向浪華揚。

菊慈童畫贊

徤叟太平記。慈童七百齡。應將畢菊事。附會法華經。

忍領北秩父有菓子名五荷棒

此駄菓子達摩糖。安永道中滿日光。秩父長傳五荷棒。
三間梁大飭如唱。

知章騎馬圖（二人介抱ス圖ナリ）

知章乘遠馬。自似猪牙舟。生醉八仙一。兩人留不留。

紀時事

明和遠忌日揚塵。火事風邪共送神。千里遙來漠漠躍。
一年又過唐唐春。岩藤於發二人代。高尾頻兼七變新。
京鹿子娘道成寺。大門之助稱櫻辰。

林麓草堂先生門人林亭雄辰借兩國河內樓開書
畫會筵賦贈（六月十日）

林亭會自遠方遷。衆妙門人玄又玄。地轉千番爲兩國。
天廻森月照前川。
趙氏連城玉屋船。由來花火滿前川。只今元柳橋前後。
曾照中洲兩國邊。
柳橋河內屋。麻布日南窪。六月雄辰會。盡來書畫家。

贈梅幸

河原崎座有金箱。尾上松高菊五郎。玉藻前身外無題。
忠臣後日又將當。

伊丹坂上氏所釀美酒曰武藏野明月江戶鞘町田
中氏所囑詩

武野月明八百里。浪華酒造幾千秋。請看坂上伊丹灤。
下作樽中諸白流

題鶴廼屋乎佐丸門人狂歌五十八人一首

萬葉集稱戲笑新。古今歌入誹諧眞。浪華鶴廼屋生子。
自五十人滿百人。

題狂歌房連中五十八人一首狂歌首

茶碗頻傾厄米人。信濃陸奧四方巡。狂歌房在金吹町。
大屋主人裏住隣。

送風神

引道此風號谷風。鬪鬪痰嗽響西東。惡寒發熱人無色。
煎藥如常藪有功。一片生姜和酒飲。半丁豆腐入湯容。
送君四里四方外。千壽品川問屋中。

巴人集拾遺終

千紅萬紫

六十二になりけるとしのはじめによめる

ことわざの人間六十二年とは
　甲陽軍を鑑もちかな

甲陽軍鑑第八品に人間六十二年の身をたもちか
ねといひしことばをおもひ出てゝなり

花さかせ爺の畫に

むかしたれいかないかきの灰をまきて
　かれ木の枝に花さかせけん

示禪僧

逢佛殺佛逢祖殺祖逢布子殺布子逢蚊屋
殺蚊屋過八箇月始得解脱

去年より雪ふれば〱ふりけるに

こぞことしふりつむ雪にあやかりて
　あくまで花をみるよしもがな

舟にのりて深川にゆくとて

たからぶねのりぞめもよし千金の
　富がをか邊の春の一時

題寒垢離畫

寒氷可履也中庸不可能也

鯉の畫に

鎌くらの海より出でむさしの
　はらにいるてふ三千ものうを

辰巳屋翁扮戯圖

おまつりに神樂堂にたつみやの
　かれ木むすめも花さかせむ丶

題土屋清三郎

地近若宮神徳深草號土屋土生金年中正直壽延
命家内安全火用心

竹に雀の畫に

とまるべき雀いろにやなりぬらん
　夕ぐれたけのふしどもとめて

韓信股をくゞる畫に

からはから日本は日本唐の紙屑のみを拾ひて
にほんの刀をわする丶ことなかれ

道なりにたつの市人きりすて丶
　またはくゞらぬやまとだましひ

鬼念佛畫賛

悟れば九品のうてな迷へば二本の角念珠となりてくだくるとも鬼瓦となりて全きことなかれ

將ニ之カント淺草市ニ雪後道惡シ半途ニシテ而歸ル

淺草市ニ泥殘雪深シ欲スレトモ行カント引返ス半途ニ心近來乘レ駕ニ不レ乘ラ輿ニ
何ゾ必シモ夜參ニ觀世音ニ

木挽町森田座の芝居になにはのわざをぎ人多く來りけるときゝて

百餘里を三十けんにひきよせて
道頓ぼりのはるの入り舟

書畫帖序

口より出るを詩歌といひ尻より出るをおならといふたゞおならのみくさきにあらず詩歌にもまたわるぐさきあり唐一代を四ッ割にして初盛中晩の階子屁といひしも盛唐くさきの僞唐くさいのとブウ〳〵をひりちらして今は放翁誠齋のすかし屁をこく世とはなりぬやまとうたは馬鹿律義にして奈良のはのおならの外は草庵集や新題林をにぎり屁のにぎりつめておもしろく候をかしく候と屁玉のやうな御放屁をいただくもをかしこゝに狂歌こそをかしきものなれ師傳もなく秘說もなし和歌より出てわかよりをかしく藍より出し靑瓢たんそのつるよもにはびこりて性はせんなり瓢簞の丸のゝ字をかくばかり二百五十の同庵がやきもちをやくことはなりぬいらさる老のにくまれ口こゝらで筆をとめきのかほり自讃くさいはくさいことの身しらずとでもいひなさへ

女達摩のゑに題す

庭前ノ柏葉齋宮ノ紋面壁九年弟子分私ニ同ク色客ト乘レ廬ニ去リ
敎外別傳不立文

北馬子の外一人とゝもに巴屋の酒樓に酒のみけるに一人は小戶なりければ

みつ巴ひとつどもゑはき下戶にて
ふたつどもゑはゆら〳〵の助

竹に雀の畫に

雀どのおやどはどこかしらねども
ちよつ〳〵とござれさゝの相手に

唐詩のことばをもてよめるうた

高館に燈張れば風淸く
夜鐘殘月雁歸ル聲
不レ知心誰をかうらむ朝顏は
たゞるりこんのうるほへる露

花

蠶きせ米をくはせて花までも
みよと造化のいかい御造作

月雪花

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはとならびが岡のすねものはいへれど花は立春より七十五日月は三五夜中の新月後の月も亦めでたし雪は豊年の貢物とはいへどつめたく跡くさらかしもうるさしと明阿彌陀佛の文にもかけりげにふるとても若菜の價たかうならぬほどこそ門田もる犬も嘻ぶべけれ

三番叟

翁よりまたにぎはしき三番叟
さあらば鈴をまゐらせん歳

案山子の畫に

こゝろなき弓矢に心ある鳥を
いかゞしてかや驚かすらん

山門五三桐といへる狂言の名題によせて

山門のたかきべん當棧じき代
五三の桐の金もをしまじ

葷酒でもなんでもはいる山門に
五三のきりのこがね花さく

猿牽の畫に

身代在レ嚢猿在レ肩不レ堪二煩惱一犬追懸一朝四生レ烟
升米暮三起レ浪百文錢

猿曳の百一升の米と錢
あしたに四軒暮に三軒

北馬の繪北里と對の禿ふで

北馬のゑがける傾城の二人禿つれたるに

たくさんさうに見ることなかれ

金埒がかける大般若六百卷轉讀の僧の畫に

大般若六百卷もなにかせん
金埒がうたははだか百貫

日光山よりうつせし櫻ありときゝて

根ごしたるさくらひともとふたら山
ふたをしつゝも風やいとはん

長瓠銘

瓠子夕顔五條蕉翁朝飯四山烟

櫻のもとに三猿あり一ッの白猿口をとぢて雨の手にてふたつの猿の耳と目をふたぎたるは見ざるきかざるの心なるべし

面白いことをもみざるきかざるは

さくらを花といはざるの智恵

徹山が鹿の畫に

たがみても馬とは見へず徹山が
　羊の毛にてかけるさをしか

郭公の玉章といふもの讃岐の國白峯にあり歌
よめと人のいふに

志ら峯の山ほとゝぎすはま千鳥
　あとはなしともかよふ玉章

住吉白樂天の畫贊

青苔帶ㇾ衣掛二岩肩一白雲似ㇾ帶廻二山腰一

苔ごろもきたるいはほはさもなくて
　きぬ〴〵山の帶をする哉

樂天が詩白俗の稱ありといへどもかゝる平仄のなき詩はつくらじ神詠は神主の上手下手によるといへども津守の何がしもかくつたなき歌はよむまじ成事不ㇾ說既往不ㇾ咎といへばとにもかくにも謠つくれるものゝ心次第なるべし

むだ口をはくらくてんがことのはも
　久しくこれですみよしの松

淺草並木巴屋にて蜂房の畫會あり

さしてゆくはちはみつ蜂みつ巴
　むらがれあそぶ蜂房の會

山まゆのいとひきいだすかひこ菴

かひこ菴に酒のみて
　ゑひての夢は蝶とこそなれ

たちかへりまたくふべしとおもひきや
　鱧のほねきり難波江の浪

すみといふうたひめによみてつかはしける

かくれなき江戸のすみからすみまでも
　すみよし町のすみがすみかは

狸酒かひに行くかたかきたるに

拂はずにとしふるたぬき酒かひに
　ゆくや化物やしきなるらん

五月雨

をり〳〵は時あかりしてからかさを
　たゝめばまたもひら〳〵五月雨

有卦の祝に

福の數七ツにみてるさいはひを
　けふよりうけの年は來にけり

同祝にふもじ七ツかさねて

うけにいる數はなゝとせ何事も
わらふてくらせふゝふゝふゝ

島田氏狂名をこふまゝに大井川明となづく

志ま田から通るは歌の御状箱
俊成卿の九十川でも

やぶかうじ

和名藪柑子漢字紫金牛裏白根松外先今ニ此物求メ
布袋咲唄をする縮

みそすりてまたんお客のくるまでは
五十六億七千萬歳

鶯

慈悲心も佛法僧も一聲の
ほう法華經に志くものぞなき

天王祭

天王の夜宮の光やはらげて
御紋の瓜もちりにまじはる

福祿壽

ふくと壽の二ッに事はたる酒の
天の美祿も其中にあり

櫻に小町の畫

ひのもとにさくらといへる花あれば
小野の小町といふ美人あり

鯉の畫に

六々のいろこの數をかぞへみむ
ひとふたつもじ牛の角文字

嵯峨釋尊回向院にて開帳のとき

南國に三國一のみほとけの
とばりひらけばこがね花ふる

起あかり小法師の畫に

ひいふうみよついつゝむつなゝころび
八おきあがりて九年面壁

狐藻をかつぐ畫に

濱むらの大夫さんには藻をかつぐ
きつねもかなやせん女なるべし

題志らず

加賀笠のうきよ小路になれ〳〵て
きぬる人とはたれかわかなや

川吉といふ船やかたにて大川に出しに此ころの雨に水たかうして船すくなく花火もなし

屋根ぶねとおもひしものをやかた船

花火なくともまゝの川よし

埋二三猫兒一

呼レ馬呼レ牛無二町畦一非レ南非レ北豈東西可レ憐二個猫一

兒子如是畜生發菩提

伯夷

わらびばかりくふとはいかい不自由な
焼豆腐でも周のまめかは

水のゑに

ゆくものはかくのごときかすみだ川
晝夜をすてぬ猪牙とやね舟

新場にて山王祭をみる

江戸ッ子のきほふ日吉のおまつりは
げにあたらしき魚のたなごひ

山王祭に船屋臺あり鐵砲洲よりいでしといふ

船頭が多くてふねは山王の
やまにものぼるけふの祭れい

盆すぎに鰹多く來りけるもをかしく

盆すぎにかつを／＼の聲するは
なつやせをして出ずやありけん

郭公に有明の月かきたる畫に

ほとゝぎす鳴つるあとにあきれたる
後徳大寺の有あけの顔

此頃狂歌さかりにて彦星のひくうし／＼うしらいほはたたてる織姫の絲のむすびにわかれたれば何がしの連くれがしのつらを亂る初雁あとなが先へゆくをやらじと天の川波たちさわぎて星にかすべき錦もなくへんてつもなき言のはのみ見るにものうくきくもうるさし抑狂歌にをかしみなきは冷素麪にからしなく刺鯖に蓼なきがごとしと馮婦が虎の髭をなでゝ久しいものだが七夕七首

ふみづきなぬかといふ七文字を上におきて

ふんどしをさらすとやみん珍寶の
青たうがらしほしにたむけば

みじゆくなる星のからうたやまとうた
書ちらしたるふみ月のけふ

つるながく生ふるへちまのかはふくろ
鉢植ながらほしにかさまし

きん銀がたくさんならば盆前に
七夕まつりしてもあそばん

ながるべき衣ち草ながらけふばかり
　　利上をしても星にかさなん

ぬひものは下手か上手かはりのめど
　　まつくらやみでとふすいと筋

かどなみに短冊だけをおしたてゝ
　　色がみにかくかな釘のをれ

文寶亭が上毛下毛のくにゝゆくを送る

われもむかし黒髪山にのぼりしが
　　今はかしらの衣もつけのくに

かみつけのいかほのぬまのいかいこと
　　おつれもあればおもしろいたび

財源福湊序

これを好むものは拱璧にもかへずして十襲してをさめこれを好まざるものは反古堆に擲ち紙屑籠にいれて惜む事なしされど宇宙第一の書も壁の中の下張よりいで惜字紙のいましめも陰隲の一助ともなれゝばかの夕霧が文もて富士の山を張ぬきしごとく己が堂の青山をも張つくすべき勢ひに人のねたみ世のそしりをもいとはずからやまとのいにしへに今に雅でも俗でも木でも金でも耳搔が一文徴塵つもりて財の源福の湊と題せしは學而第一のおつかぶせなり先例のない事にはあらじかし

題ㇾ畫　鍾馗ノ留守ニ鬼洗濯ノ圖

冠劍猶懸ㇾ壁鍾馗非ㇾ出ㇾ門請看鬼洗濯不ㇾ洗虎皮ノ褌

赤羽ばしのほとり上林といへる茶屋の額さくらの花をゑがきてうたをこふ

馬くるま立場の茶やの名にしおふ
　　はなはみよし野茶は上林

奉加帳序　翁名燕斜又號豆三

燕斜が別業に題せし日は囊中おのづからまん〳〵たりしが豆三暮四のいとなみも引込紫衣の隱居となりては澁團扇をばうちすてゝ柿の衣の奉加せよとさる大檀那のすゝめにまかせ鬼の念佛の大津畫の萬人講の催に心もいとゞせりなづな五行たびらこ佛の座臺座後光も煤びたるすゞなすゞしろ箔しろの建立おもへば春の一籠の土一升に金一升とつかへ兵衞の冥加錢は御心持次第秋の七草一葉づゝお志をまつのはのちりもつもれば山〳〵有がたく奉存候已上

時も時盃の十二日蜀山人庵主にかはりて書す

菅原傳授手習鑑

本院時平車上乘梅櫻忠義向松凝讒言一入筏沈浪
齋世親王菅相丞

鳥文齋榮之三幅對の畫の表具に書ちらせり

左

つとにしたる赤貝より傾城のすがたを吹出し
たる表具に大盃舞のうたをかきて一文字に

花さかば御げんといひし赤貝の
　しほひの留守に使は來たり

中

蛤貝より青樓の屋根の形と土手を四手駕籠の
通ほるかた吹出したる繪表具にまことはうそ
の皮うそはまことのほねのことば書とたはれ
歌をかきて一文字に

遊君五町廓苦海十年流二十七明夢鳴呼蜃氣樓

右

苞にしたる蜆貝よりかぶろ二人ふきいだした
るに表具には河東ぶしの禿萬歲の文句をかき
さして

しじみ貝つとめせぬまにさく梅の
　雪だまされし風情なり乎

伯牙琴をひき鍾子期きく畫に

古今唯有一鍾期

玉琴のいとをたちしもことわりや
　かなつんぼうの多き世の中

傾城猫をひく畫に

京町のねこもしやくしも大名も
　あげ屋にかよふさとの全盛

橋千蔭のかける百足の畫に

百のあし千蔭の手もてうつししは
　猶よろづよをこめ多門天

庚午の春の雪は盈尺の瑞をあらはし辛未の秋
の月は五夜の清光あり

去年は雪ことしは月の大あたり
　おもひやらるゝ來年の花

清少納言の繪に

清といふ名代のむすめまくらしの
　わらひ本よむはるのあけぼの

兩替屋のみせにて酒油うる所の畫に

はかりなき大みき油手もたゆく
　足にかへなんこがねしろかね

郭公

ほとゝぎす鳴つる影はみえねども

きいた證據は有明の月
山の手のやまほとゝぎすをり〳〵は
庭の木末にとまりてもなく

吉原八朔

八朔遺風北國方往來如雪鏡衣裳燈籠鬢黑白無垢玳瑁櫛黄金化粧禿曳下駄連鼻緒客居中町倚腰張已從先月賴今日書送數通文玉章

瀧の畫に

酒かひに李白やさとへゆかれけん
三千尺の長い瀧のみ

山手初夏

目に青葉耳に鐵砲ほとゝぎす
かつをはいまだ口へはいらず

此ごろの雨に所々の開帳にまゐるものもなければ

開帳の山ほとゝぎすあめふれば
國へかへるにしかじとやなく

聞きさらぎ廿九日にたてしといふ日ぐらしの里修性院のいしぶみを見て

三河島みなかはらけにうづむとも
このいしぶみのかけずくづれず
書ちらすこの手柏のふたおもて
とにもかくにものこれいしふみ

碑の面には詩をしるし背にはざれ歌書きたればなり

題酒屋壁

此邊居酒屋處處借錢多寄語番頭殿許吾一本波

題田樂豆腐

三五美人差櫛通屑欺白雪扇生風岡邊煖酒燒楓葉席上敷氈愛竹筒眞崎箱連狐色黑池田炭映鳥居紅相模入道淮南子共是千秋好物同

大きなる玉を龜の甲にいたゞく畫に

澤菴のおもしに似たる石龜の
甲のものかや大きなるたま

落栗菴もとの木網水無月廿八日に身まかりしときゝて

水神の森の下露ばら〳〵と
秋をもまたぬ落ぐりのおと

むかし水神の森にてかざりおろしてつひに淺草の寺のほとりにてみまかりしなり

青樓四季のうたの中に

春

玉くしげ箱挑灯のふたりづれ
　はなの中ゆく花のせん盛

夏

みじか夜をひよくむしろの天鵞絨の
　毛のたつまなくぬるよしも哉

秋

玳瑁のくしのひかりや硝子を
　さかさにつるす燈籠の髮

冬

やう〳〵と來てむぐりこむつめたさは
　君がこゝろと鼻に雨あし

鳥目生風四手駕猪牙如月扁舟

吉原に眞さきかけし先陣は
　さあいけずきとするすみだ川

和唐紙に物かけといふ人に

和唐紙にもの書くことは御免酒に
　こはだのすしや豆腐つみいれ

鮪の畵あしければ

このたこは新場鮪とはおもはれず
　三河町にて見たやうな顔

蟲

秋の夜の長きに腹のさびしきは
　たゞぐう〳〵とむしのねぞする

赤き紙にうたをこふ

疱瘡をかろくするがのうけ合は
　三國一のやまをあげたり

枝折にかけるうた

龍田山去年のしをりは林間に
　酒あたゝめてしれぬ紅葉

聞澤村宗十郎改名

觀世水流溢（澤）（村）（宗）徒鼓脣若雲屯（十）千万兩金
箱勢（郎）黨合紋い字繁

澤むらの紋のい字に濱むらの
　ろの字をつれていろとこそよめ

煙草入に鷺をかきたるゑに狂歌をかけといふ
に

白鷺はむかひにきたかたゞきたか
　しばしやすらへたばこ一ふく

河東ぶしの文句によりてなり

遊二生姜市一

秋風吹送薑生姜嵩出藤花千木箱日腐市名無二勿體一雨
晴天照太神光

十月十九日甲子に天しや日なれば

甲子の大黑天しやよろづよし
　　あすは小はるの若夷講

小春

朝めしと書げの間みじかくて
　　はらもこはるの客の長閑さ

菊の花かきたる盃に

酒のめばいつも慈童の心にて
　　七百歳もいきんとぞおもふ

すみだ川寺島村名主和祝の茶室に一圓窓あり

竹のたがもてふちとせり

くれたけのたが名の主かすみだ川
　　一ゑんさうはみえぬかくれ家

一圓相のこゝろを

なけつけてみよ索麪のゆでかげん
　　丸のの丶字になるかならぬか

猿寺禪師七十賀詞

人生七十古來稀なりといひし詩人も五十九歳で食傷してうせ七十ニ從二心所一レ欲との給ふ聖人もたつた三年矩をこえず八十年胎內にゐられた老子のお袋も迷惑なるべくたしか七十九とやらで跋提河の泡ときえし佛は常在靈鷲山とていつまでもまめ息災ときくも片便にて心もとなしこゝにさる寺の大和尙の七十の壽の文をつくれとさる人のもとめいなみがたく千年の鶴萬年の龜松竹のときはもふるめかしければかの佛說の那由陀阿僧祇五百塵點刧四十六億七千萬載彌勒佛のせり出しにさし出しの蠟燭てら〳〵とはなのさきへ出るまでは高野六十四年の少年蜀山人の請合なるべし文化九のとしみづのえさるの尻も大晦日にちかき頃しるす

三圍いなりの上に雲ありて雷のなるべきもよほしある畫に

神ならばかみもたて引夕立を
　　ひとふりふらせ田をもみめぐり

玉の畫に

卞和氏がほり出したる連城の

たまは代きん十五枚かも

十三夜雨ふり出ければ

十三夜雨はふりきぬ里いもの
きぬかつぎてぞふすべかりける

大津畫にかく鳥毛やりをもてる奴をよめる

あづさ弓やつこ茶屋にもほどちかき
翔雀堂のとり毛やりかも

馬の耳に風のかたかきし羽織のうらに

うしろから羽織をかけていつお出
なんすといへど馬の耳に風

柳かげに西行の畫に

立どまりつれもなくしてたゞひとり
やなぎのかげにやすむ西行

七賢人のゑに

竹林に藪蚊の多きところとも
しらでうか／＼あそぶ生醉

九月盡

もみぢゝる菊やすゝきの本舞臺
まづ今日は是ぎりの秋

時雨

おもふことかなへつく／＼ながむれば
しぐれの空にふる小ぬか雨

かいつぶりの繪に

水鳥のかいつぶりをやふゆぬらん
うきよの事を人にとはれば

龜屋の夷講に出店二軒の龜屋も來れり

本店に出だなのけふの夷講
三萬年のかめや手をうつ

すり小木のことば

もろこし杭州の人は日ごとに三十丈の擂槌をくふといへりいはんや萬國の都にすぐれたる大江戸の百萬戸二百六十餘の公侯八萬騎の士大夫二千餘町の市町寺社俳優の數をしらず一日に何萬丈のすり小木をくはんとおもふも例の江戸自慢にして豆腐を杵にかけてくふ祇園守の紋つけたる上方者などは駄味噌を上るとわらふなるべし

市の川市藏市川となり紋所の一の字をもとりて三升となるを賀して

升にひく一字をとりてあめつちの
まことに和合太平記哉

十一月七日酉の市の日舟にて羅漢寺の普茶會にゆくとて

霜月のとりのまちがひ羅漢寺の
　わしのみやまへまゐる普茶船

釜屋堀より市川三升のもとへ大火鉢を鑄て贈りけるに大中といふ文字を鑄たりときゝて

よくよりてあたり給へや梅さくら
　松のけふりのたてるはちの木

市川三升澁谷金王丸にて暫のわざをぎあり

しばらくの聲は成田や不動尊
　七代目黒しぶや金王

酒色財

一休は兒を若俗とよびある人役者を男傾城と名づけて老年の樂とせりむべも日月江海のでんぼうに風雷鼓板のしやぎりとは天地一大戯場の中に乾隆の座元の名言なるべし又あし引の巨燵に伽羅をくゆらせ大夫とふたりかもねんとは油煙齋言因のうたにして小傾城ゆきてなぶらんとは晋子が師走の昔日頃よりみせを引たる内證の遊びならんすべて劇場青樓の樂は老少となく雅俗となくこの上やあるべきされど難波の西鶴が野郎翫びはちりかゝる花の前に猿のねてゐるごとし傾城になじむは入かゝる月の前に挑灯のないこゝろぞかしと好色一代男に出しもことわりなりさて又儀狄とやらんがはじめてつくれる狂水といふものこそをかしきものなれ上戸はをかしく罪ゆるさるゝものなりと双が岡の色法師もいひ盃ははかりなし亂酒は御無用と親父もの給ひ五戒の中でも遮戒とやらとすこしことばの濁りしよりその糟をくらひその志るをすゝるものすくなからずされど此酒色のふたつも財といふものなくてはその樂を得がたしおもふことふたつのけたるその跡は花のみやこも田舍なりと芭蕉の翁も申され三不惑と口ぎれいなる唐人の寐言も心もとなしその財を生ずるに大道あり食ひものは小勢でくひ仕事は大勢でせよこれを用るもの舒なる時は財つねに不足なしと大學にもみえ民生は勤るにありかせぐに追ひつく貧乏なしと左傳にのせしもこゝらあたりなるべしねがはくは金の番人守錢奴とならで酒色のふたつもほどよく樂まば五十年も百年にむかひ百年も千代よろづ代の心地なるべし

ちはやふる神代のむかしおもしろい

ことをはじめしわざをぎの道

全盛のきみあればこそこのさとの
はなもよし原月もよしはら

世の中はいつも月夜に米のめし
さて又申しかねのほしさよ

長崎丸山町遊女千代菊が壽に
袖よりもすねふりてみん千代菊の
まがきのもとの露の丸山

千代菊のちよも長崎長月の
すはのまつりの折はたがはじ

いにしへの沈草亭が中葉にも
おとらぬ千代の菊の一本

一元大武の肉を得て秋一無冬の禁もわするべく

牛くふて水をますかはまゝの大夫
一石六斗二升八合

瀨川路考をいたむ
ゆく路を考へみれば濱むらの
はまの眞砂の名殘つきせじ

ことしいかなるとしにや瀨川路考霜月の末の
露ときえ澤村訥子おことをさめのをはりをと
りぬ鳥がなく吾妻に今を日の出のわざをぎ人
春狂言の花をもまたでよもつ國の旅芝居にお
もむきし事おもへばことしいかなるとしにや

とし若の浦とたのみし紀の國や
かくてはいかゞせんかた男波

今さらにくやみいふてもいはいでも
はれやくたいもなくばかりなり

壬申歲暮
觀世水瀨川もかれてよし原も
やけ野がはらに年ぞくれゆく

淺草市
柳屋楊枝正月屋風神春袋雷神門

淺草の市のにはとりまゝの繩を
荒神棚にかけろとやなく

粟の飯かしくとゝめて五十年
盧生邯鄲の夢のかた書たるに
榮華のゆめを見らる

菊の壽に
七百の慈童もありときくの花
高野六十那智はものかは

七種

拔松拔竹御門前叩菜叩菁俎板邊唐土鳥兼日本
鳥東天未渡素天天

癸酉試筆

お出には及ばぬことを老らくの
はるは來にけり春はきにけり

霞

春がすみ立くたびれてむさしの丶
はら一ぱいにのばす日のあし

雪ふりければ

香爐峰の雪はととはゞ置き巨燵
ふとんかゝげてみるばかりなり

牛天神奉納の繪馬に

くらやみの牛天神の梅の花
色こそみえね加護やかくるゝ

海老の畵に

角もじのいせ海老をみて二ッ文字
すぐなる文字のこしをれの歌

雨乞小町の畵に

さりとては又ことわりもいひにくし
小野の小町のあめの御無心

せんず萬歳の繪に

嘉辰令月吉書始萬歳千秋男踏歌
あら玉のとしのみはしのしたつゞみ
うてやはやせやせんず萬歳

わが肖像をゑがきてうたよめと人のいひければ

食ひつぶす六十年の米粒の
數かぎりなきあめつちの恩

流鏑馬

梅の花しらしげ藤にやぶさめの
やぶうぐひすもおるあやゐ笠

すみだ川白鬚の社の別當西藏院にてえぞのしまからふとより出し陽石をみて

此神のいしのものいふ世なりせば
めのはじめにやあはんといはまし

このいしはたが作藏かしら鬚の
西藏院にたゝせたまへり

春のうた

しら雲の上野の花をみてしより
けふもあすかに日ぐらしの里

下女詞

腰似内庭臼　歯如新漬茄　粧成朝飯後　流柄背檀那

西が原の牡丹見にまかりしにほとゝぎすはいまだなかず

ほとゝぎす四の五のいふてなかぬまに
　四五の二十の日數へし花

卯月の頃かつをすくなければ

かしましい八千八聲なかずとも
　三千本をたつた一ぽん

錢屋金埒のもとより

ふたつ文字牛の角文字ふたつ文字
　ゆがみ文字にてのむべかりける

返し　あとの三文字をたして

すぐな文字帶むすび文字お客もじ
　字はよめずとものむべかりける

こひこくしやうといふ事なるべし

むつきの頃百川樓のあるじに莫大海といふものをおくるとて

千金の春のひかりは莫大の
　うみにながるゝもゝ川のみづ

萬飾蓋子丸大のしやにてたはれ歌人をつどふまゝ一筆かいて君奈齋のもとめいなみがたく右に筆をとり左に盃をとりて諸白のすみだ川にうかばんとなり

みさかなに大のしあはび蟹よけん
　かつしか早稲のにひ志ぼり酒

小野の瀧の繪に

山さらにかすかにひゞく小野の瀧
　木曾の伐木丁々として

狂歌堂の庭に秋草うゑたるをみて

ことのはの六くさの菴は秋くさの
　ひとつふたつはたらぬでもよし

送八百萬神之雲州

遙向出雲大社方　毎年來月定陰陽　三千餘座因行去　八百萬神御託長　宿治彼鍋迎綴蓋　祿高珍寶滿香箱　寄言堂上爾宜殿　乘興莫嬰巫女裳

南川新猫書

東西であらそふとてもきることは
　よしなんせんかねこの迷惑

丹霞燒佛書

經文に入のあたまをわらせたる
　むくいに丹頂鶴的の名
檜舞臺造とたはれ名つきたるものみまかりし
時
なま若き檜舞臺もつくるなり
　いのちながらのはしやいつまで
瀨川仙女一周忌
ぶんまわし年ひとめぐりめぐれども
　いかにせん女の顏もみせざる
三夕の書に
羅漢槇犬まきたつは御はやしか
　百姓山の森のゆふぐれ
鴫澤の西行堂にゐる鴫の
　看經にたつあきのゆふぐれ
この頃は浦の苫やも不猟にて
　なにもかもなき秋のゆふぐれ
忍待戀
はなの下ひそかにのべのつくぐくし
　まちほうけたるみこそつらけれ
鴛鴦の書に

つるぎ羽をむこ引出にてをし鳥の
　夫婦中よき金と水性
初冬遊雑司谷
十月雑司谷。花開會式。天歸妙法。百度至神前。首掛長珠數。手投御賽錢。三盃烟酒勢。不羨祖師像
霜月初子
霜月のはつ子のけふの玉はゞき
　とりてはき出す貧乏の神
首尾の松に月出て船あるゑに
あげ汐に月のかつらの棹さして
　さてよい首尾の松をみるかな
氷梅のかたある衣きたる女の繪に
手をるべきちぎりはうすき氷うめ
　ふみのとりやり香に匂へども
放下僧のゑに
放下僧柱杖にそへて持たるは
　かたきをうちは神通の弓
龜井戸の藤
本院のおとゞの氏のふぢの花

など菅原の廣前にさく

天神開帳に天國の太刀ありとき丶て見にゆき
しに雨にあふ

天國の御太刀のそるしみせんとや
ひとふりふつてはる丶夕立

さつき四日のあした郭公をきゝて

まちつけてきくもよか〳〵ほとゝぎす
おのがさつきのいつか〳〵と

飲中八仙

知章

井戸ばたの茶椀酒にて馬の耳
風吹おくる猪の牙の船

沙陽

酒の香の匂ひくるまのかうじ町
十三丁やよだれたらさん

左相

聖人のたのしみ酒もはかりなく
日には十貫文の入用

宗之

盃のひかりもさすが男へし
くねりまはらず皎としてたつ

蘇晉

さけをのむ長齋坊主めでたしと
布袋一ふく床にかけ物

李白

勅諚といつても一斗詩百ぺん
百ぺんよべどそら川夜ふね

張旭

柳髪すゞりの池にひたしつ丶
むかふ旭のからす羽の文字

焦遂

五斗〳〵とどもるどりも錢ごまの
はだしで逃るくだをまき舌

桃太郎の畫に

三千とせになるてふ桃の太郎殿
鬼が島よりかへり花さく

おなじく猿犬雉のかた書たるに

まじはりもきゞすのけんをけんとして
犬と猿とのあらそひもなし

大門通懷古

思案橋東一郭中大門景色已殊今更無二遊女五丁町一
唯有二米舂千石通一

朝顔

早起のたねともなれば朝顔の
　　花みるばかりめでたきはなし

題二福壽草一

元日草先發、年謙不レ容此花稱二福壽一宦祿在二其中一

千秋井の記

千秋井のほりぬき井戸より水と金砂の出し事は平澤氏のきさんじに書ちらされしよりひらたくあやまり入て外にほるべき穴もみえずされどながしてもぬけめなき朝白園のもとめいなみがたくこがねの砂の數をひろはゞむかし周の國の御家門晉國御殿の御家老をつとめし季桓子とやらいふた人あり井をうがちて羊を得られしに御家老これをあやしみて千年むぐらのたくひにやと孔子といふもの尓りをよびてたづねられし時何やらむづかしき事を引て木石の怪を鬼畜といひ山の怪をもゝんぐはといひ水の怪をかつぱの屁とやらいふと答へ給ひしとなんもとより紅皿闕皿の瀧耳の事なれば筒井づの井つゝにかけし凡でゝはしくは覺え侍らず翁がむかしいとけなかりし時よなく／＼きゝし物語の耳の底にのこれるありむかし／＼舌きり雀のおうむうばの物語に重き葛籠よりはよろづの中よりあやしきもの出かろき葛籠よりは寶出しときく此たびほり給へる井戸よりこのごろもてあそべる五冊物の化物は出ずしてめでたき水とこがねの砂の出しこそ舌きりすゞめのつゞらのためしにならはゞ心まめなるむくいなるべしそれ正直は日天さまかけて淺草のそばの名にあらずついに日月の憐をかうふるかうべに神の宿札をうちたまふところとなんされば堀ぬきのゐのふかきめぐみありて若水はやき車井のめぐりよき幸來るべしとまをす

千紅萬紫終

後序

いにし明和の頃陳奮翰の寐惚文集七年傳天明のとし四方赤良の萬載後萬載才藏集四方のあか又通詩選稽那山人藝者集などみな去年の暦にして其時々の流行なるべし下里によせては巴人亭あり浪花にありては蜀山人ありその蜀山の兀として遠山鳥のさくら木に殘れる花の千紅萬紫花ごよみのこまかに見あつめにた山の文字かきちらしつゝ眞名と假名とをえらばざるはもとより口〇屋の板なればなるべし文化丁丑の春食山人復盞に志るす

萬紫千紅序

發口吟詩揮毫如有神なるは東坡老人翰林翁と蜀山先生翰林翁となり似たる物は烏とかや烏賊に非して胸中に墨あり隨時吐出し來れば紅梅紫蘭の氣紙上に溢るこれを見せたらましかば古梅園も南都去たる妙ぞと驚き油煙齋もいかなる由緣なるらんと疑ひぬべし就中狂詩は唐宋の法を用ひ當時の洒落と風雅を煉まじへて搗事一萬八千杵堅き中に匂ひありて膠の過たる京製の銅脉の箔墨にことなり狂歌は萬葉古今の烟煤黑塵黑主が風を慕ひて其道に黑けれども餘り古きは光澤なしと活眼大悟の達磨形今樣に打碎きて見叢もよろこぶ墨の折むざと詠み捨給ひながら木端の摺小木に物せしひやかし墨の臭きに類せず片紙隻字も悉く珍珠麝香にあらざるはなしこゝをもつて知與不知なく緇林の薄くらき頃より來り求て墨をさゝげとも退ず前後を爭ふて湧が如く恰ゆしまの札場に似たり自是三千第一番の先生なればなるべしその富や角丸が屋を潤し千紅萬紫の書九玄三極の墨よりも行はれてよろづの寶かき集る年の始また先生の袖につきて戀わたりたる後編なれり名づけて萬紫千紅といふ下から讀でも永き代の不朽に傳る新版物貢黑に成つてこれを摺らば紙價かならず涌貴すべし抑此角丸屋は方子脊が腰を窯たる鋪にやあらん方と角との方角はわきまへねど狂歌堂の惠方にむかひお師匠樣の御意にまかせ天筆和合太平記の序開に龍香劑の墨の精と扮してする墨のゆがみなりにまゐるす

文化十五戊寅春　四方歌垣

萬紫千紅

六十三になりけるとしよめる

あら玉のとしも六十三番叟
　とう／＼たらりたらり長いき

子日

春の野に鍋とり公家もたちいでゝ
　ひくや子日のまつの牛房根

梅やしきの花みんとて出ゆく道に入江町のかねをきゝて

鐘の聲耳に入江のうめの花
　いま巳の時と盛なるべし

新梅屋しきにて

和仁きしがもて來し梅の花なれば
　世上の春やひとのみにせん

吉原櫻

これはたが下やしきかとみるまでに
　植し櫻の花のよし原

鼎かぶりの法師の繪に

うしの時まゐりかなどゝ人とはゞ
　鼎かぶりの僧とこたへよ

六歌仙の畫に

歌よみのむくさの中にをみなへし
　をとこ山にもまさる一もと

雲林庵見ニ玉梅文鳳二女史一玉梅善レ畫文鳳善ニ詩及書一三月初吉

文鳳如ニ舟月一玉梅似ニ玉山一昨夜十軒店見ニ此二人顔一

上野花

此春は八重に一重をこきまぜて
　いやが上野の花ざかりかな

感應寺花

入相のかねこゝろせよ感應寺
　はなのあたりに富はつくとも

柳の葉に蜘蛛の巣たる繪に

あぶかしい一葉にのれるくもをみて
　船をつくりし無分別もの

嚴島の畫に

みやしまをみせんといへる人あらば
　見よ三景のいちきしま姫

鶴のゑに

をさまれる御代はけつこう〳〵と
　おほゐそをすをくだかけの聲

龜井戸の藤花ざかりなるをみて

すみだ川隈におくれ龜井戸の
　藤のはなにはやつとはひつく

待郭公

もや〳〵と青葉にくもる夏げしき
　めくらがみてもほとゝぎす空

英一蝶がゑがける太神樂の賛

かゝ獅子の舞はぬ先から里の子が
　手のまひ足のふむを覺えず

早乙女の畫

早乙女の脛のくろきに仙人も
　通を失ふ氣づかひはなし

烏亭焉馬七袠壽詞

ことし桃栗三年柿八月をまたずあやめのさつき十七日野見てうなごんすみがねの矩をこえず人間萬事塞翁が馬馬老人人生七十古來まれなる賀筵をひらく〳〵われ四十年來の知己なれば世の人のもてはやす七の字づくしでもかゝねばならぬ所なれど八算でもいとむづかしき七の段何とおくべき質草もなゝつになる子が七ついろは七言は柏梁の詩にはじまり七文字はいづも八重垣のうたにおこるそも〳〵七十の賀のめでたき事七曜のかゞやくごとく七里が濱の眞砂のごとく春の七草のごとく秋の七くさのごとく七里にざはふ鯨のごとく七瀬の川のまさに至るがごとく七高山の壽かけず崩れず七百餘歳の慈童のごとく七なんぴそゝの毛の長きがごとしと天保のうはの九如をうたひ太平樂の卷物をひらく七年の夜の雨に燕耆蓮孝記の歌吹海をしのび碁太平記の七ッ目に宮城野しのぶがむかしをおもふ吉原年代記は版もとの七もがりを悅び歌舞伎年代記にわざをぎの七變化を盡すことゝに新作おとし咄は此道の開山にして其門に入るものは七軒の茶屋に座して七越のおいらんをまつごとく新造かぶろの諸門弟七尺さつて師の影をふまずもとより花の江戸ッ子なればなまぬるき上方ものは七里けんはいよせつけずあたりをさる事七多羅樹七衆七佛七觀音天神七代七の社七賢七曜七福神も照覽あれお江戸七代談洲樓の壽に浦島が七世の孫彦そしはご五

十六日七千五百頭馬の出るまで生つゞけ野呼つかも
なし
長安[illegible]に七[illegible]
　　つむともつきじ烏雲馬のとし
左式
おもしろや鶏つかひよりもかねつかひ
　　この[illegible]に[illegible]半丈に
風の[illegible]
墨[illegible]にし[illegible]さ[illegible]
　　つゆちる窓の風のあり竹
雲の梅の霧　右
氣をつけて[illegible]えだを[illegible]れ
　　こきはつ[illegible]
西[illegible]の霧　左
水游の日本ばれのけしきより
　　あめのよゆかしからさきのまつ
雨千の霧に
はつ[illegible]にみてさへよしと夕さされ
　　たずかねことのかねつけてまつ
う[illegible]しの[illegible]に

酒[illegible]の第一は[illegible]のうたかはせ
　　いつもひだりをうつて勝とす
平[illegible]
[illegible]市に[illegible]中に天下の[illegible]山[illegible]ければい
まだ必しも文を[illegible]せずたとひ[illegible]すとも文わらべ
のことは[illegible]こし[illegible]
[illegible]して[illegible]
[illegible]中に[illegible]は[illegible]中に天下の人情
[illegible]を[illegible]上は[illegible]大人より下はあや
しの倡優隷卒にいたるまでことごとくみてつまびら
かに諳じたれば心におもふ所筆にのらずといふ事な
く筆の動く所こゝろのごとくならずといふことなし
[illegible]
[illegible]
[illegible]
にいたりては一流の文法にして人の氣のつかぬ所を
[illegible]
の御留守居東里の子産といふ人ありてその國の辭命
を[illegible]これ[illegible]にや[illegible]
としその子大[illegible]

めて一集とし舊友圓乘紫料の二子にことづてゝ予が
序をもとむる事しきりなりわれ朝夕のいとまなくて
一日〳〵とすぐせしうちに紫料も集を辭してこよ
の國にいりぬればわがみさへ心もとなくとく筆とり
て同じ心の圓乘のもとにおくりぬ半嵜翁ふたゝびあら
ば破顔微笑し給へ餘人のしる所にあらじかし

紺屋町一丸の屏風に職人盡の繪あり與刺の門
にたがかけあり

永楠の月やたがやにさしたゝみ
　　あふみおもてとみゆるさゞなみ

砺師

三尺のつるぎをとぎて四百年
　　さびの出ざる代なもここそあれ

塗師

いかばかりうるしぬるでの紅葉ばや
　　山のひら手も谷のくぼても

具足師

太平のみよにうまれてむし干の
　　かざりの具足おどす日出たさ

文月十八日蒲衣謙洲大人十三回忌に

むかしみし人はもぬけのからころも
　　きつ十三のとしやたちけん

隅田川

阿保親王第五にん目のむすこかな
　　すみだ川原をひとりぶらつく

題しらず

江をわたる春は梅川青柳に
　　ふねさしよせているゝみさかな

採蓮女の畫に

蓮葉のにごりにまだくづしにて
　　なを紅粉をからとあさむく

長月朔日人のもとより荻をうつし植て

あきゝてもすでにとをはなみそよそと
　　軒端の荻の指南し草笥

立君の讃

いにしへの名にたて君ときこえしは
　　高師の濱でうけしまつ

高師のすさきは高師濱にみえはきだめのおとつは
駒文耕寺書し武野俗談に見ゆ
侍待侍從

色きやくのくるかく〳〵とまつよひの
　　よそにふけゆく引け四つの鐘
　伏柴加賀
胸先にこるばかりなるなげきして
　　きぬ引かつぎふし柴の加賀
はつき四日本所廻向院に筑波山蠶養權現の開
帳にまかりしにきのふ三日に事をはれりとき
くもほいなし
開帳のかひこの神をきてみれば
　　きのふの夢となりし蝶々
　喜撰法師
我菴はみやこの茶つみうまひつじ
　　さる酉戌亥まうし寅う治
加賀の國にすめる越川氏の家に藏る龍尾石の
硯はいさごのこりかたまりておのづからあや
ある石のかたちをなせるを人のたくみをそへ
て硯とはなせるなりけりこれにざれうたよみ
てとのもとめいなみがたくいさゝかをろちの
足を書そふるものならし
龍の尾のすゞりにむかひあま雲の
　　すみすりながし筆うるほさん
紺屋町龜屋の天井に三升のかたある中に歌を
かく
はかりなきよはひとぞみる千年の
　　つるかけ升や萬年のかめ
　姨捨山
さらしなや姨をすてたる山あれば
　　ひろふ神あり月よみのみこ
小倉の山莊に黄門定家卿時雨をきゝ給ふとこ
ろかきたる畵に
小ぐら山みねのもみぢば一葉づゝ
　　しぐれに染る色紙百まい
豐島屋のあるじがうたに「下戸(カキジウ)の家内の外は世
の人の下戸ならぬこそをのこはよけれ」とか
きて慾山人とたはれ名書けるに
しろざけのうれる間は世の人の
　　下戸ならぬこそをのこはあしけれ
　富士に雪ふる繪
ふりつゝのてに葉をみせてさくや姫
　　白粉こぼす雪の明ぼの

手柄岡持追悼

長いきを手がらにしたる岡もちも
　いつか木魚となりにけるかな

燕斜翁をいためる詞

燕斜が別業に題すと戯れしも三十年あまり志のばずの池のふるきむかしにてみよ菊の盃をくみて管を巻物くりかへせしも七百とせとやすぎぬらんことしむつきのはじめ朝の雲のかへり足にさかやまひをとき彌生のつごもり何がしの園のまとゐにふかみ草の花みしを此世のかぎりとしてさつきの末にみまかりぬときくにもむねつとふたがりてとみにゆきとふらふ事あたはず年ごとのはるのはじめに手づから七草を植ておくれる事などおもひ出るになゝくさ蒔目わたる鳥のすみやかなるがごとし

春ごとに贈れるきみがほとけの座
　かへすやもとの五行たびらこ

せりなづなつみもむくいもなき身には
　さぞ後の世のすゞなすゞしろ

三幅對の畫讃

左　日の出に川水

日はてるともたえずとふたか有がたき
　きみがめぐみのふかき川水

中　翁

翁渡三番叟風清一二松請看千早振神彦徽其容

右　月に瀧あり

月見酒とう／＼たらりたら／＼と
　なるは瀧する落る山／＼

樵子漁童の畫讃

むしろ柴かり童となるとも大工わらはとなる事なかれむしろあまの子となるとも肴屋の子となることなかれ

山たかく海ふかければいさぎよき
　うきよの塵の外の風の子

四萬六千日

觀音四萬六千日百年三萬六千過莫言一萬日餘計百度囘人日日多

巣鴨のきく

月令の月行事は菊に黄花ありとてふた茶碗の菊味を味ひ五斗米のすて扶持をいやがる五柳先生はきくをまがきのもとにとりて白丁の德利の來るをまつ又は

とけくさい蓮華ずきの濂溪殿は菊は濂谷の隱居とやら隱逸とやらいはれしがちか頃巣鴨の五軒町七軒町もいつしか五十軒七十軒となりて駒込染井のはてまでも百種のつくり物千狀のばけ物所せく東籬も花壇も百姓屋も御酒さかな卽席料理十王の勸進もくはふがため十念の和尙さまはくはぬがためも又ありがたし

感應寺すがもの鐘につきませて
　富の番付菊のばんづけ

鈴木欣次兵衞表德を赤貝といふことし神無月廿日頓滅ときゝて

きのふまで欣々としてきたれるも
　はや空々となるぞかなしき

居風呂の形したる爛風呂に書つけゝる

嘉肴冷酒爛無レ極

此ちろり外へはやらじ湯加減も
　あるじの側に居ふろの爛

述懷

日のねづみ月のうさぎのかはごろも
　きて歸るべき山里もがな

霜月十五日雪ふるこれ四度めなり

ふる雪は一二度ならず三度四度
　またいつかはとまつぞくるしき

信濃路へこしぢとみゆる雪ぐつや
　下駄にはそりのあはぬかんじき

源氏繪に

北山のいぬきがはなす鳥なれや
　はるの霞のむらさきのうへ

草かりわらは雀を手にとりて牛にのれる繪に

牛の尾をひくにまかせて草かりの
　てにとりかへるすゞめいろ時

劉玄德關羽張飛の圖

桃園はいづれ兄やら弟やら
　梅とさん〳〵三國のとき

和歌三神

たちかへりみつの御神ほの〴〵と
　明石の浦や和歌のうら波

早春

萬歲のつゞみにつれてうぐひすも
　ほうとはつねやうち出すらん

上元の夜雪はれ月きよし
正月も半分くひしもち月の
朧豆腐に雪の小まつ菜

半田稲荷

半田稲荷大明神鎮座葛西金町濱、麻疹疱瘡共ニ無レシ恙、信心堅固息災身、

いなりやま命婦の裳瘡赤裳がさ
かへす袂もかろき神風

傾城雨中道中の畫に

けいせいの雨の道中双六に
ふるといふことはならはざらなん

小野小町

とめられてつひゐつゞけもことわりや
ひけ四ッ過の雨乞小町

女三の宮

柏木のかし棹でひくすがゞきは
女三のいとにから猫のかは

根岸の抱一隠君をたづねしかへるさに鞘町雪ノやの花の會におもむくとて

やくそくの轡つまりし鍔本の
根岸からきてはまる鞘町

梅

同勢の桃もさくらもつゞくべし
一ばんやりの梅のさきがけ

西瓜

いつはりのなき世なりせば本なれの
西瓜の皮に穴はあけまじ

加茂季鷹の葵の葉にて大小をゑらせし扇をみて

大小の神祇をゑれとかけまくも
加茂の葵を順にするたか

十八羅漢圖讃序

大明の所帯崩し蘂連の和尚たち十八羅漢の圖を畫きてその次の羅漢〳〵に順の舞の偈頌ありそも讃だやら何だやら面白くもなんともなし片手にならすてうち〳〵あなゝき笛のあは〳〵まづ一棒をふりあげてつふりてん〳〵天竺の子供あそびの游戯三昧ちと流行にはおくれたれど放下師の小刀のみ込すうたひ羅闘根性あふ二九の羅漢や〳〵

寠一休蜀山人和南

なにはにありし八里半といへるやきいも江戸
に流行しけるに
四里四方茶猶のはらになりてはてゝ
みな八里半九里の燒芋
彌生七日牛天神の花をみて
天神の乘るでふ牛はねがひがら
はなづら通す花をみる哉
同じく傳通院の花をみて
花やちるらんにおよばす木のもとに
のみつる酒もはかりなき山（無量）
渡邊綱の畫に
上がたの鬼どもいかゞわたなべの
綱はむさしの箕田の江戸ッ子
彌生九日御殿山の花をみて
うれしさをつゝむにあまる袖の岡
花のさかりもそろふゆきたけ
春の野にて
きのふこそすてゝんくとはやせしが
べんくへ草となりにけるかな
近江八景

粟津晴嵐
いそとせの夢も粟津の粟のめし
かしぐまもなくはるゝ夜嵐
勢田夕照
蜈蚣より夕日のあしの長ければ
大はし小橋わたるからはし
三井晩鐘
三井寺の鐘ひきあげし辨慶が
ちからも今は寂滅爲樂
唐崎夜雨
眞晝の日本ばれの天氣より
あめの夜ゆかし唐崎の松
矢橋歸帆
はらむ帆のかへる矢橋のはやめにて
あんじるよりもやすき水海
石山秋月
うすぐらき石山寺の源氏の間
さしいる秋の湖月一卷
堅田落雁
松風をかおる音かとよくきけば

かた〳〵のかた〵ならぶ落雁

比良暮雪

山もりのひらのあは雪ゆふ豆腐

うゝくる頃やつぽと詠ん

新六歌仙圖

二位黄門後京極西行慈鎮後嵯峨帝六歌仙歌六首 根、
無二小野小町名、

鷹の記

そも〳〵鷹に仁徳天皇の御代に百濟より來る名を倶知といふ酒の君といふもの足緒をさし鳥をとらせて叡覽にそなふ百舌野の行幸これなりそのゝち嵯峨天皇新修鷹經をあらはし給ひ寛平延喜よりこのかた無野かた野の野行幸あれば〳〵なりき文官は右にすゝむ武官は左にすわし鷹の身よりたなさきかはるといへる獸は死ことわりをまもらぬなるべしこれ鷹は瑤光の星の精にして鏡常の山に生るといへり春鳩となるは仁なり秋獸を行ふは義なり食するにさきをわすれざるは敵なり拳するに猥をさらざるは勇なり逆きをことゝくみるは智なり此五常をそなへていちもつの鷹とす延喜の野守の鏡寛平の宮瀧の勝負萬葉のはつとかりはいはせ野の秋萩をとのさ源氏の鈴緒は須磨明石にひゞき二條攝政の記に西園寺中の名をつたへ日下部敦景の鳩の鷹に建仁東堂の筆をふるふ一富士二鷹は初夢にみてきゝよし縄鷹道盛は今川状の第二章なり士に鷹飼鷹生あり農に網さしせこの者工は鷹にこの寸法をきはめ商は鷹弁をはかる古き諺にも百貫の鷹も笋をきつてはにねばまれず鷹は死すとも穂にはつますと火は折ても鷹にとらる、羽向のよいも扇子のよいもみた古の鷹詞にして丸をとるうちをつくの類なるべしいひつゞくれば夜すゑの鷹のなが〳〵しくきじのかたもゝたかのゑきの廻文のはてしなき四十八鷹の數〳〵をとつたか見たかに書きゑるせれば廣野の鶉のおち多くかりのこしてることもあるべし

鈴緒と神酒と洞隊とを茜たる扇に

こがれゆく鳩牙の鐘さいふさと汁

ひとたるものをやぶる劔びし

入舟はいかゞとあんじわづらひし

夏をはらふ劔菱のさけ

萩寺

みさふらひ萩の下露わけゆけば

ふす猪の牙とみゆる大小

松坂屋の別莊は根岸といふ所にありはつき六日こゝにはじめて萩の花をみて

夕日かげ山の根岸の西陣に
　にしきおり出すはぎのはつ花

萩寺にて人々まとゐすときゝて堅川より舟にのりゆくとて

細はぎのちからやすめて萩みんと
　ふするの牙の舟にこそのれ

あるひとのもとより蝦夷の黑百合の苗をおくれるに月草の花咲けるもをかしくて

黑ゆりがさくかとおもひつき草の
　うつろひしとはえぞしらぬこと

古河のわたりにすめる人うかれめのもとにことづてゝ栗の木もてつくれる飯櫃をおくりけるに

これなくば中氣やせんとまくらかの
　古河のお客のおぼしめし次

狩野探幽齋かしく梅の畵に

これがかのかの探幽がふでにかく
　梅としきけばめでたくかしく

淺草庵剃髮を祝して

あらためて淺草のりの道に入る
　東仲町もとの市人

東豐山十五景

東豐山新長谷寺目白不動尊のたゝせ給へる山は寶永の頃再昌院法印のよめる關口の疏儀莊よりちかければ西南にかたふく日影に杖をたてゝ時しらぬ富士のしら雪をながめ千町の田面のみどりになびく風に涼みてしばらくいきをのぶとぞきこえし又物部の翁の牛込にいませし頃にやありけん南郭春臺蘭亭をはじめとしてこのほとりの十五景をわかちてからうたに物せし一卷をもみたりしことあればわが生れたる牛込の里ちかきあたりのけしきもなつかしくこゝにその題をうつして夷歌によみつゞけぬるもそのかみ大黑屋ときこえし高どのにてはゝの六十の賀の筵をひらきし事ありしも又天明のむかしなればせき口の紙の漉がへし目白の瀧の絲のくりことになんありける

鶉山櫻花

昔みし田鼠うづらの山ざくら

けしての後ははなもちらほら

城門綠樹

鯱の魚木にのぼる青葉山
わたりやぐらのうし込の門

溪邊流螢

何がしの大あたまにも似たるかな
かまくら道に出戸(デド)の螢は

桂田落月

しら露のむすぶる霜のおくてより
わせ田にはやく落る月影

平田香稲

平らかな水田もことし代がよくて
ふねのほにほがさくかとぞみる

寺前紅楓

てらまへて酒のませんともみぢみの
地口まぢりのかほの夕ばへ

月中望岳

八葉の芙蓉の花を一りんの
かつらの枝にさかせてぞみる

江村飛雪

酒かひにゆきの中里ひとすぢに
おもひ入江の江戸川の末

長谷梵宇

明王のふるきをもつてあたらしき
にひはせ寺の法師たるべし

赤城霞色

朝夕のかすみのいろも赤城山
そなたのかたにむかでしらるゝ

高田叢祠

みあかしの高田のかたにひかりまつ
穴八幡か水いなりかも

濟松鐘聲

濟松寺祖心の尼の若かりし
むかしつけたるかねの聲〳〵

田間一路

横にゆく蟹川こえて眞直に
通る門田の中せきの道

巖畔酒壚

杉のはのたてる門邊に目白おし
羽觴を飛す岸の上の茶や

堰口水碓

水ぐるまくる／＼めぐりあふことは
　人目つゝみのせき口もなし

紅葉に鹿のゑに

秋はてしのちは紅葉の吸ものと
　なるともしかとしらでなくらん

佛林狗のゑに

朝夕の手がひのちんがこゝろにも
　まかせぬものはあづけたる果子

善光寺奉納

なには江のあしとてすてしみほとけも
　今は本田のよしみつの寺

戸隱大明神奉納

此神はうら島が子の箱ならで
　あまの岩戸をあけてうれしき

秋草に鹿ふたつかける畵に

秋の野のにしきの床にふたりねて
　なにをふそくに鹿のなくらん

狸圖

陰囊八疊敷腹鼓一挺聲文武火茶釜其名世上鳴ル

身しまひ部屋にうかれめのむらがりゐる畵に

傾城のみしまひべ屋は藻をかつぐ
　きつねも干鱈さけてこん／＼

燒繪にて輪かざりを畵きしに

輪かざりの門の松帆のうらならで
　やくやもしほのほだわらもあり

蓬萊亭翁屋の額

なるは瀧の水茶やなれば蓬萊の
　道はいづくぞなしよの翁や

盆石に品川の景をうつせしときゝて

盆石の景色は芝の濱びさし
　ひさしく床をながめいりうみ

何がし君のみたちに參りけるにあるじ「くるゝともかへしはせじなまれ人のたづねくるまの轄かくして」ときこえさせ給ひしかば

生醉のまはりかねたる口ぐるま
　うちいでぬべきくさびなければ

和樂園見寄韻

誰道東方九千歳竊桃三度世中遊功名已共金錢擲
日月徒隨質物流桔梗御紋看兀入樂園言葉學狂

稠先生寐惚嘲脐久未到毛唐四百州

原詩

寄蜀山人寐惚子　　傑園狂生

先生趣似東方朔玩世年來面白遊段機嫌酒疑
浴白舊狂詠筆如流近郷在町聞風起遠國波濤結社
稠打犬兒童知寐惚名高六十有餘州

近江屋といへる商家のみせの中に柱ありその
はしらかくしに歌をこふ

あふみやのかゞみのやまは樂やにて
　おもてにたてし大臣ばしら

武藏野

花すゝきほうき千里のむさし野は
　まねかずとても民のとゞまる

うまごのわづらひし時鬼子母神のかけ物をか
しける人のありければ

親のおやいのりきしもの神なれば
　子の子の末も守らざらめや

額の上に紙をはりていきにてふく繪に

つばきにてひたひの上にしらかみを
　はりこの虎の風にうそふく

唐人あまた卷物をひろげてみる繪に

晴雨とも來ル三月三日には
　蘭亭の記の會主王羲之

本町樂店太中庵のもとめによりて

正銘のこれが本町壹丁目
　江戸の太中庵の妙樂

菊

酒をのむ陶淵明がものずきに
　かなふさかなの御料理ぎく

水鳥のすがもの里のたそがれに
　羽白のきくのいろぞまがはぬ

鎭西八郎の畵に

八郎は弓手のながき生れにて
　琉球いもをたゞとりてくふ

神田祭

九月明神祭禮前外神田至内神田棧敷兩側如花並
蠟燭金屛光照氈

龍田川の畵に

龍田川もみぢばながるめり／＼と
　わたらばにしき横ざけやせん

遊女花妻が竹の畵に
川たけのふしどをいでばきぬ〴〵の
　そでひきとめてはなつまじくや
意馬を心猿の引とむるかた書たるに
かけいだす心のこまをひきとめて
　ゑりぞくかたがましらなるべし
書畵會多く百川樓萬八樓にてあれば
萬八の六書六法五七言
　落ればおなじ百川の水
弘文學士の史館にて本朝の故事を以て聯句をなせしを大和七言城といふ板本二卷あり予戲にこれにならひて昔年つくりし反古を見出たればこゝに書つく
源順方圓臨水面蒼波數則最中秋萱三是否疑
花色白菊立平吹上洲神庿首丘狐白鷺鷄林航海鷗
難求陽春供藥屠蘇散篇序成歌題曲流時雨山深紅
葉積沖津浪立綠林稠昔男河內通情淺今樣駿河舞手柔
妓女妓王人作佛賴光賴信鬼爲雠羅生門氣梳新柳
末摘花香染古袈
富士

みづうみの出來しあふみの御届の
　二三日すぎてふじの注進
鎌倉圓覺寺什寶佛牙の舍利牛込濟松寺にて內拜ありし時
おがむならならくにゑづむ事はあらじ
　佛のほねが舍利になるとも
中村芝翫の舞臺にてゑがける吃の又平の像に
上方の役者は性がきらひじやと
　いはんとしては吃の又平
浦島太郎の畵に
乙姬がすひつけさしものまれねば
　あけてくやしき玉たばこかな
辨慶扇を里の子にわかちあたふるかた書たるに
辨慶がさとの子供にくれてやる
　ほり河御所のまん歲あふぎ
孟宗のゑに
末のよとなりゆきふりの孝行も
　孟宗竹もやすくこそなれ
栄花

春の野の蝶々とまれなのはなの
　こがねはたれもにくからぬいろ

豆男畫卷序

いせものがたりのまめ男はまめやかなる男なるべきを形のちひさき豆にたとへて色事の豌豆まめにかきなせしは一合八文舍のたはふれにして大通豆の世のことわざなる青豆の青黛黒豆のくろ仕立枝豆の枝をかはし羽根をならぶる雁くひ豆も鬼うち豆の年をかさねて座禪豆のさとりをひらく豆右衛門のむかしがたりを鳥文齋の筆まめにゑがゝれし一卷にわが口まめの序をそへよと豆のまめがら七あゆみ七里かへりてくふみそ豆にそら豆のそらごとをまじへてしるす

兎の畫に

枇杷のはをもときこしめし玉兎
　それでお耳やながくなりけん

坂東秀佳中村芝翫やりもち奴のわざおぎの畫に

大和やと加賀やと江戸と大坂の
　やつこは外にまたない〳〵

高砂尉と姥の繪に

高砂の松の落葉をかきよせて
　たくやふたりの茶のみ友たち

福祿壽龜圖

南極老人頭似レ匏萬年龜甲尾如レ毛人間萬事慾無レ戴頭與二年齡一不レ厭レ高

白木屋夷講

西のみや神のみまへにかけ鯛を
　ならべてすうる臺の白木屋

同じ家にて榮之のかける黄金の龍の富士の山をこするゑに

とし〴〵にこがねの龍ののぼりゆく
　ふじの高根の雪のしろきや

同じく高どのに白隱禪師のかける竹のはに鮎をつけたるゑに

鰷はせにすむ鳥は木にとまる人はねざけの
　氣をやすむ

と書せたまへるかたへに一首をこひければ

惜いかな白隱和尚出家して
　さすがさびたる鮎もくはれず

鎌倉河岸春のやのもとにて夷講の日長齋夷の

鰹つりたるところを書きければ
名にしおふ鎌倉がしの魚なれば
　鯛より先にえび壽三郎
大津畫の讃
雲ゐから落すたいこのなる神は
　天のいかりをおろしてやとる
福壽草の畫讃
花生福海波祖固壽山石
元日の草としきけば春風の
　ふくと壽命の花をこそもて
文化乙亥の年水無月十三日難波の蕪坊みまか
りける時のうた
蕪坊
極樂の東門前にすみぬれば
　目をふさぐとも道はまよはじ
思へば享和はじめの年浪花にまかりし時折々
なれむつびし事きのふの夢のこゝちして
われむかし轉法輪のくるま道
　たづねし寺の西門中心
定家卿月をみるゑに

十五夜にかたふく月のうたよめば
　あかつきのかね權中納言
木挽町松川といへるやどの額に伊川法眼のか
ける梅に福壽草をみて
春風のふく壽そう／＼咲いでゝ
　梅の立枝の花をまつかは
岩井杜若がわざをぎをたゝえて
杜若一もとゆゑにむら咲の
　朱をうばへる女ゑばらく
江口遊女象にのる畫
江口遊君尻白重普賢大象鼻何長文珠若衆是馴染不
駐西行乞食坊
現金にかひなばわづか百象の
　かりのやどりをゝしむ君かな
○
世の中の定の小判六十目
　桐の葉わくる月の光次
錢時の相場は上り下りにて
　青海波の汐のさし引
にた山の多き世の中時がしは

不　仕　と　書　て　候

月　日

これは鴻の池の家にてたはふれに書きあたへしなり

詠五色

青

藍瓶のあゐよりいでゝ紺や町
やなぎてゝみになびく染もの

黄

金屏風菜たねの花の御殿山
おなじ色なるてふ〳〵つがひ

赤

山王の夜宮の桟敷しきつめて
みせのはしらもつゝむ毛氈

白

八朔のしろむくきたる傾城の
ゆきのはだへのふりもよし原

黒

すみだ川墨すりながす雪ぞらに
今戸のけふりたつかはら竈

周信書に猩々雪を盃にうけてもちたるかた書たるに

酔ざめにいざひとさしと盃も
ゆきをめぐらす猩々の舞

鍾馗投レ鬼圖

笛ぬすむ鬼をとらへて笛ならふ
おにこもれりとしらぬ大臣

淺草市

淺草の市にひかれてあづさ弓
矢大臣門いづるひとむれ

歳暮

ゆく年をしめゆふうちにくる春を
まつや〳〵の聲ぞきこゆる

破魔弓の畫に

高砂の尉と姥とは一對の
ゆみのつるかめ松と竹の矢

傾城禿にきせるもたせたるかた書きたるに

けいせいの守り刀はかよふ神
吸つけて出すきせる一本

生姜と蕃椒との畫に

はじかみをすてずにくひし聖人も
　とうがらしをばくふやくはずや

祝壽

帯たて草履に灸はすうるとも
　千秋萬歲われは長尻

むつき四日下谷のほとりの書肆にて年頃もと
めし芭蕉の翁の文草にをくる消息を得て

年頃のおもひのたけの草まくら
　ばせをにつゝむゑかもまさ夢

題滑川圖

鎌倉青砥左心共滑川清何事文惜長傳百損名

孔明

孔明が羽根の扇も綸巾も
　どこやら似たる菊水の紋

ゐのしゝの子をつれてかけゆく繪に

いきほひをかるもの露にうり坊も
　ふす猪の床やかけ出ぬらん

題御所車圖

何人筆軸自繇繇引出毛車畫兩輪源氏葵爭御息所

菅原梅駐時平臣

遠州はま松ひろいやうでせまいそこでもつて
車が二てうたゝぬといふうたうたふをきゝて

さみせんのいとにひかるゝさかづきの
　そこでもつてや長くなるらん

年〳〵の七夕七首ひこぼしのひく牛に汗しは
たおり姫の梭もなげつべし今年は竹の林のふ
る事ながらかの犢鼻褌をさらせしことをおも
ひ七のかしこき人々の名によそへて

嵆康

あまの川ひきて水うつ柳かげ
　てんから〳〵とかぢのはの歌

阮籍

短冊の竹のはやしの靑まなこ
　あすゑら露のうきめをやみん

劉伶

七夕に婦人の言をきくなとは
　ちとさしあひなつまむかへざけ

向秀

是もまた星の手向か入かゝる
　ひやろ〳〵とふく笛の聲

山濤

璞玉のよにあらはれね天の川
　ふかき契りそかきねこん金

阮咸

天の川さらすふどしのさらさらに
　むかしの人のふりなわすれそ

王戎

折からの桃も林檎もありのみに
　苦き李はほしに手向じ

飲酒法令

酒はのむべしさけはのむべからず
一鐘供祀儀にはのむ
一珍客あればのむ
一肴あればのむ
一月雪花の興あればのむ
一二日酔の醒を解にはひとりのむ
この外群飲佚遊長夜の宴終日の飲を禁ず童謡にいはゝおまへその様に酒のんで猩々にならんす下心猩々よくのめども禽獣をはなれず人として禽にだも鹿猿べけんや

火をいましむる詞

火は五行の一にして民生一日もかくべからざるものなりされどその災をなすにいたりてはむかひがたかくべからず天火は猶さくべし人火はつゝしまずはあるべからず禍を轉じて福となすはその德をさむるにあり柳々州が王參元の失火を賀する文も小むづかしわれに七字の秘文あり毎朝手あらひ口そゝぎ南にむかひて三遍となふべし
その文にいはく　家内安全火用心
　ゆめゆめうたがふ事なかれ

　わが五十三になりけるとしはじめて難波におもむきけるに天王寺西門の外に蕪坊とてたはれうたをこのみし人ありき今はなき人なれば

いそぢあまりみつのうらなみ立かへり
　　むかしになしてはしかぶら坊

　春の日の長井の浦に長居して契し人をえたわびて尾生が信にはたがへどもたちかへるとて苦やの柱にすみの江の岸によるからに來る人をまつは久しきものとこそ志れ是は蕪坊が歌なり享和二のとし元日住吉に詣でけるに蕪

坊とくきて歸りけるよしをきゝて苫屋の柱に書つけゝる歌

すみよしのまつべきものをしら波の
　立かへりしぞゑづこゝろなき

そのはしらちか頃までありしとか人のつたへ侍りし

達摩畫賛

南天竺の菩提達摩はるばると西より來りて梁の武帝にまみえし時民の膏血をしぼりて堂塔伽藍をつくるをみて無功德とこたへつひに少林のもとにかくれて面壁九年敎外別傳不立文字とはいへど一切經の版行もこの門流の末になりておがみづきのめしにふぼんさんもこの蘗板のおかげによりて大般若の轉讀も出來五七言の偈でも作るはまだまだ此輩なるべしいたづらに雪まろげの作りものとなりて子供の杖に穴をあけられ抱瘡見舞の不倒翁おきやがれ小法師とあたまをはらるゝも又白眼のいたりならずや

大つごもりの日狂歌堂のもとより兎の肉をおくりければ

門松のかぶせを守りくるとしの
　あら玉うさぎ得たるうれしさ

萬紫千紅 終

後序

書肆衆星閣去年の春世に行はれし千紅萬紫の二編を乞へども先生さらにゆるし給はねば天窓かき〳〵乞けるはそれ赤壁にもうらあそびのおもしろみあり梶原も二度のかけに功名を顯し蜀にも前主後主の二主ありたれば蜀山先生にも前編に後編あらん事をとせちに願ふによりて先生つひにゆるしたまひさらば二編限にすべしとて前編を一編返して萬紫千紅と題してあたへ給ひぬ書肆よろこびてわれに又例の拙筆を乞ふもとよりわが贋筆に人をまどはすは狐にあらで先生の威をかるとらのはつ春にあら玉くしげふたゝびこれをしるす

こき薄き硯の水もしらずして
　　鵜の眞似をする烏羽の文字

前編のまたもりかへの食山人文寶亭の臺どころ引窓の下に雜ばしならで筆を探る
　文化十五とせといふとしの春のはじめもちかゆのせち祝ふ頃

蜀山集

はたとせあまり三とせはかりの事にやありけんもろこしにわたさるへき銅の事承りてあしかちるなにはにありける時おほやけ事ならぬ市人らと文書つかひてまことの名をかくにもあらしと銅の名を蜀山居士とはいへれば蜀山人／＼と書すさみしをまことの名と思ひとりて蜀山／＼とよふ事となりぬ

文政六のとしむつきのはしめ羊日
蜀山人七十五歳にしてかく

癸未羊日

書ながす歌は硯のみづのとの
ひつじやはまん帋の数／＼

詩歌をかきちらすとて

されうたのてにはもしらす作文も
たゝ平仄をつゝけてや見ん

福原おしげといへるうたひめによみてつかはしける

春風のふく原ならむ松のはの
おしげりなさる人おほからん

ある人門松をかひけるに鳥の巣ありけるを祝して

千年のよはひ野火止（ノビドメ）松かえの
さしづめこれは鶴の巣籠

癸未のとしのはじめに

みつのとのひつじの年は寳暦の
十有五にて學に志す

六十一年前の癸未はわか十五のとしなればなり

驟雨飛聲入レ鼎來

にはか雨ふりつる音はあし鼎
よしあらぬ茶のにゆる音□□

これは播摩の國青山正俊か求によりて走筆

尾關氏彌生の十一日來りて今朝棺をひさくもの門をあやまちて門の内に棺をになひ來れりといふもおかしくて

かつがれる竹島町の間違は
棺の高きにのぼる吉左右

と祝ひうたよみて酒すゝめて歸しぬ

記ニ北越謠一 并引

辛卯季秋、初見ニ越人滕生一、酒闌滕生歌ニ其國謠數曲、其音偕偉、其辭浮靡、於レ是乎嘆滕生確乎拔乎其俗矣、亡レ幾罹レ災北歸、不レ見ニ滕生一久矣、長夏無レ事、讀ニ六朝諸樂府一、於ニ我心一有ニ戚々焉一、因序レ所レ記、擬議成レ篇、豈敢曰ニ采風一哉、

闇ノ燈火暗クモシノベ伽羅ノ薫リヲシルベニテ

迎レ君夜來起、辣燈隱ニ曲房一、欲レ知ニ儂所在一、風動奇南香、

何ヲイフトモトヤカクイフモ寺ノ鐘ハ鳴ル鳥ハ鳴ク

繾綣不レ可レ盡、離情不レ可レ語、鄰鷄向レ曉鳴、山鐘已報レ曙

鳥ハザンノ〱ト今亂ヲ作ル殿サオロカナ今シノブ

五更天將レ曉、鷄聲鳴不レ已、所レ歎一何愚、徐徐踰レ牆至、

枕屏風ニ書置クホドニサビシソノ夜ハ起テ讀メ

小屏金屈膝、上題長相思、請君獨宿夜、起坐誦ニ斯詞一、

憶ヒ出シマス床トル度ニ二人寐タモノコノゴザニ

夜夜設ニ空牀一、惆悵一何甚、曾是儂與歡、華簟共同寢、

紺ノフクサニ覆伽羅コメテ落スフリニテ樣ニヤル

青青緗袂色、中有ニ膏沐香一、自差敢持贈、故墮郎君傍、

身過ギナリヤコソ九千ノ洋ヘ思フ殿サヲヤリマスル

灘頭九千里、波浪與レ天平、非レ爲ニ苦家計一、那使レ歎ニ獨行一、

來イトイフタトテ行カリヤウカ佐渡ヘハ四十五里浪ノ上

莫レ問ニ相隨否一、佐海異ニ風土一、相去知幾里、行程四十五、

殿サ心ハチクマノ川デ上ヘトロノ〱底早ダ

歡心如ニ筑水一、安流輙可レ挹、深自見ニ其底一、激流何太急、

大工殿ヨリ木挽殿ニクイアカヌ木ノ中引キソケル

不ニ必惡ニ匠人一、樵夫信可レ惡、樵夫執ニ斧柯一、中斷連理樹、

戀ノワヅラヒ親達ハ知ラデ藥ノメ〱洗藥ヲ

懷レ春易レ爲レ病、顏容日憔悴、耶孃不レ解レ情、但言
服ニ藥餌一、

オトコ美男ニ心ノナヒハ深山ガクレノ山櫻

芳樹生ニ深山一、花開人不レ識、體貌已閑麗、底爲レ不ニ
好色一、

寄ニ懷北越滕子文一

嘲レ杯落日轉蕭條、別後浮沈恨未レ消、一座惜無ニ東
武子一、百函難レ託般洪喬、天涯涕淚東流遠、匣裏芙蓉
北斗遙、高臥白山明月夢、看君已壓大江潮、

甲寅元日

雲霧霏微曙色披、江城佳氣自熙熙、乘レ軒客競ニ朝元
節一、擊レ壤歌如ニ太古時一、初日晴來分ニ大路一、寒梅雪少
發ニ南枝一、東風處處靑旗動、不レ負平生一酒巵、

春雨飮ニ甘露門一次ニ雪山師韵一

相逢蓮社酒、不ニ必負ニ良時一、莫レ以ニ鐵如意一、不レ如
金屈巵、

早春

郭外梅纔發、園中柳欲レ眠、冬春不レ見レ雪、空繫ニ子
猷船一、

東叡山探レ梅

春淺寒梅已著レ花、松間一樹帶ニ明霞一、東方近指瑠璃
殿、却レ月淩レ風未レ足レ誇、

送ニ甥義方一

災厄何須レ問、行裝自有レ光、忽乘ニ春雨一去、千里課ニ
農桑一、

花朝節示ニ諸子一

梅柳參差二月初、花朝介節會ニ幽居一、群賢盡集少還
長、一醉何論親且疎、家苑嚶鳴聞ニ谷鳥一、城門災厄
免ニ池魚一、莫レ言傳散爲ニ華髮一、贏得嘲杯與ニ讀書一、

當レ壚曲

胡姬十五郎當レ壚、楊柳靑靑繫ニ白駒一、笑向ニ少年一能
笑語、人生莫レ作ニ霍家奴一、

春日飮ニ甘露門一得ニ歌韵一

歲歲看レ花一醉歌、法雲深處幾經過、千枝色拂ニ靑樽一
韡、片雪光添ニ白髮一多、徒弄ニ文辭一遊ニ國學一、未レ逃ニ
名利一託ニ山阿一、人間萬事皆春夢、酒醒明朝若ニ老何一、

戊午元日

雲霞朝度大江城、陌上衣冠作レ隊行、此日光明多ニ氣
色一、好古都邑萬民聲、

早春草堂小集

題二挿花圖一
採二之三徑下一、挿二向一瓶中一、爲揀脩枝久、經營枉費レ工、

春日泛レ舟到二木莊一
城門春早柳枝黄、烟水霏微白鷺翔、行過二杏花壇下一去、將下逢二漁父一和中滄浪上、

其二
暗香踈影鎖二蓬萊一、且繫二扁舟一野水隈、似レ解二草廬三顧意一、一春重開臥龍梅、

僧院春日
篆煙風靜出二閑房一、無數天花墜二石牀一、鳥雀倦飛僧入レ定、遲遲白日轉二長廊一、

桃花
爛熳仙桃照二眼殊一、春光氣暖醉二玄都一、曾看觀裏移二千樹一、誰向二庭中一種二五株一、莖葉和レ烟含二黛綠一、枝枝著レ雨脫二唇朱一、晉時顏色如レ花女、還解二成レ陰結一レ子無、

即事
嬌病臥レ牀求二藥餌一、朋來中レ酒試二金巵一、無情最有二蕭蕭雨一、正是桃紅柳綠時、

東叡山看花
朱閣金題仰二吉祥一、東山春色樹蒼蒼、淡陰輕熱稍含レ雨、一塢千花已吐レ芳、

送三人還二浪華一
千里神交不レ易レ逢、離筵西望翠微重、烟迷浪泊津頭月、花落天王寺裏鐘、

北里竹枝
五街燈月爛二春風一、佻達相窺是狡童、烟火神仙卿未レ盡、隔レ窓私借小金筒、

深川竹枝
蛭子宮前濃二暮煙一、芒花樓上急二繁絃一、良宵刻燭秋猶短、送レ舊迎レ新來往船、

賦得春水滿二四澤一
百花東岸還西岸、一水前村且後村、合レ有二龍蛇生二大澤一、不レ乘二雲氣一莫二飛翻一、

題二靜山坂先生像一
先生名光淳、稱二將曹一、余成童、受二學於先生之門人内山二文卿先生
靜山夫子詠二歌詞一、卜二築城西五段坡一、生二長尾濃一終二武野一、儼然遺像是我師、

護國寺看レ花

逢著店頭春夢婆、看レ花沽レ酒幾年過、滿庭白雪香千
樹、不レ假二松間夕照多一、

　隣花

枝枝紅白出レ墻新、半舞二香風一半委レ塵、爲レ蝶蒙莊難
レ辨レ夢、寬二人楚女一易レ瞋レ春、

　彥嶺越石子心遊二丹陽天梯一得レ松栽歸種二之齋
頭一、徵二諸名家詩一、因賦爲贈

知君曾泛二謝湖中一、攀二盡天梯一踏二彩虹一、採二得滄洲
松樹子一、移栽淡海彥根東、朝陽帶レ露纔傾レ蓋、夜月
和レ烟細聽レ風、楚楚可憐盈二丈尺一、大藩應借二棟梁
雄一、

　題二妙法寺壁畫山水一

滿目黃金界、現成山水光、此中閑靜境、何處得二津
梁一、

　墨水看レ花

渡頭花氣藹二春陰一、遠映二長堤一柳色深、如レ此風光堪
レ可レ賦、誰傾二墨水一灑二胸襟一、

　北越吳浚明兒善レ畫、十二歲而夭、題二其所レ遺畫
寒山拾得一

十二神童老畫師、前身未レ解後身誰、紙如二經卷一毫如
レ帚、拾得寒山箇箇疑、

　遙題二備中沙美浦一、惠池爲二縣令菅谷氏一

南浦稱二沙美一、東風被二海涯一、俗淳行レ縣日、雨下勸
レ耕時、自有二朱提賜一、新看二綠字碑一、汪汪千頃水、惠
澤溢二滄池一、

　竹裏梅

琅玕凝レ碧雪封レ條、臨レ水交加隔二野橋一、乍見黃昏明
月動、竹香梅影共蕭蕭、

　悼亡詩六首

萬點桃花雨、蕭蕭袖不レ乾、更添二雙涕淚一、併洒二鐵
心肝一、

　其二

梅諸汝所レ蓄、春服汝所レ縫、衣食皆因レ汝、一朝無二
我供一、

　其三

長女嫁二鄰里一、男兒未レ議レ昏、平生何所レ愛、唯愛女
兒孫、

　其四

中年詩酒興、私貯一枝花、愛惜能防護、幾微絕二齒
牙一、

其五

卅歲俺糟糠、無時不下堂、鬼燈照遺挂、猶訝臥靈牀、

其六

去日頻過七、殘春已盡三、自今頭上半、歲歲益鬖鬖、

題達摩像

有聲之畫無聲詩、知者不言言不知、迦葉拈花微笑日、曇摩面壁九年時、

送丹丘翁還河內歌

丹丘仙翁矍鑠哉、七十壯心猶未摧、跋涉山川千萬里、將還河內山之隈、山之隈兮桂樹生、更向小山寫眞形、毫端萬物動愈出、醉裏百壺敲且傾、君不見吏情日局促、欲言欲行且躑躅、一把算子何所爲、對君今夕忘榮辱、

題東坡圖

思在蹇驢上、人行驟雨中、一場春夢後、千載識坡公、

戊午四月廿日過感應寺見枯櫻樹著花

首夏淸和積雨餘、祇林枯木發花初、一枝疑剪雙花勝、造物天工總不知、

奉和姫路侯五日飲江村韻

五日江村飲、鄰翁曳杖行、樽中蒲酒好、天外杜鵑鳴、長絲縣續命、宿雨入餘淸、自有公侯樂、新詩頌太平、

時世粧

圓縮鬢雲頭上大、斜纏手帕鬢邊揚、漢時誰草五行志、白氏徒歌時世粧、

蜀山集終

宛丘子傳

五體

書上文之體

江戸青山久保町
藥種屋長兵衛

右長兵衛儀幼年より學問を心懸已前は質物商賣仕罷在候處元來質物商賣之儀は貧窮之者より質を取高利之金子用立遣し受戻し候月限切候得は流し候樣成儀非道成儀と存何卒他商賣仕度心願にて質藏に入有之候品段々相改め利分調達いたし兼候者へは元金をも棄損にいたし其品計遣し申候品により置主宅にいたるも住所不相知向も有候を所々に相尋返し遣し三年目にて漸相濟申候其後は藥種商賣いたし右質藏の内に罷在不斷書物讀罷在候近江國に田地有之毎年春に成候得者國元へ罷越耕作いたし夏に入候て罷歸秋中右之米を取よせ先祖之位牌へ備へ其後自分一年之給料にいたし是は元來百姓より町人と相成事故本を忘れ不申候心底と相見へ候自分取持之地面に罷在候店借の者家賃等差支外へ店替いたし候へは遠方にても態々尋參り酒一升に金壹分持參いたし是は態と計進し候乍去申迄は無之候へ共何方の店に被居候とも唯今迄之心持にては物入等多々家賃等も滯り可申候間向後は相改物入等無之候樣心懸可申と細々異見いたし相歸り申候一體律義成生れ付にて人々への挨拶等殊之外丁寧にて平生人と對座いたし候とも兩手をつき人之顏を見不申夫故途中にて逢候節失禮之儀も有之候はヽ御免し可被下候へと常々申候久保町より原宿村に參道之橋臺朽損し町入用掛り候を氣の毒に存自分入用にて石橋にいたし只今に有之候此外善行多き者にて一々難書盡御座候平生學問心懸候儀も人前にては深く相隱し候得共作文抔も相應に仕安永年中に死去仕候

俗文の體

長兵衛は江戸青山久保町の質屋なり、幼年より學問を好みしに、質商賣は貧しき者より質物を取、高利の金をかし、定めの月きれるまで、うけもとさるヽものあれは、その質物をなかす事、いかにも非道の事なり、何とぞ商賣をかへてみんと思ひて、藏の中の物

を改め、少も利銀をとらす、元金計りにて其置主へ返しけり、中にも至て貧しくして、元金も調へかたきものへは、元金とらずして其品を返せしとなり、或は置主外に引移り、その所忘れす、所々をたつね、三年かゝりて、やう／＼と事すみけり、それより木樂屋となり、かの質藏の中にとちこもり居て、書をよみけり、近江に田地をもちければ、年々かよひ耕作して歸り、秋その米を取よせて、先祖の靈前にそなへ、己が一年の食料となしけり、その故は元百姓より町人となりしものゆへに、本を忘れぬ心なるへし、己が持たる地の中に店をたてゝ、人に貸置しに、借家の賃錢滯りて、外へ引こし行ものあれは、たとへ遠方なりとも、酒一升と金壹分を持てゆきて、これにをくりていふやうは、たとひいつくに居るとても、みたりに金錢を費しては、おのつから借家の賃も手づかへべし、これより後は心を改め給へといひてけり、生れつき律義にて、人々への挨拶も又丁寧なり、つねに人にむかひ居て人の顔を見たる事なし、それゆへにもし道にて行あふ時、失禮して見それん事もあるへしと、つね／＼いひ侍りし、久保町より原宿村の方へゆく道に橋ありて、つねに朽損し、町の内の費用なりとて、みつからの金を出して、石橋にして今にあり、此外にも猶善行あるへしといへとも、こと／＼く書忘るしかたし、學問の事もふかく人には隱せしか、漢文なともつくり、號は宛丘といひしなり、安永の頃死去せり。

漢學者の文體

宛丘子は東都青山久保街の典舖(シチヤ)の主人なり、俗稱は長兵衞、幼にして學を好み、己が生産の賤きをいとひて、つねに思へらく、典舖の業たるや、貧家の衣を典さしめ、金をかしあたへ、そのこれを償ふに至つて、貴き子錢を加へしむる事、君子の耻る所なり、願くは産業を改めんとて、凡典庫に貯ふる所の物、小大となく詳に點檢し、その子錢を責す、原價を以て返しあたふ、もし至極なるもの、原價を出す事あたはされは、劵書を折てその物を授く、甚しうしては、債主の店を移して住る所をしらさるものあり、百計搜索して其主にかへさゝる事なく、三年に至る頃ほひに其志をなせり、爾來樂を賣て典庫の中に隱れ、書をよみて樂とす、江州に二頃の田あり、毎歳春の

時にいたつて、湖上の田を耕し、夏にして都下にかへり、秋實のなるを收め、千里を遠しとせすして、都下に致し、まづ祖先に薦めて後、己か終年の食にあつ、是己か本をすてゝ末を逐ひ、市井の人となれるを以て、その本を忘れさる微意なり、亦奇ならすや、己の市中にいとなみたてし一廛をかりうけてすむもの、店價を償ふ事あたはすして、他の鄕堂に遷るものあれは、必一壺の酒と一分の金とを齎し行てこれに贈りていはく、子か家にあるや、職業を惰り、常に雜費多し、今よりして後心を改めみだりの費をなす事なかれと、切に諫めてかへれり、其人となり、質樸にして、人に接して過恭なり、人と應對するごとに、手を地につき見る事帶よりあけすして、あへてその面をみず、故に途にして親友に逢ふ事ありといへとも、或は識らすして過る事あらん事を恐れ、人をみることに其事を告て其恕せん事を請ふ、久保街より原驛に通する道に橋あり、時々朽損して財を費し、市人の憂とす、因て新に石橋を架して其憂を除く、其費は己これを辨せり、此外善行多しといへとも、詳に筆記しかたく、隱居して學を好み、たゞ人の忘らん事を懼る、略文章を著して安永中に沒す。

和學者の文體

大江戸の西に横おかふせる青山てふわたり、くぼまちとかやいへる所にすめる、ゑんきう子なんたくひなき隱者なりけり、その家のわさとするところ、人のをきめるものをあづかり、こかねの數を母とさためて、ほと〳〵にかしあたへ、その子あまたうみこさせ、衣は八の月、器は十あまりふたつの月をかきりしその時すきてあかなはされは、行川のなかれのよとみなく、せにかはりゆく物となしはてぬる事、ともかくにもまめ人のなす所にあらしかしと思ひとり侍りて、年頃をきのりをける春の衣と冬の衾とをいはす、凡ぬりごめの中にありとしあるもの、つはらにかうかへつゝもとのあるしにことつてゝ、わかねの母たにつくのい給はゝ、をきのり物みなかへしてんといふに、やかてその價もて來ぬるもあり、あるは家まつしくて母をたにあかなはぬは、その物のみかへし、あるはこと所にうつろひすみてその所をたにわいためぬは、とかくあなくりもとめ、からうしてみとせをへてそ事をはりたる、其のちはかのぬり

こめのうち、のどかなるまどに文つくへすへてふみよみつゝ、からのやまとの樂ものひさきて、世をわたるたつきとはなせりけらし、さゝ波やあふみのくにゝ田ところもたりしか、春の事おこりて、小田かへす頃はかならすいゆきて、ますらをとゝもに耕しかへり、秋のみのりのたなつもの舟にやめくらしけん、馬にやおほせけん、鳥かなくあつまのはてまてもちはこひて、またあをやかにかくはしきよねを、しらけにしらけてとをつおやのみまへにすゝめてのちは、をのか一年のめし料とはなしける、こはなそといふに、をのか身のもとはおほんたからより出て、あき人のよききぬきたるものゝ中にましらひぬるおほけなさに、その本をわすれさる心ばへならし、をのかうしするところの地に、むつかしけなる小家たてつゝけて、人にかりすましめ、そのあたえおさめてける、かりけるものゝ、おひめ多くなりもて行、はて〳〵はことところにすみ所もとめてうつろひゆくものあれは、いつくにもあれ、遠き近きをはいはす、小かめの酒にこかね一つふとをもちゆきて、むろほきしこの所にうつろひ給ひても、必いゑのあたえなかき給ひそ、うきたる費なし給ひそ、いとなみになおこたり給ひそと、せちにいましめかへりしとなん、もとよりまめにしちよくなる人なりけれは、よのつねの人をあえしらふにも、いや〳〵しきに過る事もての外なりき、人にむかひてきと手をつかへ、一とせくゝまりて、ゆめ人の面をみす、かゝりしかは、みちのゆきかひにあからさまにみすぐいて、いやまうさぬ事もありなまし、むらいのつみゆるひ給ひてよと、つねに人にもいひわひしそ、をのかすむくほまちより、原ずくのむまやにかよふ道の橋げた朽ぬれは、市のものゝ力をあはせてかくる事なるを、をのれ一人の力もて石はしつくりわたして、市人の費をはふけり、かゝるたくひのよきおこなひかきたては、むさしのゝ草の一もとならす、あふみの海も硯にせきられつへし、をのか身いやしくて、はかせめたる事このむをふかくつゝみて、人にしらしめす、引こもりたるふくるまのうちには、まんなのこと〳〵しきもんさしなとありける、安永のころにうせにしとか。

當時雅俗ともに通すべき體

長兵衞は江戸青山久保町のものなり、幼きより書を

よむ事をこのみ、藥をひさきて世をわたれり、もとは質商賣をなし、人のをきけるものをかけて、金をかしあたへ、つくのふ時には、そこはくの利銀をそへしむ、或はつくのふ時すくれは、その物をとゞめてかへさす、外にうりしろなして德をつく事をはかれるは、道ならぬ事と思ひて、年頃藏のうちにたくはへつめるものをあらためて、まつしく金をもつくのひかたきものには、本をも利をもとらすしてその物をかへしけり、あるひは外にうつろひなとして、其主のしれかたきものも、とかくしてたつねもとめ、やう〳〵三とせへてその事終り、今の商賣にかへしとそ、近江のくにゝ田をもちけるか、年ことに行かよひて耕しかへり、秋のみのりし米を得て、先祖の靈前にすゝめて後、をのれか一年の食料とはなせり、是をのか身の農家より出て、市人になれるをもて、その本をわすれさる心なるへし、己か借家をかりてすむもの、賃錢のおひめ多く、をのつからすむ事いならて、外にうつりなとするものあれは、遠きを撰はす、酒一升に金一分そへて持ゆきておくる、いつくにありても、かりたる家の賃錢おひめ多けれは、すみかたかるへし、つとめてうきたる費をはふきて、いとなみにおこたり給ふましと、ふかくいましめ歸りしとなん、その人となり、實義にして人をうやまふ事あつく、つねの人と物いふにも、兩手をつきて人の面をみず、もし道にゆきあひし時、みすくす事もあらはゆるし給ひてよと、をのれもつねに人にはいひき、久保町より原宿村にかよふ道の橋朽ぬれは、町のものゝ力をあはせてかくる事なるを、己が力ひとつにて石橋かけわたして、長く町の費をはふく、かゝるたくひのよき行ひ、書つくすへからす、學問なとこのむ事もふかく、人にかくしたりしか、うち〳〵には文章をもよくつくりて、みつから宛丘と號せしとそ。

和漢の事實に達し古今の雅俗をしるは文章なり、されは文章は書ならふへし、文人とはなるへからす、莽か大夫のしれものすら、雕蟲篆刻ますらをのするところにあらすといへり、吾家の兒輩たとひ和漢の文を學ふとも、いましめてかくのことき戯れをなす事なかれ

己未水無月五日　杏花園叟

おしてるの記

一大津泊り之節三井寺參詣
一大津出立
一蹴揚にて廡上下　粟田口　三條通りを上る大橋を渡る
右へ鞍馬獅子ヶ谷等
一東町奉行　諸司代　西町奉行　御届
一神泉苑
四條通り芝居前涼場所祇園町　食時には祇園にて田樂二軒茶や
但駕籠をは三十三堂前へ廻し置供計召連祇園へ
這入八坂大谷等
三條橋通り
一清水　奥院迄
妙法院宮御門前は鑓ふせ通り申候
一大佛三十三間堂
伏見街道通り　間も候はゞ
一東福寺　通天橋　伏見稻荷通り筋
泉涌寺　伏見　此道序に深草瑞光寺可聞事
歸路宇治へ廻れは二里有之

一竹田通り六條門跡前より下
兩町奉行　諸司代
御所之方廻り下加茂河原通り
右池永氏傳達也
手札三枚
歸府の節手札　酉八月寫之

大坂御城代
兩町奉行
先達て差上置候八馬御證文共貳通御下け被下候御禮
支配勘定 高柳粂藏

右同斷
御用向濟明々日當表出立仕候御屆
支配勘定 高柳粂藏

京都所司代
兩町奉行
大坂銅座詰爲交代御當所通行仕候に付御屆參上仕候
支配勘定 高柳粂藏

供人數

金五兩貳分
一用人　壹人　田山淺兵衛　取替金壹両壹分弐朱渡ス
五月ヨリ
三ヶ月〆に金壹兩壹分貳朱つゝ

金四兩貳分
一侍　壹人　松本榮藏　取替金壹両貳朱渡ス

五月ヨリ　月々金壹分貳朱つヽ

金三両
一中間　三人　取替
五月ヨリ二　長　助金三分
六月ヨリ一　平　助金壹両
五月ヨリ三　喜　助金三分

五月ヨリ　月々金壹分つヽ

御證文　貳通
一御用書物長持　壹棹
一馬　貳疋
是は壹疋にて壹疋者人足貳人にかヽ候事
一人足　貳人
都合人足四人
但都て壹に足人と大外て也京に馬疋人壹やひ佛に次

右駕籠之者にいたし候事
外に三人賃人足、内壹人具足櫃爲持、壹人兩掛挾箱、壹人合羽駕籠、家來壹人、鎗持壹人、草履取壹人、爲休挾箱は御用長持へ入候事
一先觸は用人名前にて出す別紙に有之
一箱根御關所前は駕籠より下り、惣體御用長持具足櫃等一所にまとめ、侍壹人御番所前へ遣し、大坂銅座御用にて、支配勘定大田直次郎、上下六人通り候旨斷候、
一新井御番所にては、御用長持侍に鍵爲持斷可申事、跡附鍵も遣可申事

高柳久米藏覺書之内

一御扶持は分限に應し、倍取揃四人扶持請取候事、尤日割にて、
右は、江戸御藏道中凡積にて、十五日分請取跡は大坂難波御藏にて御藏奉行四人宛直判にて二月分つヽ請取暮盡紙に引替候事御普請役は此方奥印にて請取候事殘り歸府之節江戸淺草御藏にて請取候事右手形案文銅座に有之候得共御藏奉行へ下書にて問合可申事
一諸伺等は少し之事にても江戸表へ印狀を以伺候方宜事宛名御勝手方長崎掛り組頭衆江戸表申遣候事は長崎表へも申遣候事江戸表組頭衆へ中封片名字美濃上封諸名字美濃付長崎は同役衆申入申進候樣は右之通り可認候事
一奉行衆被仰渡之節裏付上下夫より御禮廻りは麻上下之事

一長崎奉行衆へ吹聽可申事尤出立前迄に長崎奉行へ
登城前に參り掛御目可申事
一大坂にて御證文は御城代へ御預け申候事
但月番町奉行衆へ差出
一侍に申付置道中にて城下より出向之役人銘爲持候
へは下乘挨拶可申事
右登り之節加藤佐渡守家來徒目付出口より
外不出
一道中泊りに木錢
一家來共晝辨當代百文宛遣候事
一泊にて油炭代百文茶代別段に遣候事
一登り之節宮泊り之時は尾張殿より御使有之間其前
泊にて髮月代いたし其節は供揃いたし置尾州より
御使濟候と直に引續御禮に罷越候事尤泊り家角に
て仕廻候事此方宿より支度宜候へは案內申遣候事
御馳走船出に付酒するめ遣候事皆宿にて世話致遣
し候事
一京都廻り之節は駕籠之者へ髮月代料百文遣す大津
宿にて跡より可承事尤駕籠のものかんばん着候事
此方より持參不致候へは賃錢にてかり候事

一京都にては蹴揚之茶屋にて麻上下に成候事
一京都にて晝辨當は祇園か都合宜候事伏見より夜船
尤高挑灯燈し候ても早く消候か宜候事大坂えは未
明に着候事
一銅座御役所町與力貳人同心每月十六日より翌月十
五日迄月代りに立會詰候事
一道中晝辨當は駕籠之內にて給候方宜候事
一大坂土產ものは同役御普請役兩人與力貳人同心貳
人え少々之品持參之事
一大坂にて御代官御藏奉行衆表向文通掛合之節は樣
は右之樣致手代は殿附
一先詰同役路用等不足之節は金子用立可申旨は出立
前に長崎掛りへ咄置候事
一歸府之節御屆之致方長屋傳達は翌日御證文納仕廻
候て御屆之由坂本は途中にて麻上下に成り着之日
御月番之奉行衆へ計屆可申事奉行衆宅最寄あしく
候はゝ歸り候而其日屆可事田中其日歸り掛ケ野服
にて可屆事
一翌日麻上下にて御證文納に出夫か御禮御屆
一出立前奉行衆不殘長崎奉行衆長崎掛り組頭衆御用

も可有之乍御暇乞御登城前に掛御目可申事歸府之節も同斷　四五日前より初め可申事

一大坂着之節御城代兩町奉行御屆與力貳人同心貳人へも參り候事

一御暇拜領物いたし候節も吹聽狀被仰渡之節と同便

一荒井之御番所は武器改第一之由之事

一歸府之節旅宿へ祝儀遣候書付は銅座に有之事

一江戶出立之日は駕籠之者四人別に雇候事

一挾箱は御用長持え入別段に爲持品川ゟ返し候事

一御道具向通り候節道中にて下乘公家衆諸役人共駕籠下に置候得は宜候事

一着坂候は奉行衆不殘吟味役衆不殘御勝手方長崎掛り組合組頭衆裏白狀遣候事夫ゟ年始暑寒等遣候事文面別帳有之

一銅座詰日々野服長崎奉行衆着出立之日は麻上下逗留中は裏附上下之事

一大坂にて交代同役被仰付候儀申來候ゟ奉行衆不殘長崎奉行衆貳人御勝手長崎掛り組合組頭衆長崎詰同役同御普請役江戶長崎掛同役裏白御禮狀遣す事

一出立之節御勝手方奉行衆長崎奉行衆貳人御勝手方長崎掛組合組頭衆裏白狀遣候事文言別紙有之

一道中にて組頭衆同役衆逗留に候は丶見廻可申事御普請役はあの方ゟ參候事

一御證文箱同袋油紙も入候

一奉行衆長崎奉行衆用人之名前出立前に承り置候事

一江戶表御用狀半紙立紙印狀ゆいめへも印形直に御廻しに成候宛名御勝手方長崎掛組頭衆連名此方一名之事

地方幷町方へ掛り候事は連名之事

一長崎も同斷同役宛名

一歸府之節壹ヶ年取計方御屆書之事幷金銀銅請拂帳面等六册銅座人ゟ差出持歸り右屆書と一所に長崎江戶掛りへ可遣事

一旅宿え秋田南部薩摩對馬右家來參候共決て逢申間敷事　銅座に逢何申旨可申聞事

一止宿にて逢候者銅座人氣者手代長崎會所役人銀座留守居

一長崎奉行出役は先ゟ文通無之候得は此方より遣すに不及候事

一請取物手形に手前役名認候に不及候事

一銅座申遣帳十月時分よりそろ〳〵下書仕立宜候事
一申送り交代之節申送りなから讀合候事
一惣而市中掛り候事は町方へ談候事
一大坂着之日期之賄は是まて詰居候同役より振廻候事出立之日期は其年詰候者より振廻候事是は仕立屋え申付
一御普請役之代り參候へは御證文預ヶ度旨は御普請役直に町奉行衆へ參候町奉行衆ゟ預り可申旨手紙にて此方へ申來る其節返事此方にていたし御普請役え申談候事
一町奉行衆えは惣體文通之節特使にて遣し候事御船手御藏奉行御破損奉行等へは中間使にて遣す
一町奉行衆ゟ文通同返事等文言銅座に有之に付早く寫取置可申事
一定法帳是又銅座に有之寫取置可申事
一男共誓紙申付候事出立前々日比にて宜候事文言は別紙有之
一一枚繪紙煙草入少し計り土産ものに持參可然事
一泊り附別紙先觸に有之

道中御傳馬役

上十五日 大傳馬町壹丁目
馬込勘解由
下十五日 南傳馬町貳丁目
高野新右衛門
同 南傳馬町三丁目
小宮谷右衛門

一先觸は前日日附其外等能々調へ勘藏え錢百文遣し賴候而可然事
一大阪にては御傳馬方八五郎へ銅座え遣賴候事

評定所二日 同立合
二日 十一日 廿一日 四日 十二日 廿五日
内寄合
六日 十八日 廿七日
江戸御金日
朔日 六日 十日 十八日 廿四日 廿六日
大阪御金日
五日 十六日 廿三日

一大阪に而江戸え之爲替便日三六九十之日休正月は四日より出る十二月廿五日仕廻日

大阪御藏奉行名前

一大阪御扶持方渡り日月々十九日書替にて廿一日渡り日臨時は十四日之由十二月は十二日書替にて十四日渡り月々御請取手形にて暮一紙に壹枚にて引替

一銅座にて初ての御扶持方手形扣（近來略之不遣候）江戸表へ遣す事暮は引替濟候より御用狀にて申遣候事

一吟味役初銅座人其外共長崎奉行衆御滯阪之節褒美申上候事石谷備後守殿時代より定式之由野村仲助申聞候室上義平銀貳枚つゝ年々定式之事

一御用銅納之節は江戸長崎へ御屆御用狀に申遣候事

一吹屋廻り道具挾御箱爲持可然事

一交代歸府之節御屆書之外に難波御藏有銅其外心得に成り候分銅座人え賴認持歸り候事

一役所へ折々は早く出候御取締に宜候事

一歸府之節川支等にて歸府延引之節宅狀差出候には賃錢遣し賴遣す事是は何方よりも二百文之由

一歸府之節吹屋に有之候惣銅書付させ持可歸事

一棹銅一體は百斤に付三百三拾目くらい市中相場元は百五拾目

一荒銅百斤に付て減大體五六斤位口平銅は至て惡敷半分程に成

一間吹銅より御用吹銅は百斤に付貳斤吹減し地賣銅は百斤に付三斤吹減し之事

一溜糟は十のもの六五鉛三五灰

一灰吹は銅百斤へ鉛貳貫七八百目交せ候事

一道中にて川支有之候へは追先觸御證文等文言等略認可差出事泊り不狂は不出共宜候事

一巳正月廿九日付 二月十日相達　若林儀八郎

一寅二月十二日付 二月十九日屆　坂本傳之助

一四月十三日出立 四月廿七日歸府

御扶持手形

一丑三月十二日より 寅二月廿九日迄　一紙　丑十二月御米請取

一寅三月朔日より 同四月廿九日迄　一紙

一卯正月廿九日付 二月六日屆 同十一日返事　橋爪榮助

一三月廿一日出立 四月五日歸府

御扶持方手形

一寅四月朔日より 卯二月廿九日迄　一紙　寅十二月御米請取

一辰三月六日付 三月十三日屆 同十四日返事　田中太左衛門

一四月廿三日出立 五月八日歸府

御扶持方手形

一卯三月十三日より 辰正月廿九日迄　一紙　卯十一月御米請取

一辰二月朔日より 同三月廿一日迄 又四月廿一日迄　一紙

一　辰三月廿八日江戸出立
　　同四月十二日着坂

一　巳二月廿二日付
　　三月朔日届
　　四月六日大坂出立
　　同月廿日歸府　　　　高柳条藏

御扶持方手形

一　辰四月十四日より
　　巳二月廿九日迄
　　辰十二月請取　小を五日引日數三百十二日分　一紙

一　巳三月朔日より
　　同日晦日迄三十日分　一紙　二月廿一日請取

一　巳四月朔日より廿日迄
　　五月二日請取　旅御扶持方貳石淺草御藏にて

一　具足雨掛草履金紋事桐油も紋付可申事
　　但御用長持は元は御納戸より渡候由夫故桐油に紋付不申候
　　由尤尾箕一郎申聞也

一　大阪にて旅宿は奉行衆より大阪町奉行え御掛合有
之節寄會所取置有之候事賄は手前賄の事

一　請取物は手形共認長崎江戸掛へ願御裏印相濟候
は月番御金奉行え遣庭帳附翌日御金日に請取御普
請役衆賴可然事

一　出立前伺を定文言有之認長崎江戸掛りへ出し置御
附札付渡り候事

一　歸府之節木曾海道歸り度候得は前廣に願候事

一　幕壹張定紋付泊々にて打大坂も旅宿へ打交代同役
罷歸候迄張候事

一　御切米手形印紙餘慶伺掛り改方之衆へ頼置候事

一　京都廻り之節往返共所司代町奉行衆江上下手札に
て届候事

一　股引之入候事は餘り無之事先御普請之節田中太左
衞門え申候は是も白衣宜候事

一　道中泊りは十二十三十四位迄宜候事

一　道中にて家來之病氣は止宿不成候事

一　御暇拜領物濟候はゞ出立日限書付長崎江戸掛りへ
出置候事道中泊り付書付も可出置候

支配勘定
高柳条藏

右は去春大坂銅座え被差遣候支配勘定田中太左
衞門代合として被差遣候間入念可被相勤候

右之通戸田采女正殿被御渡候

一　出立御屆は前日御暇文請取候節相認長崎江戸掛り
願置出立之期今日彌出立いたし候段手紙にて各樣
迄得御意へく旨其段御差出與候樣賴置候事尤出立
御屆之儀は下の掛り組頭衆へも可屆事
但下へ相屆候文言之內奉行衆御屆書御勝手方長崎
方掛りへ差出候旨書加へ候事

一道中筆墨紙蠟燭請取方之儀書付長崎掛りへ差出可申事但長崎掛りにて鰭付いたし下へ相廻す

一御扶持方は出立之日より着之日迄日割

一宿代は大坂到着幷出立迄銀貳枚つゝ但下十五日之内着歟出立いたし候得は其月は半ヶ月分請取候事

辰年中地賣銅廻着高

合八拾七萬六千三百四拾七斤貳分

外

佐州荒銅三萬四千七百五拾九斤

越前荷久逕荒銅五千六百貳拾五斤

此分辰年中廻着仕掛改不濟分

一古銅千三百八拾斤之吹賃拾貳匁九分貳厘六毛之定法にて百七拾八匁三分七厘九毛可引分處を位違ひにて壹貫七百八拾三匁七分八厘八毛引分候事

一巳四月六日朝六時大坂出立川支無之四月廿日晝時前着半藏御門外にて上下着替御月番柳生主膳正殿へ御届廿一日朝六半時出宅にて　御殿へ被出御證文返上相濟奉行衆不殘吟味役衆不殘組頭衆不殘御禮廻り夫〻折々御殿へ罷出長崎掛へ掛合取調書上御改有之御加筆等にて調濟認直し銅座俵物改所〻定式出候帳面共長崎懸り差出不殘奉行衆御廻し被成候

一五月十一日平田惠十郎參被申明十二日召候由名代勤被吳候書付貳通扣被渡左之通

見出し

五月十一日

對馬守殿

專阿彌

御勘定奉行え

支配勘定

高柳久米藏

下ヶ札

名代

平田惠十郎

右明十二日四時

御城え可被差出候

五月十一日

折かみ包

中飛彈守樣

高柳久米藏

名代平田惠十郎

御用之儀御座候間明十二日五ッ
半時御城へ被出候樣被仰渡奉畏
候右御請奉申上候以上

五月十一日　　高柳久米藏

名代　平田惠十郎

辰十一月大坂銅座詰之節東本願寺ゟ贈物有之候に
付伺書

東本願寺ゟ私幷御普請役兩人え時節爲御尋贈物有
之候に付申上候書付

覺　　高柳久米藏

一金五百疋　　高柳久米藏

一金三百疋　　御普請役　河島庄三郎
　　　　　　　　　　　　關口祐助

右は銅座相詰候に付東本願寺御門主ゟ時節爲御尋書
面之通被相贈候處御用中之儀に付御斷申達返却仕候
然處是迄外に右樣之格例も有之候趣にて亦々押て被
相贈候依て如何可仕候哉此段奉伺候以上

辰十一月　　高柳久米藏

御付札
書面送り物御用中に付斷可被相返候

支配勘定
高柳久米藏

東本願寺ゟ贈物之儀に付申上候書付　　加藤惣兵衞

覺

金五百疋

右は私儀去辰年大阪銅座立會御用被越候節東本願寺
より被相贈候處御用中之儀に付受用難仕候間斷相返
し其段は先達て御屆申上候積又此節書面之通り相贈
候如何可仕哉此段奉伺候以上

巳九月　　高柳久米藏

右之通申聞候に付申上候以上

巳九月　　加藤惣兵衞

右之通り認巳九月廿四日惣兵衞へ出す　御殿より
持參卽日受納可仕旨伺濟

三月十一日六ッ時過着

所司代町奉行
廻勤手札

大坂銅座詰爲
交代今日着坂
仕候御屆
三月十一日　大田直次郎

御證文御預け書付貳通手札三枚安岡剛三郎より家來持參
御普請役町田喜藤太來雇上下町内より屆差出し刻限承り候由に付卯下刻到着之旨申合置候
一安岡氏より用人　　來酒一樽
持參尤朝膳部申付候由にて家來迄出す一汁五菜吸物二つ硯蓋一つ鉢肴一つ出る
五つ時過安岡剛三郎へ立より候處町田喜藤太參り居候に付同道町奉行成瀨因幡守殿參り御證文御預け申度書付貳通差出候處今日は因幡守殿御留守之旨此方より可及御挨拶由用人申聞候
（十二日濟）

取次　小西八郎太夫
用人　篠　源兵衛
取次　富尾武兵衛

御城代青山下野守殿へ參り御補申し夫より水野若狹守殿へ參り御屆申上候

三谷　喜右衛門
取次　横井　玄助

夫より一と先歸宅いたし町田氏同道　銅座へ參候
夫より町與力同心へ手札持參いたし候

町與力　吉田　勝右衛門
工藤七郎左衛門
同心　吉田　仲右衛門
松田喜會右衛門

町奉行成瀨因幡守より左之通申來
以手紙申入候然者御自分御持參之御證文明十二日五時御持參可有之候且御普請役町田喜藤太持參之御證文是又右刻限持參候樣御達可有之候以上
三月十一日
右之通申來候に付御普請役町田喜藤太へ人遣し來候間右寫遣す　安岡剛三郎へ參候處留守にて不逢

一夜に入村山半太夫(御奉行)安岡剛三郎来
一樽與左衛門狸顏岩崎武七郎来扇子持參

十二日　晴

五つ時前町田喜藤太来同道麻上下服紗小袖着用町奉行成瀬因幡守殿御宅へ參る用人富尾武兵衛取次因幡守殿御逢有之御請文御請取被成候御普請役御證文も御請取に成候用人申聞候は来十五日御城入之節御城代え御預け可被成旨　道具箱爲持候
一同日平服にて(道具箱爲持候)安岡剛三郎人見藤左衛門御普請役大塚虎藏町田喜藤太齋藤勝五郎小島常五郎同道吹屋八軒見廻り申候
一町與力南人(吉田工藤)より香物一桶進物来歸宅連名返事遣す

土産物遣す

箱煙草　吉田勝右衛門　小菊十松田喜三右衛門

同　工藤七郎左衛門　同　(手紙添遣ヽ御安恭)　蔦田仲右衛門　(手紙無之侍口上にて)

小菊十　大塚虎藏

同　下妻辰之丞

岩崎武七郎明日江戸へ出立に付樽與左衛門方より先達て来候手紙遣し爲餞別枝柿一箱(岐阜尾州にて貰候也)遣し候着致之旨樽氏へも書状頼遣す

十三日　晴冷

町役人呼出以書付申渡　(例文有之)

一昨日見廻り候吹屋名前

紋吹師　泉屋吉次郎　長堀茂左衛門町

紋吹師　大坂屋みつ　道頓堀三屋町　代判茂兵衛

熊野屋彦九郎　新難波東町

富屋彦兵衛　新難波中之町

大坂屋三右衛門　道頓堀宗屋町

大坂屋久次郎　道頓堀宗屋町

平野屋三右衛門　道頓堀湊町

川崎屋吉右衛門　新難波中之町

鎰屋忠四郎　南問屋町

例刻出勤
十三日
一田中丈右衛門養子願之事
銀座掛
田口五郎衛門　荒井甚兵衛　市野茂左衛門
中川文三郎　岡本勇太郎　岡野徳四郎
銅座出灰吹銀三拾八貫目四分四箱今朝爲替被相渡
候事　荷造之上剛三郎封印
一北濱三丁目俵物會所へ引繼見廻り剛三郎同道煎海
鼠　志州
下一番ゟ上十番迄有之　一見いたし候
書付差出申候より請取置候
一志摩煎海鼠　七百七拾斤壹合八夕
但壹斤に付三匁壹分五厘
夫ゟ銀座見廻り申候　内両替町
銀座にて左之通名前之者に逢申候今日南鐐納銀帳
面爲見申候是は御普請役と隔日位に見廻り候事之
由普請も出來未仕上帳は出不申候由剛三郎申聞候
大坂住銀座之者
銀見役　金谷喜左衛門
同　磐田龜太郎

病氣　小役人　湯川八郎兵衛
同　奥村嘉七
手代　林榮藏
中通　吉田孫太郎
同　湯川貞次
八兵衛悴
俵物會所詰
筆者　小柳伊助
居付之者　村井徳太郎
嘉兵衛
友吉

銅座役人
地役　星野助十郎　筆者小頭田中丈右衛門
西谷貞右衛門　筆者　小山逢吉
高橋登右衛門　松並昌平
岡本八右衛門　中尾善太
爲川辰吉　手代
野村仲助　室上儀平
同　山藏　永井三郎兵衛
中村吉五郎
小遣　猪太郎

一銀座申達り壹掛安岡氏ゟ渡す今夕人見氏へ暇乞に
行し申候
友吉

十四日　冷　雨

一例刻出勤安岡氏來同道ニ（長崎請人見藤左衛門御普請役小島常五郎天草請負御普請役五郎今朝）
出立今朝吹屋熊野屋彦九郎方にて怪我人夫工貳人有
之小吹床之形われ候由
灰吹銀三拾八貫目四分
但拾貫目入　三箱
八貫目四分入壹箱封印之儘　江戸　銀座納
手形遣す

一惣〆貳百五貫貳百拾七匁七分六厘貳毛
内譯前書略之　金銅座預り

一御用状貳通出す
壹通は　右銀納之義
壹通は　人見藤左衛門幷御普請役寫之事

一御藏奉行へ御扶持方手形案文之義御普請役へ兩通
手紙遣す
三橋藤兵衛
堀口藤四郎

佐山左門
石黒十郎左衛門

御勝手方奉行衆三人長崎奉行壹人組頭松山惣右衛
門田口五郎左衛門長崎掛り池永久次郎内藤兵右衛
門連名伺方改方芝與市右衛門長崎請若山彌一郎中
村繼次郎連名同御普請役小林周助根立初五郎連名
都合拾通差添届状差出す
但佐藤氏扣にて御勘定奉行衆は用人名宛にいた
し有之候得共安岡氏は御届之義右奉行衆へ直状
に遣候由長崎奉行へ遣候書狀と同文言にて呈愚
札候と有之所を捧愚札候と認候由に付此度も直
狀にいたし出候申候

一夜分大塚虎藏來話

十五日　晴

例刻出勤

一定式買外別規願之分名前（去々未九月以來去申十一月迄）
〆貳百九十六冊迄
貳百五拾壹人組合願
合四百四拾七人　内貳人貰下請引
殘四百四拾五人

申十一月後
外追々願六人　三百一番迄
歎願　九番有之
是迄買請八月々壹萬元高六萬千五百斤を目當
右之書付寺野助十郎出ゝ
太田直次郎様　　成瀬因幡守
以手紙申入候此間御持參之御證文町田喜藤太持
參之御證文共御城代ゟ差上候處御受取御願置被成
候間左樣御心得可有之候以上
三月十五日
よし御證文御請取被成候御挨拶之義者前々之通り
御心得有之候樣存候尤喜藤太ゟ是又御申達候之樣
存候以上
右之通り申來卽刻喜藤太へも申遣候返書認ゝ返し
爲御禮喜藤太同道南町奉行御城代へ罷越
成瀬取次　　水野取次
伊丹喜右衛門　　松野瀧次郎
右之序御代官篠山十兵衛木村周藏御藏奉行堀内藤
四郎御金奉行村山半太夫へも罷越候
御藏奉行ゟ昨日之返書來案文加筆とも
請取申米之事

合米貳石三斗壹升　　但京升なり
右是は銅座立會爲御用被登候に付大坂在勤中御扶
持方御下之三人扶持一倍之積内三月十三日ゟ同五
月晦日迄小を一日引日數七十七日分書面之通請取
申所如件
享和元辛酉年三月　　御普請役
町田喜藤太印
二宮藤兵衛殿
堀内藤四郎殿
佐山左門殿
石黒十郎左衛門殿
前書之通ゟ相違無御座候以上　　太田直次郎印
請取申米之事
合米五石三斗九升　　但京升也
右是は銅座立會爲御用被登候に付大坂在勤中御扶
持方被下之高百俵に付七人扶持一倍之積内三月十
三日より同五月晦日迄小を一日引日數七十七日分
書面之通り請取申所如件
享和元辛酉年三月　　太田直次郎印

三橋藤兵衛殿
堀内藤四郎殿
佐山左門殿
石黒十郎左衛門殿

十六日　陰

一京都ゟ無座之者共到着留義之狀來　二通

おしてるの記終

科場窓稿

寛政六年甲寅正月

神尾市左衛門組御徒
大田直次郎
井上作左衛門
鈴木文五郎
中神順次
中神悌三郎

右は來月三日學問初場之御吟味有之候間右之面々朝五つ時聖堂え罷出候樣御達可有候尤半腹之積り書物小學論語持參候樣可被致候以上
但燒飯被下候間左樣御心得可有之候

正月
御目付 中川勘三郎
同 森山源五郎
同 石川將監

右之通本間（本御番明番也）青山三右衛門（御徒頭）殿被仰渡候段本御番同役共より申越候間其旨御心得可被成候御頭へ御屆等之儀は猶又御面談可申候以上

御徒頭神尾市左衛門組組頭
高橋太左衛門
伊藤源右衛門

正月十九日

一、前日（二月二日）與頭衆へ爲御請惣代御徒井上作左衛門一人罷越申候連名手札致持參候

一、當日（二月三日）朝六時出宅五つ時前聖堂へ罷出申候

御目付（森山源五郎殿 石川將監殿） 御徒目付（金子孫三郎 間宮角三郎 脇本德三郎）

林大學頭殿四つ時御出席堀田攝津守殿被仰渡候由

出題張紙出申候（中川勘三郎御病氣之由）

小學內篇敬身

樂記曰君子姦聲亂色章

論語子路

仲弓爲季氏宰問政章

論語雍也

冉求曰非不說子之道章

其前に銘々硯筆墨料紙（美濃紙罫引十一行六枚ツヽ）御渡有之相濟候而硯筆墨とも相返申候硯は臺に載有之

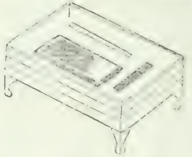
張紙

諺解假字抄之類持參相成不申候

墨銘

春情更蘇秋低冬常

臘寒日製之



燒飯　香物淺漬　味噌　張紙御一人前七ッ宛三席に分有之仕切有之版に

御目見以上

御目見以下

羽織格と記有之候

樂記曰君子姦聲亂色不留聰明淫樂慝禮不接心術惰慢邪辟之氣不設於身體使耳目鼻口心知百體皆由順正以行其義

章意　此章は君子たるもの平日の心かけにかりそめにも心のうちより出るものをつゝしみ身の外より入ものをふせぎ内外一致して心をつゝしみ身持を大切にいたし候事を申たる章にて候

字訓　姦聲はかたましき聲とて正しからぬ聲をいひ亂色はみたりなる色とて正しからぬ色をいふ淫樂とは鄭衛淫哇の聲のごときをもしろ過ぎてうきたる樂なり慝禮とは禮の中にもをしはれて行れかたきいやしき俗稱なりたとへば里見の家の片肴などいひしごときの禮をいふなるべし惰慢はおこたりゆるみたる邪辟はよこしまにひがめる氣象なり順正とは道にたがはずして正理による事のよし

解義　君子平生の心がげにはかりにも正しからぬ聲は耳にきゝとめず正しからぬ色は目にみおぼへぬやうに外をやしなひうかれたる樂鄙俗の禮をば心もちに取あはぬ樣に內をやしなひおこたりゆるみたる氣をいたす事なくよこしまにひがみたる氣の入らざる樣に身體をかたむれば外にして耳目鼻口手足の惣身內にして心のごとき智みな道にたがはす正しくて事理のよろしきにかなふ義を行へしとぞ

餘論　孔子の顏淵が仁を問ふに答て非禮は見る事きく事いふ事うごく事なかれとのたまいしも此事なるべし又禮樂はしばらくも身をさるべからずとい

へるも非禮をふせぐためならんかし今いにしへの禮樂は絶たれども禮の極意は敬のみにして深く心をつゝしみ身を大切にさへもち候へは自然と禮樂にかなひ候べし禮にたち樂になるといへるも禮をば我一生の立場と定め置て樂をもて其上のたりびつみを直す事歟と被存候

二月三日　大田直次郎謹識

仲弓爲季氏宰問政子曰先有司赦小過擧賢才曰焉知賢才而擧之曰擧爾所知爾所不知人其舍諸

章意　此章は仲弓の心と聖人の御心とは大小の相違ありて擧賢自己一人の聰明をたのまず天下の人の耳目を以て國家を治る事を示され候章にて候

字訓　季氏宰とは魯の三家の一人季孫か家にておもたちたる役人をいふ有司は諸役人の事也

解義　冉雍字は仲弓と申せしは孔子の御弟子たり魯國の家老季氏かおも役人となりし時政務の事はいかゞいたすべきやと孔子にとひまいらせしに先家老の家をおさめんとならば其身をも役人として下々の事まで逐一にせんとしてはなりがたし大小の事それ〳〵の主役あれば先諸向のものにまかせをきてその出來上りし上を吟味すればをのれ骨折なくして萬事すら〳〵と行とゞくべしこれを先有司といふ又大なるあやまちは是非もなし小々のしあち不調法なる事は見のがしにしてゆるせば無罪のもの〻仕置にあふ事もなく人々感心して歸服すべし是を赦小過といふ又心だてよろしき德ある賢者一かどありて用にたつべき才あるものをあげもちゆべし是を擧賢才といふとの給ひしかば仲弓又申けるははじめの二つはいかやうにも心がけ次第なるべしいかゞいたし候て一時の心だてよきもの用にたつべきものをことごとくしり見出候てあげ用ゆる事をいたし候はんやとありければ孔子こたへての給へるは先其方の了簡にてかれは心だてよろしく是は用にたつべきと思ふものをあげ用ひよ其方より手本を出してその至るところの賢才をあけ用ひてみすれは人々われも〳〵と賢才をあけ用る心になるべしさあらは其方のしらぬ所の賢才とてもたれかすてをく事あらんやとの給ひしなり

餘論　まことや程子の禮運を引ての給ふごとく、仲弓の心は小にして聖人の心は大なり極めてこれをいへば邦をほろぼし邦をおこすもわずかの心一つよりおこりてそのもとは公と私とのさかいにて大ともなり小ともなり侍らんかし

二月三日　大田直次郎謹講

冉求曰非不說子之道力不足也子曰力不足者中道而廢今女畫

章意　此章は學問の道に志すもの力の不足なるにあらずわれをわかてに仕切をして進む心のなき事をいましめ冉求に示され候章にて候

字訓　畫とは地に筋を引てこれより先へは出さじとかぎごとき心なるべし

解義　孔子の御弟子冉有名は求と申せし人孔子にむかひ申せしはわれ心のうちにふかく夫子の道をよろこばぬにはあらねども力のほど不足にしてとても成就しがたかるべしとありければ孔子答て力の程不足といへるは心は道にすゝまんとすれど精力つきて半途にしてやむをいふ今その方はわれとわが手に仕切をして先へすゝむ心のなきものなりとの給ひし

餘論　中庸に君子道に遵て行半途にして廢われはやむ事あたはじと孔子の給ひき顏子のごときはやめんと欲すれどもあたはずすでに吾才をつくすといへるも思ひあはすべきかも

二月三日　神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹講

初場即事

春風二月杏花壇、日出陽和散曉寒、
業試初場傳筆硯、流ヽ分ニ已入ニ列衣冠、
千秋不改昌平邑、一脈長通泗水干、
同學少年多俊邁、莫嘲斑白解經難、

大田覃

已入流ハ御目見以上ナリ
未入流ハ御目見以下ナリ

二月二十日與頭より廻狀到來

御徒神尾市左衛門組

詩經　大田直次郎
同　鈴木文五郎

右は明後廿二日於聖堂學問御吟味有之候間朝五ッ

時可被罷出候
一書物名目之通持參可致候
一平服着用之事
但焼飯被下候事
右之通相心得罷出候樣御申渡可有之候以上
二月廿日
中川勘三郎
森山源五郎
石川將監
右之通明後廿二日朝五ッ時聖堂へ可被罷出候且今夕御請御頭々え可罷出候旨御差替詰御番御徒頭藤堂土佐守殿被仰渡候間如此御座候以上
二月廿日
中島善十郎
私云瀬戸傳右衛門點組與頭當日本御番なり
一廿一日夕與頭衆へ請罷越文五郎同道
一廿二日朝六ッ時過出宅鈴木文五郎瀬名傳右衛門殿御組御徒新樂鄉右衛門同道五ッ時前聖堂へ罷出候
一當日休息所并場中に張有之候書付
一辨書暮時前迄可被差出候燭臺は出不申候
一席上隨分物靜に可被致候學事たりとも相互に咄合無用に候
一去年對談之節一科六通之旨申達候得共去三日初場三通之節及暮候に付先當年は一科三通に御定に相成候

又

諺解假名抄之類持參相成不申候
一當日詩經十四人書經十七人易經二人之由御徒目付申候都合三拾三人なり
一御目付森山源五郎殿林大學頭殿出席堀田攝津守殿より御渡被成候由に而題長押に張申候各別紙也
易　上經　謙　易　上彖傳　泰
易　下繫辭傳　知幾其神乎止萬夫之望
書　舜典　帝曰咨四岳有能典朕三禮節
書　甘誓　全篇　書　旅獒　玩人喪德止篇末
詩　齊風　鷄鳴篇　詩　大雅生民之什　河酌篇
詩　周頌清廟之什　般篇
右九枚半紙四五枚繼なり般篇は清廟の什にあらず
しばらくありて左之通書付と張替り申候
詩　周頌閔予小子之什　般篇

一當日視筆畢其場中に席を設け出し有之候試はわたし候事初場の如し今日は森山源五郎殿一人御徒目付間庭鐵八郎一人なり御小人目付は三人程なり八ツ半時頃書終り御頭へ御届罷越日暮に罷歸申候御頭にて右辯書來廿七日本御番の節差出候樣用人窪田平角申付候

一當日場中御見廻り度々有之森山源五郎殿林大學頭殿御兩人之節も有之岡田清助柴野彥輔兩人之時も有之候

詩　齊風　鷄鳴篇

首章

章意　此章はかしこき夫人君の所にそひふして朝まつりごとのをそからん事をおそれくたかけのまたきになくかと耳をそはたて君につくるをいふ

字訓　朝はみかと〻訓して君のあしたに出て政をきき給ふ所をいふ

解義　これはかしこき夫人君の御そひふしに侍りてにはとりらはやなきぬあしたに出てつかふるものもはやまいりみちぬらんとくおきさせ給へと君に告て耳をすましてきけは蠅などの飛かふ聲にしてまた夜ふかき鳥の空ねなり三章ともに賦の體なり

二章

章意　此章も前章に同じくあけやらぬねやのひまにもりくる月の光りをみてもしらみ行空かとうたかふをいふ

字訓　さして訓すべき事なし

解義　やう〳〵空もあけゆけばあしたにつかふるものにきはしくさかりならんとふたゝび君に告參らせしにしのゝめの空のあくるにはあらで有明の月のさしのほる光なり

卒章

章意　此章はやかて色をもわきまへつへきあけぐれのほとにもろ〳〵のつかへ人の君の出給ふの遲きゆへかへりとやせんと思ひて君にとく起給へとすゝむるなり君にもまみへ奉らでかへる事のあるべきやうはなけれどかくまで心つかひするはかしこき夫人の德なり且は女の心なり

字訓　薨とはむらかれ飛かたちなり予とは夫人みづから稱し子とは君をさしていふ

解義　とかくするうち蟲の飛かふ羽音なとほのきこ

へて夜もやゝあけなんとす君とゝもにぬる夜のゆめはあくことあらねどいきたなくをそく起たまひなは朝とくまいれるもろ／＼のつかへ人君のおき出給はぬをにくみてかへりもしつべしとの君をにくみまいらん事のもとはわがしはさよりおこれる事の奈おそろしく君もまたこれを思はさらめやとく／＼おき給へかしと三たびいましめ告る言葉なり

餘論　古より今にいたるまで賢妃の徳によりてそのたすけを得し君多し不賢なるはこれに反せりされば國のよしあしはしはその御寢所より起るとあるはかせの申き

二月廿二日　　神尾市左衛門組御徒 大田直次郎謹講

詩　大雅生民之什　洞酌篇

首章

章意　此篇は召康公の周の成王をいましめてつくり給へる詩とふるくよりいひつたゑて候此章の意豈弟とたのしくやすらかなる君子の徳あれは自然と民のなつき候事を申候注に表記す大學を引候はこの徳あれば此事ありと申候事のよし

字訓　行潦はにはたつみとて道のほとりにたまりたる雨水なり餴はこしきをもて米をむしあげ又水をそゝぎて再びむすをいふ饎は酒飯なり但儀禮の饎爨の鄭注には黍稷を炊き饎といふと見へ侍りき

解義　遠きところのたより水を人にくましめて大なるうつはにいれそのおとみてすめるうは水をくみて手近く小さき器のこしきにそゝぎても神にさゝぐる酒飯をむすにたれりこの心をもておもひとり侍れば樂やすらかなる徳ある人つとめてをしへみちびきやすらかにおちつかきは民百姓の父母のごとくにしたしみなつきて自然と相もちにたすけあふなるべし

二章

章意　此章も前章とおなし心にて徳ある人を民のたのみにいたし候事もとほきかの水をもて近きこのもたへあらふがことしと申候事の由に候

字訓　罍は酒をもるかめにて雲雷のかたちをゑがきたるものよし歸とは民のよりたのむところに候はん歟

解義　遠きたまり水もちかき酒のもたえをあとふた

よりとなり遠々しき民も德ある人のたのみなり候

奉章　此章も又前章にをなじく德ある人のもとに民の休息してやすんじ居り候事かの水をもてこのものをあらふよりも心やすき事と申候事に候

字訓　濯漑とは酒のかめのみにかぎらずすべてのものをあらふをいふ

解義　かのものをもてこのものをたすけ候如く民のやすんじおり候も德ある人のためなり

餘論　左傳に潢汙行潦の水を以て鬼神にすゝむべしと見へしもこの詩を引て忠信の事を申候豈弟といひ忠信といふもみな實義をもとゝし侍るならじ

詩　周頌閔印小子之什　般篇

章意　周の天命をうけて代をとりしはじめに四瀆の川にしたがひて四嶽の山にのぼり國々の諸侯おの〳〵朝會して參覲せしついでに山にのほり山川をまつり今よりあらたなる周の代となりし事をつぐる事ならんかし

字訓　皇は君と訓してよしと申候事隨山は細ながくするとき山なり喬嶽は高くして大なるだけなり允猶の二字未詳ある說に允はまこと猶は由と同してまことによる訓し候よし翕河は河の水のあふれやすきをよくその水をおさめて安らかに流候事敷天之下とはあまねきあめがしたといふ事なり裒時とは諸侯おの〳〵四方の嶽のもとにあつまるをいふ對とはそのあいしらひして禮をうくる事ならし

解義　歎美してほむべきはこの周の代のはじめに武王巡守して國々をめぐり高き山々にのぼり柴をやきて神を祭り給ふ事ありまことにおだやかなる河水のながれにしたがひて四方の高き山々にのぼり給へばあまねきあめがしたの國々みな周の代のしげきみかげを仰かざる事なしよりて各その國々の守を四方の山のふもとにあつめ參覲せしめてその禮をうけ給ふついでに山川を祭りてけふよりあらたなる周の天子の命令なりて告給ふ事ならし

餘論　般と名つけしはあるいは般旋とめぐりて四方に巡狩し給ふ事をいふとも又般遊とつゝきて諸國に遊び給ふ事ともいへれどその義さだかにはしれがたしとなん周舊邦といへども其命これあらたなりといへればいつもかく代のはじめのごとくにこの命これあらたにしておこたりすさむ事なくば百

世といへども日々新なるべし

二月廿二日　　神尾市左衛門組御徒
　　　　　　　　大田直次郎謹講

二月廿一日に申來廻状

古傳初巻より十五巻迄
史記六十一之巻より百巻迄　　御徒神尾市左衛門組
　　　　　　　　　　　　　　大田直次郎

前漢書十一巻より六十巻迄
後漢書六十一巻より八十巻迄　　同　同人組
　　　　　　　　　　　　　　井上作左衛門

前漢書十一巻より六十巻迄
後漢書六十一巻より八十巻迄　　同　同人組
　　　　　　　　　　　　　　鈴木文五郎

左傳初巻より十五巻迄
史記六十一巻より百巻迄　　同　同人組
　　　　　　　　　　　　　　中神順次

左傳初巻より十五巻迄
史記六十一巻より百巻迄　　同　同人組
　　　　　　　　　　　　　　中神悌三郎

右は來る廿四日於聖堂學問御吟味有之候間朝五ッ時可罷出候

一書物名目之通持參可致候

一平服着用之事
　但御燒飯被下候事

右之通相心得罷出候樣御申渡可有之候以上

二月　　中川勘三郎
　　　　森山源五郎

　　　　　　　　石川將監

一二月廿四日朝六ッ時過井上作左衛門鈴木源五郎中神順次中神悌三郎同道聖堂へ五ッ時前罷出申候

一休息所幷場中に張有之書付前日之通にて跡に添書御座候但歷史は二通に相成候

又別紙出候當日張之

從八時問目御吟味有之候間出置候題之和解右刻限以前可差出候刻限迄に和解出來無之輩は問目の御吟味は相除候

一四ッ時前御目付森山源五郎殿石川將監殿御出有之候暫ありて人數揃候而席々え就申候所石川將監殿林大學頭殿御出座堀田攝津守殿御出頭張出申候

左傳　僖公二年　荀息假道於虞條

史記　管晏傳贊

漢書　李廣傳　陵至浚稽山與單于相値止單于下走

後漢書　酷吏傳序

通鑑綱目　唐貞觀十一年　幸洛陽宮條

通鑑綱目　唐開元二年　焚珠玉錦繡於殿前條

一當日硯墨筆は場中に出有之紙は請取候當日御見廻

りは無之九ッ半時頃迄に認め御徒目付金子孫三郎
へ渡申候
一今日は御目見以上拾六人同部屋住五人　御目見以下十九
人同部屋住五人　都合四拾五人之所四人病氣斷都合四十
一人に成

左傳　僖公二年　荀息假道於虞條

晉の荀息その君に申て車一乘にかくべき屈の地だちの名馬四ッと垂棘といふ所より出るよき玉とをもて虞の國に賂しその國の道をかりその地をわたりて虢の國をうたんとこひしに獻公この二つのものは吾寶なりといなむ荀息こたへて若この道をかれる謀なる事を得ば二ッの寶は外のみくらに置給へるもおなじ事にてつゐにはこなたのものなるべしと申ければ獻公いやとよ虞の忠臣宮之奇といふものあなりいかでかさる事を得んといふ荀息またこたへて宮之奇かうまれだちよはき方にて君をつよくいさむる事あたはじその上はやくより君のかたはらにめしまつはじめひとゝなり侍れば君もなれ／＼しきものに思ひ給ひつよしやいさむるともきゝいれじと申ければしからばとて荀息か申むねにまかせて荀息をして虞に道をからん事をこはしめしことばにさいつ比冀の國君にむかひて道なきふるまひをなし顚軨の坂より鄍といへるさとの三の門にせめ入りし事ありきそのゝち君の手いたきいくさに打まけてくるしみたりときゝしもたゝひとへにこれ君のいきほひ猛なるによれりいま虢またわれに道なきふるまひをなして旅のやどりにつぼみ居つゝわが國の南のさかひをおかすゐへてこふらくは君の道をかり君の地をわたる事を得て何の罪ありてかわれをうつといふ事をもて虢にとはんとすとありしかば虞公その言の甘くその賂のあつきにめてゝこれをゆるすのみならず虢をうち給ふ先手はわれこそつかふまつらめなときこへしはたして荀息かことはにたがわず宮之奇かいさめもきゝ入ずしてついにいくさをおこせしとなん時に魯の僖公二年の夏晉の里克荀息虞のいくさともに虢をうち陽を滅しにきこれを春秋の經に虞のいくさ下陽を滅すとしるして虞をもて晉に先たてしは賂にふけりし悪をこらしめ給ふ筆の法なりとぞ

二月廿四日

神尾市左衛門組御徒
大田直次郎謹譯

史記　管晏傳賛

太史公いへらくわれ管氏かあらはせるふみの中にも民を養ふ道山高の勢馬車之事用途の輕重はた九府の篇など又晏子かつくれる春秋のふみをみてそのこと葉のつまひらかなるに感じきすでにそのふみを見てし上はその行へる事の見まくほしさにその傳をついてかきつそのふみのごときは世に多くつたへたればあげつらふにをよはずこゝにそのもれし事のみをあぐ管仲は世にいひあへるかしこき臣下なりしかるに孔子その器量を小なりとの給ひしは思ふに周の代のをとろへし時にあたりて齊の桓公といへるかしこき君を得たるにつとめて正しき王業をなさしめずしていやしき覇道をもてせしゆへならずとされど孝經の語に其美にうけ順ひ其惡を匡救す故に上下相親むといへるは管仲か齊に相として民のよきならはしに隨ひ國のあしきをきてをたゝし救ひ君臣百姓よく相玄たしみしたぐひをいふなるべし又雀杼の莊公を害し申せし時晏子その賊をうつ事あたはず莊公の尸の股にふして聲をあげて哭ししづかに禮をなして立出しは論語に孔子の義を見てせさるは勇なきなりとの給へるものならんかししかれども君の顏色を犯してつよくいさめ申せし事のありしは是又孝經の進ては忠を盡さん事を思ひ退てはあやまちを補はん事を思ふといへるものならずやもし晏子をして今の世にあらしめはわれはこれかために鞭とりてみさきおふともまたこひねかひしたはまほしき人なりかし

神尾市左衛門組御徒
大田直次郎謹譯

二月廿四日

一八ッ時頃譯義出來いたし候者計二十人程別座舗之席につき候樣申出候尤書籍一切持參いたし不申樣にとの事なり席は貳席に分ち御目見以上御目見以下と二ッわけに仕切申候御徒目付金子孫三郎御小人目付三人差引致御唐紙立切申候暫く有之御目付森山源五郎殿林大學頭殿御出席森山源五郎殿被仰渡候は堀田攝津守殿より御問目二條出申候各科に一條つゝ御對可申上候由尤斷候而も不苦候由被仰渡候二十人程之人漸六七人御對申上候尤出題例之通張出有之候右張出候後は小用に立候にも御小人目付差添行申候

左傳史記科　子產鄭を治る事業何を要といたし候哉

前後漢書科　馬援一生の功業何第一と定可申哉

通鑑綱目科

狄仁傑武后につかへて唐の社稷に功あるは何事か第一に候哉

右三枚別々に張有之

問子産鄭を治るの事業何々を要といたし候哉

鄭の子産の事は左氏襄公の傳にくはしく史記循吏の傳に略し候司馬貞か補史記の序に太史公子産かために傳をたてすと申候義はいにも孫叔敖は猶可なり區々たる其餘の輩と傳を同じくいたし候は口をしく候まつ子産の鄭を治る事業は國を治るはじめに都鄙章あり廬井伍ありなとをはじめとして晉に奔し豐卷か田里をこひて三年にしてかへせしなと邑をおさむるを美飾を製するにたとへしなど一々かぞふるにいとまあらず候へ共然明鄉校にて執政をそしりしを聞て鄉校をこぼたんといひしをそのまゝにさし置候と末期に子大叔に水火のたとへを以て寛猛相すくふ政のいたしかたをつたへ候はとの肝要なる事はなきかと被存候されば死するの日民考妣をうしなへることく孔子も古の遺愛と感じ思召され候

神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹對

二月廿四日

右相濟退散御頭へ御届に參候

先達而

二月廿二日夕本御番所より申來候由與頭衆相渡候

書付

御徒　神尾市左衛門組　大田直次郎

同　勝堂土佐守組　金子午五郎

同人組　原田寛藏

右者學問御吟味有之候間日割之通朝五ッ時聖堂へ可罷出候

二月廿七日　紀事二首　復文一首

同　廿八日　論一首　復文一首

右之通相心得可罷出候

一平服着用之事

但燒飯被下候事

右之通相心得罷出候樣御申渡可有之候以上

中川勘三郎
森山源五郎
石川將監

二月

一二月廿七日朝六ッ時出宅五ッ時前聖堂へ罷出候今日人數御目見已上拾壹人御目見下拾三人都合貳拾四人なり

御目見以上
松平內藏介　美濃部十右衞門　遠山金四郎
清水平三郎　長崎八左衞門　川尻甚五郎
山本用之助　福王先之丞　山上藤一郎
松平辨太郎　森傳吉

御目見以下
田中安之丞　塚原友之助　小菅久左衞門
近藤十藏　久保田十郎左衞門　大田直次郎
金子半五郎　原田寬藏　成神源藏
柴田忠四郎　井川淺之助　大斧幸之丞
林茂十郎

一四ッ時前御目付森山源五郎殿林大學頭殿御出座堀田攝津守殿被仰候由に而紀事復文致候樣御達有之
一例之通張紙出申候其文言

紀事二首の內一首は原文之字句にしたかひ可被認候一首は勝手に引直し可被認候
紀事二首　復文一首
右三枚張出し有之
一御徒目付間庭龜八郎銘々紀事復文之下本一枚つゝ配り申候（活字にて眞片假名なり）相濟候はゝ筆硯とゝもに返し候樣申候

紀事

謙信家ノ士斑鳩平次ト云フモノ浪人シテ諸國ヲメグルツイデニ加藤清正ノ將莊林隼人カトコロニタチヨリタリ清正ソノ武功ヲ聞ヲヨビテ鉤引セラル隼人トウテ日當家ニツカヘラルベシヤ平次ガ日ドガ、トコロヨリ隼人カ曰祿ノ多少イカン平次曰ワヅカノ俸米ニテ足ラン隼人平次ハ謙信家二千石餘ノ身上ナリトキケハ今ノ詞マコトシカラズオモヒテ祿ノ分限ヲサ

（謙信臣有斑鳩平次者　辭仕　經歷諸州　過加藤清正臣莊林隼人　清正聞其嘗有戰功　將授之麾下　隼人問曰可當滿乎　平次曰所願也　隼人曰祿多少何如　平次曰少得廩粟則足矣　隼人竊謂平次仕謙信至二千餘石　而不信其言　固請定其限量）

ダメントイツ平次謙信家ニテ功勞ヲツミテトリタル
平次曰吾仕謙信有積功以受重祿
祿ヲ當家ニキタリテイマダスコシノ功勞モナキニ舊
今一來此　未有尺寸之功也
祿ヲモラヒテミヅカラムサボル事ハ謙信家ニカッテ
而銜舊所受重祿以自要　則謙信家所未聞也
キカザル事ニ候マヅ無足ニシテメシイタサレコノ後
請無祿而仕
戰場ノ首尾ヲアハセ候ハヾ、度ノ槍ヲ五百石ニサタ
及後交戰　以一交槍獲首當五百石以受祿
メラレテ下サルベシコレミダリニアトウルニアラズ
是非濫賞
ムナシクウクルニアラズ追首ナトハモチロン其數ニ
又非徒受　如追北獲首　則非此限也
入ヘカラストモフセバオモシロキノソミナリトテ其
隼人以其言有趣而
ネガヒニマカセル朝鮮陣中ニ衆ニヌキンテタル事七
任其所請矣　朝鮮之役　一人出隊奮戰七次
度アリテ三千五百石ニトリアゲタリ
連增祿至三千五百石

二月廿七日　神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹書

紀事

斑鳩平二辭上杉謙信麾下遊四方過加藤淸正臣莊林隼人淸正聞其勇而將用之令隼人勸仕平二曰固所願也聞祿多少則曰鋤口則足矣隼人不信其言竊謂平二仕謙信得二千餘石今何容易也固請定其祿平二曰吾在北越有功得祿今無尺寸之功而比故所受以干祿則北越之士所聞也試無祿且仕及他日交槍請以一戰功當五百石如犄走者以獲首則舍之是非濫賞又非素餐也隼人以爲然乃如其言征韓之役七有斬馘之功終至三千五百石

二月廿七日　神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹書

復文

古人イフ事アリ君明ナレハ臣直ナリト裴矩隋ニ佞ニシテ○唐ニ忠アリ其性ノ變ズル事アルニアラズ○君其過ヲキク事ヲニクメバ○忠化シテ佞トナリ君直言ヲキク事ヲタノシメバ○佞化シテ忠トナルコヽニ君ハ表ナリ○臣ハ景ナリ○表ウゴケハ○景シタガフトイフ事ヲシレリ　字數六十

復文

古人有言君明臣直裴矩佞於隋而忠於唐非其性之有變也君惡聞其過則忠化爲佞君樂聞直言則佞化爲忠此知君者表也臣者景也表動則景從焉

二月廿七日　神尾市左衛門組御徒
大田直次郎謹書

右復文には原文は認め不申候

一八ッ時過御仕舞候處今日は當組本御番に付御役羽織持參いたし直に御城へ參り御頭へ相屆歸宅

一二月廿八日六ッ時過出宅五時前聖堂へ罷出申候人數昨日之通二十三人也

一四ッ時前御目付石川將監殿林大學頭殿御出座堀田攝津守殿被仰渡候由にて論一首復文一首相認メ候樣被仰渡候

一張出之紙は左之通二通也

賈誼論　一首

復文　一首

一復文手本御徒目付間庭龜八郎銘々配申候活字板ナリ

賈誼論

蓋世惜賈生之言不用於文帝也、吾竊以爲不然矣」賈生誠秀才也、十八誦詩書、通諸子百家言、方其爲博士、毎詔令議下、諸老不能言者、賈生能言之、超遷至太中大夫、將改正朔、易服色、法制度、定官名、興禮樂、文帝謙讓未遑也、而諸律令所更定、及列侯悉就國、其說皆自賈生、文帝議以爲勝公卿之任矣、至絳灌張馮之屬短賈生以年少初學專欲擅權紛亂諸事、遂不用云、」文帝誠盛德也、本仁孝、尙謙讓、除收帑、開籍田、去肉刑、免租稅、定和親、罷露臺、蓋勝殘去殺之德、不待諸百年之後、何其盛也、況諸呂之亂、喋血京師、人心之不安、搖々如懸旌、曲逆絳侯迎帝、天下之事定矣、天下之事定矣、而百姓置枕於泰山之安、豈不盛乎」、夫以賈生之才遇文帝之德、言聽議行、更定律令、列侯就國、至其改正變制、則謙讓未遑也、及將有大用之、絳灌害之、誠如使文帝不謙讓也而盡用賈生之言、則未知其治果何如也」、夫高祖提三尺劍、天下於馬上、務以除秦苛政、約法令、施德惠爲急、何遑於禮樂制度也、因循苟且、至文帝時、諸呂新平、天下息肩、十月之正、朝會如儀、正朔未可改也、緋衣代戎、水德絀黃、服色未可易也、丞相御史名稱依治、制度未可法也、丞相御史、稱呼仍舊、官名未可定也、綿蕞從宜、武德成風、禮樂未可興也、文帝之德、豈不知賈生之言可用也哉、而謙讓未遑也者、固知天下耳目之所狎、故俗之所安、不可變更、而其

事之不可遽行也、強行不可遽行之事、而害於其政、則其如百姓何、文帝專務以化民、是以海內般富、天下竊然興於禮義矣、賈生少年、才秀氣鋭、欲一意行之、宜乎絳灌以爲紛亂諸事矣、文帝何必是絳灌而非賈生乎、是不得已也、其愛賈生之才也、觀前席宣室且傳少子可知矣、吾故不惜賈生之言不用於文帝、而惜文帝之時、賈生之未可用也」、夫以德如文帝、才如賈生、時猶如此、而況不爲文帝賈生者乎、因是觀之唯德可以治國矣、才難以治國也、善人治國、勝殘去殺、不問治者之才不才、但顧百姓之害不害何如耳」、雖然、讀其書、誦其賦、賈生不啻秀才也、亦有識之士哉、天假之才而不假年、天與之識而不與時、噫、」

神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹撰

二月廿八日

私云通計七百二十字ナリ

復文

太宗ハマコトニ民ヲヤシナフニコヽロアルモノナリ○故ニ耳目ノマジハル所其心カナラズ民ニアリ因ノ背ヲムチウツ事ヲ禁ズルマタヨクソノスルトコロヲオスモノトイフベシ○ソノ戸口滋多家給シ人足ル事ヲイタス事（ムベナルカナ）後世背ヲ杖ウツノ刑アリヨハキモノハ往々死ニイタル蓋コレヲシラズ總兵ノ人私ノ喜怒ヲ以テ大挺ヲモチヒテ人ノ背ヲ杖ウチ數百ニイタリヤスンジテコレヲ行ヒコレヲ禁ズル事ナキニイタリテハ○豈仁政ノワッラヒニアラズヤ

字數一百

復文

太宗實有心於養民者也故耳目之所接其心必在民禁鞭因背亦可謂能推其所爲者矣其致戸口滋多家給人足也宜哉後世有杖背之刑弱者往々至死蓋不知之總兵之人以私之喜怒用大挺而杖人背至數百安而行之至莫之禁則豈非仁政之累乎

二月廿八日

神尾市左衛門組御徒　大田直次郎謹書

八ッ半過相仕舞歸宅御頭御屆は御用捨に相成候

一三月四日昨三日二丸當御番に而御頭被仰渡候由書き物認め差出候樣申來る井上作左衛門棄山權兵衛中神悌三郎も差出候由糊入半紙上包岩城紙二ッ切折かけ應璩詩認め差出申候

子弟可不愼　愼在選師友
師友心長德　中才可進誘

神尾市左衛門組
大田直次郎

上包詩　大田直次郎

一同十三日夕御頭より明十四日林大學頭殿面談被致候義有之候間五時罷出候樣申來候由與頭衆被申渡候

一同十四日麻上下着用林大學頭殿御宅へ五ツ時前罷出候

一四月十八日御目付衆より病氣差合名改等無之候哉之由無事等申來候

一四月廿一日與頭衆より井上作左衛門鈴木文五郎中神順次同道罷出候樣申來候間罷出候處御頭より左之通御書付申來候由

堀田攝津守御渡に成

見出し御徒頭え

神尾市左衛門組
大田直次郎
井上作左衛門
鈴木文五郎
中神順次

右明廿二日四時御城江可差出候

四月廿一日

一同廿二日明六時出宅

御城え罷出本御番仲之間に相詰罷在本御番由高十右衛門殿御組與頭東直右衛門を以御頭御部屋え御届申上候五ツ半時稽古始り候間御頭方（神尾市左衛門殿 老松次左衛門殿 瀬名傳右衛門殿 藤堂土佐守殿）御同道燒火之間御廊下に罷在候處御目付中川勘三郎殿姓名御改め被成稽古御差引被成候而本御番所へ引申候四半時比又々御頭方御同道燒火の間前御廊下へ罷出候處御見附矢部彦五郎殿成瀬吉左衛門殿御差引有之候尤被仰渡候節は矢部彦五郎殿御詰被成候

堀田攝津守殿御出座燒火之間に而被仰渡候

大田直次郎

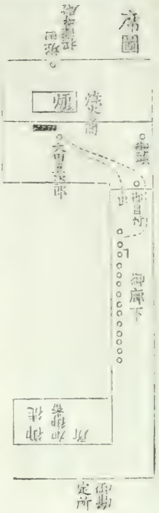
學問出精一段之事に候此度吟味候處學術も相應仕候に付銀子被下猶出精可致候

此節御頭神尾市左衛門罷出御禮有之元之御廊下え引申候

夫より五人づゝ罷出東上候處銀子臺引有之堀田攝津守殿へ御時宜申上各臺頂戴仕候而銀子拾枚拜領仕候間元之廊下へ引申候皆々頂戴相濟又々爲御禮九人づゝ罷出西上申候此節も御頭市左衛門殿御出

御禮被仰候而相濟引直に御納戸へ參り銀子包 五枚包二
ン拜領仕候

席圖



右相濟御禮廻り之義は御老中方若年寄衆不殘相廻り候樣御頭被申渡候間左之通道順相勤申候 老大田備中守殿 若立花出雲守殿 老松平伊豆守殿 若京極備前守殿 若井伊兵部少輔殿 若堀田攝津守殿 老格本田彈正大弼殿 若安藤對馬守殿 老戸田采女正殿 若格加納遠江守殿不參候而宜候由に付參り不申候

附錄

三月晦日

時服貳ツヽ 拔萃 御小性組佐野右衛門尉組 遠山金四郎

時服貳ツヽ 拔萃 小普請組酒井紀伊守支配 奈佐久右衛門

卷物二卷ツヽ 合格 寄合 松平内藏助

同 合格 御小性組坪内美濃守組 人見又兵衛

同 合格 御代官 瀧川小右衛門

右は學問出精一段之事に候此度吟味候處學術も相應仕候に付拜領物被仰付候猶出精可仕旨於躑躅之間御老中御列座對馬守殿被仰渡候若年寄衆侍座

銀拾五枚 拔萃 式部少輔伯父 平賀新五郎

同拾枚ツヽ 合格 彌十郎惣領 高林彌藏

同 合格 次郎大夫惣領 宮崎平四郎

右同斷之旨同人被仰渡候

銀拾五枚 拔萃 小普請方熊太郎倅 山上藤一郎

右同斷之旨

御書院番仙石伯耆守組 清水平三郎

同 諏訪若狹守組 玉蟲八左衛門

同 長谷川丹後守組 間宮平藏

同　山岡宇之助
同　勝田安藝守組　岡田與四郎
新御番松平小十郎組　勝安兵衞
御納戸　遠山三十郎
小十人久松忠次郎組　中山長之丞
小普請阿部大學支配　今堀吉之助
増島藤之助
清水長柄奉行十四郎忰　出井助太郎
夏目長左衞門
小普請阿部大學支配藤之助忰　増嶋金之亟
大御番松平下野守組作十郎弟　宮重八十之助

右は學問出精一段之事に候猶出精可仕旨御同人被仰渡候

四月廿二日

小普請組近藤左京支配　竹内新十郎
同南部主膳支配勘右衞門惣領　大澤定之亟
支配勘定　田中安之亟

右學問出精仕候段達御聽一段之事に候猶又出精可仕候段於躑躅之間松平伊豆守殿被仰渡候

銀拾枚　大田直次郎

學問出精一段之事に候此度吟味候處學術も相應仕候に付銀子被下猶出精可致旨於焼火之間堀田攝津守殿被仰渡候

銀七枚　御徒神尾市左衞門組　井上作左衞門
同　同組　鈴木文五郎
同　同組　中神順次
同　同吉松次郎左衞門組　上條八太郎
同　同瀬名傳右衞門組　新樂鄉右衞門

右學問出精一段之事に候依て銀子被下猶出精可致旨於同席御同人被仰渡候

富士見御寳藏番入口野十五郎組忠兵衞惣領
銀七枚　進上取次番之頭市太郎惣領　内藤彌藏
同　飯田直次郎
同　御中間頭幸衞門惣領　大谷幸之亟
銀五枚　御數寄屋坊主　梶田文宅

右同斷之旨相聞一段之事に候依て拜領物被仰付候旨於同席御同人被仰渡候

火消役寳賀兵庫組與力　小菅久左衞門

御先手松浦長門守組與力　近藤重藏
同三宅藤右衛組與力當時明組　近藤茂八郎
同太田運八郎組與力　久保田十郎右衛門
御徒吉松文四右衛門組　大久保五左衛門
同藤堂土佐守組　原田寛藏
御普請支配無役　柴田甚四郎

右學問心掛け一段之事に候猶出精可致旨於同席御同人被仰渡候

明屋敷伊賀者　早川吉次郎

右同斷之旨於御臺所廊下曾我伊賀守申渡候

御具足奉行櫻井孫兵衛組同心　井川儀之助
町奉行小田切土佐守組同心　菱田勝藏
御先手内藤伊織組同心　川崎久次郎

右同斷之旨御留守居町奉行御先手へ書付達之

銘賜銀篋

不執長戟　柔翰是濡　身籍步兵　業類散儒
朱提之賜　華袞之諭　内省有靦　極知穿窬
文事所拜　武備不偸　爰封爰撿　以戒不虞

安永五のとし内中の四月日光山御社參の事ありその御供にさふらひし時かけながしに賜はれる餉の割籠のあきたるに此たびたまはれる所の白金十ひらをおさめその器の上に此銘をかきて家に藏む

杏花園

科場窓稿終

寛政御用留

○寛政九年
六月
十九日
金貳枚　　添奉行　川村新六
右日光御用に付御暇
廿四日
御勘定方御入人有之に付御鳥見御天守番富士見御寶藏番御徒目付小普請方改役小普請之面々筆算吟味有之
廿五日
今丑刻土用に入出かけに柳生主膳正殿間宮主膳正殿根岸肥前守殿肥田十郎兵衛殿三橋藤右衛門殿岡松八右衛門殿暑氣見舞歸りかけゟ中川飛彈守殿勝與八郎殿留守宅見舞岸彥十郎殿へ暑氣見舞今日柳生主膳正殿中川飛彈守殿暑氣見舞堅御斷之旨書付出候加藤惣兵衛殿關川庄右衛門殿御斷
廿六日
出かけゟ鈴木新吉殿坂野喜六郎殿暑氣見舞定式筆墨料拾匁此外に五百拾文帳面方ゟ請取申候
七月小
伊豆　加藤惣兵衛
采女　關川庄右衛門
備前　中島宇右衛門
淡路　杉島彥五郎
甲斐　永田松次郎
土佐　小倉孫左衛門
肥前　倉地政之助
飛彈　水野藤九郎
新見長門守
松平田宮
三日　今日より涼
當四日
齡眞院樣百五拾回御忌に付天德寺右御廟所玉垣石燈籠修復願河合內藏助取調御廻し出候處飛彈守殿御附札にて十日樣には養方御伯父十四日樣には（　）方御伯父之處其儘被差置候處此度御出來にては御先代之御不當敬を顯し候に當り候間柾木に生垣にいたし先年被下候百兩利金にて取賄可申旨云々

四月

紅葉山
台徳院様御靈屋御道具并溜池山王御太鼓御見分有之
中川飛彈守殿鈴木新吉殿吟味方伊藤九左衛門 大田直次郎 山本雄三郎

五日
歸路同塚越氏比留間氏高橋氏　宴源空寺

六日　雷雨
鍵番 大田直次郎 中村幸左衛門 六つ時過出勤仕廻捨 大貫重次郎 染戸忠右衛門

七日
寄合番 推名助右衛門 北條熊五郎 岡本勇太郎 次口 是ハ心得中入置張出し致し 市野彦太郎 塚越藤助

八日　暑

九日　涼風至
湯呑所之者 佐之吉へ弐百銅 河内屋勘藏へ百銅遣す

十三日暑　御出　大田直次郎
十四日同　同　河合内藏助
十五日同　同　保田直之丞
十六日同　同　葛山政藏
十七日暑　今日ゟ皆々出勤

十八日暑
溜池山王御道具御入用伺御廻し庄右衛門殿へ出し置
是ハ 總姫様 總姫様 御宮參之節之御道具也然所當四日
總姫様 御逝去に付肩書除之

廿日　涼風 六日雷雨より今日迄雨ふらす今夜けしき計雨ふる地なうるなさす
葛山政吉御法事御用相濟帳面方へ歸る
一、口澤清淨光寺下ケ札對馬守殿へ古川吉次郎を賴
み田中吉藏を以上る河合氏

廿一日　風雨　涼冷

廿二日　同雨　涼冷
明後廿四日筆算御吟味御座候由悴定吉も罷出候旨杉
江勘兵衛申聞

廿三日　空晴　暑
御場所柄不相應に付　阿久保彌左衛門 御鷹方掛勤居候也
小普請入

廿四日　晴　暑
今日筆算御吟味有之悴定吉同道朝六つ半時頃出宅
御目付 横田 森川 奉行衆吟味役衆不殘 但間宮筑前守殿湯淺小笠原三九郎殿〆集に付 出席無之
一溜池山王御道具御入用伺備中守殿へ間宮平次郎を

以上る

今日罷出候姓名

平藏惣領 男谷彦四郎 二十一
貞右衛門惣領 本城金次郎 十八
勘右衛門惣領 大竹勘十郎 四十三
又十郎惣領 ○内藤八十之助 四十三
御藏奉行出役 彦太夫惣領 石渡由次郎 二十
佐左衛門惣領 佐藤源五郎 三十二
郷左衛門惣領 近藤吉之助 三十一
小兵衛惣領 ○高橋吉之丞 四十
御材木石奉行出役 九八郎惣領 富安八十郎 三十六

源四郎惣領 川村鍋次郎 四十二
定市惣領 保田久次郎 二十二
嘉兵衛惣領 志村鐵太郎 二十一
百之助養子惣領 村上庄五郎
又左衛門惣領 柘植道太郎 十八
新助惣領 岡田新藏 二十六
甚四郎養子 小川英二郎 三十五
吉太夫惣領 米田久次郎 二十
左吉惣領 澤藤二郎 十九

五郎介養子惣領 竹井利三郎 三十八
與兵衛惣領 中村文太郎 二十五
三右衛門惣領 近藤松五郎 二十五
平次郎惣領 田原鐵之進 二十三
平十郎養子 安井清藏 二十三
武左衛門惣領 正木岩三郎 三十五
啓五郎惣領 神尾熊太郎 二十一
平左衛門惣領 稲生忠次郎 二十五
新五郎惣領 江見丑之助 二十九

忠兵衛養子 杉浦求馬 四十一
小普請堀田主膳支配 奥谷久米五郎 二十七
御目見得格 大橋金左衛門 三十六
表火之番 加藤銀藏
伊左衛門惣領 松田安之丞 十七
幸八郎惣領 小林榮藏 二十
彦右衛門惣領 岩崎龜五郎 二十二
市之進惣領 妻木周次郎 十八
直次郎惣領 大田定吉 十八
同安藏惣領 田邊安太郎 十九

貫一郎養子 長尾嘉一郎 二十四
○横尾又右衛門 四十
支配勘定頭御徒押 金井喜四郎 三十九
御勘定奉行支配無役 大塚孝之助 二十七
支配勘定 彌司右衛門惣領 丹羽吉太郎 三十六
嘉十郎惣領 戸田政次郎 二十七
茂八郎惣領 飯田庫三郎
彦左衛門惣領 西原熊藏 十九
喜藏惣領 村井庄八郎 二十

長三郎惣領 松長下藏 三十七
菅浪辰之助 四十一
○仁兵衛惣領 花田吉藏 二十三
久次郎惣領 池永鐵之助 十七
淺次郎惣領 内藤八彌 三十五
武太夫惣領 岸本文之進 二十六
藤左衛門養子 人見孝藏 二十二
支配勘定格 榮左衛門惣領 吉川八十八 二十

〆五拾四人　外斷も有之候由

奉行衆御禮は父子堅御斷組頭衆も右同斷

廿五日　暑

廿六日　少涼

廿七凉　朝夕凉

今日忰同道平服にて柳生主膳正へ參上御逢有之組頭勝岡彦兵衞坂野喜六郎松山惣右衞門へ計忰禮ながら參り申候尤平服

廿八日　同

中川飛彈守殿不快に付御斷之由

一信州顏戸村蓮花寺御府内相對勸化御免に付御代官達之儀松平右京亮ゟ達書來る御府内在所支配所有之候御代官　大貫次右衞門　野田文藏　菅沼安十郎

廿九日

引ヶゟ中川飛彈守殿へ御見舞幷此間之御禮申上候

閏七月　大

釆女　岡松八右衞門
伊豆　松山惣右衞門
兵部　村田鐵太郎
大炊　伊庭惣兵衞
内記　高橋八右衞門
土佐　澤治郎右衞門
主膳　谷田久太郎
筑前　上野善右衞門　水野藤九郎

小長谷能登守
羽太庄左衞門

朔日

二日

一溜池山王神酒机幷切立新規出來御入用伺書付釆女正殿え間宮平次郎を以上る　庄右衞門申聞

一國書圖五枚内々村田鐵太郎へ出し置候直段付拾六匁之積之所貳拾目にいたし候樣鐵太郎申聞同七日金壹分貳朱受取つり貳匁五分切上候處預ヶ置候而も宜候由鐵太郎申聞預り置申候

四日

一伊勢兩宮或年御遷宮御指山願書壹箱 九通 壹冊　伊豆守殿

萩原金十郎石屋彦四郎持參廿八日出之飛脚到來也

一藤澤淨光寺御手當銀下方御評議被仰上候處御由緒柄之儀に付御手當有之方にて員數取調申上候樣被仰渡備中守殿萩原金十郎を以御下け

七日

一國繪圖五枚今日内々鐵太郎ゟ受取翌日北町へ渡す
一河州壺井八幡權現修復願内糺書付四冊 繪圖壹枚最寄御代官
篠山十郎兵衛手代三輪左吉えかし遣す同日返す

十日　晴

一定吉同道間宮筑前守殿根岸肥前守殿へ時候見舞此
間御禮兼參上候處御不快にて御逢無之

十一日　小雨

十二日　大風之雨今日鍵番 太田直次郎 染戸忠右衛門

十三日　鍵番 石川太兵衛 安岡剛三郎

十四日　三百俵御加增御切戸者之頭被仰
付候書留奉行伊庭惣兵衛

十五日　廻狀有之　月並御禮有之

書面之通り達之趣御承知可被成候

神寶方
御林方
御鷹方
諸入用方
分限帳掛り
證文調方

伺方

改方

運上方
植物掛り
島々掛り
國役掛り
油絞掛り

閏七月十四日喜六郎持參庄右衛門ゟ請取

御勘定奉行衆　御勘定吟味役

御取箇方 吟味方改役 伊藤九左衛門　伺方 同 大瀨新三郎
帳面方 同改役並 荒井甚之丞

右は拙者共支配吟味方之もの共廻し書物其外都て
之議其品々より携取扱右に付ては御勝手方御取箇
方其外一統掛々えも立入候儀御達被置候樣致度段
去辰二月及御掛合置申候然る處一體は諸掛り々え
加り御勘定方一同爲相勤可申處御人少に付是迄相
懸け不申候得共此節手明きも出來に付先右三人の
もの共書面之場所々へ相懸ヶ御勘定方一同御用向
爲取扱候樣可致と存候間此段御達御座候樣いたし
度候

巳閏七月

廿四日

右之通被仰付候に付引けゟ祝議に參り申

佐渡奉行

御勘定吟味役
鈴木新吉

一御代官山上熊太郎（去辰年當巳年）御年貢米金納拂之儀申上
候書付帳壹冊諸入用方ゟ廻し來る右帳面に

今十三日跡目願出候議に付
書面之通相違無候哉早々御突合之事
閏七月十三日　坂野喜六郎
御勝手方
御取箇方
伺方
帳面方
右御同役中樣

廿五日

一山上熊太郎元手代呼出し書付差置
世良田長樂寺御貸附金之議に付申上候書付
山上藤一郎

一金三百四拾五兩永五拾三文四分四り
是は世良田長樂寺
御宮御修復料御貸付年賦金去る丑年分先達而
內納之義申上當巳七月廿六日御金藏納仕候
外金四兩貳分は　村方未納取立次第所可相納候

一金三拾兩
是は右同斷御貸附金三百兩年壹割去辰年利金御
金藏へ納證文下出置候間改濟次第上納可仕候

一金六兩壹分永八拾三文
是は右同斷御貸附年賦金卯辰兩年村方未納取立
次第上納可仕候

右は世良田長樂寺
御宮御修復料御貸附御金藏納仕候分は村方未納之分
共書面之通に御座候申上候
巳閏七月　山上藤一郎印
御勘定所

廿八日

一御代官山上熊太郎ゟ差出候皆濟目錄下け札いたし
改方山田忠右衞門へ引渡す組頭衆を賴み御殿御勝
手へ遣候由
申渡　御勘定

河合内藏助

右は川村新六儀日光表御修復御用罷越河野藤九郎儀は當巳十月迄服中に付御淸御道具筋吟味筋差支之議も有之候間當分添奉行の助可相勤旨伊豆守殿被仰渡候

閏七月

尤定式も相兼候由與頭衆被申聞候

八月　大

備中　加藤惣兵衛
對馬　關川庄右衛門
攝津　中島宇右衛門
周防　杉原四郎兵衛
肥前　蜂屋十郎右衛門
肥後　堀内小膳
肥前　鈴木傳右衛門
飛彈　小野藤九郎
横田十郎兵衛
坂久間左京

朔日　寄合番　推名助右衛門　塚越藤助　松田伊左衛門

三日

一伊豆守殿御壹人御勝手方御取扱之旨專阿彌を以被（向後）仰聞候

四日

一城州小枝橋掛直書付五通三冊左之通書付御勝手方へ引渡す

關川庄右衛門

御勝手方へ

城州紀伊郡小枝橋掛直し之議堀田大藏大輔殿被差出候書面之趣に而は請負年限相立候に付公議御入用を以御修復可被仰付候間掛直御入用小堀縫殿へ爲可申進旨先達而被仰下候由に有之候處近年神寶方掛に而右小枝橋之儀御斷下等取扱候義無之且小堀縫殿差出候書付にも寶暦之度掛直候義有之候處是又神寶方掛に而取扱候書留相見不申候事

巳八月

四日　伺方中間

一今日矢橋松次郎評定所留役被仰付候池田要人跡也

十一日　御勘定出役　同

一今日本多鐵藏三島所左衛門御取箇方出役被仰渡候

今日茶半斤出す　菜番なり

十五日

一今日萩野伴右衛門悴　筆算御吟味有之明日奉行衆吟味役衆貳階吟味方詰所にて御寄合有之

十六日　鍵番　大田直次郎　安岡剛三郎

一御徒目付両人見廻りに來る

一今朝三州大樹寺御道具御見分有之中川飛彈守殿三橋藤右衛門殿　御勝手掛田口五郎左衛門市野茂左衛門來

一今日松田伊左衛門米田吉太夫山田益彌御勝手助へ入岡本勇太郎御勝手方當分助

十七日　書替奉行　御勘定評定所留役安井平十郎　伊庭惣兵衛跡

請取申銀子之事

銀三拾枚　但丁銀也

此貫目壹貫貳百九拾目

右は境内に有之候宇賀神堂類燒に付再建爲御手當被下置候間書面之通り請取申候處仍如件

相州藤澤

寛政九巳年八月　清淨光寺

上野善右衛門殿

鈴木傳右衛門殿

倉地政之助殿

巳八月廿日飛彈守殿御渡壹通

中川飛彈殿え　板倉周防守

相州藤澤清淨光寺先達而御寄附之儀御願候爲御手當等被下候例も無之に付願之趣は不被及御沙汰候乍然宇賀神堂類燒に付再建難及自力由に候間格別之譯を以爲御手當銀三拾枚被下候以來容易には難相成事に候間其段も可申渡尤各方え御談可申上旨對馬守殿以御書付被仰聞候に付及御掛合候否被御申聞候樣いたし度存候

八月

下札△

御書面御掛合之趣候承知いたし則御銀請取手形案取調進達いたし候本紙幷寫御添差出可申旨御申渡有之樣存候

八月　中川飛彈守

一増上寺

台德院樣

桂昌院樣　御靈前御道具御修復御入用之儀申上候

月光院樣　書付御廻し出す　鐵太郎請取

廿五日

中川飛彈殿へ　板倉周防守

相州藤澤清淨光寺御手當銀請取手形本紙幷寫壹通差進申候依之御差越候手形案返却いたし候且右案文には清淨光寺と有之候得共役僧興德院出府いたし相願候に付右名前に相認差出申候清淨光寺宛名前に無之而は不相濟候はゝ猶又被御申聞候樣いたし度存候

廿七日

御作事奉行
石川左近將監
久世丹後守跡
御勘定奉行被仰付候
御勝手方

引けより御祝儀に參候

一今日清淨光寺手形取調裏書いたし今朝吟味役小笠原三九郎殿押切長印共取候處今日左近將監殿御役被仰付候一同如何可致哉と庄右衞門殿へ承合候處巳八月の下へ廿七日と日附を書入候得は宜候由申聞奉行衆御判相濟同卅日土井大炊頭板倉周防守殿へ被遣候由庄右衞門申聞

九月

對馬　松山惣右衞門
出雲　村田鐵太郎
右京　中島宇右衞門
內記　鎮目牧太
土佐　永田松次郎
肥前　小倉孫左衞門
　　　倉地政之助
飛彈　河合內藏助
　　　蜂屋源八郎
　　　渡邊久藏

一右は節句に付十日渡りし手形八日渡りに成候由

一美濃紙半分竪紙の明細書出候樣西澤與左衞門申候に付認め出候

十一日

一石川左近將監殿へ御登城に付參上麻上下　御逢有之
用人　大野市之進　佐藤市之進　杉江勘兵衛

一昨十日未刻間宮筑前守殿御死去御届出候由

十三日

一叡山山門惣而御修復御用掛り被仰渡　田口五郎左衛門　市野茂左衛門
杉江勘兵衛　吟味方　大類新次郎
江戸掛　勝與八郎　保田定市

一羽州大清山大行院勸化願御廻し出す

十六日

一右同斷御廻し濟

十七日

一紅葉山御成に付　割出　大田直次郎

十八日

一羽州大清山勸化願下札いたし伊豆守殿へ青木忠左衛門よりたのみ田中吉藏を以て上る

十月

四日

一玄猪之御祝儀有之

五日

一御誕生之御祝儀有之

十二日

一菅沼下野守殿御勘定奉行被仰付候直に御祝儀に參る

廿三日

一芝與一右衛門日光表より歸着

廿五日

一上野御統々様御道具帳貳冊飛彈守殿御渡

卅日

増上寺

一天英院様 崇源院様 御靈屋御道具幷清揚院様御道具石川左近將監殿小笠原三九郎殿御見分濟　吟味方　笹本清次郎
組頭　關川庄右衛門

十一月　大

一肥前守殿下野守殿下御勘定所御廻り

采女　松山惣右衛門
兵部　村田鐵太郎
淡路　安井平十郎
因幡　杉原四郎兵衛
土佐　蜂屋十郎右衛門
飛彈　堀内小膳
下野　倉地政之助
介　河合内藏助
新見長門守
佐久間左京

七日

一谷中感應寺富興行願御御廻し出す　掛り庄右衛門　別記

八日

一小石川傳通院
瑞巖院殿御常用御道具御入用伺御廻し出す
瑞巖院殿御靈前御常用新規御道具御入用之儀御
伺候書付

中川飛彈守
石川左近將監
大久保内膳
肥田十郎兵衛
小笠原三九郎
御勘定方

去月十三日御渡被成候土井大炊頭差上候
瑞巖院殿御靈前御常用新規御道具御入用吟味仕候
趣左に申上候

一銀五貫五百八拾九匁八分餘
金にメ九拾三兩餘　御道具類
參拾貳口　新規出來
外壹口　添奉行方傳通院對談之上奉申候

右御道具類之儀添奉行え申渡見分之上傳通院

可成丈省略仕實々無之候而は難相成分計出來之積
り内御戸張地御膳本二三皆具は大奥より相廻り有
之候間添奉行より對談之上御常用積にいたし御入
用本途直段幷前々出來直段に見合吟味仕候處相違
無御座候間右御入用辻を以新規出來之積り取掛り
之儀添奉行へ申渡候樣可仕候哉此段奉伺候以上

巳十一月

一紅葉山御道具幷
御宮
増上寺
清揚院樣　御靈屋御道具
崇源院樣天英院樣御靈屋御道具御入用御内貸手形三通
今朝小笠原三九郎殿押切長印とも取之御取箇方詰
番和田爲右衛門を賴御判取添方中村小平太へ渡し
遣す　鐵太郎殿押切取置候

十四日

谷中感應寺富興行願奉行衆吟味役衆御廻し濟内膳
殿附札有之候間別紙書付庄右衛門へ出し置く
一玉樂組國役帳内々被賴國役掛河合德左衛門へ帳面
遣し御代官請取手形も遣し申候御代官請取手形へ

押切印
左之通り張紙いたし返す

> 國役金納證文改之上御勘定所へ入置御代官請取手形壹通致返却候
> 巳十一月　　御勘定所

十五日
一瑞巖院殿御常用御入用伺
御廻し濟　（）私寫置候書物庄右衛門を以奉行衆内覧に入候
一代々記貳冊　石川左近將監殿

十八日
一瑞巖院殿御常用御入用伺伊豆守殿え鍋三郎を以上る承り付候樣同人を以御下け承付いたし候

十九日
一今日中川飛彈守殿御退出掛ヶ下御勘定所へ御立より被成被仰渡候事有之序に御逢被成度旨庄右衛門を以被仰下
於内座縣御目候處常に書留等出精いたし候御譽被成候此段同志之者申合候彌書留いたし候樣尤一兩人も名前庄右衛門方へ申候樣仰聞候

廿二日
一今日惣勘定之所に書前神田佐久間町出火に付御延引同廿六日に有之候

廿九日
一谷中感應寺富興行願下札いたし長谷川彌左衛門を賴尾嶋鍋三郎へ遣し返上

巳十二月　大
備中　加藤惣兵衛
攝津　關川庄右衛門
大炊　中嶋宇右衛門
　　　杉嶋彦五郎
内記　鎮目牧太
肥後　富安九八郎
主膳　鈴木傳右衛門
肥前　川村新六
蜂屋源八郎
渡邊久藏

五日
一定扶持手形二十七通御殿へ持參御判取
手形番　大田直次郎
　　　　石井量助

六　日　今日岩堀藤次郎當分神寶方介出役

一河合内藏助被爲召添奉行助相勤候に付爲御褒美白銀三枚被下置候旨松平伊豆守殿被仰渡

十　日

一駿州薩陀村靈仙寺願御廻し出す

十一日　今朝主膳正殿御登城かけ參上御逢有之

一瑞巖院殿御寶塔御供養御道具御見分主膳正殿三九郎殿吟味方立合岩田本五郎　組頭庄右衛門

一今日帳面方にて筆代七ヶ月分銀五匁八分三厘 此錢六百七文受取

十三日　廻狀來

自分共儀前々より壹人宛下御勘定所え立寄來候趣之處御用多に付暫中絶に及候に付猶又申合以來登城掛壹人つゝ立寄出勤之面々者人體等爲見知にも候之間折々は着到帳引合遂面會且此方都合次第諸掛御勘定方詰所へも相廻り勤向之樣子をも可及見其外差掛候御用向は承之御老中方御揃之頃　御殿え罷出候積りに候間各方にも引續追々御殿え被相越候積り申合せ右之趣御勘定方一統に可被達候

但當年は最早餘日も無之候に付自分共下御勘定所え立寄候儀は來春ゟ之事にも可相成候得共右に不拘各方を始御勘定方申合之儀は本文之趣に可被相心得候

巳十一月

右之通り奉行衆被仰聞候間御承知可被成候　帳面方

巳十二月　改方

十六日

一村田鐵太郎殿ゟ金貳分貳朱請取申候

覺

一銀貳拾五匁　繪圖五枚料

内貳匁五分先達て請取差引金壹分二朱

一銀拾五匁　繪圖六枚料

二口合金貳分貳朱

右之通り請取繪圖仕立候者へ差置申候以上

十二月十六日　大田直次郎

外に爲御褒美金三百疋繪圖仕立候者え遣し候樣飛驒守殿ゟ鐵太郎を以被遣候間北町へ遣し私より鐵太郎殿へ禮之手紙認め遣し申候

十八日

一駿州薩陀村靈泉寺願下け札いたし尾嶋鍋三郎を以

上る

巳十二月　出割

十七日　岩堀　廿五日　河合　廿六日　保田

廿七日　大田　廿八日　河合　廿九日　岩堀

卅日　河合

午正月

七日　山本　八日　大田　九日　保田

十日　河合　十一日　岩堀　十二日　大田

十三日　河合　十四日　山本　十五日　保田

十六日　山本　十七日　岩堀

廿三日

一角倉一學手代伊丹庄藏差出し候中宮寺宮御堂御殿内糺入用立方伺御廻し出す

半紙にて七ッ付

書面去七月中中宮寺宮御堂御殿破損之趣御代官角倉一學手代被差遣内糺仕候御入用立方相伺候に付取調候處京都より和州平群郡立野村迄道法貳拾四里餘支配所内にて夫々中宮寺迄壹里拾町餘支配所外之由去寅年熊野本宮御再建に付鈴木新吉御代官勤役中爲内糺差遣候御入用立方に見合不相當之儀も相見不申候間書面之通り御入用に相立員數之儀は追て被仰渡可然奉存候

巳十二月　關川庄右衛門印

主膳正　大岡直次郎印

飛彈守　大竹庄九郎印

左近將監

内膳

十兵衛

三九郎

廿七日　割出

一瑞巖院殿御靈前新規御道具出來御見分有之柳生主膳正殿大久保内膳殿追出かけ吟味方岩田本五郎立合御見分相濟川村新六へ引渡遣す

一廿九日割出岩堀藤次郎之處痛所有之由申來保田直之丞出勤之積

一紅葉山御道具御修復殘銀手形小笠原三九郎殿え押切長印取之庄右衛門を賴御判取添方出野安右衛門を以鹽野牧太え遣す

一王子金輪寺御下銀之承付之儀に付河合内藏助加出に出る

同廿八日

御鳥見
鵜殿十郎兵衛

富士見御宝蔵番
西井安太郎

御勘定吟味方改役並
青柳伊右衛門

御天守番
支配勘定出役
高橋次助

坂井十之助

支配勘定
内藤三郎兵衛

同
小林幸八郎

同
久保寺喜久藏

同
若林源内

同
阿久澤彌平次

小普請組山石彌兵衛支配
御勘定出役
村井徳太郎

同溝口相模守支配
同
本多鐵藏

同秋元隼人支配
同
野村五左衛門

永田藤七郎

小普請組秋元隼人支配
御勘定出役
岩堀藤次郎

同
堀田主膳支配
横岸文右衛門

同
戸田中務支配
大井安太郎

同
堀田主膳支配
支配勘定出役
伊藤斧五郎

同
戸田中務支配
神戸政之亟

同
秋元隼人支配
三嶋所左衛門

同
岡部大學支配
湯淺孫兵衛

坂倉彌順

同
山口勘兵衛支配
勝甚三郎

同
戸田中務支配
廣木文次郎

齋藤樂次郎

同
仙石彌兵衛支配
野間弁之助

瀧川長門守支配
伊藤富之助
佐野肥前守支配
大屋政藏
室賀壹岐守支配
高山彌十郎
戸田中務支配 支配勘定出役
鈴木源藏
佐野肥前守支配
安岡剛三郎
御徒竹田吉十郎組
羽田平五郎
御徒目付
杉本五左衛門
仙石彌兵衛支配
鈴木勝次郎
支配勘定 小兵衛惣領
高橋吉之丞
同新五郎惣領
江見丑之助
又十郎惣領
内藤八十之助
支配勘定格
和田爲右衛門
支配勘定 平藏惣領
男谷彦四郎
同伴右衛門惣領
荻野藤四郎
同仁兵衛惣領
花田吉藏
表御臺所頭支配無役
齋藤新藏

右被仰付之旨於躑躅之間太田備中守殿被仰渡之若年衆侍座

一寛政十一未年正月十六日松平伊豆守殿え伺之上大阪銅座詰今井德三郎代り被差遣候旨松平石見守殿被申渡候處同廿七日林大學頭え被仰附候孝行奇特者取調御用之方え出役大阪銅座御用之方え者代り之者被差遣候旨太田備中守殿以御書附被仰渡候段松平石見守殿被申渡同十二申年右出役中正月廿一日御勘定所諸帳面取調御用被仰渡御用中爲御手當一ヶ月銀壹枚ツヽ被下置候旨松平伊豆守殿以御書附被仰渡候旨柳生主膳正殿被申渡同五月廿八日林大學頭御用相濟出役御免之旨太田備中守殿以御書附被仰渡候旨柳生主膳正殿被申渡候

一同十二申年八月廿九日孝義録編集御用相勤候ニ附銀子被下置候旨躑躅之間太田備中守殿被仰渡白銀拾枚拜領仕候

一同年十一月六日神寶方本役被仰渡爲御用扶持貳人扶持被下置候旨小笠原三九郎殿被仰渡候

一同年十二月廿四日御勘定所諸帳面取調御用骨折相勤候ニ附銀子被下置候旨於御右筆部屋御椽頬松平

伊豆守殿被仰渡堀田攝津守殿侍座白銀七枚拜領仕
候

一同十三酉年正月十一日大阪銅座詰安岡剛三郎代り
被差遣候旨松平伊豆守殿え伺之上申渡候段柳生主
膳正殿被仰渡同廿一日御暇拜領物被下置候旨於躑
躅之間松平伊豆守殿被仰渡堀田攝津守殿侍座金弐
拾兩拜領仕同日被下物被下置候旨伊豆守殿以御書
附被仰渡候旨中川飛彈守殿中被渡候

寛政御用留終

尺牘　自享和元辛酉年三月至同二壬戌年四月　大坂表よりの状

請取申旅御扶持方之事

米合壹石五升者　但京升也

但一日壹人五合宛七人扶持一倍之積日數十五日

右は銅座爲御用大坂表え罷越候に付爲旅御扶持方書面之通請取申候所仍如件

寛政十三酉年正月　大田直次郎

請取申銀子之事

合銀貳六拾枚者　但丁銀也

此目壹貫百拾八匁

但壹ヶ月銀貳枚宛十三ヶ月之積

合銀四枚者

此目百七拾貳匁　賄道具代

金拾五兩者（内小粒六兩）　物書料

合金四拾九兩者　雜用金

内小粒　拾九兩貳分

但壹ヶ月金三兩貳分宛之積り十四ヶ月分

金貳兩　筆墨紙蠟燭代

梅天近候兩地平安

一二月廿七日發途渭城夜雨に一御退直も遲く闕面別候事御尤と奉存候廿八日も微雨其夜大雨二十九日は函谷の險を踰え候（卯時酒二椀傾申候）幸哉朝より雨晴山上は躡木屐歩行いたし候畑の立場にて傾盃頻に二君相豆の遊邂逅立子玉候事存出し申候處其夕三島驛にて菊池内記泊と札有之候間道を心がけ參候處喜瀬川の東にて轎簾を上て顏を出し候ものを見候へば叔成にて兩方輿をよせ暫傾蓋談話御噂をも申候何をいふも途中の事匆に官事にて東西へ別れ申候きせめて晝にも候はば休み可申候處泊をいそぐ薄暮なり夫よりは日々天氣よく宇津の山薩埵峠鈴鹿山等下輿歩行足疾頓愈日々二三里づゝ歩行山水の奇賞不可擧記候伊勢路よりは花ざかりにて大津泊早く候まゝ私に三井寺へ參り絶頂より湖水を望申候山は八重一重の花の雲の中にて三上山鏡山比良嶽唐崎矢橋勢田の景如夢寐于今思ひ出られ候三月十日には京都廻りいたし祇園清水花盛にて知恩院八阪の塔東福寺通天橋一覽伏見夜舟にて十一日朝卯

刻に浪華に著申候夫より日々吏事繁く候へ共閑暇には八半時頃より所々一覽いたし候天王寺の古刹高津生玉の眺望天滿天神の繁華一々記しがたく候旅宿は南本町五丁目にて甚寛曠樓も土庫も有之候

一私宅にても史記會讀候など悴方より申越候御詩會いかが宿題御定め候はゞ一月一次づゝにて豚兒へ御談し御極め可被成候詩は是より上げ可申候此土にも雅人多く御座候比隣に久留米樺島勇吉同門の醫生馬田昌調と申候もの關叔成をもよく存居候和漢の學にて詩は至て好きにて日々唱和慰客懷候重て可懸御目候

一佳作感吟仕候高和左に志るし候上巳には金谷宿菊川などの邊にて詩をも賦し申候其夜は濱松に泊候き

三島驛遇關叔成自南紀還

東去西來思萬重。途中傾蓋喜相逢。路過三島見仙客。來自紀南熊野峯。

和山士訓三日見懷用其韵

桃花佳節菊河濱。曲水流觴憶右軍。何日同傾金谷酒。江東暮色隔春雲。

用韵は唐人和韵の一體にて用其韵不歩其字候

此詩御他見御免歸府迄は人間へ示不申候

一客舍無事讀書罷在候親朋の一字千金に候間時々御文通可被下候豚兒方へ被遣候へば一月數度役所便にて不及賃錢候間無御遠慮幾度にても可被遣候かさになりても不苦候猶重てと早々以上

四月十九日　杏花園

山内尚助樣

一島崎氏え申入候野村仲助は四月廿日頃に立候由にて古銅吹所本所法恩寺橋際に有之候乍去私宅へ是非立より候樣先便申遣候且本田氏書狀も届申候

一出立支度入用殘金いさい御書付承知いたし此間五月分迄御扶持方も取十四人扶持拂貳兩壹分貳朱と小玉銀二ッ取申候用人節儉にて此分にては餘り入用かゝり申間舗哉唯何もかも通帳にて用事足り過申候二月拂之積に候勝手は甚靜にて中々みだりに客來は無之よろしく候

一交代安岡氏路用差支候由にて出立前日御普請役立合金七兩かし遣候書附取置申候尤御褒美濟留守宅

定吉へ返濟の積に御座候とかく是は定例之由たとひ都合宜候而もわざと物入候樣に見せかけ長崎を心かけ候事と相見へ申候夫故わざと御普請役見候前にてかりし事に候憐成男に付間違は有之ましく候

一松藏事吉左右承り大慶いたし候兄弟ともに合力候事は一段之事に候一圓無沙汰にても右之通にさへ成候へは辨損にいたし可申取込早々以上

一出立支度之會計委細承知いたし候今之分にて當分入不申候先便申遣候安岡氏返金も其表えいたし候積に候是以此方ゟ申遣候節被遣候而よろしく御座候少々宿にさし置候方宜候

一大久保普請出來に候哉番町御病人はいかゝ本多氏へも此間榮藏遣し委細口上之趣申候相替儀無之由に候何か氣づかりにて一向外出は成不申小屋の内計の由扨々夫に引くらへ候得者此方は安樂にて門限も無之自由もたり申候旅宿の奇麗なる事藏宿之隱居と申内に御座候石澤山故石手鉢飛石なと見事に候勝手向等も篭なと甚勝手よろしく候自由になり候はゝあはれ江戸へ引申度候玄關前もたゝき土にて内井戸之側は石なり飲水は川水をこし申候一月六荷程にて澤山壹荷十文つゝに御座候尤呑料にいたし候由用人申候今年五助は暇取候哉猶重便可申上候早々以上

○

一大久保清水小川町北町二軒無異大慶いたし候お仲もますく肥立候由御同慶に存候

一野村事御世話に御座候大方廿日過には參可申候是非々と申置候處承知之旨申來候清水鉄吉へ手習筆壹對褒美として可遣候

一安岡氏之事悴方へ委細申遣候甚だ惡風に御座候

一富原三回忌一向失念罷在候御世話に候婆々樣へは時々定吉見舞菓子なども遣し可申候木戸之婆々格位之事なるべし

一色々珍談辱候相場の仰せ越めづらしく候

一澤村宗十郎は三月廿八日死去追善發句繪姿其當月初に一覽いたし候此繪は幸長崎人見氏へ遣し可申候あの方にてはめつらしく候江戸之火事沙汰御役替等天氣等まで大ていは早く相知レ申候乍去地震之事は始而承り申候とかく異本有之候はよろしく塙

檢校の古語候も存出し申候　旅舘にては私義も節儉第一にいたし道中より只今迄扇二本にて二本ともあしく成不申候
一御用人ことの外節儉甚深切ものにて犢鼻褌の洗濯までいたし候市兵衛が魂のりうつり居候と存候よく／＼市兵衛へ御傳可被下候其外も隨分よろしく候質朴なること元祿寶永時代之人也
一日々小遣はさのみ入不申候酒は樽や弟くれ候まゝ也平井之方一向沙汰なし困り申候催促狀出候間早く御とゝけ可被下候
一幟至て小し人形はことの外大造にて見せ賣有之候幟たま／＼見請候所たゞ一本にて子持筋紋所二ツ下に鍾馗を染候など節儉之體大笑／＼
一夏物安賣上申候岩城三井之ミセにて夏合羽夏火事羽織送らず誂候もの有之あきれ申候以上

四月二十八日　杏花園

島崎金次郎樣

島崎氏へ申入候

一當五月節句前諸通帳拂申候尤此內肴屋は安岡出立之節之振舞に金壹步計入候間此後も見合には相成かたく候鯛鱧さはらなと計にて小肴無之候拙者餘り魚物を不好候故鱧さはらのみ燒候而時々用候

錢拂

一三貫三百七拾六文　眞木二十貫目（一貫目四百廿文）松二貫目（一貫目九十文）ゞゝ付也　炭二俵（一俵三百四十文）
一拾匁　赤味噌半樽是は殘り有之白味噌は醴のごとし赤味噌も尾張味噌之類也
一拾匁壹分五厘（壹片と錢貳百五十四文）　油三升
一八分八厘　らうそく（間違にて買申候）
一三匁五分（三百六十八文）　紙類
一拾五匁六分（金壹分とて濟）　安岡出立之節膳部（落付候旅館置付にておし賣也）
一拾九匁六分（金壹步と四百十六文）　肴屋
一四分（小玉）　平助藥代（三日計煩申候）
一七百文　醬油

〆金貳分　銀貳拾貳匁三分八厘　錢五貫百卅二文
外に金壹兩三步貳朱　給金渡す

右之外書物者金壹兩壹分計求め申是は外物也自分小遣はあまり入不申候いつ方へ參候而も酒持參小玉銀壹匁歟貳匁之外は入不申候酒は樽氏弟か一樽五月中旬迄有之候處又々平井專阿彌か一樽來り

壹兩日是をはじめ申候平井氏へ右之禮狀は早便にて島屋へ出し候あの方ゟ届け申候此狀賃は通帳へ附候樣申つかはし候

一此間飛彈倉橋鐵二郎方ゟ手紙持參候敬作と申もの小出氏元〆之親類のよし學者にて面白き仁ゆへ大阪一見申夜分止宿させ可申旨申來候へとも斷返申候旅館とは申ながら市中にてみだりに人を宿し後日何ぞ有之節六ヶ舖候間氣之毒なから返し候又此間平助が甥濃州ゟ參り大阪奉公望にて四五日內に宿し候間用人侍を以理解申聞け瀬町方へ奉公いだし候尤平助宿に成候義は不相成旨申渡町宿にいたさせ申候此後も右體に不限たとい心安き友にても一宿はいたさせ不申候間江戶なとゟ詩參りしもの候はゞ其段御聞可被置候御普請役宿などへは何か止宿なといたしものも有之候由承候へ共此方にては嚴舖一夜之宿もかし不申候

右飛彈之敬作一位の木箸八幡の竹箸持參いたし候間返候も氣の毒にて請置申候右之挨拶は北町迄便に何にても遣し度候

一野村忠助義五月十一日大阪へ歸り申候餞別之禮內々厚く申候先是にて義理も相濟し御世話に御座候乍去又々肴なと贈り申候き

一當酉五月十六日者如林樣泰應院殿十七回忌と覺申候定て本念寺布施被遣候事と存候若未參候ば來月にても可宜候其家無後候間並々ゟは叮嚀にいたし可然候

一當年五月晦日は淨榮寺和尙一周忌に御座候間私方ゟ申贈候とて早めに使可被遣候

一大久保清水北町二軒小川町等へよく／＼賴入候大久保隱居佐々木へもよく／＼御傳此方ゟ遣候書狀御見せ可被下候佐兵衛認め候銅座書物此節役に立候段も御傳へ可被下候松藏部屋も定而出來と存候早々以上

二白御張紙直段も當月四日に島屋ゟ早使に相知申候さて／＼島屋にて江戶の沙汰相きれ喜申候よく／＼御傳言可被下候以上

右之通認め置候處第四番五月六日御認めの狀十六日夕到來披見候處

一四月廿七日松島重右衛門殿御作事下奉行被仰付候由目出度存候夫に附居宅之事委細御申越承知いた

し候此度祝儀之狀差遣し可申候處少々手間取候方可宜と後便に遣し可申候もし絲川石田内外へ移り候而是へ移り候へは勝手よろしく候若又其義も相談出來申候はゞ先例之通り築山氏御相談候てかし可申哉其外にも近年家を仕切りかし候事流行いづれ私歸府迄かり住居之心持にて右之通之義可然哉に候猶後便可被仰聞候

一右住居借地之儀は願書に及不申引移り候節奉行衆へ屆出候のみにて甚手輕之事に御座候其已前に築山を以芝與市右衛門へ御たのみ被成候へは屆書共あの方にて認めくれ可申候留守宅にて引移り候例改め方書留に何程も可有之候

一お冬事着帶之由目出度被存候當月廿三日は此方にても祝可申候市川氏へ別段狀不遣候間よくよく御たのみ申候色々の目出度候事にて嘸々御勞心と察入候

一旅館隣家々のたのまれ候狀二通

青山權太原
菊池内記へ　壹封

南新堀豐海橋向

貳封とも雅事にて何もいそぎ候事にて無御座候幸便次第にてよろしく

井上重次郎へ壹封
問屋酒船

此度之御狀内封は並便賃錢大坂拂といたし有之外封は島屋次兵衞といたし參候而賃錢取不申候是は此方にて高直の時あしく候間次兵衞差はからひ候義と被存候毎々世話よく〳〵御禮賴入候以上

○

一松島氏結構被仰附候右祝儀狀遣申候地所之事いかゝに候哉近所によき貢居も候はゞ御相談可被成候いつれ借住居とは申ながらよき普請ならば寓居も可宜候役所へは屆にて濟申候芝氏へ直に御たのみ可被成候下谷生駒殿前池永久次郎麴町三間屋内藤兵衞門は長崎掛にて度々宅狀等世話に成候間暑氣見舞等には定吉參り候て可然候折もあらば肴にても悴々遣候も可宜候

一當月廿三日お冬着帶之祝いたし候由嘸々市川氏も被悅候事と被存候客中之悅無此上事に候畢竟日勤いたし候も旅泊に勞し候も子孫斷絶なきため計の事を願候のみにて貧富は不足論候其日は此方にても早朝魚屋參候間鯛壹枚代三匁二分肴り奴僕にも爲給

候處急に安治川へ船見分の事申來候而御用船に乘り安治河へ參候船は四艘にて一艘に銅凡六萬斤程積入れ出帆いたさせ申船は五百石四百石位之船にて銅座役人ゟ送狀をわたし船中相改候處船子共平伏いたし嚴重成事也船之名久吉丸寶光丸威德丸繁榮丸と申候扨々今日は目出度日哉數萬斤の銅を積出し出帆無滯長崎迄可參候船之名も順よろしくいづれ此中之字にて出生之名可撰事と悅申候所謂生れぬ先のむつきさためとは此事なるべし右之船名は市川氏など聞候は定て悅に可有之候お富お仲も段々生長と存候

一今便取込儀助方へ返狀不遣候宜賴候金兵衞方ゟ每々御沙汰書辱よく／＼禮賴候御張紙者島屋ゟ五六日めに遣候此一紙は皆々寫申候官吏にて一向役所なとゟ不申來候もおかしく候き猶後便可申上候お冬へ宜賴入候產前之禁物壁に張置候樣可被致候以上

五月廿五日

島崎金次郎樣

一當夏御借米書附委細御申越扨々直段宜候此方米價下直にて當月拂米壹石に附六十二匁也銀相場六十二匁故石一兩にあたり申候播州米也町賣米屋札を見候へば上米壹升九十文位下米五十二文ゟ有之候入船澤山にて食候ものすくなき故なるべし

一後藤儀兵衞は皆濟にて可有之候是は元すへ金也四兩之處二三年前ゟ減金に相成候間四兩之證文御返し可被遣候委細築山よゝ存居可申候此方にては知れ不申候勘定場帳面に相違無之候

一泰應院樣年忌備物世話に候き恒次郎事奇特に御座候以上

一島屋ゟは大體六齊に書狀芝居番附其外米相場等申送候扨々飛脚屋之重寶始て覺申候賃錢不取候に付大坂拂と被成候由此度は煎餠入の箱故荷物之部になり十四日目に届き賃錢壹匁參分取申候先日も大坂拂に有之上包島屋治兵衞といたし遣し候賃錢濟といたし候も有之候先達而通帳島やゟ差こし可有之候間是を御もたせ被遣是非々々書附くれ候樣可被仰候大坂拂といたし候へば品により賃錢高くゝ成可申候其上私留守にて錢之出入等むつかしく候此段

よく〳〵重便島屋方へ申遣し置少々にても賃錢取
申候樣可申遣候尤島屋も此度は日比之商賣をあら
はし無賃錢にてもよろしく候法華宗にて殊更出精
之由に候
一此方飛脚屋申は書狀はかさはり候而も八日九日に
は屆申候竹壹本箱壹ッにても入候と荷物之部へ入
し候間遲きは十八九日早きは十四五日かゝり候由
に候賃錢も夫だけ高く候先日島屋が書物たのまれ
書遣候便四月廿五日出五月十五日屆候事有之候
一北町乳母へよく賴入候お冬事お幸吉例にまかせ乳
母よく御賴可被成候心附等賴入候
一江戸繪圖一向無之候皆々見たがり申候御所持之新
き繪圖重便に被遣可被下候古繪圖は不入申唯今
之姿を見申度由に候持參之享和大武鑑なとめづ
らしがり候袖玉武鑑など携候ばよきみやげなるべ
し
一松島氏地代並肴等御世話に候地面之沙汰無之由と
かく手間取れ候が勝手によろしく候先便申上候通
の事故萬一地面明ケ候而もいかやうにも致方有之
候間お冬など安じ不申候樣よく〳〵御申聞可被成
候
一家來いづれも無恙精勤にて橋本辨才有之候へとも
用人並三僕一向之無口にてはなし出來不申おかし
く候用人は質朴なれども折々は小言など申候てい
づれも閉口いたし罷在候臺所甚靜にて和順之體近
所之ものも感じ候樣子に候此方がも用人は餘ほど
重んじ置候故何か譯不知候故皆々謹而居候と相
見へ申候三僕とも無事親切にて安心いたし候長
喜別而精勤平は近豪と申し富豪なり樂を好き申
候
一先達而遣候岸氏へ之手紙定て屆候事と存候大切に
被成可被遣候少々存寄等書遣候秘書に候
一長日には候へとも官事閑舖御普請役（一人は兵庫へ參候一人は所々出役）役所壹人にて所込申候乍去歸宅候へば靜にて
書物を見候によろしく〳〵候大體所々も步行濟申候當
月は祭禮多く樂み申候廿五日天滿祭は日本一の挑
灯多く船祭の由にと例の仲助世話にて棧舖取置候
由仲助扱々よきものに御座候猶後便可申上候以
上

島崎金次郎樣

○

平安

一此地暑氣強く御座候夜に入宵にも蒸し申候乍去一
雨日は濃雨後少々涼しく候土用は定而嚴舖事と存
候大雨にても椽側明放し一向ふり込不申候途中に
ても雨は眞直にふり申候間大體合羽を着候もの無
之町人紙合羽褊計有之を着申候
一松島一件先春迄被居さうなる樣子の由何卒春迄之
内ゆる／＼よき貰屋にても聞立引移り申度候此方
地面は松島富五郎にて届置候（松島より東左一郎へ取か へ候はゝ地主代り届出し 可申候篁山へたのみ 芝氏へ可申遣候事）
一書狀七通（山内吉見石川伊東新樂宅狀二ッ 儀兵衛榮職之三通）慥請取申候
一此地米直段下直に候御用扶持當五月廿一日貳石入
米いたし貳石壹斗三升拂候處金貳兩貳朱と三分貳
厘に成候壹石に附六拾貳匁（石壹 兩也）町々米屋のみせ先
にざるをならべ正札附に米をいだし至而下直なる
は一升五拾貳文と札有之高直成所八拾貳文九拾文
位迄也扨々結構成る所にて遊て食ふもの多き筈に
て候江戸ゟ見候へば半分は遊んで居り氣の長く候
事急の間に不合道をもうかり／＼あるき人をよけ

候事を不知供などに叱られ肝をつぶし申候大名往
來など見候ば驚き可申候正九時ゟ八時迄は町中に
て晝寐也
一家作の仕方至而上手にて戸の立まり竈木之樣子壹
所向棚のつり樣など感心いたし椽側を高く外雨戸
の舖居を一寸計ひきく附戸へさるをいたす故至而
〆り宜しく雨戸の尻ざしなどいふ樣な不器用な事
なく戸のふちに四角なる穴ありこの穴へ 此通
り之木をさし込横にねぢり置候へば此四角の穴の
中に横に又四角成穴ありて外より明く事なしあは
れ懸御目度候
竈の口至てせまく前の方には灰なし瓦にて高く張
りつめ置候故眞木多くたをれ不申候處竈五ッ有之
小鍋をならべかけ候故薪を多くたき候と相見へ申
候石は澤山にて井戸がは手水鉢用水皆石也井戸が
はの下は井の底迄瓦にてはりつめ申候壁土は黄色
なる大津かべにて土こどの外よろしく候燒物すや
きにて甚奇麗也毎日爐に火を入すやきの土瓶にて
茶を煎じ給申候爐と土瓶にて貳匁五分計也いづ方
にても右にて茶を煎じ菓子を樂み候十千亭めくも

の多く候
一土用に成候へとも具足など干し候事一向跡かたもなき事也誰も見やうなどヽ云ものなし重て張ぬきにてもよし町人いづれも人柄よく候處此方體之家來御普請役など家來どもの其さま賤しく氣之毒成位也嘸々わるせはしく下卑たる事とさげすみ居り可申と耻入候江戸にては水道のどぶの水を飲てよくあたらぬ事と申居候よみ本などにも書有之候川水清冷茶に妙也
一心齋橋筋毎日通候市中佛壇神輿の出來合有之諸國へ廻し候と相見へ申候屏風師と經師は別にて屏風は何十双も作り申候諸國へ廻り申候青貝細工妙々先日も用簞笥の大きなる青貝にて金貳分と申候壹步貳朱位にはまけ候由丸盆の青貝ことの外よく候間來年買歸り可申候壹枚にて十匁か壹步位迄其外机硯石小道具皆々妙工にて机之上にならべ候事數寄なるもの高彥などに見せ申度候
一過日吉見八太郎か書狀よく御傳へ可被下候手跡見事に出來申候普請有之由
一大久保は如何に候哉松藏部屋も出來候哉如何御姉樣へよろしく御賴候
一いつれにしてもよき賣居も候はヽ土藏附之所御心かけ御聞合可被置候若相應なる所も有之候ばいかやうとも出來可申候歸府早々引移候而も宜候猶後便可申上候匆々不一
一又々申入候此間船見分にて川口御三鄕方之役所の前船にて通行いたし先年淸水に御出被成候所と存出候御姉樣へよく〳〵賴上候以上

六月七日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

五月十日の書六月二日來五月廿七日の書六月六日聯翩飛來慰闊懷候當地の暑は東都に倍し候乍去時々片雲將雨生凉氣候山々近候故乍晴乍雨夕陽ことにうるはしく候益御多福奉賀候小野兒へもよろしく奉賴候豚兒每々御世話忝奉存候
一佳作再三吟し申候詩會も始り候由舊盟不寒不堪遙想候拙作幷和音とも上げ申候客中の諸作時々豚兒方へ出候間是にて御內覽可被下候人間に落候事を恐れ銅の異名を蜀山居士と申候間客中唱和等に暫

相用ひ申候不知者以爲眞號呵々

一馬田生作入御覽申候跡より自筆に爲認上可申候

次韵穆亭先生却寄　馬光昇字國瑞號天洋

詩催酒趣酒催詩。酒力詩鋒擅一時。日日應耽詩酒癖、誰言李白是君師。

同前述閑適

年年爛醉無虚日。日日閑眠無覺時。一醉一眠吾所長。太平餘事不關師。

暑中閑詠

畏日當空石鑠時。魚泡沸沸欲焦池。空齋纔覺生涼氣。臥誦青田雪竹詩

甚雅人にて比鄰の事故夜々談し申候詩酒共至て嗜候間時々南玉山の類候事も有之候和漢博學宜清談候人物は叔成に似候人に候東都へも一度は出申度と被申候

一當地は池田伊丹近くて酒の性猛烈に候乍去宿醉なし地酒は調合ものにてあしく候此間江戸より酒一樽船廻しにて被送候伊丹製にて富士を二度見申候酒ゆへ二望嶽と名付置申候本名は白雪と申候至て和らかにて宜候聯句馬田生に對酌

一葦西東載杜康國瑞　飛來飛去路愈長蜀山
賈帆再閱芙蓉雪蜀　詞席新燕琥珀光馬
七十灘頭萍路遠馬　二千里外鬱金香蜀
氷青練滙愈生味蜀　寧讓紫霞仙子觴馬

御慰に二望嶽は一首御作り可被下候

一毎朝辰牌後より未牌後までは役所に罷在候簿書堆案日々出候へども獨斷故いたしよく如破竹御座候日々多きは二十條少も不下四五條候東都崎陽兩地へ驛使を出し候文書不遑再閲程の事に候乍然旅館に歸り候へば門庭閴無雜賓烹茗據梧或抄書或賦詩仙境に入候心地いたし候第一水土甚美人物驩虞如都下のせはしき風に無御座候いづれも近郊苍と云ふ調に御座候此翁など此地にあらば可忘歸候市中の人日傭取まで古雅に御座候皆々朝寐午時より未時頃迄は市人といへども一度づゝ晝寐也夜談をこのみ候米價は一升五十二文より九十文位まで故市人くらしよく候女の風俗重て可申上候餘程面白事に候かつぎを著候形など小原女の體など金屏風の如し二千年來の化には感じ入候匆々不一

六月七日　大田覃

山内尚助様　○

暑中兩地平安

一北町大久保清水無事之由目出度存候、

一地主方沙汰無之由彌松島と東氏と屋舗相對替候はゞ松島富五郎地主かはりて東佐一郎地主と成可申候さ候へば築山氏へ御たのみ改方芝與市右衛門方へ承り候得ば届書出申候のり入紙にて濟申候尤一二月おくれ候而も濟申候況や在勤之事をや

彌轉宅之事等にて長崎掛りへ申遣候安岡之方其節催促いたし可置候此間例之通東本願寺ゟ五百匹參候（四月中）又々此度新規買請願に候五月に入金五百匹參り申候此分にては定例歳暮に金五百匹參り申候皆々御届申上候而御用中預ケ置歸りには持參いたし候事之由其節又々伺候押而被贈候積也先宿代は出來候可秘候也

一淨榮寺一月贈物御世話に存候安富も沒し候由可惜候其外は御返書被成候故文略いたし候

一此節日々夜々祭りにてさはがしく候乍去江戸の祭に比し候へば町々は挑灯計たて神輿の渡り候のみ也弓鎗の行列計だんじりとて屋臺のごときものにて檜皮ぶきつくり花一向無之地車にて引申候若きものてうさやようさやと聲をかけ引申候何ほどきほひても甚のろし喧嘩など夢にだもなし此間も途中にて長き丸太を向ふから來る人の胸につきあて候をナンジャイとゝがめしはよく〳〵の腹立ちそれぎりにてわかれ申候是にては喧嘩なきはづなり五人男の喧嘩もさぞかしと思はる

一此度は吉見氏へ返書遣不申候宜御頼申候さつきの文此次之便に御返し可申由御傳へ可被申候伊藤氏ゟ御沙汰書辱なく御禮頼入候長崎ゟ請取書附上せ申候北町へ御届可被下候

一山道高彦ゟ書狀到來手前勝手之書き物頼み參候追而返書遣し可申候此方奴僕共いづれも相勤罷在候

六月廿三日　　大田直次郎

島崎金次郎様

○

秋暑酷烈兩地平安

一六月十八日出之狀廿五日夕相達候其地暑中冷氣之

由此方は土用前は左のみにも不覺候處暑中酷烈夜分蒸しあつく御座候乍去旅宿廣く風入候間凌きよく候其上夕方日影傾候へば二階の物干へ上り候處ことの外涼しく御座候物干より屋根へかけ階子腰掛等有之前は紀州の山々近くは天王寺の塔東は伊駒山金剛山近くは大阪の御城の櫓白壁北は京の山々丹波の山西には武庫山甲山一ノ谷ひよどり越すま明石の方すこしはなれて淡路島其前は海木津川口の帆柱林のごとく近くは雨本願寺之堂（下谷ノ稱念寺ユウネン寺位也）大てい上野山王より見わたしたる所程又は愛宕ゟ下の屋舗を見るごとく屋根より下の方は大阪の市中不殘見わたし申候夕日に雲のうつるけしき機關の畫とも阿蘭陀畫とも可申是にて夕方は暑をわすれ臥り申候今迄かゝる見晴しは覺不申ことに名所計にて中々詩も歌も出不申候

一江戸繪圖壹枚早速遣され攝人うちより一見いたしさて／＼むづかしき道と驚き申候且先便申遣候心中大鑑幸便に賴み候

一本多氏へ書狀遣申候是も久々不快にて當年は先きどりを願はれ候由彌願濟候得ば盆後にも出立之由此間序有之團扇二本遣候處ことの外よろこび被申候て自筆之狀長々と申來候位の病氣なれは案し候程之事とも不被存候序之節宜舗申くれ候樣申來候御城内禁足にていつ方へ出られず候由不自由察入候

一岸氏ゟ返書參候間又々返書遣候又々築山氏へ御たのみ可被下候

一北町乳母事御尤に候先便にも心附候間申進候お幸方ゟも申來候間如例御取計可被成候お冬産前一しほたのみにいたし居候よく／＼御傳へ可被下候

一嵯峨開帳初り候由珍説とも又々板行物等定て出可申候

一島屋ゟ此度之便も上封しいたし直し早序といたし來候故八日目に屆き申候盆前貸錢之義御尤とゝも此方ゟも可申遣候若是非取不申候はゞ跡にて禮にてもいたし可申候飛脚屋の屆ケ物は至て手輕き事にて御座候由に付歸府の上にても可宜候

一大久保淸水小川町北町二軒おとみお仲並お冬も息才之由何ゟ之事に候南隣垣之外に里子に候哉朝よりよく泣候て宿之事存出し乳なきと相見へ申此方の人のくせにて子供泣候而も一向だまし不申脇に

てはなしいたし居候とも度々見かけ申候六七歳之子共の舌のまはり候事格別門前醫者之女子七歳口跡あざやうなる京談に候思ひ過し候故歟雀などまでよく舌まはり申候男共もやさしき聲にて江戸もの丶言葉にはびくり〳〵いたし候樣子に候

一半藏御門跡喧嘩野口の鯉奇談に候

一井關氏惜しき事と近來耳追々途中にても辭儀はかり致し居候

一此方奴僕共いづれも達者に罷在候給金等も朔日朔日と遣し今までは先かりこしも無之前に少々有之も引取勘定濟申候先益後迄は具足櫃をば手つけ不申と存候早々以上

大田直次郎

島崎金次郎樣

（一）

一六月廿八日附之御狀大井川七月二日ゟ同十一日迄川支に付（町便）漸十五日に延着七月八日附之御狀（御用便）同十六日に着一度に返書申上候此地暑中ゟ雨少く暑氣強候處三日四日之雨にて涼舖耕地を潤し畿内大豐年其後今日迄照りつゞき暑氣強候得共日々早出早引晝九ッ時頃歸候へども南本町より過書町まで十町餘に過ぎ町幅池之端仲町位にて日かけ有之汗之出候程之事は無之旅宿は風入第一ひろく奇麗にて屋根之漏候氣遣なく自由に成候はゞ其表へ持參いたし度候兩地平安欣慰々々

一地主屋舖替芝氏を賴濟候由御序に築山へ被仰右之下書改方留帳に有之候間芝氏へ斷寫くれ候樣御たのみ可被下候いつにても宜候

一地主普請之事廿八日附にては草木動搖可到所八日附にて新海へさらりとかはり候由先安堵いたし候國府田氏組合之由鈴文よりも留守中轉宅之義を例之苦勞にいたし申越候定而國府田氏宜舖計ひ候義と相見へよく〳〵序に御禮奉願候地代取越の義一向とも難申いつれにも留守中落附候方可宜候間仰之通當十月分來二月分被遣候樣大阪表ゟ申越候積りいさいは歸府之上御面談可申などゝ申置候方可然候

一十疊之屋根北隣之家根色々御世話に御座候いづれ十疊も少々こそくり置不申候ば相成申まじく候來年人へ讓り候ても修復いたし置候へば夫だけ可宜

哉北町御心附之義御尤に御座候御幸方ゟも禮申參り申候若書附にてもこし可申は御相談之上例之春夏壹分冬貳分利なしのなしくづしともいたし候方あの方にても致しよく可有之哉此方にても地代之手あてに相成申べく但いづれにてもよろしく候いづれ乳母之方は寄進にいたし屋根之手傳之方のみの事是又寄進にもいたし候も不苦候

一南御徒町若田喜内當地御用にて上坂之由定而此地御普請役交代と相見へ申候此地へ今日迄一向右之沙汰不申來交代之御普請役下妻辰之亟案事居候御狀にて名前始而相知れ申候長崎行之村井喜藏計相知し申候先便申遣候かけ物はとても間に合不申候義と存候又々幸便可有之と堀田侯詩は此方之學者共へひけらかし申に宜候間嶋屋へなりと御相談候はゞよき便も可有之候尤いそぎ候事には無之候風雅人共多候間見せ申度候十六日夕若田喜内ゟ書狀來廿七日出立之由堀田掛物御たのみにても宜候

一池永内藏へ御賴之狀嵩高之分は一向不苦候御用狀之中へ毎々宅狀參候役所にてもよく世話いたし大禮八日九日には屆申候御用無之候へば別段にも屆け候間兩三度に一度は御たのみ可被成候

一長坂氏石井氏雪山吉見山内飯田大塚野村万屋九通十五日着之内に有之鈴文伊東榮藏へ之狀三通十六日着之內に有之請取申候先便遣候書狀夫々へ被遣候よし御世話に御座候

一嶋屋治兵衞へ兩度御面談之よし扨々深切なる男に御座候

一松藏部屋出來濕瘡のよし天より足留と相見へ申候九兵衞も鹽硝藏御用に出勤候よし此地御普請役四谷住宅衆承り申候町田喜藤太など申て私同道之者野村新兵衞殿などをもよく存居候九兵衞殿憔成もの故年番役をも被致候とほめ申候御一笑〳〵

一曉岳院並稱譽老女三十三回のよし早き事に候曉岳院も無緣同前岸祖右衞門もいかゞに候哉從弟女之義故便宜も承度もし深川邊御出も候ば御序に御聞合可被下候いづれ曉岳院忌日前に原町寺へ香奠白銀にても南片にても可被遣候三十三年が果と相見申候養家にても追福は無覺束候

一此地も靜謐にて具足も箱之内に持くさりに御座候尤盆前迄は例之一物も出不申（三十三回二ケ有之）當月は又々御扶持拂候間八月朔日給金位は是にて相濟可申可成丈節儉に致申候尤此度地主代り之事をこと〳〵しく安岡へ申遣し候十月間違無之樣先方に見せ置可申候盆前之諸拂御慰に入御覽候

一金貳兩貳朱七月一日用人侍已下給金但用人壹兩ツヽ、七月ミム八月一日同七月一日分は金壹兩すくなし

七月十四日通帳拂五月節句後よりかゝなり

新代百六十貫目廿貫目四百廿文ツヽ、九日十日に廿貫目ツヽ燒申候

一三百七拾八文わか松一把七十文タキツケノ卜ト　炭一俵三百四十文

一九百四拾四文　醤油代、

一銀八匁五分之所へ南片と七十五文拂　油代

一金壹分ト銀七百三拾文肴代用人肴ヽりトトトノヒニテ仲間共ヒツカヽ小言チ申候ハ共節儉第一キカヌノリ也

一金六百文日傭代用人ト長助計皆勤其餘ハ二三日傭候

右之拂金壹分貳朱ト錢六貫百三拾九文也、

用人へ金壹兩壹分貳朱わたし錢三百五十七文殘る

外に書物屋拂金壹兩壹分ト錢三百五拾七文也是は算用之外也

五月節句後ゟ現金小遣三分餘也

一此地米直段盆下直に相成可申候大豐作にて皆々市中悅び申候

一此地風說奇談とも別封書見方へ封し込遣申候御覽可被成候是は近所二人ほどに賴置日々之事相知れ申候尤五畿内之事は大概あれ申候面白き一册に成可申江戸沙汰越みせ候而取か〻へ申候

一此盆前はめづらしき義にて當地之役人御下當其外銅山渡方等先月末ゟ私裏判一寸おし候へは穴藏の疊をあげ井戸車のごとく銀箱を引あげ諷々とわたし申候昨日は三百貫目今日は四百九拾八貫目八千三百兩などゝ申候には驚入申候私印判始ての事と大笑いたし候皆々江戸へ跡届にて濟申候拗々重き御役と始て心附き申候是は大切之こと故外へは御沙汰なし云々

大田直次郎

島崎金次郎樣

（一）

雨後新涼兩地平安

一七月廿日ゟ廿八日迄大井川止めにて往來無之文通も滯り申其地ゟ六月廿八日と七月八日附之書七月十五日に屆候いまだ書簡參不申此地二百十日之早朝はやて風にて淀川船損し候沙汰有之候當日は晴光甚穩にて八朔も陰晴不定夕方小雨先穩なる方に候

一長崎奉行並同役村井喜藏ども廿日立當月五日銅座着之積候處右之川留めにては大方十日前に着に成可申候銅座へ二日御止宿に附座人御褒美事又は願事等色々紛々闇舖御座候天草詰御普請役廿四日立大阪交替御普請役廿七日立の由いつれも一所に大阪へ着可致候さ候はゞ十日前後は大取込と被存候乍去月日のはやく立候には闇舖もよろしく候先半年は濟候と覺申候奴僕共相替義無之候

一此地馬田氏營元寺日々出會親類同前に心易く用事相達し調寶に御座候馬田氏妻もよき人物にて衣類等之事迄心附申候

一十三經汲古閣本九兩餘にて御座候新渡嘉慶板十四兩貳分之由申候兩樣ともすがやにて江戸直段御聞合重便可被仰下候

一北町小川町大久保清水いづれもよろしく賴入候おとみお仲嘸々成長と被存候石井永坂二封大塚壹封上申候

一島崎吉見へ此度は書狀不遣候間此手紙御まはしよく〳〵奉賴候

一唯今迄去年ゟ詰合此度歸府之屬吏よほど俗物にて取扱困り候事共有之交替いたし候跡は可宜と存候殘り候屬吏は至而實體にてよろしく候

一淺草鐘銘墨本十帖別封島屋にて板にはさみ傘の古き油紙つゝみ遣し候故少しも皺無之全本にて七月十八日夕相屆き申候望候ものへ分ち遣し可申と奉存候學者なとゟ物もらひうけ候挨拶によろしく候族館中之義理有之贈答に困り申候錦繪團扇東遊なとにて俗人の義理を防き申候當暮は繪草紙取よせ可申左樣思召可被下候

一仙洞御所御屏風御製已下之和歌寫取候間草稿を進上申候歌人へ御見せ可被成候人々寫し候てもよろしく候加賀屏風の歌も上申候

一當夏藝州鹽竈の中へ落て死し候雷獸圖上候吉見えも御廻し可被下候當地見せ物師買候而已に船に可積候處藝州ゟ御止め被成國中へ埋まれ候由申候

一詩稿閲上殊に夏日山亭之作宜候重便に小さき唐紙に書可被遣候洛陽書生へみせ可申候馬田も和作可致と申候

一七月廿八日酉上刻近所出火餘程騷き申候本町四丁目どふ池筋鍛冶屋火元にて御座候物干より見候處唯一小路をへだて候へども颪無之五ッ時頃鎮火町人足三人(駈付有之定式)南部津輕對州役人數十人之手勢を引連れ來り屆申候吹屋泉屋吉次郎ゟも數十人人足來門前挑灯如市候(泉屋より酒三升燒飯は燒飯大半切に一盃)皆々へ振舞候ため也

銅座ハ銀座ハ皆々驅集り申候火危く候へば町奉行衆も來り差圖にて旅宿を防がせ候由に附如此之人數共防候ば大體は防止め可申候立退きは泉屋方之由承り申候先々無難にて宜候き當四月九日は西横堀出火西之方二町計隔り此度は東之方一町計にて近火に御座候き御慰に繪圖認め遣申候

一印火事場

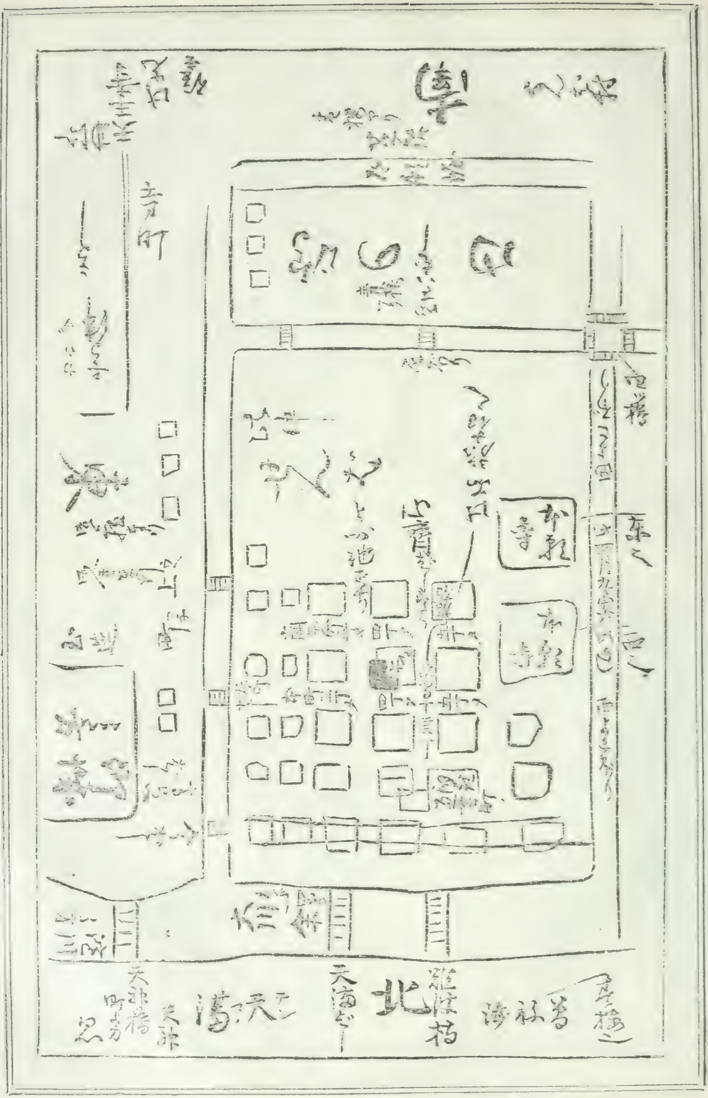
大坂の圖大概此位なもの也船場嶋之内上町(ウヘ)(御城之方)天滿(大川向なり)計にて西横ぼりゟ西に阿波座堀立賣堀さつまぼり等有之安治川之方へつゞき申候南本願寺之堂のやね何れ之所よりも見へ申候天王寺の塔も所々ゟみへ申候湯島の臺より下谷柳原之方見わたし候位之廣さにて江戸四分一と可申町をはなれ候へば直に田舍と成江戸之麻布巣鴨のやうなる屋舖とも町ともつかぬ退屈なる所無之よろしく候町中は至て繁華也青樓計澤山也

一常元寺ゟ四書典制類聯と申候新渡之唐本一帙(寸珍本)もらひ申候右之代りには江戸に有之さらさ紙少し計にてももらひ申度と被申候さらさ紙一枚何ほとに候哉二十枚も遣し候はゝ可宜候其餘は此方にて歸りがけにかきもの致遣可申候先方も其方望候に御座候島屋へ被仰付油紙包にいたし棒へ卷きてなりとも可被遣候もめぬやうにいたし度候

八月五日　蜀山

○

一秋涼に成候道中筋川支にて往來不自由之由に候堤


北

も所々崩れ候由に候長崎奉行着大取込奈良晒壹疋
土産物に御座候
一荒川氏御病氣御快廿八日御出立之由目出度存候幸
川も明き候頃にて大方此節御着に可有之候樣子承
り候て榮藏遣し可申候御城内鑑札出入六ヶ鋪榮藏
計常々本多へも遣候き本多も八月朔日御着之由此
方にても御文通のみにてあの方は外出成不申此方
は御城入成不申よく／＼可被仰下候
一八月七日増田要助參候而御噂承り候江戸書圖七武
鑑五御遣し所々へ義理を補ひ申候此武鑑此方にて
甚めづらしく候
一大久保清水小川町北町貳軒お冬お富お中いづれも
丈夫之由
一久世公一色公中元之御祝儀金三分つゝ參候由兩方
共挨拶之狀遣し申候北町御沙汰書之御禮よく／＼
被仰可被下候
一地主家作も取かゝりのよし來春迄之分金壹兩三分
遣候而よろしき段先便申上候川支にて延着可致
候
一羽州百姓騷動御勘定所へ屆候正本めづらしく候此
邊にも色々沙汰いたし候此地七月晦日曾禰崎新地
の女郎屋にて五人切已來之大變御座候花火や巴屋
兵藏と申もの晝九ッ時過に藝子一人と扇屋の嗅一
人と友一人切殺し其外にも手を負せ（女郎都は屋
根つたひ逃申候）梅田墓所にて切腹しそこなひ召
捕られ申候古へ五人切の古跡也委鋪跡ゟ書上可申
候
一八月二日には淡路嶋より龍出右之曾根崎新地をま
き芝居の櫓をやぶり高槻城の櫓を損じ京都六角堂
をも卷候由に候色々變事有之候に旅宿邊無事にて
大慶いたし候

八月十二日

島崎樣

○

秋涼時候兩地平安
一八月十三日當地北の方三番村と云所に萩寺ありと
聞七ッ時頃ゟ參見候處中々本所龍眼寺には及もな
く僅なる地に咲候處正燈寺の三分一位也男女見物
は參候へとも例の靜なる事也歸り道にまりは道を
いたし高麗橋筋四軒町と申候所を通り候へばかけ

行燈に荒川數馬宿と有之候間萩にて一盃給候後立より候所數馬殿立出大に悅ばれ候而又々酒肴御馳走に成候道中無滯川の明候後當地着御病氣も快來十八日者御城入之よし右御城入前町宿之内も中々外出は出來不申候由扨々不自由成事に候其上町宿にて何かと物入強候間一日も早く御城入いたし度と申事にて候翌日何ぞ進上可致と存候へども生肴はむだな事と存じ鹽鰹二本に袖玉武鑑一冊もたせ遣候處ことの外之悅ひにて則返狀掛御目候扨組頭衆へ御願之上やうやう相濟十五日之八半時頃私旅宿へ御出に付又々酒進め噺候處組頭ゟ之申渡しに早く行早く歸候樣尤往來の御屆入候由にて七ッ半頃に早々御歸に御座候彼醫者馬田昌調も先日同道いたし候に付十五日にも呼候而脉狀をも見候處一體元氣よく候間可宜と申候其日は足に少々腫氣有之候處十六日に馬田見舞候へば腫氣もとれ一段と元氣又々酒馳走に成候と申候私儀も御城入前今一度右挨拶可參哉と相考候處參候へば是非酒も出可申すべて當所の習足もとを見候間硯ぶた壹ッ（蒲鉾少々）（あぢの鹽やき）らつきよ位にて代貳匁煮肴一ッ出し候ても又々貳匁とか三匁とか相成候間やはり返禮は不行方可宜と差扣申候其代り御城入後は上町に用達有之是へ書狀遣候へば何にても用向足申候買物等も御城内にては高料之由酒も池田に安部攝津守家來淺田宗兵衞と申もの私懇意に付是へたのみ候へば池田伊丹之樽割買候に手支不申候事御咄し申所悅に御座候先々大病氣後道中無恙御着樂ものみ酒ものむと云元氣にては氣づかひ無之候一寸右之段爲御知申度津國屋十助方へ一封差出申候早序ゆへ貸錢之所よく御聞可被成候御袋樣およねどのへもよく〱此段可被仰達候爲證據返事手紙入差つかはし候

一八月十二十三十四十五夜とも晴光にて月よろしく御座候十二夜は馬田氏十三夜は萩ゟ右の荒川十四夜には旅宿之涼棚にて月を見申候十五夜は淨榮寺自由軒の妹聟平野文平と申男天滿興正寺御門跡掛所の留守預りの所ゟ呼に參り候間暮頃ゟ參り馳走に成候歸りに難波橋向鍋島役やしき稻荷祭にて男女とも藏やしきへ見物に入候間參見候處生花造り物多く挑灯如晝水門の川をへたてゝ舞臺をたて三

味線はやし方を入幕引口上にて芝居有之候是は藏やしきへ米をはこぶ中衆（ナカシ）と云もの素人芝居也中々よくいたし候始而此地にて芝居のやうなるものを見申候此頃長崎奉行着中心勞いたし候鬱散いたし候定吉殿へ詩作

十五夜遊興正寺

一片金輪上鐵蕉　寺門深鎖夜蕭蕭
人烟咫尺天三五　幾處樓臺吹玉簫

所々へよろしく賴入候此便いそぎ候間何も認め不申又々御用便可申進候以上

八月十七日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

秋冷時候兩地平安

一八月二日出之狀同九日に屆申候其後音書到來定而道中川々差支候と相見へ申候此方ゟ出候七月十八日出は八月初旬に屆け候旨役所より六日附にて申來候其後此方より八月三日同十三日同十七日（第十七便）出候三通追々相屆可申候此地十五夜迄は晴候處十六夜より廿日迄雨天月色無之廿日過も日々雨天一昨日頃ゟ漸天氣に相成候間道中又々川差支可申候尤八月五日より十六日迄大井川とまり候由承り及候

一安岡氏へ壹封遣し候是は築山氏へ御たのみ御返事被下候樣にと御申可被下候內々之金子當十月留守宅へ返濟被下候へば地主かはりし地代金三ヶ年分之方へ振向候段申遣候間其心得にて御挨拶可被成候其留守宅にて難義いたし候段申遣候一體地面明退候樣申候處留守の事故漸地代金取越三ヶ年も遣候樣に申置候間返事御催促可被成候築山にも其含みにて可被仰置候○若林源内へ返書壹通是又築山へ御たのみ可被下候御勝手がゝりに御座候

一七月十六日攝州高槻之騷動實說一通上申候吉見氏へも御傳覽可被成候古今之大さはぎのよしにて刀は村正之由に候同曾根崎新地にて花火屋四人切いたし此實說も委舖相知れ申候後便に上可申候此者と高槻之人切の者と從弟の續の由是又珍說に御座候

一木島伊東倉橋吉見へ壹封つゝ御屆可被下候此地いづれも相替義無之候若田喜内交代濟安堵いたし候

拙々よき老人にて御座候

一北町大久保清水小川町いつれもへ宜奉賴候增田要助壹封上申候定而此狀差立候後延着之書狀追々可相屆と存候今日は差急き早々申入候以上

八月晦日　　杏　花　園

○

兩地平安

一八月十日附同十九日附之狀九月六日朝晝に届一見いたし七月八月中大方道中川支にて書狀皆々延着いたし候

一地主普請出來候由先宜く存候地代金之義も賴入候

一諸親類相替義無之大慶に存候拾疊家根御繕のよし御世話に御座候お冬も丈夫のよし安心いたし候食物等御心附可被下候

一給金之義被入御念候義と被存候榮藏仲間勢は相分り候由儀兵衞へはきれ〳〵に月々わたし候も如何に候給金五兩貳分之內金壹兩壹分 貳朱當二月取かへ、殘金四兩貳朱之內

金壹兩五月一日渡　金壹兩七月一日渡　金壹兩九月一日渡候

殘金壹兩貳朱は當十二月朔日にわたし候積に對談いたし置候

右之通りにいたし置候得共一體眞實にて奇特成ものに付當暮少々褒美にても遣し可申哉と存居候年去外々へ響候間歸候而後之事とも存候其外奴僕どもいづれも實體にて安堵に候榮者才氣有之如才のなきもの故中々當地女共にはだまされ不申候と是又宜候唯々可恐者女に御座候東西南北遊女園女計にて榮藏は此冬少々濕瘡出來故猶更用心にはよろしく候松藏同斷に候儀兵衞長助は誠に皆勤に候

一先便安岡氏へ此度地主代り候に付地代金少々先納之義申立當十月無間違返金之積申遣候いつれ返事可有之候增田要助杯ニ承候へば喰代などは斷候由申候返事次第にて長崎掛りへ難義之旨可申遣候安岡一體沙汰あしく候由に候以上

九月十六日　　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

昨日封後又々相認候八月廿九日附之書狀拜見いたし候川支にて延着と存候此方ゟ出候書も追々相屆可申と存候

一中神氏ゟ届物請取候毛引は重寶に候へ共賃此方(江戸宅)拂にてはもらひ候而も高きものに付き可申と一笑いたし候學者といふもの此位時情にうとき事に候

一地主氣之毒成る事に候地代いかさま御見合御尤に候むつかしき組中故跡も定て引込なとに成可申扨々地主に縁なき事に候

一福原の蛙の歌住吉の蛙にも不滅事に候學者之幽靈は先例多く有之候左傳に數ヶ條子産など搜神記幽冥錄近頃清人之聊齋志異なと學者之幽靈數多く有之候廁上下染帷子之例は見當り不申甲府樣へ酒之意見いたし候男之先例有之歟猶重便可申上候

一家內親類無事此方相替義無之大慶存候早々以上

九月十七日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

此御報吉見と早く御相談六日切歟八日限に島やへ可被仰付候

一九月六日附之狀三井便にて同十日に出候よし十八日着拜見いたし候八月中之書狀追々届候由とかく川支にて御用狀等も延着いたし候諸親類無別條大慶と存候

一先便書落候き高橋岸祖右衛門方へ御尋候由御蔭にて從弟女之左右も相知れ大慶に御座候此後は音信遣し可申候

一更紗紙之事御世話に御座候是は常元寺和尚より銀廿匁計之唐本をもらひ申候其代りにさらさ紙少々くれ候樣申候かけ物の表具にいたし候由に附さらさめきたる形拾枚ホトッ、五拾枚も遣し可申候此外他は物にて謝し可申候其つもりにて御差下し可被下候且亦袖玉武鑑甚めつらしく皆に遣し申候袖玉大名附之方も取交御序に五六部被遣可被下候島屋へ被仰附可被下候

一荒川氏事被仰下御城入已後はいまだ左右不承候定而御替も有御座ましく候此節諸山之新銅紀吹等にていそがしく見舞遣不申候

一橋本榮藏事儀助方ゟ申來いかさま夫も可宜候外四人はいづれも金鐵之如く請合申候此壹人は長き間は請合申かたく候今迄も度々目にあまり候事有之候へども遠國之事殊に一と通ならぬもの故取扱も

六ヶ舗第一に我儘にて皆々も困り申候き朝寐は朝飯迄晝寐計何もいたし不申病氣も左のみの事にも無之濕瘡にてもはや段々宜相みえ申中々歩行などせつなきをこらへ候て引込不申候樣なものに而無御座此度幸の事に候間願之通暇遣し可申候乍去一人に而歸し候は無心元候間來十月廿日頃長崎同役歸り着坂之節賴み同道歸り候樣可致候一體此方申合にも遠國にて病人等みだりに暇不遣人にても附候歟路用等差支なき樣にいたし歸府迄は家來分にて歸府之上暇遣し候申合候間幸よき序に御座候元氣も食事も歩行も隨分出來可申候一體もはや我儘にてあき果候と相見へ申候委細儀助方へ申遣候內狀御覽可被成候自身賄とは申越候へども路用は遣し可申候いづれ損之卦なり

一右に付代り之侍星野ゟ差越可申由申候得共是者不益に候間御斷可被下候いかに慥成ものと申候而も穴のむじなにてあしく候內々田山にも相談いたし候處長助をくり上にいたし侍につれ仲間は月やとひ壹分ッ、にてやとひ候が宜旨申候歸りの節は仲間一人不足にてもよろしく候由申し候御城內などにて人かへ候節侍は金貳分遣し仲間は壹分之定に候へどもまさか其樣にも成申がたく候金壹兩歟三分も遣し返し可申候

一此度初旅にて發明いたし候事有之とかく召連候ものは才なき律義一篇よろしく候道中旅宿とも何ち才は入不申唯律義にてよろしく候御普請役中旅功者にて侍はとかく仲間に力をさゝせ候が宜候と申候御家人之二男等必々連候はあしく候由第一我儘にてつかひにくゝ損の由成程とても書き物も何も自身いたし候而相濟申用人も侍も隨分無筆にても餘り差支無御座候早々以上

九月二十日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

秋冷之候兩地平安

一此間廿日出之狀六日限にいたし差立候間定而早速相屆可申榮藏事暇願候事內々力太郎ゟも榮藏方へ申來候由然所長崎奉行肥田豐州當廿一日長崎表出立凡十月十三日頃には大坂表へ着之旨今日申來左候へば十月十六日頃には大方此地へ出立可有之其

節同役中村織次郎を賴み供人數之中へ入れ差下し可申候左候へば中村用人へ木錢米代相渡し當人へは一日百文つゝの割を以て遣し候はゝ不足も有之間舗不存寄伊勢參宮でも可致も難計候左候へば又々少々損亡なれども無致方候いづれにも先便申遣候通人代り之義は相斷此方にていか樣とも可致増田要助も參居候間利害申聞長助くり上にいたし安刀にても遣し可申候いづれ申立候通惡病に違無之候へば猶以御免〳〵尤私家來分にて差下し歸府之上暇御申渡可被下候大取込早々以上

但侍と申候處裃も袴も入らず刀ばかり差し申候合羽は着詰に御座候へ共羽織の時は野羽織貸し可遣候

九月廿三日　大田直次郎

島崎金次郎樣

吉見儀助樣

○

冷氣相成候兩地平安島ゟ治兵衞一通高橋氏賴一通太左衞門殿へ伺計可被下候中村氏一通

一九月十八日附(第十八便)又々川支にて十月六日に延着 此方より九月十七日(第十九便)

九月廿日第廿便六日限同廿三日番外御用便 急事差立候定而追々屆候義と存候

如仰雨天多く九月之天氣左之通○晴●雨◑陰印也

九朔○二◑三◑四●五○六◑七◑八◑九○十●十一●十二○十三○十四○十五●十六○十七◑十八●十九●廿○廿一○廿二○廿三◑廿四○廿五○廿六○廿七●廿八○廿九○

十朔◑時雨二○三◑四○五○六○大抵相違無之歟

一荒川氏其後取込相尋不申右之節之書狀は八日切に被立候

一十三經直段御世話に御座候此方も大抵似より之事に候

一大久保清水北町小川町無替事おとみお仲無事お冬丈夫之由もはや臨月の旨日々吉左右相まち居申候御屆之義女子に候はゝ歸府之上にて可宜候男子に候はゝ西幾蔵と申事に候間御屆可申上置候築山へ被仰芝氏へ申遣候へは手輕き事に候御乳扱書附等も何もさして六ヶ舗事は無之存候屆おくれ候分は不苦候年附計相違なき樣にいたし度候事

一御勘定御入人有之松村近藤悴などは同慶に存候山

本も支配之お職位にて候拙々尤至極成御人人に御座候乍去出役之中御譜代計にてとかく御抱は六ヶ舗と相見へ申候是に附候而も私事なとは不存寄難有奉存候築山に御逢候はヽ松村近藤山本へよく〳〵祝義申し様に賴入候塙流にては御免御免

一先便急便に申入候橋本事左右を待居り申候定而一兩日中には返書參可申と存候長崎奉行も當十六日着之由に候

大坂にて直段之事御慰に認め申吉見へ御見せ可被成候

一御扶持米拂候處肥後の上米にて壹石に付七拾匁なり

一大さ經りカネ曲尺壹寸計長さ四寸ゟ五寸位の大根三本を壹把にて十二匁つヽ高直なり當年大根少き由一體大成もの無之候

一松茸壹斤に附去秋三分位之處五本壹斤六七分之處百文位にて上々御座候當年も下直之由風味もひことの外よろしく所々より大きなるをもらい申而松茸之食あき申候

一肴は堺より參候而とかく高直なり當町少きはいわし（ヒシコのことなり） 江鮒（[illegible]の小さきなり） 澤山成物鱧ゑな鰹なりされども二三匁位にて高し黑鯛の事はちぬと申（和名抄にもチヌとあり古名なり）

一此節鰹有之候例年初鰹位の季候は十月頃なり

一九月節句雛祭なり菊の花をあげ候にはあきれ果申候尤八日かけ取濟候而夜より上候十日に仕込なり雛棚商賣三月よりはさびしされども內裏作りの翠簾かヽり候物との外奇麗にて下直也此中に內裏雛と官女等をかざり申候價は安き處十八九匁より貳三分位高きは十兩餘迄有之由貳分位にては內裏雛ともに揃申候尤家造り取はなしにて箱入なり北町などへゆめ〳〵はなしにもなり不申候

一北町ゟ女子のまげゆひ候ひぢりめんかのこのゑぼりばなしねだりし間承り合候處此方にてはばいゑぼりと申長さ半ゑりだけ程有之貳匁七分のよし尤下直成も有之候はヽ調へ遣し可申と存候此方にてはまげにむすび候後洗濯して半ゑりにかけ候由節儉なる事なりもし御出候はヽ此段おはなし可被下候存之外高きものなり

十月七日　大田直次郎

島崎金次郎様

○

冷氣日増兩地平安

一九月廿七日認廿九日出之狀十月九日相達十月四日出之六日限り川支に而同十二日朝相届拜見いたし風邪痢病等流行之處家内親類共無恙安堵いたし候此方も少々風流行候處皆々丈夫にて大慶いたし候

一橋本暇願並星野氏手紙も橋本へ參り吉見より田山へも書狀來則卽刻其段申渡候彌十五日長崎詰同役着候而橋本家内病人有之急に暇遣候旨相賴同行いたさせ可申木錢米代之分同役たのみ用人迄遣し當人者當月分給金も壹分貳朱遣し置候處十九日出立故末は十日分も殘り有之故金壹分も遣候ば不足も有之まじく候尤歸府之上私宅え參可申其節此請狀(請狀は跡より遣し可申候江戶へさへ歸り候へば跡にて可申上候ても可宜敷候事)御消印暇差出候積り道中者私家來分にいたし候事先例に候事

近所交りに馬田其外へも内々談候處兎角御返し候方いかさま可然と申一人にてもとめたきと申もの無之候病氣はともかくも是にて御推量可被成候事扨々損德之事計にて恩義などは夢にも存不申ものなり

一安岡氏返書以今不參候由隨分御催促可被下候增田要助にも承合候處先々も其通申かけ候處斷之候由申候き

一更紗紙並武鑑並堀田候掛物之義承知いたし候

一お冬達者之由何ゟ之事に候出生之後名附候事男子に候はゞ太郎を下に御附候而頭字は北町儀左衞門殿へ御たのみ可被下候女子にても賴入候定而辭退可有之候へとも大阪ゟ申越候樣可被仰候達者と子共にあやかり候樣にと被仰可被下候祝儀等は宜賴入候御入用多き方不苦候事

一大塚築山書狀落手今便返書不差遣候宜く賴入候

一東氏地代金之儀何かと御世話に御座候

一跡代り長助取立候儀は今日内々儀兵衞を遣候增田要助掛合其上之事にいたし置候いつれ榮藏出立後の事にいたし候間必々其地星野などには御沙汰無之方宜候尤同役へも右家來榮藏義親類大病人有之と申歸し候積りに候外見一向病人らしく無之候間食も步行も達者に可有之候扨々去々年孝行奇特者

八百人も傳を書候陰徳にて名字帯刀御免之忠義者を一人こしらへ候事六づかしく獨笑いたし候去かしくり上のけんとくにも可相成哉と申合せ候猶目出度左右を待居候事に候以上

方々へよろしく頼入候北町ねだりものも調置候箱入にいたし同役へたのみ下し可申候早々以上

十月十三日　直次郎

金次郎様

○

寒冷之候爾地平安

一長崎奉行豊後守殿十月十六日着十九日出立同役中村繼次郎者十五日着に而十八日出立に附榮藏儀頼同勢之内へ入れ歸府いたさせ申候十一月三日江戸着の積に御座候間十五泊に付木錢米代料金壹歩用人へ遣申若川支等有之候へば又々勘定可申と申候へ共廿四日分程之料有之候間大方宜舗勘定と相見へ申當人へは晝食料金壹歩遣し候盗人に負錢位にて象牙箸一膳爲餞別遣申候當人も此節に至り少々殘念の氣味に御座候江戸着候ば暇之義御申渡早々此方へ可被仰下候先々大安堵いたし候豊後守殿並御普請役衆へは伊勢へ廻られ十一月九日江戸着之由中村は無其義當人にはちと殘念ながら此方勝手に宜候請狀封じ上申候江戸着之上御消印可被下候

一増田要介へ(當時儀左衛門と改む)儀兵衛を以内談いたし長助内存をも爲承候處要助事殊之外悦申候平人一人半季にかゝへ候事迄増田世話いたしくれ候間長助事十九日ゟ増田長藏と改め野羽織刀かし遣候當人も悦候

一北町小川町大久保清水相替事無之哉お冬當月臨月と存候嘸々御心配と存候段々丈夫之由承り安堵いたし候去十一日南町若田土藏燒候由嘸々御驚と存候

一袴肩衣等は一向入不申奉行衆滞坂中計之事にて唯々裾のきれ候は田山も困り申候町代の婆々をたのみこそくらせ申候乍去もはや五六ヶ月に成候而大體雑用高も相知れ申候

一肥田豊州滞坂中座人御褒美等も取らせ遣し座人氣請宜候一體秋御褒美濟候へば冬は大方無之も御座候少々之事にても甚悦申候名聞利欲第一之所故如此候拙者へも爲土産金三百疋先例之通御普請役へ

貳百疋と申候此度も金五百兩長崎町人預け返られ
候由目出度候事なり
一當十月十日豐州通坂の節書上直段入御覽候
一加賀米　壹石に付　五拾九匁六分
一筑前米　同　六拾九匁三分
一肥後米　同　七拾壹匁四分
一中國米　同　七拾三匁五分
一筑後米　同　六拾九匁六分
一岡大豆　同　五拾五匁九分
一金壹兩に付　六拾貳匁貳分五厘ゟ三分
一錢壹貫文に付　拾匁四分六七厘
右之通銀遣ひを重にいたし候國故錢は何程と承り候へは壹貫文に何匁と申候物の直段を附候にも銀壹兩銀貳兩又は何匁〳〵と申候
江戸の了簡にて金壹分を拾五匁と心得候と大に損有之候さすがに金壹分は欺き不申候へども油斷をいたし候と貳朱判にて遣し候七匁五分にとられ此方への勘定に七匁八分など丶申され候人物の至て悠々たるとはちがい利にさとき事飛鳥のごとく十露盤と秤は片時もはなされ不申候是は町人計居候國故也町方與力なとさへ大御番と小十人は御目見以下か佐久間も御徒頭を被勤候由御徒目附とはとちらか上役なと丶申位せめて便に大概順を取よせ見せ申度候猶重便可申上候早々以上

大田

島崎樣

○

兩地平安
一十月廿三日出の六日限狀（大井川　十月廿六日申刻より　同廿七日辰刻迄　宮驛風故出船無之佐屋廻り　今二日晝時着）
一お冬事先月廿二日夜酉之下刻安産殊に男子出生の由至而安産に而母子共丈夫之旨御申越目出度大安堵いたし候皆々御祝ひ別而北町市川氏にても御悅と奉存候御届並名前之義先便申上候樣御取計と奉存候幸今日者御役出之日に付御普請役兩人馬田氏田宮氏佐伯氏（天王寺ニ罷在候　婦人醫島屋懇意）晩程招候而酒宴を催候處右御手紙到來別而悅入申候北町乳母木戸か丶等世話之由安心に御座候此上者乳出候而丈夫に肥立候義を祈り申候若又乳等前格之通少く候ば早々乳母御抱可被成候別に御相談に及不申候嘸々唯今迄

段々御手當御心配察入申候遠方にて承り候は誠にぬれ手で粟と申ものにて大慶いたし候隨分寒氣之節猶又御心懸可被下候先右書狀着之義申上度早々以町便申入候委細者二三日中御用便有之候間其節可申上候以上

十一月二日　　　　　　大田直次郎

島崎金次郎樣

猶々五月祝も歸府後に相成別而大慶いたし候當地人形ことの外宜敷候以上

○

十月十一日附之大封壹箱同廿五日着日增冷氣之處兩地平安大久保淸水小川町北町二軒も無事お冬丈夫之由午去臨月之事故無々御心配と被存候（此狀認め置候）（處十一月二日安產之事申來卽刻返事出す）

一十月十九日飯田町火事之事承及候宮原氏など如何に候哉奥女中怪我人多くなど申傳候間無心元御座候

一堀田侯掛物一幅一さらさ紙五十枚一武鑑（袖珍袖玉）共六部

一淺草海苔二十枚一十二草圖（葉見へり）壹枚一略曆一枚

右之通請取申堀田侯詩かけ置候處皆々驚目申候銅座人なども一覽感心仕候來月に入候ば難波梅一枝大根にさし箱に入れ飛脚を以獻上可致と存居候先々先方へは御沙汰なしに可被成置候

一當冬御切米書附拜見委細暮々可被仰遣候旨承知いたし候此方も先々只今迄之樣子にては越年も無障相見へ申候來春下向前に取寄候樣にも可相成哉御扶持方も隔月に拂代金貳兩餘には相成申候前に物入多くくと申候譯とくくと承り候處全く遣ひ過しと被存候新町へは四五町有之門限はなし前々忍び步行も有之候樣に沙汰いたし町内之もの覺居候而内々咄し候去年などは夏物蚊屋上下ともにかり取にいたし返し不申など惡風聞いたし候去年之家來はよほど惡舖候由皆々申候其外東西共に遊所みちみち候間若きものなどは一年詰甚た危く御座候安岡閻魔顏之事承知いたし候如何いまだ挨拶は無之哉もし挨拶無之候へば此方にてもいたし方御座候

一長藏事至極似合申候跡へ中間一人可抱入候處平助喜助申合飯焚と供とを兼帶いたし外に人入不申候方勝手可宜と申候間一月五百文つゝ增遣し候而一人前遣兼させ申候箱爲持候事はたまくの事故一

人雇に而も間に合申候平助始終飯焚候處喜助と申合兩人出精相勤申候先々安心いたし候皆々和順甚穩に相成候

一萬屋六右衛門龜屋柳屋なとは如何萬屋助次郎方なと是又如何若火災に逢候ば宜く御賴奉り候承り次第見舞狀にても遣可申候

一今日出立之天草御普請役松本佐七にたのみ北町賴のまげ紐箱入等下し申候十六七日頃屆可申候

一當冬蔦屋鶴屋草双紙出候はゞ兩方共貳貫程つゝ被遣可被下候此方にてはめづらしくかし本屋など裏打いたし合卷にてかし本にいたし候長崎同役方へ遣し可申存候長崎にても悅び候由に候每々長崎同役よりめづらしき物もらひ候間遣し度存候其外新板物しやれ本兩面摺等蔦屋御聞合何にても御遣可被下候御賴奉り候

一大田恒次郎參候由當春中吟味役岡松八左衛門殿噂有之是は野本武兵衛親類故私方構無之出入致させ度旨被申候間少も不苦候旨申置候手跡宜候旨申置候埒の明ぬ迄にて何も氣を遣事には無之存候猶重候可申上候以上

十一月朔日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

寒冷雨地平安

一當月二日安產之狀到來卽刻六日限に而返書遣し申候十一月朔日附認置候書狀壹封前後に成候得共遣し申候彌母子共丈夫に肥立候義と存候

一右二日の夜は御役出之日に付仕出し等申附御普請役兩人馬田氏田宮由藏蘇洲と云醫者なり佐伯重甫天王寺村蕉房と號候來宴に附右書狀到來兩悅一所にて御入用もかゝり甚節儉當り候處暮頃播州姬路家老川合隼之助か壹斗樽千代鶴と銘有之酒到來皆々悅ひ狂歌出來候間入御覽申候ふしぎ成日に到來大に興をたすけ申候鋼座人小山氏流鏑馬記持參佐伯氏いろは萬年草と申書物持參是又奇事と申候蘇洲が發句は御役出の祝計に持參いたし候處是又出產之祝儀にも兼可申と大笑いたし候招仙舍と有之は御普請役町田氏にて今日も遊人連中にて御座候猶重便可申上候今日取込早々申上候皆々へよろしく御傳言賴入候以上

十一月四日　大田直次郎

島崎金次郎様

○

寒冷雨地平安其地寒氣强候由此地はさのみならす
霜も薄く今朝少々氷を見申痛積之氣味一向無之風
も皆々引候へとも引不申候唯今迄一日も不休服藥
一切無之候幸の事に候

一十月廿二日の第二十二便十一月五日に届申候此書
はいまた安産之前日と相見申候

一母子共丈夫に候哉二日之六日便着後左右無之候定
而一兩日中には届候事と存候乳はいか丶〳〵

一榮藏事も歸府と存候定而暇取候事濟候事に存候

一飯田町火災宮原氏怪我も無之安心いたし見舞之事
御世話と存候嘸々跡之普請等にて宮原大取込と存
候乍去やけぼこりとやらにて嘸々御見舞成市事と
存候柳屋に萬屋龜屋等へ御序に奉賴申候助二郎方
へ三枚とも被遣候へば届き可申候柳長は半焼ゆへ
別封なり書圖にてくはしく相分り申候宮原は取込
と存候間書狀遣し不申候其段よろしく賴入候

一甲州狀杉浦伊東吉見狀落手地代金壹兩三分被遣候
由承知候

一十二月に入候へば御金日に例之上納金貳兩芝氏へ
御たのみ可被下候築山より御たのみ其上定吉にて
早朝に金子持參歟尤切れ金に無之を須賀屋にも御
見せ被遣候お冬方に書附預け置申候き年々同文言
にて奉行衆奥印有之爲念去年之文言書送申候

金子之事

金貳兩　　後藤包

右者寛政十一未年正月大坂銅座御用被仰付候に付
旅用着類諸色致支度候處同月林大學頭書物御用の
方へ出役被仰付銅座御用之方御引替相成申候依之
旅用意支度入用等拂方差支候間拜借金相願候處同
年拜借金三拾兩被仰付申ゟ戌迄拾五ヶ年賦之内當
申年分書面之通上納申處仍如件

支配勘定

寛政十一申年十二月　　大田直次郎印

堀内小膳殿
小倉孫右衛門殿
富安九八郎殿
鵜飼次兵衛殿

右之通相違無之候以上

柳生主膳正

右之通美濃紙に書候而芝氏へ見せ其上にて例之宿に置候印紙へ書き候へばよろしく候いさい芝氏へ手紙遣し可申候築山よりも御たのまれにて左候へば御金奉行之掛合も何も改方にていたしくれ申候以上

一杉浦庄兵衛十月十三日出役被仰付申候由承り候築山へ傳言御賴可申候祝儀書狀跡より遣し可申候

十一月十四日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

兩地平安

十一月三日付同九日御書入之御細書同廿日到着此方ゟ差立候二日附六日限四日付同十五日付追々着と奉存候少々寒に付御疝積之由御保護可被成候

一産婦小兒共達者に肥立候由何ゟ以目出度奉存候鎌太郎と名も付候由農業之具にて宜舖殊に藤氏之元祖大職冠之御一字拜領之心持に而目出度被存候能々北町儀左衛門殿へ御禮賴入候扨又乳も澤山出候由重々目出度大安堵いたし候臍緒納りし跡へ灸は御すへ不被成候由一段之事に候灸は嫌之家法にて乳より外によき藥はなく候間蟲氣さへなくは麝香や熊の世話にも及まじく丸藥も餘り御用被成まじく候神代の子供は少名彥のまくりは用ひ申まじく候

一乳附已下家内夫々へ御褒美書附御尤に御座候木戶重助かゝ詰切之由宜敷賴入候お米殿嘸々ねふく可有之お袋樣男子誕生之評判嘸々大悅之事と神樂坂にひゞきわたり大坂迄聞へ申候なんでも定樣をそだてあげたから是から又鎌樣をそだてあけねばならぬとの御請合のよし急度承知いたし候

一北町濕瘡嘸々困り候事と存候乳母事は濕もうつり不申候哉お幸おとみはことにつよきよしお仲なとうつり不申候いたし度候去かし當春疱瘡の輕き樣かはりと存候ば可宜候

一奴僕御かゝへのよし御尤に御座候

一佐々木氏市川氏産衣之御禮金十郎殿より御肴守袋之御禮其外所々到來物之方へ宜御禮賴入候

一石井磯貝淨榮吉見野村市川書狀六通落手皆々此度御返事不致候此次之便に遣し可申北町市川氏へ夫

迄宜御奉願候短日にてことの外世話舗其上銅座銀座共南方大取込御察可被下候
石井返事認申築山へ御たのみ可被下候
一當十月以來惣冊定書附相當み何角御心配之儀と被存候
一蘂藏引取請人書附落手萬事夫に而御察し可被下候跡は甚穏には安心いたし候此度之安産いつれも大悦いたし候平助もことに喜悦に御座候猶期後喜候匆々以上

十一月二十二日認　大田直次郎

島崎金次郎様

○

甚寒之節南地平安
一十一月九日附之書狀役所便十二日出にて廿日に着後者左右無之候猶母子共丈夫に肥立候事と存候乳も續て出候事と存候此方ゟ御用便之節廿五日に狀出しをき定而達し可申候
一昨四日夜八ッ時過ゟ大雷雨晴れ候て七ッ時前ゟ天王寺之方に火災有之今朝沙汰承り候處天王寺塔炎上並諸堂大方燒候由捌々可惜事に候定而當火に而候哉今日引ヶゟ廻り見可申と存候猶委舗後便に可申遣候
一先日御城内荒川氏より酒一壺肴添到來是ゟ少々御快候由とかく先達而之病氣治し兼候と見へ申候則書狀掛御目候先此位に候て氣遣も有之ましく候
一此節江戸長崎兩地へ掛合事多く殊之外繁多に御座候其上短日にて忙しく候吏務紛々皆一決いたし候事故不容易事其多く候少閑暇には例之唐本猶夥舗書肆より持參夜分にても少々つゝ見候一々求め置度ものとも御座候少々つゝは抄寫もいたし候今日差急早々相認め申候以上吉見へよろしく御頼申候

十二月五日　大田直次郎

○

一寒中兩地平安　産婦小兒共壯健と存候
一天王寺燒繪圖壹瓦塔再興之時也有摺入御覧候外に書人無之繪圖貳枚進候間此通に朱引書入いたし外へも御見せ可被成候吉見氏北町金兵衛方へ壹枚つゝ被遣可被下候繪圖御用に候はゝ又々遣し可申候
一私方へ參候佐伯串甫泉屋異兵衛大功にて寶物其取

出し候由町奉行衆も早速詰候而御靈屋第一に防かれ候由一體火消ぬるく候間諸堂燒申候可惜々々
一塔の瓦は佐伯氏ゟもらい申候事長持第一之寶物と珍藏致すべく候
一燒失前に頻に盜難有之諸堂鳴り候事なと有之候由近所のもの申候て愼可申處濫行の僧とも不恐候故歟天災に逢申候浪花第一之見物を失ひ申候能き時節に參りあはせ一見いたし候事に候來年歸り候はゝ定而御再建願出居可申二月之樂も有之間舖扨々殘念此事に候翌六日夕方燒跡一見いたしあはれなる事に候當春初て參り候節古雅成る事に感し一首詠候處只今思ひあはせ候得ば物のさとしにやはしめて天王寺にまうてし時

うつゝなもなにはの寺をきてみれは
たゝ夢殿の心地こそすれ

只今之氣色に髣髴といたし候事に候
一佐伯重甫東曲人御覽申候誠に此通之景に御座候
一十一月九日附同廿日に達候後久々書狀到來無之候取込故と存候此方ゟは
十一月二日六日限同四日同十五日同廿四日十二月五日都合五便二十四便ゟ廿八便迄差立候定而相達し可申候
お袋樣およね殿其外
先十二月五日付出候は第二十八便也書落候間申上候
一當暮例之通夫々へ祝儀被遣可被下候且大久保御姉樣淸水御姉樣へ金百疋つゝ歳暮可被遣候北町お幸へも可被遣候
一來春正月末歟二月頃金拾兩御登せ可被下候尤此地小判は少々之切しにても甚むつかしく御座候間皆小粒にて紙へ御張被遣可被下候歸府之節並三月節句前々拂土産物等之用意にいたし候間申上置候無々久々にて小兒取込之事察入候早々以上

十二月七日夜　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

十一月廿四日付之御狀十二月十日に延着甚寒之節御地寒氣烈候よし此方は巨燵有之候へとも當り候程の事無之手水鉢四五日已前に薄氷其後は氷無之候硯水朝氷り不申甚暖に御座候霜もあまりふり不申

候十一月末より折々雁わたり申候兩地平安去年中腰痛松藏事ともに病出し候當年は一向痛不申仕合に御座候不思議之事者左の手に有之瘊瘤なくなり歯堅く相成香物などたべよく相成候〇先便申上候金子之義來春彌頼入候、

一產婦乳澤山小兒丈夫之由目出度存候先月廿七日若宮神樂坂へ宮參神佛兩部に天台法華之加味よろしく候但北町二軒は井伊酒井兩家之古實にもあたり可申哉一笑々々高井屋舗換之由先々年始之節坂道之嶮岨なく宜候引越祝儀にても被遣可被下候、

一上納金之儀芝氏より申來候由此間芝氏へも書狀之節頼遣し候

一中村德次郎か殘錢返し候由私方へも申來候間返事遣し申候南町金村彥衞門兄弟にて御座候間南町にて承り候はゞ居宅も知れ可申歲暮迄之内何にても肴にても禮なから遣はされ可被下候鹽物などに候はゞ南町へたのみ候而も可宜手紙は大田定吉よりにてよろしく彌御安泰位にて大坂か申來候旨文言御差圖可被下候殷勤成方よろしく候

一鎌太郎出生御屆之義御世話に御座候年齢之所に不揃大方歸府後屆候類可有之候年にうそをつき候事得手物故如此候

一大久保淸水小川町北町二軒無別條珍重に御座候伊藤家濕瘡はいかゞ少々快方に候哉おとみ嘸々困り候義と存候

一痛積之氣段々御快目出度候

一小兒は餘り暖を過候はあしく候冷候方宜敷由に候着物にくるみ巨燵やくらの上へ置候事堅く禁制可被下成候至而毒の由申傳候手も折々動かせ候方宜敷由貴人之子者多病百姓の子之丈夫なるにて相知れ申候度々あやし候て驚かし候事毒也とかく下へねかし置候而不構方宜敷候由

一此表天王寺火事之咄のみに御座候材木等町々か寄進多く車につみ火事羽織にて若きもの奉納いたし候當八日夜丑刻太子像も庚申堂か天王寺内南光坊の被居候といふ湯屋方丈へ御歸座有之御代々御位牌も十二日に秋野坊か近習光院へ御歸座いづれも途中伶人奏樂之由に候去五日曉火事之節も金堂か庚申堂へ御遷座之節は五重塔燒か上り南大門之方へ倒れんとする最中火之子の中へ樂人鳥甲にて龕

篝籠持參かけ附例の神輿は御ねりにて途中立樂有之候由さすが古風成事と皆々感涙に候へどもあづま夷の了簡にてはグハラ〳〵やけ落候中を御ねりにてヒウドンヒヤウドヽンもあまり利口な沙汰とは不相見候吉見へも御はなし御笑可被成候最早月迫り折角御仕廻可被成候以上、

十二月十五日

○

十二月五日附之狀同十八日相達寒中彌御安全家内産婦鎌太郎とも丈夫に有之目出度存候鎌太郎義蟲氣も無之大便時々不通候節は丸藥御用之由御尤に御座候夜分等御心附け奉賴候儀助方再緣之御世話之義當人よりもよく〳〵御禮申候樣申來候

一出産御屆之義御世話に御座候都而書附等甚雜成所故手間取候と相見へ申候此方ゟ出し置さへいたし候へば宜候尤請書之書手と紙等は役所に多く有之候間誰にても爲認濟申候築山へ能々奉賴申候寒中狀も遣し不申候間宜御賴申候

一去月廿七日宮參り配物等御世話御座候今非治助者小松屋にて多く出合候人にて候

大久保清水小川町北町二軒無別條大慶御座候北町伊藤氏方濕瘡今以盛之由嘸々おとみお仲等困り候義と存候宜奉賴候おとみ餅は毒に相見候饅頭御遣可被下候

一儀兵衞其外へ御傳言皆々宜く申候田山へ書狀不遣、候儀少々遲筆し候間別て難有がり申候

一歲暮之景色甚靜にて餅屋かんばん有之所一夕に付五百目平生のおそなへも一々秤をたて置候而かけ申候のし餅はたて壹尺に五寸ほどつゝの箱に入れ四角にいたし是も秤目にて足餅には餅の切れはしを添へ候由丁銀之心持なり、

一町内年寄ゟ、尺計之大鏡もち遣候間すはりの代りに用ひ金壹分計もつかせし可申候皆々下戸衆餅は悦可申松飾等も町人用故手輕く申付とかく節儉第一にいたし候

一土産物仕込にかゝり候思召も御座候ば可被仰下候瀨戸物下直に候へ共こはれもの故危く船廻しも萬一之事無心元直段の急に忘れかね候小き雅物求め申候荒增左に書附入御覽候何ぞ可宜思召も御座候ば可被仰下候歸府前迄に工夫いたし候

一唐繪石摺（楠正成碑　大石内藏助畫等）是は到來物おびたゝし
く仕込置候尤無料なり
一青貝細工之大盃甚奇麗にて（大壹枚ニ付貳朱　中六匁五分ツヽ）大一　中二　三枚程求め置候
一さらさ圓座貳匁ツヽ、
一同卦さん類（一匁餘　五本計求候）　一水入等雅物（一匁餘のもの唐物とみへ申候）
唐物まがひなり
一すきやきのかん德利（八分ツヽ、白燒ハ壹匁五分程）
唐物
一酒のみ猪口（十にて三匁位）
此外まごの手、燈臺、火箸等數多有之候唐物眞
物又はまがひもの等唐物やに有之候急に直段
不知候而安きもの多く御座候右之類に候へば
あまりかさはり不申文庫にも入れつめをかひ
長持入にいたし小道具等面白きもの多く御座
候別而青貝細工妙なり
一盃臺箱入（京都仕入）　三匁餘なり
一青貝書棚二尺四方　二分位
一唐卓（同）　十匁十二匁位也
一すやきのこんろきびしやう一組三匁にて至而奇麗
に候へともさて／＼かけさうにて危く御座候一つ
求め置候而毎日用ひ候處存之外丈夫にて上の性至
而よろしく候
一新渡之猪口皿之類扇盃類等は到來物多く有之候間
土產に用ゐ可申唐本に餘程買過申候間土產物方略
し可申候
一何にても思召つき候而御望之品有之候はゝ可被仰
越候正月之内に大概極め長持詰いたし置候早々以
上

十二月二十五日　大田直次郎

島崎金次郎樣

○

改年之御慶申納候餘寒未退兩地平安萬福之至
一十二月十五日附之二十七便（同十六日附書添）町便同月廿三
日附之番外御用便共正月三日に到來拜見いたし候
一體寒氣ゆるく氷雪共に少く御座候讀位之事に而
天氣宜候
一上納金無滯相濟候由芝氏例之戲れ承知いたし候湯
呑所へたのみ居なから相濟候事と被存候奉行衆よ
りの請取書去年之書附と一所に被成[illegible]可被下候[illegible]

子一箱被遣候由御世話に御座候

一大久保清水北町二軒無相替義鎌太郎丈夫之由大慶いたし候北町お幸濕瘡同篇の由久舗候へば退屈いたし藥湯等にて追込候事有之候間必々直し藥無用にいたし樣能々被仰可被下候忍冬にても茶のかはりは飲候が宜候おとみは段々快候由承り候是又御心附可被下候

一繪双紙京傳作上紙摺十二冊並すり六十八冊袋入三冊〆やれ本二冊被遣面白候並すり上すりとも長崎同役其外へ進物によろしく候

一福原富原狀吉見より石摺海苔吉見八太郎狀とも慥に請取申候

一喜左衞門殿ゟ海苔被下宜御禮賴入候此度は返狀遣し不申候平助への御屆物遣申候

一荒川氏へ 歳暮鳥渡水菓遣候處 禮申來候自筆(此節之書狀も入御覽申候)にて 病氣全快之由に候 當春も早く使者參り申候

一吉見氏婚儀も十二月十九日に相濟候由目出度被存候嘸々御姉樣御悅の事と存候

一當春交代高橋儀右衞門被仰渡候旨舊臘廿九日に申來大安堵いたし候例年よりは早くにて二月中旬過には高橋氏發足之旨長崎掛りより申來候左候へば三月末歟四月初には歸府いたし候樣に相成可申候夫に付先達而申進候金子之義高橋氏(高橋氏宅は白山御殿坂邊と覺申候築山へ御聞合可被成候)へ御たのみ御上せ候而も宜候町便にても役所便にてもいつれにても宜候早き方安心に御座候

一中川公御賴にて青貝細工書棚舊年差下候處右料物(六十匁餘)も參り殊之外氣に入候而猶又卓机料紙箱簞笥等注文申來候間誂へ申候但右之代(百八十目程)はいまた參り不申候間歸府前に立かへ可申も難計候間右之用意等も有之候間金子之義御くり合次第拾兩より四五兩已上之分は不苦候道中入用出立前宿代道具代金五兩程にて濟 銅座人不殘振舞等も有之候處當時金子殘り拾貳兩餘に相成候間此段申上候御上せ候員數等此次之便に被仰下候左候へは安心いたし罷在候(御役所便りも爲替故慥に御座候町便も同斷都合次第にて宜候)員數さへ極り候へば高橋氏着之節持參にても宜候高橋氏者神寶方掛りの隣にて別而心易く御座候間荷物之内へ何に

ても御頼可被成候當月中に舟廻しにて少々土産物等はしけ可申囘船問屋へ可申談と存候書物等殊の外荷物多く成候間船出可致候二月同役着後はとても大取込に候まゝ二月初に大體長持に片附候積りに御座候何か歸り風立候而手に附不申候舊臘も御用多く大晦日七つ時迄有之候

一當年は松餝も盛砂等にて大きう成餝町内かいたし鏡餅も一尺餘之物町年寄か贈り去冬か巨燵矢倉等も椅くさく結構成事共に御座候正月之重詰等酒鹽肴等迄進物にて歳暮に酒も買不申何程潔白成御時節にても遠國は大概此位成ものと存候大體口のすくなる程斷候而此位也あまり潔白過候とて却て迷惑がり申候尤家來等へも嚴鋪申附置候間いづれも篤實にて安心いたし猶春永々可申上候以上

正月四日　大田直次郎

島崎金次郎樣

(□)

餘寒時候爾地平安（正月元日之御狀同十二日到來之處其日早便有之早々可申上候右申上候殘り申上候）

一年始之書狀任仰別段禮狀遣し不申年禮は少々御座候得共江戸表年始狀數十通相認め候へとも兎角殘り申候

一家内親類共相替事無之小兒丈夫之由目出度被存候北町濕瘡如何に候哉少々は快方に候哉承り度存候大久保も同前之由先達而野村隱居より家内之濕は松藏か濕にては無之由申來候き是計は遠方にて相知れ不申例之異說と相見へ病中もこまり候なと申こし候き

一歳暮之祝儀夫々へ遣はされ被下每々御世話に御座候お米殿嘸々取込に可有之候能々御傳へ可被下候お袋樣へも宜御頼申候當年元日は鎌太郎ゑとうにあたり候間御祝可被成候此段お袋樣へ御如在は有之まじく候へとも、御心附申上候段宜御頼申候、

一久世和州一色氏か例之通目錄來候由禮狀遣し可被下候重便可申上候

一北町親類倉橋藤四郎殿天草詰之由此方にて逢可申候

一歸府荷物多くはり可申候間例之桐之箱壹つ船便に下し申候此地廿日過に出帆候はゝ遲くとも二月下旬には着可申哉尤海上之事故縦漂流いたし候とも不苦品計入れ申大切のものは持歸り候方丈夫に御

座候荷物かさばり候には困り入候只今ゟ詰方世話いたし候乍去上坂之節雨に逢不申候故桐油等損じ不申候間油計爲引申候

一交代のもの出立之日限二月中旬過と申事に候彌相知れ候はゝ又々御用狀にて申來候段色々の願も出居候由掛り之者より申越候

一土産物之品之内新渡皿至而下料に付八拾枚程求め置候京都盃臺其箱入是又下料に御座候間少々求め置可申候

一早春甚いそがしく何方へも參不申候扨々歸り凰立候而何か一向手につき不申荷物の工面計いたし罷在候とかく荷張り可申と存候右に付吉見氏へいまた返狀不遣候能々被仰傳可被下候北町へも同斷奉賴候

一吉見ゟ申越候高津梅つぎ穗之義承知いたし候是は近日是より別に箱入にいたし差立可申此節紅梅等所々よりもらい申此段御序に賴入候以上

正月二十五日　　　太田直次郎

島崎金次郎樣

○

正月十九日付之書二月五日相達拜見餘寒強候由此地も暮中は暖にて春來餘寒強十九日頃より當月迄餘寒強巨燵に入申候一兩日前之雨ゟ和暖に成候其地廿六日大雨大雷のよし島屋より申來夫ゟは靜に成候事と存候親族無事兩地平安目出度被存候北町濕瘡段々快大慶いたし候清水も婚姻後よろしく候由悅候

一土産物之義被仰下大抵求め申候 被仰下候吸物椀廿人前二た通切溜一組は京都物よろしき由是は銀座へたのみ置候堺庖丁之事も銅座へたのみ置候新渡南京差身皿一枚求め申（さしわたし一尺餘）貳匁八分是にて下直成事御察し可被成候水張の事承知唯々かさばり長持へ納り不申困り候事に候書物類其外いつれかさはり申品により又々一艘たのみ可申哉箱等も此地にて申付候へば板下直に候先便舟廻し差出し候一箱押附着可致候木曾道中願も相濟安堵いたし候

一金子之義大に御世話と存候いかさま役所便之方慥にて宜候十五圓にては餘り候程にて宜候全く用心のために候

一装束抄三通皇統略圖壹枚三十幅六七幢請取申候價何程に候哉承置度候

一伊東富原野村吉見井上鈴木黒澤七通請取申候

一芝氏黒澤氏木原氏家來書三封上々申候井上鈴木富原伊東野村は跡ゟ上可申候

二月六日　　大田直次郎

島崎金次郎様

○

正月廿七日附之御狀二月八日到來二月三日附之御狀同十一日に到來委細拜見いたし候寒暖未定兩地平安

一長坂吉見二通伊東中神福原（繪圖一枚諸珍らしき物に候）書狀落手いたし候

一北町濕瘡段々快大久保御姉樣御同前之由扨々同じやうなる事にて嘸々御困りと存候乍去歸府頃には全快と被存候

一鎌太郎丈夫之由一段之事に候おとみお仲嘸々成長と被存候

一二月十日晝より夕迄御城外の原東町奉行所（水野若狹守）前にて蛙合戰有之三四十疋も死し候由評判いたし候私は跡にて承り見不申候

一兼而申入置候金子拾五兩皆小粒にて二月十一日御役所便にて到來慥落手いたし候先々大安堵いたし候當時之分にては土産物等調候而も是程は入不申候得共用心のため宜候

一被仰越候吸物椀二十人前二た通之内上の模樣にて十人にて四十二匁餘也十人前十人前つゝ中にて二十人前調へ二十人前五十七匁ほど外に五人前十二匁ほど至而宜物有之調申候いづれ江戸よりは下直ならんと存候切溜も庖丁も申付置候皿類茶碗類南京新渡物下直故餘程仕込申此節多事に附右金子之請取迄に早々申上候外々へも宜舗奉賴候以上

二月十二日　　大田直次郎

島崎金次郎様

○

一暖和時候兩地平安家内無事鎌太郎丈夫親類中無別條義と目出度被存候北町大久保濕瘡も追々平癒と存候

一此間囘船問屋筑前屋新兵衞（平井專阿彌殿御心安きもの）船便有之われもの賴み覺申候入日記相添醤油樽二樽にて下し

申候三月下旬迄には大方着可申われものは長持よ
り船之方宜由申候

　貳樽之内　　十錦出中皿拾枚
　大皿壹枚　　鯉模樣小皿六拾枚
　茶碗十きん出貳拾　土鍋天草燒壹ツ　深草燒壹つ

右之通有之候外小皿鯉もやう貳拾枚は長持へ入れ
申候いつれも南京新渡にてめづらしく候甚下直也
一吸物椀盃箱切溜七人組十七匁堺庖丁薄刃二本さしみ二本外くりむき
とし中庖丁三本調申候いづれも下直にて土產物も
大體可宜存候
一此間被遣候金子十五兩にて歸府も安心に御座候歸
府候は丶殘金可有之候誠之用心に宜舖此度詰之同
役へ決而無心等不申候事長崎掛りへも相屆置申候
當廿七日には高橋氏大方出立もはや少々之間に相
成扨々取込公私用とも書物多くいつ方へも書狀返
事不遣候天王寺樂目錄辻氏へ御見せ可被成候以上
　二月二十四日　　　大田直次郎
　　島崎金次郎樣

○

二月十九日之三十二便三月節句に成同廿六日之三
十三便六日到來寒暖不定御地平安
一淺草鯱銘五女官圖憷に落手いたしお幸吉見淨榮書
狀落手
一家內無事大久保濕瘡于今直り不申由承賴候
一倉橋河久保事承知いたし候此分に候は丶川支も無
之十日朝は高橋一同着可到候左候は丶十日程申送
廿一二日頃出立之積に內々町田氏申合置候木曾路
十五泊十六日目着四月七八日頃歸着可致候もはや
少々に相成取込申候乍去風邪流行も少々引直に快
御座候歸路奴僕不足に付一人下りたかり候もの增
田要助世話にてつれ歸り申候平助風病後半人と相
見候間壹人つれ可申候
一土產物等大抵調へ申候路用金も隨分此間被遣候て
澤山と存候見るほとのもの買申度候へとも見合申
候尤此後たのみ候へば便次第出來可申此度中川公
たのみにて青貝細工机簞笥大香卓料紙硯箱五品誂
に而百八十目土箱貳十匁にて出來此節揃に付代料
立替置申候大造なるものにて舟廻しに申付候□賀
事扨々氣の毒に存候坂町も笹の葉二本にては難義
と存候扨々薄命なる人に候

一鎌太郎丈夫と樂に罷在候幌地唐木綿此方下直たる
べく候品により求め歸り可申哉と存候壹端有之候
はゝ可宜候

三月七日　大田直次郎

島崎金次郎様

〇

一筆啓上仕候暖氣之砌御座候處益御勇健被成御座
目出度御儀奉存候隨而私儀御普請役町田喜藤太一
同道中無恙昨七日歸着仕候右之段申上度呈愚札候
恐惶謹言

四月八日　大田直次郎

成因幡守様　參人々御中

外各通

水若狹守様　參人々御中

佐備後守様　參人々御中

一筆啓上仕候暖氣罷成候處彌御安泰被成御勤仕珍
重奉存候然は私儀御普請役町田喜藤太一同道中無
恙昨七日歸着仕候在勤中は彼是御世話に相成千萬
忝奉存候右得貴意度如此御座候恐惶謹言

四月八日　大田直次郎

各通　草

吉田勝左衛門様

同　田坂市太郎様

同　杉浦兵左衛門様

高橋儀左衛門様

村井喜藏様　（在勤引續中は）

久保十太夫様

一筆致啓上候暖氣罷成候處彌御賢勝被成御座珍重
奉存候然は私儀町田喜藤太一同道中無恙昨七日歸
府仕候在勤引繼中は彼是御世話罷成忝奉存候可
得御意如此御座候恐惶謹言

四月八日　大田直次郎

羽田要藏様
菊名直六様
河久保和三郎様

別通

若田喜内様　には引繼之字除之

猶以御留守宅にても皆々様御替り被成候御様子

無御座候間御安意可被成候若御用等御座候はヽ無御遠慮被仰下候以上

尺牘　第二　自文化元甲子年九月至同二乙丑年十一月　長崎表よりの状

宅狀第四便之内

一薄寒爾地平安

一九月十九日附にて當十月家計之事申上候定而相達可申候

一定吉方八月廿六日封之書へ御書添被見いたし家内無事北町二軒大窪清水無相替懸遙懐候僕とも相替儀無之別而重藏深切に候

一中村屋か届狀に被遣請取置候へども志たヽめ置遣し申まじく候中々左樣成みだり成事に無之既に奉行やしきを鯨屋舗と異名此方屋舗を志やちほこ屋舗と唱奉行之家來迄此方やしきを遠慮いたし恐れ候位之事故阿蘭陀通詞などへ青樓茶や之狀は取次かたく候重而又々如此狀遣し候は淨榮寺へなりとも其譯御はなし一切届候事成不申と申事御はなし可被成候青樓もの並柳長流は此やうな事一向わかり不申候

一馬蘭事ゟ書狀來斧七給金之儀も八月十二日御留主

宅へ相納めし趣申來候か樣成事は一寸御書附御申
越可被下候馬蘭事へ挨拶不都合に成候間申上候片
口にて分り不申候
一旅宿何にても不自由無之家來蒲團五（大阪にて十八匁つゝ）室
津ゟ船中十三日着用之上下關ゟ（船回し三匁）長崎へ着
是に古蒲團買足し（同役家來三人死し候夜具故よ
くば大阪にてとゝのへ候きと跡にて存候）冬は濟
申候甚暖にて夜具をき候もの無之皆々蒲團にて巨
燵無之候同僚の咄皆々大咗（ウツ）何も物入も少く御座候
金兵衛時代とも樣子大違に候年々振合かはり候由
一豆腐小半丁（此方の大きさ八文）山屋のごとくに候きらず高直
一と玉（小三四文大八文十文）鯛二三十文（四十文では大鯛なり）鱚（キス）
（大七八寸）八文七文京より鯛十六文程鰺（アジ）（大八九寸見事にて）十三
四文マグロイハシの類却而高く御座候肴ゟ野菜高
し油壹合（五十六文）是計高直其餘下直也僕ども禁足供
之外一切門を出さず門番小遣見張有之大安堵に御
座候第一之幸は當年は其賄方改り大阪已來年來文
通之村上清太郎に成必至に私勝手に成候事を働き
申付此方御用人ゟ格別氣もきゝ小遣帳無間違內外
大違に候以上

此節ヲロシヤ一件にて御用狀日無定候色々に狂
ひ候間先認め置申候夫故かさばり候をきらひ雁
皮紙に曆のごとく認め申候
北町ゟ御沙汰書重寶いたし二軒ゟとかくのり入
裏白參り申候返事かさばり申候故此紙にて遣し
候年始暑寒共已來半紙に認め候樣精々被仰賴入
候とぢ込にこまり申候いつ方ゟも半紙成大阪も
江戶も皆々裏白にては無之候
島やゟ額五枚返候由又々井上玖なと御みせ可被
下候先便申遣候が是にて事濟候故御消し可被下
候いづれ用事は行違ひ可申候以上
九月二十九日　大田直次郎
島崎金次郎樣

○

薄寒兩地平安
一九月廿一日出之御用狀に第三便差出候處同復廿二
日飯田町三河や彌平次かほる急に歸府に付番外之
狀出申候北町二軒大久保清水鎌太郎お豐お富お中
就れも元氣に候哉子供を見度存出申候さて〳〵日
々一向無寸暇皆々丈夫罷在候御案じ被成まじく候

一斧七本金はいかゞ成行候哉よもやあのまゝには濟申まじく當人身分之事は來年御祈禱のため幾度もゆるし候樣馬蘭へ申遣候
　此事便に申來らば御消可被下候
一九州海道松之大木根からぬけ又は吹折候を見て始而船中の大風を存候扨々危き目に相申候子々孫々の末迄も海船なとは乘らぬ事と歸府の上も舟遊山なと見るもおそろしく候船中十三日も近年めづらしく候
一此度かほる不思議の因緣にて長之道中船中旅宿中長崎迄毎晩／＼背中をもみ足のうら迄もみ申候如此やさしきもの古今無之候此度かほるに別れ候は手足を取られ候よりもかなしく富士野すそ野より鬼王團三郎を返し候も此樣な事かと存候扨々深切重寶は難盡筆紙候委細來年歸府之節委曲御話可申上候何卒吸物肴にても被成何となくかほるへ一盃御すゝめ可被下候中々其位な事にて禮は申つくしがたく候遠に立かゝり認め早々以上
　九月廿日認　　直次郎
島崎金次郎樣

大田定吉殿
なを／＼旅中第一の重寶定丸小鍋道中重寶本町幸作製候尻輪に御座候是にて三百里餘の駕籠の中尻痛ますさて／＼重寶なるもの有之ものにて感心致候例のオロシヤ人にて臨時大さわぎに御座候以上

○

俄之寒冷兩地平安此書御他見御無用極内用計申上候悴方島崎氏共番立同斷にいたし度候
一當十月家代金如何に成候哉當秋少々も御遣に候ひし哉定て當冬より暮へ掛けては取續六ヶ舗被存候藏宿は借り替は致し可申候得共是は暮之方に入可申候其上小兒は多く炭薪油等万事入用可多と存候私錦囊之謀を殘し置き候其爲須賀屋方皆濟壹文も出入無之候間壹と晩樂地を御呼被成來十一月歸府迄十三經並白氏文集本朝文粹二箱之儘御預け候ば金拾兩者貸可申尤歲暮に押詰候ては惡しく此書届次第早々御相談可被成候
一瀨戸物町嶋屋より額之殘金勘定濟候哉是等之事承度候
一出立之日芝氏へ本包封じ鈴木門三郎殿へ届候積是

亦如何

一岩原用達へ金子拾両相渡し置日々小遣帳用達共此方世話無之宜候殘金貳拾壹両貳分小玉銀八拾匁計も有之此分にて例之割金參候迄相凌き可申候道中入用差引贈物等にて如此

右之件々追々其地よりも可申來左候ば此ヶ條御消し可被成候何れ遠方は行き違ひ聾の噺し同前に候此度便かさ高嫌候故別段定書え不申遣候宜奉願上候以上

九月十九日　大田直次郎

嶋崎金次郎樣

○

大坂便之沙汰有之に付認置

薄寒之節兩地平安此地奴僕迄無恙　生形三郎右衛門大川貞八毎日見舞候深切に

一易御讀之由一段之事に候古注疏能々御覽候て朱子之注に御引合御覽可被成候程子は別に理屈を云ひ候間面白くは候得共朱子とは別に御座候熊坂なとか致し候書は却て惑の種と存候大概に御流覽可然候東涯之易之注よく御座候由板本に有之未見候十三經樂地え冬中預け候事嶋崎え申遣候得共易計は引ぬき貸可申候

一於冬乳いかが惣領に一旦出し候乳故凝りさへ解け候へば出可申候追而三醫清齋の説承り可申上候乳母も能き人物無き者にて候間能く／＼御案し可被成候

一金谷氏より南朝雜錄百和香借りに參候由承知に候但中川公などは格別其外は留守にて知れ兼候と申て書不借人の戒可然候

一近藤重藏え北齋畵五拾三次摺物壹帖屋代氏え去年善光寺縁起三冊板本塙撿校取次にて松浦公え曲宴抄古の謠のやうなもの）一帙二十卷カ十八卷カ貸し置候是は折々御催促御取返し置き可然候塙より參居り候泰湊浪語寫し置き可被下候

一十九日會之儀承知いたし候是は下町其外舊知己之縁を繫置候のみにていかやうにても宜敷候十四日詩會何卒井子瓊鈴猶人中村文智君などか、座舗のつもりにて出席いたされ候樣私御頼申上候由頼入候福原兄弟湯原犬塚などへも御談可被下候近日來年中宿題出し上可申候且文題も出し置可申候當十

二月は十日頃納會に可被成候（十月十日宿題歳抄放歌七古詩七）
絕　鷲谷會稿跋文
右出來次第御見せ可被成候會前に直し置可申外々えも御配り可被成候
一奇書奇器色々出申候閑日て二十一史建立之外無他事候押附相分可申候若當年分り不申候得ば當冬唐便に來年持參候樣申遣候由に候甚廉也
一漁童樵夫事御尤之事に候折々寛猛相濟も宜敷候唯々我に使はるゝ彼が愚を憐むべき事に候是にて旅館之羅漢達の事御察可被下候迚も役に立やうと思うてはむづかしく偏袒右肩も有之坐睡も有之其中に重藏尊者計は餘程德行圓滿にて五百羅漢之中でも立て居る方に御座候長丹尊者なとは餘程面白きものにて至上に吉力功上々吉之痴に御座候乍去氣づかひ無之安心なものに候萬々後便と早々以上
一お冬其外え宜敷入候およね殿え申入候鎌太郎嘸々御世話と存候小兒も出來取込候間先年の粟餅の丸呑等無之樣御頼申上候早々以上
十月十二日　同　直次郎
大田定吉殿

○
薄寒に候兩地平安
一九月七日附之書十月四日着（以後繼信不至候九月廿九日附之）御用狀を十月十三日に相届候宅狀大方ゝ兩日中には相届可申候日限延引ゆへ御用狀之節後れ候儀と存候
一北町二軒大久保清水えも宜頼入候此方家來いづれも達者によく〳〵勤申候何も不自由無之却而歸宅候ば不自由にて困り可申候
お冬乳之事官醫小川文菴え相談候處よく〳〵鯉をたべ候がよく候由一切鹽からもれのたべ事候あしく候とかくうまくなき淡白のものたべ候が宜候由申候此度參り居候唐醫胡兆新え相談いたさせ候處別紙之通藥方書附くれ申候めづらしきもの故胡兆新直筆之まゝ進上いたし候間御藏し置可被成候よくよく醫者の文盲でなき男に御見せ被成御用ひ被成候て可然候文菴子はよろしくかるべきと申候一體和らかなる療治ゆへよろしく候二七の日は長崎崇福寺え出て日本人之療治いたし右療治請候に藥をもり候事無之此別紙之通り藥方を書あたへ申候是唐にての療治は皆々如此の事の由日本の醫者の藥箱

の便利なるを見て感心いたし候由に候此補光新撰治之薬方七冊もはや貞原重藏に寫させ申候餘程奇方有之由に候

一唐本類十帙めづらしきもの會所よりかりよせ候て夕方書拔申候色々奇書見つくしがたく候近來新著之書めづらしきもの御座候下直なる分は調もいたし申候唐本には飽腹いたし候（抄書も二三冊出來申候）

一寒夜小用に度々起不申腹中和らぎ候薬とて古き大風呂敷やうのもの熱湯にひたしよくしぼり候て晝壹度夜ねる前に壹度腰より横腹をむし申候腰を五度計りさて腹の臍の方より二度ほどあたゝめそれより手拭をあつくしぼり候て顔をなでふき候て臥り申候着物は帯をときていたし候けしからぬあたたまりにて夜中ふせり候によろしく候尤右の風呂敷やうのものは二つにてとりかへ〳〵あつ湯にひたししぼり候がよろしく候（是は男女に限らず腰のひへ候ものには濕石のけによろしく候事）是も會所の役人の倅の傳にて夜中わざ〳〵倅參り尻をあたゝめくれ候其後も丹次長藏其傳をうけ候て毎日〳〵右之通にいたしくれ申候扨々長崎ものも大坂ものと同じく和らかにて深切なる事人のはなしとは相違いたし不申候童子などおとなしく喧嘩など一切いたし不申候役やしきへ參候乙名二人隔日に相つめ申候いづれも和歌をよみ書畫を好み風流にてめづらしき書畫ども掛物持參見せ申候江戸ものゝごとき不風雅不沙汰ものは一切無之候日本はいづれ西よりひらける國と今更初て心附申候

一貞原寫物日夜出精にてよゝゝ候何か妻方より手紙參候處住居之事に付苦勞有之候樣子に候子息など定て苦勞いたし候事と存候どうぞ無事にいたし度候事

一市川氏より書狀參候處今日は取込別書遣不申宜く御賴申候右唐醫之事御はなし可被成候

一當地之人物は十千亭錦江眞顔なとゝ申風に御座候西川のやうにて氣のきゝたるものも御座候浪花よりは赤々さとき方にて候得共一體温潤游惰にて柳長枇杷丸米人などゝ申樣なものは一切無之候氣の長き事浪花に似申候

一味噌壹樽入置候所江戸味噌同前にて至てよろしく浪花より赤みそ壹樽船廻しなどは大笑に御座候且揚場三河屋より世話にて新川のものより江戸酒壹

倹但し申候私酒は少々つゝ見合罷在候に付いまだ口明不申候道中酒を過し候故此地着後相休み居候節倹よほど遊び申候養生も此上なく候

一十月望夜月色よろしく候に付赤壁の遊存出し井上鈴木之詩を寄申候詩文共多く御座候後便可入御覽候早々以上

十月十六日　直次郎

定吉殿

○

九月廿七日附同月六日附之書一度に十月晦日着慰遙慎候兩地平安目出度存候海陸無恙長崎着之儀九月十五日九月廿六日十月五日着之三書にて御承知之由乳母九月廿八日引越候由嘸々何かと御勞煩に奉存候右取込にて鄕信も中絶候事に存候

一先達而入御覽候胡兆新樂方之內に有之候七星猪蹄此方にて手に入候間干し堅め別便に遣し可申候當人無沙汰煎しにて御用可被成候

一詩會易會有之文粹盛衰記等御一覽之由（盛衰記書抜キふもとのちりニ有之御引合ニ御覽可被成候古言モ有之候）

一朱易衍義宜かるべく候いつれ易は朱子本義よろしき由觀海先師も被申候き

一內田持參之織物の中七七八は空の字なるべく候卷と草書にも認め申候めづらしき物也定て高價與

一御作一覽栗熟詩厭衆賓衆之字三重前には平に有之候得共仄歟と覺申候猶御訂可被成候屐起後聯崖菊臨宕發（此二字更思）客至（碎光イカ碎光歟）右之外無所議候別て栗熟の作可宜候稚子は鎌孫と被存候

一狂歌數首面白く候作去我も是故に流汚名候事故無益之事と本歌をば詠覺候が宜候旅行などは和歌よろしく候

一此間福濟寺聖福寺等の唐寺（唐人建立いたし候寺）一覽いたし候處一體堂の造よりして唐畫の如く門の榜額に龍の彫物のふち書は木庵即非（金剛寺額思出候き）等堂門とも一々に聯有之門前の石欄石基等日本のやうには思はれず是計は三都に無之驚目申候三百里外を經候一得は是計と存候

一唐通事（彭城仁左衛門穎川仁十郎）來見唐話の事など承候東都にて得候譯家必備莊嶽唐話見せ候處是通詞之初學に讀候書のよし段々譯文いたし候

一藥物奇品奇石も一通集め申候藥種目利のもの予か
昔をこふによりて集申候
一此地之ものいづれも予か詩歌を渇望いたし候唯今
迄所持いたし居候ものも僞物多く候此度鑑定致候
一泰西輿地圖說（六冊）沿海異聞（殘り之分）魯西亞志共浪花便植
木蒲三郎より十一月初相達致落手候不思議成時在
勤にて亦々魯西亞の一件沿海異聞壹冊出來可申候
歸府可入御覽候色々奇談追々可申入候
一石川五郎兵衛事病氣如何桑名え泊り候節承候得ば
四五日前此歸に宿病後勞甚く候樣に申行遣ひ致し
歸宅いかゞ御爲知被下候
一鶴屋次兵衛九月中旬より大病之由如何御序に御聞
可被下候斯人病氣故江戸劇場番附其外流行之繪等（臨輔繪此地來）
遣し不申扨々遺憾に候重便顏見世劇場番附
知可被遣候以上
浪花より出候紺紬一反麻一反早速届きの由承知致
候

十一月六日　　　　杏花園

大田定吉殿

（

爾地平安（此間寒暖不順朝夕如何手に候）
十月十六日附之尺素十一月十日來着渇望候此方よ
り出候書追々到着と存候蝦夷草子二卷小田文藏よ
り深切にかしこされ候處是は不殘沿海異聞に有之
候而遼東之豕には候得共深切之處よく／＼吉見え
御謝可被下候
一芝氏にて拙者病氣之事御聞の由無益之遙想と存候
而是迄不申遣候き實は小倉上陸より寒熱強く佐賀
邊にては甚難候故（飯田町かはる事）三河屋大きに驚き幸三
官醫從行いたし候間小川文菴を迎來診脉候處一時
之感冒にては無之至而六ヶ舗申し九月十日長崎與
疾に而直に臥床に入漸く九月末に快候得共腹中和
し不申候處村上氏（會所役人浪花知己）傳にて腰を暖め快なり
十月十八日出勤只今は全快候得共過酒を禁せられ
却而養生には宜候かほるをも口を止め置候間發覺
いたすましく候扨々深切なる男にて夜々足をもみ
申候依之九州道中は如夢覺申候日々人夫之駕籠に
て難儀致候き乍去當時は全快故御案し被成ましく
候出勤之上魯西亞の事上裁の無之內大小之事共紛
擾日々勞彌書候

一此度天幸也宮醫從行別て小川氏は堀口彌右衛門本意醫業出精此度此人の藥百三十服餘服申候尤人參附子入り候藥にて御座候先日藥禮五百疋遣し申候

一病中胡兆新に見せ候ば可宜なと申もの有之候間源平盛衰記小松内府の例を引て斷申候病中之囊氣是計は自讃に候き婦人は格別官吏之身として異國之藥可服事には有之まじく相斷申候鈴文などへ御咄しの上御一笑可有候

一風車詠物前後聯とも緻密可唱漢名之事御尋候處帝京景物略の中に春場と申所に出申候風車と有之候如是と形狀を申候は此方の風車に似申候

一肥後米著と申人は細川之大夫にて樋口季成なと知己に候き俗稱米田口門と申〔本許〕服部仲英之門人之由に候

一宍八幡庭園致一覽生郷心候

一客館朝夕之寸暇に抄書いたし攝壤編四卷計と崎陽日記〔庭に百舌鳥の聲多候間百舌の草くさ二卷許〕出來申候又々瓊浦雜綴と題候隨筆書懸り申候古筆の賣物日々數十枚持參候內書畫等面白きものは求め置可申存候〔予所載畫面引出しの箱に有之〕林屋陳鳳古書と有之候東坡承天夜遊と記申候

陳鳳古書の春夜宴桃李園序一幅琉球人とも可申揚晉か牧童圖〔是元嶺太郎ニ似 中牛圖米ニ置候〕其外月樵蟹の圖高玄岱書なとも有之求め得申候即非木菴道榮杯と滿目申候客居の一樂此事に候與原生書は達者にて段々筆料にて寫させ申候歸府之節東に載せ不勝と一笑いたし歸府迄には餘程書畫入手可申候卄一吏之大願未果是非來春迄には相分り可申候

一須賀屋卦引本二三冊つゝにてもほしく來春交代之節にても其外便にても可被遣候　草々不一

霜月十七日　　　杏　花　園

鯉村足下

○

南地平安

十月十六日出之御狀十一月十日來拜見いたし病氣之事御尋もはや全快去月十八日出勤如平日御座候扨々九州にて難儀いたし候へども無益之案事故穩し置候處相知れ候由に候間定吉方へ委細申遣候三河屋彌平次に委細御聞被成候へば難儀之譯相分り可申能々禮被仰可被下候

一須賀屋方いかゞに候哉經濟之事宜賴入候此方も來

春に成候ハヽ猶は例之割合入手不申候尤繰合は出來
候由申候へとも成丈自力にて罷在候
一奴婢とも暇出し候由御尤に候此上は乳母何とぞ一
人にて遣行申度候
一島や額五組にて金貳分貳朱分遣し置候不殘相返候
儀にて御座候
一長谷川與原增田(五平)二助いつれも丈夫に相勤め申候
一出勤後日々圖譜御座候朝も五つ半より出候而八つ
時過に引申候年去臨時之一件にて日々用事多く御
座候大阪なは餘程繁多毎日〳〵初めて見候事取扱
申候一體荒物屋と申見世にて御代官所之外一切之
商人産業米金出入唐紅毛事共上にヲロシヤ迄參候
而大取込めづらしき事共見申中々江戸にて考候樣
なる事にては無之候
一此後も書狀は夫方正月に着可申何分家事之事御頼
申候早々以上

十一月十七日　　大田直次郎

島崎金次郎樣

大久保清水北町二軒へ宜頼入申候

〇

寒暄 甫地平安

十月廿五日附之第四便十一月十九日着慰遥想候十
月十九日は赤曲會贈之由狂詠一見いたし候日繁用
一向無寸暇奇書奇書に日々驚目申候東贄醉翁亭墨
本雪由人柿本人丸の歌等入手申候國姓書も有之候
是を求め可申と存候
一別紙荷物上申候人物之書計御寫追而御返し可被下
候
一十一月十八日初而梅ヶ崎と申所へ昨十七日ヲロシ
ヤ人(十九人程)上陸に付爲檢使罷越終日荷物を藏え運ひ
入候を見申候使節レサノット逢申候通詞(名村多吉郎)大
田直次郎さまと申候へば使節も大田直次郎と申て
うなづき右の手を出し此方の右の手を握り申候是
初見の禮也夫より部屋へ通り椅子によりかゝり此
方手附由田吉左衛門と同く椅子により居候ば通詞
を以て對談幸太夫事よく覺へ居候夫より假屋中を
見廻り奇器を見申候善蘭著有之繪を見せ申候書を
も一冊見申候南アメリカ國嶋々圖人物草木鳥獸
等の圖有之所々ぶ覺に書ぬき申候カムシヤツトの
湊も有之大きなる湊と見へ申候今日も唐船一艘着

大取込早々以上

扨々好奇者は必奇事に逢ふ事と生涯之大幸大愉快之至にて精氣も何も平癒いたし候呵々

十一月廿三日　　杏花園

大田定吉殿

○

此地一寒一暖而地平安

一十月廿六日附之第四便御細書披見大久保清水北町二軒孫等村持等無之大慶いたし候乳母も居馴候事と存候奴婢とも暇被遣候よし寒氣に向ひ竈下之事御世話御苦勞と存候

一須賀屋へ御談候處尤承知募候方故兩三度之積に御相談之旨承知いたし候

一十月御切米細密御書附借り返し金拾壹兩と拾壹匁貳分五厘御請取内金拾兩長谷部氏へ御持參殘金五兩は十二月渡候積御談之由安堵致候當暮者定而六ヶ舗可有之哉存候何分宜御取計可被下候此方ヲロシャ一件御下知濟不申未た交代濟不申候内は何か騷々舗御座候早く一件相濟候樣に存候右交代等濟成瀨公邊圍役も返り候へはいかやうとも致よく御座候間歳暮之所何分賴入申候猶後便可申上候

一島やの額うれ不申候由尤金子半金之餘大阪に据置候間殘りはいつにても宜候此方奴僕共無病にて皆勤いたし私儀ももはや全快食事すゝみ過候而困り申候扨々九州路にては難儀いたし候田町かはる世話にて小川文菴治療宜十月十八日ゟ出勤いたし候尤氣分は始終よろしく夜分寒熱強御座候き夫故病中も寫物等いたし補養いたし候唯今迄覺不申候等多く服用致候かほろへ能々御禮奉賴候小川文菴も來春は江戸へ返られ可申候下谷三枚橋の由にて其節者定吉にても禮に被遣可被下候扨々名醫にて深切なる人後來賴候にも宜候唐醫胡兆新との問答甚面白き事に御座候

お多乳はとかく出不申哉せめて片乳にても出候へば小兒のために宜候間唐醫胡兆新へ小川文菴相談藥方並七星猪蹄湯傳に遣候何も壽に成候ものに無之候間試のため御用ひ可然候歳暮短日嘸々御取込と存候此方日々出勤朝夕もせはしく候昨日も梅ヶ崎と申所へヲロシャ人十九人程上陸尤使節之者も上り居候　荷物上り候に付爲檢使罷越終日ヲロシャ人之中に居候所へ又

又十里程沖手に唐船二艘入津一艘は天草の方へ風にあひ候かと遠見番之者届出候而大取込拇々冬至にめづらしき事を見候事と獨笑いたし候生涯之願遂げ候奇事來冬めせたく歸府色々御話可申上候早々以上

譬に雨ふりて地堅ると申候ごとく旅中醫者か大酒を止られ養生いたし身の爲には甚宜舗御入用も餘程儉約にあたり申候呵々

十一月廿二日　杏花園

嶋崎金次郎様

○

十一月六日開之第五便同廿九日相達此節甚寒に候へ共兩地平安

一先便被仰下候通り樂地堂之方調達候哉嘸々當歳暮は御心配と存候此方當年は先有合にて濟可申存候間今便金[illegible]の差立候此内にて大久保淸水兩姉君へ歳暮之御祝儀一片つゝ御遣可被下候奴僕共いづれも丈夫に皆勤安堵いたし候

一與原も寫物爲致割合に而筆料遣し小遣之足にもいたさせ申候是も淺草へ置候妻之方か店賃之事申越困り候様子に候夫故給金の内金壹兩壹分程右店賃へむけ當暮か毎月一片つゝ其地か善太郎方へ被遣被下候様にと申候間かはせにいたし候而も宜候是又當暮其地もむつかしく可有之候間此内にて御引跡は小遣へ御入可被成候北町淸水なとも嘸々米價に六ケ舗と存候小川町おば様もいかゞに候哉一々手とゞき不申候

一來春同役松田交代之節は少々金子下し候様にいたし可申候當冬唐船七艘入津に付來春之元代にて藥種買拂之仕來りに候前借出來可申候乍去あまり船數多く繁昌過候而米直段之安きと同く在勤之勝手にはあしく候由慾に目のなき男とも申候萬々月迫來陽愛度可得貴意候早々以上

十二月五日　直二郎

嶋崎金次郎様

○

十一月六日附之書同廿九日來甚寒之節に成候處兩地平安兒女とも生長と遠察致候乳母も居馴候哉

一北町二軒淸水大久保無椿事愛度存候

一塙檢校狀御届歸路狂歌堂へも御出のよし大屋のう

ちとは見へ不申醫者敗山師のうちのやうに見へ候太平の代にはかゝる事も有之と去秋驚き申候き淺草菴へもより／＼御立寄可被成候是は格別移居の時の實意も有之まめやかなる方に御座候

一芝氏令息並僕從まて學問詩作なと出來候由隨分御勤可被成候近隣に學友なきは不自由に候井玖鈴文なと隨分御出會可被成候不及己者を友とせす益友を求め候方よろしく候

一鎌孫唐詩を誦し候由一段之事と一詩を覺候はゝ餅少し宛賞し被遣可被下候定て今程は祖父の事忘れ候哉但は覺居候哉筆硯を弄び候哉如何

一蘭香亭かほる參候はゞよく／＼旅中の樣子病中之事御噂可被成候大きに世話に成候甚實儀なる者にて御座候狂歌師には珍敷候

一魯西亞人に御下知無之滯留いたし事多く御座候處へ唐船壹年定額十艘之處當冬七艘着（子九番同十番丑一二三四五番也）來年分半高取こし入津大取込奔走いたし貨物夥舖候而市中は大繁昌滿悅に御座候近年に無之珍舖年に參合候とて市人共相慶し諺言如由に御座候七艘にて五百六十人餘之淸人來候間少しは書畫にてもいたし面白き人物可有之哉拙々存の外文官なるものに御座候作去人物は蕃人より至て宜く相見申候唐人者近郊蕃西川氏と言ふ人物に見へ申候魯西亞の人物は金將御目顏色は眞顏と言ふ顏多く御座候御一笑可被下候大方紅毛人に似より申候

一羅赤城は祭に出候辰巳屋隱居によく似申候さて／＼芥子坊主は身苦しきものなり

一平定準噶爾方略と申唐本（十二帙）康熙より乾隆の近頃まて北方の亂を靜め候事を記し申候俄羅斯（ヲロシャ）界の事も有之面白く候間一覽の序に書ぬき申候其外南巡盛典なと乾隆南巡圖之事盡く記し有之是は求め候積りに約し置候墨帖も數多見せ申候高玄岱書一枚唐紙に書候二葉求め申見事に候

一來年開講より定日に詩會並會讀等無怠續き候樣に可被致候

一井鈴二子定て繁務には有之たく候へ共宿題に相賴白藤山本子なとも御出候やうに可被成候得益多かるへく候山本氏蓄髮宜祝儀賴入候

一重便に袖玉武鑑（小本）同袖珍大名附（小本）被遣可被下候拙々不自由に御座候すゝ物新板ものなど見申度

候あまりかさばり不申ものは御用狀にて隨分よろしく候至てかさばり候ば大坂銅座植木彌三郎名宛にて町便に御出し可被成候亦は爲川辰吉名前にても宜く上封計被成長崎え屆けくれ候樣口上書御添候へばよろしく候いづれ口上書封し込可被遣候

一島屋御相談大阪迄出し候へば屆き可申候大阪銅座野村仲助か爲川辰吉へ添狀御遣し候へば御用便無之ても荷物幸便色々御座候

一予拾番唐船持渡り候八哥鳥靑音呼（是は新地にて見申候八哥鳥は似鷄）丑三番船持渡候唐鳥の內竹鷄一羽由和尙（一名松鶯鳥）一羽御役所にて一覽いたし候高價にて無用のものにも御求め亦は誂物も有之年々唐鳥持渡り飼むつかしくとかく殞申候此間も靑音呼一羽當地年寄誂置候處殞申候靑鸜哥も羽毛甚見事に候き

一來年大小之由人見せ候はヲロ四八人十來九二排大名霜さぞ物入であらふなと申し候江戶より來候哉未詳猶後便可申入候早々

以上

十二月四日　六日に發申候　蜀山

鯉村子

副啓

一通事彭城仁左衛門（字君寶號蕉窓）詩を善くし余が崎質八絕を和し清人にも和を申付置候由十一月廿九日清嘉慶十年乙丑の時憲書（黃綢表紙）を贈る大小閏月左のごとし（曆計は貴賈のものにあらず通事故に得候也）

正小、二大、三小、四大、五小、六小、閏六小、七大、八小、九大、十大、十一大、十二小、

凡三百八十三日　立春正月五日也

此方來年の曆と小異同有閏月も違へり扨來年歸府には閏一月の日數延候事と今より屈指申候

一十一月廿五日には丸荷役とて淸商の荷物揚候立合に參（新地貨庫）十二月二日には淸舶（丑二番船）全勝號の船の荷揚に參船中菩薩堂の中に毛氈を舖座し居申候淸人自分持用の書畫をも見申候筆類の書附（全勝公司陳國記）などゝ有之ゝゝ記と書し申候記は此主と申事に見へ申候箱等竹器雅甚し帆柱などは畫に書るが如し艙中の柱聯紙にて張置候雲霞出海曙梅柳度江春とあり雅なることゝ也

一十一月廿七日一枝の梅花を見申候一絕「紫菊凌霜

併寒梅先節開年光如此速轉憶故園菜」此地寒暖不齊紫菊の殘れるあり翌廿八日路傍の梅盛なるをみて驚入申候一寒一暖如覆手御座候
一長崎地理書色々出申候見原に寫させ申候

○

十一月十五日附之陳書十二月十一日來由地平安珍重々有之返書は十二月十五日紅毛獻上物附添之町年寄江戸出立に付賴遣し候得共道中四十餘日かかり可申此狀より跡に成可申其心得にて御覽可被成候蘭脚便は大抵二十一日程にて屆き申候
一馬蘭事差置候義進物之事御世話に存候石井氏もかへり候由あの方より書狀越候得共此方よりふさた致候御逢も候はゝ宜奉賴候　年始狀之節歸着土產物之圖可申遣候（挽入たこ狗脊一袋）　日本きり繪圖も遣り候由
一北町二軒大久保清水相替候無之總貫のおば樣丈夫之由何よりの事に候鎌太郎お豐も息才の由に目出度候鎌太郎嘸々成長いたし候事と被存候亦々何ぞ書物にても御遣可被下候
一私儀病後至而丈夫に相成候而安堵いたし候飯田町薰導案じ居り可申候間一書遣し候御序に賴入候去年は癰疽を病み候處當年は是又一向出來不申日々健食奔走いたし候
一七星豬蹄所々御詩候由此地には至而澤山に御座候先便遣し申候もはや屆候事と存候如何效驗有之哉無心元候
一當年入津唐人頭立候もの計名前別紙入御覽候此中に九番船江泰交と申もの書畫宜候由に付紺地遣し置候書胡兆新書も宜候間是亦紺地遣し置候何にても亦々御好みの詩歟文字等候ば書せ遣し可申候李白題詩水西寺の詩も賴み置候
一早梅五律冬日即事七律共面白く御座候亦々一紙御認め可被遣候唐館へ遣し清人の和韵にても取可申候
一吏事鞅掌致候歟何も知れ不申別莊之宴も早春之與も此分にては無心元いづれにも魯西亞早々歸帆之事申來候樣にいたし度候二崎尹に同僚交代も濟不申さはがしく困り入候二崎尹共關談いたし度之旨被申候得共外に遠慮にて出來不申歸府候ばいづれも相談に參候樣懇々被申候官途之俗はいづ方にても同じ事にて候夫故二崎尹之應對各別に深切にて

東事のかけ合等いたしよく安心いたし候猶後便可
申上候

十二月十六日　　杏花園

大田定吉殿

別紙

船名〔菩吉〕　子九番船頭　張秋琴　同財副　江泰交　同　蔣岳初　同安針役　王偉燦　同惣代　林建瑤

船名〔金源寶〕　同十番船頭　許錫綸　同財副　夏雨村　同　錢守和　同安針役　李瑞森　同惣代　黃成懋

船名〔永泰〕　丑一番船頭　沈九霞　同財副　陳升階　同　沈起潛　同安針役　林德海　同惣代　程在郊

船名〔金全勝〕　丑二番船頭　陳國振　同財副　沈啓堂　同　錢雲亭　同安針役　邱有斌　同惣代　吳得玉

船名〔金得勝〕　丑三番船頭　汪晴川　同　揚玉亭　同　劉映堂　同安針役　龔光明　同惣代　鄭得青

船名〔永興〕　丑四番船頭　劉景筠　同財副　陳光烈　同　錢位青　同夥長(安針役)　李造使　同惣官(惣代)陳義彬

船名〔大萬安〕　丑五番船頭　孫瑞章　同　姚靜安　同　王宗鼎

此船五島鯛之浦にて破船水船に成候孫瑞章は損
瑞相と戯言に申候

此外工社(水主の事)等大勢名前略之

一十二月十日に新地精荷役に參候

唐船荷物藏入いたし候を切ぼとき改候也

彩緞樂物夥舖御座候山水の畫二小帖書畫共に宜候

桃源圖に僊源散人程湅書にて予後の印あり字なる

べし貴物ゆへ何卒來春求め申度候

乾坤何處托身安、洞口桃紅上巳山、今古[illegible]

問、定知長到夢魂間、

集宋人句、書靖節先生桃花源記意　僊源散人併題

此詩集句ゆへ面白候起句安字寒韻青所謂孤障閒情

體軟亦、大幅あり絹地牡丹數種妙手也義甚相好し

いふ牡丹の畫に

依稀絳雪駐頹丹、跡異中始一看、可羨文章皆富

貴、誰云骨格是酸寒、眞香好自邀蘭友、秀色寧

僦說橋官、已入廬陵華譜上、不須亭北倚闌干、
二句落寄字一
嘉慶甲子十月作　　　　　　容門驛雲隷

落字の事書き樣面白く候

けふは十二月十日也わづかに四五十日へだてゝ清人の近作を見る事識に太平の代の幸なるべし此一紙は北町佐々木氏井鈴二子などへも御見可被下候

吾身上巳邏辰故此詩面白く寫し置候此日淺草市の如く紛々の内寫し取申候淸人共一見悦ぶ體なり

○

十一月十六日附之御狀十二月十一日屆もはや寒中雨地平安此方寒氣至てゆるく火も入不申日も多く梅花は十一月末より咲此節八重も盛にて候年去寒暖入交り餘寒至て强き時も有之由

一須賀や一件段々御世話手紙二通迄御見せ被成當時之米價にては嘸々むつかしくと被存候いづれ十三經は手放し不申候方に可被成候少々利足等損候而も宜御座候此書さへ濟候はゝ來夏松田伊左衞門交代歸り候節なりと賴み下し可申外に大阪に飛脚便も有之候へ共何とやら江戶へこかし候やうにて見分惡しく候間內々松田をたのみ下し可申間夫迄の御差繰宜奉願候年去松田歸り候は五月末に成可申候春夏二季之處むつかしくと被存候いづれにも又々工夫いたし可申候押附ヲロシヤ一件濟候て歸り候同役も有之候へば是はあまり心易くも無御座候間有體之事打明ヶ賴みたく候此方はいまだ御扶持も拂不申皆々直段宜時節をまち候而用達へ預ヶ置候歲暮金銀計は不足なく殘金も十六兩有之候來春に當年入津之商賣始り候へば會所より納金參候間其前にも壹貫目づゝも取越候仕來り之由之處先當年は入不申候扨々金銀は不足なく候へ共日々せはしく例之異船之御下知遲々に付萬事大取込在行二人で引繼無之候方へ勤候樣にてせはしく候早々片付仕舞申度候兩人行合候樣金五百疋づゝ歳暮に臨時之門入此方も仕合也

一家來一同丈夫にて唯今迄皆勤一和いたし丹重共節位にて此方より瀰望廿八日等肴申附候ぬ內は甚食計外々ぶ格別物入少く仲間壹人不足之處箱持入候日は一月に五六日も有之其日計一日百四十八文牛日百文位にて雇申候當暮仲間へは格別に金壹

分つゝも遺差遣し可申と存候侍は隔日に休み候へ其仲間二人は日々出つめ食焚番もせわしく候平助五助事至而丈夫五助事毎朝／＼御見へに出申候

一明日はもはや淺草市と存候處淋しき事に候歳暮のけしき一向無之候唐船七艘之處壹艘五島にて破船いたし候間六艘にて御座候此商賣來春に成申候予買物等例の安直段にて買ひ申候此聞荷上げを改め（丸備役へ備物のまゝ改候事 雑備役荷物なきりほどき改候事）立合に二三度參り申候終日反物藥種其外々見あきいたし候紫檀之大木蘇木などは眞木之如くにて御慰に一船之積高二番船計有合候まゝ上申候反物等目を驚し申候

一寒氣之節勝手向御世話に御座候乳母事右なじみ候哉何かと物入に遠察いたし候鎌太郎事およねに手をはなれ不申候よし歳暮祝儀之事先日書し候まゝ早春にても一片にても被遣可被下候お冬藥も遣し いかゞ効驗有之哉少々にても乳出候へば勝手可宜候

一築山國府田等御逢候て宜御賴申候築山より先達而手紙來候處取込返事も遣し不申候短日にて取込早々申上候此手紙は早春に届候事と存候猶後便日出度可申上候匆々

十二月十六日　大田直二郎

嶋崎金次郎樣

なほ／＼十二月十五日町年寄後藤惣太郎へ江戸へ出立いたし候に付義助定吉方へ計書狀出申候へども此書狀は四十餘日かゝり可申候間二月頃届可申候今日之狀先に届き可申候

○

十一月廿五日附之御狀十二月十九日に達而地平安（此間は十日め／＼に書狀能届き安心いたし候）

一當暮之家事何かど御世話に存候樂地之方高息に付淺草にて御借請廿三日に長谷部方皆濟之由帳面御取戻し（市川氏消印）當暮上納金之事迄委細承知いたし候先便役所便に封じ込歳暮に届候哉と少々金子上申候定而届候事に被存候（十二月廿五日過は割休故延着いたし候も難計）來夏松田歸府之節は何卒金拾圓計も上可申積に御座候

一米價下直にて嘸々世上六ヶ舗可有之候唐本なと下直之由淵鑑類函などは此方之直段位と存候

一泉屋亭主茶香之事安き事に候隨分有之ものにて承合追而可申進候少々ハムきにも相成可申哉

一奴僕共一和いたし皆働故歳暮褒美長谷川へ百疋奥原增田へ銀三匁平助五助は休日無之出づめ候故百疋つゝ遣候奥原增田は出勤隔日故少々減し申候當ニ可有之歟

一當冬唐船七艘之處壹艘五島沖にて破船六艘に成候端縮緬綸子紬當節は御用方さへ不足綸子は一反も無之端緬縮緬と申もの少々渡り申候書籍も少く拂底に御座候多し繻、緞子に繻貴く不宜もの由

一へるへとわんの上品なる物羯山と申もの有之價三百目位高料なり

一めつらしき物多く見候へども商賣は來春より夏へかけ有之其節ならでは買事成不申何かむつかしく手間のかゝり候様成事にて急の間に合不申候

一最早當年も四五日に成候へとも未だ江戸ゟ御沙汰無之交代濟不申扨々困り入申候早く片附候様いたし度候大方春之代りの同役此節極り候事と存候

一當九月中勝手雜用九拾九匁六分壹厘此中に買物等も有之十月中貳百八匁七分九厘　十一月中百四拾六匁三分貳厘　當月も金貳両計は入可申先此位成事と存候外々ゟは入不申皆々節儉故と存候

一堺町皆附被遣夢のやうに存出し候扨々何も不足は無之候へとも外出不自由にて籠鳥の如く難儀いたし書物にても見不申候はゝ食物計給候事と存候此節短日朝五つ時過出勤引け七ッ前に成候日々出候書類三四十通程つゝ一々讀書餘程草臥申候扨々大阪は暇な事に候ひき此間漸少々は覺申候會所下役計も大勢にて顏を覺へても名は分り不申候

一當月末ゟ梅花盛八重も大分開き此節一重は落花候氣成事に候一昨廿四日少々雷雨夕立の如くにて雪は一向無御座候猶來陽目出度可申上候以上

十二月廿八日　大田直二郎

島崎金次郎様

○

十一月廿五日附之第七便十二月十九日相達寒中雨地平安北町二軒清水大久保等へ寒氣見舞別狀遣し不申能々御傳可被下候

一播陽古跡便覽並俄羅斯事池北偶談より御書拔被下相分り申候池北偶談初卷に今一と處俄羅斯事有之康熙帝黃帳の中にて御逢有之獻貢物いたし候事の様に覺申候いつにても御捜索可被下候

一智廣院殿十七回忌之由年光如流覺申候

一秋中同行之官醫三人千賀道榮、吉田長達、小川文菴　此節歸府被致候千賀は十二月十日出立吉田小川は廿六日出立　廿五日之夜小川吉田共被參離筵惜別申候正月末か二月上旬に東都に歸られ可申其

節被參候ば御進可被成候別而小川文菴殿は病中深切之療治にて本復いたし候間歸府之節一寸禮に御出可被成候（小川文菴下谷三枚橋御徒町に住居致候）いづれも近く候間萬一病人等有之節御頼被成候はゞよろしく至て學醫にて胡兆情をも篤し申候不思儀成る縁にて小川藥治を請候て客中別て心易相成殊に惜別申候

一鎌孫豐女之寫眞朝夕くり返申候豐事はろく／＼覺不申候得共鎌事覺居候によく似申候間定て豐も似候事と存候俄羅斯爾子鏡の書に其子の肖像を持參り詠め申由夷狄も同情と存候

一歳暮も甚靜にて御座候松は大き成松をたて申候年忘れも何もなく扨々寂敷くらし申候餅は先例にて用達方にて春かせ申候（此方四斗俵二俵御普請役一俵ツヽ）扨一生にめづらしき餅を春申候酒も浪花より四斗樽一つ小樽一つ此間船にて着正月の設にいたし何も不足はなく候得共やはり奔走いたし候故鄉之方宜覺申候先々七月ョリ六ケ月は立申候早く來秋にいたし度候

一子九濤楊江秦突と申候は落第之書生にて書畫を善く致し候間絹地頼置申候大力にて文武ともにすぐれ候へ共師匠なくては及第出來不申由書の文鎭に大きなる斧の頭をいたし候は武を忘れざる志の由夫故商賣の事にはうとく御座候和漢共に可嘆々々

一先日申上候山水畫帖（小帖二冊）申込置候處春に成候ば手に入可申下直なる事に可有之候（[illegible]）此節取込燈下早々走筆申候猶來陽可申入候以上

十二月廿六日夜　杏花園

定吉殿

○

十二月五日御認候第八便之書大晦日に相達爾地平安児孫親眷無恙幸甚々々

一改年之書状諸所え相認め當二日便に池永内藤へ頼遣申候是より直に奉行衆吟味役組頭衆へは配り申候右之書状にて取込候處急に宿便出候間宅状並親類中え略状元旦大酔中に認め候間文字等無心元と存候右之段御咄御一笑可被下候

一第七便に書状往返日限委御認め此方にても往返帳に記し置申候十一月中より十日目／＼に大體相達懸遙候正月御用状日限も違候間遲着も可有之存候

一草雙紙等大阪便にて可被遣旨相聞申候處場そくら

下三枚苑は四ヶ所程より到來人々へ遣し申候番附は島崎より參り候て見申候扨々何にても東都之板行物等見申度存候

一正月之内は少々閑暇にて出勤直に引取候間四日に近所聖堂神明唐寺等參詣六日には舟行飽之浦と申候所より山をこへ大村領の内福田浦之巖洞を見に參申候山中梅花開落巖石に岩ひば等有之絶景に候濱邊の景もよろしく一農家にて行厨飲酒亦々舟を命じ海岸を回り候向ふの方には硫黄島（古本平家物語に有之俊寛僧都流され候處のよし薩摩にはあらず）五島なども見え申候波濤如山千帆如畵洞中、屋根ある船と供船貳艘こぎ入れ一町計入申候左え曲りし所より眞暗に成候間早々出申候洞の大さ是にて御察し可被成候入口高さ五六間はゞは三四間にて御座候江島などゝ違ひ歩行にては入がたく船にて入候事に御座候詩作別紙に記申候眞に絶境にて候七日は秋葉山より山越に茅葺たる草むらを攀上り烽火山へ上り申候至て高山にてめぐりの山々ひくゝ見へ海上に五島天草島々見へ申候長崎之町は眼下に見下し申候寛永年中には烽火臺置られ候由遺址有之候夫より山を下り七面山へ參り別當高居院にて酒食を開き薄暮歸醉いたし候七面には加藤清正大明神勸請いたし有之法華宗歟と相見申候八日には諏訪社松森天神妙見社などゝ巡行いたし山水遊覽は無殘所飽満いたし候へとも村童などを見るごとに鎌孫存出し候て頻に動歸心申候乍去もはや當年中と存候得ば格別前期も近き心いたし候

一東海堂星文十一月廿七日沒故之由可惜事に候五老子は快復曾日にも被參候由能々御傳言可被下候

一年始狀所々にて中々一日には遣がたく存候其中に久世大和守殿林大學頭殿へは遣申度差遣申候御序に御屆可被下候堀田豐前守殿へも遣し申度所用人之名も存不申是は肯見へ御對談文言いかやうにても宜候間代筆にて成とも被遣可被下候正月二日三日附にていつにても宜く御座候林家へは鈴木白藤へ御頼可被成候此外同友中へは年始狀遣不申候間御序に能々被仰聞可被下候

一此度魯西亞船渡來御用にて御目附遠山金四郎殿御出之由に候是は學堂御褒賞之節も逢候人にて御座候右に付當時私居候住宅御目附住居に相成候間岩

原同役並御普請役其大方寺院之中へ移居いたし可申扨々大取込と奉存候御徒目附原田寛藏も知己にて宜候

一家僕いつれも皆勤大慶いたし候正月は挾箱持壹人宛松之内雇候而濟申候僕は壹人にても少き方取扱いたしよく存候猶重便に申入候以上

正月十二日　直二郎

外に箱入にて此封之内といたし大阪便に出申候

定吉殿

二白今十二日彌日蓮宗本蓮寺塔頭大乘院（二人に仕切）一一乘院一人本光院（御普請役三人同居）之積に相成候來十七日頃引移申候私は大乘院之方にて海上見はらしも有之扨々遷喬の遷の字識をなし申候呵々

○

發時甚寒到時春色兩地平安

一十一月十五日書十九日發にて十二月十一日に相達申候此返書は當年中之驛使に附し候ば正月中旬頃には屆可申此書は當十五日紅毛獻上物差副之年寄後藤惣太郎へ託し候間道中四十日餘もかゝり東都へ參可申候間正月下旬歟二月初には屆可申夫故番外にいたし置候此書狀より跡に差立候狀先になり可申哉も難計候

一生形三郎右衛門道中にては度々逢申候が此地え參候ては却て出合不致候とかく彼此ともに出入むつかしく禁足と心得罷在候此屆物大久保へ屆けくれ候樣相賴候間遣し候幸便にたのみ入候隨分丈夫に相見え申候榊原氏へ別段書狀不遣候間是亦よろしく賴入候取込いつ方へも無沙汰いたし候段仰聞けられ可被下候

一春來佳興可有之候此方當時歲暮年忘れも何も無之吏事と奇書のみに消日申候鐮太郎阿豐とも丈夫に候哉嘸々成身いたし候事と存候およね殿嘸々世話と存候宜賴入候

一幸便にまかせ初春之祝儀金百疋宛遣し候お冬へもよく〳〵御傳可被下候此方經濟は隨分宜舗歸府之上借金等拂可申品により松田氏歸府之節賴少々は下し可申候嚢中に苦無之計は遠國御用之ゝ德に御座候

一早梅其外佳作面白御座候閑暇之節和し可申候

一唐山緞物亦は藥種等之包紙雅なるもの故此間精荷

役出役之節唐山荷物唐人五六十人ヲ改いたし候事立合もいたし置候まゝ御
慰に上申候外に長崎畫少々錄太郎へ遣候
一霜月下旬より當月に入所々早梅盛に御座候八重も
漸開申候扨々年光如流覺申候早く熟梅の時をも過
し再び菊花を見申度候好奇の僻も奇物にあきゝ果候
間鶯谷之一隱吏とにさしこし讀書小酌をたのしみ
申度候山水も奇書畫も最早左のみに存不申候本膳
後の吸物をみる如く胸につかへ申候猶後便可申入
候早々以上

十二月十二日　杏花園

鯉村几下

猶々東海道中勢州四日市にてもらい申候畫本御慰
に入御覽候よほとおかしく書き申候以上

十二月五日附之御狀十二月晦日來其節は寒中兩地
平安親類一同家內小兒いつれも壯健珍重に候
一上納金御世話に候是は芝氏計賴にて宜候きいづれ
も濟候事故宜候池永なども能々申候樣申來候
一去暮御目附遠山金四郎殿被仰付候由にて當時岩原
御役宅は御目附住居御徒目附御小人目附共同長屋
住にて明渡し候に付急に修復申附本蓮寺と申候谷
中瑞輪寺隣之寺の塔頭大乘院へ當十七日頃移轉い
たし扨々大取込御察し可被下候乍去不思議に同宗
之寺院へ引移候事自德院樣抔御存生候はゝ嘸々御
悅ひと被存候右之寺に今日見分普請方にて所々修
復いたさせ佛壇も和尚も本寺へ引取明渡し申候扨
々めづらしき事に御座候去春は牛込なる鶯谷へ引越
當春は岩原なる本蓮寺中へ引越申候乍去至て高みに
て海上五島琉黃島邊迄見はらし唐船ヲロシヤ船目
下に見候事御旗曼荼羅も入可申と獨笑いたし候門
前は濱邊にて魚市有之岩原なる可宜候へとも和尚之
樂を失ひ可申と大笑に御座候
一舊臘經濟は嘸々六ヶ舖可有之候と遠察いたし候十
二月六日便之節金子少々封し込上申候定て晦日前
に屆可申哉當春に成候哉と存居申候
一當地も御目附御出は近例天明六午年寬政三亥年御
改正之節のまゝにて大騷き兩奉行衆も家來もあま
り悅氣には無之申當四月五月頃迄に濟候へば可宜
候へとも何かにつけて六ヶ舖可有之候誠に此節之
取込難盡筆紙候乍去病後壯健家來いづれも皆勤に

て宜く御座候猶後便委しく申上候今日も早朝ゟ役所へ出又々鋼鐵の封開き地迄十四五町參り又々寺地見分八町計歸宅後寄合大阪狀江戸狀等認め大草臥早々申上候以上

正月十二日　　大田直二郎

島崎金次郎樣

○

第八便之書十二月晦日來候儀は此間大阪便に差立候正月十三日出之狀に申遣候此地春來暖氣候得共兩地平安ニ孫家内無恙北町淸水大久保へもよくよく賴入候

一御目附御發駕日限未た相知不申候得共岩原役屋鋪修復のため同役御普請役とも不殘引拂明十七日彌本蓮寺（岩原之内）諸頭大乘院（表ノ方大田 裏ノ方松田）仕切竈を別ち候て引移申候人夫も私共壹人に拾人宛出申六七町も西之方へ移り高みにて眺望宜鋪御座候僧從は持佛を引候て本寺へ參り明渡に御座候唯今迄居り候所よりは大に狹く候へども中々氣を轉じ候而宜候乍去一刻も早く御用相濟同役交代濟候樣にいたし度松田之代りは大方もはや可被仰付候

一大阪便に近作等遣申候亦々少々認め上申候

一春來いまだ便無之松田村田は去九日江戸御用狀便に宅狀參申候き此度之宅狀は繪草子にても入かさばり跡に成候哉と被存候芭蕉翁が「蓬萊にきかばやいせの初便」と申候も體認いたし猶後便と早々以上

正月十六日　　直二郎

定吉殿

猶々舊冬銀之介殿よりいで揚枝澤山被下扨々重寶いたし候よくよく御序に禮賴上候取込別段不申遣候被仰下候唐人書之事承知之旨可被仰遣候以上

尺牘第三

長崎よりの來狀

正月十八日附之書狀差立候處右夕方に十二月十六日附之書狀第九便到來亦々廿二日に十二月廿五日附之書狀飛來當年之初便連綿相屆南地平安目出度存候此方相替候事無之

一當月十七日に岩原鄕之內本蓮寺中大乘院へ引移申候疊替其外勝手向等疊建具湯殿迄市中入用也出來跡は僧徒え被下其外にも銀子にても可被下候間當時追立られ候は可爲難儀候得共、體貧院大破に及候處淸潔相成候て僧徒は可爲滿悅此方も少々之功德にも可相成候但表門より公然として肴を買入候は少々氣之毒に候折々幸便も有之候て自由軒にて宴會いたし候心持に御座候呵々

一先便上候俄羅人圖之秘物早速御寫取御返却慥に落手いたし候

一七星猪踏相屆候て專ら藥用之由効驗之程如何に候哉

一高雄山鏡銘本町より屆候由

右者第九便返書

一菊池角右衞門殿より醫林纂要序之事申來候由承知いたし候近便遣可申候

一拙書之命題之事承知いたし候是亦後便可申進候

一吉見弟子由木氏拙者門人之贄書上置候處御褒美銀被下候由重疊之事に候是は吉見え此方より可申遣候

右第十便返書

正月廿二日認置　　杏　花　園

定吉殿

第九便　定吉壹封

島崎壹封　馬蘭亭二封　佐々木壹封御沙汰書寫共

新樂壹封　お冬一　お幸一　お香一

井上佐左衞門壹封　吉見壹封

第十便　定吉壹封

島崎壹封　吉見壹封　門人御褒美之事

歲暮餅舂之事經濟　日出度候强飯珍敷

何かと御世話に存候　箸紙參帖

香子壹封

鈴文壹封原田氏書狀慥に請取申候

祕書附入　　中村與三郎より一封
久世大和守殿使之事　　芝爲次郎一封
右之書狀共慥に請取申候兩三日別て大取込熟覽之上後便返書遣可申候
一定會狂歌點之儀承知之旨馬蘭へよく／＼被仰可被下候何れにしても四五日前引越大工來候て修理最中御用向取込匆々
一遠山氏廿日頃出立之由二月末迄には御出と被存候左候得ば萬事相濟可申原田氏も知己にてよろしく揉樂罷在候何も／＼後便と早々以上
正月廿三日　　直次郎
定吉殿
二白此方より十二月末正月初め差上候書狀追々相屆可申候

○

十二月十三日之番外大坂便正月廿八日延着子十二月十六日出第九便正月十八日來子十三月廿五日附第十便正月廿二日來前後に相成候遠き書目も一見此中にて古渡唐本古今議論參は奇書にて殊に人の賂り候書故手放し不申候尤追々島崎より申越候趣にては先典物にいたし候にも及申ましくや如何々々掛本五册落手いたし候
一新刻繪草子十五册稿助畫三葉落手江戸之光景存出し候扨々去年より繪草子高價にて定而うれかね可申と存候大方敵討之世界殺伐之風損春色候事に候
一春來匆遽漸居を安じ候風景は誠に奇勝に候得共非吾土之嘆有之候此間之奇事は二月二日唐館内にて例年之土地神祭有之唐人共狂言を致候其日八つ時參り一見致候あらまし別紙入候然し同友其外吉見氏えも御見せ可被成候是は俄羅斯事と違ひ何方へみせ候てもよろしく候扨々一大奇事に候
一正月廿一日頃浦上村邊郊行いたし候處正月初より野邊は一面之菜花盛にて廿日過よりは山吹咲此節緋桃咲申候櫻も早く可有之隣之躑躅紫花開申候何か仙境の如く年華移り暖氣は三月末のごとく寒中無雪無氷此分にては餘寒も不足畏候得共毒熱可恐事に候
一近作如何諸子之春興見申度候押附觀察使來候ば亦々大取込に存候
一髯林叢求序漸構思候間今便遣候宜く賴候尤點竄い

たし候て宜所は直し可申候旨無遠慮申越候樣御傳
可被下候以上

二月四日　　杏花園

定吉殿

○

今日は本蓮寺にて涅槃像を見申候奇々

正月六日附之第十一便同十六日附之第十二便仲春
十日に一度に相達悉遙懐候漸春暖相成候
兩地平安

一正月之天氣御記し浪花よりも元日より六日迄之天
氣記し來候奇事に付左に記す

長崎元日快晴暖　二日晴　三日雨（夜戌刻過雷鳴小地震あり）　四日陰
五日陰　六日晴北風

大坂元日快晴暖　二日快晴暖如二月　三日陰暮より雨夜半より甚し七つ時頃雷鳴三つ計
四日前夜より雨暮に止夜雨　五日陰　六日快晴佐伯氏より來

江戸元日晴　二日晴　三日陰　夜八時半地震　四日雨
五日晴　六日晴

五雜組天部に千里不同風。百里不同雨。と歟有之
候樣に覺申候重便風雨の字御直し可被仰下候奇々

一二月十日初櫻咲申候一重咲の樣也桃花紫躑躅等も

此節盛なり牡丹も含蕾申候具由之作傳遊を存出し
候（卦彩玉中の形字平疊延思）

一唐醫胡兆新當春歸國　光紬二枚許り遣し詩を書せ
申候書はことの外見事也紛々商賈の輩にあらず左
に記す

甲子初秋於崎陽旅館雨後聞蟬有感之作

一雨生涼思、羈人感歲華、蟬聲初到樹、客夢不
離家、海北人情異、江南一路賒、故園兒女在、
夜夜卜燈花、

蘇門胡兆新

人說洋中好、我亦試輕游、掛帆初意穩、風急繫
心憂、漸漸離山遠、滔滔逐浪流、不堪回憶想、
鄉思滿腔愁、

在乍揚帆離山試筆爲南畝先生雅正

蘇門胡兆新

一江泰交號稼圃落第生之由書畫妙也絹地に蘭を頼申
候山水も頼置候先日銀之助より畫かき候唐人の事
頼來候間扇面にても書せ可申御逢も候は宜頼入候
刷牙枝を贈られ于今重寶いたし候

一館內之清人ども予が名を云り譯司より一と通り頼

み候ても至て念を入れ認め申候鶯谷十詠崎鎭八絶等遣し和をとり候積りに御座候唐通事穎川仁十郎彭城仁左衞門柳屋新兵衞など至て懇意に成候間色々彼地の事承り可申と存候

一白藤より八股の事尋候樣申來候右譯司を以て承り追て可申上候地理之書の事御世話に候いづれ奧原に命じ寫させ申候白藤子へ約の詩遣候和作は跡より上可申候取込候間其儀不能候とよく〳〵御傳え可被下候

一十四日開講律詩二十餘首出來候由盛事と存候後便見申度近作の内平仄正しき分少々淨寫可被遣候淸人に見せ可申候

一年始帳一覽藤井順七郞は本所のものなり聖堂學問吟味之頃聖堂え出役寛政八辰年四月支配勘定に成り予より八箇月之兄也評なる人にて御座候御普請役上條源次郞ミ學者之由相樂居申候

一今日など春晴海上島嶼及山々之景色如畫中之信美非吾土之嘆計也出帆唐船六艘浮海上亦々夏は參申候

一監察使も二月五日浪花着同九日發途に候へば十二日頃室津乘船當地え被來候は廿六七日の事ミ相見ゑ申候吏事紛々可想像候

一肥田豐州此頃和歌を見せられ候間書ぬき入御覽候(馬蘭亭吉見氏へもみすべし)豐州激務の暇和歌を好まれ候事感心いたし候横田桑翁門人也

一唐本商賣はいまだ始り不申三月に入可申候由書目入用のもののみ置候端物瀨戸物小間物類明日より始り申候竹のほりもの山水筆立餘程妙工に候間求め遣可申候新渡の唐本之内に琉球國志略めづらしきものにて當時内々かり一覽いたし居申候春明夢餘錄（明代ノコト……）寸珍本珍らしきもの大方御用之方に引上られ可申候其間何れ半年計は會所に預置候間隨分一覽出來申候三月の頃唐本入札濟候はゞ奇書も手に入可申早々以上

二月十五日　　　　直次郞

定吉殿

○

十二月十六日發之御書正月十八日達し十二月廿五日出之御狀正月廿二日來審近狀候其節は寒冷此節春暖南地平安奴僕共無恙相應之僕有之御置候由先

御安堵に候

一歳暮經濟も先相濟可申と存候何かと御世話辱く御座候此方何も不自由無之いまだ持參之物遣切り不申會所へも申遣し不申候間此間はあの方か御用は無之哉と催促いたし候もはや春商も始り候間求め物少々いたし可申處又々當夏商も有之其節は可有之候絹紬少く高料六十日位之由縮絹紬多く候へども不宜候縮緬は御用之方さへ調進無之大廣と申て高直なり幅廣き計有之市川氏御頼ゆへ先夫にても可致哉と存候いつれ絹紬は五六反も調可申候安きものは瀨戸物計反物はとかく高價に御座候唐繻子など三兩位にてたれも求め候もの無之候毛氈之事被仰下是又思ひの外高く候へとも黄色毛氈青毛氈等たのみ置候乍去かさばり候もの故便に遣しがたく當冬持歸り候方丈夫に候雖は大坂へ申遣し當正月十日過に船廻し出候由野村仲助か申來候間大方届き可申土産物はとかく瀨戸物安く候由御普請役など申合例之水張いたし春夏之間に醬油樽にて江戸へ廻候積に候唐棧留一向渡り不申候拂物出候は丶求め可申候

一古堺之狀與原へ遣し候先便申上候古堺母の店賃の事いかゝに候哉與原もとかく違團扇の風に困り申候筆耕出精候ても捗に追付神有之氣の毒に候平助へ三袋之傳言申聞候隨分まめにて候

一地代金十二月廿四日納濟餅も相應に有之由此方にては餅あまり青くかび申候火事沙汰もあまり無之由御同慶に候猶重便に可申上候已上

二月四日　初午なれと甚靜なり

直次郎

金次郎樣

尙々當月二十日頃は御目付も可來原田定藏にも逢可申相樂申候大久保清水北町二軒へ宜賴上候

○

正月六日附之年始之御狀二月十日に延着新春之嘉慶御同前申納候大久保清水北町二軒鎌太郎おとよお富お仲いつれも丈夫の由何かの事に候私儀無相替加年いたし候一體寒暖不揃に候へども暖氣がちにてもはや花盛に可相成候此分にては冬はなき國と覺申候尤例年かは暖成方のよし草などは青く候て秋か春迄つゞき申候菜花一面にて三月末迄有之候由に候

一去暮色々御世話にてむつかしき年も濟大慶いたし候此方ゟ遣候狀中之金子十二月廿九日に相屆き夫々へ御配濟のよし大慶いたし候夫に附奧原申は重ては古堺ゟ色々申候とも當年中店賃月々貳朱の割合之外は御渡し被下まじくと申候奧原此方にて殘りし給金もかりこしなとにてもはや殘金壹兩壹分計に御座候尤筆耕之積に候寫し物いたし候へとも是以少々之義（眞一枚四厘かゝり草二厘かゝり）　何を申も色々のもの目に遮り候間買たきものゝみ多く候乍去隨分精密にてよろしく長谷川增田は眞の質朴にて買物にも心附不申安心のものに候奴僕二人精勤に候

一明日ゟ當春唐商賣始り候反物は羅紗天鵞絨色とろめん類にてちりめん一向少く白紋ちりめんも大廣にて損成ものゝよしされども一端心あて置候緋紋ちりめんは無之候絹紬一端も無之（拂物に有之候はゝ大かた六十匁餘のよし）（是にても可宜と存候）縮みけんちう（三拾壹匁位）少々求め申積に御座候其外土產物にいたし候瀬戸物（茶わん十きんこちよく皿等）下直故求め候てゆる／＼水張りいたし春夏の中に船廻しにいたし置候へば歸府の頃まで土產之間に合申由に候又々此春商賣濟候て一と商賣有之阿蘭陀も參り候て又々一と商賣有之當春之一と商賣にても拙々けしからぬ御用にて御座候中々川々なとの及ふ所にあらず御安心のために申遣し候間御一覽之上御安心可被下候樣可被成候松田氏歸府之節金子ためみ少々つゝ歲とも下し可申候女共などへは御咄御無用可秘々々いまだ去秋之殘金少々有之候

一毛氈十七八匁色毛氈廿二三匁位に存候外々高きものに候かさばり候間夏商賣にて買候て持歸り可申とてもの事黃計に無之五色にいたし可申と存候青黃赤紫かば等至て見事のよしに候

一鼈甲はとかくむつかしく家中へ引上け拂出し候由板にて江戸へ持參ひかせ候ても至て高料のよし笄かんざしなと此節市中拂ものに出候もかんざし貳本にて六七百匁などゝいふ事にてけしからぬ事に候大阪鼈甲屋（三井出居）大みせ有之此方にてつもらせ見可申と存候當地に一軒其事功者成もの有之いつれにも安くつゝ一本金壹兩位之事に申候吉見氏ゟもいづれ鼈甲の事聞合參候御出會之節御咄可被下候いづれ後便大坂便に大坂店を聞合相場を承り合可申北町

お幸お冬なども私だけ申來居候處右之仕合故いつれ御普請役其外も一同當所並大阪に相正し候つもりに御座候吉見へ宜奉願候（吉見方に奉行衆へ直に掛ある人有之頼候方可宜候歟）

一正月十六日に大坂大津や吉五郎船にておとよ内裏雛壹對積出し候由日本橋問屋より届候積野村仲助方申來候大方二月中には届き候はん歟

一御目附二月五日大坂着九日出立之由左候はゝ十二日頃室津乘船歟當廿五六日頃には着と相見へ申候何か市中並改所も大取込にて御座候猶後便と早々以上

二月十五日認（此節之儀に候間更商賣の内何にても御望之品色合迄御書附可被遣候何にても求め可申候）

大田直次郎

島崎金次郎様

猶々色とろめん多く有之候へども用ひ方のなきものに候何色可宜哉御入用も候はゝ可被仰下候縮けんちう中々宜舗ものゝよしに候

一市川氏へるへとわん帶地四つ程と申約束之處へるへとわんは帶にはさんだくのものゝよし皆々申候羽織なと可宜候尤至て高直に御座候猶後便御聞合可被下候早々以上

一鮫は去年は一向無之候處當年は少々有之（位は壹番ゝ五番迄有之）

（私方へ渡候は三番四番之位之處九木渡候間いつれ持歸り可申鎌太郎刀にてもこしらへ遣し可申候以上）

正月廿六日附之書仲春廿一日相達寒暖參差南地平安

一諸眷無恙兒孫丈夫之由大慶に存候但乳母小瘡の由如何いつれ損の卦と存候財悖而入者亦悖而出之理と存候鎌太郎丈夫に候哉北町二軒大久保清水へも宜敷頼入候

一正月十九日大會之由東曲去年分も此度點いたし馬蘭亭え遣し候到來物等承知いたし候

一三鬮之中千賀道榮は十二月十一日發足正月二日浪花に至り小川文菴吉田長達は十二月廿六日立正月廿日頃浪花にて馬田氏に逢候由申來候右之内小川文菴は誠に豪傑にて去から去秋藥を飲み候もの故是へは御禮として御出可被成候下谷三枚橋の由吉田は本郷丸山の方の由是は至て近所なり是亦よき人にて御座候

一胡兆新も當春は歸國故絹地二三枚かゝせ候處ことの外見事に候洪秦交も書を書かせ山水畫帖に入れ

申候時々展翫いたし候
一呉船録入蜀記は百川學海中に有之先年撮壌編 巻下ア
々抄寫いたし置候御捜索可被成候都て百川學海中
此書の並に有之紀行類面白く御座候浪花にて抄書
いたし候撮壌編中にも山水之分御覽可被成候
一集句の詩面白く古詩を覺候には宜敷可有之候柏樹
村之詩一誦懷土之情難忘候千山萬水奇勝といへと
も不如鄕里一田間歟
一鷺谷十詠浪華篠崎長兵衛父子幷門下とも翩々と賦
し來候いづれも面白く候かさばかり候間他日下し
可申候譯司え頼み拙作十詠淸人えみせ申候劉培元
とか申候漢は詩をよく作り候由申候間頼置申候其
外之俗漢とも詩を作り候は稀に候由洪泰交近作を
も乞候處久々作り不申候由譯司申候
一韓西亞横行もの此折本至而難埋にて多く調へ置申
候別封箱入にいたし浪華便に多く遣し可申候かさ
ばり候間此書狀えは一葉入れ置候以上
二月廿五日　杏花園
定吉殿

○

正月廿六日附之御細書二月廿一日來春暖相成候へ
共南地平安家内無事大久保淸水北町二軒相替事無
之由大慶に存候
一乳母小猪之由いかゝ嘸々御困りの事と遠察いたし
候一日もなくてならぬものゝ上去年中ゟ所々手を
盡し物入後と申米價安く不通用之節何かと御差支
察入候松田歸府之節は金子十両遣し可申候へとも
先當分之防きにもと大坂便別封に金子封し込廉文
箱封にて遣し可申是は御用狀便と違ひ少々延着い
たし候てもかさばり候事無構候間右之通にいたし
今日同日に差立候へとも文箱封し候故少々はおく
れ可申候
一正月十九日初會大人之由到來物等委細承知いたし
候高彦半樽並に肴挿代壹分二朱參候由此度書中禮
申遣候
一甍蕎騷動一件並連歌のむだにて江戸の事思ひやら
れ候
一御同僚萩原忠兵衛殿へ出入候利吉と申ものゟ永田
庄左衛門と申ものへ届狀早速用達中村作五郎へ申
付遣申候尤返事も取次可申旨申遣置候間左樣御心
得可被成候

一御目附も廿三日小倉泊にて廿九日矢上泊晦日着之由先觸來候又々騷鋪成候由此節も追々冬船之唐船出帆等にて事多候處又々大取込に候も去秋ゟ當年のやうなる多用の年は無之由皆々申候

一松田伊左衛門交替藤井順七郎（本所住居）も此節もはや出立四月上旬には來り可申左候へば松田は四月中旬出立と存候成瀨公は同役村田なと一所に御目附御用濟出立之由に候へども少々歸に成可申哉いづれにも早く片附靜にいたし度候乍去遠山公も原田氏も知己にて安心いたし候外々にても以之外心遣ひいたし候早々以上

二月廿六日　直次郎

金次郎様

猶奴僕共いつれも丈夫皆勤與原へ御傳言申候以上

○

二月六日之書狀同廿九日來兩地平安もはや雛到着賑に存候

一御普請役上條源二郎へ書物御託し之儀承知いたし學者之由に候いまた不知面候

一乳母も再出來候由先々安堵と存候二兒健い由何ゟの事にて如雜費則不足論候大久保淸水牛込二軒無事可祝々々

一藝侯より白金壹枚來候由承知いたし候

一昨晦日四半時頃御目附遠山氏到着立山御役所にて謁見夫ゟ岩原御やしきへ參申候先日迄此方假臺所にいたし置候處奇麗に修復出來廣間になり其所にひかへ居候間獨笑いたし候原田寬藏にも逢候處大封の諸物持參いたし候と申候是も大取込いまだ請取不申候一兩日中には持參いたし候積尤此方と出會候も出入甚むつかしく候處御目附へ伺候處舊遊の事不苦旨被申候間來駕候て劇語いたし候積りに候節何早々俄羅斯人鎭臺へ呼出し御糺し有之積に候珍らしき事に候乍去大取込に候

一鈴文ゟ要用之事申來候間返事遣し申候宜く奉賴候

一諸所より參候書狀請取計相記し申後便に返事遣可申候

飯田權之助　お冬　お香　逢坂御やしき朝倉ゟ

楢原氏詩上申候　吉見　芝居番付入來 御序によろしく御禮

一島崎氏へ申入候去二月廿七日出の大坂便 旅狀箇入 金三圓遣し申候何分宜賴入候當春は米直段も下直物入

も多く定て所々さしつかへ可申候當年御用勞疲いたし候へとも是計は苦勞をのかれ申候松田歸府に又々下し可申候

一市川氏ヘルヘト帶の儀（帶は宜と申有之又はさんきんのものとも申候先便申上候）尤ヘルヘトソン一反にて金五兩餘いたし帶は二十筋計も出來候由夫故買候ものも見合たちあはせ候由相手なければむつかしく色は黑の方可宜候いづれ歸府迄には申合出來可申ことの外丈の長きものに候色紺紅紫綠等有之候へども黑より外はいたしかた無之候羽織丈は割合有之先々取置可申と存候匆々

三月朔日　直次郎

定吉殿

正月中旬出之番外狀原田氏へ御託し被成候處原田二月晦日着にて封狀は三月三日相届卦引本十冊共原田持參委細面晤いたし候兩地平安大祝々々

二月十六日發之狀第十五便三月九日に相達委曲一一覽仲春杏花園集之諸作面白候原田氏持參の中にも正月開講諸子之作若晤談一卷閲し申候來會の諸子へよろしく賴入候今日ことの外取込いつ方へも書狀遣不申候

長坂與右衞門　吉見狀　越後高橋周藏狀　お冬文

久世公請取

右一々落手いたし候吉見へ久々書狀無沙汰に成候宜賴入候北町二軒大久保淸水小川町共無替事兒孫壯健大慶いたし候

扨去秋よりの魯西亞使節も當三月六日七日九日と三日立山へ呼出し有之獻貢物は去りそけて御請無之先年の信牌御取戻り來り漂流人は此方へ請取申候此國え以來は參るまじき旨東都よりの御教諭文並奉行よりの諭共に七日によみきかせ此方ゟ綿二千把米百俵鹽二千俵被下候旨七日に被仰渡候處彼方の願の江戶拜禮も不叶交易之願も不叶獻貢物も不叶甚歎息いたし候而此方よりの被下物請申まじき旨申し候處通詞を以色々御諭有之漸九日に請取難有旨御禮を申述終には感服いたし候顏色にあらはれ申候扨々日本之光輝發越希代之事を一覽いたし感淚いたし候去りながら是鎭臺肥田君去年ゟの丹誠にて所置一つとして違失なく此度の禮式之

次第も獨斷に出候而御目附ら御出候處早速事決し國家之大事僅に三日に相濟候事感心いたし候七日之御教諭文和文にて長き文を肥田君高聲に讀み聞せられ候處滿座盈レ耳ヲロシヤ人も小首を傾け恐入候樣子に御座候き成瀨遠山二君儼然として列席の體東都之御威光は遠國にありて却而勢強く候事今更驚入候社中の諸子へも御咄し可被成候委曲後便記し可申入候席圖計先入御覽候先々尋常の人へは御見せ被成ましく候扨々愉快之事に候き書見へも御みせ可被下候以上

三日禮式之次第委く記し置候間後便可入御覽候奇々々々

三月九日　杏花園

定吉殿

先生の書簡中於松前魯西亞人へ御諭書の寫一通ありたるゆゑにここに錄す

寛政五丑年七月廿日於新部屋御直松平越中守殿久世丹後守高尾伊賀守へ御渡ヲロシヤ船入津等の義に付て御書取

一魯西亞人へ信牌渡候迚九州・同浦續にはおよぶまじき事但長崎へ預り候平戸五島しま原などの類松平筑前守松平肥前守は勿論右等之面々取計魯西亞國願によつて長崎へ入津一船の信牌被下候間入津いたし候儀も可有之候然時は和蘭陀船入津之時之心得を以人數等可遣旨抔輕く達し置候儀は子細有之間敷事

一船遠沖に見候はゝ早々通辭幷（紅毛人の内にもリユシ語覺候もの乘組）其外役人二三艘に而乘出し魯西亞船信牌之義等も改之猶改め差圖の上入津を可免に付船がゝり致し候樣申付長崎島々之内相應船がゝり相成候場所へ船をかけさせ尤番船にても番人にても爲附長崎御番所其外御堅等手當宜節入津爲致可然事

一入津之上は和蘭陀人取扱に准じ然るべく候尤東埔寨等之船入津候節の取扱も可有之哉に候得者猶相糺し體段宜被取計候

惣而外國の取扱は體段第一にて御武威御仁惠共に行屆き又侮り不申樣に一旦申渡候儀等俄に變し不申樣且地下の者猥りの儀無之樣可心付筋に候江戸へ抔從來の往來にて餘り持重りいたし候

儀も候はゞ右等をば程能簡減しかし又紅毛より
も大國に付野鄙に被召扱候樣に存候ても如何又
珍重致し候樣にも取候得ばはじめより主客の勢
ひ相察し候是等の鹽梅能々可被心得候事
前文之外之大名迄云々相違候樣にて人情動き殊に
いつ入津の期も無之上は如何に付不申渡可相濟哉
と存し候九州邊大名より家老其外之人數出し不申
候共御手薄之義者有之間敷哉と存候是等は土地に
附候義俄に人情を動し候も不可然かねて申渡し置
候ても人情を動し如何に候能々心得被取計可然事
一右西國へ申渡書付うつし見せ候間長崎奉行兩人へ
覽致し可被置事

信牌

おろしや國の船一艘長崎にいたるためのしる
しの事

爾等諭すむねを承諾して長崎にいたらんとす抑切
支丹の教は我國の大禁なり其像および器物書冊等
をも持來る事なかれ必害せらるゝ事あらん此旨よ
く恪遵して長崎に至り此子細を告訴すべしなを研
究して上陸をもゆるすべきなりそれがために此
張をあたふる事しかり

石川將監書判
村上大學書判　此度
政府の指揮を奉して　あだんらゝさまん
給ふ　わしれいろふちふに

寛政五年六月廿七日

朱御印
信牌之御文字
御印同斷

兼ての通信なき異國の船日本の地に來る時は或は
召捕又は海上にて打拂ふこと古へよりの國法にし
て今もその掟にたがふことなし縱令我國より漂流
したる人を送來るといふ共長崎の外の湊にては上
陸の事をゆるさず又異國の船漂流し來るは兼てよ
り通信ある國の者にても長崎の湊より紅毛船をし
て其本國に送り還さしむされども我國法にさまた
けあるは猶留めてかへさず亦國初より通信なき國
よりして漂流し來るは船とも打くだき人は永く留
めてかへすことなし去かれども遙々我國の人を送
り來る所の勞をも思ひ且は我國の法をもいまだ不

辨によりて此度は其儘かへることを許さるゝのあいだ重てはこの所にも來るまじきなり

一國書持來ることありともかねて通信なき國は國王の稱呼もわかり難く其國の言語も文字も不通貴賤の等差もわかちがたければおのづから其禮の正しき所を得がたし我國にては敬したる事も其國に於ては疎慢にあたらむもはかるべからざれば國書の往復はゆるし難きなり今度漂流の人を送り來るを拒みてさいふには非ず此地より通信のゆるしがたきを以てなり

一江戸へ直に來ることも亦免し難し其所以は古より通信通商の國といふとも定あるの外は猥に不許之縱令押て來る共嚴にあつかひて何れの湊にてもすへて言の通ずる趣はあらずして却て事を害なふべき也此度蝦夷地よりして直に江戸に入來るべきとの其國の王命なるよしをひたすらにいひつのりて今告しらする事の趣にたがひなば却て其國の王命にもたがふに同じかるべし如何にとなれば異邦の船みゆるときは浦々嚴重にして或は捕へ又は打拂ふ掟なれば交りのむつましからん事を乞求て却て害を招くにひとしかるべしされば其國の王命にもたがふとはいふつべし今かくの如くいひ諭す件々の旨をもうけひかずばこと／＼く搦とりて我國の法にまかせんとす其期に臨みては悔思ふとも詮なかるべし

一爰に江戸官府の人來りて我國の法を告知するは漂流の人を遙々送來る勞をもねぎらひ且は其國の人々をして事のおもひをあやまたせじと也送來る所の人は元より江戸官府の人に渡すべしとの旨をうけし由なればこゝにてわたさんも其子細あるまじされど我國法によりて其望所を許さゝれば又送り來る人をも渡さじといはんかさらばうけとるべきにもあらず我國の人を憐ざるにはあらずといへども夫が爲に國法をみだるべからざるがゆへ也此旨了解ありてその思ふ所にまかすべき由也病ありて不速來漂流の人二人も又此所に送來るといふとも重ては此沙汰に及がたし長崎の外にてはすべて取上なき旨をよく可辨なり長崎の港へ送來るとも我國の地方見ゆる所は乘通るべからず洋中を通行すべし先に告しらするごとく浦々にての掟あればお

ろそかに思ひて誤る事なかれとなり
一長崎の港に來る共一船一紙の信牌なくしては通ずる事難かるへし又通信通商の事も定おきたる外猥に許しがたき事なれども猶も望ことあらば長崎に至りて其所の沙汰にまかすべしこまかに言さとすことの旨趣をくわしく了知ありて早く歸帆すべき也

官事禁漏洩兒孫
勿示人　杏花園

○

春暖相成候兩地平安
一魯西亞申渡濟候事は先使申遣候扨梅ヶ崎之旅舘に有之荷物船積濟昨十九日春晴午時頃出帆申時前には湊を出伊王島の邊へ見送り候筑前之船共大皷を打いさましくかへり申候今廿日には大方帆かけ見隠し可申候先々去秋よりの大事一時に濟大慶いたし引續き監察使も出立扨因州公も同役村田も出立可致當月中には片附可申左候へば無程もとの岩原へ引越可申來月十日頃には松田氏代り藤井氏も可參何れ騷々舗候事に候去ながら日月を移し候計にはよろしく最早炎涼一變候へば歸路にむかひ可申候此分にては當秋交代も例之通り濟可申と大慶いたし候出帆前二日頃ゟ筑前之大船小船に紅白の幕をうち警固如畫御座候いかなる魯西も驚き可申と存候昨十九日は幸新地唐人共貨庫へ出役海上近く梅ヶ崎の隣ゆへ使節梅ヶ崎を出候而筑前之小舟にのり夫ゟ大船へのり上り例の二ッ首の鳥の旗おしたて旗持は舟屋形の上に居り申候を見申候夫ゟ魯西亞之本船へ移り申候本船帆柱三本三段に臺有之其臺の上に魯西亞人立居申候是固めの氣味歟其臺の名をバランダと云ふ是よりカムシカットへ歸りし由其船中之用意に飯(パン)を持參いたし候パンとは麥粉にて燒き食し申候此入用計も銀十八貫目餘かゝり申候殊之外取込匆々申入候皆々よろしく賴入候
以上
大取込いつ方へも狀遣し不申宜く賴申候

三月廿日　杏花園

鯉村子へ

二月廿五日附之御細書披見逐日暖氣成候兩地平安

一初雛二月十八日屆候由海上無恙間に合候段致大慶
候
一大久保淸水北町二軒いつれも無事之由猶宜賴入候
一乳母も居馴み候由御同慶に候小兒共嘸々成人いた
し候事と遙想致候疱瘡の用心々々此間原田定藏歸
府之節テリヤアカ一器遣し候半斤有之候あまり澤
山に候はゞ外へ四半斤御讓り被成候も可宜候
一二月御借米之價下直成事に候
一屋根普請井戸普請等嘸々物入之事と存候松田交代
も四月十日前には參候左候へば松田も出立六月初
に而歸り可申候
一妙栖童女幸善院遠忌御世話と重藏へも咄し申候
一辻忠左衞門沒故之由驚入候扨々可惜人物に候戸田
氏南町へ引移子供も多く有之由承及候跡にても出
來候哉平助も驚入よろしく申上候樣申候
一上條氏へ御たのみの物押附御屆可申御餞別御尤に
候
一狂言繪本面白く候角力喧嘩大阪ゟも申來候

右返書

一おろしや一件も無滯相濟御目附も三月廿五日出立
廿七日に因州公出立同役村田も歸府致候（二年詰之上半年つめとし候）扨々少々惡物にてこまり候處歸り候而大慶いた
し候市中にても大悅に御座候何か評判あしきもの
にても當地奉行の方もあしく江戸もあしく半年詰
こし候而御手當の事も江戸ゟ一向無沙汰當地奉行
もきの毒にや月割にて心附致候をも不足と存色々
ねだり事申故甚豐州も立腹に候き
洛陽ものは欲ふかきものなり餘程之變物にて候き
歸府等參候はば定吉逢候に及不申候事
一因州公より山水畫帖二册もらひ申候是は唐人持渡
候而直段出來不申已に持歸可申處因州公御買請候
而私へ被下置甚難有存候扨々よき人にて御座候歸
府之上は近所故必々屋舖へ來候樣約束いたし候右
畫帖は誠に奇事にて當地之ものも感心いたし候
一豐州公もすさまじきものにて此度の一件も誠に獨
斷にて決し申候遠山なとも參り候へとも一向無議
論豐州へまかせ去年ゟ申一件無事相濟大悅に御座
候此頃は嵯峨樣之手習と詠歌蹴鞠に御座候明後二
日は巡撿に出兎狩可有之と申候私も罷出申候是は
めつらしき見物と存候乍去市中評判はとかく因州

を譽申候

一昨廿八日本蓮寺ゟ岩原御役宅へ歸り候處御目附住居之跡へ入候間甚奇麗に成八疊三間十二疊一間二階二十疊計表座舗立切置候へとも是亦三間にて二十疊餘臺所納戸等手廣く雪隱なとは一間半四方位本陣に泊り候心持に御座候あまり廣きも居所にこまり申候大笑〳〵

一絹紬此度拂底にて漸く拂物調候處一端にて七十二匁つゝ三端求め置候商賣に出候は七十四匁のよし拂物之方貳匁安きと申候尤一端にて壹疋に御座候縮絹紬ゟは德用のよし何にても江戸にて承り候より直段高く御座候人馬平安散など市中にて買候へば一つにて壹匁五分位に候絹紬當夏の唐船に持渡可申哉と待居候

一金子方ゟ毎々御沙汰書寫よく〳〵御禮賴入候別段返事遣不申候

一大坂便先便に金三兩遣申候大方屆き可申候

一築山御逢候はゝ宜賴入候あの方ゟも此方ゟもぶさたいたし候

一米價之咄計は此方にて一向無之其上用達方へ銀子遣し置候而毎月晦日〳〵に惣勘定いたし日々小遣帳にも用達方にて附候間去年ゟ金錢とも手にふれ候事無之用事辨じ扱々めつらしき事にて律僧の心持にて大笑いたし候萬々後便に申上候以上

三月盡日　大田直二郎

島崎金次郎様

○

三月十六日發之書四月十日に來披見いたし候家眷無異慰遙想候私並丹治重藏奴僕兩人無事に候

一増田長藏儀二月末ゟ伏枕當地醫師眞野三圭信田圭膳針醫梅部等療治いたし看病人も壹人雇附置候處養生不相叶當四月十日七時頃致病死候扨々可惜事に候先例之通永昌寺へ（禪宗岩原役所之隣）葬送いたし法名實悟了參と附申候右に付奉行衆へも御屆出し江戸へも屆書出申候當地詰同役御普請役家來用達筆者等麻上下にて供いたし重藏も參り見候處急度いたし候葬式のよし築地の伯父へも便次第爲御知可被下候嘸々驚可申五助事同國にて家内の樣子も能存居申候故圭靑沼氏へも御序も候はゞ爲御知可被下候葬地も山にて候崩れ候間地面よろしき所を撰ばせ瓶

も水瓶一番にいたし板蓋針かねにてつくい塗にいたさせ申候今迄同役家來病死と雖も加程には無之と皆々申候石碑も面に法號横に年號月月を記し背に行書にて

死生命、殀壽夭、吁從者、歸黃泉、其在世、三十年、生伊豆、沒肥前、名長藏、氏增田、

南畝子題

柳文に如此間々有之候間如此記し申候石碑料錢四貫餘に御座候病中々藥代葬式石碑料地面代月牌料等にて貳百七拾餘匁相かゝり申候扨々是非もなき義に候跡へ子供にても抱小侍にいたし候積りに候以上

四月十四日　　認置　　直二郎

定吉殿

金二郎樣

○

三月十六日附之書四月十日に相達慰遙念候此地寒暖不揃蚊と蠅計澤山に御座候

一大久保北町二軒淸水家内小兒共壯健之由一段之事に候

一絹紬拂物有之三匹求め置申候壹匹價七拾貳匁　カキ 尺幅

一尺六寸二分
長サ五丈三尺七寸

去年なとは松田拂物を調候に五十二匁位のよし俄に直段高直に成候由

一鼈甲之事先便も申遣し候此間文の黑き所多き惡甲（惡甲の大さ菓子盆程なり薄きことセンベイの如し）唯壹枚此間拂物に出候處九十匁餘と申候右にて櫛に成候哉簪に成候哉素人にはとんとわからぬものにていづれ簪に仕立有之候方丈夫成ものゝ處いづれ二本にて六百目以上と申事にて大阪之方承り合可申年々鼈甲も少々宛渡り候處よき所あしき所に不構皆々奉行衆之方へ引上げ家來へわかち家來方にてよき所は取候而其跡を拂物に出し候よし夫故鮫と鼈甲は迚もよき所は此方の手に入不申候由鮫も當年よき所十本計有之皆々上へ引上げ市中此方買請候は一向之惡鮫なり棧留は一向無御座候若又夏船なと少々持渡候ても右之通之事故中々此方之手には入申まじく候縮緬などは御用之方さへ年々不納に御座候毛類計澤山に有之候由申し候

一黒ヘルヘトワン 壹反代銀三百五拾六匁五分 五つ割にて羽織に成候よし割合に入候樣にと申候間何も入用も無之候へども求め置候五割七拾壹匁三分なり是は下直と申ものも有之其外何もかも江戸にて申候とは相違にて皆々高直に候藥種程下直にて高直に成ものいなし夫故元代極め之外買ふ事成不申候

一瀬戸物類土產に可致と四斗樽につめ當月廿日頃舟廻し出し候夏秋之間には着可致候是も大坂にくらべてはあまり安く無之候

十錦猪口五十　染付同十三　盃茶碗十

十きん五寸皿十　同小丼十　青磁内もやう茶碗

三十　首尾よく着いたし候へばよろしく候

一唐人に書畫頼候ても中々たゞは置れ不申禮を遣し申候扇十本位にても何にても同前小紬一束位遣申候

一茶香の事承知いたし候拂物たのみ置可申候テグス南鐐分程市川氏頼候由承知いたし候是又買候事やかましき物にてみだりに買ふ事成不申候間頼置可申候

一米價段々下落にて嘸々困窮不通用察入候金拾兩松田へ頼可申存候處中風之氣味にて言舌歩行むつかしく候間御普請役辻民右衞門同道歸府に付是へ相頼可申存候も是は上野車坂近邊い人にて半年在勤中至而心易いたし候間相賴可申岸氏にたのまれ候唐紙一束松田長持へたのみ入申候

一奥原店ちん之事御世話に存是も少々眼かすみ候而寫物等も休居申候とかく天草上白米に鮮魚にてこなれあしく候間水工のあたりのみにもあらずもたれ候故の事なり長藏なとも去暮より少々心持あしき故歟食事後大方ねて計居候故大病に成候事と存候五助平助は至て丈夫にて日々出勤歸候へばわらじ草履出精あがき申候故と存候私なとも食後數百歩出役歸りには所々遊行氣を散じ申候故當年は壯健にて食も酒も進み申候此間 交替致候村田家來などは去年四人迄死去當人も去秋煩候由松田家來も先日壹人病氣にてとても供は出來不申通し駕籠も高直故船廻しに便船いたし出候跡にて又々松田殿中風に成候扨々すばらしき事にて早く秋末にいたし歸府を待申候私事は着之節煩候而病を取越し候事と存候此度之松田之事など見候へば長藏は身がはりに立候事歟と一と入殘念に御座候村上清太郎

世話にて十六歳なる小侍（神道者之子ト申候）置可申哉と存候
彼是臨時之雜費入れ佛事も五兩計にをく又々小侍
にも少々かゝり可申候財悖（サカツ）而入る者はまた悖而出
とも申候一升入る袋は一升入とも申候唐紅毛ヲロ
シヤ人に迄名を書留られ畵のごとき山水をまのあ
たり見書畵を澤山得候計りまうけ物にて一刻も早
く歸府いたし度候呵々

卯月十五日　（一昨夜ゟ大雨雷も有之近來之大雨なり蒼瓦たき申候）　在二郎

金次郎樣

なほ／＼米相場引上書附大笑いたし候此上地など
にては一向わかり不申候二三百貫目位の金自由に
て市中之者迄大氣なり

◯

向暑之時兩地平安四月五日附之書四月廿九日來二
月廿六日附之大坂便金子參兩入届候由安堵いたし
候五月幟之頃にも成候鎌太郎お豐とも丈夫のよし
大慶いたし候北町清水大久保等無相替愛度存候

一辻氏跡いかゞ成候哉戸田氏に男子等有之由承候是
にても繼き候哉扨々可惜事に候長藏跡も君川富作
と申十六歳なる童おとなしく候而よろしく候是も
むかしは弓取之島原家之家來にて兄は則勤め居候
由親は當地へ浪人いたし卜筮にて渡世申候村上清
太郎世話にて一ヶ月金壹分貳朱に定め申候

一當地天草米壹石五十三匁位之處此節御用ふち拂候
へば四十九匁八分八りにて候江戸に較べ候へばよ
ろしく候

一此節唐船もかへり又々當月末歟來月初來候迄は少
々靜に候交代も濟み候而大風の吹たる跡にて家居
は廣く夏を凌き候にはよろしく候中々千石二千石
位之住居にて奇麗に人少く上野之院中存出し候事
に候此度之藤井至而よき人物にて候上條は學者に
ておもしろき男に候

一小川町おば樣いかゞよろしく賴入候およねより此
間之禮丁寧に申來候又々よろしく賴候

一松田中風之氣味にて言舌行歩むつかしく候間内々
申上置候金子拾兩御普請役辻民右衛門へ賴遣し候
唐紙一束は松田長持へたのみ入遣し候是は岸彥十
郎殿ゟたのまれ候ものに御座候定吉にても持參い
たし候樣に存候早々以上

五月二日　　　　　　　　　　　　直二郎

金次郎様

○

四月廿七日之廿二便五月十八日に飛來兩地平安大久保清水牛込二軒無恙めせ度候近所内田やへもよろしく頼入候此間定吉方ゟも申越候乳母之事にて市川氏共御骨折之由市川へも宜く御禮頼入候

一絹紬之丈之事被仰下とかく持渡少々漸拂物にて調候方却而下直に候

○絹紬一匹カネ尺 幅一尺六寸二分丈五丈三尺七寸 にて七十二匁に候間三匹調置申候 但江戸表に有之より地あしき由十藏申候

○縮ミケンチウ壹端 カネ尺幅一尺弐寸五分長三丈七尺 會所より除き物にて調候處三十四匁壹分六り 但チヂミケンチウ之方は損之由申候弐反計取置申候

○ヘルヘト帯にいたして二十には相成不申候由十二計に成候由申候

○ヘルヘトワン一反を五ッ割七拾壹匁三分にて羽織だけ出來申候 壹反にては代銀三百五十六匁五分なり

右羽織丈は調置申候

一トロメンハ多く御座候間コキ鼠花色之類調置可申棧留は此方にて奥嶋と申候當夏などヲロシヤ商賣御免無之紅毛ゟ持渡可申哉など申候近來至つて少なく御座候縮緬是又御用さへ持渡りすくなく候羅沙猩々緋類不用之物にて候へども小切れもかはれ候由何にても御望候はゞ尺寸御書付可被遣候へばいづれ外々の品よりは毛類は下直之由是は江戸儉約にて毛類うれかね候處へ毛類計多く持渡候故の事に候當夏船は唐紅毛共に餘程氣をはりよろしきもの持渡可申と申候ヲロシヤ商賣無之を唐紅毛共滿悅之由紅毛にてよろしき鮫など持渡候へば此方之身上にもわづか一二本にて大利有之候よし申候唯々唐船五艘もわたり候へば物價下直にて代物澤山に成て此方のためにあしく候由豐年にて困り候と同事に候夏船三艘位に候へば至而よろしく候由去年冬ゟ船多くあまり代物多く候はあしく候其上外に代物はすくなく藥種と毛類計多く候藥種の多きは甚此方のために禁句に候大笑之事に御座候

一長藏事は至而忠臣と可申哉沒後之諸拂いたし候處勘定用達にて當春中より御扶持拂代錢三拾貫五百

四拾八文銀に〆貳百七拾七匁九分八厘拂米十二俵
四斗入天草米壹石に附四拾八九匁歟
右にて長藏惣入用銀貳百七拾七匁八分壹厘とさし引壹分壹厘不足是は用達香奠之心にて候哉帳面にも不附さて〳〵此樣に勘定よく死なれ候もの歟と用達方之筆者驚入申候切米も二月渡しも大體遣ひきり候由五月分は不請取右之御扶持米代にて病用葬事共皆濟石塔迄出來申候明廿七日は四十九日前日故餅米を買ひ牡丹餅にてもいたし候積に候是は勘定之外に候

一當六月十九日は淨榮寺にて十三年忌いたし候由三月中より書翰到來是は私方ゟ壹封之内へ香奠百疋包遣候間別段香奠には及申まじく候本念寺方へは相應に米銀にても被遣可被下候淨榮寺へは詩計遣し可申候手紙は別に遣し不申宜賴入候

一牛込揚場三河屋酒賣場兵助ゟ會所便先便壹封參申候御序に宜賴入候右之番頭世話にて去冬新川之酒壹樽到來辱存候よく〳〵御禮賴入候

一辻氏養子出來築山氏養子も出來候由宜賴入候

一米價廿八兩米金半分のよし定而世上盆前などもむつかしく可有之候此節任勘計は一生の德にて右樣のいやしき噺一向無之會所銀藏へ立合に此間も參候處藏より藏へかりに移し候銀の箱五千貫目とか申候此間も惣勘定いたし候處去暮之有金二十七万兩餘（外へは尤可秘事）　又々當年も納り候へばふへ申候此地のもの口くせに一寸百貫目かりたいの又は六百貫目かりれば借金の方がいたしよきなどヽ申候六百貫は万兩也番町邊之歷々など中々其樣子借金など夢にも見候事成申まじく候夫故口計大言氣計大きく金をもちため候ものは少く今日はなくても明日は又出來候心持に候扨々めで度國にて御座候鰹も此節多く高直と申候所が百三十二文位おしつけ百文位の由至而あたらしく候酒も二百文にてよろしく猶後便可申入候以上

五月廿七日　直二郎

金次郎樣

松田氏中風故御普請役辻民右衞門へ賴金十兩遣候着の上よろしく賴入候也

○

一梅雨陰晴暑氣漸催し候兩地平安親眷無恙欣慰々々

當年は過酒無之候故にや健食ことの外氣分爽快もはや歸期も四五月に成候而宜候段々申送書附に百枚計三通り認めさせ候由に日々他事出來し八月頃迄に每年仕立候事に候乍去皆々會所之ものへ手分けいたし賴置候へば無間違出來候扨々中々一年計にてはわからぬ事のみ多く大造成口々に御座候

一石井氏くり上御材木石奉行出役之由めづらしき事に候久々出精油絞り酒造等むだ骨を折られ心力を盡し書物計も千萬枚に可及其外所々よりのたのまれもの一々に辨し奔走いたし漸去々年本役に成候さへ遲き事と存候に一時に升進いたし候事天道之取計は格別成事とおもしろく存候乍去ぬれ手で粟をつかみたがる輩此節噺々米直段の小言と石井のやきもちにて役所などにては述懷如山面白くなきはなしのみ多く可有之と遠察いたし候且又當秋も水出候はゞ米價上り可申など口々に可申と大笑いたし候中々米價は上り申まじく候若亦上り候はゞ却而世中六ケ舖成可申是は米の多きにはあらず金をにぎりつめ候もの多き故に候此地は別世界にて金銀融通のよろしき事九州大名之家來入込唐紅毛船來候而大造成金銀出入府中餘銀を以大名へも一年限に五朱之利にてかし返濟も無滯寺院其外窮民等へもかし附候金銀夥舖事に候此間も目を驚し候は堺町人共唐紅毛貨物買候代銀未納にて此地津出候證據のため家屋舖書入候證文を根證文と申候右銀五千貫目にて御座候京都ゟさる町人貳百貫目の根證文を出候へば會所のもの大笑にてたつた貳百貫目計に證文が入るもの歟と申候是にて御推察可成候第一よろしき事は土地に金をため候ものは無之皆々遣ひ候へば跡ゟ又々湧き申と見へ申候二丁町（丸山町寄合町）などの繁昌賑成る事のよしに候江戸もせめて長崎位の賑にいたし度候

一鼈甲漸少々下直成所出可申と存候乍去爪の方却而よろしく本鼈甲は一斤三百目餘爪一斤にて五百目程と申候本鼈甲に爪を少々まぜ右にて漸く四五本出來候由手間代一日五匁つゝ但是は粉を拂候へば手間代位は出候由二三日かゝりて二本ほど出來候よし何分高價之ものに候乍去拂物にて買候よりは此方下直にあたり候など申候先此位なる事が至而下直の沙汰にて又々夏船已後紅毛の品等によりて

相場上り可申とも申候夫に付色々之鼈甲類取よせ見候處眞僞色々有之眞の物は至て色よろしく僞物は色こく黄色に御座候此度初而目利を覺申候家内北町などより頼こし候間せめて一本つゝなりとも遣し可申と御普請役なと一同細工人を用達方へ招き置候而こしらへさせ候積に相談いたし候先方へ遣し候へば眞物をとりかへ候由申候右之通り之事故吉見方頼の方など他人へはうかと世話いたしても代料等たてかへも迷惑其上先方にては安くかひ候積にては大間違に候よく／＼此事仰わけられ可被下候いづれも自身にはかはれ不申候町人之名前にて買申候

一茶香テグスの事承知致候是も自身にはかはれ不申用達名前にて夏船に買候つもりに候トロメン色之儀御書附被下承知いたし候當年はヲロシヤ人商賣やみ候間ヲランダ人大悦ゆへ定而よき代物持渡(奥島も待居申候サントメのことなり)可申と存候久々よき鮫參不申もし參候へば鮫一二本にて大利に成候由申候夏船之様子にて此方身上之大利不利有之由會所のもの申候

一定吉少々濕瘡のよし家内へうつり不申候様御用心可被成候お豐はいかゝ鎌太郎へはうつり不申候哉

一豐州公事扱々物のよくわかる人にて感心致候私事大はむき宦皆々にわらはれ申候　毎日數十通之內よほど評議のつかぬもの仕方なく筆をすてゝ持出し候へば早速わかり驚入申候其上やましき事一向無之てよろしく候先年初在勤ゟ御詰越之節の八朔金七拾貫目土地之役人へくれられ候處土地にてもたゞもらひ候は如何と申して右の金を元代に致候唐船別段商賣いたし右七拾貫目はすへ置右之外に夥舗別段御備銀と申候銀出來御藏に有之候此間も年寄共拜借願候所右之銀は外物故江戸へ伺に不及三百貫目無利足にて十五年賦にかし被遣候間皆々難有がり申候一人にて五百兩ほど拜借日本國にかゝるめせたき國は承及不申猶後便に可申上候以上

六月七日　　大田

島崎樣

○

蒸暑兩地平安親眷無恙兒孫生長の事と存候

此方僕從いつれも達者精勤別而二僕は草履之かせぎ出精し候甚健に御座候奥原眼病もよろしく長谷川無事に御座候扱々質朴には感心致候もはや去年

御用被仰付候時節に成一年のたち候ははやきものにて大方交代名前も來月中には相知れ可申と相樂申候盆後に成候はヽそろ〳〵歸支度を催し可申と存候
一五月十五日御認めの御狀六月十二日届き申候とかく米價安く候由御借米書附委細承知致候辻氏右衛門へたのみ候十圓大方届き候はん松田はいかがいまだ江戸之左右不承候
一中町無盡跡かけ五月迄にて滿會の由承知いたし候
一肥前マトフ布と申もの色々承り候へ共無之候是は豐前より出候シクハ布とか申て紋からのすかし有之布の由一反壹分位のよし二反計も求め歸り可申候
一長藏一件伯父へいさい御見せのよしせめてもの事と三十五日御取計よろしく候此方にても四十九日に牡丹餅をこしらへ諸家奴僕へ振舞申候藤井氏ゟも家來を寺へ遣し香奠等納め候由に候
一夏船又々入津之沙汰にて取込可申候何とぞ三四艘にいたし度あまり多く候へば甚此方のためあしく候由に候
一旅宿は甚ひろく風もよく入申候此程は夜分なとむしあつく御座候殘暑などつよく候由乍去蟲の音紅葉の色つき候などは秋の心地致候植木やゟ菊の類引かへ〳〵取よせかり見申候御奉行も同前なり
一盆前に例年之通り大久保清水へ貳朱づヽ小川町おば樣へも少々にても宜く賴申候扨々會所銀藏之封印とき候節毎々出役いたし候て何百貫目〳〵にはあきれ果申候結構なる國にて日本國中にかヽる通用よろしき所は有之まじく候猶後便可申上候以上

六月十六日　直二郎

金次郎樣

○

一六月十六日附之御狀七月朔日着兩地平安此地之暑氣きびしく夜分別而甚鋪御座候僕徒共いづれも無恙精勤に御座候
一辻氏持參之金十兩相届候由安堵致候右にて盆前拂等濟成丈十月迄御取續き候よし承知致候いづれ八月の間に米價安く候而は物さびしき秋と被存候世上一統不通用之事と存候夫に付ても當地之繁昌金銀融通には日々驚目申候乍去二季拂之國故盆前な

どは拂物等安く出可申と存候すべて物をたくはへ候事は嫌にて明日は明日と過す事の風俗觀樂計工夫いたし候て人氣甚大氣なり

一大石元菴老大手柄と存候去年長崎へ參候小川吉田同日に被仰付候事ふしぎの因縁と存候大久保にて嘸々大悅と存候如仰高禄は五割增位かゝり可申候何にもいたし候ても大仕合と存候

一山口氏狀落手いたし候當年舟行定てにぎやかに可有之候此節湊浚有之折々は右見分として御用船に乘出し候へども御用幟に鎗にては一向不面白と存候內々少々辨當酒など用候へば役人共大機嫌にて御座候每々御普請役壹人と大笑いたし候土人氣のつまる事生得嫌にて此方少々和し候と大悅にて却而出精いたし候面白き國にて御座候西御役所（成瀬居候跡也）普請も始り是又見廻申候此普請修復も大積り八百兩餘浚計も五百兩計金銀は湯水のごとく結構成所也其外職人の元手迄かし遣候事也

一此節ゟ夏氣に成候故歟所々なまのろき喧嘩等有之庖丁にて六十所疵付候など時々白洲も有之吟味之體透見致候中々おかしきものにてやはり大阪流のなまけに御座候叱りてもにらみつけても蛙の面に水のごとく一向針のきかぬ男共にてじれつたき事に候

一最早在勤も百日計に相成候間日々相待申候大方私交代も六月中には被仰附候事と存候奉行衆は彌々成瀬公御出のよし左候へば交代引繼も手間取不申諸事すら／＼と參候て大慶に御座候市中などにても大悅に御座候新規の方にては又々點ちがひ當分こまり候由に候

一食物は大阪ゟは一段珍事に候土用中專らあひるをたべ申候暑中は鮟鱇の吸物第一にてとかく雞ぶたの類を用申候暑中のあんかう扨々氣味わろく御座候西瓜は色うす赤く白く たねは大方赤く御座候鰻（ウナギ）は平日酢味噌にてたべ申候此酢もだい／＼（ダイダイ）酢とて橙をすりつぶし候酢なり一口もくへ不申候鰹のさし身もからし酢計なり

一色とろめん（藍鼠色）求め申積りに候尤つづきとろめんにて無之候へば不宜候由に御座候價金貳分餘の由ヘルヘト吳羅ふくも羽織丈は調へ置申候紅毛船來候へば又々珍物可有之候奥島（サントメの事）持參候はば調

可申候近年ちりめんと奥島は拂底にて候唐船分もちりめん又々少／＼渡り申候御用にさへ足り不申候絹紬は當夏唐船よほど持渡候間又々調可申と存候

一瀬戸物四斗樽につめ候而四月廿日過大廻しに出し候いつ頃着候事に候哉無心元ものに候いづれ大阪にて又々廻船問屋舟へうつしかへ日本橋迄着候事と存候いづれ歸府には馬壹疋多く立候而内かけつづら荷物ふへ候由毎々人々申皮の葛籠等二歩計にて拂物有之に迚もの事に二ッ程を求め可申哉と存候明荷も此地にて誂候へば高價にて御座候由に候猶重便萬々可申上候此節唐船荷物之出役多く取込申候早々以上

七月五日　直二郎

金次郎樣

（長持をかし候は昔の事にて全くはなし）

○

六月十六日發之書七月十二日來酷暑中兩地平安家內一統無事親戚無恙目出度存候

一平助無盡金貳兩御預置候由承知いたし候此方にてかはせにいたし遣し可申候盆前入用に候は丶遣可申と承り候處いまだ入用無之候由申候歸府之時分調物にてもいたし候事と存候日々五助同樣草履出精甚工面宜候去年より兩人共一日も休無之皆勤に付盆前に金壹分つ丶褒美遣し長谷川奥原は休日有之故是又金壹分つ丶遣し候是にて相當と存候新侍へは小菊少々遣し候是又至而靜成性質にて吉見八太郎に似申候一體當地之若き者は江戸と違ひ至而ゑつかに御座候

一六月十九日會之事被仰下先便申遣候處間に合候哉行違ひ候事と存候年々平年には貳朱遣し候近年は大連に成候間二分遣候是は寺之損金物にてあの方にても法事いたし候心得に候

一珍書三葉めつらしく皆々にも見せ申候夫に付米價之むだ書やかましく同僚も三人程引込居候由たわいもなき事あまり增長いたし候故の事と存候高橋八なとも其中に御座候氣之毒成事に候

一奥原へ御傳書申通候眼病快成候へとも餘毒をおそれ書物等いたし不申長谷川同樣隙成事に候

一夏船唐船四艘參り大取込紅毛はいまた參不申候

猶後便可申上候早々以上

七月十七日　　直二郎

金次郎樣

○

七月廿六日附之三十壹便八月廿日到來一兩日已來凉氣に相成候兩地平安○町便にて大阪野村へ御向ヶ相成候大紙包御差立之由押附着可致と相待罷在候

一因州公御發駕は閏八月廿日前後之樣成沙汰申候此方交代は何とそ夫ゟ先に出立いたし候へば宜候へどもいまだ相知れ不申此書狀着之頃は定而其地にて相分り可申候いづれにしても最早纔に相成一日も早く歸府いたし度候

一八月十四日頃ゟ大雨時々夜中降候而俄に凉氣相成候其地も旱魃之由此節は定而雨もふり候事と存候

一富原杉衞門殿賴候もの承知致候私方へも申來候

人馬平安散
小倉柄絲

一小川町おば樣へも微物遣候處御禮にて痛入候此節濕瘡中は勝手元嘸々御心勞の事と存候宜奉賴候お冬濕瘡全快之由又々定吉少々出來候由何とそ歸府之頃には家內濕氣無之樣に存候大久保北町二軒淸水へもよろしく賴入候

一岸彥十郎殿より昨日便有之堀留馬喰町等へも被參候處私任勤先之評判宜候由申來大安堵致候御同慶可被下候

一諸色高直米計下直にて嘸々暮方むつかしき事と存候何分宜賴入候當年は江戸米價にて夏中上方より下し候白砂糖少く砂糖直段引立不申候由申候唐船紅毛船持渡少く候てもやはり下直之由一體之不景氣に響き候由此方收納迄も去年詰合之ものゟは貳三貫目も減し候由十年已來之不景氣成物哉に御座候御普請役なと算盤を入候而泣事計り申し候

テグス貳朱分調置申候茶香も賴置候是は商賣に出不申唐人拵用之品を買候事故六ヶ舖御座候

一生形三郎左衞門病死いたし扨々氣之毒に御座候別紙に法號病體記遣候間便次第被遣可被下候屋舖より爲替は遲く相成可申扨々油斷のならぬ世中足もとのあかるき內早く歸府いたし度候

一此節唐紅毛商賣取込申候絹紬此度は少々下直六十匁近くにて生合もよろしく候間又々三反計り取置申候春商ともに五反に成候とろめんも續き之方丈

ヶ有之二反計取申候皿紗下直に付土産もの、直段不知候而可宜哉と存よほど取置可申と存候瀬戸物類も又々取申候是は船廻しに出し可申候萬々後便と早々以上

八月廿四日　　　直二郎

金次郎様

○

二白僕共いづれも丈夫にて大安心に御座候以上

一八月六日附之御狀同晦日來朝夕は秋冷罷成庭之紅葉色つき申候南地平安其御地も月見頃ゟは定而雨もふり候はんと存候當地は俄に冷氣に成候（暑氣も承り候程には無之大阪位之事に候）

一北町二軒大久保淸水いづれも無恙めせ度候

一八月三日曉嶽院三十七囘忌之由願正寺へ御參詣之由扨々年月如夢御座候絶命之時私も參居候處晝時八時過頃にて井上午睡翁中島彦八郎など列座彦八郎殿は落涙啼泣いたされ候事まのあたりに存出し候乍去年忌は二十一年二十三年二十五年二十七年（二十一二十五二十三二十七ノ相違有之）三十三年よりは五十年と覺候處三十七年とは一向宗之流歟杰かと覺不申候

一唐紅毛船（唐四艘紅壹艘）商賣始り候間絹紬（此度けんちうは下直にて其上よろしく御座候）價（五拾六匁）五反程（四十五匁二反つゝき）也續色とろめん（青鼠）（四十五匁二反つゝきなり）貳反さらさ貳十匁ゟ三十匁迄五反計求め候當春ゟは唐方下直に御座候由申候棧留類は近年一向無之鮫も無之紅毛は當年はさんぐの代物にてさらさ計澤山有之候是も地合不宜候へとも土産物など可宜と求め申候革もはなしや革壹枚求め候積（黃蒔色）是等も入用には無之候へども人のほしがり候もの故切候はゞどうらんにも可成哉

一もはや歸府近付日々待くらし候乍去來九月諏訪の祭禮等にてさはぎ候て無程出立に可成候

一八月廿七日大阪便に扇箱詰に品々下し候內金壹兩遣し候九月六日九日靈精頃物さびしき時分故せめては精進物之類も用立可申哉と存候此方勘定決算いまだ相濟不申候へとも例年にくらふれば不景氣之由人々申候やはり關東之米價三百里外迄響候由申候早々以上

閏八月十六日　　　直二郎

金次郎様

なほ〳〵成瀨公彌閏月十五日出立に候はゝ九月六日便を長崎便之限とし同月十六日廿六日附等は大阪銅座之野村仲助へむけ御出し可被成候是又御用便にて屆申候閏月十五日出立延引に成候は其日割にて御差略可被成候大概廿日程にて候は屆候事

○

一八月十六日附閏八月十四日來秋冷甚候處兩地平安其地雨はいかゝ此地は雨も宜く夜分は餘程寒く成候

一內藤も成瀨公御一同閏月十五日頃立之由江戶ゟ兩度大阪ゟも申來今日頃は箱根歟と相樂申候もはや來月九日ゟ諏訪祭禮取込其上暇乞人々込合可申と今日などは與原と具足櫃等へ書物をつめ申候書物を入候葛籠二つ掛物書畫類入候柳ごり一程馬にて運候積大概之品瀨戶物類は船廻しにいたし候

一御用長持は着類と反物にて大方ふさがり申候絹紬鼠八疋十六匁になるとろめん（細鼠三疋ほど）黑吳羅一反吳ろふくヘルヘトも羽織丈位は取置候縮緬無之絞ちりめん計サラサ土產に可宜と四五反も求め申候

一大久保淸水北町二軒無恙大慶仕候家內とかく濕瘡之餘毒別而七月中鎌太郎少々は出來有之候由乍去此節は全快故爲御知の旨大慶致候早速屋角會所ゟ求め下し候樣に可致候先柳屋ゟ有合候まゝ封し込遣し候吳々も遠方を往來致候水屋と相見申候

一くれ〳〵も鎌太郎事御心添可被下候とかく追込不申候樣可致事猶々濕瘡平癒のため當十五日ゟ廿一日迄七日禁酒いたし自得院樣へ祈り申候幸酒も餘り續候間養生之爲にも可宜と存候猶又壹兩日中之便に左右を相待申候而禁酒之限も延し可申およね殿へも能々賴入候

一先々一ヶ年無滯相勤もはや在勤も一ヶ月計に成食事至而進み宜く去年ゟは一日も引不申僕共も丈夫にて大慶いたし候霜月十五日前には歸府可致候早々以上

閏八月十九日　直次郎

金次郎樣

閏八月十六日附（三十六番）九月十九日屆同廿六日附三十七便九月廿日に相達兩地平安

一吉見儀助議閏八月廿二日同役仰付候由誠に希代之事にて大悅いたし候嘸々淸水御姉樣御悅之事と存

候如仰大久保大石氏共に兩御姉樣御悅と遙想致候ことに外場所と違ひ同僚被仰付候事於私別而難有己身の出世いたし候よりは[illegible]有覺申候石井氏之事を大慶と存候へども是は將來なれば角道の歩を明置候而出たるごとく吉見事は手に持候歩を打て（と）に成候樣の事にて別而當年米價六ヶ舗世中に新恩に當候事内外之悅不過と被存候與力なと減祿候而さへ出役いたし御徒よりも出役きりかへに逢候事此述懐は何卒藥山に一升振舞候而一夕承り度と存候定而出役仲間なと色々こそごと可有之と大笑いたし候系圖御用首尾能相濟役所へ歸り候はゝ雨天之釆一僕のひつぱり等申合も可宜と是計は大悅に御座候

一在勤も廿日計に相成用事如山御座候得共他國へ出立と違ひ大阪への土產物計手近く出し置跡は持歸りさへいたし候へば濟候事故左のみ構不申唯々書物之たのまれ計は例の通困り入申候

一先月末又々瀨戶物人樽一ッ書物入箱に一包長藏物一包船廻し出し候其外調物等大體片附諸勘定も内調いたし候處不景氣之年にても外々御用よりは格別之事に一難有く御座候萬々後便可申上候以上

九月廿日　直次郎

金次郎樣

尚々九月十六日便ゟは大阪銅座へ御出しの由承知いたし候

○

第四拾便四十壹便共大阪にて披見冷氣に至り候得共兩地平安

一去月廿日長崎出立道中無滯當月朔日大阪着いたし候小倉之渡海風に而一日小倉へ逗留先達而遣し候日割一日延引當月十九日江戶着に相成候東海道川支等はもはや有之間舗候

一江戶着之日左之通日傭御やとひ可被成候かんばんは品川にてかし着せ可申候

侍壹人　駕籠の者四人

右之通御座候大取込早々以上

十一月三日　大田直次郎

島崎金次郎樣

大田定吉殿

二白

明四日大坂出立いたし候以上

尺牘終

甲驛新話

夫人間有鼻穴兩下大有穿堀埋共埋共不埋
御坐候者湯島先生連之文句是比而以人間
有毒穴兩故大成有頂天止共留迚不止者息
子飽果親仁繰言例言馬耳風持來辯音思出
四谷果其船軍今早小冊成滑稽書爲梓書林
乙故隨言出放題叙ス

馬糞中咲菖蒲述

序

いたこ出島のまこもにはあらで四谷新宿馬糞の中に
あやめもしらぬ一巻をひろひ得たり朝返りの朝な朝
な茶づる如くによみ流せば力をもいれずしてあらか
ねの地廻りをうごかし目の見えぬ按摩針の聲きく如
く問屋場をとはずして四ツ手のはやきおそきをしり
大木戸をいでずして借家のあしきよきをしればあさ
ぎ染あいたらぬ情もでんふらの味噌ごさ中となりぬ
べしたとひ時うつり客去りむかひの提灯行かふとも
いさゐかまはずいさらごの品川と肩をならべて驛路
の鈴の音たえず玉川の流れつきせずして柳新葉のか
るゝまでこの櫻木の朽まじきにこそ

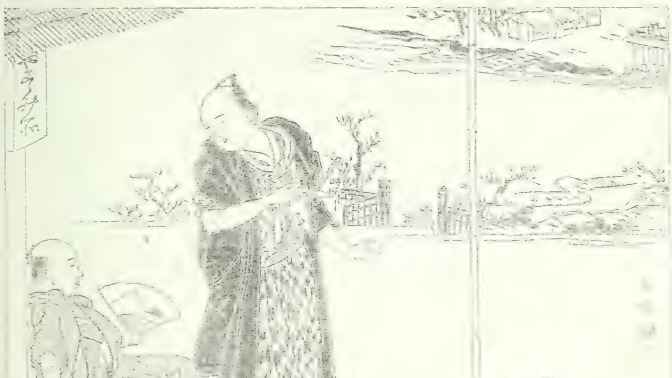
安永四ッのとし次月の比

風鈴山人水茶屋に書す

目録

大木戸前り馬士のはなし
友の出會
茶屋の體
座舗の哀れ
床の内
隣座敷の様子
きぬぐ〱のこゑ

畢



甲驛新話

大木戸の塵は水責の雫にゑめり天龍寺の鐘は鯛聲にひゞくちやんらん〳〵馬士二人歌おくれへと上なア引いかねゥかソレそうだになア引、アトノ馬士かゐ村のゥ江五右衛門がアよめ女ナア産月だアといつけがどふだアまだひり出さねへかなア　アトノ馬士（大キナ聲ニテ）あんだかハアよんべも夜ふてへ疝癪のゥいてへとつておれらアも張番のしたがうら出そくねたアよ何がはお蚊にはおゑめられるしたゞもいられねへからおゝめ小めのゥしてひどヲ引いやつを二本とられた事よアト四文錢でかサキおゝよアトそりやアはあたけへかん病のしたナア　又馬おうらのゥせゑどへなアゑのこ上なあ小ヲざくらの枝おくりになあア、さへ引、谷粋（藍さびちゞみのかたびら紅麻に白ぬめゑりのゑゆばん帶は黒びろうどにあさぎ小倉を合せたちうや帶呂の山まひ染に桐の三ッ紋付た羽折ひもは駿河打のほそ色はむらさきなれどもさめて藤色かとうたがふ茶つかの少しよごれた脇ざし一本おとし指にしかまぼこ形のすげ笠に白き麻のひもを付てかむり笠の裏に小サキ風車二本さしたり）金七ナレドモシヤヤン金公（もぐさ島さらしのかたびら白あさのゑりをかけたあゐゑゆばん島ちりめんの帶を〆めかたびらの切レと見へて同じ島のひもを付たすげ笠に茶かへし小紋のちりめんの羽織を一處にして手にさげ　但羽折はかくれてみへず　鼠色のたびをはきもちろん丸こしなり）谷粋　金公なんときつい馬じあねへか　金公いつてもふ引切がごせんせんねへ思へば道があんまり悪く成りやせんの　谷商べへ屋が出來てから石をいけへこと入れたからちつとは直つたのさ　金それでもふる時はおへやすめへわたし共か方なんざあふればふるほどよく成りやす　谷道はそのちの事だよゑかしふればふるほどゝはあんまり味噌だぞ　金ハヽヽ　谷なんと金公どけへぞ上らふか　金どふも内がつまりやせん　谷ナゼよかろうぜへ　金堀の内にこもつたともいわれやすめへ　谷おれが瘧へとゑつたといやれな張御符せへ持つけへればおやじはあやなされるハナ　金イヽ、ヱサおやじよりやアおふくろがやかましくつて成りやせん（かれこれはなしの内にほどなく女郎屋の前にさしかゝ

る）谷さあ是からは日かげものだ（とあせ手ぬぐひを出して笠ひもへはさみ鼻から口をおゝひかくし人目をしのぶといふ身をする）金なぜそふたせんす谷そこいらぢうの女郎共がみんな知て居から見付るとやかましくつてならねへアノ今のやつが見つけやアしなんだか金イヽエあれは何屋へ谷いづみやさ金わたし共が友達が和泉屋へ往たといひやしたつけ谷それは小いづみだろう和泉屋も大見せと小みせと二軒あるよ金大見せと小みせはどうして知れやすねへ谷めゑら戸が大みせから紙が小見せさ金何處がへ谷見せの後がさ金ひと氣きりさびれたと聞やしたがそふもごぜんせんね谷ナニサせんてい初中がさびれは氣ねへけれども初ては普請が悪かつたからどの内も大かた普請を仕直して引越〳〵してその跡が明店で有た物だから知らねへやつらが見て悪く評判をしたのさホンニ上總屋の普請を見なすつたか金ナニサついぞこつちの方へはめへりやせん谷聞ねへ階子が黑ぬりだあナ金とんだ事たね何處から出た内でごぜんすへ谷氷川から來たよ金どれがそだね谷ソレそこの左りのさ金ホンニゑへ二階だねソシテあの寺は何ンといひやす大きな物でごぜんすねへ谷あれが大宗寺さ延が又とんだ大そうじだよ金泉水でもあるかね谷泉水もあるが畑もあるおそろしく廣いよ金見られやすかへ谷隨分見られるとも二分いたむと女郎をつれていかれるは金それはおつだね谷せんどもつれて往て笋をぬすんだり何かしてとんだおもしろかつたよやア何ンにしろ一盃のんで往ふじやアねへか（と坂見屋といふ茶屋へはいり）谷かゝさんどふしなすつた（坂見屋は後家持の茶屋なり谷粋はあまり物にもならぬ客ゆへさのみとりはやしもせずたゐがいのあしらいに見へる）坂見屋の後家これは谷粋さんどふなさりましたねつからお見へなさりませんねあなたよふお出なさりましたサアおあがりなさりまし金アイゆるしなせんしナント谷粋さん足をあらいてへ物だね後家あい（立んとする處を）谷どれ〳〵おれが（と氣こなしぶりにたらひを出して水をくみこむ）後ちつとお待なさりまし一寸とわかして上ませう金ナアニ水がよふごぜんす後それでもおつめとふ御座りませふ（といゝながらどうこのふたを取りゆびを入て）是も同じ事た谷ナニよしさ〳〵金手ぬぐひをあげ

ふか谷ウヽかしなせへおれがのは汗手ぬぐひで役にたゝねへ（二人とも足をあらひあがる内に盃だいなど用意して二人が前へ直し置となりの女房らしきをよびよせ耳へ口をあて何やらさゝやく）谷かゝさんかめへなさんなよ後アイけふはあやにく五郎をばおやしきへ遣しました金御亭主はへ谷ナニサまんこう御前だよホンニなぜ入なさらん後どうも氣に入た男が御座りませんハヽヽ／＼　坂見屋娘もと（外トよりかけ來り）かゝさんや／＼後ナンダ御客があるぞおじぎをしろ谷むすめどうした大きく成たの後イヽヱもふどうも形ばつかりでいたづらにはこまりきりますもと（谷粋が持來りし風車を見付て）かゝさんあれがほしい後ナニサあれはおみやげになさるのだ金（風車を取て）此事か谷サアやろう／＼後ナニおよしなさりまし直に惡くいたします谷惡くしてもよしさサアノ／＼後ハイ是は有難ふござりますいたゞきや／＼ヱヽ仕合な（此内に酒のかん出來肴もとなりより持來り則出す後サアお一ツお上りまし谷マアはじめなせへ後ハイ左樣ならお燗を見て上ませうへヱあなた金あい後憚ながら谷金公お先へ金はゐ後お肴をお取

なさりまし谷あいサア金公さそふ金ちつとあげやせうか谷まづさ後サアお上りなさりまし金爰へくんな後さあ／＼お出しなさりまし金是は憚りつぎなさんなよ後ナゼ上りませんかへ谷宗旨ちげへさ後それでもお連立なすつて堀の内へお出なさつたじやアござりませんか谷是は一言もねへわい　三人ハヽヽ／＼ホヽ／＼後さあいたゞきませう金そんならサア後是はもふけつくおむづかしう御座りませふ（此間暫く盃事あり）後こよひは何處へお出なさります谷おらア何處へでも往く氣だがぬしがまださまらねへよ後なぜで御座ります金どふも内がやかましうごせんす後それでもどうせ今からお歸りはなさりますめへお宿はへ金下町でごせんすホンニ何時だねへと椽へ出てそらを見る後モウおつつけ暮ます谷サアもふどふで埒はあかねへお覺悟／＼後何とおつしやつてもモウお返し申事では御座りませんソシテもふお遲ふ御座ります　金（十町がこわいろにて）モウせひに及ばぬ谷どふでもかゝさんのすゝめはきゝめがあるわいきまり／＼トキニ何處にしようの金カノ上總屋はどふだね谷普請ばかりで玉が能ねへ後橋本はへ谷ま

つぴら御免だ 後ナゼヱあれほどうつくしゐものを 谷是は御挨拶痛入ました 後ハヽヽヽ〳〵何處がよふ御座りませう山城かね 谷是も同じくだ 後成ほど 谷粹さんは性惡だぞ（暫し考へて）ホンニ紀州に落札〳〵 金忝へのがあるかの 後女郎衆は揃てよふ御座ります 金そんなら夫〳〵 谷まだ早からうの 後アイ暮てからがよふ御座ります 谷モウ床は仕舞たかの 後ちふ仕舞ましたろう 金ナアニまだ結なさらずとよふごせんすせへ 谷見ともなくはねへか 後ナニサきん〳〵で御座ります又たとへお髮は惡しともさ（と谷粹を尻目にかけてあやなす） 谷又かゝさんの上手も久しいものだ道理でとつさん若死だ（いろ〳〵むだをはなして居る内に）坂見ノ若イ者五郎八（屋敷よりかへり）是はよくなたもよふお出なせんした 金あい 谷どふだ色男久しいの橋本以來だらう 五郎ホンニ何と思召てお出なせんした花あふぎへばかりお出なんすね 谷（花あふきへいつた事はなけれども金公への見へにどふかいつた事のあるよふな顏をして）嘘ばつかり 五郎ナニサぞんしておりやす 谷へヱ惡い所を見られた 後ひもじからうマアめしをくわつせへ 五郎イヽヱおやしきで給てか

へりやした 後トウダよこしたか 五郎アイ三分取て來やした跡はぬしが明後日持て來なさる筈でごせんす 後久しい物さソシテ何は文どもはみんな屆ひたか 五郎アイみんな御返事を取てめへりやした緣志さんはお留守でごせんす 後外のは忝へが鶴本かあの二三度返事を聞に來たからちつと休んだら一寸と出して來さつせへ 五郎アレハどれだつけね 後ソレ丸の内のご 五郎へヱ平さんかへ又無心だろう 後油は買て來さしつたか 五郎アイかうじ町の仲藏でかひやしたサア 後ヲイよし〳〵 もとなんだ見せな 後ばかめ油だ喰ふ物じやアねへ もとかゝさんねん寢しよふ 谷ちふ寢るのか床いそぎだの 金サア構はずと寢せな〳〵 後ハイ左樣ならおゆるしなさりまし（まくらかやを出し娘をねせ付る忝ばらく有て） 後御ろうじましモウふせりました 金おとなしいねへ 後あがご草臥て夜はよふふせります（目をつぶりあんどうともす） 谷モウいかふかの 金あい 後五郎どんつけて下せへ 谷かゝさんはいきなさらんか 後まいるはわたくしがまいります（谷、金二人とも帯を〆直しなどして身ごしらへする内に 後もゆかたを出してきかへこしのものすげ笠をも戸た

へな仕舞錠をぴんとおろして）後五郎どんたのむよ
馬幸さんがござつたら待せもふしておかつせへ直に
歸るから五郎龜本への返事を一寸とさん出しておく
んなんしな（と出してわたす谷金たがゐに何か耳そ
うだんして金ふところより二分(にぶ)出してわたす）谷（取
て紙にのせ）かゝさんサア後はい（といたゞき紙に
ひねり）お預り申ます（前きんちやくへ入て帶には
さむ）金サアめへりやせう（五郎庭へおりはき物直す）
後（同じくおりててうちんさげ）さあお出なさりまし
五郎左樣なら御きげんよふ後五郎どん門の明りがま
だ〳〵かねへによ金とんだくらい晩だね谷その筈さな
ウト四ツ(よつ)八分(はちぶ)の月だもの後モシいよ〳〵紀の國かね
谷左れし〳〵後お見立なさりますかへ谷金公どふ左、
ようの金どふでもよふごせんすかゝさんどふするが
よかろう後ナンナラ左へ引女郎衆を出し申ませふか
夫ともお見立なさらばお見立なさりまし谷ソノ左へ
といふのはとしまか新ぞうか後二人とも中としま衆
でどんだ氣どりの左へ女郎衆でごせんす金そんなら
夫に左よふかの谷左かし呼出し遊びはするなと指南
集にもある世へソシテ下にはの悪い物だよ後そんな

らお見立になさりまし谷（いきな聲して）見立られた
が嬉しさに（紀の國屋にいたる）若いもの半兵衛お出なさり
まし後半兵衛どんお見立だよ半兵衛あい（とかけみせ
の方へ行て）お見立がごせんすよ（谷、金二人は張みせ
に居る女郎を左り目に見ながら上る後もはき物取て
あがる）谷（聲をひそめどふだ金公見たか金耳を出し
な谷ツヽヽ〳〵後どふで御座ります谷アノ藤色と
の後今かんざしでつむりを搔て居なさるのかへ谷イ
ヽニヤサこつちから三番目のさ後アイそしてへ谷ア
ノ團扇を持て居るあさぎだ後アイ是半兵衛どん三澤(みさは)
さんと綱木(つなぎ)さんだよ半ハイよふ御座りますサアお上
りなさりまし（と先へ立て二かゐへ谷、金もつゞゐて後
てうちんけし同じくあがる）半（表ざしきのせうじを
あけあんどうもとぼし）さあ是へおはゐりなさりま
し子供お茶を持て來いよ（といひながらいそがしそ
ふに下りて行）金左へ内だね後去年の夏か普請をい
たしました谷普請の内はとなりに居たつけの後アイ
左樣で御座ります子供（はこび）（茶を三つぼんにのせて持來
り）あいお茶アおあんなんし後置ていきやドウタ眼
そふな顔だのはゐの寝ておりゐしたか押付見せへ出よ

ふがそのよふに眠がつちやァ客衆がいやがるぜへ はる気つたかへ 後ホンニあなたへ水あげをお頼申気、やはるおがみゐすおめへまでおんなじよふになぶんなんすにくいぞ 半(女郎のたばこぼんきやくたばこぼんも持來る)又何をさわぐ 谷イヽニヤサみづあげの約束よ 半ナニサ水あげはわたくしがとふにいたして置ました はる又半兵衞どんよさつせへすかねへぞよ引(と半兵衞がせなかをたゝゐてにげる)半迯たとつてにがす物かと(つゝゐて下へ行)金女郎の名はどう〱だつけの 後藤色が綱木さんあさぎが三澤さんで御座ります 谷ぬしの注文の二人はあの內じやアねへか 後あい三澤さんはわたくしが申たので御座ります 谷金公きまりだぜへ 金なんなら取替やせうか 谷ゆふもんのふんどしだぞ 半(てうし硯ぶた持出あんどうのおき處を直しろうかへむかひ)さあお出なせんし綱木、三澤(二人來り口を揃へ)どなたもよふお出なんし 三おかさんどふしなんした 後はゐ 綱なぜおもとさんを連て來なんせん 後もうふせりました 三おとなしいねへ 半はゞかりながらあなたへ上ませう 金谷粋さん 谷まあ呑ねへ 金(半兵衞が耳へ口をよせて)あさぎへ 半はゐ三ちつとあけ申しんしよふ 金気づ〱(三のみてさかづきを臺へのせる 半心得て谷粋か前へ)谷おさわりもふしやせうか 三まあお取あげなんし(谷のみておく 半又こゝろへて綱木が前へ)綱(さかづき取あげのみて)おかさんあけんしよふ 後チットおゝさへもふしやせう 綱まあ呑なんし 後アイ左樣なら 半サア出しなせへ 後つぎなさんな 半なぜへ 後まだお約束のお客がごぜんす 三夫でも一つや二つはよふおせんせう 後あゐ(とうけてのみひかへて居る)半ソンナラおばさんお頼申やす 後ナゼ呑でいきなせへな 半イヽヱ後にいたゞきやせう今夜は下がいそがしうごぜんす 後清介どんはへ 半風を引て寢て居やす 後ホンニ夫じやア閙(いそが)しかろう 半ハイ左樣ならどなたも緩りとあがりましおばさんよろしくお頼申やす(此間にすゐ物はち肴も出る)後サアお吸なさりまし モシ谷粋さんお久しぶりてちつと憚申ませう 谷そんならおれも久しぶりでおせへよふ 後是は惡い事を申ましたつけのホヽヽ〱 金おさかなをしようか(と硯ぶたを引よせて)何がよかろう是かの 谷ナニサ後家が玉子を喰てどうするもんだ 後谷粋さん又わる口をお

つせんすよ金そんならくわるかい後左様ならソノびわを下さりまし金おつナ望だの後ハイ谷びわといふ物はめんよふ女の好ものだのおらもびわになりてへ物だ綱(谷粋が方をじろりと見て口の内にて)すかねハ三サアおかさんのみなんしつぎんせう後イヽヱ爰ハ下さりまし三澤さんのお酌にはこりました三ホンニ此ぢうはよくのみなんしたの後その代にモウ漸かへりましてあすの朝迄何もしらずに、ト寝入にふせりましたからほう〴〵の御客さん方に叱れました夫にあくる日は一日頭痛がいたしますね大きなめに合ました覺へてお出なせんし綱ホンニあの時はわつちもいつそ酔いしたよ三そんならちつとつぎんしようから出しなんし後是は憚でござりますヲトヽヽハイ谷粋さんおゝさへを給ます谷どふだ丁どあるかね味方見くるしい酌だぞ三ナニサ一盃つぎんした後アイ左様なら谷もふ一ツかい後とんだ事をおつしやるぞ谷お前にやアわつちが酌をしやせう谷こつちはこつちどうしだの三ひゐきをしなんすと聞いせんよ谷ヲツトあり〳〵後お肴をあげませう何がお望へ谷なんでもよしさ後そんなら是をあがつて御ろうじま

しイツツよふござります谷例のびわがびわ突出しのその日より金ひより〳〵ひより二人三人谷むにんだノむにん〳〵とむにん夏の蟲とんで火に入金にいる〳〵〳〵にいるのつらへ水さハ、、〳〵綱とんだゑへね谷ナントゑへ口だろう半口乗て無盡を買なせへ綱無盡とは何の事かぞんしいせん谷なむさん雪のあくる日だ綱それも知りいせん谷てれたといふ事さサア金州さそう金こりやアちつと上やせう谷夫かいやだからぬしにさしたのだアなそんなら一寸とお頼申やす三おあゐかへお手元ともふしんせうか谷そりやアむこいマア〳〵三そんならおかさんつゐでおくんなんしアイおせんす谷モシヱあゐは手本とやらわたしも灰吹にのませやすせへ三ナニサみんな給んした谷何かは知らずありがてへかゝさんおれにもつゐでくんな後サアお出しなさりまし谷ヲツトよしさあ金公金かゝさんはゞかりながらアイト谷金公はどふもらちやアあかねへ三ナゼ呑なんせんかへ後アイねつからゝ上りません綱客衆はのみなんせんがよふおせんすよ谷こりやアおらも止ねへけりやアならねへわい綱ぬしのこつちやアおせんせん谷ア、それで安堵

したおめへお近付のためあげんせう綱アイあがらんそふだからあげんすめへ谷水いらずにおれがつごうか綱よしなんし給んせん谷それでもおめへ今此おうは酔たといひなすつたじやアねへか綱つぎてによりいす（是よりだん／＼盃廻り時をうつす内に膳出る）はるのどなたもおめしをおあんなんし谷めしには氣なしだす後お茶漬になすつてあがりまし半兵衛何も御座りませんよふあがりましお氣に入た物をおかへなさりましはるのソレお汁でもかへてなげゐよ（といひすてゝ行）三サアどなたもおあんなんし金アイ谷粋さんどうでごせんす谷そんならつき合てちつと喰ふかゝさんはどふだ後イヽエいたゞきますまゐ三ホンニ給べなんせんか後アイいゝへ綱わたし共が内のまんまもちつと喰て見なんし後ナニお時宜でも何でもござりませんお酒を給るとどうもいけませんホンニ金公さんは御酒はあがらずたんと上りましお汁はへ金アイごせんす（暫く有てめしもすみ膳さげる）谷コレあつちへいつたらの水を一盃持て來てくりや三水のみ茶碗に汲たてを持て來て上もふしやはるある後ホンニおまへ方召かへてお出なせんし綱あゐまそんなら往てめへりやせふ（三、肴かへに下へ）後わたくしもお暇にいたしませう谷モウ一ッ呑でいきなせへ後いゝへもふ大に酔ました金エヽハナもふ寝なさろう後イヽエサまだお約束のお客が有はずで御座りますそしてまだ飯本へもよりますあすの朝は何時へ谷おらアいつでも乳へ金州何時金七ッ半さ後ハイさよふなら御きげんよふ二人おさらば／＼金アノかゝあもよく呑やすね谷ウヽせんてへ勤をした女たどうだ氣があるか金どふも色が黒いね谷大木戸のわらやいかゝあは見なすつたか金いゝへ谷今度見なせへとんだうつくしいよ金今夜のとはどうだね谷ホンニおれがやつちうつくしさあ美しいがちつとけんてへぶるよふだのねしのはおとなしそうだか成ほど綱本とやらはわつち共が歯には合やせん谷あゝにふやつを買こなすとおもしれへもんだよ半兵衛サトあちらへお出なさりまし谷床といふ所かサア何處だ／＼半廊下ざしきて御座ります金ヘ、處か半イヽヱおまへは下で御座ります金それはわるいの半イヱその代り涼しいよい處で御座ります先是にお出なさりまし（すゞりぶたてうしたはこぼんなとはこぶ）

はるの（ゆかた持來り）アイお召なんし谷そけへおきそ
コレよく水を呉ねへの　はえ今にあげいすよ中半兵
衞どん下でよばつしやるよ半それでもからだが二ッ
ハねへ、もウソ（こたへ、ながら下へ　はるもつゞいて行）
谷サア着けへよふしわになつちやアいてへ金どれが
そだね谷どれでも宜へハナぬしむきみしぼりにしや
おれが仲藏島にしよふコレ見や此袖のちいさサそし
てでへ、ぶ汗くせへ（ふたりともゆかたに着かへる）
金ドレおめへのきせるをお見せなせんし宜へなりだ
ね谷ナントよかろうそしてとんだ目があるよさくら
張を二本一處にした上に角蔦（かとつた）の女郎にかんざしを貰
て足たものヲ金ホンニよつぽとごせんせう谷いつで
も二ぶつつの早玉さ三（ろうかにて）綱木さん〳〵
綱（奥ざしきの方にて）アイ今いきいすよ三ヲャぬ
したちやアいつの間に愛へ來なんした谷狆をとこへ
から來ておりやす三そりやアほんにぞんじゐせんで
おかまゐも申しいせんサア下へお出なんし（と金
公が手をとる）金今にいきやす谷畜類（ちくるい）めつれていき
たがるの三ぬしのお客やまに成ゐせふかとおもつて
さ谷いらぬお心遣ひさまだかんじんの相手が來ねへ

ものゝ三今にお出なんすのさ金おめへ下へお出なせへ
し谷そんなら往て見よふか三（金公が羽折を持
て）何かをわすれずに持ていきなんし金こうとよし
〳〵さあ〳〵（三人ともおりる）金何處だ〳〵三愛
でおせんすよ谷是はヱヽおすめへだしかしへつつゐ
がねへの三おがみいすよしなんし谷へつつゐの代に
きり〳〵す籠が二ッあるが中には何も居ねへの三此
おう客衆に貰ゐしたがつい逃爲した金どうして三ナ
ニヤはるのが草を取けへてやるといつて二ッながら逃
しゐしたいつそ悔しくつてわつちやア泣いしたよホ
ヽヽ谷ヱヽサぞい代りおめへが又はやく受出され
るはな（三きせるを取て谷粹をたゝく）谷アイタヽヽ
綱（來りあんどうのかげへすわりかんざしにてあん
どうをむせうにつゝきやぶりて）じれつてへぞよ引
金何がそんなにじれつてへヱ綱なんでもさ谷色事か
たゞし爺の仕廻（しめへ）かぼんの工面なら案じなさんなおれ
がうけ込は綱それはモウおかたじけなふおせんす
お禮から先へもふしんす谷是はお禮でいたみ入やす
綱ホンニおめへも爲へかげんにしやべりなんしひと
りで口をきゝなんすね谷今までおめへが來ねへから

二人めへの口をきいて居たのさ綱それは御苦勞さホンニ三澤さんお前の何さんは富さんに似て居なんすね三アイしづかな處なんざあいつそよく似て居いすよ谷似た者は烏瓜と睾丸の梅漬だ綱ゑだアむだアいんなすよサア往ておよりゐしぬし達の邪魔になりいすサアお出なんし谷是は大の不首尾だ御意にまかせてサアめへりやせう金もふちつと咄してお出なせんし谷どふもかゝあがやかましいよ綱ヱヽあつかましいのふ三そんならお出なんすかお休なんし綱ハイあなたおやすみなんし金あゐ御きげんよふ綱三澤さん三アイもふめへりやすめへ金谷粹さん明日ホンニ寢忘たらどふぞ起しておくんなせんし谷サアおさらば〳〵三モシ〳〵たばこ入が有いすよ谷ヲットありがと〳〵（谷、綱二かゐへ金、三はかやに入三手をたゝくはる來る）三はるのか是ヱ、子だからのよふく火をいけてのそして茶も一ツ持て來てくりやはるあい金跡のほうをよく押付なせへ蚊がへへろうよ三じよさいはおせんせんよふくしゐした金今夜もあついのふ三それでもいつち爰の座敷が涼しうおせんすよ（はる火入茶持來る）三ヲ、よくした〳〵はるぬるうおせんす

三ヲイよし〳〵往て寢やはるアイお休なんし三茶を吞なんせんか金いや〳〵三たばこハへ金たばこもいや三ヲヤきついあゐそづかしさそんならおらも吞めへ（とうちわを取て遣ひながら金公が方へ風の行よふにする）金ア、ゑへ風た三是ばつかりお氣に入いしたの金まだ氣に入た事が有のさ三なんだへ金なんでもさ三サアいひなんせんとつめりいすよ金ア、いてへ〳〵いをふ〳〵三サアいひなんし金外でもねへ美しい處が氣に入だ三ナゼそんな事をいひなんす（とこそぐる）金ア、お兎だ〳〵どふもそれでもうつくしい物を三まだいひなんすか金ア、、あやまつた〳〵三そんならだまつて寢なんすか金寢るとも〳〵三ぬしやア年はいくつへ金あてゝ見な三あてん點ようか二か三でおせんせう金二十か三ナニサ二十のうへがさ金こりやアありがてへ酒でもかをふ三ヲヤそれよりうへかへ金六さ三とんだ若いねわつちが年をあてゝ見なんし金コウト二度目の厄年が過たろう三ばからしいよしておくんなんし又くすぐりいすよ金ア、そんならほんにいをふ二十三か四だろう三よく見なんした二でおせんす女といふものはふける

物だねへ谷粋さんとやらはへ金いくつだか知らねへ三ヲヤ連衆の年を知りなせんかへ金ナニサそんなに心やすかあねへ一座は今夜が初だもの三ほんにかへいつそよく口をきゝなんすね金こうまんばつかりいふよ三新やしきかへ金うゝ三ぬしやあ何處だへ金わつちも新やしきさ三嘘をつきなんし今度からひとりで來なんしよといふ事もねへさおさげすみも知らねへで金來ねへでどうするもんだな亥かし十日ほども前から仕廻を付ずばいつでもさしだろう三又てうしなんすか金あゝあつく成た三うちわを上んせうか金ウ、かしな三手水に往て來いすよ金そんならどふぞ茶を一盃持て來てくんな三ツレ見なんし人の呑なんせんかといふ時は呑もしなせんで〳〵といひながらかやを出てびようぶ引あけろうかをばた〳〵あとは金公一人成世間も物おと亥づまりてとなりの咄手に取るごとく隣座敷折江あのぬしやアあすも居なんすかへ田舎客孫右衛門まだ三晩げばかりもいちづけのヲすだへさ折そんなに居なんして首尾が惡くはおせんせんか孫アニサ今度もうらはお地頭さまの御用事で出たアに依てあせ町宿へさがらすとおやしきにとうりようのしろとつてせちにおとゞめなさつたアけれどもお御屋敷にとまつたア時にやア御門がげへにやかましくつて出べへにも入べへにもやれ切手だあ事の引手だあのとつておつくうだアから君に逢事がならねへと思やんのしてあんでも町宿へさがらねへじやア御用事が辨じもふさねふとちくのヲふん拔て町宿さあに居るもんだアからアニはあ三ばんげや四ばんげいちづけのヲしたアとつてあせふすべへ折夫でもひよつとおやしきの御用が有たらどうしなんす孫そのよふなアぐんもして置たアよ折どうしてへ孫定づけへの與太郎を宿さあに置たアから御用事があればふとつぱしり注進をする中かわしだアよもしハアちんじちうやうで間にあわねへとつても御家老さまでもあんでもひでんの入るもなアねへあせといつて見なさろこういつちやアどふかはあみそをあげるよふだあけれどもうらが曾父祖の代からでけへ御用金の出して置もんだからあにハア寢せべへとおこすべへとうらが心儘だあよ折へヱそんなら田舎でもさぞみんながこわがりいせうね孫そりやアはあ中にくいこんだが新田のヲ孫右衛門といつちやア誰亥らねへ者もねへ分限

の内でも一といつて二たアさがらねへよ折わつちやアねぬしが此月はじめに來なんす筈で來なんせんからいつそ案しいしたよ孫ア、ちくだんべへ折そんなら誰にでも聞て見なんし法印さんを頼んで八卦置たり待人をしたりゑゐしたものを孫いかさまハア緣でくといふもなアあじなあもんだよ去年の正ぐわち御年頭に出府のヲしてけゑりがけにふと晩とまつてからたげへに根性ぼねのぶちまけるよふに成たアも前世のゑんにんぞくだんべへよ折なんでもわつちやアぬしの處へいさゐすによ又いなかで性悪をしなんすなよ孫でへせんもんお身さまにあにを見けへべへ折なんぼぬしがそふいひなんしても先からゑかけられなんしたら只は置なんすめへ孫それに付て噂しがあるよ去々年うらが國の生土の祭りが有てかぶきのヲした時にうらも役者に成てなかやの勘平のヲしたらあにがはあ江戸役者のよふだあとつてぢよなめいたアほどに隣村の庄屋アどんのおまんゑようがからうつぼれてのおめへまいらせそるべへ候の惚證文のよこしたア事よそれからはあおき名が立て村中取ておつけへしたアよ折それ見なんし孫イ、ニヤサそれもはあ今じやアおつぱなれたアかとあせらん氣する事はおざんねへ折ほんにかへ眞實わつちをかわいゝと思ひなんすならさつきの事を忘れなんすなへ孫ア、わすれべへかたびらふたあつとふとへ物だのモウあにもいらねへか折どふもそんなにぬしに計はいひにくふおせんす孫アゼそんなにきやく心だアあんでもいひなさろ折そんならいひすよアノネ小遣にしいすからね孫金か折アい孫いくらべへ入な折二兩ばかりおくんなんし孫あしたやるべへよ折遲くつてもよふおせんすいつそわつちやア氣の毒でおせんすけれども外に客衆がおせんせんから孫アニサお身さまがいふ事はあおでへかんさまのお觸だアとおもふもの折おんにかへいつそ嬉しうおせんすよ二階座舖 谷是〳〵ちつと起ねへ綱ウ、、谷是さ用があらアな目をさましなせへコウ〳〵綱おがみいす寢かしておくんなんし谷マアちよつとこつちよヲむきなせへよ綱ヱ、モウうるせへよしなんしよ谷ヱ、何だ此ふんばりやアゑへかとおもやあがつてあめへことばかし懸りやアつきあがりのしたびろうどべりのぼんごさに寢ると思てめつたに大きな面ァしやアがるなんぼ高くとまつ

てもたかゞ飯もりだ此よふな貧乏屋てへでやすくさ
れるよふなやろうじやァねへよ惣てへいめへましい
（とたばこぼんをほうり出す火はなし）綱（おき上り）
もしへ何のこつておせんすおつせんす事があるな
らゑづかにおつせんしたがよふおせんす新ぞう衆じ
やアおせんすめへしこわがりもゑゐすめへ 谷くそを
くらやアがれゑづかにいおふが高くいおふがおれが
銭でおれが買た座敷でおれが口でおれがいふに何の
頓着があるもんだそれが悪かアいわれねへよふにし
やあかつたがゑへは 綱わつちも勤る處はつとめて置
ゐした 谷何だ勤だあんまり蟲がゑへ百合若大臣の娘
だかゑらねへがあしかから五節句を取るほどふさり
やあがつて人間のゑへ第一うぬが名からして氣に
いらねへ蕎麥切へ入る温飩の粉じやァあるめへしつ
なぎだのなんだのとおしのつゑへつなぎよりやアつ
ばきをなめてゑへ風だ（金、三も來る）金谷粋さんこり
やアどふでごせんす 谷まあ聞てくんねへ宵から今ま
でふさりやあかつてちつと起したとつてそつちこ
つちいやあがるからあんまりいめへましい 金それで
もおめへでもごせんすめへゑづかにおつせんしな三

アイサお腹のたつ事がおせんしてもゑづかにおつせ
んすりやアよふおせんす 谷なんだなおめへ方まであ
じに並びを付ておればつかりつき出すのか 金どうし
ておめへを突出すもんでごせんす 綱ナニサおかめへ
なんすなわたしもそうおふにはつとめいした 谷又口
を出しやアがる 三綱木さんおめへはマアあつちへい
きなんし 綱アイそんならゑへよふにお頼もふしんす
（と立てとなりのざしきへはいり）歌松さんおやか
ましうおせんせう 歌松アイなんだかむづかしねへ 綱
ナニサもふいつそすきいせんよ 歌たばこを呑なんせ
んか 綱まあ往て來いせう 三成ほどお腹を立事もおせ
んせうけれどもどふぞきげんを直しておくんなんし
わつちがどのよふにもあやまりいせう 谷そりやアも
ふ思しめしおかたじけなふごせんすがあんまり安
くするからのこつてごせんすそしてマアおめへの前
じやアいひにくうこせんすがこゝれへ來てあつかわ
れたといつちやアどうもげへぶんか悪ふこせんす大
きな聲をしていふがみめでもねへけれどもあんまり
でごせんさあナ 三ほんに綱木さんも悪ふおせんすが
あの子も若ふおせんすから氣が付なんせんそしてぬ

しも金公が事きげんよく居なんす事でおせんすからちつとは御不肖もなんしてマアお休なんしよ谷ナニサ今からけへろうの何のとおやしき者かなんぞのよふにいやみからみをいふのじやアごせんせん三そりやアもふ何おめへを惡く思ひす物でおせんす堪忍せへしておくんなんせば何も申事はおせんせん金モウ夜があけるそふだ坂見屋も來やせふかゝきげんを直しなせんし谷ナニサきげんを直すの直さねふのと寢起のやゝさまじやアあるめへし三コレサそんな事をおつせんしちやアふしが立て惡ふおせんすなんでもわつちにおくんなんし五郎八(ろうかより)はいお迎でござります三五郎どんかとんだ早いねサア這入てたばこを吞なんし谷よしか遲いくれへだぞサア金公けへろう〳〵金そんなら着けへて來やせふ(と下へ三も一處におりて)三あんなにいひゑらけにして置ちやアおかしゐもんだね金ナニサうつちやつて置なせへ三そんならぬしやアかならずちけへ内に來なんしよ谷粹さんとやらはどふでもウ來なんすめへ金廿七八日時分に來よう三けふは三日だねそんなら待て居いすよ(金着かへる内を待かね谷二階からおりる)谷ごふだ〳〵きつい感通だの人のこゝろも知らねへで金サアもふよふごせんす五郎モウひとりの女郎衆はへ谷よしさ〳〵三どなたも憚りもふしんした(金公がせなかをつゝきて)ほんにへ引、金アイさらば谷三さわさんおやかましうごせんしたろう三アイそんならとうぞまた此頃にお出なんし谷正月の十二三ある時に來やせふ三きついあいそうさおさらばへ半兵衛御きげんよふ又おちかい内に金お世話〳〵(くゞり戸がぐわら〳〵)五郎夕アはとふでごせんした谷ナニモウいめへましいふんばりよ寢てばつかり居やあがつたからいざこざをいつたら怖がつて下たつけがよく〳〵おそろしいそうでけへるまでつらも出しゑへねへ金公なんざあとんだ事よ五郎みさわさんのほんにへ引か氣に入やせんよ金ナニサ谷粹さんをなんでも連ちふして來いとつてさ谷おれをばよつほとおこれて居よふよ(いろ〳〵はなしの内にさかみやの門ト)後おはよふござりますサアお上りなさりまし金イヽヱもふ遲く成やした谷モウ直にいきやせう後そんなら煮ばなを一ッあがりまし(脇ざし笠など出して)夕アの殘りを上げませう(と前きんちやく〳〵

手をかけるを金（おさへて）何よしさ取て置な後それはありがとうござりやす谷そんならおさらば後ハイ左様なら又とうぞおちかい内にお出なさりまし金アイおせわに成りやした五郎どなたも御きげんよふ後モシお羽折のお衿がまだおれません金アイさあおさらば〳〵○夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを知らせよふとて烏がかあ〳〵鐘がごん〳〵舂米屋ががつたり〳〵

跋

粋とは梅干、野父とは鶏の名かと、きくやうな新宿田舎に、あやめの咲とはしほらしとぞめきの聲有頂天にひゞき、ヤッアサコラサの息杖坤軸にこたへて、茶屋はとん〳〵拍子木かち〳〵草鞋うる老父もいきはりを覺へ、團子商ふ賤女もよしなんしとはねかけ、桑田變じて海道の繁昌を唯一冊に書まるせしもの、二日酔のふら〳〵目に見れば甲驛新話とあり、嗚呼吾黨いきちよんの君子をしてこれにあそはしめば、則其尻つまらざるにちかゝらん、隨行散人隨歸の枕上に跋す

安永乙未秋

新甲館[illegible]書

甲驛新話終

粹町甲閨

序

大士さんの御鬮に曰。驛は。變驛なり。あたるもふしぎ。あたらぬも亦ふしぎなる哉。こゝに山手馬鹿人が甲驛新話の一卷、ふしぎのあたりをとりしより。書林文屋安雄なるもの。好い味をしめてになりて、床の内にひめ置たる。粹町甲閨の文枕。世に並べ行はんとし。來て例の序をせがむ。予書林の爲に序をかく事。凡三千三百三十三度、三橋亭と高をあらそひ、新不二山をも張ぬくべし。多くの中でこなさんの。本に度／＼序する事。義理一片のあだつきならず。そのあだつきのつき／＼にはやり。口には何度沽らめや／＼

自序

鳶とろゝと鳴は天氣と知。烏かあ／＼と啼ば。揚場へ米がこぼれたと悟る。爰といへは向處。安けらといふとこんけらし。先走る通の世の中。洒落とはあつかま敷島の歌人ならぬむだ人は。居ながら飯をくふ／＼寂／＼。然やくも脊交の作者顔。がをとの外題を持ながら又も後編あるべきにと。進められたる此一冊。甲驛新話の其あとへ。ゑくら並べし。粹町甲閨。久しいものと笑はゞ否

山手の馬鹿人
小便桶のうらの
灰小屋に序す

魚田の火の影は寒うして何をかや〳〵驛路の鈴の聲は夜山の手から下町かけて名にしおふ逢坂ならで大木戸のせきこんだのか昇せたか知も志らぬも通ひ帳てうどゞたる其數は八十軒餘の茶屋大みせ鵜呑にしたる粋な客まだ給つけぬ野暮な奴意氣な人柄いかぬ風みなそれ〳〵の樂しみに飲めや諷へや〻寸先はやみくもにさはぐとなりは志つほりと 客淀車手めへ食を喰ねへか 瀧川わつちやアいや 淀車せつかく大肴がおゐて往たせへ 瀧川それでもいやだものをほんに松野さんがのちにくをふといひゝしたつケ 淀そんならよびやナ 川松野さん〳〵 淀大きなこゑで 松野さん〳〵 松野なんでごせいす名のかどが丸くなりいす とわらひながら來る 川お前お食を給なんせんか 松わつちひとりやアいや 川わつちもたべいす 淀手めへはいやだといふじやアねへか 川迚があれは喰すのさ 松わつちイの付ゑへにネ 淀そうだろうと思つたよ。いつも五六盃くふもの 川よしなんシ。外聞の悪い 淀それでも嘘じやアねへ 川

まだ云なんすよ（と口のはたをつめる）淀ヲ、いてへ／＼。誤まつた／＼松そんなら茶を取寄ようの（と手をたゝく）子供お文ある引、川お文や／＼文あい引松ヱ、もふ此子アさつきから呼あナ文夫でもお部屋の用をして居いした川ナゼお針さんハ文まだ歸りなんせん松そうだらうよ。何かもめる沙汰だつけ川（おやゆびを出して）是をばつき出すのかの松そうだそうよ。どうでもこつちのかのがつかのだから の文アイ何の御用でおせんすへ川ヱ、はせしねへ子だ。アレあすこにの。藥鑵が有からあれへ茶アくんできや文あい（やくわんを持て下へ）淀お針さんとはアノ丈の高へのか松ナニサ丈はひくいはナ川ソレ此だうお前が廊下で呼かけなんしたのさ淀ウ、あの當夫本田か松噓アねへ文アイお茶ア持てめへりゐした松よく氣た氣た。サア川さん盛いすよ川待ちなんし茶碗を出しいせう。モシお前もおあんなんすかへ淀喰ねへじやアさ川ヲヤ／＼又かへ淀ナニさつきやアちつと外ア喰ねへものを川あれでもちつとかへ蟲の氣へサアそんなら箸う上んゑよう松いつも五六杯とはぬしの事たらう淀アイ五六杯たアわつちが事。ぞろつぺへとはお前の事さ、コレさつきの物を出さねへか川ほんにそうだつけの（なたはらめい物の小梅づけを出す）松ヲヤなんだへ川粕に漬けた小梅さ松わつちやア又持遊びにしたあまいだの桶かと思ひしたよホ、、、／＼川こりやあネ升屋の御亭さんが湯治のみやげさ給て見なんしいつそようおせんす松淀車さん取ておくんなんし淀ホヽもふねへそうだ糟てもなめなせへ松ヱ、悄らしいの川ドレわつちが見て上んせう。コレ是程あるものヲ淀松野さんにやるは惜しゐからさ松よし／＼覺へて居なんしよ（此間しばらくひ事あり）若イ者伊八（二かいのはしごだん）瀧川さん／＼（といへども聞へぬゆへ座しきい口まで來たり少しはらたちこゑにて）瀧川さんサア／＼さつきから呼やすはナ一寸御出なんし川どうも隣の騒きで聞へねへものを（と立てなりる）淀誰か來たといふ注文だい松氣をもむやつさ本んにとなりは達者に騒くのヲ淀屋敷ものか淀ナニサ二人ながらめく／＼さ淀ねぶ、挺といふ奴だのあれが本のめくら騒だ女郎衆は松その癖さん／＼さ清見さん折江さん淀とんだ事たの馴染か松ナニサ引付さ淀お前は松わつちやあ色男淀久喜太さんか松ナアニ喜太さんはもう來やせん淀噓ばつかり松本の事さ（新造の聲奥ざしき方にて）喜太さんへおがみいすよしなんし松野さんにさういひすよアレヱ松野さんへ

／＼（松聞つい日へ袖をあてゝわらひをかくしてかけ出す）淀（すそをとらへ）ヲツト待な／＼今の喜太さん／＼はなんだへ松ありやア外の喜太さんでごせいす淀まだ隠すか（とこそぐる）松アヽ誤りいしたおかみいすそんなら正直にいひいせう一昨日の儘さ淀それ見なせへほんによくするけなさるの松とつさんがなくつてかゝさんばかりだからようごせいすよ淀うら山しいの川（らうかより）何が浦山敷へ淀今來た客がさ川なせへ淀金さん／＼の色男だから川ゑへ加減さうに好をいひなんすね松誰が來た川武さんさ松そしてどうした歸りなんしたか川ナニサ耳を出しな松ウヽ、それじやアの川どうもいつそ詰らねへよ（淀車が方を見ながら）ほんにどうしたらよかろうやら松どうともゑへようにさし向へで相談しなんしおさらばへ淀ナぜいきなさるか松又後にめへりやせう淀能後に來さうな事た松なせへ淀喜太さの／＼だもの松ゑヽ（と淀車がせなかをたたゐて出て行く）淀なんだか濟ねへ顏色ウしてゐるの川（かほなし）（かあ）ゑれつてへぞよ引淀ゑれつたかあゑれたがゑへ物もいらねへ事た川いゝにへネどうせお前にいはねへけりやア濟ねへ事だがネ。あのね淀客が來たから貰てへといふ事かさら／＼いへばゑへこつちがゑれつてへ川いゝにへサ其客がネ淀その客もあの客もいらねゑあつちイ出たがゑへ貰たがる女郎衆を終にやるめへといつた事のねへ男だ川そういひなんしちやアどうもあつちイもいかれやせん淀ナぜいく氣で云出したものが行れねへ理屈アねへ川ソレそんなにおかしらしくいひなんしちやアいつまでも淀大分もづかしいのサア何もいはねへから行たがゑへ川そふしておくんなんすかへお前又腹ア立ちやアゑなんせんか淀ナニ得心でやるものを川そしてお前ひとり居ておくんなんすかへ淀知た事さ川そんならわつちやアあつちイ行ゐすよ大吉や／＼（子供大吉）あい引川コレ大吉やゑへ子だから爰の茶碗や何かをかたづけてのそしてあつちのたばこ盆イよく消ねへやうに火をいけて持て來ての此烟草盆はあつちイ持て往てくりや大吉あい（とそこらかたつける）川おめへ茶ア呑なんせんか淀いや／＼只せへ茶にされた物を川又そんな事をいひなんすよ（と身もだへしてじれる）淀そんならいふめへ／＼ゑかし座敷や床はやる事アならねへせへ川そりやアなあにそんなら往て來いすよ淀ウヽいきや／＼コレ大吉おれと寢ねへか大いや／＼川ホヽ、あひそうのねへいひよう

だのヲコレ氣をつけてくりやよと出て行大あいかたづけしまいておお休みなんし淀寝ていかねへか大ゑつたかへとたばこぼんさげておくさしきへ奥坐敷、川もう寝たか大アイ寝なんすさうでおざんす川よし〱客武太夫シヤレテ武そしてあつちはすんだかの川お案じなんすなさつぱりもらひゑた御亭さんお世話でおせんした茶屋新助ナニわたしは何も世話な事はおせんせんお前大にお骨折でごせんした手ごずりなんしたらう川大きにさいつでもぬしやア遲くばつかり來なんすからわつちに苦勞かけなんすよ武私(わし)も早う來たいけれど門がやかまいでつゐ遲なるじやてそれにけふは又傍輩(はうはい)共の處イ祝儀事でよばれたゆゑ猶遲なつたよ茶屋道理でお前いつもより大にお遲うござりますマア〱なんでもおめでたにお燗を見て上ませう武よく〱飲たがる奴じやの時にだれぞ呼ふかい川ナアニもふよしなんし今夜ア遲ふおせんす武それもそうかいの茶旦那あげませう武押(おさ)ようか茶マア上りやしサアつぎませう武ヲツトよし〱どふもゑらう飲(の)だぞい茶御祝儀事は何でござります武役替の祝儀さ茶へへ引、大吉吸もの持てアイ御亭(ごつ)さんちつとこつちイ寄ておくんなんし茶ヲツトお吸物か爰へよこ

しやサアお吸なさりまし若イ者伊八旦那今晩は遲ふお出なさりましたネ武伊八(いは)先生かどうじや〱段々涼しくなるのサアひとつ呑玉へ伊ハイ有難うござります茶ドレつがふ伊あゐ是はお慮外でごせんすヲト、、あいこぼれやす〱茶お肴は伊アイい丶へとのみかけて下におき武その筈じ

ほんに旦那はお久しぶりでござりますね武その筈じや立歸りに國許へ往たでな伊ほんにそんなお噺しがござりましたつけ武サアア肴アゑようと鼻紙を一まいやる伊これは有難うござりますとたゝんでふところへ武どうじやこつちは賑ふかの伊アイ相應に出ます先どちうは堀の内の千部で大ぶにきやかでござりました武今ではけつく品川よりはにぎはふての伊あいさ仕合でござりますほんにお屋敷からも品川の方が近ふこさりませふ武大きに近いけれどもとんとあじいなものでおもしろないの茶どうでもお馴染ほどよい事はこざりません伊そうさ武本に開帳イでも往たらちつと寄玉へ伊はいありがたうこざります開帳は繁昌いたしますかネ武ウ、晝過からはいかう人が出おるて伊さかつきをほしてこりやアとつさんお前にあげう茶ナゼもう一ツよかろう伊いゝにへそしてもうお膳を上やせう武イヤ食(めし)も酒もほゑ

うなひよ伊それでもちつとお茶漬になさつて茶いや〳〵伊ハイそんなら上ますまいとつさん茶漬は茶いゝにへお茶漬より是がと手酌でのむ伊そんなら氣根に呑なせへドレ銚子を茶ナニそれじやア又すぎる伊よしか伊丁度さ伊左樣ならもふお床にいたしませうと出て行武コレ〳〵そつちイ往たら誰ぞに鹽茶ア一盃おくしてたもれ武はいお文や〳〵とよびながらおりる茶わたしももうおいとまにいたしませう川もふ一ぷく呑でいきなんしさあとすい付て出す茶袖引といふ處かねこりやア格別ばゞあが吸付たばこより旨ふごせんすはい川ヲヤ〳〵どうせうのホヽヽ茶ハイやにはみんな吸なくしやしたときせるなおいてあゐ御きげんのう明日はいつもの通りでございませう武さうさ〳〵茶川さんおやすみ川アイおさらばへ武供のやろうをたのむぞや茶はい〳〵川おばさんによくいつておくんなんし茶あい川おさらばへ茶立てりきみまたあふまではさらばゞ武いよ市川の茶ハヽゝ、笑ひながら歸る川いつでも若へ氣だね武あれでなふちやアいくまいて文アイ鹽茶でおせんすと瀧川が前へ川おれゑやアねへぬしに上もうしや此子アねほけたそうだ武可愛そうにねむからうぞい伊床なかへて來りさあモウゑへ往てゝ

ねろ〳〵文へんじもせず立てゆく伊サア床を武何處へご行のか川ナニようおせんすソレそつちの方イよせてとらつし伊あいと床なしき屏風もたてまくらがれるとたつ川よし〳〵あすこのかもゐにあげてあるよ伊夫ならよふごせんすハイ御きげんよう武ヲイ寝たまへ〳〵川も立て行ぞ川のゐすに武かもゐのまくらな取てさきへいれる川間もなくきたり寝なんしたかと行燈などびやうぶのそとへ出して是じやアあんまり暗へかへ武いゝやよし〳〵コレ此まくらは違ふたの川ヲヤよく見つけなんしたのあつちの客がまけおしみで床をば呉いせん武床も枕もなんでもよい君きみたればじや川うそやお前お國の御新造さんに久しふりでおあひなんしてさぞお嬉しうおせんせうネ武ナアニもう山の神にはあき果たじや川嘘をつきなんし武嘘じやないよ川それでもお前お新造樣の御用は聞なんせうがわつちが用は聞なんすめへ武聞いではイなんなといふたがよい川そんならいひすよ武おゝさ川アノネお前わつちが用を聞ておくんなんす氣ならとうぞアノいつかもお咄し申いした何をアノ寝道具をしておくんなんし武今までのはどうじやい川どうも餘りよごれいしたからさ武夫どうなとゑようぞい川ほんにかへそうしておくんなん

すと今までのを廻しに遣ひす 武そして何がよいの 川ふとんは縮緬夜着はふうつうでもようおせんす無り をばびろうどにしておくんなんし 武そんなら翌直に 松坂で積らそう 川ほん引かへわつちやアいつそう嬉 おざんすよ 武一ぷくちつと寝ようか 川アイわつちやア 此ごろじやアどうかしたそうでどうもねむくつて成 いせんよそれでも氣の忘れねへ客人じやアねられい せんがお前のように心やすひ客衆だと氣のおかれね へせへか猶ねむうおせんすよ 武それでもあちらへ行 じやあろ 川ナアニ行ずとようおせんす 武それじや悪 いぞや 川そんなら一寝入ねていきゐせうマアちつと ねかしておくんなんしよ 武寝忘れよふぞや 川ナニサ お前もねなんしわつちやア寝ゐすよと云よりはやくごう〳〵〳〵 武はまじ〳〵して居たれど淋しきに同じくとろ〳〵 隣その松野喜太さん〳〵コレちつと こつちようきむなんし 喜太ヱ、やかましいだまつて 寝かして呉ろよ 松まあ用が有からこつちイむきなよ 喜こうして居ても聞えるから用があらばいつたがゐ へ 松いゝにへ夫じやアはなされいせん是さ〳〵喜太 さん〳〵 喜ヱ、小むづかしい何だよとふりむく 松お前ま あ何を腹ア立なすつた 喜何も腹アたちやア無ねへ 松

そんならナゼわつちが來るとそつちらアむゐて寝な んした 喜そりやアわれがむねに覺が有う 松いゝへ何 もわつちがおめへにア腹アたゝせるやうな事ア無い せん 喜そんならナゼ宵から己ひとりねせて置てど けへかいつてわあ〳〵とさわゐでいた 松あの時ア瀧 川さんのざしきでお食をたべて居いした 喜食もこつ ちでくへば無へ事よ 松夫でも一昨日からねてばつか り居てあの子たちが呼にもいかねへじやあ悪ふおせ んさあナ 喜そんなら食をくつたら直にきたがゐへは サ 松わつちも直にくる氣だつけが其うちに武さんが 來て瀧川さんが座布に居ねへ物だから勤めて居たも のを 喜夫なら又閑に出てもして居れは無へわあ〳〵 と騒ぐ事アねへ 松夫もあつちの客衆がお前の事をい つてなぶるからの事さ夫をいをふならお前も吉彌様 をきやつ〳〵といはせなんしたぢやアねへかへ 喜あ りやア又とあとい 松ありやア又なんだへサアいひな んし〳〵 喜ハ、、、〳〵〳〵咲た〳〵 松それ見なん し手前の事ア棚イ上て置てからにほんにお前は餘程 腹たちつほいよその様じやアこまつた物だすわつち が往ても喧嘩ばつかりして居るだろう 喜ナニ其とき

やア中よくするのさ今しやア何といつても疑が有から松これが悪ふおせんすあんな堅へ事までしたもの疑なんす事アおせんせん喜夫でもうたがふめへ物じやアねへ毎晩かはる枕だものそしてまた相模女にはりこ鍋とつて尻の早へにたとへてあるはサ松そりやアはや外の女アこらねへがなんぼさがみでもそんなじやアごせんせん喜はんに相模で思ひ出した今年アまだとつさんが來ねへの松アイいつも鮎のとれる時分でなくつちやア來やせん喜來たらかの事を聞て置よォレ此下をとりや松まくらをあげきくみ、たてまあ待なんし何處にかいざがあるよ喜何處だの松ありやアたしか瀧川さんの客衆だよ川さん／＼瀧川さん／＼川エウ、／＼松瀧川さん／＼といふうちに伊八きたりろうかよりこれ瀧川樣一寸御出なさんし川ねむそうなころにてなんだな伊マア爰へ顔を出しなせんし川おきて出るどうぞしたか伊小ごゑになり歸らうといひやす川いけねへの伊なんでも一寸いきなんし川エ、いめへましいのとふせうぶせうに表坐敷、淀車支度して羽なりも着若衆／＼川なんでおせんすなと羽なりをぬがせにかゝる淀よしやあがれ羽織がたまらねへハイ川お前又なんの事でおせんす淀手前が何の事たかこれねへこれつてへのどうこようのとつて路味噌をなめた姑ばゝあをみるやうなつらアこやアがるから不便なこつたと思て何もいわずにおつちイやつたせへ夫に今迄覗きもこやアがらねへ川わつちも來る氣だつけがつゐ寢た物を淀てれ見ろ夫アうぬが氣儘から起た事たお大名の御前樣でも殿樣お目覺で御座りますと申上れば起さつしやる夜發でも馴染になるとそこにやア犬の糞があるとつて手を取て敎へるハイそこが人情公界といふもんだなんぼおらがやうなこがねへ客だとつて竹條の蝸牛を見るやうに潰されてだまつて居る物じやアねへ川ナニお前をつぶす物でおざんす夫だから床をばお貰ひ申いせん淀くこそをくらへ坪皿が高蒔繪だとつて塞がなくつて調半がくまれる物か川夫でもお前ひとりで寢ようとおとなしくいひなんしたじやアおせんせんか淀だれも一人で寢てへ事アねへけれども凡夫の淺ましさにやアちつとでもよくおもはれてへ思ひつかれてへで安目を賣たのだ安目といつたら又鷄眼のくすりに食ふ鰮の事だと思ふがそうじやアねへよ川それも何の事かぞんじいせんか何を申もわつちが寢忘れたが悪うおせんすから堪忍しておくんなんし

淀寢忘れちやア悪いといふ氣があればたかで寢忘も
なねへけれどもいかさま師が綱の伯父に化たやうに
口さきでだます事ア知つても肝心の魂に情がねへの
だ今までいやアしねへが立引をみれば今夜だとつて
も貰はれた義理じやアねへはさ 川夫でもあつちの
客人は成ぞれも知つて居るよなんぼ勤の習だとつて
襟元に計かぢり付くが見めでも有めへたかでつきゑ
へも赤ゑへも知た手合じやアねへとまくしかけたるたいへいらくに 川少し
はら立 相應に知て居りゐす赤ゑへたア骨の和な肴でお
せんす 淀夫でもつき合はしるめへ 川それも知てをり
いす 淀そんならナぜ宵からつらも出さねへ 川ねむい
から寢たがとうしゐしたへ 淀ぐつとせき上なんだといゝさまきせるをふり上
るゆ 川アレ伊八どんやといゝながら立てらうかへにげる 伊廊下に立きゝして居たりしがおもきに
へ入かはり 最はどうした事でござります 淀どうしたじやア
ねへお身さまにも云た通りだア宵からひとり寢て居
て淋しいから歸らうと云のだ夫に四の五のとぬかす
に依て理害をといて聞れば一國ウいやあがるからの
事よ 伊それだとつてもお前口でおつせんすは兎も角
もひよつとあの子に疵でも付たらどうなせんす 淀な
んだ御太造らしいたかでおれがかぶうをなげようと

思へば此屋でへは塵葉も置やアしねへ 伊それも又お
んまり御短氣で御座りますマア一寸譯をうけ玉はり
ました所がお歸りなさらうとおつせんすのをあの子
が何のかのと云なすつたに依てお腹ァお立なすつた
のでござりますね 淀初而はさうだが夫につゐちやア
伊イヱまあ憚ながら跡の事は申さば枝葉と申もので
初にお歸りなさらうとおつせんした時あの子が直に
お歸し申なんせば何のおはらの立事もないと申もの
でござりますからお爰はひとつ私がお願ひでござりま
すまづ今夜は御きげんよくお歸りなさりまして又明
晩でもお出なすつて下さりましその時アどのやうに
もお腹のいるやうに致しませうせう／＼お氣にいら
ぬ事がござりましてもお馴染がひにおとなし／＼何に
もおつしやらずにお歸になさるものを何のかのとい
ひなさるはあの子が悪いのでござります お前さんの
お言葉の立ますように今晩はお歸り被成ましておす
の晩かならず御出なさりまし憚ながら理非のお聞分
がよう御座ますから是は私がお願ひでござります
へ、、、とのぼせかけいハ、、、であやなす 淀初めのかへらうもおほくはとめられる氣でいひ出した處か拍子に乗て出るまいのたい
へいゝ云過しおもひの外に成た處へ伊八か出ての上手ごかしにいよ／＼あじなものに成てぜひなく そんならお身

さまにめんじて何にもいはずに歸るあすの晩迄預るせへ伊アイサ明晩はどうともお顔のたつやうに致しませう是はモウ有がたうござります淀サア歸る伊ハイ左樣なら必明晩お出なさりまし御きけんよう淀おせわ／＼とらうかへ出てあたりをにらみ廻し階子をおりる伊もつゞゐて下りはゐお靜にといひながらおもてをあけて出し又二かいへあかる川はしごの口に待てヲヽ能して下すつたあすの晩來たらどうぞようの伊そりやアその時の事さマア今夜歸しせへすればゑへはナさあ／＼行て寢なんし川武さんをこつちイ連て來よう伊ナニもうすぐにあつちに寢なんし押付（おつけ）あけやす川そんならそうゑやうかのおかたじけなと奥ざしきへはた／＼奥座敷客坐頭借部若へ衆何時だの伊モウおつつけ六ツでござりますお目が覺てならお隣でさぞおやかましうござりましたらう借部何んだか無性に云ならべたの伊アイサどうも人の悪いには困り果ます借ぬしのきめ處は感心だぞツレ座頭困彌ほんに仲間へ入れて催促にあるかせてへの借ハヽヽ手前寢て居ると思つたら困彌ナニお前あの騒にどうして寢られる物でごせんす借夫でもおらがかゐさんなんざァ夜中だ困こつちの女郎衆ちよく／＼寢てさ伊皆起し申なんせんし困ナニゑへ／＼なんと借さん・杯呑で歸ろうじやァごせんせんか借ツヽ是若へ衆・銚子働ごくれねへか伊アイまだお燗が致しにくうござります困ナニサ冷でよし／＼伊ハイ左樣なら今に上ませうとてうしを持て下へ借コレ起なせへ／＼清見ヲあいウヽヽ、また早ふおせんす借ナニ早かあねへ困からすのまねかあ／＼借わらひながらアレ烏がなく／＼清ヲヤそけへ來て鳴いすよ折江よしか烏のこはいろでおざんすよ清ほんにかへわつちやア又本の烏だと思ひしたよ困お前目が覺たか折今のからすでさホヽヽ伊てうし持てさあ御酒ウ上ませう借ヲツト有難／＼伊何もお肴アござりませんから味噌を燒てめへりやした借おそろ／＼伊左樣なら置てめへります借ヲイよし／＼さあ／＼困坊（ひよぼう）起や／＼困犬のまねわん／＼折おや／＼清とんだゑへネ借物まねはきつい物さどうた仙臺淨瑠璃は困ありやアふくサ清せんだい上るりとは借仙臺の上るりの事さとんだゑへよ此間に四人ともおきて出る折さあせんだいとやらせんべいとやらかたりなんし清さあ／＼困マア一ッ呑でさ借ほんに茶碗はどこだ清茶碗でかへアイさあ折わつちがつぎいせう借ヲツト憚り／＼折一盃おせんすよ清ソレこぼれるすハヽヽ借此女郎衆は座頭

の酌ッ煮た事がねへさうだ 折清ホ、、、／＼借サア
和尚さそふ 困アイどこだ／＼ 清爰でおせんす 困サア
つゐでゝんな折つゐで上んすから上るりヲをかたり
なんしよ 困かたるところ／＼ 清味噌を上んせうか 困ち
つとくんな 清さあ 困にかいか伝なしそ ヱ、灰吹／＼ 清なんぞ有
たかへどうなやういサア灰吹 困はいふきへはきだし ヱ、お前む
ごひぞ消炭をくはせなすつた 清ヲヤ／＼堪忍してお
くんなんしホヽヽさあ煮へ處を上んせう 困ウヽこ
いつはみそだ 折サアきり／＼吞でかたりなんし 困は
てせはしねへぞと茶碗などにおきさみせんなひきにかまへせきはらひ煮へん／＼ 借ちよつと御ことわ
り申上ます是よりせんだい上るり初りさやうにとうざい／＼引
扨もその後相馬の次郎將門殿の謀叛せうぶの荒增の
ヲ云べへなら下總の國いわ井の鄕にでかばちない家
サアぶつ立それにハア有べへ事か敷居かもへ柱サア
へも丸藥のヲ見る樣に金銀の衣サかけそこら中がふ
かり／＼と只はお夜も晝もまぼしいよふだつちう合
あんでもおれさあハ王さまだアとつて自髮に平親王
と改名のお煮やつてまだその時分にやア三ッべへに
成る息子殿をば將軍太郎殿とてんこちもねへ名をつ
け一家一門郎等まで權兵衛彌五右衛門のヲふつちや
つて百官名とやらをくつ付けひとへにハア王位をぶ
つたくるべへ下心だあといふ事を公連といふ利發な
家老殿ががんづきあせハア昔から謀叛のすたくらん
だ者が勝を見る事ア扨おき煮ぎりにしたものもおざ
んねへヤレよしめされ／＼とせちに異見のヲおしや
つたがなにがハア性のこわいわろだあに依てあせう
聞入べへ忠言耳さアに逆ふとやらで後にやアその家
老殿を押込たあとよ合惡事千里をおつはしるとたと
へのふしにみおんも違ひはおざんねへ朝敵だァの牟
てきだァのとガラ部へも聞へたとおぼしめせヤレは
あ討手をさし向べへとつて大將のヲ撰れた先一番に
六孫王經基殿だもさ抑此經もと殿の由來をくわしく
たづね申にちよぼ一のヲおぶちやる時とかくにてう
目べへ好だあに依て六ではでつかく損のヲおしやる
ゆへ六孫王とは申とかやそれでも不思議に勝負づよ
くいつも煮ぎりで仕廻るから常に元だあといふ心で
經もと殿と申なり此人をはじめとして貞盛秀鄕なん
どゝいふ大將達が討手にはる／＼下つたァけれども
何をいふにも將門殿が七人一座でかけ廻りそれにハ
アふじ身だといふもんだアからすべへよふもなかつ

たとおぼしめせ合そのときに貞盛といふ人はげへにこみずなアわるでおんでもきやつはきんたまか米かみのを射べへとおもつてねらつたあけれどもくらの前輪が邪魔に成きんたまア射られへとつて米かみせへやりと射たとおほじめせアニはあたまるべへ馬からさらひ落る處を秀郷が取て押へたヤレよくしたアとつてきせん上下をしなべて かんせぬものこそなかりけり 借そんや／＼ 折清ホヽヽヽ／＼ 清とんだ面白へネ 折もつと何ぞいひなんし 困又今度／＼さあ借さんモウ一ツ 借まあ重ねや 困さうさようかねお前がたとうだ 清わつち其ッ朝はなほ給(たべ)るせん 折サアつぎいしたよ 困どれ／＼ ときにりまはしくじつとのみ ア、ゑへアサ 借さん 借モウよしかそんならおらももう一盃吞うか 清サアつきるせう 借そんなら半分 清なせへ 借今朝歸つて大分用がある コレ 困坊けふは幡(ばん)丁の拾兩の日が日切だせへ 困アイ又延金だろうあすこもおかしな物だス 借いゝにやまた頼もしい事にやアお乾ア怖がるよいけねへは小日向のやつさ 困ありやアはや 折もうのみなんせんかへ 借モウいや／＼ 困サアいきやせう 借さあ／＼ 折まだ竹屋が來るせんよ 借來ずともゑへのさ 清

あい羽織 借ヲイよし／＼ 折お前羽折が裏返しだはな ときせかへる 困おれとした事が盲のやうだ 借手前も又目を明てみればゑへ 清、折ホヽヽ／＼ 困そこらに手拭があらう見てくんな 折是かへヲヤ馬のやうに鈴が付てるるネ 困落ても知れるやうにさ 折おつたね 借何もわすれはせなんせんかへ 借いゝにへよし／＼ 困そんならおさらばよ と二人とも立て出る 折待なんし階子が知れいすめへ と二人も立てをりる 折どなたも憚り申いした 清とうぞおちけへ内に 借アイおさらば／＼ 折又今度面白へ事を云なんしよ 困まだ色々の咄やれがあるけれども後編／＼ 伊是はお歸なさりますかまだ暗うござります 困よしよし、年中闇(くらやみ)に居つけたからら 伊へ、、／＼／＼はい左様なら御きげんよう 借おせわ／＼ 伊アイおつむりが危(あぶ)うござります 困ヲットト出た／＼ 伊見なくりア、水ながらが溜つております モウちつと材の方ィ 借ヲイ／＼おさらばさらば／＼ にぎやかに 清声ぐ 折めくにしちやア飛だ氣よりがゑへネ 清目の見へねへのを目ィ出して見へがねへの 折そしてあんまりひつゝこくもねへネ 清わつちなんざアぐい寝にしたよ 折わつちもさ 清又寝なんせんか 折お前の方ィ 處にねんせう と床へ入るいつものかけ合 はや

明渡るしのゝめに馬追蟲も音を留め表には轡の音勝手の方には据風呂へ水さす音のみ殘らん／＼

粋町甲閨終

市川ひいき江戸花海老

序

めでたく〱の若松さまよ、枝も榮て葉もしげる、その千代の子のめでたき顔見世、名もあらためて海老蔵と、尾ひれをふつてふりしきる、時雨のあめのはれ間もまたで、登蓮（とうれん）ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋をとひ侍しに、あるには盃とりあへず、折からのにゐ酒、みさかなに何よけんと、あつ蕎麥のあつきもてなしにて、天地一大戯場の外に、又四疊半目の閑を得たり、いでや贔屓の腕をこく、吾黨の連中の、はなしの種ともなれかしと、此たびおくれる狂歌の請取、自筆をとつて梓にちりばめ、世に傳ふる事左の如し、

天明壬寅周の春　　四方山人

海老藏方へ狂歌被遣候に受取申候例之御連中樣おもしろき御事に御座候折節顏見世前取込早々以上

十月廿六日　　成田屋七左衛門

四方御連中樣

市川ひいき江戸花海老

東夷南蠻北狄西戎四夷八荒天地乾坤のその外に、龍宮城といふ繁昌の地あり、この國ちはやふる神代のむかしは、彦火々出見の尊の御緣家つゝきにして、大日本とは格別の御由緒正しき地なりしが、雄略帝のおほん時、浦島太郎玉手箱の取迯をして、神奈川へ隱居し、大職冠鎌足公、海士をかたらひ玉をとらせ、人々よろこび引あげても、龍宮にては月夜に玉物した物を物されしとはいひながら、あんまりなされ方と、龍神いさこざの波をおこし、あれ出さんとはなたれとも、さすか神國の威勢におそれ、靑うなはらをおしさすり、堪忍して居られける內に、藤原の秀鄕といふわろ、唾で矢をはぐ樣な仕事をうけ合、むかで退治の三上山事、その禮物の大そうなる事、一生つきぬ五斗俵に、三井寺の釣鐘なとはつふしにしても大きなかね、其上珊瑚琥珀なやこ馬腦、尻くらひ觀音經の目錄に引あはせて、七珍萬寶ためこのうさぎ、耳より爪の長い人しやとの評議、中なか百足のあぶらの有益徒とつた分では、制にも算用にも引あはすと、こりやまた難陀龍王はりこみにて逆鱗ばり、龍宮船の往來もたえ、何となく疎遠にして、久しく海陸道なしとなつたる所、時なる哉當天明壬寅のとし、市川海老藏といふ子役のあふ事、顏みせ番付の表かくれなき大評判、殊に上下にてなばらくの出はと、とり／＼の風聞、兩國橋にて放し龜が聞出し、錠口番の海月にかたれば、例の口まめお中居のおほそ、お末のこはだとちよぼくさはなし、龍宮の奧向一統の評判、久しい娘の乙姬君、御父八大通龍王へたつての御願ひ、正直の戲場といふものは、つゐに見ました事はなけれど、魚交りの素人狂言にて見てさへおもしろい事、その中に市川の親玉海老藏といふ名は、ちか比たえて居たりしに、今度德藏天然と藝道に妙を得べき瑞相ありて、此顏見せから改めて海老藏と名のるよし、龍宮の緣を壽きて、母の名もたしか龜とか申て、誹諧狂歌も心がくるときけば、なんぞ祝ふて遣したいが、かけ鯛ばか

りもすげがない、歌なりと發句なりと御趣向をとの願ひ、娘にあまいはて、御のならひにて、それはよくぞ心づきやつた、一體あの市川といふ伎藝の家は、あの子でてうど六代の名家、元祖團十郎幼名を海老藏とよびしより、二代目の柏筵、四代目の三升ともに海老藏と名のりたり、今三升海老藏の名を子に名のらせ、我は團十郎を立る志、全く本系を重んじたる仕方、日比の氣象ほどありて、面白き事なり、傳へ聞かの三升は、伎藝に秀しのみならず、朋友の信を守り、強きにおそれず弱きをたすくる男氣ありて、古今無雙の大豪傑、日本國中ひいきのせさる者なければ、中もおそれあら磯の、なみのこなたの龍の都、是まで日本へ中絶して、今改て端向たくても、小魚ともの評判もあるものなれば、なんぞの時節と思ふたが、幸の事なり、ことにいにしへ周の泰伯、からだを文身とて親和染の様にして、朕が子分と披露せしより、周の代の正月を此國でも祝ふて、十一月朔日は毎年かゝさぬ一同の出仕なれば、諸大魚のこらず評議して、よきにはからひゐさせんとの勅錠、乙姫大きによろこびて、義太夫なれば帳臺ふかくと、大三重の幕場にて、はやゑの〻めも程ちかく、下波先のにぎはしさ、三ッ道具の先拂ひ、威風りん／＼尾ひれをふり出來る、鯛老職ゑん上のかけ尾の紙、跡につゞいて龍門の城主こいの頭のぼる、すゞ木のひろ口、平目のかた黒、鯨の金ざし、蛸の入道八足齋、其外小魚は數ゑらず、鱗を正して相つむる、通龍王紗ではつたる團扇をあげ、朔日の出仕吉例かゝさず、目出たいひらめこちもよろこぶ、さて此度姫が願ひにつき、音にきこへし大日本國、江戸さかい町中村座、市川海老藏方へ進物の思ひつき、さしづめ太儀ながらつとめてたも、外にむすめが何なりとやさしき趣向をそへたしとの事、此比師鯵かことばをきけば、日本大きに狂歌はやり、別て東都に上手多く、かりにも落書などいふ様な、鄙劣な歌をよむ事なき、正風體の狂歌連中、てには違ひのことばのある、屁玉の様な狂歌などは、落栗庵とすつぽん體程の相違、なかんづくもこの木あみ此道に執心ふかく、ちゑのないしこれをたすけて、狂詠四方に盛んなり、先山の手にはあから菅江、その流をくむ人々には松風、竹藪、よみ人しれた、雲樂齋、馬貫、ま

れ丸、紀定丸、四ッ谷に橘洲、へづゝ入道、かつほ、まん作、あめん房、麹町に栗圃、麻布にみさうづ、芝は名におふ眞邊黒人、隣海法師、丹青洞、品川に大木戸の黒牛あれば、目黒に好田の満好あり、築地の海地に卜養が、やしきの跡の卜川つくはね、洲崎の升屋に一氣行なり、深川にかきのぬけ殻、本所に無錢、盤子丸、日本橋には酒盛入道、鬼守、むき躬、あたりに匂ふ三十一文字、一ッ盃のみの直寐の類、本町に腹からの商人、大屋の裏住、住吉町には三升が名をつけたりし風早のふり出し、薬研堀にはきねやのせん旨、柳はしにはおも梶似足、神田に今富久、貸本人和流、板木ほり安、さくらのはね炭、小川町に地口有武、子の子の孫彦、ふし原の中貫、澤邊帆足の連、下谷に名高き卯雲先生素庭はやがき、つく〴〵法師、淺草に末廣、朝手、藪のいと成、藏前に梅の花笠、吉原にゑい夫人橋場の庵に婆阿上人、わけて此道すきやがし算木有政、物事明すけ、秦黒つら、其かへ部眞顔、油のとうじねり方、あせ道、畫おき、もちつとこつちへよりかけい、川井物梁、酒茂成保、もとてなき大連、其外大井のむさとした、白人のゑらぬ玉たれの小簾は、いつれやんごとなき輕少ならぬ方多し、されば十代の作者戀川はる町も酒の上のふらちと名のり、喜三二も手がらの岡もちとなりて、狂歌をよんで見たい記をあらはし、森羅萬象も竹つゑ爲輕の翁と改て、緒生道にわけいらん事を思ふ、かゝる時に生れあはゞ、曉月房も禁酒をし、雄長老も寺をひらき、長頭丸もあたまをそり付、卜養も匙をすて、行風が古今後撰にものせ盡すべからず、さふいふ江戸の腹合とは、もう詩でもなく歌でもなく、誹諧などは西の海へ、さらりさと流行した跡で、川柳點とも出られまい、幸なるかな市川三升も、自から花道のつらねと名のり、伎藝の餘力ある時は、滑稽の道をたしむときく故に、その門に遊ぶせんじやは通小紋のいき人と稱し、その聲をまなぶ誰やらも、菊の聲色などゝつきたるよし、四方の評判とり〴〵なり、今を日の出の狂言狂歌、おの〳〵一首よまずんばあるべからずと、仰の下より尾をふりひれを動して、さいはい新場は市川びいき、ながるゝ泉や金澤山、本牧ほんにかいたよりに、各よみて遺しませふ、御使者はすなはちめで鯛さん、祝ふて一番ゑめ

ませう、むかし范蠡魚の腹へ密書を入れ、越王にさゝげしは運を開きの鱸相なり、おの〳〵腹に一首をはらみ句藷場の幕の進物の、たよりをたのんて貢の振袖、かきおはせての勅答に、龍顔ことにうるはしく、その顔見せの間にあふ樣に、片時も早くおしおくりと、綸言あせをぬくひつゝせいきうに仰せつけられければ、みな〳〵きほひをふびの顔見せ鏡の天下、市川の一陽來の福牡丹、たもとにくるふ獅子の子の、獅子奮迅の勢はらくは、たぐひもあらじ荒海の、波もうち手のひいき連中、あゝつかもない、

周春日賀海老藏貢物

八大通龍王御製

六代の海老は千代までおはしませ
われらも千秋八大龍王

乙姫　君

あら波の内みすふかくみるふさの
おいさきあるきわさをきの道

進上のかけ鯛

見物もわくがごときのうしほ共は
にごらぬ汁のすみかづら哉

いとよりのないし

ひく人はたえずより來る絲よりの
いとおしらしき子役荒事

鯉の頭のぼる

龍門の上下素袍家の紋
ほめますみますはや出世鯉

ひらめのかた黑

またゝぐひ波のあら事親玉の
光つたへてにらむこびらの

すゞきのひろ口

大太刀をさしもきみよきふるまひは
お家のあらひすゞきとぞみる

かつほのさし躬

こは色の高ねもまけぬ魚なれば
かつほ〳〵とたれもみはやす

さけの上のはらゝ子

親よりもうまい仕内やあぢさけの
みは一ふくのひとつはらゝ子

ひいきの鯖人

見物は日〳〵にみますのうしほなれや

紋さへ江戸のおさに入海
　なよしのすはしり

ひいらぎのひいきも多き徳ありて
　高きなよしの末は座頭
　平のかれい

吸物はかれいのほしをいたゞきて
　くるはにどめの匂ふ顔見世
　大原のあん公

あんかうのはらは何より大入を
　祝ふちとせのつるしきり幕
　たこの入道八足齋

ひとりでも八つの手うちの新場たこ
　祝ふてちよつと呑ませうが酢
　せいごのふくこ

座かしらにせいごのこの子せんだんの
　ふたばより先みえすなるべし
　さよりのはし長

名びろめのめでたさよりの口上も
　ながいためしや魚のくちばし
　大こちのもどき

そのまゝの親に煮たてのたて者は
　そつちより又こちのかはむき
　白うをのおよばひと

ゑらうをや二筋みすおすおぐまの
　そのいきほひをみよ四つ手あみ
　無鹽の石もち

小粒でもからい山椒の吸口や
　ちびき御ひいきおもき石もち
　太刀花の魚丸

みな様がおとりたてとてあたらしき
　あら事はじめ大太刀のうを
　畑二郎ひれ有

花道をばつたはた白荒事の
　くまどる顔も親に煮肴
　沖の赤魚

うなはらや素袍の袖も末廣に
　かほはあからの波のあら事
　丹後の椽めいぶり

名物は丹後丹波の鬼とくむ
　つよみは祖父の名も久しぶり

あはびの若根

市川の若おとこぶしひとこぶし
時にあはびの名もこだまかぶ

黒太夫歯しろ

歯ばかりはちと白吉のかいづより
まつくろ鯛に位さたまる

中川のきす子

せびらきし連もけふよりきすの子の
このかほみせは外に中川

めなだのこぼね

顔みせに開く花みち木のめなだ
けふより間の□□もたて物

さばの早鮓

顔みせの切幕さつとさばのすし
おされてひらく大人の木戸

あかゑひのこくしやう

まなばしをたつる間もなき切落し
入はその名のゑいとゑいとう

さめ洲のすりみ

あけ鳥はや顔見世のつみいれや

やぐらたいこに目はさめのうを

ねぎまの中將

生さきをいのる心の本まぐろ
ねぎはほなれぬこぶすなの神

なまづ入道上髭

吉例のなまず坊主の顔みせは
末ひろ袖の色もかばやき

ふぐの北むき

これはかりあたり給へといのるなり
われらがてうもひいき連中

いはしのむらじ

よい〳〵とひいきひきまく上をゑた
たれもいはしのもれぬ大あみ

ひしこのますもり

かたつはしひつしひしこのあら事は
げにはかりよき升つなきかな

さゞえがらの五郎

三國にその名市川らう宮の
みやこをこしてさゞえからまで

鮑の尾の浮木

よろづ代も島だいごくの上々と
　なるやその名の寶舩の子

わ に の 廣 口

棧敷から蒔間をかけて一ぱいに
　のみこむ許やわにの口〳〵

かはらのしやちほこ

どん〳〵とおしくる波のよせたいこ
　しやちほこつたる木戸の大入

鯨 の 金 ざ し

せつ汁の鯨の威勢ふるき名に
　かへてあがれや魚の親玉

千鶴萬亀

大叶

跋

拙者親方と申は、御江戸を立て千尋の海底、蒼天海はら一色町、珊瑚琥珀の欄干橋を、御のぼりなさると直むかふに見へまする、門は唐門、屏は練屏、馬腦の瓦の八棟作り、篆字を以て龍宮城と、かやうに記しましたが、本家金銀琉璃は庭のすみ、はきだめの中にも澤山にて、東海の吉國ともいふべき黒椅上の部ながら、いまだ芝居といふものなく、いとおしけにおと姫君、いまに二八の娘盛、火縄くさい匂ひきへ、かざ玉ひし事もなく、何とぞわたしも日本へいて、評判のある親玉や、門之助を見たいものじやと願はるれど、萬里の波濤鎖うちの乗物通はねは、たま〳〵一枚繪か流れて來て、波のうね〳〵ぬれしほたれ、鐵の渡し親父橋から楊枝さしの落た時、自筆の發句をみるより外、心を慰むる事もなく、とうぞ便を求めしに、中村座の當顔みせ、名も市川の龍の駒、つけ紐から大はねとは、水府にもためしなしと、鯖のひろもの名びろめの、狂歌あすかと朔日を、海松の千とせとも思ひ付の此小冊子、此歌を見て御心を、おやわらきやつといふうふ子適ふ子に至るま

で、御存ないと申されまい、まい／＼つぶろも角仲間、のたくり出たる跋難、他が家の株なる此跋を、一番ほめてなんさりませと、チト高はつて申す。

へいけんや東作

櫻木に縁て魚を求めとちよつと進上孟子が出放だい一川のたてものとはいふもくたらこま新羅から天竺龍宮城の高やぐら百の鱗の顔見勢にその名びろめの大評判耳にざくらげ目にみるくひの春海原八十島臺の長きよろこびにいさゝか筆をそむるのみ

壬寅仲冬朔旦　一文字述

市川ひいき江戸花海老終

通詩選笑知

叙

觚不觚。五德爲四角。尺有所短。三尺棒何減六尺棒。故不入大門者。不知人倫之附合。不觀芝居者。豈識天地之大入。暖桂易三線之調。刻舟探花火之玉。測海以業平之蜆貝。割鷄用牛島之庖丁。則殆見笑大通之家。予嘗作通詩以授竹屋仙女。五絶歌行會席人口三度日馬鞍脚不及。貢鴨呼地獄非遠。滄海變爲新地。極樂在近。即席忽出料理。方是之時。間巷之士。定二七三八之日。貝區區坊主。無付之天窓。好語陳奮翰。不亦不通之至乎

天明丁未春正月

四方山人書于巴人亭新宅

戲言

一 全體の詩通に盡盡すとは馬鹿をつくすの謂にして李不盡選より善はなし李不盡は則四方山人なり又通詩をよく誦讀する者南郭子遷にあらず竹屋の阿仙なり故に通詩は李不盡選より善はなくきね屋のおせんより精はなし

一 人或はいへらく李不盡選過刻なりとそれはそのはず四方山人子息の髪置祝儀の日書肆何がし催促に迫て滿坐の客を後になし例の硯を左にし一騎中寐ぼけず選し故なりされども往々諸家の萬八又はいけない毛唐人豈この右に出へけんや

一 李不盡選を滄溟選よりもよしとするは大佛の鼻の穴へ傘さして這入ば人間の鼻の穴へやかた船を漕込又大井川の水も時に寄ては馬河すれど吉原の大溝平生丈がたゝず諸事皆こんな物なるべしされど唐詩に鉛槧をくはへて當時笑を獻ずることはおさげすみもあらんなれどそこがもとより李不盡選お

臍でわかせし茶のことなれは大日に御燒下されかしとこつちは蠑螺の蓋かいるの面へ若水をわつさりかけて薰臍艾葉はつか外に御座るまいと無體に馬をさしてあかいふ

朱樂菅江

通詩選笑知

盛男里繁昌安全

御見節句

○御見　男女数をつくす事をいふくわしくはごげんのふしに見へたり

節句　一年いふし〳〵にてこれにふるゝときはいたし

題變士別遊　無駄走

美人不相答。一坐爲金錢。莫愛愁存酒。閨中自有傳。

○變士　いはゆるへんちきなり郡内しまあさぎの浦に住す

閨中傳　いひがたし浩然のさたはやあないがこゝにもらす

夜送長右　兩[illegible]

長子連理欄於半。存中懸送在伊勢浮名滿桂川。

○長右　おびや長右衞門事
於半　おはんのやのむすめなり
連理柵　三巻菅専介かあらはす所なり今世に傳ふる瀬川のあだなみは三日かはりの大入の時左交述レ之篇十か板をもつて冨本の正本とす
伊勢　おいせ参りの歸るさにとうたふ是也

倘粹惣別　　樂貧翁
彼地別二魂靡一親父髪振冠。當時金已沒。今日身猶寒

○樂貧翁　いき人とすひのはてはそうへつくわずひんらくなり周の諺にいわくすいが身をくふとむべなるかな
魂靡　五尺からだか四尺九寸五分ほどとけて跡の五分のたましいをいふ

贈二俠地廻一　　金子豪
俠亭逆高慢一雲突變知己。可レ憐相手者。惡態爲レ誰恃。

○俠亭　米やの冠をかぶりうらはんゑりの衣を着せし人の住居なり
高慢　おほやの事、又曰うぬぼ
變知己　一名へんてこ、高まん齋行脚日記にへんてこ庵といふ名隣うたかふらくはこれならん

寢也爲乎　　比丘新
百銅楊柳腰。已被春風歌。妾髪已斷絶。君鬢那得多。

○春風歌　いとさくらのうたをいふ
君鬢云々　やつこなるべし

南樓坊　　品川
去レ國薩摩遠。登レ樓八山春。無心和尚客。不是在家人。

○薩摩遠　これはさつま芋の笛を吹とき來た人にてぶたや猪をたべてゐなんすよそこで床にふす猪をいつてきかほは紅葉かちりやすこれはてうち／＼あはもりの德なり
登樓八山春　七力やかとくの二階でしやれのめし東海地の七分で花のちるのをきもをで

んぐりかへし雁木から船にのつてかへりやす

和尚客　すみ染をずつとながして匕加減をいたします

不是在家人　山の客人は鬼のこぶし袋たびといふものをたべなんすよ

糞舟驚レ人　　舎弟

北風吹二葛西一萬里運二河糞一掃除逢二漂泊一臭香不レ可レ聞。

○吹葛西　本草鳥目曰、以大根百本換葛西しほから聲は此所へやればとんだ直がする

萬里運河糞　こいとろ／＼ときいゐな聲のそうした黄菊と白きくの不孝な聲を聞に歩行

逢漂泊　へうはくとはへうひやくのるひか

臭香不可聞　千金法の名藥、曰ちやわんに水を一はいくんでゐんばなに置べし、藥研堀のお民か曰、楓江が唄は必可聞臭香はかたきの末にも聞べからずといふ

色道後レ氣　　口説

客貪二爭一夜一大象預期横二執心一不二相待一門外及二落城一。

○大象　薦馬ぢんかう記に曰、舟にのせて大象のおしのおもさをしるべしと云々

門　あけばなしなるもあり戸をたてたるもあり、老子經に曰、玄之又玄衆妙之門

落城　梅川忠兵衞戀飛脚に曰、廿日あまりに四十兩つかひはたして貳分のこる、愚按こゝにいへるは門禮の事なるべし

照二眼鏡一見レ虱　　朝寒冷

昨夕疝氣忘。寒冷格別年。誰知眼鏡裏。取レ虱自相憐。

○疝氣　病名無解にいはく、せんきはせぬきなり囊中へすつこんでかんきのせつは貌を出さぬなり

同レ志用二文使一觀二漸掃除入一レ郭

片時榮花少。袖破不レ覺新。非人御富落。騷動始應レ春。

○掃除　非人郭中へ入てそうぢす
御富　千枚より七千枚にいたる二朱一分をもつて百兩となるなり萬一小家におちるとはなはだこはがし

買也處　　小酌

常住買鼈甲疑是御娘瑕擧頭折勾匙低頭落髮差。

○鼈甲　黄色にしてふのまれなるをたつとしとすくろきをもつていやしとす一黒といふは非なり
折勾匙　かんしやくの所意なり
落髮差　忠臣藏巻七おかるが事

艶情

中街捲珠簾雛妓顰蛾眉但見名倡坐不知必待誰。

○中街珠簾　早朝竹をもつてつゝぱるきやくいたつてまく
顰眉　西施が顰にならふにあらず朝から腹へさけをのみむしがかぶりづつうがすれば梅ぼしをはる
名倡　妹數人あつて一軒のあるじたるをいふ足を八の字にふむひどき時は七の字にもふむ

祝儀歌

白髮三千丈緣眉似子長不知親顔裏何處得衣裳。

○祝儀　髮おきの御しうぎなり此は霜月九日の夜四方の作者のよりあいて此書をやうやうこぢつけしが三人て夜ひと夜かゝつたからそこではくはつ三千丈といふがくやおちさ

獨坐閨中床

禿子高飛盡傾城獨去閑相看兩不厭只有名代顔。

○獨坐　おりあしくこんやもなじみの客人ありいつそむつかしいゐんきよさんすきんせんなどゝいふ實は色男なり
禿子　新ぞうちどりや〳〵と呼ところへ目をこすりながら來るちとりやさつきからよふ

めに耳をどけへつけてゐるとみゝをひけばおいらんの用があつて次の間でねぶつてゐんした

名代　おきのどく〳〵でおざんすと名代をつれきたり一二ふくのみあとを吸つけて出しけいせいひとたゝきるしかも名代を小町とき丶てうつくしいかとおもつたらそうではなく何やらなし

見開帳観世音表具堂上
手水還流鉢龍人却上燈。相逢問心願。
歩盡日參僧。

○観世音　武州豊島郡淺草に安置す
龍神燈　とほる〳〵といゝつたへけれど水にうかりし油なればはちはちはねてとぼらず龍宮魚燈おほしといへどもぼさつ魚とうにてはうけさせ給はず
日參　千日參り也

貧困臺　王維坐

連立臨屋臺散散醉何囘。小言客衆起。若者呼不來。

○貧困臺　宵から六百四ツから四百里にあり或は五百らかんにちかし

半小用

怪來例刻閉。尙下水道鳴總向格子裏。美人笑語聲。

○格子　出かうしなりある付合にけふは又いつものまどにきり〳〵す

雜器

已見鹽梅通。復聞庖丁貫。欲心覩大黒畏出直腕取。

○雜器　淺草市にうるをいふ
鹽梅　あんばいよしの吉兵衛かうる所のものなり
大黒　七福神の一なり或はおてらのかみさんといふは非なり

筑齋

丸散人不呑。但聞藥研響。晩景歩慶甚。復賣

藥代上。

○筑齋　やぶにすむ醫者也

慶菴　藪いしやの表德なりこん禮養子のせわをこのむ裾のきれる事がんぎやすりなり

直利簡

一坐遊興裏。金銀復少少。呼共人不到。傾城來相照。

○直利簡　なまま爪をはなし爪の先へ火をとぼす靈人なり

金銀　きんぎん元とぼしきにあらずつかうことのとぼしきなり淨閑しやうぎの弟子也

動眞小　大黑糞

動眞床上糞散散臭氣生。時拭屁眼跡不使二階行。

○動眞床　とはおいらん國阿林洲といふ所の詞なりそのかみ五郎十郎が大いそかよいの時よふりして工藤もノ丶と云ことをかきはしめたり

糞　とは儒者のかたきをいふうんことはおかゝさんモウよし又お袋のくそはばゝといふ

散散　三月庭訓にさんざんくの手ばさみなどゝ花ばさみの戯言をもちひたり

臭氣　ずいきの事ずい行とはちつとちがいやす

屁眼跡　屁くらい觀音經のしんごん也

二階行　二階なみしづかにといふ文句を唄ふやうになりさがりて封られたやつなりほんの三階むにんあざなは與次郎兵衛といふ

少年行

遣却團子錢。借馬驕不往。矢代射楊弓。上總木綿丈。

○團子錢　十五文に極る是は十五夜の月とすつぽんのぽんと出も玄つたことなり

借馬　是を借奴をはくらくといふどうらくものそこで白樂天もはゞればかゞを曲て邪魔のこしをめぐるといゝやした

楊弓　とんだうつくしい娘か屁を射られて

いつそはらをたつのさ

上總木綿　手ぬぐい二尺五寸二十八文となりてあいたらぬあさぎうらより情なしの直段を定ける

遊世帶入貧　孟今年

空人五兩借。借金忽千金。分下禮相贈。南鐐一片心。

○五兩借　五兩で帶買ふて三兩てくけてくけめ〳〵にちやらくらさげる娘のわる知ゑ也

借金忽千金　千金はせんきのきん玉大きくやくわんとばけた事なりすへは八疊敷の家もぶんさんしやす

禮相贈　一わりの五分のといふはずつとむかしの事今は五わり〳〵と上下の音をさせて取やす

南鐐一片　なんりやうとは何兩だか系らずそこでなゝつやの孔子さんのながれの書つけになんりやうの六たときなるかな〳〵

春前

證文不ㇾ知ㇾ數。處處歩掛鳥。野郎風氣時。行殘知多少。

○證文不知數　仍而如件と書も久しい物か今は惣體ずるける奴は證文の出しおくれといふ作者も作をずるけたら本やに證文をとられて大門へはいるであらふ

掛鳥　そこのすみではぶつ〳〵こゝの隅ではわつ〳〵と小言をいふ鳥なり名づけてふくろうともぶつたくろうともいふ

野郎風氣時　野郎用人物頭いも頭みんなふり出しを用ひやす

行殘知多少　みんな東西南北へ遊びに行と跡て仕方かねへからまむし樣へとゞけるとさゝれてやかましいから大屋樣もよして五人組をたのんで寢やす

藥用訪貧女子不ㇾ遇

昨朝訪産婦。月水作流人。聞說御食少。何知此乳春。

〔産婦　十月めに腹の中てとんぼがゑりを
ゑておきやアがれと云ながら生れて出るそれ
からうとうらく著になるゆへ今川了俊といふ石
部金吉かさんふのぢうおんぼうきやくせしめ
と云々

月水流人　俠妻ついゑうそ八百枚めに〔○
朔日丸〕女醫者とおかしなのれんをかけて内
はお先まつくらさ

御食少　まんまがたべられやせぬまんまり
どうよくだとのよまひごとか

此乳春　春章一こくあたへ八文とむせうに
似づらをかひて八文にうらせやすつぼの印は
乳のはつたやうなことなり

甲陽道　杓子上妓

大關直如髮。眞實牧草多。御領荷附馬。牝牝
鳴玉珂。

〇牧草　古樂府に曰、四ッ谷新宿まぐさの
中にあやめさくとはつゆしらぬ

荷附馬　せうゆで煮つけたやうな馬にて一
せんめしのさいとす

牝々　ひん／＼とさびしい事にあらす綿問
屋の弓の音なり

玉珂　此土地の客はやみちよりせにを出す
おとなるべし

松庵老

名辨見殊勝。編綴遊病門。昨晩汐時盡。合羞
無片言。

〔松庵　姓南都或曰中島三甫藏其先出山
下二郎三一本作松柏未詳

安産月

熱爛過生酔。夜伽頼兄嫂。嫁嫁在何處。半夜
起血道。

〔安産　委は見俊寛島物語

血道　龍王湯をのむべし

恐客欲奸　動昌能

向門經水漲。留氣坐禪心。毎月隨良馬。艶
紅夜夜深。

○坐禪心　是は世上の通をかぐと見たおきやアがれ小法師がごけを見そめたるなり
隨良馬　人の尻馬に乘ることを心ざすそこできそれ退之が千雨いどうふくはあれど千住へ行尻馬はなしとの長だんぎさ
艷紅　とんだうつくしご女が物思ご姿ご獨で寢て居ることなり古樂府に曰、娘何をするなんどのかげでと云々

答五兩急催促

伇杖行千里幹人敢一言曾出大枚利不負三兩恩

○急催促　毎月廿日なりぼんくれの二季はもつともはなはだし川柳傳に日月はなひか耳をそろへてもつて居る

封狀用　拜見

結封御狀中時見御狀上御狀無別條。中間自來往

○御狀中　十七屋を以て最上とすといへり又千里來行の法にはあづまひきやくを賴べしと中はきれた後御機嫌よくなり
時見御狀上　なんだかゑきれぬ用を左樣然者と云てよこすやつさ
無別條　おかはりなんすこともねへかといふ所を別條なしと火打石に上下を着せるね
中間　夜鷹小用集に字は折介、度大部屋の住となり而後合牛に住す、草履なげ居とげて身退くとてう目きゝいのはんれいが通言なり

屁臭

一夕飲爛暴。便爲腹張客。不知透屁音。但有遺矢跡。

○屁臭　西の町のかへりとうの芋でかんさましをのみ途中の勝負少々利運をゑて壹分の女郎を買に二朱ほどの飯をくひ腹のいゝあまりにうら心がありかいばなしにはせんきのせいやら一すかしすかしければはどうせうねうんこの跡あり

腹愁　反吐

先刻尙生醉今夜又若何昨歸相識少
早已座鋪多
（腹愁　かも川の水ぞうすいといふ腹を云
座敷多　げいしやのたくいなるべし

悅喜

襟碧顏逾白袖長裾欲踏春章肴
又籌何子是自好。
（春章　つぼやの人也但おはくは春章とは同名異
物なり
一說いづれの子とはどこのおひめ樣といふ事
然らばいゝ事ではねへじやアねへじやアねへ
か

長竿行　　早行

君家住何邸。妾住永久橋。停船暫問
答。或恐是閃腰。
○住何邸　赤いわしの二本ざし也役所は柊
をうち違ひにつける身どもなどゝいふ奴なり
永久橋　下總かつしか郡にあり意久か兄弟
ぶんの永久がかけはへゐる
暫問答　それがし佐佐木になりかはり一問
答仕らんといふ所へわたしは目ぶてうはうの
千鳥がさしで目よりの趣なり
是閃腰　この女子にふられたものか水の中
へぼちや／＼とおちよ／＼といふ〇ゝ通り名
となりやした跡は諺解欠文多く／＼ふが／＼とな
る

命酒　　豪適

尙有蒸籠贈。應憐棒衒寒。不知喧嘩
茶。猶在不意欄。
（喧嘩　棒ちぎり記に曰ヽ太平らくを奏す
中酌なんぞさい人の心を忘らんといへり

田畝春望

出大門何見。春色滿屏溝。可歎無金氣高
利。一座頭。
○何見　ぬしはいつきなんすと云たらくな
なりで逆つて出ると野郎かぐつとのぼせやす
滿屏溝　見へるものはながひ羽織と水道尻

の火の見やぐら計也

無金氣　つかひはたしてむかしは二分殘る今は半切の紙くずか二枚屛風をはるほとのこる

一坐頭　古錢目錄に日坐頭貧解は今の高利の車の輪めく〳〵りのはやき事三寸の舌をもつて遊里の道を遊行すが如し

留主終日思中村狂言　　針妙

強欲登棧舗。無人連供陪。遙憐濱村菊。應傍薪車開。

○濱村　路考大明神の跡たれ給ふところやゝともすればばちの大あたりあり

薪車　神社といふをかきかへて薪車と書なり色男の氏神にして神木は四ッもみぢだといふ

見遺精思深川

遺精東流去。何時到土橋。憑乘雨國舫。寄向棧橋招。

○東流去　革羽織を着て人のかゝ棒をひいてあるくやつさ

到土橋　ねんたがすけしな客をばおまつりすぎにぐつといびきとおめにかけるその客目をさまし初手はコレ〳〵と云ながらおこす後は名をよびやす三段目の切か樣といふ字をかきのめすね

乘雨國船　ふねか〳〵のつかうど聲に火なは箱を枕にねてうすいふとんのもうせんをかぶりの

棧橋招　此所の霜をたんとふんだやつをよく書くさくら田といふ所をこゝじやア相生やとも申ねんすとさ

登掠鳥樓　　巨秦見

蜀黍食闇盡。鐵漿入溝流。欲廻二丁目。更上丁樓。

蜀黍　からのくひ物也からつけつだからぼろこしともいふか

鐵漿人溝　西河岸か江戸町台がはの後に流

る道はめぐつて居つゞの腹たちに似たり

二丁目　細見集に曰、丁山といふ名山巍巍とそびへるといふ

一丁樓　瀬川のながれきよくおほすの入江うつくし

急難顚餘節　祖想

終日年禮出。折節不運端。遠方精精歩。泥中陷暮寒。

終日年禮　上戸は五六軒にすぎず下戸は百けんにあまる御ぞうにはおあづけ申御さかづきは永日とあしをはかりにかけてあるけは供の者のひようちんも十匁ちがふへしあくせく十匁德をせしめおもはず泥の中へほかんとふみこむたちまち草のくつ足袋・足ぼうにふりければさしひいて持たるべし

罷妾作　里色子

振權初罷妾。樂營猶銜杯。爲問小便組。今朝幾口來。

〇罷妾　おはらい箱をせをはせらるゝ事ぼんでんこくへ左遷せらるゝなり

振權　殿様を笠に着ておく様を尻にしくなりゐゝかげんなしぶん呑ぐちをぬけば閨中たちまちうきしまが原となるふじにおい[illegible]しらぬかほにてもとこん立にたちもどり衆人にどしやう汁をすはせる二分づゝとり所所をめぐれば娘のつけまわしといふ

奉送屋鋪居娵兼寄御坊様

抱守負眞實。奏樂此何時。欲呑坊様乳。無暇見雛鄉。

抱守　平生おぼう様をごしやうだいじにいだくといへども太神樂のたいこにそうゐかたちんばにはいてかけ出すをこしざしに一本きめたる笛ふきのもん所を銀ながしのかんざしにほりて折ふしかなくきのをれたをおくるぼう様ちゝをのみたかつておむつかればゆすぶり／＼しをみるしゝをしんそこのめるはおのがしゝつはななれば同氣相もとむるなるべし

冷多利上　急用

番頭全爭質。餘計忽入衣。貧乏且無暇。曲乘辻駕飛。

○冷多　どうかおもしろそうな名なれど質は空すごいことなり

番頭　七ッやの玄つけん玄よくなり小袖やうやく二分となるこれもつかひはたしての手段なり一分の女郎をもとめて一分茶やへやり駕ちんは茶やからまづはらはせてと二分出來るとぜひ五六百が智恵はふるふ也

曲　十の字の尻ひつた方へつんまげる也

辻駕　四ッ手があり中にははたして手なしがのるそのくせ駕かきに一こう酒代もやらぬ也

休日誘新五左廻北州分別　底武士

便便土手迴。遙遙大門深。淺黄情不淺。臨鄽動氣心。

○土手迴　駕をよけたり見ずともいゝ西がしのれんじを見上てあるき角左どの一ふくつかゑつろふなどゝ玄やれる

遙遙　はる／＼ゑもん坂まで來て御高札をよんで見る

淺黄情　御門四ッ切にてそなたのくれたくれないの楊枝さしをかたみに持て交代する長刀なりのわらぞうり也

動氣心　松の木やはうわうをせなかに居候に玄てゐるふり袖をおむすはいくつ玄やなどといらざる年をきく

平生曲　定九郎

渺渺屋敷廣。茫茫月代荒。刀刀那用曲。大海手不防

○屋鋪廣　半分はうけぢで貢れかたる植木を玄つかりと垣根を結はせるをかすりにかして置其あまりが芋畑

茫茫　中さかやき也よくちりからをもちひ猫の皮をかぢる

那用曲　元より小柄はなし色はこけ茶かこけちやか玄らぬか金氣はなつめかしらなり

手不防　世上のことを去つたりふり也又俳名はつけどもほつ句はお下手にて唄はむだとこき交て去ゆばんでのとであはせかゞみはねへ所でごせへす

逢二香車一　　心氣

一丁飛車手。相逢角行家。助言言不レ盡。思案首將レ斜。

○香車　一名鑓やりての下りやく也それゆへさいけんのすみつこにゐる

飛車　なる時はなり飛車とも高ひしやともいふ

角行　尻目にひたいから人をみるせつゐんつめに月そくをみるなる時龍目となつてやうやう四方をほんとうにみれ共遠目きかぬなり

舟行無體

殿牌愁二忿慍一。公等不レ可レ踐。秖疑天甫役。猶有二六大選一。

○舟行　やね舟なり

無體　いかさまにて取らるゝことなり

殿牌　人の上臺になるやつなり

天甫役　仲赤下三上三なり

六大選　二百十日の大風に十日の雨をふらせて二そく二十月となる

忘二食時一送二生事一無

遠聽二按摩笛一。臨レ窓呼二風鐸一。還愁在宿夜。皿盛二不正一𩟐。

○按摩　つらつきさつま芋のごとくぴいぴいをふき來る

風鐸　そばこをつなぎにいれたるそばなり窓をひらいて手をたゝけともすつぽんきうじには來らぬなり

搔レ鬚

吳殿渺何處。下女方適哉。不忍風雨日。五茉聞二雁來一。

○吳殿　吳王宮裏人

雁來　白鳥の場なれど字かあまるから雁といふ尤雁もおらぬてはござらぬ

答二於金一

船中飮酒罷。向島對鯉閣。土俗多挑者。何駕最往還

○於金　大坂新渡のはらからに煮てそげん堀に名たかし

向島　中田やむさしやの類

駕　さるがく丁から來やしねへか

晝夜宴

幾許長。菓子出進上。着替立小陽。茶番極奢者。全盛

○菓子　もなかの月なり折に地口有武と書し札あり

小陽　普通小用

茶番　過言經曰、焉馬大王始之となりにほりぬきの名水あり仍て井戸のはたに茶番と云

題竹林麥

鹽梅至極好旨味格別多般勸竹林麥腹得幾杯過。

○竹林麥　河内國後山産物寄樵子曰横川麥

飯盛隨河邊にて麥飯の見世を出す二日ゑひのはらをなをす上戸平生くらふべし

別御新造　酒功者

知有錢氣在難遣戯場中無將御殿髮不及當世風。

○御新造　夫人

戯場　剛氣亭曰、異茶附一體戯場也

御殿髮　御しゆでんのかみのやうなあふむけにねておきたやうなたぶのなりにて本心をうごかすこと當世ふうにまさる

常住　無　域

平日在相談。年年工面叛現金悪賽路。此去向長半。

○相談　常に下馬にまくさかふ

工面　八面大王に一わりまし十のんの下指也

悪賽　江戸鹿子曰、番丁を以て手本とす

長半　曹操が高つはり趙雲がかちにげをせし所

産後病　大食人

現妻孕不絶。物入又何深。朝暮男女起。平産三両金。

産　鼠産のごとく子のふへるをいふ

現妻　浪華人呼妻曰現妻

男女　川柳傳に曰、しうとばゝしんちう色の目がひかり

三両　龍王湯のかけなり

師匠恩　例古其

少女噎怕歇。入門寵愛多。眼看花又活。定連不曾過。

○師匠　住所は柳ごしあたらしばたいけぬもうお師匠さん

入門　弟子師匠の門に入るにあらず師匠弟子の門にいれるなり

定連　氣を通して門口よりかへるなり

嘲上州坊山　住僧變

坊山終日棊。左上獨浮浮。如何強性處。推量是上州。

○坊山　じやうじうずいとく寺住職性善棊印に柳を以てす常に印棊をうつ

左　俗上戸曰左利

性強　じやうこわきことぜげんしまの如し

急用印　利高借

才覺急用至。早早認證文。町代逢亭主。沽券最先聞。

○急用　二季其外物まへさためて此急用あり諸人心をいたましむごふんをもつて昔時は百三十二文のそんなり

證文　唐詩街徳遊證文

沽券　金かできるとずつとこれるつもりゆへこけんといふ

京都參會

鶏啼白人去。酒醒寒氣來。我懐乏有際。四條空徘徊。

○白人　ぎをん町の名産なり

懐有際　二分以上は借りるはしも也至四條近
付なし

奴別離　若是

欲別奔奴衣。奴今爲何躬不恨草鞋
遲莫逢門留窮

○奴　赤坂に住すかみは絲びん耳のわきに
いなつまのごときものあり
國風に曰、折介どのはなせおそひわらじが
できぬか門とめか

尋茶郭不遇　茶道

山下問格子遊士贅言去。只在此原中。顏白
不知女。

○山下　鬼門の方なり丑の角をはちがさし
たやうながんしよく也寅の皮のふんどしはど
らの皮のあつひ人なり
贅言　たはことなりむだやちよ〳〵らで夜
をあかすと三味線集に見ゆ
此原中　ゆこうといふはらなり

不知女　梅か枝がひしやくおつとりそのよ
まいごとにけころざす所は一年切と又外へで
いしに出る

口中題　松井高弟

戀路生淺草。柳屋蒲楊枝。廻螺加減意無復
丁稚知

勸醴　不風雅

勸君三國甘酒不須辭胸燒皆迷惑。先生
無別儀。

○三國一醴　淺草門跡前の名産なり下戸飲
之かん氣をふせいでのむ時はむね大にやける
されどもやけはこりなしといふてまけおしみ
をいつてせうもこりもなく又のむ氣なりおた
ふくこれにゑふときはけげんなかほをす

題工面塔　會俗

見德山寺在。人情慾皆深爛漬千枚更無附
不掛心。

○工面塔　くめんつきてのちとうをみてう

んふてんふにくめんのくめんをする事なり

見德　諺曰、富士二鷹三茄子此夢をみる度一分ッ、そんをする義なり

摑雲　雲中に百兩あり千人にすぐれたる里の者つかみあてるなり三四人は少々のたのしみ有四十六人あぶないめにあつてかへる九百五十人みな雲ばかりつかんでかへるなり

夷風歌　不拍氏

聞說狂歌師近年秀句耽可笑會頭月偏集栗下庵

○夷風　ゑびす歌なり

近年狂歌大にひろまりて思ひ〳〵の狂名をつく連中相たがひに狂名のみ覺へて本名をしらずその友をたづねて行ときはむかしのそうしやも今のりんもあきれた顔してひつこむなり

栗下　くりのもととて狂歌の宗匠もとのもくあみ歟

氣象歌　性美人

北里質碎忙氣象夜曲被至寢覆蒲團不敢及離妓

○北里　くるはなり

ゑちくさいそがしとはいつたんゑちにをきたるをちよつとかりて用をたし二重に外のゑちやへつかはすをいふきせうにまかせてよぎやりて上のふとんをきこねる也尤色ごとよりごく見ゆれど氣せう實はあはれむべきことなり

誘人　大通隱居

偶來松葉屋雙枕三蒲團閨中無他事夜明不知寒

○松葉屋　北遊廓曰左丁右側なりまことに客をまつばのかんざしをなげてきぬ〳〵人の來なんすことをいのる

三蒲團　名代のゑんぞうよくとぢ絲をほぐして見たりはしをあげて見たりする

閨中　枕より外にゑる人のなひといふも久

しい
不知寒　まだ早ふをゝすとおびをかくしたりはおりを出してくれぬなと手のあることはかへす〳〵もみな〳〵様御きけんよくくはしくひやうばんは氣を唐詩てそのこじつけを見てくんなんし

通詩選笑知終

北廓全盛名代

李不盡通詩選

東都鶴　日本房趣行

不許乘物
遊里一輿

序

去年所著通詩五絶者。青樓在前。筆耕在後。門人代作。率屬萬八。名代雜妓。徒傳寢言。幸因最員之引倒而未作切灸之包紙也。今此通詩七言古詩者。四方瀧水。一本氣而未嘗一合雜惡酒之割也。屬者狂歌如花見虱。狂詩如犬齒蚤。所謂陽春鏡餅。其味彌堅。其嚙彌寡。嗚呼。銅脈先生。飛脚途遠。杵屋仙女。駕鶴不下。孰知通詩之所以爲通詩矣。

天明甲辰正月有二的歳

四方山人書于滄洲樓

通詩選

四方山人編選

門人紀定丸校

七言古

東方客

東方通客臨遊所。
船頭朝飛新地雲。
仲町櫓下切悠悠、
三十三間堂何在。

晝三古意

晝三座鋪連二間。
蒼妓縱橫過茶亭。
佛開二斗幟承朝日、
雨側茶屋爭張簾。
遊女禿兒大門側、
連子窓中作合歡。
天水桶棟天中起。
素見相望不相知。

大橋

朔繊醉亂始歌舞。
暖簾暮捲土橋雨。
山開祭度幾春秋。
如矢光陰客自流。

衣裳錦

衣桁簞笥七寶環。
雛妓絡繹向中町。
神越鳥居稱正一。
一群遊女共挿櫛。
象牙瑇瑁萬種色。
裡衣松上垂尿翼。
水道尻櫓雲外直。
初會相逢詎相識。

借問吹桐倚床住。
得成色客何辭貧。
色客金持眞可羨。
生憎枕元鳴簞笥。
三線三下如口舌。
片片草履過廊下。
深夜顔白闇中出。
通人脂下鐵煙管。
淺茅原中烏夜啼。
隱隱朱門六鄕邸。
發聲飛鴈東叡北。
倶邀船宿挑灯火。
箕輪芋貴地廻群。
田町夜夜人如穗。
段畝田町連山宿。
衣紋坂裾拂地垂。
全盛大盡三度來。

曾經切年度辛苦。
願成金持不羨韓。
橫去代來君不見。
藝者隔壁調三線。
河東長歌豐後節。
鎭鎭鐵棒入深夜。
書文頼客情非一。
遣手笑顔金百匹。
大音寺前雀欲栖。
遙遙土手八町堤。
借角入堀聖天西。
倶往箕輪金杉蹊。
鼻歌一轉口紛紛。
段畝朝朝鷺假寐。
五十間道控三谷。
夜見世燈映大堤。
牽頭頓作若者盃。

內證痛事爲君獻。座鋪揔花爲君開。
別有屋形稱淺黃。約裏極日不相忘。
濕深山來欺麹室。夜中決不寐女郎。
千金漫漫是豪傑。居續悠悠坐入湯。
自言二度諾明月。自謂敷初遣衣裳。
節句物日不相待。花見燈籠俄頃改。
昔時紀文奈良茂。只今惟見高名在。
寂寂寥寥宗匠居。年年歲歲且書。
獨有連中評物聞。卷去卷來待人儲。

藝子行　半亭子

藥研堀下陽春水。立花町邊繁華子。
三絃會合稽古外。參詣繁昌不動裏。
銀棟璹瑁玉爲者。風俗吾妻錦作雅。
可憐柳橋繫舟涯。可憐草履纏絲花。
此日中洲遊生簀。此時洲崎入升家。
升家美酒鶴步香。飲去飲來銚子傍。
歷歷武左寄合集。婆婆年增紅粉粧。

葛西徘徊武藏屋。羅漢顧步榮螺堂。
傾首傾心平相國。爲春爲秋佛妓王。
古來酒宴皆所用。況復明日芝居見。
願作鵜絨結細腰。願爲猫皮中撥面。
與君相拳轉相親。與君雙棲養兩親。
願作櫓壯年年轉。誰論楫枕一度新。
百人同憶色男氣。一德一損紙屑塵。

代悲辻番翁

突棒山頭鳳仙花。人去人來問誰家。
一樣乳母來椽側。各當日向長匍匐。
今年鼻落顏色改。明年穴開胯何在。
已見明地新建門。更聞屋鋪變成原。
古人無復組合中。今人還當御年番。
年年歲歲番相當。歲歲年年役自繁。
寄言生醉大吐瀉。可憐半死行倒者。
此翁若黨亦相勸。伊昔高慢御用人。
奧樣若殿曹司谷。遊山見物兩國濱。

高祿相番召ニ御前ー。知行撿見獨ニ金錢ー。
一朝臥レ病無ニ用捨ー。三春御暇在ニ此邊ー。
便便草鞋打レ幾時。須臾中貫切如レ絲。
但看古來友達者。惟有ニ道心坊主衰ー。

婢樣歌　養子分

連ニ坊樣ー分多ニ世話ー。轉下手分步遲遲。
十五夜月長如レ此。十三七分復何時。

至ニ甲州驛ー見ニ新三光院日暮里山ー去年今日十月會式題レ壁同前成レ咏

畜生背中附ニ荷物ー。遂到ニ追分ー毎相屈。
豈意宿中無ニ馬篭ー。千軒萬屋咲ニ菖蒲ー。
藝來新揭各酒筵。郭潤緣長本陣連。
處處言分同堀內。自許能得ニ不レ遊旋ー。

自烈啼　旅泊

七箇八山鳥欲レ還。還飛啼啼御殿山。
夜中着レ錦品川女。陰膩如レ星隔レ窓語。
擲レ筈悵然憶ニ客人ー。獨被ニ篭房ー涙如レ雨。

向島吟

紫檀之棹華梨舟。繼ニ三線ー箱渡ニ船頭ー。
美酒隅田置ニ諸白ー。入レ婦隨レ波任ニ自由ー。
大郎有レ待割ニ洗鯉ー。醉客無レ心隨ニ泥鰌ー。
其角發句懸ニ夕立ー。業平都鳥空白鷗。
興酣船宿呼ニ待乳ー。歌成一曲凌ニ蘭灘ー。
孔明張良若在レ此。鐵石亦應ニ北國流ー。

親孝行　野父

讓レ手按摩覆レ手爬。紛紛輕薄婆與レ爺。
君不レ見勸當帳面子。此道一向棄如レ茶。

船中七福歌

發之食レ夢似レ沾レ咽。二日居レ寶貰船眠。
大黑三斗俵積レ前。常通ニ隱里ー金流レ泉。
恨不レ持レ槌打ニ一拳ー。福祿月代亢ニ天ー遠。
長如ニ蓍蕷ー半爲レ鯨。愛レ鶴樂レ鹿稱ニ壬仙ー。
總而瀟灑辨財天。把レ撥琵琶彈ニ便連ー。

皎如二硝子一爲二倒懸一。布袋長齋坊主前。
醉中往往細物鄽。蛭子一日釣二百扁一。
西宮市上肴店眠。天子三男被レ乘レ船。
自稱我是海中仙。毘沙門形當世傳。
著レ兜穿レ鎧百足前。揮レ矛持レ塔如二武邊一。
壽老神殿亦神仙。浪乘船音響二酒筵一。

園爐裏端鑵子歌　珍珍

今年稻似二去年一好。去年嫁到二今年一老。
始知嫁老渡二杓子一。飯上青蠅君莫レ掃。
君家爐邊不レ可レ當。孫彥玄孫三太郎。
外歸婆樣恒飲レ茗。煠滿二鑵子一煮二花香一。

勝春章圖屏風賦二得市川太刀一　贔屓

市川腰間佩二太刀一。暫可レ拭レ汗柹爲レ袍。
公家惡驚繪坊主。切幕颯開角前髩。
執レ之引立誰能前。氣凜花道連欄邊。
連用二東夷南蠻語一。更及二四夷八荒天一。

當屋似顏寫二奇狀一。天地乾坤儼相向。
運レ筆爲レ書時一枚。使三人心在二棧敷上一。

贈二狂連一　詠史

去年上木不レ惜レ名。今年戲作仿流行。
羨君有レ酒能催レ會。羨君無レ錢不レ貪着。
如今四角文不レ聞。羨君不レ作二四角文一。
如今八文字本棄。羨君不レ讀二八文字一。
定會會應レ有二名歌一。即席飛入何足レ記。

信州對レ飯作

夜食不レ厭山盛飯。晝飯不レ厭五六杯。
眼前飯櫃又長滿。腹中滿滿如レ懷レ胎。
主人有レ祿鉢坊主。報謝米程應レ不レ取。
郎今相對不二食盡一。飯後相思復河補。
二月二日歸國際。願君且宿檀那家。
來年若レ此人不レ置。新粉進二上蕎麥花一。

三江花火夜　浮樂興

三叉引潮連海平。南國見物共日傾。
花火隨波千萬兩。何處遊山如大名。
三絃嚩嚩造酒宴。風吹虎尾又似電。
醉裏流星不覺飛。十二挑灯看不見。
花火一色費金銀。皎皎白玉孤月輪。
今晩何人見花火。花火何年初慰人。
枝豆食食無窮已。本熟年年總相似。
不知新地樂何人。但見茶屋掛階子。
南鐐一片去悠悠。青銅二本不勝愁。
誰家今夜船州子。何處拳酒四季樓。
可上生簀客徘徊。應向樂菴卓子臺。
樽三庖丁割不盡。角屋勘定拂還來。
此時相笑不相聞。願逐藝者轉抱君。
玉屋長飛光不滅。鎰屋空鎖闇自分。
昨夜御袋夢落花。可憐今晩不還家。
通人流質去欲盡。土藏落城復斜西。
身代貧貧隱皆無。吉原品川無限途。

更乘猪牙幾人去。花火動情附燃株。

土弓艶　叡南

君不見土弓諸客因娘聚。不捲霞簧見坊主。
天氣晴來山下間。三文錢落十本羽。
香煎山中非煎茶。廣小路上列酒家。
秖今惟有松樓鐵。曾出祇園梶葉芽。

堺町篇　三式翁

矢倉太鼓響。家虎木戸門。
不觀芝居壯。安知江戸尊。
森田市村中村亭。葺屋堺町木挽町。
役者連名集三座。茶屋分軒横二丁。
顏見積物八百八。挑燈蠟燭數千挺。
手打連連對贔屓。番附翩翩貴正銘。
式三番叟付千才。引幕口上平旦開。
花道斜通見付柱。引船直指羅漢臺。
奥樣內證入。女郎北國來。
暫聲冠素袍。割込象年市。

毛氈敷東側。進上運菓子。
火繩應風煙。札錢如雨墜。
校文世界定。習藝歌舞戲。
足利組時代。伊豆通日記。

時代日記鉢木薪。捕雪炊粟待明春。
工藤氣象三莊主。大望約束五月旬。
近江八幡平敵役。鬼王團三忠節臣。
鬼王愁歎古今映。老母困窮曾我貧。
曾我兄弟在鎌倉。朝遊大磯暮鶴岡。
具足借金將入質。小林引鎧尙留郎。

景清重忠兗。少將與虎粧。

三方九十春已頽。阿七吉三二替催。
俠客尺八八町達。娼婦總角意休髭。
曾我祭禮自千秋。俄興趣向事風流。
例年土用時候入。歌舞諸君三座休。

女形紫帽子。立役黃金簾。

不破桂木傘三本。信田葛葉狐九尾。

鳴神上人不獨祈。白雲黑雲自相依。
且論三百兩金是。寧知四十七人非。
古來名人如慶子。道成寺藝眞難覗。
始見友切丸紛失。俄聞範頼公出仕。

未投手裏劍。先放三羽矢。

浪華無復五人男。禁庭誰畏假勅使。
相顧出世皆有待。居然姓名咸應改。
訥子和事既流傳。柏筵氣象今何在。
馬去馬來跡足馳。爭名爭位徒出爲。
久觀芝居終難出。空遺聲色誰見知。
當時一旦遊芳町。自言線香長一時。
倏忽搏風著振袖。須臾食年爲白首。
黃金遣果二分殘。一服一錢交情厚。

五井徒費驕。淡雪遂食豆。

留場仕切喧嘩頻。惡口雜言輕貴人。

貴人有見物。女中無撿身。
粉灰與家老。追從末社神。

已矣哉。第一回。　狂言人夜多ニ新規一。
路次爭レ先覗ニ樂屋一。　三階自矜誠足レ登。
稻荷町衆幾平伏。
給金高遂積。　評判封未レ開。
誰知見功者。　獨負ニ頭取才一。

夜鷹鼻歌贈ニ折助樣一

平原芝

蕎麥犢鼻褌。　本莊鮫橋鷹。
只來ニ原中一臥。　不下向ニ疊上一登上。
夜半寒寒念佛唱。　面體新發楊梅樹。
楊梅晝間撩亂看。　當レ夜發レ色立ニ川端一。
六錢兌得裏波色。　女悅春心長命丸。
三十振袖待ニ四十一。　還將ニ島田一盡ニ君歡一。

跋

滄洲樓四方先生。曩著通詩五絕而其名無隱于世今所著之七言古詩亦復妙々謔浪之魁當世之儁不嘗使通人感慨。野夫亦褒其腹皮矣。是自四方之一本氣。孰不稱其味哉。近世之贅書。皆此糟粕。而不足味焉。嗚呼雖衆人卿顧小髮流行。所謂雀千聲。豈勝於鶴一聲哉。門人貞九樓

腹唐秋人撰

通詩選終

叙

觚不觚。五德爲四角。尺有所短。三尺棒何減六尺棒。故不入大門者。不知人倫之附合。不觀芝居者。悪識天地之大入。膠柱易三線之調。刻舟探花火之玉。測海以業平之蜆貝。割雞用牛島之庖丁。則殆見笑於大通之家。予嘗作通詩以授杵屋仙女。五絕歌行會席人口。三度白馬鞍。駟不及舌。嗚呼。地獄非遠。滄海變爲新地。極樂在近。卽席忽出料理。方是之時。閭巷之士。定二七三八之日。與區々坊主撫付之天窓。好語陳奮翰。一不亦不通之至乎。

天明丁未春正月

四方山人書于巴人亭新宅

狂詩諺解

四方山人編選

七言絕句

郭中禮日　大門

正月二日酒盃臺。茶席茶筵勸レ客杯。
人情已厭ニ舊冬苦一。高慢那從ニ北里一囘。

【河東松の内】に云二日は茶屋にゐの日とてと云々茶席茶筵とは茶屋の事である客に盃をすゝめておめでたうおざんすといふ所なり【諺草】女郎買のぬかみそ汁とて舊冬の苦は忘れし御事されどすけんの一德に松はやの古風はありがてへあふぎやのあげ卷もきれい〳〵などゝ高慢らしくかたるを云

至ニ松葉一　御祝言

三日翠簾樂ニ席遊一。今春諸客作ニ群集一。
獨憐傾國人繁昌。不レ似ニ親仁顏腹立一。

【吉見細見五葉松序】に云若みどり春立そむる松のうちより松や〳〵の年くるゝまで古今の色も中の

町よしはらにたと＼へんもの松にあらずして何ぞや
と云々げにもときはの松葉屋のおいらん瀬川のな
がれたへせずして松人の言の葉かけどもつきずう
た姫松のいく千代かけてあらたにはれるこしばり
をみし玉だれの内ぞゆかしき繁昌の里なるべし
【松の内】に云三日は客のきそはじめと云々
又【四方巳人集】かよひくる客をたのみし水茎の跡
着ぞ春のにしきなりけるとよめり
かゝる美人の百の媚と親父が顏の十面とは日をお
なじくしてかたるべからず

贈朱椀朱器

知君茶器本翩翩。爲許開爐赴席邊。
高慢會中應計値。根來山下有經年。

おてまへにもみごとな茶器がある⑩へろびらきを
して會席をひらくであるこの朱わん朱をしきはよ
ほどかうまんなもので根來わんのふるきなればち
や／＼むちやくにしてをくもをしいから御料理の
ちや席におくるちや

戲贈丁子君美人

紅粉青娥映素顏。櫻花坐上二丁間。
野夫獨向閨房去。謾學釋迦入涅槃。

【金羅傳】姉女郎に顏の二丁目トまことに二丁目の
てうちんは芝居の板べいから出るものとおぼえて
うしや内てう山とはくわんをんのてうちんの相印
かと思ふいなかの大じんもこのさとにきたる思ひ
出にひとりね玄やかの名代とつてねはんの床に入
りしふせい三ツふとんのにしき戸にひなつるのす
ごもりは千山萬山大に叶といふ字のかんざし新ぞ
うかぶろにいたるまでいづれおろかはないはづと
せつをうさんの直ばなしなり
櫻花坐上とはさくらの花のはりつけをいふ

長壽臺　悠亭主

長臺便綏掃風塵。亭主閑窓泉水濱。
卽今安坐尻堪痛。况復九年面壁人。

【長壽臺能書】第一ゐけんの長坐遊君のはり見世き
ん番のたいくつ下略一名延壽臺ともいふよく／＼
ひまな男の作とみへたり、九年面壁【傳燈錄】にみ
へたるふんだんたるま夜もひるも赤い衣きて壁を

にらみゐたる故事

坊様　　　眞元氣

北越山中列二角兵一。饅頭煎餅對二羊羹一。
庭中七尺蜻蛉返。門外唯聞太皷聲。

角兵とは角兵獅子の事であるまんぢうせんべいはあまいものじや

【川柳傳】越後獅子五百がまはし立ぐらみ　按に角兵すら猶かくのごとしいはんや丸一にをいてをや

送三奥道者遊二順禮一　宋之陪

御客賞歎此地違。木賃數處青蠅飛。
補陀落下長相憶。秩父山中去不レ歸。

千里の客はあれども伯樂はつねにあらすとかや、木賃とはきぞうとてはなはだいやしむ事ぞわれこれを宿屋めし盛にきけり

【秩父詠歌】ふだらくやきしうつなみのをのれのみくだけてものをとは同行【百人一首】の歌である

振二雙六一　重井

大津一望禁庭秋。日見子供臺上遊。
聞道島田不レ可レ渡。心隨二洪水一共悠悠。

【道中雙六】に云ひとつあまれば大津へかへる　下略

又【戀女房染分手綱】に云これ〳〵御らんせうたゞやんせこれこそ五十三次のと云々【道中雙六島田之條下】に云大水にて三日のとうりう按に土塚の居風呂大磯の力持箱根の手形をわすれ吉田のとまらんせ荒井のちんぼう龜山の大雨水口の虚無僧等一々筆につくしかたし異本

【夷歌連中雙六】ありこれ後人のなすところ一向わかりがたし

奥州詞　大瘤

座頭菜莫茶椀盃。欲レ飲三線夢中催。
醉唱二仙臺一君莫レ笑。古來音曲幾人哀。

【諺草】に云座頭の菜頭をくふたやうなと云々あんたるこんだか未詳【碁太平記七ツ目】にみへたる宮城野ゐのぶの仙臺ことばも此事なり按甲辰のとし【森田座顔見世大帳】第一ばん目二ばん目の間【蜘蛛絲幼稚問答】を引てふきや町太夫元スケとなり狂名橘太夫元家にて仙臺座頭の藝ありみな人感歎

せざる事なし▲ことに名人でムり升ル

この詩もたゞ仙幸庵頭の浄るりをのべて結句にむかしの人をなかせたる心持に▲幾八か哀とつゞくれるかたゞしは韵字にてこずれるかとういふもんだ光とく寺の門か

二丁町詞 せいへいてうときこへればよいが

隈想衣裳髪想容。春風拂檻桟鋪重。
若非東側桟鋪見。會向三階樂屋逢。

其二 とはさんじき二間つゞきなり

牡丹紅葉菊凝香。贔屓澤山宗十郎。
借問三升誰得似。可憐海老倚威光。

牡丹紅葉を一説に吸物の事とす甚非なり牡丹は福牡丹にて三升のかへ紋紅葉は四ツもみぢにて新車のかへ紋 菊は名代の瀬川帽子はまむらや大明神さま〳〵の其中に名はかくれなき宗十郎澤山の字は澤村のこぢつけ東夷南蠻北狄西戎天地乾坤第市川五代目の親玉花道つらねときてはたれかは肩をならぶべきその嫡流をうけつぎしいづみやのむすこさん七才とかく寶珠のたま威光かゝやく〳〵おいたちはかあいのものやなアゝつがもない

其三 とは三かいの事かおなかちさうでもなし

立花銀杏雨相歡。各得町中帶笑看。
拜借市村無限座。桐長桐樽倚闌干。

【川柳點】に云左近のたちはな右近の銀杏なり【顔見世看板口上】に云御町中様ますます〳〵御きげんよゝド略

【桐氏家譜】に云元祖幸若與太夫中略女子長桐―大桐―坂桐―桐大内藏―千桐―大内藏―桐長桐元祖より天明四年にいたつて二百四十五年

【同点ばら〳〵のつらね】に云東夷南山の花橘北州にうへてそのはゞ〳〵たり時なるかな西山の桐長桐が初点はゐと云々

客僧行

棚經坊主清明香。持佛拜來金箔光。
但使主人能與百。不知何處是西方。

蘭臺先生盂蘭盆の詩あり左にしるす

盂蘭盆夜月如霜。我輩悲秋半疊床。
素麵汁隨猪口冷。棚經錢雜雁頭長。
燈籠深映三尊像。爐氣輕浮五種香。
共說明朝齋日好。可參淺草閻魔堂。

うら盆のていこの詩につくせり　そのことのはの匂ひせん香清明香あま茶なことではゆかねどもこゝにはたゞ百の錢さへとれば西はとつちともゑらぬゑもつまのお所化のたよりがござるのみ

岡邊山屋歌

岡邊山屋半丁秋。影入熱湯豆腐浮。
夜發大門向三谷。思君不見下船州。

山屋は新吉原にあり名豆腐を出す岡邊は豆腐の異名朝かへりの客茶屋にて湯豆腐を食ひ三谷堀の舟宿まで來ても猶其味をおもふ心をのぶ　船州は船頭なり

上戸醉巡南閭歌二朱

誰道南樓行路分。高繩西去萬人欣。
地轉八山爲御殿。天廻九耀作相紋。

こうろわかるとは札の辻の事である【童謠】に云なゝつ八山ごてん山と云々星宿とは京傳が【天けい和句文】もにみへず五星七星十星のかたちを以て倡妓のおたへを定るをいふ

其二

醉客往還寺柵門。深更戻駕沓雲屯。
品川本宿開新宿。雙掛行燈照國猿。

生醉あかばねのほとりを往還しあるいは駕にのりてゆくじや　本宿は新宿にむかふ橋てまへより橋むかふまで茶屋のあんどう畫のごとくおさるのかほのあかきをてらすじや國猿は四國邊淺黄浦よりいづるくはしくは【南客文集】にみえたり

聞菅亟相左遷太宰帥遙有此寄

櫻花落盡女房啼。聞道松王忠義齊。
我讀菅原受傳授。隨風直到梅花西。

櫻花落盡とは櫻丸はらきりの事松王いはゞ女房よろこべせがれはおやくにたつたはやいと云々これ忠義のゑるしなり梅花は梅王が事くはしくは【菅原傳授手習鑑】にみへたり

秀鶴樓從路考丈出樂屋

美人上辭中二階　櫻花霜月映招牌
矢倉遠影碧空出　唯見長桐評判佳

中二階は樂屋のうち女形のゐる所をいふ櫻花とは【辰年桐座番附】重重人重小町櫻といふ名題なり此顏見世新芝居大あたりなり

望大門口

衣紋坂曲大門開　土手東連至北廻
兩側青簾相對出　遊山一片水邊來

【吉原細見】に云衣紋坂此所往來路三曲にしてくるはをあらはさず又【娼妃地理記】にみへたり兩側青簾とは中の町茶屋のすだれをいふ水邊とは向島かまつさきかなんでもすみだ川邊

早發惡態

朝衝惡態障人間　千理口論一日頒
兩町俠聲鳴不住　喧嘩已過棒撞顏

あしたにとは肴うり買だしに行ころなり【惡態卷物】に云おまへさまの御むりはごもつともと云々【太平樂卷物】又【俠中俠惡鯛俠骨】に出たり【諺草】に云喧嘩過ての棒ちぎり木挍に馬鹿なつらをいふとはたなのしたの【童子格子】にみへたり

秋下水門　水門は淺草川の水門なり

霜落水門松樹同　猪牙無恙走秋風
此行不爲鯉魚味　自愛名君入廓中

霜ふれば柳ばしの柳はちれども首尾の松はいつもおなじことちや秋風にはしるとは猪牙舟のはやきこと鐵砲玉に帆をかけたるごときをいふいふこヽろはけふでかけたのはむかふ島のこいといふはつけたりまことは堀からあがりのよしはらといふ世界なり一說に名君の字は名山のあやまりなりしからば名山の客か未詳

所帶貨粉

吸飲切臺烟草香　新家世帶不堪張
只今惟有定紋枕　曾照鴛鴦比翼房

あら世帯はとかくたばこやが多いものじや女房は大かた川竹のながれの身よるべさだめぬ一ツまくらにむかしをしのぶなるべし

越中番子

越中犢鼻破レ尻頰。　番士還レ家搔ニ總身一。
木虱如レ花滿ニ縫目一。　只今惟有ニ懷中紐一。

【史記】司馬相如越中ふんどし一ツにて酒家のみせさきにはたらくと云々桉帆かけ舟の如きふとしをいふ長さ三尺と云々番士は番太郎の事木虱【木艸綱目】虱の條下に云花見虱むづがゆく咏香し有レ毒貧士好んでこれを喰ふと懷中紐は東都芝金杉より出る鍋屋の何某の秘方なり詩の心はあきらかなり

龍宮曲　園城　靈なんじやう寺のれいほうときこへやうといかゞ〳〵

昨夜射歸三上蚣。　龍宮前殿水波重。
田原藤太新承レ寵。　案外功高賜ニ釣鐘一。

三上山は近江にあり田原藤太むかでをゐて龍宮で落をとりし事は【前太平記】又【龍都俵系圖】に詳なり

西驛春艶　西驛とは四谷をいふ

西樓夜靜菖蒲香。　欲レ入ニ桃園一道路長。
斜抱ニ蒲團一時見レ札。　朧朧月色院ニ三光一。

春の詩にあやめさくとは露しらぬとかや桃園は中野の西二里にあり時札は夜九時七時六時ありさそひあはせて下にゆく〳〵八時ばかりはなし三光院四谷にあり新日くらしといふ稲荷神社あり初午にぎやかなり雲樂の別莊より近したぬき熊などのすむ所なり

西驛秋艶

御封不レ及美人張。　止動風來牧草香。
却根投レ錢新ニ堀內一。　空懸ニ四谷一待ニ天王一。

御封堀內より出るはり御封の事をいふ柱にはりをき七日め〳〵に上へあげてはる三七二十一日にいたりてその病いゆるといふそのあいだ藥等を禁ず止動【風來山人天狗髑髏緣起】しいとどうとの文字はあふても馬めが合點いたさねばと下略ほりの內ゐしきのうちくる〳〵といひてその暮のたのみをいとひてきれたる客また夏あたり立かへりて六月四谷天王のまつりのころくれども又盆前は心もとなき七夕客をいふ

欲心祝詞

眞成見得久尋思。　夢得二黄金一覺後疑。
火照二行燈一知二妄想一。　分明富札立レ錐時。

見得【撮思博千金方】に云五臟の煩は夢をなす○富十二膽三茄子をみる時は千二百三十番と考ふこれを見得といふ其病治しかたし名づけてもつたが疾といふ按かん應寺水いなり第六天などは事ふりたり

今日に至ては何人目〳〵も出來たり又【一ノ富見得秘傳書】にくはし

蒸籠曲

白馬金鞍從二頼光一。　童兒十五競二衣裳一。
棧敷少婦簾レ花坐。　遙見二飛塵一上二覽場一。

せいろうはつみ物しん上のせいらうなり詩の心は神田祭とみへたり【風土記】韓田神社とあり【江戸砂子】神田明神は平親王將門の靈をまつり祭禮九月十五日と云々頼光【神田御祭禮番附】七番すだ町一丁目の條下に云鬼のかしらの萬度附祭頼光山入かいぢんむしや六きらい光ほうせうさだみつすへたけつなきんとき馬上はなぞのひめ〳〵にたるひめはなかごにのり六尺六人ヅヽおきながいたし云々

按父唐來參和があらはす所の【頼光邪魔入】芝川春草が【大通山入】等二三丈の【鬼窟大通話】など少々異同あり○決しがたし童兒十五【同書番附】に出たる十五童子のねりこのことをいふか八木高直が本に見へす猶たづぬべし

橋艶　艶橋は大橋なり

橋中少婦不レ知レ愁。　帽子凝レ粧刈二比丘一。
忽見二百銅丸太色一。　悔令三折助覓二梳油一。

【梵網經】に云比丘比丘尼は二百五十戒と云々按末世に及んでわづか百戒の通用となる帽子は花帽子をいふ丸太【和名抄】比丘尼一名丸太【風來山人志道軒傳】に云大橋の丸太はたてやうとふせやうと錢玄だいとはこのことなり梳油芝の大好菴兩國の五十嵐を始とすと【世事談】にみへたりいふ心は大橋のびく〳〵に花の帽子にてにかねつけて何心なくみせにいたりしにたちまち百銅のせにをみてをのがあさましき世わたりゆへ坊主あたまのはへさがりにすきあぶらをつけて折助といふお客の足をつな

ざとめたるいとざくらの花ざかりの色さめやすき身の上をいふ尤あはれふかし

出精行

建部源藏望草紙。　大方懸水無乾時。
店賃高直門人絶。　扇子到來知是誰。

建部源藏は手習師匠の名【菅原傳授手習鑑】にみゆ古歌にてならひはさかにくるまをおすごとくゆだんをすればあとへもどるぞとあるに大かたさうしに水をかけてならはぬ子供をいふ扇子は弟子入のしるしなり

【論語】にもそれみづから束脩以上を行へばとありやす

敗軍行　おてきにふられてはいぐんしたることをつくれり

火見面高百尺樓。　荒言獨坐屏風秋。
更吹口笛蒲團上。　無耶野郎根付愁。

火見とは面の高き人に比していへり秋の長き夜屏風の内でひとりねざめのあぶらつぼ口をして口ふゑをふきごうはらまぎれにつくりたる詩なり野郎根付とはひとりふとんの上にゐるかたちをいへり【神靈矢口渡】入道道晉云うれぬ根付をみるやうにふとんのうへにおれはかりとみへたり

五明樓贈雛妓

花扇連襟夜入床。　五明送客大門傍。
樂遊雛妓如相問。　一片執心在玉章。

五明樓墨河の西無都街にあり本地蠟色の惣格子にて棟上の高き家なり花扇は二代の名家にして能書の名ありたき川たけのなかれきよくかたらひつたふとをちの人々中の町の夕ばへに花か人かとあやめもわかぬかたちのは外にたぐひもなゝこしといふせりふなり樂遊【手毬歌】みなさま子供たちはらくあそびと云々

一片【新内節の曲】に云義理一ぺんのあだつきはけつく心のもめるたね下略

柳太夫稱豐前會歌　柳太夫は柳橋の太夫なり

陳珍々

富本承流西蒲東。　最初先奏是齋宮。
女子預開櫻草待。　祇今誰並太夫功。

富本は淨瑠璃の一流なり齋宮は太夫の名高名なり

櫻艸は豊前太夫のかへ紋いてう鶴さくら草みな人のしる所なり富本豊前大夫門弟富本豊の字をおかす娘八百八町の出格子にみち／＼たりくはしくは【柳樽櫻艸】にみへたりさて講釋なかばにちよと御ことはり申上まする富本流の板元は江戸通油町耕書堂でござります御用の節はおもとめなされませとなんのいはずともよいことをいふぞ

二

鳥落里長調子鳴。
三絃式佐乾繁榮
挪吹兼太夫迎座。
開幕常盤津照名。

鳥落とは飛鳥もおちるといふ事里長姓は鳥羽屋故にかくいふ式佐姓は岸澤ともに三絃の名家なり常磐津兼太夫の名は注するに及ばず世の人のあまねくしる所なり小松川のながれつきせずしてときはの松のひとしほにみどりの色のまされることといふはむだなり

將棊　玉さいかのきよくのこじつけなり　助言

玉角徘徊望桂香。
飛車走去不稱王
盤上靜時無一戰
步兵識作成金光

【三才圖會】將棊は信長公の時より起る【將棊經】にくはし王は玉王なり角は角行桂は桂馬香は香車王と稱するは龍王の事飛車歩兵はしれた事これほど駒をならべたて丶金銀のこまのみへざるはいづれにしてもふつていなものと身につまされておもひ侍り

番夜作　高直

藥罐寒天獨不氷。
中番何事是相應
小僧今夜廻町内
酒代明朝又一升

自身番のていをつくれりくわしく／＼は大屋惠住【年中行事】にみへたり町入用の多きをなげく詩也くわしくは白子屋にたづぬべしシラアン

大道聞吹笛

月明横町物干間
音淨風鈴蕎麥還。
借問按摩何處去。
笛吹一夜過玄關。

風鈴蕎麥【食物本草】に云夜たかそばと似て非なるものなり大平にもり上おきありて毒なし按摩の笛を吹ゝ事近比の事なりいにしへ[illegible]いふも笛をふきし事あり此玄關はいづくをさせるやまた横町もの

ほしの間とあれば町いしやか名主さまか但山師のげんくわかあとの中番でき〻たまへ

漁舟詞

漁師遠上本船端。　一片棒株萬仭瀾。
今日何須怨無纖。　暴風不度相模灘。

漁舟は沖釣の舟なり、棒株は海上の地名帶き〻みよあひのすなどの類【漁人道しるべ】に出たり相模灘は御濱の沖にあり石尤風のうれへあり

壯年行　　無勝負

暴揚谷風小野川。　分關當少快晴天。
一擲千金渾贔屓。　柱徒四本不知旋。

谷風名は梶之助奥州の人なり小野川名は喜三郎大津の人なりそも〳〵相撲のはじまりは【日本記】垂仁天皇七年七月當麻蹶速野見宿禰といへる狂歌師の名の如き男角力をとりし事あり又【相撲大全】或は【四十八手戀諸分】等にくはし關【秋の寢覺】に東谷風の關西小野川のせきとあつたやうなりよしかうそだに〳〵一擲千金とは花をやるをいふ土俵ぎはにつめ居てうち出しのたいこがなり四本柱とかけむかひになるまでかへる事をしらざるはよく〳〵のすまふずきとみへたり少快晴天とは晴天十日のうちとかく雨のふるをいふゆゑにしへより晴天八日のさだめなりしが安永七年戊戌三月二十八日より深川八幡にて角行興行ありし時より十日となりしとをほゆ

歸鷹　　錢氣

柳原何事引連歸。　眉碧月明兩國折。
二十四錢沽夜發。　不堪清左共浮飛。

古詩云二十四文明月夜と云々夜發【しかかる和名抄】夜を待て發するを夜發といふ【庭訓往來】遊女夜發之輩云々淸左【せんぼう集】酒異名

於職

郭中無處不繁華。　於職毛氈新造斜。
茶屋挑燈傳蝋燭。　三絃散滿五町家。

【其角十牛贊】やみの夜もよしはらばかり月夜かなといひしごとく繁花ならざる所なし詩の心はいはずと志れし御事

送客茶石州

一向千家樂自分。　薄茶亂點說紛紛。
手前今日誰相見。　遠石州中惟拔群。
千家【茶人系譜】千利休遠州は小堀遠州石州は片桐石州をの〳〵流義をなしからず【川傍柳】酒無半蔘酢をまはし〳〵いふ又すまふとりかこひへいれてあはれなりも出來たり

永久夜泊　永久橋は關橋の北にあり

鼻落聲鳴篷掩身。　饅頭下戶拔錢緡。
味噌田樂寒冷酒。　夜半小船醉客人。
船饅頭は食類にあらず船中の遊女をいふ古ぼちや〳〵のおつよといへる高名の遊女ありしとかや【英一蝶朝妻船自賛】あだしあだなみよせてはかへる波枕といへるもこの類にしてひんのよき物なり

楊枝鄽詞

矢大臣門淺草濱。　數株寒木自生春。
晩來豆散鳩相集。　飛入本堂不恐人。
矢大臣門は淺草寺の東門をいふかん木は楊枝なり【柳樽】やうじみせせんたいむりな鳥をおい

自北州至西戲呈之花又村諸君

芋魁熊手挿錢堆。　無客不言花又回。
土堤近所遠千壽。　盡是女郎寢後來。
芋魁くまでは酉の町の名物なり酉の町とは【江戶年中物見圖】鷲大明神は葛西花又村にあり每年十一月酉の日を以て祭るよし云々今土手をよび千壽に出みせ出來て御祈禱〳〵の聲かまびすし天明四のとし霜月九日十日ともくれ竹のふしみ町なる扇巴屋のみせびらきなりしが十日は酉の日なればつとめて余丹坊蔦唐丸榎雨露住など土手の酉の市にあそび侍りし【巴人集】にみへたり

山下郎事

煮肴賣切鯨鱿殘。　店上蒲燒炭火寒。
蹴轉含情已無限。　莫教振袖倚闌干。
濱田屋が札に云煮肴賣切申候
かはやきは鰻店の名物なり

宴杖頭錢　百の錢ないふ其頤（繪本譬草）一升樽と百の錢に手が開にその儘みなになることはやし（雜文穿袋）杖頭は百文なり一杖頭は二百文なり委は儒者の（小遺帳）に出

一升匏有升貧。　百貫裸無百貫人。
能向店前幾回醉。　先沽古酒莫辭貧。

【諺草】一升いるふくべは一升いる又男は裸百貫と云々古酒と新酒に七分三分の割やうありと折助が口傳なり【萬葉集】太宰帥大伴が歌にしるしなき物を思はずはひとつきの濁れる酒を飲べくあらしといへるも此の詩と同腹中なり

服麁葉盆　　應客

秋染龍王一葉半紅。　甲州西望草平空。
誰知狠犬河原意。　服部蕭蕭國府中。

龍王煙草名甲州又同【川柳點】しうとばゝ甲州月に二斤のみ西望とは馬につけてくるをいふ草平空とはたばこのけふりをいふ【河東廓家櫻】たばこもけふる花の雲おいぬ河原近年はやり物なり萬象亭が【新女意題馬鹿集】神明の妓仙臺の客に對して曰ナニおいのがはらだへヲヤいとこのかはらがきひてあきれる服部國府みな烟草名蕭々とは少々といふ事かさうはきこへず烟草舖障子に云諸國名葉色々

書院　　式禮

時主珍客引相過。　演禮雙方盡綺羅。
無限廣間行欲盡。　圍居深處數奇多。

時主【名物六帖】自鳴鐘トケイ演禮【中庸】禮儀三百威儀三千委は【小笠原躾方】にみへたり圍居【茶湯秘傳】にくはし數奇は物すきの多きをいふおざしきのきれいさおかこいのお物ずき御茶の服加減お料理のあんばい珍客と亭主と双方ともに機嫌よくめでた〳〵の若松さアまアよゐへだもさかアへて葉もしゆうげるおめでたやちよのう子おめでたやせんしうばんぜい〳〵ばんぜい〳〵萬々歳

狂詩諺解終

輕井茶話 道中粋語録

序

學者の足下。落中の貴殿。侠者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者は拙者なり。べい／＼詞がやむべいなら借りても三百つん出すべいとは古よりの諺なり。夫輕井澤の地たるや。川柳傳にあらはれたる。一方の色里也。今雪國の肌を探り。飯櫃の底をはたき。大通變じて變通にいたる。淺黄の裏の裏のうら。紺の布子に白あがり五所紋あり／＼と。かきしるしたる此一卷。あまねく世上にうり詞として。その買ことばをまつはたそ。山の手の馬鹿人なり

姨捨山人書 （巴）

輕井茶話 道中粋語錄

一名 贅通輕井茶話

始めて旅を信濃路や〳〵東へかゝる道ゝ馬追分も過來つゝ暫しとゝめて打替る沓懸の宿あとになし泊り近づく足元は所所ともなしに輕井澤旅籠屋ちかく成りにけり【馬士】旦那何屋へをろしやすへ【旅人嘉兵衛】織色もめんに黑紗の裝束した半合羽を着てばつち尻はしをりなり着物に合羽で見へねども〇りの所より唐ざんとめの縞入と見へ下着はつむぎのかはりじまじゆばんのゑりは黑紗綾と見ゆ茎肌かけたる細身の脇差一本さしもちろん三度笠を打かむる何屋でもよいわいな【馬士】駒の方へ向ひ大きな聲してお供さんどうしやうね【供伊介】黑きもめん合羽を着布目かへしの股引をはきて下に〇〇〇ゆかた上には青梅じまの袷と布子を重ね着してしんちうの太刀脇を一本さしこれも三度笠をかむるなんだ〳〵といそゐでおひつく【馬】今夜ア何屋にしやうといふ事さ【伊介】旦那はもちろんおらも木曾路ははじめてだ何處でもよささうな内ィ付てくんねへ【馬】女のゑへうちにしよふね【嘉兵衛】ウヽおやまのうつくしい所がよいわい【馬】そんなら津川屋にしやせう所〳〵のはたごやよりこゑかけてお泊りかへ〳〵とよぶ【馬】津川屋だ〳〵ヱヽ畜生めモウちつとあるきやがれめんよう姉を見ると足が遲へおれに似たさうだと笑ひながらいそいで行ば程なく津川の前へつく【馬】サア お泊りだよ【津川の女ごさ】江戸者と見へて詞もかはらずおはやうお着なさりましたそれ與八どんお湯う取らつせへ【與八】あいとゆをくんで來りおいて行【さき】サアまあおみ足を【嘉】イヤわしはよいわいな【さ】そんならお前サア【伊】アイさうして置てくんな【さ】ドレもゝ引をとゐて上やせうか【伊】いゝにへよし〳〵【馬】旦那なんとゑへ内でござんせうが【伊】とんだ事た【さ】馬士どん茶でも進せうか【馬】いゝにへモウ呑ずとこんたのその一言でそこいら中がしめつて來るハナ【さ】へヽヱ久しいものさ【馬】久しい物じやアねへほんの事さアイお供さん小付が四つよしかへ【伊】ウヽよし〳〵大に大儀だつた酒手を出してわたす【馬】アイ是は御きんとうでござりやすそんなら御きげんようおさきどん御馳走さつせへよへヱいめへましい見れば見るほどゑへけつだと尻をたゝく【さ】アレサよごつせへなそんなら休まつせへ【馬】アイどう〳〵ヱヽ此くたばりめが又尿をこきやアがるか此女郎をかう氣で一番勝負の長がら〳〵半と出てごう腹まぎれかゝが面ア見りや目玉が丸くやつと夜明のびんぞるが出たしよんがへ引うたいながら行【伊】どうぞこぼしてくんなよ【さ】アイさうしてお置なさりまし【伊】おらが旦那ア何處だ

【さ】アイさ奥の八畳イ夫おつれ申さつせへよ【子共初】サアこつちれへきさつ来やりまし【嘉】（おくざしきより顔をだき）てヲヽ爰じやはいの【伊】此荷物共ゥ【初】そりやア打ちやて置つしやりまし今に私共が持ていぎますべへ【伊】そんならば頼んますよ（とざしきへ行）奇麗な内でござんすね【嘉】ウヽゐへ内じやお山を呼うかいな【伊】アイ咄しの種にようごせんせう今に大かたよべといひやせう（其内あいことゝ）【さ】もし〳〵女郎衆ゥ出し申ませうかね【嘉】ゥゝおらア女郎衆よりこなさんがよびたいわいナ【さ】それはもう有がたうござります本んにお前がたはお江戸は何処でござります【嘉】あてゝみな【さ】下町かへ【伊】きついものあたり〳〵【さ】下町ときけはお懐しうござります【嘉】よう知てじやの【さ】私も久しくお江戸に居りましたがちつとした事で今こんな所イ來ております【伊】色事出入だの【さ】何にお前【嘉】イシヤさうじやろう〳〵【さ】マア夫ならそれにしてお置なさりましそして女郎衆はとしま衆かへ【伊】もちろん〳〵【嘉】イヤわしは新造がよいぞや【さ】アイつそれならとしま衆としんさう衆にいたしませう（勝手へ入此間）【初】鯵干のむしり肴（なとにうつし持きたる）【嘉】此肴を見や【伊】とんだ事ぶゐんの干物だの【初】いんねぶゐんじやアござりましねへあじの干物でござりますよ【嘉、伊】ハヽヽ〳〵【さ】（先に立て）サアあお出なさりまし【二人】あゐ、一人は【苅藻】（年二十四五と見へ黒もめん紋付の布子も、色いもめんうらふき二寸ばかり出したるを着て花色太織のはゞのせまき帯をしめきせるを手に持ながら来る下着は三つ四つ着たやうに見ゆれども皆ゑり計とゝ付た物にてどうより下にはわた入一つなり是此所の風俗と云々）一人は【浮艸】（年十六計り花色のめん繻もやうにあかねうらの綿入羽屋でめいせんもめん帯た尻こけにして是又ゑりに四つ五つ着たやうに見へざしきへこに〳〵出て片ひざ立てすはる）【さ】（さかづきとりあげ）ヤイ憚ながら（と嘉兵衛へさす）【嘉】あい（のんでおく）【さ】（こいろなくさい前へ）【うき】ヤヽわしにかへ違つたんべへによ【さ】（わらひながら）イヽへお前でござりまりす【うき】どなたもお早うござりますす（とあいさつして）のみ さああげますべい【伊】わつちかへのんであいあげんますよう（とかるもへちきにさす）【かる】ひとつへせへますべへかの【伊】（なかしさこらへて）へせへッこなしさ【かる】（そんだらとうけてのむ）（此盃こひ嘉兵衛にさす筈の事なれども所がらにて其様なきたつた事もなけれは）【さ】（こいろふて）お盃はわたしがお預り申ませう（となさ）【伊】なんぞ肴ッねへかね【さ】お前方御酒ぅ上りますが、【伊】旦那ぅ無地たがわつちやア呑やす【さ】そんなら何ぞあけたらよかろうが爰らには何もお肴が、玉子は、【伊】其卵よかろう〳〵【さ】左様なら今に（といゝすて勝手へ入）【嘉】サアお前が

たちつと咄しでも云なさらんかい【かる】始めてとい
ふ物ナあじなアもんでこれぞといつて語るべゑ事も
おざんねへものさそれにハアお前がたの様な江戸衆
にやア何をいつてもわらわれべへと思つて語るべへ
と思ふ事もかたられねへちやあノウうきさん【うき】
さうだア〳〵それにハアわし共がやうに年のすけ
ねへ者ア猶さら笑われべへとおもつて口さアきかれ
ねへ何だか怖いと思ふせへかげへにさぶいようだア
【伊】ナニ江戸者だとつて何もそんなにごはがりなさへ
る事アねへはな【嘉】さむいのは窓の明て居るせへだ
たてよう と立て窓をさす 【かる】窓たアあんの事だかおもや
アさまの事だもし【うき】何をいふにもでかく遠へ申
すよよんべもお客がてうちんがめつからねへとつて
さがさつしやるから何だと思つたら火俗の事さ【さ】
膳な二膳持て來る あいお吸物が出來ました【伊】是はお世話
〳〵サア旦那【嘉】ふたを取て これは變のコレ見や とわんの内を見せ
る【伊】あれが爰の卵か江戸じやあぼた餅といふせへ
【さ】ホヽ〳〵あなたア御酒をあがらんさうだからそ
れで【伊】そんならゑへ とこれもふたをとつて ウヽ是は正眞のたま
ごだ【かる】なにハア玉子に精進なアござらねへ皆

なまぐさへもし【伊】いゝにやよし〳〵【嘉】コレ此箸
を見や【伊】なんでも今夜アへんちきさ【うき】ヲヤ
寒竹の事をお江戸じやアへんちくといふげだの【初】
お客さんがた湯あびさつしやりませんか【さ】ほんに
今の内風呂へおはゐりなさりましな【伊】あい旦那サ
ア【嘉】そんならさう云ようかいの【初】サア來さつ云
やりまし と先へたては嘉兵衛も立て行 【うき】もつて行、【伊】サア一盃呑な
さらんか【さ】いゝへマア後にいたゞきませう【伊】後
といはずと呑なせへナ【かる】ナニよさつ云やりまし
まだいそがしかんべい【さ】アイ又今におまんまを出
しますからいそが云うござります【伊】そんなら行て
きな【さ】はい左様なら水いらすに御咄しなさりまし
と立て勝手へ行 【伊】お前のみなさらんか【かる】いゝへサち
つとでも呑とハア面が猿のように成申よ【伊】それで
も今夜アさむいからよかろう【かる】何ハアさぶい折
に呑と一倍さぶくなり申スよ【伊】さむかアもつとこ
つちイ寄なさへ【かる】最前からさうは思ひますがわ
しらが様な者アさぞいやだんべいと思つて遠慮のヲ
云ます【伊】ナニいやな事があるもんだずつと爰へよ
りな かれこれはなしのうちに 【嘉】湯より上りきたる サア伊スはいらんかい

【伊】ヱあい【かる】サアいきますべへうきさんはどうしまゐた【嘉】今そこへ（といふ所へ）【うき】（ちやをくんで）サア茶ア進せませう【嘉】あい【かる】そんだらサア【伊】いかう〳〵（と立て行かるも一所に）【うき】コレかるさん浴衣ウバ竿サアイかけておゐたによ【かる】おい〳〵【嘉】湯へはいつたさかゐいかう腹がへつたようじや【うき】今におめしが出ますべへマア酒でも呑つゐやりませんか【嘉】わしは酒は根から呑やせんお前のみなさらんかい【うき】わしものみましねへ【嘉】そんなら是がよかゐたゞなさい（ぼたもちなやる）【うき】是アはお好だもしアゼ食つしやりませんか【嘉】わしはモウいやじやはいナくはんせ〳〵【うき】そんだら（と手づかみにしてくふ）【嘉】ほんにお前はゑらう好なさうでうまさうなくひやうじやわいの【うき】げへに好だアもし【嘉】大概いくつほど給なさる【うき】何さお江戸衆なんだア信濃者とつて大喰いするやうにいはつしやりますけれども私どもはそんだアじやござりましねへ此位のぼたもちだら十七八もくへば澤山だもじ【さ】あいおまんまをヲヤもうお一人のお客わへ【うき】今湯サアいかつしやりました【さ】そんならマアお隣出さうかね【うき】いんナアさつきからげへにひだるいといはつしやるからマア爰へ出しなさゐ【嘉】ほんに先イ給いせう【さ】さ様ならさうなさりましお、人は又お跡でも（と膳をすえる）何もござりません【嘉】是はお世話〳〵【さ】お前お頼んまうしますよ【うき】あい【さ】又おとなりへ出さねへけりやア成やせん【うき】お隣は誰だアもし【さ】田毎さんの彌五さんでごぜんす【うき】フウ彌五左衛門さんが來さつたか夫アハア田毎さんナアうれしかんべへ【さ】この頃じやア追分の松屋とやらイいきなさるとサ【うき】さうだアとよ何でもハア男といふ者アまづいもんだアよ【さ】夫ならお頼ん申やすよ（と置て行）それでもハアめしびつが【さ】おはちハ今によこしやす（その内に）【初】アイめしびつ（と持來り置て行）【うき】サア替さつゐやりまし【嘉】アイそんならコレサかるく盛てくんな【うき】アゼひだるいといはつゐやりましたゐやアおざんねへか【嘉】まだ食やすがそんなに盛付ちやアくひにくいわいな【うき】どうでもお江戸衆だあナわし共が方なんどゐやア絶食だアといふ病人が此位にもつたのヲ三盃計アくひますよサアお汁のウ進せませう【嘉】そんなら憚ながら【うき】アニはゞかりあせハアなん

ぼかき立味噌だアとつて千葉計じやア悪かんべい上汁ソヲもんますべへ【嘉】おかしどうでもよいわいな（此所へ【伊】湯より上り来る【かる】もきたる）【うき】わしがお客がひだるいといはつしやりますから先サはじめましたよ【伊】よし／＼【うき】お前サの膳もさういふべへナ【伊】アイさう云てくんな【かる】手拭ひはどうさつしやりました【伊】ほんに置てきた一寸と取て來てくんな【かる】ヤレはあいくぢもねへ事だア（と取に行）【伊】なんぞくへる物がござんすかね【嘉】いゝにやモウやつはり夕の通りしやわいナ【伊】そいつアいけねへネ（【初】膳を持【うき】に汁を持來る）【うき】サアお前もくはつしやりましアゼ刈もさんわへ【伊】イへ今一寸と手ぬぐひをとりに【かる】是だんべへの【伊】ウ、それ／＼【かる】うきさん大にお世話よ【うき】何ハアせわな事もおざんねへあつちにもお客が在からお崎どんがいそがしかんべへと思つて【かる】ほんに彌五さんもきさつたとの【うき】さうだアとさ【初】アイお食を替さつしやりまし【伊】ウ、さあ【かる】アゼついて居ずともゑへぞい【初】そんだらお頼ん申ますべへ【うき】めしびつウばそこイ打置たがゑへ【初】湯サ持てきますべへ（と立て行）【かる】何ぞ替さつしやりまし【伊】いゝにへモウ旦那なんと木曾路はむごいね【嘉】とんと肴なのない所じやのよう何所でも出すもんじやがノウうづわとそゝうもないかいな【かる】アイうづわも少へげだで高遠の御殿様が此前も甘雨とやらで買つしやりましけ【伊】（わらひながら）ハテ高い物だの【うき】ほんにわしも一度鳴所を聞ましつけがきつくはい／＼と鳴ましたつけ（膳とれる）【さ】おくたびれなさりましたらうお床にいたしませうサアお前がたも着けへてお出なせんし【かる】そんだらサアうきさん【うき】あい（二人とも着替に行）【嘉】こなさんの物云計りはかわいらしいわいナ【さ】ほんに初では嘸をかしうござりませうに【伊】イヤもうとんだ變よ【さ】さうでござりませう私共がきゝ馴て居てさへをかしい事がござります【伊】時に旅籠代は【さ】アイ明日でもようござります【伊】そんならあすの朝、所に勘定[illegible]【さ】（床を敷て）あいだを仕切らずはわるうござりませうネ【嘉】ウヽまんさらではいなもんじやナ【さ】左樣ならかういたしませう（戸板を横にして仕切る）【伊】屏風の氣取はどうでこせんす【嘉】とんと侘た物じやナ【さ】ハイ御きげんよう【伊】そんならあすは七半立だよ【さ】アイかしこまり

ました【嘉】おさらば〳〵【伊】今夜アゝへ江戸みやげでごせんすせへ【嘉】ほんにはなしの種じやナ【伊】うづわの間ちがひなんぞはきつい事ネ【嘉】イヤもうやう〳〵こたえて笑はなんだわいノそしてマアあのわしが女郎がぼた餅を十七八くふといふたわいナ【伊】お前（めへ）ほんにかへハヽヽヽ〳〵【かる】【うき】一所に來る【かる】サアお前がたそべらつしやりましな【嘉】サア寐よう〳〵【うき】夫だらわしは先サねますよ と床へ入る【かる】おめへもそべらつしやりましな【伊】アイ今に寐やすがあすの朝までつかねへやうに何かをちつと取あつめて置てねやす【かる】そんだらわしはその内お客の連衆がきてござるから一寸といつてきたくござりますが夫ともハア悪くおもはつしやるべへだらいきますめへ【伊】ナニサよし〳〵いつてきな〳〵【かる】そんだらいつて來ますよ と出て行【嘉】廻（まわ）しといふ所かいの【伊】そんなごつたさうさ【うき】まあしたア何の事だへ【嘉】廻しとは何さアノ何さ摺木（すりこぎ）の事さ【うき】その摺木かようしたもし【嘉】いゝヘナ土産に買た摺木をよう仕廻ておくれといふ事いの【うき】アゼお江戸にやアおざんねへか【嘉】江戸にも有はあるけれど名物じやから土産にするじやわいナ【うき】何所サアの名物だアへ【嘉】アノ何さ東海道薩陀峠の名物さそれじやさかゐ碓井峠の孫杓子さつた峠の孫すりこ木といふわいの【うき】はてなもしアノ孫杓子ア疱瘡の咒ひに成げだの【嘉】ウヽ孫摺木は麻疹（はしか）のまじなひサほんに疱瘡といへばお前のつむりはとんと疱瘡疾のやうじやわい【うき】あせへ【嘉】櫛もかうがいもみな赤いさかひにさ【うき】よくあんでもいろ〳〵の事べへいはつしやる憎らしいの とつめろこれはいづくもかはらぬところなり【嘉】ヲヽ痛いわいの【伊】なんだかもてるといふもんだやアねへネ【うき】聞つしやりましさま〳〵の事べへいつてなぶりやる事よ【嘉】ナニなぶるのじやないわいコレ伊スはやう仕まうて寐やいの【伊】あいもうふせりますおらが女郎衆アどうしたか知らん【うき】今に來ござりませう【伊】ねて待（また）ふ と床へいる【かる】来るうきさん〳〵ヤレハヤ寐たさうだアわしがお客さん寐さつしやりましたか【伊】今まで起て待たがあんまりお前の來様が遅へからねやした【かる】そりやアはあおきいどくだもしサアわしもねますべへ とこへ入る【伊】ほんにぬしやア幾つだ【かる】わしかへ今年取て二十五だもし【伊】夫に

やア若へようだ【かる】アニはお若へ事アおざんねへよ【伊】やつはりこつち生レカ【かる】よつほと阻て居申よ【伊】どこだ【かる】諏訪在郷でござりますよわしもハアこんなア所へ來る筈じやアござんねへがとつさまがどうらくで江戸サいつて行衛が知れましねへ夫からハアかつさまとわしがすべへ事がねへからカヲこけへきました不便だあと思つてくれさつしやりまし【伊】そして其おやぢ殿ア江戸に居るのか【かる】さうだといひますよどうぞハアお江戸サア下つて尋ね度思ひますけれどもすべへやうも御座りましねへ【伊】江戸は何所だの【かる】あんでもあま酒のヲ見るやうな名だつけもし【伊】どうもそれじやア忘れねへかうと醴なればア、何か麹町か【かる】ヤレそのかうじ町よ【伊】糀町といつても廣い事たから忘れねへ【かる】そりやアはあ仕方もおさんねへうきさんなんだアモウ夜中だアもし【伊】いゝにや今まで咄しごゐが忘たつけ大かた例刻だらう【かる】例刻たア何の事だへ【伊】例こくとは例刻の事さ【かる】ウ、何たかへ惠比須様の兄弟ぶんの事だんべへ【伊】マアそんな事たさうさサアむだアやめて寐よう／＼又あすがはや

いから【隣座敷客彌五左衛門】空色木綿紋付のたけみじかき布子紋に石餅のことくきへてわからす裏は裾廻しと見へ茶色木綿に上の方は中形の小もん見へるを一ッ着て帯はといて有ゆへ何かしらす白もめんに黒さぬいゐり袖口かけたるじゆばんあらはにうこん木綿のふんどしも少し出しかけ床のうへに大あぐらかいて居なから 是さ／＼こつちよウむきなさろ【相方田毎】是もねまきすがたにていせじまの油じみたる布子に黒ぬめの如く光る色の丸くけなしめ背中をむけてすはりゐる よさつ忘やりましなそんだアきげんじやアおざんねへ【彌五左】マアちよつとさ是／＼【田毎】ヤアはあよさつしやりましよ【彌】少しはら立こゐにてウ、拙者おれがいやになつただアなそんたらどうすべへおつふられた所に居べへ筈もねへと立帯をさうにする【田】その帯をとらへてヱ、もう何の事だもし【彌】あんの事じやアねへこつちよウむきなさろといつてもやあだ／＼といふじやアねへか【田】サア夫もわしがあまり小腹がつつ立たからの事だアもしアゼはあそんだら追分の松屋サいかつ忘やりました【彌】そりやアはあおらが悪ゐでもあんべへがガラさそはたれアからの事だアよそれもはア友達だらば斷もゆんべへけれども名主殿の猶子の言れる事たからやあだともいはれねへから二三度アいつたアけれ共何お身様に見替べへ【田】そんだらさつきの文さアあせ見せさつしやりましねへ【彌】おらも見せべへと思つたアけれ

ともさつきやアはお張合に成つたアからの事よ何ちむづかしい事アねへけれどもでかく文者だアよ【田】どれ見せさつしやりまし【彌】ソレ見なさろ（とこゝら縞のはな紙入より出すな）【田】（とつてひらき）こりアはおわしがにやア讀づれへよんできけさつしやりまし【彌】そんだらおれが（と取てよむ）

○こうびんにまかせ一筆申入まいらせ候過しよべは久〳〵物かたりのふ申たあだはお其のちはそれ様の事べい思ご　らし手のものもかゝらうちやるやうだつちうよんべもきやるべいと申事たゆへよふとへまちもふけのし申たゆへけさあはあゝさま山ののふびんのみるやうにむねかがた〳〵つんもへ申こつたつちうたゞはあはやくてへめんのしたくがんのふかけてまち申まいらせ候【田】成ほどハアおもしろく書たアな返す書のウ讀つしやりまし【彌】アニ是アはお讀にやア及ばねヱ言傳だアよ【田】ドレ名サ見せさつしやりまし【彌】名ア見ずとよかんべヱ【田】いんにや〳〵何でも見せなさろ【彌】そんだら見なアさろ【田】これであんだもし【強】千年だアよ【田】ヤレハア可愛らしい名だアな文さア上手なり惚さつしやる筈だモシそれだアとつてもこな様とわしが中アきのふやけふの事じやアござんねへハサたげへに根性骨ノウ打明て女房にすべへ成べへとつてやれハア御勿體無天照皇太神宮様のウはじめ神樣達を誓文にも書入た中しやアおざんねへか今と成てこな樣の氣が替ればわしはハア何としますべへ餘りと云アむごつちねへ人だアよ（となく）【彌】ヤレ何てもそんなに氣サもむ事アねへおれだアとつても申合のウしたもんだ物ヲ如何樣の事があつたとつても替はるべへたア思はねへよヤレはお泣事アねへはよ【田】（なき聲にて）そんだらどの樣ナア事があんべへとも替つて呉ますなよ【彌】何ハア函柄杓のウ手にとらねへ法もあれかわる事じやアねへよ【田】ほんだケかへそんだら私ア何も云べへ事アござんねへどうしたもんだアかハア此樣にでくか可愛く成たと云も約束事だんべへよ夕もお江戸衆ウお客に取たら床花だアとつて大錢のウ一本くれさつしやつたから何でも今夜ア仕廻て居て呼にやるべへと思つた所イ來さつたもしマアよく積つても見さつしやりましこな樣と申かはしのウしてからアはあどんな美人男でも目サ付筈ア おざんねへ只ハア明ても暮てもこな樣の心がかはるべへかとおもつて苦

になり申よ【彌】おらアはお替る事じやアねへからお身様替らねへやうにして呉さつせへ【田】そりやアはあ氣遣ひさつしやりますな【彌】思ひだした約束のふんどしサあしたでもよこすべへ【田】まだ遅くつてもゑへが色アあんだアへ【彌】强がよかんべへと思つて手織の木綿のウ上紺に染させたアよ【田】そりやハア四五年はこてへべへ【彌】あせだかハア今夜アげへに寐づれへやうだ【田】モウ今度から追分イはいかつしやりますなよ【彌】アニハアいく事じやアねへよモウなん時だアかとなりじやア起たアげだ【田】隣ア旅人衆だからおきたんべへまだでかへ早へ一ね入しきますべへ【彌】そんだらちつとの内ねべへかい【田】わしが能時分におこしますべへ【隣かる】何も落しやアさつゑやりましねへか【伊】いゝにへよしく〜【嘉】わしが柄袋はそこかいナ【伊】いゝにへ爰にやアごぜんせんどうして又なくなりやした【嘉】いやアノさいせん小刀をつかふた時に取たさかい【伊】そんならごぜんせうよく御覧じやし【嘉】ヲヽあつたわいナ【うき】わしやア又何の事だと思つたら脇指の革頭巾の事たアね【さ】來はいお荷物はみんな付ましたよ【伊】アイお世話く〜【嘉】何でも夕からみんなこなさんのお世話じやの【さ】ナニお前【伊】サア参りやせうアヽ大におせわに成やした【かる、うき】に一同そんだらきげんよく立つしやりまし【嘉】アイおさらばく〜【さ】どなたも又お上りもなせんすなら必おたづねなすつてくださりまし【伊】こりやアもう怨在へはなしされば【亭主】なはじめこゑに左様なら御きげんようお静にあしまし【嘉】アイ湯治にでも上つたら又よりやせうハイ【さ】ハイあなたお笠を○あいゝと手に取菅笠の白きを見れば夜ぞ明にけり東雲の心うきたつ衝の音夢に見てさへよいといふその春駒に乘初の仕合よしや木曾始商ひはじめ筆はじめ笑ひはじめになれかしとはじめて馬鹿を又つくす盡せぬ家のお目出たに愚作は堪忍信濃者板く〜

道中粋語録終

和漢同詠道行

自序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふ時ありき、この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐にては漢通ども、梵字の阿字の夕がゝしを蓼びやにし、文字の四角な玉子をも、ふは〳〵にしてのみかけければ、まして和國のいろはにほへとちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、道行和漢同詠集、からもやまとも色事の中は丸由たゞ丸かれと、思ひそめたる筆ずさみ、時代をおして考れば、凡十千萬八千年以前、わい〳〵天皇の御宇にあたれるとぞ、

馬鹿羅州　阿林子題

和漢同詠道行

千年の怨夢一時につき、ともに北邙山上の煙となりしあだひとを、戀こがらしの涙の雨、言のは草やしめるらん、出二人むかしを今の珍々説は、こいに心もから國の、四角な文字も丸やまに、かどのとれたる東國や、これも他生うのゑん山、といちがのながれ河竹の、ふしどをいでし二人つれ、から子わげにはさつまぐし、しまだわげにはとふ櫛と、昔の人の筆のあと、いま身のうへに東坡きん、ひと目計りの頭巾きて、宋儒のづきん氣象とや、かたい男も大日本、和らぐふうぞくいつしかに、色な色としけん〳〵と、あさるきゞすのつまこひに、おのがありかは人のくに、海をへだてゝおせゝを持ば、つきおちからすなくさへも、氣にかけこゝろおく霜や、姑蘇こそ城の鐘のこへ、なるは夜はんか有明か、ふたりが命捨かねの、つく〴〵顔をうちまもり、縁はいな物からやまと、二せん里外の人ごゝろ、四かいのうちは兄弟と、云へど妹脊のみちならね、みちにまよいし不佞こそ、戀の重荷のそれならで、こいのぬけ荷と謂

べし、不佞はきのふからたちの、歸國おもひたゑはてて、この日の本のつちくれと、なるも死生は天の命、足下は命ながらへて、春秋二分の墓まふで、跡弔ふがよか〳〵と、あとはことばも泪なり、圓山かほをふりあげて、そりや何なんの南京の、ちやわんと茶碗のなかならば、それ其樣などうよくな、おまへと私がその中は、きのふやけふの古渡りか、ゑんとの時からなれなじみ、夫おぼへてかつき出しの、三五夜ちゝの新月に、おまへのあふぎにかゝゑやんした、詩とやら朱とやらいふ物の、色といふ字がめにとまり、戀のいろはに惚れたが因果、おまへが床に空だきの、かをりは何か名香の、ふつと心があじになり、つとめするみもつとめぎを、はなれて居れば片ときも、格子へ出たりなが廊下、ゆきつ戻りつうはざうり、花をかざれる當世の、ほんだの髮やきん〳〵の、くろ仕立より私その、びんひげゑやんとそうがみの、おまへのやふな唐ふうが、しみ〳〵すいたすき櫛は、何ぞと人が唐櫛の、四百四州をたづねても、又と唐にもあろかいな、こんなゑにしであろふとは、ほんに結ふの神さんの、思ひつきとは云ながら、あんま

りこれはけうといと、心で心とゞめても、とまらぬものは色の道、そうまあ思ふてくれたけの、ふしぎといふもふしぎのゑん、珍々説も消ぐみ、足下の言をきくにつけ、むかし大王その妃を愛し、岐山のふもとにいたるといひ、卓文君を司馬相如が、琴でいどみし色絲の、みだれ心にくびれては、匹夫匹婦も講讀に、まことをたつるみさをあり、こなたへ來れと行さきか、向ふの二階は何やとも、しらぬが佛の大さわぎ、「難波の梅に吉野の櫻、うつす一ッの鉢うへの、柳の枝に咲せたい、なんといきてはないかいな、「京の女郎に長崎いせう、江戸のいきぢにはれ〴〵と、大さかの揚やで遊びたい、なんと通ではないかいな、うたふをきくも我〱は、あづま男に京ならで、唐土人に東の女、大和ことばや詩に、かきつくされぬ胸のやみ、よしないくらうする墨の、氣叶金蘭おみなへし、われもかうとは夢にだも、夢のうきはしとだへして、峰にわかるゝ横ぐもの、空に浮名や立ぬらん

引返し

ひやうし幕

一百三十六地獄の惣たばね、御ぞんじの閻魔大王は、今におとしも寄らせられず、亦お若くも見え給はず、髭は長くてしゆろ帚のごとく、顏は赤くて朱ぬりに似たり、唐冠に王の字の將棊の駒を頭にいたゞき、せつかい共見え摺子木共見ゆる笏を御手に持て、高座を一つたゝき給ふ、御面相は、何所へ出しても天晴湯したの公家あく、しばらくのうけとみ奉る、然るに大わう近ごろは、娑婆一統に大通になつて、面しろきことありと聞、藏前の出店に計りおわせしかば、氏よりそだち町風にのみなり給ひ、折〱淨はりの鬢ぬき鏡をもつて、自らお顏を見給ふに、知らず明鏡のうちに何れの處にかぬり机を得たるとあやしまれ、野父な身形りをきらひ給ふ、時分はよしと足疾鬼かうちに、居候の悪鬼といしる者、よしなき御むほんをすゝめ申けるは、大王は十善とやら九善とやら、七五三とやらの御位にましませ共、極樂といへる本店あれば、いはばぢごくの支配人も同前、娑婆にて人が一トくちに、十王〱と云時は、君もやつはり十王のあたま數にて、宗帝王や五官王は、役儀もつとめず世話もやかす、濡手で粟と云もの成るに、大王

計りは夜る晝るとなく、面白くも無ィ罪人の世話計り、出る株うたれてひとに惡れ、閻魔樣といゑば子供は勿論、女迄がいやがる樣に思れ給ふは、さりとは不通の至りなり、大王今よりくつと地獄をきり替て、町人堅きの問屋となし、大王其店の支配にんとなり、九王は番頭或は出店、かよひ作頭など、なし給はゞ、金銀まんくきんくとして、そこで地獄の繁昌せん、其マア野父な唐冠を、目計り頭巾と替え給ひ、乞喰能といふ裝束をば、黑仕立の三ッ紋と改メ、髭は元な月代そり、青黛ぬりの藏前本田、笏といふ場を扇ぱちく、鐵の棒をはり交の銀ぎせるのやに下りて、づつと世界を見おろし給はん事、日本といふ通ではないかと、竹のあぶらをとうんしにぬるごとく、とろりとろりとかけのめしければ、大王元よりうかつの生れ、忽御同心ましくければ、さいの河原の地藏菩薩を以て、極樂淨土へ此趣をうかゞはれけるに、六道能化の和尚なれば、そこらはやる物にあらず、釋迦の御前の上首尾にて、尤もなる願のおもむき御聞濟ありければ、卽座に地獄えふれをまわし、向後王樣こつこを止めにして、町人といふ身持となり、身

代をきりかゐんとて、先今迄の閻魔大わうでは、つまらねは、とりも直ずゐんま屋大藏となのり、來ル正月二日よりの見せびらき、一番伴頭秦廣王は、秦兵衞と名をかへ、二はん楚江王は江助となり給ふ、此二人はふるくも勤し者なれば、出店をやりて通ひ伴頭、扨三番よりい下宋帝王は宋助となり、此見せの伴頭ゐよく、五官王は五兵衞と成て伴頭わざ、泰山王は山藏となり、平等王は平兵衞となり、都市王は市右衞門と成り、轉輪王は輪藏となり給へども、變化王計りは變右衞門でもなく、化藏でも呼にくしと、色々附やうにこまり給ひしが、せん方なくて變智氣からの思ひ付で、變吉と付給ふ、各名札を上にさげ、そろばん附の硯箱を扣え給へば、俱生神も五兵衞と改め、くろがねの帳は西の門の帳めんに、さなたの紐とかはり、時行風大福帳、罪人出入帳、三途川水揚帳、極樂六道諸狀差し、男は裸百貫目、女は時の相場知死期の時貸不仕候と、筆ぶとに見ゐらせ、ごうのはかりの分厘をあらそひ、淨はりの鏡も掛硯の引出しに納め、おはう羅せつは丁稚子供、見る目かく鼻まんびき用心、せうづかの婆はすゝぎせんだくまかないはゞ、鐵の山も細身となり、血の池でひはかたを織り出し、餓鬼道から松右衞門が札をとり、畜生道から皮布を仕いれ、修羅道の具足も質物に入、金銀かし付の證文ゐんかく店おろしには、天上界の天上見るやからも多かるべし、猶も年々男女の罪人澤山に仕入れ、古今無双の大安賣をせんと、引札の支度をし給へども、昔は一軍に人の一つそくも二つそくも、一時に死で來りしが、今太平の御代となつて、切たりはつたりはあがつたり、民のかまどの味ひ物ぐひ、萬民快樂のときなれば、分別も無く子計り拵へ、御子孫も繁昌御壽命も長久なれば、地獄の衰微大かたならず、折角はやり風がしても早替の狂言のごとく、引かへしの拍子幕計りで死ぬ程の事もなければ、地獄以の外のふけいきにて、弘誓の船の舟間なり、寄て大藏工夫をめぐらし、むかしから金銀出いりで生死は無い物なり、但し與一兵衞は非業の死でもお年の上、勘平どの、三十や四十餘人の忠義などは、今どきとんとない點なれば、中々もつて死ぬ程の事なし、まだ賴むべきは色よくの道計、六塵の樂欲多しといゐども、皆厭離しつべし、只彼一例

刻のまといには、老たるも若きもはまる習ひ、色は思案橋の外とかや、我より年の親父はしの若衆にくひこみ、本山ゑ尻が割れて傘一本の主となりし住持も有、又は今ての大分限ときいて、鬼門の角やしき千兩屋しきの四五ヶ所よも、大門口から水戸尻えたゝき込たる息子もあり、此ともからのゆく末は、或ひは野原に行たおれ、町内のやつかいとなり、仕舞は此方のものとなれとも、上代物とはいひかたし、又はあそこの娘をそゝなかし、隣の下女を孕ませて、せう事なしのむり心中、月水流しの早業も、獨鈷や錫杖の形りで來れば、まだ人間の形もなく、是等は問屋の損金物、ひけもの、部に入るなり、され共今とき萬民無病そくさい延命の世にも、まだしもひよつと色事で死んでこまい物でもないと、結ぶの神を信心してまつり見ば、利生のあられ事はあらじと、婆婆で町人が恵び壽講をする様に、同店の伴頭を呼び集め、地獄はじまつての大ぶる舞、血の池のいけすのひ鯉の吸物に、八苦の海の鯛ひらめを、三途川の河岸から取寄、無けん地獄のひるのなますに、劍の山のけんをあしらい、極樂淨土のおがみ突きの食に、後段はさしづめ黒繩(こくせう)ぢごく、繩のごときの手打そば、すべての鹽梅等活ぢごくのくわつ／＼と煮立、同じ火の燒物やくろがねの膳部を、百萬八十千萬にんと手を打ちて、叫喚大けうくわん、馳走馳々走天泣ひゞくほとさけびよばつて祝ひしに、おもてのかたよりとりつきの青おに手をつかへ、何か婆婆から入船がこざるといへば、さてこそ來りと手をうつて、まづて／＼其代物はいかに／＼とゝへば、年の比二十あまりの男と、みめ能きおんなの上しろ物、男は菅笠を着女は笹をかつぎ、物ぐるわしき風情なるが、まさしくあれは清十郎じやないか、笠がよふ似て候と申ける間もなく、淨瑠璃のひゞきにつれ、初日からお夏清十郎の道行、扨二日めはいかゞならん。朝はとくから／＼入來る／＼、もふゑのゝめに程近き、夜もはや七つ半兵衞か、かたに懸たる毛氈を、かぶりし夫婦養子合、三千世界の戀の淵へ、おちよとこそはゑられたり、三日はさしつめ桂川、連理の枝の初紅葉、風のかけたる戀がらみや。おはんをせなに長右衞門、片肌ぬきし大名島、島さん紺さん中乘さん。やてかんせほう羅んせには、前代未聞の大いり船、地

ごく開けはじめしより、古來まれなる繁昌にて、歌舞のぼさつの棧敷より、五百のらかん弘誓の引船、引もきらざる賑ひなり、さて四日目はいかゞならんと、牛頭馬頭あほうらせつ共、見世先きに立河岸にいで待みれば、何かは戀風さつと吹、東坡巾に道服着たる異形の唐人、一ト人は夫に引かれて、戀に心もうつ蟬の、もぬけのからのからのからひとに、宿かる燒のそれならで、京都丸山のうかれ女、名も圓山が立姿、さすがのえんま屋大藏も、此しろ物にはほとんとへきえき、今迄心中みつがいの、代もの丶なかえいれんとすれば、唐ものが交りて賣にくし、唐物屋へわたさんとすれば、和物と一ッ所で似せ物らしく、いま迄ついに地ごくの繪にも見た事のなひ唐人の罪にん、いかゞはせんと付送りの書附をみ給へば、何々洞庭の秋の付送り、四角な文字に韃字を交へ、ちんふんかん〳〵うさ〳〵うさきかもうさきがちんぶりかくたくちんないろうしやぐわん〳〵、是は行ぬと遠さんが書附には、馬からしうありんすコウ、おいらんが申しんす、向ふの人々と何やらすつへりがてん行ず、此樣な和かんこき交せし品の分らぬ目利には、隣町の組合仲間、閻せんやの和藤内殿が功者なれば、是足疾鬼一ト走りといへば、アイと返事もかる〳〵と、迎ひに行より早く千里行て千里歸る、千里か竹の竹町の方より、でつちの虎を一人連れ、唐棧留の日本風、しつ〳〵入來る和藤内、昔は三官今は又、六貫と成る錢相場時の相場のちよ〳〵らをもつて、此代ものを見分たる、商ひ上手の見功者は、久しい物だが後編々々、又明晩お出でなさりませ、

附錄閻魔考

一法苑珠林卷十二に曰、問地獄經及淨度三昧經等にいはく、地獄を總括するに一百三十四界あり、その獄主の名字を閻羅王といふ、むかし毗沙國王たりし時、つねに維陀始生王とゝもに戰ふに利あらず、因て誓願をたてゝ地獄の主となる、その臣十八人あり、百萬の衆を領す、毗沙王とは今の閻羅王是なり、十八の大臣とは、今の諸の小王是なり、百萬の衆とは諸の阿傍是なり畧取意

○同書に曰、長阿含經にいはく、閻浮提の南に金剛山あり、內に閻羅王宮あり、縱廣六十由旬、晝夜三時つゞ大銅鑊自然に出現す、もし鑊宮中に入れば、王見て畏れ怖きて宮外に出、もし鑊宮外に出れば、王宮中に入る、大獄卒ありて王を熱鐵の上に臥しめ、鐵鉤を以て口をひらき、洋銅を口につぎこむ事竟て、又もろ〳〵の宮女と相たのしむ、かの諸の大臣といへども、亦かくのごとし、

○十王經に曰、閻魔王宮本地地藏菩薩 閻魔王國を無佛世界と名づく、亦須彌國と名づけ、亦閻魔羅國と名づく、

○奪衣婆は葬頭河の婆なり、懸衣翁はさうづがはのぢゝいなり、同經に見ゆ、

○丹桂籍卷二に曰、もろこし景泰年中臨清生員李清といふもの病で卒す、閻君問ふ、世にありて何の善事をなすと、淸こたへていはく、四月八日釋迦の聖誕にあふごとに、持齋一日念佛萬聲となふと、閻君善と稱す、因問ふて曰、わが十主の生辰には何ぞ人の持齋念佛せざるや、若念佛せば罪過を除き天道に生ずる事を得ん、

十王誕期

正月八日	第四殿伍官大王聖誕
二月一日	第一殿秦廣大王聖誕
二月廿七日	第六殿變化大王聖誕
二月廿八日	第三殿宋帝大王聖誕
三月一日	第二殿楚江大王聖誕
三月七日	第七殿泰山大王聖誕
三月八日	第五殿閻羅大王聖誕
四月一日	第八殿平等大王聖誕
四月七日	第九殿都市大王聖誕
四月廿二日	第十殿轉輪大王聖誕

按にこれによりて見れば、閻魔大王の御誕生は三

月八日と見へたり
○耶挪代醉卷五に曰、閻羅王に二八の子あり、長を江と名づけ、次を海と名づくと、廣日記に見へたり、
　按にゑんま王の御子思の御名こゝに見ゆ、
○三千國春秋にいはく、顔囘卜商ともに地下の修文郎となると、蒙求
○明の田汝成が熙朝樂事に曰、七月十五日俗傳て中元節とす、是地官罪をゆるすの辰なりと、
　按に俗に地ごくの釜のふたの明といふは是なり、
扶桑略紀に、日藏といへる僧死して蘇生し、延喜の帝の地獄に墮給ひしよしをいへり、
○元亨釋書に云、小野篁は不測の人なり、身は朝廷にありて神は琰王の宮に遊ぶと云々、
○紫野一休和尚の佛鬼軍には、極樂と地獄とのたゝかひをしるせり、文長ければ略す、
○難波西鶴が小夜嵐に曰、天下たいらかの御代につれて、二世安樂の物語こそ出來たれと云々、源平兩家のつはもの地獄をほろぼせし物語にして、其文長し因て略す、

右の諸書を詳に披閲して考ふるに、此書にしるせる事のごとくなる事、つや／＼見あたり侍らず、もしくは後人の僞り作れる所歟、たゞしわが見る所の足らざる歟、いぶかし／＼、陸道謹誌

跋

此一巻を熟覧するに、何とも其意ゑんま王、まことに文盲大齋日、十王が名をかへし、名びろめのすり物もなく、地獄繁昌の安賣も、こんなはなしが唐にもあろか、予八角眼囘々鼻の如くに首をひねつてかんがうるに、これはまつたく血の池の眞赤な虚言、等活地ごくの鹽硝に、黒繩ぢごくの火繩にて、鐵砲玉の丸山雀、とんだ色事道行の、長崎名物くらげとう、骨なき事と玄り給べかし、

ズボウ堂のぬし
淡夕吐

和漢同詠道行終

春笑一刻

序

おとしばなしは人の笑を種として、萬の寶かきあつめぬる物ならし、いでや春笑一刻も、直は千々の金をひらふて、浴衣を染んと思ひたつ、肩にかなてこ裳にいかり、硯の海のそこはかとなく、かきの暖簾のまめなる家にも、春のはじめの御もてあそび、恵方に向つて沽らんや〳〵、我は價をまつ買うりの名にしおふ、勝の下谷の出茶屋にして、筆のけん毛をむしる事まかり、

見料の安らけく永きとしの尾をふる戌のむつまし月

春笑一刻

千金子 著

初夢

あら玉の年たちかへるなみのり船の、おとのよき初夢を見んと、宵からとろ〳〵ねた處が、さて初夢を見たとも〳〵、一富士二たか三茄子、伊勢や日向の物語、白河夜船の夜分の景色、莊子が蝶々盧生が五十年をつつくるんで、一百五十ほどもつゞけて夢を見ければ、いづれをいづれと定がたく、あくる日早早七福神のかけ物にむかひ、さて〳〵昨夜はおびただしい夢の御告、どふも目うつりがいたします、とても事にあのうちで、一色を初ゆめにいたしたうぞんじますと、おそれみ〳〵申上れば、七福神は目と目を見合せ、うか〳〵と乗合ではなしもならぬ、

梅に鶯

このごろ湯島で、はれな花の會があると、本庄のかかゑ屋敷へ行て、紅梅のことに見事な枝ぶりおもしろきを、人足に切らしむるに、此枝に鶯とまり居てさもたのしむていなり、此梅が枝に鶯のとまりなが

らをたてるは、ことにめづらしからんと、人々にいひつけ、やう／＼鳥の飛ばぬやうに引切、そろ／＼歩行み町中へ出ければ、子供大勢あつまり、見事な梅に鶯かとまつてゐる、わしにもおくれ／＼と、聲々とわめけば、たちまち鶯とびさりぬ、南無三寶、此梅に花がなくは、もらはふともいふまいよ、

問答

海鼠蟹に問ふ、行がかへるか歸が行か、蟹なまこに問ふ、尻が頭か頭が尻か、

金が敵

尾羽うちからした浪人あり、かみこ羽織にやぶればかま、竹みつか何か志らぬが、朱鞘の大小、めつたに利運ばつても、晦日／＼の店ちんにおぼれ、大屋を見ると武者ぶるい、大屋も氣の毒がり、あまりにくよ／＼思召すな、金がかたきと申て、あまりに金もよい物ではない、浪人なみだをながして「よつく武運につきたさふな、敵に久くめぐりあはぬ、

碁將棊

どふもひまで、身にもちあつかうが、なんぞよいなぐさみはあるまいか、「それには碁將棊がよふござります、「碁と將棊とはちがつたものか、ハテ字のあるが將棊のこま、字のないが碁石でござる、少しあんして「そんなら碁を打ふ、

誹諧師

誹諧師吉原へ行、中の町の花を見て、ハツヽ花の雲鐘は上野か淺草か、女郎聞て「おきなはいかいし「よく志つて居るな、

色男

髪は本多に銀ぎせる、青黛ほそ眉うすげしやう、自ら大通の氣どりにて、ひげなでのきん／＼と、茶坊主にむかひ、さぞ世間の者どもが、おれにほれるであらふな、茶坊主「多くはござりませぬが、たつた一人ござります、「志て／＼それはだれじや、茶坊主「おまへが

安たばこ

いなかからの客が、たばこをきらしました、一ふくくださりませといへば、そ葉じやがまいれと、こくぶをだす、これはありがたいとのいば、ついぞのんだ事のないよいたばこ、どふもわすれられず、たばこ屋へゆき、そはといふたばこがかいたいといへば、「アイこれになさりませ一ぷく、のんでみて「いや／＼これは

よしませふ、「イヤこれより玄たはござりませぬ、「ハテびんぼうなたばこやじや、

かはや

かうしに女郎二三人よりあひて、けふは助さんがみへぬといへば、ナアニあの人は道風さんさ、これは玄たり、もんはぎよやうぼたん、どう見てもすけ六さ、「それはきつい見たてちがひ道風さんさ、「ナゼ道風さんといひなんす、「ハテかはずに見とれさんす、

鑷

コ、か丶あゝけぬきはないか、女房又きたねへ處を、ぬかふと思つて、てい主「ばかをいへと（ひげなでながらあごの下へあてる）女房「それ〳〵きたねへ處だもの、何こ丶がきたねへもんだ女房「夫でも不斷ふんどしをはさみながら、

酢の物

はつち尻は玄よりで二三人、午の日の王子參り、あすか山下の茶屋で、なら茶をくひ、なんだ芋に午蒡か、煤はきの料理を見たやうで、ねからいかぬ、御てい主こ丶にわつさりと、酢の物といふ處はねへか、ていしゆ小くびかたけて「左樣な村はござりませぬ、

黄金の釜

もろこしの郭巨は、こがねの釜をほり出して、二十四孝の中間入、さらばわれらもほつて見んと、乳のみ子を抱ながら、川口をふた鍬みくはほれば、何かがつきり、是はとみれば「こととう土器、

引窓

ぬす人、ひきまどより繩にとりつき、ぶらりとさがり、内のやうすをうかゞひ見れば、てい主見つけて、ヤア何者じや、月夜に釜をとらふとは、ふといやつといへば、ぬす人「イヤ〳〵、水がめの月をとりに參つた、

うば

打つゞく長雨に、でつちうば相談して、餅でもかつてこずはなるまい、たれゆけ、かれゆけといふに、うばが年かさなれば、差づめうば、かのもちをとりかへれば、人〳〵これを見て、アノおうばどのとしたる事が、大きな切り餅ばかりかつて來てからといへば、うば「こもちにこりた物だ、

肥滿

貴公はよくふとつて居る、さりとはうらやましいといへば、ナニサ此よふに見へても、半分はあかさ、

堂建立(どうこんりう)

弘法大師は、處々に堂塔をこんりうして、一夜の内に出來たといふが、なんと大きな事ではないか、「それがなんの大きな事であらふ」ちつといけむと蛤(はまぐり)でさへ、

かみなり

日輪と月輪出合て、これ〳〵月りんどの、拙者は近近冬至邊へ參らふと存る、貴公にも御同道申たしと、そうだんとゝのひたるを、雷がきゝつけ、御供いたしたしと願ゆへ、つれてまづその夜は一つ宿にとまり、どふも雷がごろ〳〵で、やかましくてねられぬゆへ、月と日がだんかうきはめ、其翌日はかみなりを、跡の宿へとめ、翌朝さそひにこぬうちに、月も日もたつて行し跡に、雷が來てたづぬる、宿のていしゆ出て、もはやとうにお立なされましたといはれ、雷雨手をくんで、扨て〳〵月日のたつのははやいもんだ、

代脈

はやり醫者のむすこ、とかく醫道にうとく、當世風のいきなりふりのらくらして、藥もろく〳〵覺へねば、おやぢむすこをよび、明日は用があるから、その方代脈に行べしといひ付られ、かしこまつたと、翌日乘物にのりちらし病家へ見まへば、御親父様の御りやうぢで、今日は大ぶんよろしく、隣へちとはなしにまいつたの、いや一家どもへまいつたのとて、脈みせるものもなく、はやく歸る、親父いかゞととへば、右の通をはなす、親父まゆにしはをよせ、それみおれ、おのれが不斷そは〳〵しおるによつて、病家ども殘らず本復をつかつた、

ほうらい山

ほうらい山と名をつけた蚊屋がある、ソレハさぞよい蚊屋であらふと行て見れば、松竹のもやふをそめたもじのかやなり、よさはよいが大分やぶれが見へる、「ハテそこがほうらいのしるしだ、なぜといへば「つるとかめがゐる、

彼岸

ひがんといふものを見たが、「これおのしはとんだ事をいふ男だ、「イヤ〳〵たしかに見た、「それはどんなものだ、「なんだかしらぬが、庭をむく〳〵するから、眞木をもつて飛おりたら、おふくろが「これ〳〵、ひがんだぞ〳〵、

物

御むしんながら、鞠をちとおかしなされて下さりませ、「アイおやすい御用でござりますが、此方にもふつていで、一ッの鞠を四人でけております、

ばけ物

ばけものやしきへ見とゞけにゆきしに、いろ〳〵のばけもの出る、此おとこ少しも臆するけしきなく、もう藝づくしはそれぎりかとせめられ、ばけものもこまり、そのゝちは出ず、さて〳〵たかのしれたばけ物めといふうち、しのゝめのそら、烏がかあ〳〵、間もなく日も出れば、さらば歸り、此おもむきを申上、御ほうびをもらひ、此やしきぐるみしてやらんと、よろこびいさみて外へ出ると、まつくらになり、星月夜、これはひとあしもひかれぬといへば、ばけ物「何ンとあたらしいか、

風

浪人かみこはおりに、赤鰯を一本きめてあるく、跡からもし〳〵、おわきざしにそりが打てござります、浪人「今の風でさ、

飛脚

早飛脚、いきを切つて、京から江戸まで三日につく、「ドレ〳〵なんぞ急用だらふ、書状はどこにある、「イヤ御状はまいりませぬ、「シテ〳〵何用にきた、「サラバ何事でござるかぞんじませぬ、「大べらぼうめが、何ゆへに飛脚にきたとしかりつけられ、「いま〳〵しい、今夜から状のない飛脚などにやとはれるもんじやアねへ、

しん宅

新宅へひきうつり、三助がはき掃除の處へ、近比御無心ながら、雪隠をかしてたもれ、三介「おやすい事ながら、けふはじめて引うつり、まだ主もはいらぬ内でござれば、御斷申ます、さむらいもしかたなく、尻もぢ〳〵して出て行、旦那きゝつけ、三介をしかり、跡よりおひかけて、おかし申せといはれ、はうきを打すて、やう〳〵おひつき、旦那にしかられました、ひらにお返りなされ、御用御たしなされませといへば、侍少しはらをたち、かへつてそふ申てくりやれ、たれたも同前でござる、

ひきはた

章魚わきざしのひきはだをひろひ、これはよい革單

皮だとはいて居るを、うなぎが見付て、八本の足に一本ばかりたびをはいては、寒さふせぎにはなるまい、おれに下されともらひかくる、たこ「そして貴様は何にしやる、うなぎ「おれがもつと火事羽織にする、

あたまはり

はなうたをうたひ通る行ちがひに、したゝかあたまをはる、大きにはらをたち、すいさん千萬、弓矢八幡ゆるさぬと、とびかゝるを、さきさまはたとへをしらぬ男だ「なんだ「ハテ出る首うたるゝといふはさ、

乞食

武士の眞似をする乞食あり、やぶれごもを上下として、犬を引馬とし、又は竹の先をそぎて鑓をこしらへ、毎日ふり廻して、往來の邪魔にもなるほどなり、ある日蛇塚蛇五右衛門殿といふ武士一人通りかゝりしが、かの乞食の竹鑓、武士の眉間にあたり、疵つきければ、蛇塚大きにはらをたち、かのこじきをさん／＼に胸打しければ、もはや息もたへ／＼になる時、つれのこじきどもさま／＼とわびごとして事すみたり、さてうたれたるこじきは、手足もなべて、小屋へ歸る事もかなはず、つれのこじき口々、にこんな事があらふと思つて、毎度異見をするのだは、モウ／＼ふつ／＼武士のまねをやめやれといへば、何がさてこれにこりぬ事があるものか、なにとぞ小屋へつれかへりてくだされと、手を合すれば、つれの乞食もあはれに思ひ、やぶれたるむしろのもつかうにのせて、かきあぐれば、くるしき息の下よりも、ヤア家來ども駕籠やれ、

浦しま

うら島太郎乙姫にむかひ、故郷こひしく候ゆへ、一寸かへりましたれば、これこのやうに年がよりました、何とも申かねたが、玉手箱をもう一ッ下されかしといへば、乙姫うなづき、左樣ならばこれを以てお出と、例の玉手箱をわたされしかば、浦島なんでも、玉手ばこは、さだめてわかくなる箱であらふと、海上へうかむやいなや、蓋をひらけば、こはいかに、あつちから三下り半の去り狀、

まごの手

なんぞ風がはりの道具をかはんと、うろ／＼見廻り、將棊ばんの雨めんはないか、道具屋もあきれはて、ハイ出來合はござりませぬ、そんならよしと、又一軒

へ行、なんとちろりの両口はないかとたづね、サテ〳〵、下町でも思ふ様な物はないとつぶやき、そんなら孫の手のにぎりこぶしはないか、道具やなぶりけると思ひ腹をたち、にぎりこぶしはこゝにござると、腕をまくつて出せば、買手コレ〳〵、ちつとせなかたゝいて下され、

かるわざ

上竿奴ぢこくへ落て、閻王の前に引出されしかば、汝ゑやばにありし時、人の目をかすめて、銭をせしめし咎により、劔の山の責に申付るとのたまへば、是はゑん王の仰ともぞんじませぬ、拙者魔術はおこなはず、人の目はかすめず、幼少より宍ゆれんにて籠ぬけつなわたりを仕と、席をたゝいていふに、大王ほく〳〵うなづき玉ひ、然らば汝が術が見たい、ゑよもう〳〵とのぞまれ、ずつと立て、さて御斷申上まする、籠はなし、綱はなし、おれなる赤鬼の口よりはいり、尻へぬけて出て御目にかけます、いづれも様おはやしなさい、おつと心得たと、どら鐃鉢をたゝき立れば、その拍子に口より尻へぬけて出て、さて是よりは尻よりはいり口へぬけます、鬼並をつま

みて「夫は御免〳〵、

錢湯

ごめんなされい、冷物でござりますと、ずつとはいつた處が、熱湯にて、中〳〵下にしづむ事ならず、是はあついと風呂をたゝけど、一向うめる樣子なし、あまりあつさに飛出て見れば、腰から下は眞赤になる、コレ番頭どん見てくんねへ、おれがなりはしつかい賓引なはの樣だ、

寺侍

侍奉公人ふたり出合、イヤア新五、貴樣はどこに居る、「四國のさるやしきに、ソシテ「きさまはどつちにすんだ、「谷中の道樂寺に、「寺にはなんぞおもしろい事でもあるか、「あるとも〳〵、小僧は今川をよむ、和尚はいろはへ行、

硝子

中洲の新地にびいどろ細工があるといふが、どふだ、「イヤハヤきれいなさいくだ、てうどよい娘をごかさにつるした樣だ、

精進

下女のさんをよんで、今朝もらつた肴をにてくれろ、女房「モシヘ旦那さま、今日はせうゑん日でござります、「マテヨけふは何もせうゑん日じやないはづだが、女房「けふは先の佛の日でござります、「なんじや、先のほとけの日だ、夫になんの精進する事があるもんだ、女房「おまへさまもよふ思つてもごろうじませ、先のぬしがかせがれたればこそ、かやうに安樂にくらすじやないか、亭主はらをたち「おれがなんぼ入聟じやとて、そのやうにおれをふみつけにする、いま〳〵しい、是非〳〵肴をくはねばならぬ、「イヘサなんのおまへをふみつけにいたしませう、しかしけふはどふぞ精進なさりませ、「イヤ〳〵喰ふ、「イヤお精進をしてと、夫婦げんくわやまず、仲間八介きゝかねて、おくさまも〳〵、旦那さまもだんなさまも、なにおつしやります、しかしおくさま、そのやうに先の佛〳〵とおつしやつては、今の佛にさはります、

褌

隣のぼうさんおいでか、おかゝさんは何をしてじや、「おかゝさんは、椽頬で豐後節の木をよんで、「おとゝさまは、何をして、「おとゝさんは、椽頬でふんどしをよんで、

新宿

新宿の女、簞笥から錢を五百なげだし、是でなんなとうまいものをかつて來てくんなんし、若い者「これはきついおごりなさりよふ、おめでたふ存ますといへば、女「ほんに夢を見たやうに、夕べの客衆に耳をそろへて二分、

どうらん

どうらん瘧をふるい、やせおとろへて居ける折ふしに、緒〆見まいに來て、どうじや食はなりますか、「けふは大分よくて、ねつけがとれました、「ハアそんなら落ませう、

うらなひ

狀箱持たる仲間、柳原を通りながら、さて〳〵、けさからさすがおやしきが忘れぬ、たしか此邊だときいたが、もし間違はゐなんだか、イヤさいはゐこゝに算おきがゐる、ドリヤ一ッうらなつてもらはふと、紙烟草入から十二銅ひねつて差出せば、算置小首をかたふけ、これは急なお使と見へる、「成程左樣でござります、「かはつた八卦のおもてがあらはれた、「なんとござります、「エヘ〳〵先の辻番に問ふべしとある、

五十服

コレ長兵衛、こんたはきつい煙草ずき、一どきに何ぷくほどのみやる、五十ぷくつゞけてのまば一歩やらふ、長兵衛「これはけつかうなもの、五十ぷくや六十ぷくは、心やすい事、「コリヤおもしろい見物ゐようと、そばからはやされ、のむほどにのむほどに、二十四五ふくのんで、「サテ思ひの外のめぬは、「イヤのめ〳〵と、段段ついであてがへば、三十四五ふく〳〵のみ、「モウ目がくらんでかなはぬと迯出す、跡より追かける、十四五町もにげし處に、大きなる寺あり、寺内へにげこみ、私は跡より追人のかゝるもの、なにとぞおかくしとたのむ、住僧きゝとゞけ、つり鐘をおろし、その下にかくし置しに、追人のものども、棒ちぎり木にてたづねきたる、住僧まことしやかにうら門よりぬけ出しといへは、誠と心得歸りけり、サアもはや氣づかひなしと、釣がねあぐれば、長兵衛大いきホッとつき、「ヤレ〳〵氣づまり、まあ一服のませて下され、

春笑一刻終

鯛の味噌津

此おとしばなしは、今の蜀山人なる所謂四方の赤良先生自筆を、そのまゝに上木したる本なり、發客は飯田町中坂書舗遠州屋彌七、雫衣堂に開板す、

式亭三馬

文化十一年甲戌卯月下院

叙

日々に新にしてまた日に新なる、はなしの種を買出されと、硯の海邊の市に立て、持たる筆を天秤となし、めつたにうりたいはなしたい、鯛の味噌吸に四方山の、はなしにひれはなけれども、尾に尾をつけて書つゞくれば新しうこそ腥けれ、いでや世上の話本、新背もあれば古背もなり、古きをたづねてあたらしき、譬のふしの鰹節、花に醉ぬる人ならで、櫻の皮を削りはべりぬ、

新場老漁書

鯛の味噌津

御慶

元日の早朝から、御慶申入れます〳〵といへども、一向へんじなし、これはてい主がゆふべのつかれで、今朝ゑだねてゐるかと、勝手の方をさしのぞき御慶申入ますといへば、戸棚の中からてい主の聲にて「まづ行きゑはつて來て下され、

から木

けふさる所でめづらしい木を見てきた「それはどのやうな木じや「なんでもみきが紫檀のやうで、葉がまるく、花はふじいろに咲て、大きな實がなる、その色がこいむらさきじや「ハテサテそれはめづらしい物、ソシテなんといふから木じやな「なすびといふ木じや、

三十ふり袖

善光寺開帳の頃、夜發(よたか)二三人づれにて、兩國橋を通りながら、ヤレ〳〵きつい人ごみだ、おかいてうのうちは、通りがつかへてどふもならぬといへば、半元服のふり袖のよたかゞ、姉さんそういひなさんな、

この前のお開帳のあつた年には、大橋をゑはつた、

ゑびす膳

道樂寺の遊山和尚、晨朝のお勤をゑまひ、朝めしの膳にすはりて見れば、ゑびす膳にすへてあり、コリャ小坊主なぜいつもゑびす膳にすやるぞとゑかれば小僧「それでもお大黑樣があるから、

仁王

仁王へ紙をかみてふきつけると、力が出るといふをきゝ、わかいもの二三人づれにてさそひ、ある寺の金剛へ、めつたむせうに紙をふきつけしが、一人ふところをさがしながら、たつた今はながみを出すとて、つい金を壹分おとしたといへば、つれのものうろ〳〵あたりをたつねれば、仁王も首をふりながら、からだ中を見てきよろ〳〵、

座頭(ざとう)

ある座頭の坊、うつくしき女房をもち、程なくうい子をもうけけるが、日夜膝の上にてそだてあげてかはひがり、そろ〳〵ちゑづく頃てうち〳〵あは〳〵とあやしながら、コレ〳〵か〳〵あどん笑ふか見て下さい、

樂

この頃さるおやしきで、樂(がく)といふものを見に來た、またはやしなどゝはかくべつ、位のちがつたものだ「ハアナそれはどのやうなものだ「イヤなんでも大鼓の大きさが、能の太鼓より五わりましも大きくて、笛といへば十本ばかりたばねて、一所にふいた、

提灯

隱居夜ばなしに行かへる、モシ／＼おてうちんをあげませう、隱居あたまをなで「これにござります、

越後獅子

角兵衛獅子をまはす程に／＼、つゝけて五百かまはしければ、角兵衛さしも目まい立ぐらみして、チトやすみまして辨當にいたしましたいといへば、インヤならぬ、つゞけてまへといはれ、よう／＼まいおさめてかけ出すを、コレ／＼とよびかへせば「もう壹歩でも御免なされ、

すい口

にはかの客に吸物をこしらへ、下女「これはしたり此間とつかへべいにやりました、

はなし本

なんと毎年はなし本も出る事ではないか、「ヲヽおれも壹冊かいておいたが、飛だこへたはなしがある、「ソレハどのやうな本だ、ちつと見せやれ「コレこの本だ、どうだよからうが「ウヽなんだかひとつもおとしがしれぬ、書きおとしたのではないか「ハテそこが落しはなしだ、

榮螺(さゞい)

壹文錢も百にわるほどのしはん坊客をよぶに、客四人と亭主と五人のさんようにて、榮螺を五つかひ、つほやきにして膳を出すまへかた、ふと客一人來る、なむさんぼうと勝手へ入、コレ／＼さゝいのつほやきかひとつたるまいから、掃溜にあるさゝいがらに、午蒡や大根をきりませて、かならず是をそれにひけといひ付しが、いそがしまきれにとりちがへて、ていしゆによきさゝいをすえたれば、ていしゆふたをとつて見てきもをつぶし、モシ／＼みな樣のうちへ精進のさゞいは參りませぬか、

謠(うたひ)

ぶきようなる男、つゝみをうちならひ、ふゑをふき、たいこにかへ、いろ／＼とならひけれと、もとよりのぶきようなれば、ひとつもらちあかず、いや／＼

うたひがよい物じやとて、人の十日でおぐる謡を、百日もかゝりて覺へ、しかつべらしく人中でうたひ出せば、友だち「なんと此頃は、謡御精が出るがよいおたのしみといへば、此侍「さればその事、侍はいつなん時浪人いたさうもしれませぬ、

佐治兵衛

ひとつ長屋の佐治兵衛どの、四國をまはつて猿となり内へかへりしが、今までなかのわるい女房をかあいがるゆへ、がてんゆかすと、近處のものにたづぬれば、女房の顏は馬つらたんのう、

歳暮

あるもの年始の禮にゆき、年始といふをとりちがへて、歳暮のごしうき申入れますといへば、てい主ぬからぬかほにて「これはあんまりはや〳〵と、

からし

二三人よりあひ、なんとからしあへをしてくはふではないか「ヲヽよからう、しかしからしははらをたつてかゝぬときかぬから、おのしむつとしてかきやれ「ばかな事をいふ、そんなにやすくはらがたゝれるもんか、といふところへ、かつほ〳〵とよんで來る「コレかつほはいくらする「アイかけねなしに一貫さ「ソレハとんだ高いからかた身かはふ「そんなら五百だがよしかと、半分にすつとおろす「イヤモウいやになつた、かうまい〳〵「ナニ馬鹿〳〵しい、一貫のかつほを半分におろさせて、かはうのかうまいのといふ事かあるものかと、まつ黑になつてはらをたてれば「ヲツトからしをかいてくんねへ、

足袋

さて〳〵この足袋のきれた事は、これは雪踏(せきだ)のわるい故だといへば、雪踏以ての外にはらをたち、私がとがではござりませぬ、せんたい足袋めが地のよはひでござるといへば、足袋も鼠色になり「イエ〳〵それは雪踏めがいひかけと申もの、あいつが鐵(かね)のあるを鼻緒にかけ、ちやらり〳〵と音をさせて、このやうにきれましたといふ「うぬ切付られるかと、雪踏がりきめば「コイツさしとふしてやらうと足袋がおこる、主も大きにもてあまし、それでは水かけ論といふものだ、足のかゝとをよび出して、急度せんぎをしてみんと、かゝとをよび付吟味すれば「わたくしは他出いたしまして一向ぞんじませぬ、

敦盛

とびのものよりあい、なんとあの一の谷で、熊谷と敦盛ときつたりはつたりやらかしたが、そのおりなぜあつもりはとつてかへした、おれならばいさいかまはずにげてゆくのにといへば「ソレハお三さんのいふ事だが、あつ盛も熊谷とはおもはなんだのさ、何か跡からやれ〳〵とよぶから、手拭でもおとしたかと思つて、

口上

聞に事をかさねていふものあり、ある時客によばれ、又二三日すぎて禮にゆき、此間の一昨日は參上いたしてまいりまして、種々いろ〳〵御馳走御ざうさにあづかりましてなりまして、その上又妻女房の方へも、おみやげのお心附をおくり下されかだしけなくありがたく、もつての外ことの外よろこびましてよがりまして御座りましてあります、

壺

そさうもの壺をかいにいつた處が、うつふけてあるをみて、此やうなべらぼうな口のないつぼがあるものかといゝながら、ひつくりかへして、これ〳〵底もぬけて居る、

折助

とうだ折助いそがしいか「いそかしいとも〳〵、供にはつれる使には出す、いま〳〵しい内だ、そしておのしはどうだ、三介「おらか内はそのやうに、いそがしい内ではないが、おれがすきでいそがしくてならぬ、折介「なんぞ細工でも出來るかといへば「インャどうも流行歌におはれてならぬ、

魚歌

さんまと鰯と蟹と鮎と鯖とよりあひ、なんとみんな一句づゝ歌をうたをふではないか、まづさんまからうたやれといへば、さんま「さんまようと歌へばハ、ハ「いはしに「蟹あゆならはよとぢきにふたりながらつけゝければ、さばひとりもんく出來ず「さばよがどうした〳〵、

ばくちうち

ばくちうちさん〳〵不仕合にて、ごうはらまかせに手拭をまはし〳〵錢湯へゆく、道にて大黒をひろひ、これはなんでもいゝ見得だと内へかへり、神棚へあげ七日が間鹽ものだちにていのりける、滿する夜の

大ばゝちに、着ていた單物までとられ、ふんどしひとつで内へかへり、いま〳〵しいこの大黑め故に、このやうなめにあつたと、神棚から引づりおろし、どぶへ打込ぐつと一とねいりしたれば、かの大黑やう〳〵どろまぶれにてはい出たまい、ぜんざい〳〵汝われをうらむる事なかれ、湯へ行時にひろつたれば、はだかになつたはかくごのまへじやぞ、

すりこ木

コレ〳〵作右衞門どの聞なさろ、お江戸衆はおそろしい、毎日八丈八寸ある擂摠を、がり〳〵かぢり申すといふ事つたよ、「ヲヤてんこちないあんとしてゝはれたいぞ　ハアテお江戸は八百八町だ、もし毎日すりこ木で味噌をするに、一町で一寸づゝ減ると見て、さつとつもつて八丈八寸ではないか、

不動

なんと目黑の不動に、せいたかとうじ、こんからとうじといふがあるが、せいたかの方がせいがたかそうなものだが、せいたかもこんがらも同じ事だといへば、そこで不動といふは、

はつ音

だれぞほとゝぎすの初音をきいたかといへば、きいたとも〳〵、きのふの朝きいた、ツレハおそい事、われらは四五日前にきいたといはれ、まんがちなやつが出て、いまだ卯月に入てきいてはおそい、先月の末にきいたといへば、そばからナニ先月きいたか、おいらはとつくに去年の夏きいておいた、

右左衞門

こゝに曾我五左衞門といふ浪人ありしが、折ふし信濃者を家來にかゝへ、一僕をからさず家につたふる竹光の一腰をわきばさみあるきしが、借はふへたり米は高し、とてもなかからへ何かせん、いきてはぢをさらさんよりは、死でしまはんとかくごをきはめ、金の工面にゆく〳〵とて家來をだまして内を出ける、家來の信濃まことゝ思ひ、一日まち、二日まち、三日になれどもかへらねば、ほう〴〵たづねあるきしが、ある川邊に何かはならず、大せいの人あつまり居るに、何事ぞとたつぬれば、イヤ土左衞門でござるといふ、どれ土左衞門とはどのやうな人と立よりみて涙をはら〳〵となかし、土左衞門とはよつとは人ちがひ、これはおらが旦那の五左衞門どのでござる、

鷺

鷺海上を飛行に、羽つかれやすまんと下をみれば、何やら丸太のやうなるものあり、よきやすみところととまりしに、丸太にあらでぶりといふ肴なり、ー鰤大きにはらをたて、鰤つけ千萬なといへば、さぎあやまつて「まつひら五位さぎませ、

角力

大寒小寒餘寒八專、正月九日より晴天八日のすまふをはじめたりしに、餘寒一人なにが褌ひとつになつて出て、相手にきらいはないから、たれでも一番サアこいとよばはれば、大寒小かん八專等、かたつはじめからひろいなげにあいける處へ、立春が見物に來て、どうだみなまけたかーヲ、サ、かたつぱじから餘寒めに、ひろいなげにあつたといへば、ーそうだろう、ことしは大分ひへる、

佐野行成

さて〳〵見事な御手でござる、これはいにしへの能書の佐野行成の筆の跡にもおとりませぬ、といふをきゝちかへて、そのゝのよき手でかいた物を見ると、ヤレ〳〵見事なお手でござる、いにしへのしやれかうべが筆にもおとりますまい、

むすこ部屋

唐の人はみな惣髮か、インヤ今は芥子坊主じやげな、阿蘭陀人は坊主あたまだそふだ、ヤ、サそれよりむすこべやの人が、あたまがおかしい「どのやうじや「なれだか中剃と月代がひとつになつて居る、

熊の皮

この間熊の皮のよき皮をもとめましたと見せれば、これはよい皮でござる、ドレ〳〵となでゝみて、サテよい心持でござる、

かゝみもち

をらがおもての駕舁の彌介は、正月になると息杖に注連かざりをするが、尤な事ではないか、ヤヤそれよりまだおかしい事がある、おらが隣の飛脚の忠七は、足のうらに鏡をすへた、

番太郎

四方に四面の藏をたてたる大福長者、つね〴〵思ふに、われらがやうな福人は、ぬす人の用心がおもじやとて、あたりとなりの番太郎にめをかけられしに、ある夜茶をのめとて番床へよびにやられしが、番太こ

やにうかされると夜ねられませぬからまいりますまいといふ、長者いよ／＼きづかはしく、そんならやゑよくをきてくはぬかといひやりければ、ありがたうござりますが、只今ねいりはなでござりますから参りますまい、

居風呂

いなからとまり客があるに、居風呂をたてゝいれられしに、此客風呂に入りて半時ばかり音も沙汰もなし、てい主きづかひに思へど、はやくあがられよともいゝにくゝ、湯殿の口にたゝずみて、ゆるりとお入なれといへば、返事するをきゝ、まづおちつきて居るに、まてどくらせど音もなし、又もふしんに思ひ、又々ゆるりとお入なされといへは返事のこゑあり、やゝ久しくしてゑびのごとく赤くなりて風呂よりあかる、つれの客が見て、いかう長湯をめさせられたといへは、「ハテ御馳走てはあらうが、湯をゑいられるもせつないもんだ、

野島地蔵

のしま地蔵、給金八文にて奉公人をかゝえ、開帳すみて歸られしが、かゝえし處の奉公人ひとりも引起ものなし、早々請人人主をよびて、なぜ奉公人はみえぬといへは、請人何をかくしませう、御給金をつかひこみまして、夫故引こす事がなりませぬといへば、地蔵尊大きにいかりたまひ、それは以ての外のふとゞき千萬、して給金を何につかひこんだといへば、請人「請狀歸に錢湯へまいりました、

柱かくし

この頃ふる道具やで雅（いき）な柱かくしをかつて來たが、何かよめぬ字がかいてある、來てよんで見てくりやれ、「ナンダ唐様かな「ヲゝサからやうとも／＼、大方たれぞ手かきのかいた物であらう、「ドレいつて見やうとつれだちて行けは、床わきの柱にかけてある、よみて見れば墨くろ／＼と「御手つけ三日切、

赤飯

これ／＼謎をかけやう、石のかたはれとかけてなんととく、「サレバなんであらうと小首をかたげて、かんがへどうも忘れぬ「ながさうか／＼「ヲゝながして下さい「ハテ赤飯といふ事じやハテ「ヽヽ、ざんねんな、それもこはめしとまでは氣がついた、

三味せん

おむすめごの三味せんは、きついものでござる、晩にさるおやしきに日待があるが、やらつしやらぬかといへば、ふた親イヱ／＼どふいたして、またそれほとに參りませう、やう／＼このごろ二三段ほかはあげませぬ、それに聲はたちませず、といへば「ちつともくるしうない事、當世はまづ一ころび二聲と申ます、

乞食

北風はけしく雪ふる夜、宿なしのこつじきども大勢あつまり、なんとけしからぬ寒さだとて、こもをたくさんあつめ來りまはりをかこひ、サアこれでちつとあたゝまつたけれども、足のつめたいにこまつたものじやといへば、中にきてんなやつありて、どれ／＼犬かたがあるとて、近處の犬四五疋だいて來て、その下へ足を入れて寢ければ、ことの外あたゝかにて、みな／＼寢入けるに、夜半に一人大聲あげれば、皆々おどろき目をさまし、何事だといへば「いま／＼しいこたつにくらひつかれた、

疊屋

疊屋きん／＼といてだち、吉原へ行あそびけるが、床に入て女郎はなしなかばに、客の肘を見ればたこあり、女郎おかしくおまへは疊やさんだのといへは、「いんにや腕押の指南さ、

碁

人々よりあひ碁をはじめけるが、その内にきはめて助言いひたがるものあり、人のうつ碁をわきから見て、こゝをきれのかしこをおさへよのと、口をたしてやまず、ごうち共うるさがり、助言かいひたきはとかく目て見るゆへじや、はやくかへり玉へとおひ出す、かの者きいていかさまこれは尤じや、おれも見れば目のとくじやとて、半町ばかりかへりしに、むかふから二三人づれにて碁ともだち來る、是はどこへ行玉ふといへば、今から上の町の碁けんぶつにゆくといふ、かのものきゝてをれも今まで見ていたが、あまりまだるくてかへるが、お出なされたらおむづかしながら御傳言を致したい、「ナニ用じや「どうみても白が勝じやといつて下さい、

比目魚（かれい）

歳暮の御祝儀申上ますと肴臺をさし出す、見れば比目魚四枚有、ていしゆ大きに物いまいにてさん／＼

氣にかけ、其方はかれいをくれた志はかたじけないが、とてもくれるなら二枚か五枚ならきこえた、四枚とはがてんがゆかぬ、さて〳〵ものをしらぬといふてしかりちらせば、ちつともさはがす、わたくしはおしまひより、よかれいとお祝ひ申心で、四枚あげましたものをといへば、ていしゆことの外きげんなをり、おれは又そのやうな事とはしらず、たゞ其方をしかれいといふ事と思つた、

心中

さるうとくなる町人のひとり娘、いつ幾日に聟取の相談ときいてつかへをおこし、二世とかはせししのび男に、早々文にてしらせければ、男もとるものもとりあへず、例の妻戸のかげにてこそと出あい、きけばきくほど生ては居られぬと、すぐに娘をつれて出て、この世のちぎりははかなくとも、未來はひとつはちすぞと、手に手をとりて行みちすがら、男はふつと心付、けふはいかなる日じややらん、日のあしき時心中すれば、未來にめぐりあはぬときく、どうぞして暦を見たい物じやといへば、女もげにもと思ひ今朝仲人のが、結納の日をみるとて、暦を出してツイそばのわたしが針箱の上においたが、ちよつと歸つてとつて來やうかといへば、男もともに立かへり、もとのつま戸をしのび入、なんなく暦をとりて出、軒端のかげの月あかりにすかし見れば、血忌

鯛の味噌津 終

うくひす笛

これは四方赤良（寐惚先生號巴人亭）今の蜀山人の若かりし頃、つくりて板下地をも自筆に書給ひしもの也、

文化十三年丙子二月上浣更表装收藏

三馬

序

春の山の端わらひ初て、雪間の氷うちとけたるに、梅が香いきをはきかくれば、柳の絲も腹筋をよる。笑ふ門には福壽草、三ッ葉四つ葉とさき草の、はなしの種をまき初て、花さく春を待ものならし、

改年堂御慶述

モノモウ

どふれ

うぐひす笛

扇箱

伊勢屋德兵衞でござります、年始の御祝義申上ますと、扇箱一つさし出すを、旦那殿きゝ付られ、これこれ一寸あはふと罷出、扇箱の紫皮をはがし、中を明て見てこんな扇がある物か、竹へ紙を挿(はさん)で、要を墨で書てある、ばら〳〵扇は入用にない、是より一本でも、持たれる扇をもつて來たがよいと、さん〳〵の不首尾、德兵衞進み出、それは大きな覺召違、是こそ御武運長久を表し、形は扇に似たれども、實は扇で御座りませぬ「そんならなんだ「矢口の矢でござります、

年代記

田舍もの山下をそゝろあるき、兩面の年代記を見て「いくらで御座る、「十六錢でござります、田舍者煙草入から八匁出して、「こゝへ片雨下さい、

萩寺

ぬれて行人もおかしき萩寺の盛り、けふは萩大名さま、宮城野といふ女郎をつれて、お出との評判、はたして紫の幕うつた屋形、前の川へつく、皆々大せい出て見れば、紫のしぼり染きた一樣の船頭、宮城野その日の出立には、紫ちりめんに萩の惣模樣、紫天鵝絨の帶をしどけなく、脛もあらはに船から出る、そりやこゝぞとみた所が「顏は牡丹餅、

どう忘れ

けふは幾日じやの、「さればいく日かしらぬ、暦を見たらしれやう、「はて暦を見たとて、幾日じやかしれるものか、「まちやれ今にどこぞから手紙がこよふ、

御門札

若殿のうは氣を見込に、毎日〳〵妾の目見へ、御家老石部金太兵衞どの、ほとんどもてあぐみ、魚鳥留の札のうらに、墨くろ〴〵と書付て、御門に立ける「此所小便組無用、

粂の仙人

日もはや七ッ下りの頃、黑小袖に皮襪(たび)はいた本庄夜鷹二三十人つれ立て、兩國橋を通る時、辻風さつと吹來り、裾ふきまくれば、はぎの白いも蕎麦切色も、あらはに見ゆるまん中へ、何やらひら〳〵とした物落ける、さては粂の仙人かと、よく〳〵見れば「やつ

こ紙鳶、

日暮里

花の雲、鐘は上野の谷中門から、日ぐらしの里へかかり、茶屋が床几で一盃のみかけ、歸りに茶代を拂ひながら、この山の芋の田樂はなんじや、「アイ一串六錢でござります、「ハテ安いもの亭主「それでも鰻鱺になると、十二錢でござります、

盗

ヤレどろぼう〳〵と、棒ちぎり木にて追かけ、あまりに息がはづむゆへ、豆腐屋へはいり、水をもらふてのむに、泥坊も同じく息をつきながら、水を二タ口三口のみ、（皆のものをふりかへりみて）「サア又ひとかけかけませう、

旦那寺

志の事ありて、旦那寺へ參り、和尚の前へ百銅、お所化の前へ貳百銅つゝみ、盆にのせて差出し、宜御廻向願上ますとて歸りけり、和尚がてんゆかず、弟子に貳百銅我に百銅とは間違なるべしと、弟子の包と無理に取かへて、包紙をあけみれば、「蠟燭二本、

八景

此間唐の探幽がかいた、八景の屏風を求めました、御覽なされ、いかさま是は各別なお道具で御座ります、是が源氏の晩鐘でかなござりませふ、亭主「さればこちらか平家の落雁でござる、

狸ねいり

初會の客、うれぬ珊瑚珠をみる様に、蒲團の上にたゞひとり、まてどくらせど女郎はこず、あまり退屈して、小便に行歸りみれば、女郎來て居て「コレまたおやすみなんせんかへといふ、客行燈のわきに立ながら、目をねふり「ごう〳〵

のり合船

まん〳〵たる海上へのり出しけるに、船すはりて跡へも先へも行かず、是はまさしく龍神の見入たるなれば、何なりとも海へながしてみるがよいと、船頭のいふにまかせて、みな〳〵紙一まいづゝ流しけるに、六十計のおやぢが紙、ずぶ〳〵としづめば、そりやこそと人々、おやぢをはだかにして海へつきいれければ、海中にてすつくと立けり、人々これはとおどろけば、船のすはるも道理砂が高かつた、

婢

おしたは奥様神參りに入らつしやりますが、どうぞお供がいたしとふ御座りますと、こしもとの願ひ「イヤ〳〵あすは人ごみの場なれば、わかいものは供につれられぬ、それともたつて行たくは、こゝへこいとよびよせ、腰元のおゐどを二つ三つつめり「それで行つたも同じ事じや、

江戸見物

隣の與茂三が、お江戸さあかゝらもどりやつたげな、うらゝも若い時分は、べうとお地頭さまへ御年頭にのう出申たからハア、お江戸のこんなら流通だァ、さらばいつてはなし申さふと、門口からやれ〳〵豆でまつめでたい、こんとお江戸さあの廣大なにやア、うつたまげ申たらふ、與茂三「あせうにもハアいひつくされねいこんだ、あのはや幾世餅はよくきく藥でごんさり申よ、「ヲ、サそしてあの錦袋圓はうまいやつの、

たはら屋

惡寒發熱の氣味にて蒲團をかぶり、取臥居るに、内儀たはら屋をふり出して、下女のりんにもたせやりければ、旦那いたゞいて藥をのむ下女いやな目つきにて「アノだんなさんとした事が、

長竿

夜中に小僧長竿を持て庭に出る、和尚「こいつ何を爲る 小僧「空の星を落します 和尚「ばかめそこらからとゞく物か屋根へ上れ、

女房

若いものより合、隣のかゝは面はうつくしいが、あつたら事に風がわるい、向ふの内儀は風も顏もよいが、あんまり瘦てすげがない、扨よい女房はないものじやと評判すれば、一人がいふ志かしあまりよい女房はもたぬがよい、めんよう女房の器量がよすぎると、亭主が若死をするものじや、きさまたちもちと用心しやれといへば、一人がどふぞ小湯を一ぱいもらいたい「なぜといへば「なんだか大分氣分がわるい、

井

あつたら西瓜を井戸の中へどんぶりと落した、いゝどふしたらよからふと、井戸の中をのぞいて居るに、「是〳〵それがのぞいたとて出るものか、それならのぞかねいけりや出るか、

新五左

新五左二三人非番日に出合、今のはやりはもえぎの小袖に淺黄うらの事だ、「ゑかしそれもあまり當世過る、ヤハリ容色にすみる茶のうらの底至りがよい、「そんなら大小は、「太刀拵の貫の木ざしさ「二徳は「萠黄羅紗の事「足袋は「生木綿」頭巾は「いふにや及ぶ袖頭巾〳〵、

上戸

上戸と下戸久しぶりで出合、上戸「どふだ下戸のたてた藏もないといふが、定めて餅ばかりくつて、人にいやがられるだらう、下戸「そしておのしはどふだ、上戸「おれは見せを所々へ出した、「何見世を下戸「ゑれた事小間物みせさ、

湯上り

錢湯にて上り場にきものをふるつてきる拍子、たもとのふんどしふうはりと、向ふの奴のあたまにか丶る、すは一大事と大勢が、かたづをのんで見て居るに、此奴一圓はらたつけしきなく、ふんどしをたもとへいれ、ゑづ〳〵として出行けり、湯番もホッと大息つき、さて〳〵きさまは仕合な、今の奴が定てゆるしはせまいとおもつた、命びろいをしやつたといへば、此男ゑほ〳〵として、いやあまり仕合でもござらぬ、湯番「此人は欲のふかい、命が褌一つぐらゐにかへられる物か、「イヤ角に金が二歩有つた、

竹鎗

此比竹鎗をこしらへた、さて〳〵重寶な物で、まづ犬が來るとはつき殺して、血のついた所をはすに切〳〵すれば、いく度もつきころされる、「そしてそのゑまいにはどふする「藏前へやつて米さしにする、

大入道

親子枕をならべて熱病をやみけるに、むす子のうなり聲親父の耳に入れば、おやぢ「われは若いなりをして、とぼけてうはこといふ、おれは年こそよつたれ、先から大入道が來て立ていれど、こはくもなんともない、

蚤虱

珍客の前にて、脊中のかゆい所へ手をやつた所が、何やら一つとりけり、はて蚤なればよいが、虱だとはぢのかき上げと、ひねりながら「壹歩やらうから飛でくれろ、

鎗の師匠

おらがむす子が鎗のけいこに出てから、どうも物事ぞんざいになつてならぬ、武藝の師匠に似合ぬおしへ方と見へると、親父以の外の腹立、そのまゝ師匠へ出かけ、せがれが段々おせはでぞんざい物になりました、御流義は何でござりますといへば、師匠「揣者流義は投鎗

大釜

盗人ある家へはいり見た所が、人ひとりも見へず、道具といつては内庭の角に、大釜が一つある計、せめて是でももつて行ふと、釜の蓋をとれば「だれだ蚊が這入るは、

水ぢまん

富貴なる茶の湯者、庭に井戸をほり、ことの外よき水ゆへ大事にして、井戸側を高蒔繪にし、貫の木に眞鍮の錠をおろし、鎰は腰にさげて居られけり、友だちの方より客御座候ほどに、お井戸の水をちつと御無心と所望しければ、使を庭へまはし、自身かぎにて錠をあけながら、たまたまの御用じや、お役にたつ程あればよいが、

御馳走

「ヤレ長松いくつだと思ふ、ちとおとなしくしやれ、まづ他所へ行て、まんま喰ふた時は歸りに御馳走になりましたといふ物じやぞと、くれぐれおしへければ、ある時客に行座敷へすはるやいなや、御ちそうになりましたといふ、親父きのどくがりて、何をいふと叱りければ、「それでもわすれぬ先に、

杖

ヤレヤレ久しぶりでおめにかゝりました、おなじみの八兵衛もはてました、友だち「イヤそれはモシ此杖を一寸もつて下され「なぜでござる「ハテ横手を打ます、

大人國

海中にて難風にあひ、一つの島へ吹付られけり、此所は大人國にて、人の大きさ仁王の如し、おそろしき事と見ている向ふへ、銅の棒を數十本かついでくれば、あれでぶたれてたまるものかと、一トちゞみになつて見て居れば左にあらで、「はりかねの安うり一丈壹文、

益庵老

町醫者同士道で行合、イヤア益庵老御療治がいかふはやります、「イヤモ覺しめしの外大の不景氣、今日もあまりひまで御座るから、近所へのみへにあてどもなくあるいて見ます、「夫からばわしが隣町に大病人があつて、醫者がみな斷ましたなんと行て療治なされぬか、「大勢の手をはなしたなら、とてもりやうぢは屆きますまい、「ハテ何もなぐさみだ、

橋の下

大晦日の晩、橋の下に乞食夫婦ねていてきけば、橋の上の人通りの足音引もきらず、あまりやかましさにこじきの嬶目をさまして、ていしゆにあれは何ぞときけば、「はて忘れた事さ、かけ取じやはかゝ「なんぼかけはとれても、此寒い夜の八つ七つに、外をありくは大ていな事ではない、それよりこふねて居るがましかといへば、亭主枕をもたげて「それはたがかげじやと思ふ、

風の神

風の神の社へまふでゝ、明日船で西國へ下りますから、何とぞ西風をおふかせなされて下さりませ、神主「そんなら二三日おまちなされ、「いやもう明日下るつもりにいたしました、神主「それでも願がけに東風の先がある、

兩聾

つんぼの飴うり、十ヲ六〱といつて居る所へ、是も同じくつんぼの男、もし觀音へはどふまいります、飴うり「十ヲ六でござります此男「かたじけのふござる、

夜遊び

親父むす子をよびよせ、是〱おがやうに夜遊びが過ぎてはならぬ、ちと晝遊びにしたがよい、むす子「なにおやしきものではあるまいし、親父「それならせめて一ト切あそべばよい、むす子「わつちらは切見世へは行きやせん、

切落

顔見世の大入、ゑいとう〱はめをはづした切落へわり込とて、辨當の重箱へ足をふみ込む、その足を左つかととらへて、大べらぼうめが、この重箱が堀ぬき井戸だとわが命はないは、

夜具

コリヤ坊よかならず人の前で、爺が鷹をきてねると

いやんな、夜具をきてねるといやれといひふくめければ、合點しける、ある時ていしゆ隣へはなしに行けるに、小僧もついて行けるが、とゝの髮にわらのつきたるを見て「とつさん／＼、小鬢さきに夜具がついてゐる、

鞍馬天狗

牛若丸くらま山にて、木のはてんぐを手下につけ給ふ、あまたの天狗一同に、羽づくろひしてかしこまり、銘々に小さき穴をほる、牛若「これ／＼あたまを土へほり込には及ばぬ、過分／＼とありければ、天狗「イヤかふいたさぬと、鼻がつかへます

深川

女房ていしゆの友だちにむかひ、この比わたしらが所では、ねから内にはいつきませぬ、きけば深川へ遊びに行きさふでござります、深川はどこへ遊びに行ますな、友だち大方すそつぎだらう、女房「エ、内には裾つぎをかふ錢もないに、

關取

勸進相撲の大關、相手にしたゝかなげられければ、座中一どにどつとわらふとき、あるさじきより花を出しける、おれはまけたに人ちがひなるべしと、よく／＼みればわが名なり、をしいたゞきがく屋へ行、中をみれば正氣散一ふくあり、ふしんに思ひかきつけをみれば、これをのみて關をやめられよ、

山伏

近所の山ぶし狐にばかされ、田のぐろにて馬糞をくひ居けるを、つれ返りて介抱しければ、やう／＼正氣つきけり、山伏皆の者にむかひ、やれ／＼おかげてたすかりました、お禮に魔よけの札を上げませう、

鬼も十八

福は内鬼は外／＼トン／＼／＼「たれじや鬼でござる「ヤアおそろしや「イヤその樣にこはがられるな、ちとむしんがある、「むしんとは「節分の豆がほしい「豆をもらつて何にする「年をとります「そんならこの升の豆をみなやらふ「いやたつた十八でよふござる、

非人

五月雨の比、雨ふりつゞき四五日ほどは外へ出られず、ある非人軒の下へすくみゐて、けふの腹はどふだといへば、ひとりゝの非人はらは太鼓のやうじや「それはよくかせいだな「イヤどうがかわについたといい

ふ事よ、

井の字

火の用心の咒とて、小札に井の字書て、町内の軒下へ張りけるに、醫者の門一軒はらず、大屋はらをたて、お醫者だらうが何だらうが、町の法はやぶられぬといへば、醫者「よくつもつてもごらうじろ、町内で私計門構じやが、門がまへに井の字はちとさしあいで御座る、

閑居

すみだ川關屋の里にかすかなる庵をむすび、窓のつくえにもたれ、書物などみて居るていを見て、あのやうにしてくらしたら、浮世の事もわすれはて、さぞ面白き事であろと、うらやみてみていけるに、閑居の人椽先へずつと出、大あくびして「アヽ、金がほしいナア、

鴈首

妾あがりの奥樣へ、御簾の内よりそれ烏目〳〵とのたまふ、御番のさふらひ衆何事やらんとそこらを見れば、柿の蔕あり、此ことかと思ひ、是は柿のへたでこざりますといへば、おく樣ハテみづからはきせるの雁首と見た、

溲瓶

文盲な男客のもてなしに、何がなめづらしい物に花をいけんと思ひ、しびんを買て花をいけ置ければ、客これを見てふしぎそふに、「モシ此花生はしびんではござりませぬか、亭主「いや左樣な名ある道具ではござりませぬ、

十面

年の暮に米屋眞木屋味噌屋酒屋われも〳〵とつめかけて、お拂は出ませぬかといふ、亭主座禪したるごとく、大の眼をむき出し、一向有無のあいさつなし、かけ取どもあきれはて、お拂はともかくも、なぜそのやうに十面つくつて御座ります、「ハテ九面がわるいから、

くすり喰ひ

おく病なるもの、猿をくへば心つよくなるときゝ、ひと廻りくひて野道に出行たりしに、此はうしみつの空に人通りもすくなかりしに、むかふより來る人あり、すはやためしみんとてまつところに、ほとなくちかつき、なんでもと思ひ、おのれは何ものじやと

いへば、身は行通るものなるが、夜中にたゝひとりこゝにゐるとはがてんのゆかぬ、そもまあおのれは何やつじやといへば、かの男仰天して、「お前いく廻りあがりました、

酒

今年は豐年だに、ちと酒をつくりのまふ、貴樣米を出しやれ、おれは水を出そふ友だち「水は有物米は買はねばならぬ「其かはり出來た時、上水ばかり取て、跡はきさまにやろう、

うくひす笛終

阿姑麻傳

書阿姑麻傳首

夫言者有言、可以說異國之淫曲乎、實空中之音、水中之月、豈得取之哉、喉乎舌乎愈悟々乎、無已則博通侏離鴃舌游優吟詠使譯彼化此而已、無量先生聞得日本阿姑麻傳一本、而譯作藻辭、是實日本淫哇之詞曲者也、余翫味之能通蕃字、能達其語、能解其旨、能成其章、可謂有識矣、夫國初以來、博聞聰明雖多出其間、未嘗聞得異國之淫曲而能成其章辭者、然我無量先生獨得其極、可稱國初以來一人也乎哉、

余一唱三歎之餘、遂煩毛穎以布言焉、

乾隆丙申春三月

無難　護愛叟撰

阿姑麻傳

自叙

阿姑麻傳者、東方雜劇歌也、余於日本崎陽之客舘、得雜劇歌一本、而閲之、皆蕃字不可識也、故就古人質之、小得解、解則孝貞忠信皆有焉、以爲勸善懲惡戯、以中國之言飜譯之、始欲專毎句譯之、而不及、終譯大較耳、傍附蕃字、卽如原文矣、是以語意不貫、風格不調、牽合附會亦多、覽者恕之、于時乾隆肆拾壹年丙申季春廣

臺無量軒識

阿姑麻傳

無量軒飜譯

阿姑麻、日本東武燕都人、嘗仕萩野侯之母堂私邸、侯之家士尾華才三郎者、而才三郎、因失公之寶器、已命逼民市中矣、而阿姑麻亦不仕、退寓父家、父名莊兵衛、燕都材賈也、舖號曰白木、當時患内障、以代賈丈八者任舖事、丈八固見阿姑麻之美艶、私利焉、又同鄉有喜藏者、舖號曰葉田、亦利阿姑麻、遂納萬金求爲贅、於是莊兵衛爲己之貧乃許之、旣至將

婚之日、代賈丈八謂阿姑麻曰、我聞今夜君得良人、不亦悅乎、君當悅之、我當愁之也、今見君之面、歡喜之色實盈々乎哉、阿姑麻曰、噫、妾八是何言也、我聞斯言、則猶欲洗耳、何爲悅之、噫、可恨二尊八、不知妾之心裏有比目連理之要、與妾不謀而今定婚、可謂好凶也、妾雖欲使夫郎知斯事、未由奈之何、泫然涙下數行、恰似霰矣、丈八聞之以爲頗挑我、忽覺如冷風過頸、恍々惚々、歎曰、我聞思有中則色見外、誠哉斯言也、君既察之、我焉廋哉、我常想君之色、數欲言而悱々憤々、若存若亡、此所謂言之未出也、恥躬之不逮也、願入君之夢中、告我意、仍不顧代賈之重任、日至金龍精舍（金龍精舍在東武安置觀音大士寺有石拂地藏爲世所信仰）念地藏菩薩七日、願曰、

南無因果地藏尊、
嗚呼是何惡因緣、
願與阿姑麻偕老、
假使巫山一雲雨、
歡娛未盡哀別至、

自當レ慰二數日愁苦一、
人或謂正法無二利驗一、然我則謂レ不レ可レ誣、果見
君情懷深、且拒レ婚、唯唯、可レ悅可レ謝、起拜稽
顙、阿姑麻曰、噫、何言也、汝狂乎、我非二夫人之爲一
竭レ誠、而誰爲竭レ誠、丈八曰、誰爲二夫人一、今鋪中無
一人、卽以レ我爲二夫人一乎、日居月諸、雖レ未二自レ口出一、
視レ君則必所レ易之腰下之擬材、自レ旦至レ夕、能使二
枉者直一、且里之少年諺曰、視二彼白木女一、美艷
無レ比類、風姿如二青柳一、面色如二白圭一、不レ解曰二白木一、
恐レ應レ稱二白子一、是我所三以思レ君也、不レ意君亦懷
我、不レ知二手之舞之足之蹈一之、而當時才三郎、亡
命在二民市中一、以二筵頭鋪之待詔一爲レ業、出二入白木
鋪一日久之、而復通二阿姑麻一如レ舊矣、一日來聞二
有レ贅將レ婚、意者、阿姑麻平日愛レ我慇懃甚篤、
或平日之言是、則豈有二今日之事一乎、疑阿姑麻
旣有二異心一、而許レ之歟、我夢不レ察之矣、乃以爲見
欺、怒徹二骨髓一、欲二直入罵一レ之、而未レ決焉、阿姑
麻聞二才三來一、趨見レ之曰、才三郎君何來遲也、懷
子恩如レ調レ飢矣、言未レ盡懷抱嗚咽數聲、才三捋
レ袂轉レ眼罵曰、汝焉待レ我、今日之事、我旣聞

之、汝莫再言、人面獸類、雖不足譴之、不知汝性來、犬乎狐乎狸乎、何巧使人迷至於此極也、我不欲自今與汝言也、引衿左右之手打足蹈、且怒且泣、阿姑麻泣告曰、今日之事、我猶不慮之、郎怒宜哉、雖然、妾敢一言、噫可恨、才三郎君、郎與妾交情、豈一朝一夕之事、嘗仕官之間、見郎之姿貌、心恍惚悦焉、仍書妾心緒、遂投郎袂中、一心祈遇於天神、終身盟不食好菓、昊天憐妾之誠心、使君意亦如妾意、閨中盟二世三世、山礪河帶爲未足、郎君今日何更疑之甚

耶、妾以今日之事、將與郎謀之、豈意郎怒、若是其甚、使擊搏妾軀、慰君心、雖死且無悔、千秋萬擊郎倦後、唯願聞恕罪之一言、以身觸才三之膝、細語窮愁、吞聲哭、於是才三慚悔失色曰、我雖知君之厚情、惑疑今日之事、君許之歟、我短才不聞事之是否、卒爾打擲、罪當死、雖然是則愛君之好心耳、余不幸失我公之茶盒、爲再檢索之、故亡命漂泊、爲箆頭舖之待詔、僑石之儲、朝暮之事、皆煩君之囊中、厚情何日忘之爲、一朝之怒不勝恥、願勿恨之、又願勿泣、勞

之、撫之、慷慨更深、父莊兵衛意知阿姑麻與才
三通、而謂阿姑麻曰、今日之事、我與汝不謀定
之、知汝心與不悅、當以我爲不慈、我豈不知
汝之意乎、雖然有說、汝須聽我言、我非生而
爲賈者、則本佩甲乙刀者也、犯罪將就刑、
幸遇主家岳降之秋、忽蒙眞室仁慈之恩、逭刑
於民市、委身於當家、而先主恤不敏感貞實
妻以最愛少艾、讓以白木大舖、且理命曰、愼
勿忘家業、謹勿移祠堂、幷命及阿妻之事、我
愼守之數年于茲、不慮天災燒家、代賈不脩、

數患內障、計策悉違、材行計帳償之無術、
遇有喜藏者、雖面前相識、而貸大金令償逋欠、
豈意喜藏利汝姿色、以媒謀之、或不許之、則
將收債、我陷此姦計、無遁之地、我且欲沽
却家室償債、然棄阿妻於道路、而何面目可見
先主於九泉乎、願察我心實難、而爲喜藏許
婚歟、我非木石、豈不知汝之心、實然義不可須
臾離奈之何、涕流數聯、阿姑麻泣從之、而出嫁
曰、嗚呼悲夫也、我 旦雖守父命諸之、豈棄本
志之盟夫許婚於餘人乎、雖然我平生未盡一

片孝。今父君責我以理、違之則爲不孝、不違則爲不貞、孝貞之道、安得兩全、不若捨身死節、以示萬乘、但難忘才三郎君、願君百千年之後、地下相逢、勿相棄、且悲二尊人聞我死、則必驚且泣、奈之何、以我一女、平生情鍾甚篤、朝夕恩愛絶不顧、不孝之罪焉得遁、涙變血濺黄絹袂、破而喜藏着吉服至而謁莊兵衞、才三於屏所竊見之、則奪茶盒之賊也、一悦一怒、密共阿姑麻謀、於是阿姑麻欺勸酒、遂以匕首刺殺之、而茶盒爲代買丈八見奪不得之、捕賊令擒阿姑麻、以殺夫之罪論之、將執刑、而會才三捕丈八至、丈八遂自陳共喜藏盜茶盒之終始、於是捕賊令棄市丈八及喜藏屍、阿姑麻暫雖在縲絏之中、遂得免、而配才三、才三亦奉茶盒、復仕萩野侯、才三阿姑麻自同牢之後、夫婦愛而敬之、相待如賓、雖鴻光鮑桓、不足言其節義、聞者莫不稱歎而嘉其貞忠焉、

阿姑麻傳終

刊阿姑麻傳跋

飜譯阿姑麻傳者、我無量先生之所著也、先生嘗曰、夫著述之法、有古今之異矣、蓋三代之隆、則著至德要道焉、至于戰國、專委利害之辯焉、漢魏以下、乃文乃武、或雅或俗、而卒無歸一之論矣、

淸德隆盛、治敎休明、於是海內嚮風、文客如雲、詩人如霖、世仁之期、今也將及、而今吾黨之士、及治國齊家之言、則借倫殊甚乎、於是先生舍其雅正、而取其戲言、爲此一帙、使二三子發歎喜之色、而散鬱悶之憂、可謂循々然能誘人而已、余以爲獨樂不若與衆、乃請先生付之剞劂氏矣、願先生之功、亦可以垂諸不朽、因述鄙情耳、覽者勿以余言之微、而忽之也哉、

乾隆肆拾壹年丙申暮春

門人　新案　痴子謹跋

明治四十年五月三十日印刷
明治四十年六月一日發行

新百家說林 蜀山人全集卷二

著作權所有

編輯兼發行者 合資會社 吉川弘文館
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
代表者 吉川半七

印刷者 本間季男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所 內外印刷株式會社分工場
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

發行所 東京市京橋區南傳馬町一丁目
合資會社 吉川弘文館

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

purchased from the
MELLON FOUNDATION GRANT

for

EAST ASIAN STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03044 3469